

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第188集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第31集

内匠日向周地遺跡 下高瀬寺山遺跡 下高瀬前田遺跡

1995

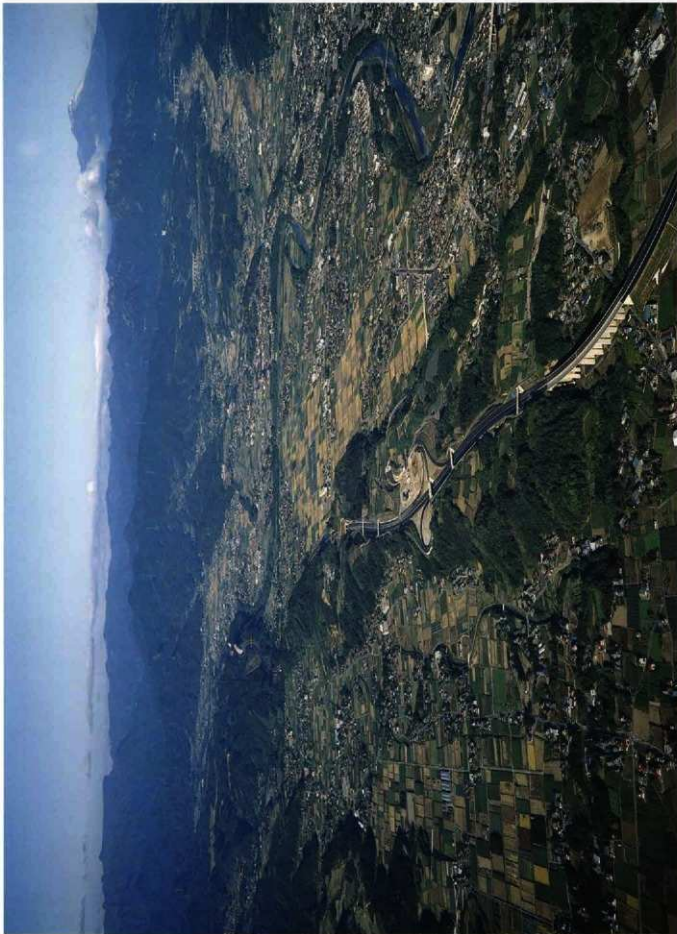
群馬県教育委員会
財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
日本道路公団

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第188集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第31集

内匠日向周地遺跡 下高瀬寺山遺跡 下高瀬前田遺跡

1995

群馬県教育委員会
群馬県埋蔵文化財調査事業団
日本道路公団



運送東上空から高瀬丘陵をのぞむ



内匠日向周地遺跡遠景（西上空から）



内匠日向周地遺跡11号住居跡出土土器

序

富岡市の市街地南方に広がる通称「離れ山」の丘陵は、浅間山、上毛三山、荒船山等の山々が一望できる景勝の地であります。此の丘陵に、上信越自動車道の富岡インターチェンジが建設されることとなり、平成元年度から3年度にかけて丘陵上に所在する内匠日向周地、下高瀬寺山、下高瀬前田の3遺跡の発掘調査が断続的に行われました。そして、これら3遺跡の調査報告書刊行のための整理作業が平成5年度、6年度の2年間にわたって行われ、この度それが完了しましたので調査報告書を上梓することにしました。

調査報告書刊行になった3遺跡は、旧石器時代から近世にかけての複合遺跡ですが、内匠日向周地遺跡の河床面からは、大量の木製品、土器片とともに木簡が出土し、そのうちの1点には「云々奉龍王」と記されたものがあり、古代呪符木簡としては県内初めて、東国でも数少ない貴重な資料とわかりました。

本報告書には、古代呪符木簡以外にも富岡地域の歴史を解明する上で貴重な資料が報告されています。離れ山丘陵に所在し上信越自動車道建設により発掘調査され、既に調査報告書が刊行されている下高瀬上之原遺跡、内匠諏訪前遺跡、同日影周地遺跡、同上之宿遺跡、平成7年度に調査報告書が刊行される中高瀬観音山遺跡とともに本報告書が活用され、離れ山丘陵は勿論のこと富岡・甘楽地域、群馬県の地域史を明らかにする資料として十分に活用されれば幸甚です。

発掘調査から報告書刊行に至るまで日本道路公団東京第二建設局、同富岡工事事務所、群馬県教育委員会、富岡市教育委員会、地元関係者の方々から種々ご指導、ご協力を賜りました。今回、3遺跡の発掘調査報告書を刊行するに際し、これら関係者の皆様に衷心より感謝の意を表し序とします。

平成7年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 小寺弘之

例 言

- 1 本書は関越道自動車道(上越線)建設工事に伴い事前調査された「内匠日向周地遺跡」「下高瀬寺山遺跡」「下高瀬前田遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査地の所在地は以下のとおりである。
群馬県宮岡市内匠740番地 下高瀬767番地 下高瀬557番地他
- 3 本発掘調査は、日本道路公団の委託を受けた群馬県教育委員会が、財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団に委託して実施されたものである。
- 4 実際の発掘調査にあたっては、財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団内に上越線地域埋蔵文化財調査を目的に設置された関越道上越線調査事務所(多野郡吉井町南陽台3-15-8所在)が担当した。
- 5 調査期間及び担当者

(1) 発掘調査

内匠日向周地遺跡	調査期間	平成2年5月28日～平成3年3月16日
	調査担当者	津金澤吉茂(専門員、現県教育委員会文化財保護課主幹兼専門員) 菊地 実(平成2年10月～平成3年3月 主任調査研究員) 新井 仁(平成2年4月～9月 調査研究員、現主任調査研究員) 志塚雅美(調査研究員、現富士見村立富士見中学校教諭)
下高瀬寺山遺跡	調査期間	平成元年3月6日～平成元年7月31日
	調査担当者	津金澤吉茂 志塚雅美(平成元年度) 新井 仁(昭和63年度) 飛田野正佳(平成元年度 調査研究員、現赤城村立南中学校教諭) 山口良寛(昭和63年度 調査研究員、現県立波川女子高校教諭)
下高瀬前田遺跡	調査期間	平成2年4月11日～5月19日 10月2日～12月20日
	調査担当者	津金澤吉茂 菊地 実(平成2年10月～平成3年3月) 志塚雅美 新井 仁(平成2年4月～9月)

(2) 整 理

整理期間 平成5年10月1日～平成6年6月30日

整理担当者 新井 仁

(3) 事 務

常務理事 白石保三郎(昭和63年度)、邊見長雄(平成元～4年度)、
中村英一(平成5・6年度)
事務局長 松本浩一(昭和63～平成3年度)、近藤 功(平成4～6年度)
管理部長 田口紀雄(昭和62～平成2年度)、佐藤 勉(平成3・4年度)、
蜂巣 実(平成6年度)

調査研究部長 上原啓巳(昭和63年度)、神保佑史(平成元～6年度)

課長 斎藤俊一 係長代理 国定 均、笠原秀樹 主任 須田朋子、吉田有光
主事 柳岡良宏、高橋定義 嘱託員 大澤友治 臨時職員 吉田恵子、
松井美智代、塩浦ひろみ、内山佳子、星野美智子、羽鳥京子、菅原淑子

関越道上越線事務所長 井上 信(昭和63年度)、高橋一夫(平成元・2年度)

阿部千明(平成3年4～11月)、松本浩一(平成3年11月～平成4年3月 兼任)

吉田 肇(平成4・5年度)

総括次長 片桐光一（昭和62～平成元年度）、大澤友治（平成2・3年度）
 次長 原田恒弘（昭和62年度）、徳江 紀（昭和63～平成2年度）
 調査課長 鬼形芳夫（昭和63～平成2年度）、依田治雄（平成3～5年度）
 庶務課 係長代理 黒沢重樹（昭和63年度）、宮川初太郎（平成元・2年度）
 主任 国定 均（昭和63・平成元年度）、笠原秀樹（平成2・3年度）
 吉田有光（平成4・5年度）
 臨時職員 山崎郁夫、神戸市四郎、松井留男、秋山友衛、町田康子、本城美樹、
 後関玲子、田中智恵美、高田千恵、吉田登志子、高橋あゆみ

6 報告書作成担当者

編集担当 新井 仁
 本文執筆 依田治雄（I-1）、平川 南（VI-2）、新井 仁（左記以外）
 遺構写真 津金澤吉茂、新井 仁、山口良寛、飛田野正佳、志塚雅美、菊地 実
 遺物写真 佐藤元彦（（朝鮮馬埋蔵文化財調査事業団））
 保存処理 関 邦一（（朝鮮馬埋蔵文化財調査事業団））
 遺物観察 鹿沼敏子、新井 仁、桜井美枝
 整理補助員 鹿沼敏子（（嘱託員））、小野寺仁子、牧野裕美、木暮芳枝、湯浅美枝子、高田栄子、
 原 由美、渡辺八千代
 委託関係 航空写真は竹青空館に、遺構測量は技研測量設計㈱に、遺物トレースは鶴測研に、縄文土
 器実測の一部は鶴シン技術コンサルに、打製石器実測は楠アルカに、浅間B軽石下水田の
 自然科学分析はバリノ・サーヴェイ㈱に、石材鑑定は飯島静男に依頼した。

7 木簡については平川 南（国立歴史民俗博物館教授）に、縄文土器は小野和之（（朝鮮馬埋蔵文化財調査事業団））に、石器は桜井美枝（（朝鮮馬埋蔵文化財調査事業団））に、それぞれ御教示を得た。

8 出土遺物・図面は、一括して群馬県埋蔵文化財調査センターの収蔵庫に保管してある。











9 発掘調査および整理作業・報告書作成に当たり、以下の諸機関、諸氏から御教示、御指導いただいた。記して謝意を表する次第である。（敬称略）

富岡市教育委員会、富岡市農協、井上 太、徳江 紀

10 発掘調査従事者

相川富士江、新井さと、新井隆之、新井つね、飯塚喜与治、石井京子、石川トク子、入山清春、岩井トク子、大岡静枝、大岡弥生、大塚ちよ子、岡野てる、小川甲子、小川國雄、小田島壽子、金沢房三、加部ノリ、桐沢サグ、工藤恵助、黒沢きみ枝、小管弘子、小島良雄、小林茂、小林フミ江、斎藤昇三、斎藤つる、斎藤俊夫、坂本豊吉、坂本松雄、佐々木福寿、佐々木敏雄、佐々木裕子、佐藤朝男、佐藤アサノ、佐藤とみ、佐藤信平、佐俣幸造、沢田八蔵、重田光治、柴山静弥、白石かね子、神保京子、須賀茂平治、高田秀介、高橋仁太郎、高橋ツル子、高橋敏子、田島一布、田中喜代美、田村道恵、中島則子、中村明子、中村福治、永峰うめ子、荻塚 峯、林 通清、広木正幸、藤沢フミ子、細野やすの、堀口長太郎、松井松次、松本章子、真砂セツ、丸岡なみ江、丸沢君枝、三田一巳、三田玉江、三田千代子、三田とめ、三田とり、三田はるみ、三田美恵子、三ッ木國雄、宮下君枝、宮下ヒロ子、宮下保次、茂木恭子、柳沢としえ、山田晋三郎、山田春一、山田福一、横山子之吉、吉田美津子、渡辺文江
 上記の他、富岡市を中心として、多くの方々を協力を得た。

凡 例

- 本書の遺構番号は、基本的に発掘調査時に付したものをそのまま使用している。
また、調査時の遺構名称が適当でないものについては欠番とした。
- 本書の遺構・遺物挿図の縮尺率は原則として以下のとおりとしたが、統一できないものも多いためスケールを参照されたい。なお、遺物実測図中1/3以外は遺物番号横に縮尺率を示した。
遺構 竪穴住居・土坑 1/60 竪穴住居炉・カマド 1/30
遺物 壺等の大型土器・石皿等の大型石器 1/4 坏等の小型土器・土器破片・打製石斧等の中型石器 1/3 石匙等の小型石器 1/2 石鏃等の小型石器 1/1
- 遺構図中の方位記号は国家産標の北を表す。
- 竪穴住居の「面積」は上端面積、「床面積」はカマドを除いた下端の面積であり、他の遺構は上端面積である。計測にはプランメーターを用い、3回計測してその平均を面積とした。
- 主軸方位は、カマド・炉を持つ住居の場合、カマドのある壁・炉の寄っている壁に直角の方向とし、他の遺構の場合は長軸の方向で北から東西90°以内を主軸とした。
- 土器実測図中、残存量が二分の一以下の遺物は180°展開して図上復元した。この場合、実測線を中心線から離している。また土器断面図中の実線は輪積痕を、点線はそれ以外の欠損を表す。
- 遺物観察表の記載方法は以下のとおりである。
・出土位置は、グリッドを表し、数字は床面からの高さを表す。
・計測値の()は推定値を、[]は現存値を示す。
・土器の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色監修『新版標準土色帖 1988年版』に基づいている。
・胎土表記中の細砂・粗砂・礫は、径2mm以上を礫、径2~0.2mmを粗砂、径0.2mm以下を細砂とした。
- 遺構図、遺物実測図、遺物観察表、写真図版の遺物番号は基本的に一致する。なお、遺構図中の丸囲み数字は縄文遺構外の、四角囲み数字は弥生遺構外の遺物番号を表している。
- 遺構図中の断面基準線は標高で表し、単位はmを用いた。
- 遺構及び遺物図中のスクリーン・トーンおよびシンボルマークは下記のことを表す。
遺構 遺構下  焼土  炭化物・灰  粘土 
遺物 須恵器断面  陶器軸部分  煤・油煙・漆(濃) 
煤・油煙・漆(薄)  黒色処理  石器使用面 
縄文土器 ● 弥生壺 ■ 弥生甕 ▲ 弥生高坏 ○ 土師器壺 ■ 土師器坏・高坏 ○
須恵器 ▲ 軟質陶器 ■ 土師質土器 ▲ 陶磁器 ○ 石器 △ 金属製品 □
木器等の単一の出土状況の場合は●○で表している。
- 周辺道路図に使用した地図は、国土地理院発行50,000分の1地形図の「富岡」である。

目 次

序

例言

凡例

抄録

第I章 発掘調査の実施と経過

第1節 調査に至る経緯と調査の経過	3
第2節 調査の方法	5
第3節 基本土層	8

第II章 遺跡をとりまく環境

第1節 地理的環境	9
第2節 歴史的環境	12

第III章 内匠日向周地遺跡

第1節 旧石器時代	18
第2節 縄文時代	18
(1) 遺構・遺物の概要	18
(2) 住居状遺構	21
(3) 土坑	24
(4) 遺構外出土遺物	26
第3節 弥生時代	40
(1) 遺構外出土遺物	40
第4節 古墳時代前期	44
(1) 遺構・遺物の概要	44
(2) 竪穴住居跡	44
第5節 古墳時代後期～平安時代	49
(1) 遺構・遺物の概要	49
(2) 竪穴住居跡	51
(3) 溝状遺構	80
(4) 水田等	81
(5) 井戸	91
(6) 集石遺構	91
(7) 谷津状遺構	96
(8) 遺構外出土遺物	105
第6節 中世以降	145
(1) 土坑	145
(2) 溝状遺構	149

(3) 暗渠	154
(4) 集石遺構	161
(5) 水田・畠	162
(6) 遺構外出土遺物	168
第IV章 下高瀬寺山遺跡	
第1節 旧石器時代	170
第2節 縄文時代	174
(1) 遺構・遺物の概要	174
(2) 竪穴住居跡	177
(3) 土坑	224
(4) 谷津状遺構	247
(5) 遺構外出土遺物	259
第3節 弥生時代	274
(1) 遺構・遺物の概要	274
(2) 竪穴住居跡	274
(3) 遺構外出土遺物	276
第4節 奈良時代	280
(1) 遺構・遺物の概要	280
(2) 竪穴住居跡	282
(3) 遺構外出土遺物	291
第5節 時期不明・その他	293
第V章 下高瀬前田遺跡	
第1節 古墳～奈良時代	302
(1) 竪穴住居跡	302
(2) 特殊遺構	304
第2節 近世以降	307
(1) 墓	307
(2) 近世畠	310
(3) 遺構外出土遺物	313
第VI章 調査の成果と問題点	314
第1節 旧石器時代～近世の遺構・遺物について	314
第2節 群馬県富岡市内匠日向周地遺跡出土の木簡	318
付載 内匠日向周地遺跡浅間B畦石直下水田の自然科学分析調査	321
報告書抄録	344
写真図版	

挿図目次

第1図	内区・下高瀬通跡トレンチ位置図	4	第60図	9号住居跡	78
第2図	遺跡位置およびグリッド配置図	6	第61図	9号住居跡カマド	79
第3図	基本土層図	7	第62図	9号住居跡出土遺物	79
第4図	遺跡周辺地形区分図	8	第63図	11号溝および出土遺物	80
第5図	遺跡周辺地形図	9	第64図	浅間B軽石下水田 (1)	81
第6図	周辺の主要道路	14	第65図	浅間B軽石下水田 (2)	83
第7図	失竊調査範囲	18	第66図	浅間B軽石下水田掘削	86
第8図	縄文時代遺構位置図	20	第67図	浅間B軽石下水田掘削出土遺物	87
第9図	7・8号住居跡	21	第68図	浅間B軽石下水田 (3)	88
第10図	7・8号住居跡出土遺物 (1)	21	第69図	1～4号堀井	89
第11図	7・8号住居跡出土遺物 (2)	22	第70図	1・2号堀井出土遺物	90
第12図	10号住居跡および出土遺物	23	第71図	19～22・24号溝	92
第13図	6～8・17号土坑	25	第72図	25～28・30号溝	93
第14図	6・7号土坑出土遺物	25	第73図	1号井戸および3号集石	94
第15図	7・8号土坑出土遺物	26	第74図	3号集石出土遺物	95
第16図	遺構外遺物出土状況 (1)	27	第75図	1号谷津状遺構、2号谷津状遺構 (A区)	97
第17図	遺構外遺物出土状況 (2)	28	第76図	2号谷津状遺構 (B区)	99
第18図	遺構外遺物出土状況 (3)	29	第77図	2号谷津状遺構 (C区)	101
第19図	遺構外遺物出土状況 (4)	30	第78図	1号谷津状遺構遺物出土状況	103
第20図	遺構外遺物出土状況 (5)	31	第79図	1号谷津状遺構出土遺物 (1)	104
第21図	遺構外出土遺物 (1)	32	第80図	1号谷津状遺構出土遺物 (2)	105
第22図	遺構外出土遺物 (2)	33	第81図	1号谷津状遺構出土遺物 (3)	106
第23図	遺構外出土遺物 (3)	34	第82図	1号谷津状遺構出土遺物 (4)	107
第24図	遺構外出土遺物 (4)	35	第83図	2号谷津状遺構木簡出土状況	109
第25図	遺構外出土遺物 (5)	36	第84図	2号谷津状遺構出土木簡	110
第26図	遺構外出土遺物 (6)	37	第85図	2号谷津状遺構出土遺物 (1)	111
第27図	遺構外遺物出土状況	41	第86図	2号谷津状遺構出土遺物 (2)	112
第28図	遺構外出土遺物	42	第87図	2号谷津状遺構出土遺物 (3)	113
第29図	古墳時代前期遺構位置図	43	第88図	2号谷津状遺構出土遺物 (4)	114
第30図	11号住居跡	45	第89図	2号谷津状遺構出土遺物 (5)	115
第31図	11号住居跡遺物出土状況および掘り方	46	第90図	2号谷津状遺構出土遺物 (6)	116
第32図	11号住居跡出土遺物 (1)	47	第91図	2号谷津状遺構出土遺物 (7)	117
第33図	11号住居跡出土遺物 (2)	48	第92図	2号谷津状遺構出土遺物 (8)	118
第34図	古墳時代後期遺構位置図	50	第93図	2号谷津状遺構出土遺物 (9)	119
第35図	1号住居跡	53	第94図	2号谷津状遺構出土遺物 (10)	120
第36図	1号住居跡掘り方	54	第95図	2号谷津状遺構出土遺物 (11)	121
第37図	2号住居跡	55	第96図	2号谷津状遺構出土遺物 (12)	122
第38図	2号住居跡カマドおよび出土遺物 (1)	56	第97図	2号谷津状遺構出土遺物 (13)	123
第39図	2号住居跡出土遺物 (2)	57	第98図	2号谷津状遺構出土遺物 (14)	124
第40図	3号住居跡	58	第99図	2号谷津状遺構出土遺物 (15)	125
第41図	3号住居跡掘り方およびカマド	59	第100図	2号谷津状遺構出土遺物 (16)	126
第42図	3号住居跡カマド遺物出土状況	60	第101図	2号谷津状遺構出土遺物 (17)	127
第43図	3号住居跡出土遺物 (1)	61	第102図	2号谷津状遺構出土遺物 (18)	128
第44図	3号住居跡出土遺物 (2)	62	第103図	2号谷津状遺構出土遺物 (19)	129
第45図	3号住居跡出土遺物 (3)	63	第104図	2号谷津状遺構出土遺物 (20)	130
第46図	4号住居跡	66	第105図	C9V24Gr付近遺物出土状況	140
第47図	4号住居跡掘り方およびカマド (1)	65	第106図	遺構外遺物出土状況	141
第48図	4号住居跡カマド (2)	67	第107図	遺構外出土遺物	142
第49図	4号住居跡出土遺物 (1)	68	第108図	中世以降遺構位置図	144
第50図	4号住居跡出土遺物 (2)	69	第109図	1～5号土坑	146
第51図	4号住居跡出土遺物 (3)	70	第110図	9～12・14号土坑	147
第52図	4号住居跡出土遺物 (4)	71	第111図	15・16・18号土坑	148
第53図	5号住居跡および5・6号住居跡掘り方	73	第112図	1・12号土坑出土遺物	148
第54図	5号住居跡カマド	74	第113図	1～7号溝	150
第55図	5号住居跡カマド掘り方	75	第114図	8～10号溝	151
第56図	5号住居跡出土遺物	75	第115図	12～15・18・23号溝	152
第57図	6号住居跡	76	第116図	29号溝	153
第58図	6号住居跡カマド	77	第117図	8・12・15・29号溝出土遺物	153
第59図	6号住居跡出土遺物	77	第118図	1・2号暗渠	155

第119回	3・4号暗渠	156	第181回	5号住居跡遺物出土状況	226
第120回	5号暗渠	157	第182回	5号住居跡出土遺物(1)	226
第121回	6~8号暗渠	158	第183回	5号住居跡出土遺物(2)	227
第122回	1・4号暗渠出土遺物	159	第184回	5号住居跡出土遺物(3)	228
第123回	4・5号暗渠出土遺物	160	第185回	5号住居跡出土遺物(4)	229
第124回	6号暗渠出土遺物	161	第186回	5号住居跡出土遺物(5)	230
第125回	2号集石	162	第187回	3・5・10・12号土坑	233
第126回	中世水田	163	第188回	9・15号土坑	234
第127回	中世水田出土遺物	164	第189回	13・16・22・23号土坑	236
第128回	近世水田	165	第190回	24・26・28・29号土坑	238
第129回	近世畠・石垣	166	第191回	30・32・35・41・42号土坑	237
第130回	近世畠出土遺物	166	第192回	3・5・9号土坑出土遺物	238
第131回	遺構外遺物出土状況	167	第193回	9号土坑出土遺物	239
第132回	遺構外出土遺物	168	第194回	10・12・13号土坑出土遺物	240
第133回	下高瀬寺山遺跡全体図	169	第195回	13・16号土坑出土遺物	241
第134回	旧石器テレンチ位置図	170	第196回	16・22・23・26・28号土坑出土遺物	242
第135回	旧石器テレンチ位置図	171	第197回	28・30・32号土坑出土遺物	243
第136回	旧石器検出図	172	第198回	32・35・41号土坑出土遺物	244
第137回	縄文時代遺構位置図	174	第199回	1号各洋状遺構	247
第138回	4号住居跡	177	第200回	1号各洋状遺構出土遺物(1)	248
第139回	4号住居跡遺物出土状況(1)	178	第201回	1号各洋状遺構出土遺物(2)	249
第140回	4号住居跡遺物出土状況(2)	179	第202回	1号各洋状遺構出土遺物(3)	250
第141回	4号住居跡出土遺物(1)	180	第203回	1号各洋状遺構出土遺物(4)	251
第142回	4号住居跡出土遺物(2)	181	第204回	1号各洋状遺構出土遺物(5)	252
第143回	4号住居跡出土遺物(3)	182	第205回	1号各洋状遺構出土遺物(6)	253
第144回	4号住居跡出土遺物(4)	183	第206回	1号各洋状遺構出土遺物(7)	254
第145回	4号住居跡出土遺物(5)	184	第207回	1号各洋状遺構出土遺物(8)	255
第146回	4号住居跡出土遺物(6)	185	第208回	1号各洋状遺構出土遺物(9)	256
第147回	4号住居跡出土遺物(7)	186	第209回	遺構外遺物出土状況(1)	259
第148回	6号住居跡	189	第210回	遺構外遺物出土状況(2)	260
第149回	6号住居跡・床下土坑遺物出土状況	190	第211回	遺構外遺物出土状況(3)	261
第150回	6号住居跡出土遺物(1)	191	第212回	遺構外出土遺物(1)	262
第151回	6号住居跡出土遺物(2)	192	第213回	遺構外出土遺物(2)	263
第152回	7号住居跡	193	第214回	遺構外出土遺物(3)	264
第153回	7号住居跡遺物出土状況および埋設土器	194	第215回	遺構外出土遺物(4)	265
第154回	7号住居跡出土遺物(1)	194	第216回	遺構外出土遺物(5)	266
第155回	7号住居跡出土遺物(2)	195	第217回	遺構外出土遺物(6)	267
第156回	8号住居跡	197	第218回	遺構外出土遺物(7)	268
第157回	8号住居跡遺物出土状況および埋設土器	198	第219回	遺構外出土遺物(8)	269
第158回	8号住居跡出土遺物(1)	198	第220回	遺構外出土遺物(9)	270
第159回	8号住居跡出土遺物(2)	199	第221回	弥生時代遺構位置図	274
第160回	8号住居跡出土遺物(3)	200	第222回	3号住居跡	275
第161回	10号住居跡	202	第223回	3号住居跡出土遺物	276
第162回	10号住居跡遺物出土状況	203	第224回	C85IX20Gr遺物集中心点	276
第163回	10号住居跡埋設土器	204	第225回	遺構外遺物出土状況	277
第164回	10号住居跡出土遺物(1)	205	第226回	遺構外出土遺物(1)	277
第165回	10号住居跡出土遺物(2)	206	第227回	遺構外出土遺物(2)	278
第166回	10号住居跡出土遺物(3)	207	第228回	奈良時代遺構位置図	280
第167回	11号住居跡	209	第229回	1号住居跡	282
第168回	11号住居跡跡	210	第230回	1号住居跡遺物出土状況	283
第169回	11号住居跡出土遺物	211	第231回	1号住居跡カマド	284
第170回	12号住居跡	213	第232回	1号住居跡出土遺物	285
第171回	12号住居跡遺物出土状況	214	第233回	2号住居跡	286
第172回	12号住居跡掘り方および跡	215	第234回	2号住居跡出土遺物	287
第173回	12号住居跡出土遺物(1)	216	第235回	9号住居跡	288
第174回	12号住居跡出土遺物(2)	217	第236回	9号住居跡カマド	289
第175回	12号住居跡出土遺物(3)	218	第237回	9号住居跡出土遺物	290
第176回	12号住居跡出土遺物(4)	219	第238回	遺構外遺物出土状況	291
第177回	12号住居跡出土遺物(5)	220	第239回	遺構外出土遺物	292
第178回	12号住居跡出土遺物(6)	221	第240回	時期不明遺構位置図	293
第179回	12号住居跡出土遺物(7)	222	第241回	1・2・4・6・7号土坑	294
第180回	5号住居跡	225	第242回	8・11・14・17~19号土坑	295

第243図	20・21・31・34・36～40号土坑	296	第256図	1・3号基出土遺物	309
第244図	1・6・17・34・36・37号土坑出土遺物	297	第257図	近世墓 (1)	310
第245図	1～3・5・6号集石	298	第258図	近世墓 (2)	311
第246図	4号集石および集石出土遺物 (1)	299	第259図	遺構外出土遺物	313
第247図	集石出土遺物 (2)	300	第260図	内匠諏訪前遺跡出土尖頭器実測図	313
第248図	集石出土遺物 (3)	301	第261図	分析調査対象地点位置図	320
第249図	1号住居跡カマド	302	第262図	分析調査対象地点の土層断面および資料採取層	321
第250図	1号住居跡	303	第263図	第1地点～第4地点の模式柱状図	322
第251図	1号住居跡出土遺物	304	第264図	第5・7・9・15・18・21地点の模式柱状図	323
第252図	1号特殊遺構	305	第265図	第5・9・15地点の花箱群集	332
第253図	2号特殊遺構	306	第266図	各地点の植物遺体構成	334
第254図	1号墓	307	第267図	分析結果のまとめ (1)	335
第255図	1号基出土遺物	308	第268図	分析結果のまとめ (2)	336

写真図版目次

図版 1	遺跡遺景	図版 38	7・8号住居跡
図版 2	6～8・17号土坑、11号住居跡	図版 39	10・11号住居跡
図版 3	11号住居跡、1号住居跡	図版 40	8・11・12号住居跡
図版 4	1～3号住居跡	図版 41	12・5号住居跡、3号土坑
図版 5	3号住居跡	図版 42	5・9・10・12・13・15・16号土坑
図版 6	4号住居跡	図版 43	22～24・26・28～30・32号土坑
図版 7	5・6号住居跡	図版 44	35・41・42号土坑、3号住居跡
図版 8	6～9号住居跡、浅間B軽石下水田	図版 45	1号住居跡
図版 9	浅間B軽石下水田・櫛列	図版 46	9号住居跡、1・2・4号土坑
図版 10	1～4号竪井、19・20・22・24・25号溝	図版 47	6～8・11・14・17・19号土坑
図版 11	26～28・30号溝、1号井戸、3号集石	図版 48	20・21・31・36～40号土坑
図版 12	1・2号谷津状遺構	図版 49	1～6号集石
図版 13	2号谷津状遺構	図版 50	旧石砌、4号住居跡出土遺物
図版 14	1～5・9～11号土坑	図版 51	4号住居跡出土遺物
図版 15	15号土坑、1～8号溝	図版 52	6・7号住居跡出土遺物
図版 16	9・12～15・23・29号溝、1号暗渠	図版 53	8号住居跡出土遺物
図版 17	2～5号暗渠	図版 54	10号住居跡出土遺物
図版 18	6号暗渠、中世水田、近世水田・墓・石垣	図版 55	10・11号住居跡出土遺物
図版 19	7・8・10号住居跡、6～8号土坑、遺構外出土遺物	図版 56	12号住居跡出土遺物
図版 20	遺構外出土遺物	図版 57	12号住居跡出土遺物
図版 21	遺構外、11号住居跡出土遺物	図版 58	5号住居跡出土遺物
図版 22	2・3号住居跡出土遺物	図版 59	5号住居跡出土遺物
図版 23	3・4号住居跡出土遺物	図版 60	3・5・9・10・12・13号土坑出土遺物
図版 24	4・6・9号住居跡、11号溝、 浅間B軽石下水田櫛列、1号竪井出土遺物	図版 61	13・16・22・23・26・28・29・ 30・32・41号土坑出土遺物
図版 25	2号竪井、3号集石、1号谷津状遺構出土遺物	図版 62	1号谷津状遺構出土遺物
図版 26	1・2号谷津状遺構出土遺物	図版 63	1号谷津状遺構出土遺物
図版 27	2号谷津状遺構出土遺物	図版 64	1号谷津状遺構、遺構外出土遺物
図版 28	2号谷津状遺構出土遺物	図版 65	遺構外出土遺物
図版 29	2号谷津状遺構出土遺物	図版 66	遺構外出土遺物
図版 30	2号谷津状遺構出土遺物	図版 67	遺構外、3号住居跡、遺構外出土遺物
図版 31	2号谷津状遺構出土遺物	図版 68	1・9号住居跡、遺構外出土遺物
図版 32	2号谷津状遺構出土遺物	図版 69	1・6・17・34・36・37号土坑、 2・3・5号集石出土遺物
図版 33	遺構外、1号土坑、12・15号溝、1・4号暗渠出土遺物	図版 70	A区全景、1号住居跡、1・2号集石、1号墓
図版 34	5・6号暗渠、中世水田、遺構外出土遺物	図版 71	B区全景、近世墓
図版 35	遺跡全景	図版 72	近世墓、石垣、排水路
図版 36	旧石砌、4・6号住居跡	図版 73	1号住居跡、1号墓、遺構外出土遺物
図版 37	6・7号住居跡		

抄 録

1 遺跡の概略

内匠日向周地遺跡、下高瀬寺山遺跡、下高瀬前田遺跡は、群馬県富岡市内匠の鏡川右岸に広がる丘陵上および丘陵下に所在する。この丘陵は通称「離れ山」と呼ばれ、標高220～260mで、幅約600m、長さ約3.3kmの東西に細長い形状をなしている。この丘陵は北に向かう小支谷によって分断されている。

発掘調査により、旧石器時代から近世にかけての多岐に亘る遺構・遺物が検出されており、特に内匠日向周地遺跡からは木簡が3点出土している。

調査は、平成元年から平成3年にかけて断続的に行われた。

2 遺構数量

	時 代	種 別	数 量	備 考
内匠日向周地遺跡	縄文時代	住居状遺構	2	早期押型文土器出土のもの1基 前期諸磯式期のもの1基
		土 坑	4	前期諸磯式期 他に早期の土器が出土した遺構あり
	古墳時代	竪穴住居跡	8	古墳時代前期石田川式期末1軒 古墳時代後期7軒
		水 田	1面	浅間B軽石下のもの
		溜 井	4	
		溝状遺構	10	水田に伴う可能性のあるものあり
	平安時代	井 戸	1	
		集石遺構	1	
	中世以降	谷津状遺構	2	多量の木器出土 木簡3点出土
		土 坑	13	性格不明
		溝状遺構	16	中世陶器・杭出土
		暗 渠	8	
		集石遺構	1	
		水 田	2面	中世1面 近世1面
下高瀬寺山遺跡	旧石器時代			尖頭器・細石刃・細石核等が出土
		竪穴住居跡	8	前期諸磯b式期
	縄文時代	土 坑	21	前期諸磯式期多い
		谷津状遺構	1	前期諸磯式土器を中心として多量の遺物出土
	弥生時代	竪穴住居跡	1	後期樽式期か 他に中期の土器も出土
	奈良時代	竪穴住居跡	3	1軒はカマドをもたず性格不明
		土 坑	19	
	時期不明	集石遺構	6	出土土器少なく時期不明 縄文時代の可能性もあり
	下高瀬前田遺跡	奈良時代	竪穴住居跡	1
特殊遺構			2	礫を多数敷く
中世以降		墓	2	天明8年の銘あり
		畚	1面	浅間A軽石下のもの

内匠日向周地遺跡

下高瀬寺山遺跡

下高瀬前田遺跡

第I章 発掘調査の実施と経過

第1節 調査に至る経緯と調査の経過

(1) 調査に至る経緯

関越自動車道上越線は首都圏と上信越地方を結ぶ高速自動車国道として、日本道路公団によって建設される。群馬県藤岡市～長野県佐久市間の基本計画は昭和47年に策定され、同54年建設大臣により日本道路公団が施行命令を受けている。同56年群馬県藤岡市・吉井町・甘楽町・富岡市・下仁田町（東部）・松井田町（東部）、同57年松井田町（西部）・下仁田町（西部）・長野県佐久市までの路線が発表された。

関越自動車道上越線全体にかかる埋蔵文化財の取り扱い及び調査経過は次のとおりである。

昭和49年度 藤岡市～下仁田町間に存在する埋蔵文化財について、群馬県教育委員会は県企画部幹線交通課に対し文化財保護法の遵守、国・県・市町村の指定文化財をさけること、文化財に関係する事項は県教委文化財保護課と協議すること等の考え方を示した。

昭和55年度 県教委文化財保護課は路線通過地周辺の埋蔵文化財包蔵地の調査を行い、その結果は同年3月藤岡～松井田間、同年11月松井田～下仁田間について、「関越自動車道越線関連公共事業調査報告書」として群馬県（企画部交通対策課）より報告された。

昭和59年度 建設工事の具体化に伴い、路線内の埋蔵文化財についてより具体的な調査の依頼が道路公団より県教育委員会にあり、県教委文化財保護課は包蔵地の詳細分布調査を行った。

昭和60年度 県教育委員会は分布調査の結果、包蔵地を濃い分布地・淡い分布地・試掘調査を必要とする地域に区分し、発掘調査必要面積を約100万㎡と想定し、55遺跡を認定した。（後の試掘により52遺跡に変更）そして、埋蔵文化財発掘調査にかかる基本方針を次のように策定した。

- ① 発掘調査終了年度を昭和66年度末（平成2年度末）とする。
- ② 群馬県埋蔵文化財調査事業団を中核機関とし、対応できない部分に調査会方式を導入、関係市町村には進捗状況を考慮しながら協力を求める。
- ③ 事業団の出張所（上越線調査事務所）を開設し、整理作業も併せ行う。
- ④ 機関別対応面積は次のとおりとする。

埋文事業団 約76万㎡ 富岡市以东を受け持つ。面積は変動の可能性あり。

調査会 約22万㎡ 妙義町・下仁田町・松井田町。面積は変動の可能性あり。

なお、調査実施方法は次のとおりである。

日本道路公団東京第二建設局は群馬県教育委員会に調査の依頼を行い、年度毎に委託契約を締結する。県教育委員会はそれを受け、群馬県埋蔵文化財調査事業団及び、各遺跡調査会等に再委託のかたちで委託契約を締結し、調査を実施する。

昭和61年度 4月、埋文事業団上越線調査事務所を吉井町南陽台3-15-8に設置し、4班15人体制で発足。以後、6班22人体制（昭62）、9班36人体制（昭63）、12班45人体制（平元）、12班45人体制（平2）。平成2年度までに一部を残し発掘調査は終了した。整理作業は昭和63年度より併行して実施していたが、平成3年度からはほとんど整理作業のみとなり、平成8年度終了予定である。

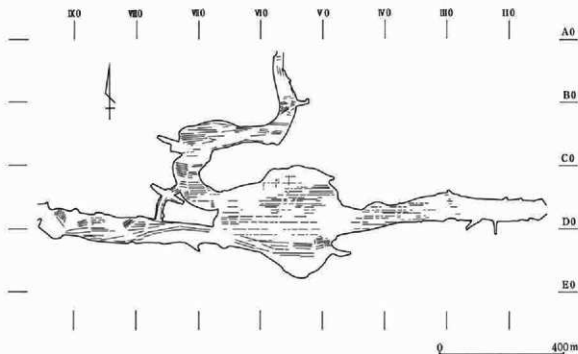
第1章 発掘調査の実施と経過

今回の発掘調査報告地区は内匠・下高瀬遺跡（事業名称）の一部で、富岡インターチェンジ（仮称）付近に位置する。県教委文化財保護課の分布調査により、内匠・下高瀬遺跡全体の対象面積は約22万㎡と非常に広大な遺跡とされていた。そこでまず予備的調査として、遺構の有無および範囲の確認、遺構の種別・性格等を把握する目的で試掘調査を実施し、その後本調査を行う事で日本道路公団富岡工事事務所、群馬県教育委員会文化財保護課と合意した。試掘調査は昭和61年6月から8月末までの3ヶ月間行われ、試掘調査の結果、本調査実施面積は内匠・下高瀬遺跡全体で約11万㎡となった。今回報告する、内匠日向周地遺跡は内匠・下高瀬遺跡群の中央北側、下高瀬寺山遺跡は西端部、下高瀬前田遺跡は北端部に位置し、調査面積は内匠日向周地遺跡が11,300㎡、下高瀬寺山遺跡が2,150㎡、下高瀬前田遺跡が5,000㎡である。

(2) 調査の経過

内匠日向周地遺跡は、平成2年5月から調査が開始された。調査区の西から始めたが、調査区は北側の微高地部分と南側の谷地部分に分かれており、微高地部分には住居土坑等の遺構が、谷地部分には中世と古代（浅間B軽石下）の水田が存在しているため、まず、微高地上の遺構と中世水田を調査し、中世水田を掘り下げてB軽石下水田を調査した。そこで一旦気球による全景写真を撮影し、その後さらにB軽石下水田を掘り下げ谷地部分を調査したが、そこから土器・石器と共に多量の木製品が出土し、そして平成3年1月には木簡も出土した。3月には最後に東側に残されていた池部分を掘り下げ調査を終了したが、さらに2点の木簡が出土した。

下高瀬寺山遺跡は、平成元年3月から調査を開始したが、一部下高瀬上之原遺跡や内匠日影周地遺跡との並行調査となった。表土剥ぎの後、弥生・奈良時代以降の遺構から掘り始めたが、縄文時代の遺構を確認するためには更に掘り下げる必要が生じたため、4月に一旦全景写真を撮影し、さらに重機で確認面を掘り下げ、その面で縄文時代の遺構を調査した。それが終了した時点で旧石器の試掘を行ったところ、細石核等が



第1図 内匠・下高瀬遺跡トレンチ位置図

出土したため拡張して調査を行ったが、剥片が出土しただけで、遺構は検出されなかった。

下高瀬前田遺跡は平成2年4月から、南側の斜面部分の調査を下高瀬上之原遺跡と並行して行い、3カ所に分かれた調査区で、住居・墓・特殊遺構を調査した。5月にはその部分が終了し、一旦休止した。その後10月に北側の低地部分表土剥ぎを行い、12月に浅間A軽石に埋没した畠の調査を行って、調査を終了した。

第2節 調査の方法

(1) 遺跡名の選定

富岡インターチェンジ部分に位置する内匠・下高瀬遺跡は、調査面積だけでも11万㎡あり、地形的にも小支谷で何か所も分割されているため、調査時点で新たに遺跡名をつける必要が生じた。その後63年8月に上越線全線の遺跡名が検討され、埋文事業団担当遺跡については、原則として大字小字の連記を遺跡名とするように変更し、旧遺跡名は廃止せず事業名称として存続させることとした。これにより内匠・下高瀬遺跡は、内匠上之宿・内匠諏訪前・内匠日影周地・内匠日向周地・下高瀬上之原・下高瀬前田・下高瀬寺山の各遺跡に分割された。今回報告するのは、内匠日向周地遺跡・下高瀬寺山遺跡・下高瀬前田遺跡である。

(2) グリッド設定法

調査区の区割り、国家座標に乗る形で軸線を設定し、グリッドの呼称は内匠・下高瀬遺跡群の全遺跡を通してできるようにした。

調査原点は、最も東にある内匠上之宿遺跡の北東部、国家座標のX=+27300.000、Y=-83200.000の地点とし、ここをA0-I0とした。ここを基準とし、1グリッド2mとして南・西に向かって設定していった。南北ラインは、A0、A1、A2、……A98、A99、B0、B1、……とアルファベットとアラビア数字の併記とし、200mでアルファベットが、2mでアラビア数字が変わるものとした。東西ラインは、I0、I1、I2、……I98、I99、II0、II1、……とローマ数字とアラビア数字の併記とし、200mでローマ数字が、2mでアラビア数字が変わるものとした。そしてA1-I2のように、南北、東西の順で併記してグリッドの呼称とし、各グリッドの呼称は北東隅のポイント名をもってそのグリッドを表すものとした。

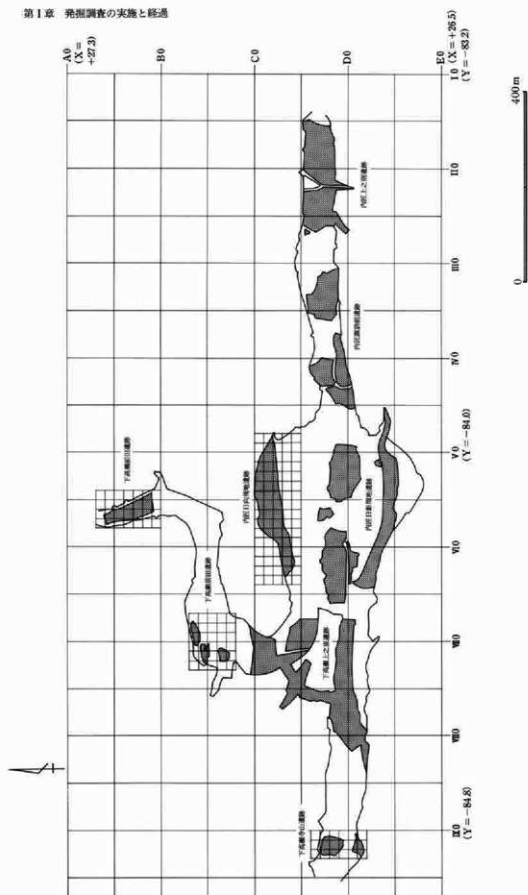
内匠日向周地遺跡はC0～C50-IV80-VI40Grに、下高瀬寺山遺跡はC60～D20-IX0～IX30Grに、下高瀬前田遺跡はA30～B0-V40～V80・B30～B80-VI70～VII30Grに位置している。

(3) 遺構の調査

表土は重機により除去し、確認後遺構を掘り下げた。遺構平面図・地形図は20分の1で作成することを基本とし、住居跡のカマド、炉、詳細な遺物出土状況等は10分の1で作成した。遺物は原則として出土位置、高さを記録して取り上げることとしたが、出土位置が不明になったもの、耕作溝等の新しい遺構に伴うものは一括して取り上げた。

第3節 基本土層

内匠下高瀬遺跡は第四紀洪積世に形成された、鑛川の上位段丘面上にあるが、上位段丘は第三系の基盤岩の上に、砂礫層、粘土層、上部ローム層の順に堆積しており、その上は表土で、浅間A軽石を混入する耕作土である。第四紀層の下は、新生代第三紀中新世の海成層である富岡層群の砂岩泥岩互層が存在している。



第2図 遺跡位置およびグリッド配置図

内匠日向周地遺跡（谷地部）

- 1 暗褐色土 浅間A軽石を含む耕作土 2 暗灰色土 3 褐色土 黄色バミス・鉄分を含む砂質土
 4 褐色土 浅間B軽石を純層に近く含む 5 黒色土 白色細粒・鉄分を含むシルト層 水田床土
 6 灰黄褐色土 細砂・小礫・鉄分を含むシルト層 7 内匠黄褐色土 細砂・礫を含む粘質土

下高瀬前田遺跡（北側調査区）

- ① 黒褐色土 浅間A軽石を含む 盛土 ② 暗褐色土 浅間A軽石を含む 締まり強い
 ③ 褐色土 浅間A軽石・鉄分を含む ④ 灰褐色土 締まり弱い 粘質土 ⑤ 浅間A軽石純層
 ⑥ 黒色土 粘性強い ⑦ 灰褐色土 粘性強い ⑧ 黒色土 粘性強い 礫を含む
 ⑨ 明褐色土 粘性強い 礫を多量に含む ⑩ 灰色粘土層 ⑪ 黒色粘土層

下高瀬寺山遺跡

- I 褐灰色土 浅間A軽石を含む耕作土 II 明褐色土 夾雑物少ない
 III 黄褐色土 浅間板鼻黄色軽石（Y. P.）を多量に含む IV 内匠黄褐色土 夾雑物を含まない
 V 明褐色土 浅間板鼻褐色軽石（B. P.）を多量に含む VI 褐色土 浅間室田軽石（M. P.）を含む
 VII 明赤褐色土 M. P.の純層 VIII 明黄褐色土 M. P.・砂粒を含む
 IX 内匠黄褐色土 砂粒を含む粘性強い X 褐色土 粘土層 マンガン凝集物を含む
 XI 黄褐色土 シルト質粘土

下高瀬寺山遺跡

I
II
III
IV
V
VI
VII
VIII
IX
X
XI

下高瀬前田遺跡

①
②
③
④
⑤
⑥
⑦
⑧
⑨
⑩
⑪

内匠日向周地遺跡

1
2
3
4
5
6
7

第3図 基本土層図

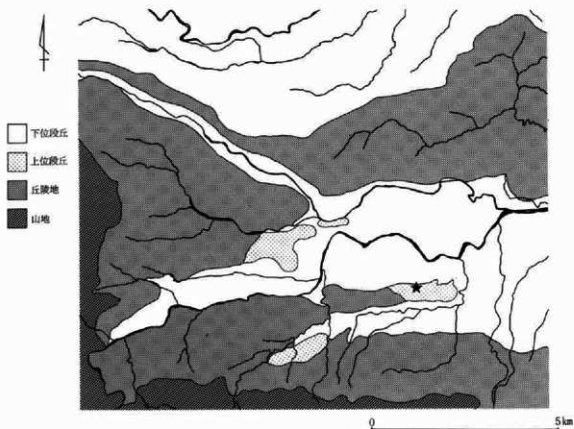
第II章 遺跡をとりまく環境

第1節 地理的環境

本遺跡が所在する富岡市は群馬県南西部に位置し、ほぼ中央を鑛川が西から東へ流れている。鑛川は長野県境付近の矢川峠を源とし、下仁田町、富岡市、甘楽町、吉井町、藤岡市を流れ、高崎市倉賀野町で烏川と合流している。烏川はさらに利根川と合流し、太平洋に流れ込んでいる。鑛川の流れるは東西方向であるが、所々で北へ曲がる箇所があり、少しづつ北へ移って行く。支流は、南側に野上川、下川、雄川、北側に丹生川、高田川、星川等がある。南側のものは、山地では北東方向に流れるが、丘陵・段丘では北向きになり、鑛川にはほぼ直角に合流している。これに対し、北側のものは鑛川とほぼ平行に流れている。

鑛川の兩岸は上下二段の河岸段丘を形成している。段丘面は鑛川の南側が広く北側が狭くなっており、特に上位段丘面でのその傾向が強くなっている。上位段丘面は、鑛川の北側で標高210～240m、下位面との標高差30～40mで、段丘面の幅は100～800m程である。鑛川の南側の上位段丘面は、標高200～240m、下位面との標高差は40～50m程である。下位段丘面は、標高が西部で230m、東部で130m程であり、ゆるやかに東に傾斜した連続した平坦面になっている。幅は600～3,000m程であり、鑛川河床との標高差は13～15mである。

河岸段丘の両側には丘陵地になっているが、いずれも小さな谷が複雑に入り組んでいる。北部の丘陵地は



第4図 遺跡周辺地形区分図



第5图 遗址周边地形图

標高240～300m程で、丘頂面が広く発達しており、南部の丘陵地は標高250～300mで北へ傾斜している。

市南部および西端部は山地となっている。南部の甘菜町・下仁田町の境界付近は関東山地の一部で、谷が深く尾根筋の狭い壮年期の山地地形を呈している。特に野上川上流から岩川上流にかけては険しい崖となっている所が多い。西端部も南部に比べれば規模は小さいが、断崖や深い谷が各所に見られる。

遺跡は鍋川の右岸に広がる上位段丘面に所在する。この段丘面は、西と南を下川、東を野上川に侵食され、通称「離れ山」と呼ばれる東西に長い丘陵地形になっている。「離れ山」は、東側は上位段丘であるが、中央から西側は丘陵地となっている。東西約3.3km、南北約600mで、標高が220～250m、下位段丘面との標高差は40～50mである。丘陵内にも南北方向を主とした小支谷が入っており、丘陵上の遺跡を分析している。

地質的には、富岡市は関東山地の北縁に位置しているため、市の南部は関東山地の構成岩である三波川結晶片岩が分布している。市西部の大桁山南東麓には中世代白亜紀の層が分布している。黒色粘板岩を主とする南蛇井層、平滑花崗岩、川井山石英閃緑岩などや跡倉層、神奥原礫岩層などである。しかしながら、市内のほとんどの地域には、新生代第三紀中新世の海成層である富岡層群が広がっている。富岡層群は、牛伏層、小幡層、井戸沢層、福島層、吉井層、板鼻層に細分されるが、いずれも砂岩と泥岩が交互に積み重なる砂泥互層を基本としている。本遺跡は第四紀洪積世に形成された上位段丘面に立地しているが、上位段丘は第三系の基盤岩の上に、砂礫層、粘土層、上部ローム層、表土の順に堆積している。

第2節 歴史的環境

ここでは、当遺跡の立地する「離れ山」丘陵を中心に、富岡市域周辺の遺跡の様相を時代別に概観したい。

旧石器時代 富岡市域内で旧石器時代最終末と考えられる、長さ15.6cmの尖頭器が採集されているが、出土地は不明である。関越道上越線の調査により、野上塩之入遺跡からはスクレイパーが、内匠日影周地遺跡からはナイフ型石器2点が出土しており、下高瀬寺山遺跡からも細石核・細石刃が出土しているが、遺構として確認できるものは検出されていない。

縄文時代 この時代の遺跡は、鍋川の上位段丘面および丘陵地に多くの遺跡の分布が見られる。

草創期の可能性のある遺物は、下高瀬寺山遺跡から、柳葉形尖頭器の他尖頭器が2点、内匠日向周地遺跡からも尖頭器が出土している。

早期の遺構はほとんど検出されていないが、遺物は、上丹生字和田で押型文系土器が採集されている他、内匠日向周地遺跡で住居状の落ち込みから押型文土器が出土し、下高瀬上之原遺跡、下高瀬寺山遺跡からも押型文土器が数点出土している。

前期は、関山式期の住居が、本宿郷土遺跡・野上塩之入遺跡・千足遺跡で各1軒ずつ検出されており、黒浜式期は鞘戸原Ⅰ遺跡で10軒、鞘戸原Ⅱ遺跡で15軒、西平原遺跡で10軒、内匠諏訪前遺跡で2軒検出され、南蛇井増光寺遺跡でも黒浜期の集落が検出されている。諸磯式期になると、内匠諏訪前・内匠日影周地遺跡で3軒、下高瀬上之原遺跡で1軒、中高瀬観音山遺跡・中高瀬庚申山遺跡で7軒、鞘戸原Ⅰ遺跡で19軒、鞘戸原Ⅱ遺跡で19軒、西平原遺跡で1軒、内出Ⅰ遺跡で4軒、千足遺跡で1軒住居跡が検出されており、下高瀬寺山遺跡でも諸磯Ⅱ式期の住居が7軒検出されている。また、内匠諏訪前遺跡では十三善堤式期の住居跡も検出されている。

中期以降は確実に集落を形成するようになると思われるが、遺構の調査例はそれほど多くない。五領ヶ台式期は、小塚遺跡で住居跡1軒と屋外埋設土器3基が、野上塩之入遺跡で住居跡2軒と土坑が、内匠諏訪前・

日影周地遺跡で土坑が、内匠上之宿遺跡で土坑と屋外埋設土器が検出されている。勝坂・阿玉台式期の遺構は少なく、住居跡が七日市観音前遺跡で1軒、内匠上之宿遺跡で1軒検出されているだけである。中期後半になると遺構の検出例は増加し、本宿・郷土遺跡で加曾利E4式期の数石住居跡が、田篠中原遺跡で加曾利E5期の環状列石・数石住居跡・配石遺構群が、内匠上之宿遺跡で加曾利E4式期の住居跡1軒と土坑が、南蛇井増光寺遺跡で加曾利E5期の竪穴住居跡15軒と数石住居跡3軒が検出されている。

後期になると遺構の検出例は激減し、内匠上之宿遺跡で称名寺式の竪穴住居跡1軒と土坑、屋外埋設土器、堀之内式期の数石住居跡1軒と土坑が、南蛇井増光寺遺跡で称名寺式期と堀之内式期の数石住居跡各1軒が、坂詰遺跡で堀之内式期の土坑が検出されているだけで、後期後半以降は、遺構・遺物はほとんど検出されていない。

弥生時代 この時代は、上位段丘面・丘陵地とともに下位段丘面にも遺跡が増加する。しかしながら、遺跡数は縄文時代には比べ少なく、発掘調査が行われている遺跡も少ない。

中期の遺構は、七日市観音前遺跡で中期前半の竪穴、小塚遺跡で中期後半の住居跡7軒と環濠と思われる溝が検出されている他は少なく、南蛇井増光寺遺跡で中期後半の住居跡4軒・土坑・埋設土器が、内匠諏訪前遺跡、内匠日影周地遺跡、下高瀬上之原遺跡で土坑が検出されている程度である。

後期の遺構調査例は多く、住居跡が検出されているのは、内匠日影周地遺跡で14軒、中高瀬観音山遺跡で103軒、南蛇井増光寺遺跡で181軒である。特に中高瀬観音山遺跡と南蛇井増光寺遺跡では100軒以上と多く、大規模な拠点の集落であると言える。また、箱戸原I・II遺跡、内出I遺跡、内匠上之宿遺跡からは、赤井戸式土器を伴う弥生時代末から古墳時代初頭にかけての住居や方形周溝墓が検出されている。

古墳時代 この時代になると下位段丘面に古墳群・集落が大規模に展開するが、丘陵地にも依然として多くの遺跡が存在している。

前期古墳と考えられるのは、径40mの円墳と考えられる北山茶臼山古墳と、全長28mの前方後墳の北山茶臼山西古墳である。出土土器や墳丘形態より、西古墳が茶臼山古墳に先行する可能性が高い。前期の住居跡は、内匠日影周地遺跡で1軒、中高瀬観音山遺跡で3軒、下高瀬上之原遺跡で4軒、内匠日向周地遺跡で前期末1軒が検出されている。また、内匠日影周地遺跡では方形周溝墓1基も検出されている。

中期の古墳の検出例は少なく、内匠日影周地遺跡で1基、下高瀬上之原遺跡で中期後半の群集墳7基検出されているだけで、住居跡は、中高瀬観音山遺跡で9軒、中沢平賀界戸遺跡で5軒、前畑遺跡で18軒検出されている。

後期には市内の各所に多数の古墳が築かれるようになるが、これらは古墳群をなしているものが多い。主なものは、塚原古墳群、上田篠古墳群、善慶寺古墳群、長久保古墳群、桐河古墳群、横瀬古墳群、芝宮古墳群、七日市古墳群、一ノ宮古墳群、神成古墳群、上小林古墳群、南蛇井古墳群である。主要な古墳群は、すべて鍋川の両沿岸部の下位段丘面に集中している。古墳群周辺には、同時代の集落遺跡が存在している場合が多く、一ノ宮古墳群と本宿・郷土遺跡、長久保古墳群と内匠遺跡、上田篠古墳群と原田篠遺跡等があげられる。本宿・郷土遺跡から竪穴住居跡126軒、掘立柱建物跡3棟が、内匠遺跡から竪穴住居跡15軒が、原田篠遺跡から竪穴住居跡が8軒検出されている。この他住居跡は、内匠上之宿遺跡で14軒、内匠諏訪前遺跡で8軒、内匠日影周地遺跡で10軒、下高瀬上之原遺跡で30軒、中高瀬観音山遺跡で1軒、南蛇井増光寺・中沢平賀界戸遺跡では前期・後期合わせて300軒以上が検出されており、内匠日向周地遺跡でも7軒検出されている。また、本宿・郷土遺跡で豪族の居館跡が検出され、下高瀬上之原遺跡では埴輪窯が検出された。

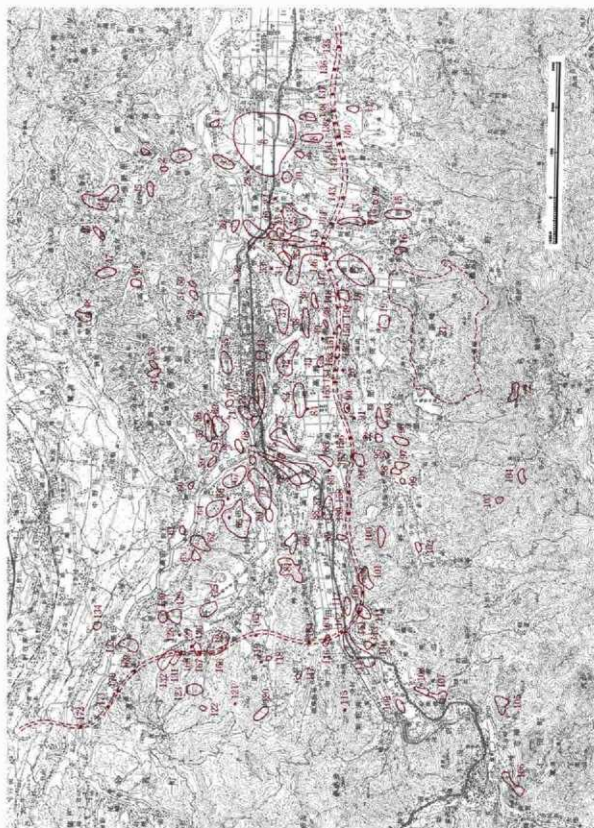
奈良・平安時代 奈良・平安時代の集落跡は、古墳時代後期の集落から継続して営まれている場合が多い。

実際に発掘調査された例は少なく、本宿・郷土遺跡で竪穴住居跡99軒、内匠遺跡で竪穴住居跡10軒、原田藤遺跡で竪穴住居跡10軒、坂詰遺跡で竪穴住居跡9軒と掘立柱建物跡1棟、七日市観音前遺跡で竪穴住居跡50軒と土坑・用水路と考えられる溝が、前畑遺跡で竪穴住居跡8軒、内出遺跡で竪穴住居跡2軒、千足遺跡で竪穴住居跡9軒、田篠上平遺跡で竪穴住居跡50軒と掘立柱建物跡23棟、下高瀬上之原遺跡で竪穴住居跡13軒、下高瀬寺山遺跡で竪穴住居跡2軒、中高瀬観音山遺跡で竪穴住居跡3軒、中高瀬庚申山遺跡で竪穴住居跡5軒、北山茶白山古墳で竪穴住居跡1軒、野上堀之入遺跡で竪穴住居跡4軒と炭焼窯跡3基、南蛇井増光寺遺跡では竪穴住居跡100軒以上と掘立柱建物跡が検出されている。10軒以下の小規模なものも多く、古墳時代から継続しているもののほとんど規模が縮小している。特に平安時代のものに限れば、1・2軒のものも多い。この時代には、奈良時代に始まる田篠上平遺跡の大規模集落に見られるように、丘陵上や上位段丘面の集落が減少して、下位段丘面にさらに多くの集落が新しく開始されるようになると思われる。また、浅間B軽石の降下以前の水田が内匠日向周地遺跡と中沢平賀界戸遺跡で検出されている。

中世 中世の遺跡の調査例は少ないが、本宿・郷土遺跡および隣接する稲荷森遺跡で、中世の溝、井戸、掘立柱建物、墓墳と考えられる土坑等が検出され、七日市観音前遺跡では、竪穴状遺構・土坑・墓墳・溝が、千足遺跡では、掘立柱建物跡11棟と井戸・溝が検出されている。内匠上之宿遺跡では、内匠城の外堀に隣接して整地面上に掘立柱建物・竪穴状遺構・配石遺構が検出され、他に井戸・墓墳等が検出されている。南蛇井増光寺遺跡では中世の掘立柱建物、堀、井戸、土坑が、中沢平賀界戸遺跡では中世の竪穴状遺構、掘立柱建物、塚、墓墳が検出されている。内匠日向周地遺跡でも中世の水田が検出されている。

また鏡川流域には多くの城郭が存在しているが、地形の影響もあってか立地は丘陵と山城がほとんどで、平城はない。発掘調査が行われているものは少ないが、宮崎城で、二の丸の大部分と本丸東半部が発掘され、本丸堀と柱穴6基が検出されている。宇田城では西城が発掘され、曲輪・堀切・犬走りも調査された。高田城でも本城と西城が発掘され、曲輪・堀切等が調査された。大鳥上城遺跡では、大鳥上城のテラス・柱穴列・土坑・虎口が検出され、堀之入城遺跡では、堀之入城の主郭部を中心に曲輪が数基調査されている。内匠上之宿遺跡では、内匠城の外堀が調査され、土塁状の遺構も検出された。また、鞘原I遺跡では、岩染城に関係すると考えられる、堀・土塁等が検出されている。他に相瀬城、下鎌田城等も調査された。

近世以降 近世以降の遺跡の調査例も少ないが、関越道上越線関係で調査例が増加した。内匠諏訪前遺跡で、近世の屋敷跡、掘立柱建物、井戸が検出されており、他に墓墳が田篠上平遺跡で1基、下高瀬上之原遺跡で12基、庚申塔基礎が中高瀬庚申山遺跡で、墓墳が中沢平賀界戸遺跡で検出されている。農業生産関係の遺構では、内匠日向周地遺跡・下高瀬前田遺跡で浅間A軽石により埋没した畑が検出されている。他に中沢西遺跡で大溝が検出されている。



第6図 周辺の主要遺跡

周辺主要遺跡一覧表

No	遺跡名	時代	種別	備考
1	藏城跡	中世	城館跡	
2	後賀土橋	古墳時代	墳墓	
3	後賀遺跡	縄文時代	包蔵地	
4	大山古墳群	古墳	墳墓	
5	庭谷城跡	中世	城館跡	
6	甘藷糸里遺跡他	古墳～平安時代	集落跡	
7	仁井屋城跡	中世	城館跡	
8	浅堀城跡	中世	城館跡	
9	大類屋敷跡	中世	城館跡	
10	笹遺跡	弥生～平安時代	集落跡	
11	倉内城跡	中世	城館跡	
12	上野城跡	中世	城館跡	
13	下城跡	中世	城館跡	
14	中城跡	中世	城館跡	
15	中村遺跡	縄文～古墳時代	包蔵地	
16	熊井戸屋敷跡	中世	城館跡	
17	壽慶寺古墳群	古墳時代	墳墓	約20基現存。かつては50基以上存在。
18	内匠城跡	中世	城館跡	
19	岡本堀ノ内	中世	城館跡	
20	天皇塚古墳	古墳時代	墳墓	
21	国崎城跡	中世	城館跡	
22	緑城跡	中世	城館跡	
23	天王塚古墳	古墳時代	墳墓	前方後円墳。聖穴系の主体部と考えられる。5世紀前半の築造。
24	笠の森稲荷塚古墳	古墳時代	墳墓	尾濠をもつ軸長100mの前方後円墳。岡地型横穴式石室をもつ。
25	二日市古墳群	古墳時代	墳墓	20基程の円墳が残る。5世紀後半からの築造。
26	星田城跡	中世	城館跡	
27	塚原古墳群	古墳時代	墳墓	33基の円墳から成る。7世紀代の築造
28	中樺遺跡			
29	坂路遺跡	縄文・古墳～平安時代	集落跡	
30	下田藤古墳群	古墳時代	墳墓	【新井・坂路遺跡】富岡市教委 1990
31	新井遺跡			
32	妙部塚古墳	古墳時代	墳墓	
33	久保遺跡	古墳時代	祭祀遺跡	埴石製横滑石多数出土。
34	原田藤遺跡	古墳～平安時代	集落跡	【上田藤古墳群・原田藤遺跡】富岡市教委 1981
35	上田藤古墳群	古墳時代	墳墓	30数基現存
36	内匠遺跡	古墳～平安時代	集落跡	【内匠遺跡】富岡市教委 1982
37	芝宮古墳群	古墳時代	墳墓	【芝宮古墳群】富岡市教委 1992 105基存在。
38	長久保遺跡	古墳時代	墳墓	
39	向山遺跡	古墳時代	集落跡	
40	下高瀬前田遺跡	近世	生産跡	当該遺跡
41	富岡陣屋跡	中・近世	城館跡	
42	桐河古墳群	古墳時代	墳墓	45基程存在。
43	陣屋遺跡	古墳時代	集落跡	
44	相野田	古墳時代	包蔵地	
45	白岩遺跡	縄文時代、古墳時代	包蔵地	
46	諏訪谷古墳群	古墳時代	墳墓	
47	清水入古墳群	古墳時代	墳墓	8基存在。7世紀代の築造。
48	天王山城跡	中世	城館跡	
49	上の山遺跡	縄文時代	包蔵地	
50	背谷戸遺跡	縄文時代	包蔵地	
51	富岡城跡	中世	城館跡	
52	十王山烽火台	中世	城館跡	
53	桐谷古墳群	古墳時代	墳墓	
54	高林城跡	中世	城館跡	
55	小沢西遺跡	縄文・近世	集落跡	【小沢西遺跡】富岡市教委 1969
56	駒籠塚古墳	古墳時代	墳墓	終末期古墳。銅製帯金具出土。
57	黒川遺跡	縄文時代	包蔵地	
58	黒川城跡	中世	城館跡	
59	東八木遺跡	弥生時代～中世	集落跡	

第II章 遺跡をとりまく環境

No	遺跡名	時代	種別	備考
60	金比羅山の砦	中世	城跡跡	
61	前期高田館	中世	城跡跡	
62	高田城跡	中世	城跡跡	
63	高田西城跡	中世	城跡跡	
64	山根遺跡	古墳時代	包蔵地	円筒埴輪、形象埴輪散布。
65	恵下京遺跡 宇田城跡	縄文時代、古墳時代 中世	集落跡 城跡跡	滑石製模造品・木製品・割片等多数発見。
66	不動塚古墳	古墳時代	墳墓	
67	阿蘇岡遺跡	縄文時代、弥生時代	包蔵地	
68	小塚遺跡	縄文時代、弥生時代	集落跡	[小塚・六反田・久保田遺跡]富岡市教委 1987
69	辻平遺跡	縄文・古墳時代	包蔵地	
70	七日子観音前遺跡	縄文時代～近世	集落跡	[七日子観音前遺跡]富岡市教委 1994
71	七日子遺跡	縄文時代	包蔵地	
72	七日子陣屋跡	中世	城跡跡	
73	七日子古墳群	古墳時代	墳墓	26基分布。第三社古墳(前方後円墳)含む。6～7世紀代の築造
74	山下遺跡	古墳時代	集落跡	
75	横瀬古墳群	古墳時代	墳墓	[横瀬古墳群]富岡市教委 1989 27基分布。
76	生田遺跡	縄文時代	包蔵地	
77	一の宮古墳群	古墳時代	墳墓	17基存在。前方後円墳2基を含む。(太子堂塚・堂山稲荷)
78	本宿・郷土遺跡	縄文時代、古墳時代 奈良・平安時代、中世	集落跡 居館跡	縄文・古墳～平安の集落跡、古墳時代の豪族居館跡、中世の建物、堀等を検出。[本宿・郷土遺跡]富岡市教委 1981
79	寶前神社遺跡	縄文時代	包蔵地	
80	一の宮門出遺跡	古墳時代	集落跡	
81	神成城跡	中世	城跡跡	
82	宮崎城跡	中世	城跡跡	
83	一本木遺跡	古墳時代	包蔵地	
84	中高巻遺跡	弥生時代		
85	大島下城跡	中世	城跡跡	
86	神農原遺跡	縄文時代	包蔵地	
87	神農原古墳群	古墳時代	墳墓	
88	駒塚古墳	古墳時代	墳墓	
89	大山城跡	中世	城跡跡	
90	北山茶白山古墳 茶白山の砦跡	古墳時代 中世	墳墓 城跡跡	三角縁神人車馬甬像出土。径40mの円墳か。
91	中村遺跡	弥生時代	包蔵地	
92	原遺跡	縄文時代	包蔵地	
93	菅原遺跡	縄文時代、古墳時代	包蔵地	
94	大島上城跡	中世	城跡跡	
95	西平原遺跡	縄文時代・中世	集落跡	[新戸原Ⅰ・新戸原Ⅱ・西平原遺跡]富岡市教委 1992
96	浅香入城跡	中世	城跡跡	
97	岩染城跡	中世	城跡跡	
98	新戸原Ⅰ遺跡	縄文・古墳・平安時代	集落跡	[新戸原Ⅰ・新戸原Ⅱ・西平原遺跡]富岡市教委 1992
99	新戸原Ⅱ遺跡	縄文・古墳・平安時代	集落跡	
100	中山古墳群	古墳時代	墳墓	
101	松瀬古墳群	古墳時代	墳墓	
102	野上の砦	中世	城跡跡	
103	二ツ山城跡	中世	城跡跡	
104	藤田城跡	中世	城跡跡	
105	吉崎城跡	中世	城跡跡	
106	鷹ノ巣城跡	中世	城跡跡	
107	馬山西城跡	中世	城跡跡	
108	馬山東城跡	中世	城跡跡	
109	竹ノ上古墳群	古墳時代	墳墓	
110	大塚古墳	古墳時代	墳墓	
111	下鎌田古墳群	古墳時代	墳墓	
112	上小林古墳群	古墳時代	墳墓	
113	原城跡	中世	城跡跡	
114	南蛇井古墳群	古墳時代	墳墓	52基存在。6世紀後半～7世紀代築造。
115	三笠山岩跡遺跡	弥生時代	墳墓	
116	平賀城跡	中世	城跡跡	

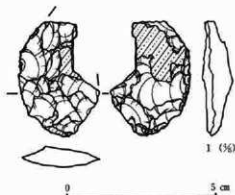
No	遺跡名	時代	種別	備考
117	鞍沼の砦	中世	城跡跡	
118	原の内出跡	中世	城跡跡	
119	丹生5号墳	古墳時代	墳墓	
120	山口古墳群	古墳時代	墳墓	
121	下丹生山口遺跡	包蔵地		
122	和田古墳群	古墳時代	墳墓	
123	和田遺跡	縄文時代	包蔵地	
124	丹生城跡	中世	城跡跡	
125	丹生東城跡	中世	城跡跡	
126	五分一遺跡	縄文時代	包蔵地	
127	金藏塚古墳	古墳時代	墳墓	
128	松原遺跡	弥生時代	包蔵地	
129	中山遺跡	縄文時代	包蔵地	
130	早道場遺跡	古墳時代	集落跡	
131	千足古墳群	古墳時代	墳墓	
132	千足遺跡	縄文～平安時代	集落跡	
133	郷土ヶ谷津の砦	中世	城跡跡	
134	筑前上の砦	中世	城跡跡	
135	長根羽田倉遺跡	縄文～平安時代	集落跡	「長根羽田倉遺跡」 制群埋文 1990
136	長根安坪遺跡	縄文～平安時代	集落・墳墓	縄文～平安の集落・墳墓が集中する。
137	天引口明塚遺跡	古墳時代	墳墓	「神保下條遺跡」 制群埋文 1992
138	天引塚跡遺跡	旧石器～中世	集落・墳墓	「天引塚跡遺跡」 制群埋文 1994
139	天引向原遺跡	旧石器～近世	集落跡	「白倉下原・天引向原遺跡Ⅰ・Ⅱ」 制群埋文 1994
140	白倉下原遺跡	旧石器～近世	集落跡	古墳～平安の大集落。埴石製工房跡検出。
141	天神Ⅰ遺跡	縄文・古墳時代	集落跡	
142	天神Ⅱ遺跡	縄文・古墳時代	集落跡	「天神Ⅰ遺跡・天神Ⅱ遺跡・西原遺跡・松葉忌字寺遺跡」
143	松葉忌字寺遺跡	古墳～平安時代	集落跡	甘栗町遺跡調査会 1994
144	西原遺跡	弥生～平安時代	集落跡	
145	田羅上平遺跡	古墳・奈良・平安時代	墳墓・集落	「田羅上平遺跡」 制群埋文 1989
146	田羅中原遺跡	縄文時代	集落跡	「田羅中原遺跡」 制群埋文 1990
147	善養寺早道場遺跡	古墳～平安時代	集落跡	古墳時代後期以降の集落。
148	内匠上之宿遺跡	縄文～古墳時代、中世	集落・城跡	「内匠上之宿遺跡」 制群埋文 1993
149	内匠諏訪前遺跡	縄文～古墳時代、近世	集落跡	「内匠諏訪前遺跡・内匠日影岡地遺跡」 制群埋文 1992
150	内匠日影岡地遺跡	縄文・弥生・古墳時代	集落・墳墓	
151	内匠日南岡地遺跡	古墳～平安時代、中世	生産跡	当該遺跡
152	下高瀬上之原遺跡	縄文～平安時代	集落・墳墓	「下高瀬上之原遺跡」 制群埋文 1994
153	下高瀬山遺跡	縄文・弥生・平安時代	集落跡	当該遺跡
154	中高瀬観音山遺跡	縄文・弥生～奈良時代	集落跡	弥生時代後期の拠点集落。
155	中高瀬庚申山遺跡	縄文・弥生～平安時代	集落跡	平安時代の住居跡から須恵器の水瓶出土。
156	北山茶臼山西古墳	古墳・平安時代	墳墓	「大島上城遺跡・北山茶臼山西古墳」 制群埋文 1988
157	大島上城遺跡	中近世	城跡跡	
158	野上塩之入遺跡	縄文・奈良・平安時代	集落跡	「野上塩之入遺跡・塩之入城遺跡」 制群埋文 1991
159	塩之入城遺跡	古墳時代、中世	城跡跡	
160	松原遺跡	縄文・古墳時代、中世	墳墓・城跡	中世城郭跡領域の主要部を調査。
161	下藤田遺跡	縄文～平安時代、中世	集落・城跡	縄文時代中期の大集落。中世城郭下藤田城を調査。
162	南蛇井増光寺遺跡	縄文～平安時代、中世	集落跡	「南蛇井増光寺遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」 制群埋文 1992～1994
163	中安平賀野戸遺跡	縄文～平安時代	集落跡	古墳時代後期の住居が主体。
164	前無遺跡	縄文・古墳～平安時代	集落跡	
165	内出Ⅰ遺跡	縄文・弥生～平安時代	集落・墳墓	「前無遺跡・内出Ⅰ遺跡・丹生城西遺跡・五分一遺跡・千足遺跡」
166	丹生城西遺跡	平安～近世	溝・土坑	富岡市教育委員会 1992
167	五分一遺跡	縄文・土器	散布地	
168	千足遺跡	縄文～平安時代	集落跡	
169	八木瀬荒原遺跡	縄文～平安時代	集落跡	
170	八木瀬沢尻遺跡	弥生・奈良・平安時代	集落跡	「古立東山遺跡・古立中村遺跡・八木瀬沢尻遺跡・八木瀬荒原遺跡」
171	古立中村遺跡	縄文～平安時代	集落跡	妙義町遺跡調査会 1990
172	古立東山遺跡	縄文～平安時代	集落跡	

第三章 内匠日向周地遺跡

第1節 旧石器時代～ 縄文時代草創期

縄文時代草創期と考えられる遺物が、16号溝の覆土中から1点だけ出土している。

尖頭器で、全長 [3.8cm]、幅2.7cm、厚さ1.1cm、重量6.6gであり、石材は黒曜石を使用している。両面加工で、節理面で欠損している。



第7図 尖頭器実測図

第2節 縄文時代

(1) 遺構・遺物の概要

遺構

住居状遺構2基、土坑4基が検出されている。住居状遺構は1基は早期押型文が出土しているが、遺構の性格ははっきりせず、自然の落ち込みとも考えられる。もう1基は、掘り込みが確認できず、遺物が出土しただけで、前期諸磯式土器が出土している。土坑は調査区中央部やや西寄りに3基、やや東寄りに1基の2カ所に分布している。

遺物

①土器

縄文時代の土器は総数1,309点出土している。時間的には早期から後期に及ぶが、前期後半～中期初頭のものが多い。本書では便宜的に、時期によりI～VIII群に分類することにする。

- I群 早期 II群 前期中葉（黒浜・有尾式期） III群 前期後半諸磯a式土器
IV群 前期後半諸磯b式土器 V群 前期後半諸磯c式土器
VI群 前期末～中期初頭（十三菩提式期～五領ヶ台式期） VII群 前期中葉（勝坂・阿玉台式期）
VIII群 中期後半～後期

群別出土土器数量表

群	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	不明	計
遺構内	12	1	2	4	4	2	1	0	115	141
遺構外	4	30	75	91	54	65	19	19	811	1,168
総点数	16	31	77	95	58	67	20	19	926	1,309

②石器

縄文時代の石器・剥片等は総数694点出土している。このうち582点が石器製作時の剥片・砕片・石核であり、石器（本来の意味の道具としての石器）は112点である。器種は、石鏃、石匙、ピエスエスキーユ、石匙、打製石斧、磨製石斧、スクレイパー、微細剥離痕のある剥片、2次加工痕のある剥片、磨石、くぼみ石、石皿、多孔石、石棒の計14種類が出土している。石器については、時期を確定することは難しく、個々の石器の属する時期は不明であるが、ほぼ土器と同時期になると考えられる。

石鏃 基部の判明するものは16点あり、凹基無茎が3点、平基無茎が3点となっている。

ピエスエスキュー 2点出土している。模型石器とも呼ばれ、両極剝離痕を持つ。

石匙 平面形態により分類可能なものは3点で、縦型1点、横型2点である。

打製石斧 平面形態により分類可能なものは8点あり、分銅型1点、撥I型(側縁が内湾する)1点、撥II型5点(側縁が直線状、不確定なものあり)、短冊型1点となり、撥II型が最も多くなっている。刃部形態で分類すると、凸刃7点、不明1点で直刃は出土していない。

磨製石斧 刃部形態の判明するものは1点で凸刃である。

スクレイパー 刃部形態の判明するものは7点ですべて側縁に刃部をもち、直刃が点、凸刃が点となっている。

微細剝離痕のある刮片 意図的な刃部加工とは考えられない、微細な剝離痕を有する刮片を一括した。

2次加工痕のある刮片 刮片に2次的に加工を施したものの。

磨石・くぼみ石 磨石・くぼみ石については、磨面とくぼみを両方もつものがあり、明確な区別ができないものもあるが、磨面のないものをくぼみ石、くぼみがあっても磨面のあるものを磨石とした。計21点出土している。磨面・くぼみの有無により分類可能なものは13点あり、片面に磨面をもつもの1点、両面に磨面をもつもの11点、両面にくぼみをもつもの1点となっている

石皿 完形品は少なく平面形態による分類は不能である。磨面・くぼみの有無による分類が可能なものは4点で、磨面が片面だけのもの2点、裏面にくぼみを持つもの2点となっている。

出土石器数量表

種別	石鏃	石鏃	ピエ	石匙	打斧	磨斧	スク	微剝	二加	磨石	凹石	石皿	多孔	丸石	石棒	不明	計
点数	17	1	2	3	14	3	8	6	17	19	2	5	2	1	3	10	113
%	15.0	0.9	1.8	2.7	12.4	2.7	7.1	5.3	15.0	16.8	1.8	4.4	1.8	0.9	2.7	8.8	16.3
種別	刮片	刮片(黒)	砂片	石核	石核(黒)	計	総計										
点数	335	175	30	37	5	582	695	※上段の小計以外の%は小計に対する割合を、上段の小計と下段の%は総計に対する割合を表す。									
%	48.2	25.2	4.3	5.3	0.7	83.7	100										

※種別欄の「ピエ」はピエスエスキュー、「打斧」は打製石斧、「磨斧」は磨製石斧、「スク」はスクレイパー、「微剝」は微細剝離痕のある刮片、「二加」は二次加工のある刮片、「凹石」はくぼみ石、「多孔」は多孔石を表す。

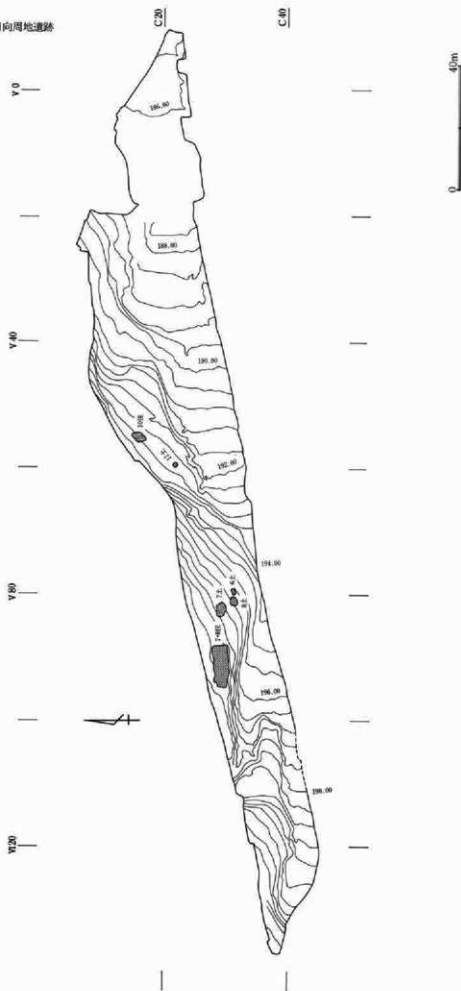
石材

縄文時代の石器で石材の判明したものは61点であり、16種類の石材が使用されている。この中では、硬質泥岩、黒曜石、粗粒安山岩が、多くなっている。

器種別石材一覧表

器種	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	計
石鏃	13	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	15
石鏃	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
ピエスエスキュー	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
石匙	0	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
打製石斧	0	0	0	0	7	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	8
磨製石斧	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	2
スクレイパー	0	0	0	0	5	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	6
二次加工痕のある刮片	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
磨石	0	0	0	0	0	1	2	1	0	7	0	0	0	0	0	1	12
くぼみ石	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
石皿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	2	0	4
多孔石	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
丸石	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
石棒	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	2
計	15	3	1	1	16	1	2	1	1	10	1	2	1	1	4	1	61

※ A 黒曜石 B チャート C 頁岩 D 珪質頁岩 E 硬質泥岩 F 砂岩 G 牛伏砂岩 H 炭酸岩 I 粗粒安山岩 J 粗粒安山岩 K 黒色安山岩 L 黒色安山岩 M 変質緑岩 N 黒色片岩 O 緑色片岩 P デイサイト



第 8 圖 縄文時代遺構位置圖

(2) 住居状遺構

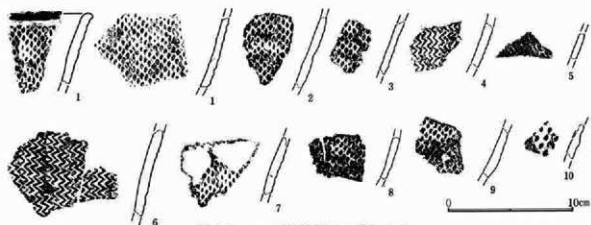
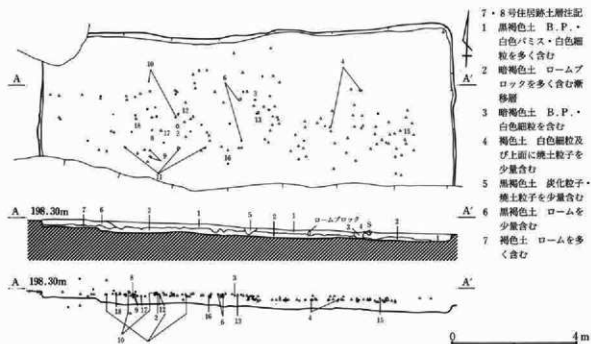
7・8号住居跡

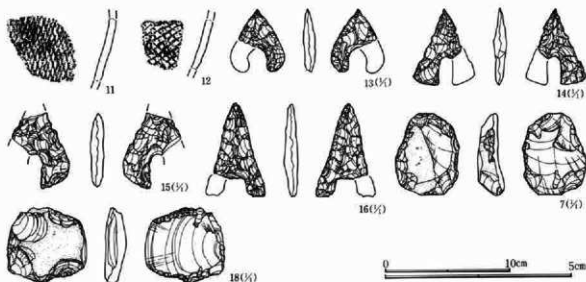
位置 C27~30-V87~95Gr 重複 なし 平面形態 長方形(?) 規模 14.08×5.12m
 壁高 68cm 面積 61m² 床面積 58.3m² 主軸方位 N-6°-W 壁溝 なし 柱穴 なし
 貯蔵穴 なし 炉 なし 床面・掘り方 はっきりと検出されなかった。

遺物出土状況 ほぼ全面から出土しているが、壁際は少なくなっている。垂直分布は、一定の高さに集中して出土している。

出土遺物 I群土器が12点、他に20点の土器が出土している。石器は、石鏃4点、ピレスエスキューユ2点、二次加工のある剥片1点、磨石2点、剥片21点、黒曜石剥片36点、碎片9点、石核1点が出土している。

所見 黒色土中から押型文土器が出土したため、住居として調査を行ったが、柱穴・炉等は検出されず、掘り方もはっきりしなかったため、住居とすることはできず、性格は不明である。





第11図 7・8号住居跡出土遺物(2)

7・8号住居跡出土土器観察表

No	器種 部位	床高 (cm)	①色調(表) ②色調(裏) ③焼成 ④胎土	法量 調量	文様要素	分類	備考
1	深鉢 口縁部	覆土	①②赤褐 ③良好 ④普通 粗砂・礫を含む	器厚6~9mm 内面ナデ	楕円形押型文 胎土に繊維混入か	I	
2	深鉢 胴部	30	①②明褐 ③良好 ④粗 粗砂・礫・片岩を含む	器厚7mm 内面ナデ	楕円形押型文	I	
3	深鉢 胴部	36	①褐 ②明褐 ③良好 ④粗 粗砂・礫を含む	器厚5mm 内面ナデか	楕円形押型文 胎土に繊維混入か	I	
4	深鉢 胴部	30	①②にぶい赤褐 ③良好 ④普通 粗砂・礫を含む	器厚7mm 内面ナデ	山形押型文 胎土に繊維混入か	I	
5	深鉢 胴部	覆土	①②にぶい黄褐 ③良好 ④普通 粗砂を含む	器厚5mm 厚底著しい	楕円形押型文	I	
6	深鉢 胴部	35	①褐 ②にぶい赤褐 ③良好 ④粗 粗砂・礫・片岩を含む	器厚7~9mm 内面ナデ	山形押型文 胎土に繊維混入か	I	
7	深鉢 胴部	覆土	①黒褐 ②にぶい褐 ③良好 ④粗 粗砂・礫・片岩を含む	器厚7mm 内面ナデ	楕円形押型文	I	
8	深鉢 胴部	20	①明赤褐 ②黒褐 ③良好 ④粗 粗砂・礫・片岩を含む	器厚5mm 内面ナデか	楕円形押型文	I	
9	深鉢 胴部	31	①②明褐 ③良好 ④粗 粗砂・礫・片岩を少量含む	器厚6~8mm 内面ナデか	楕円形押型文	I	
10	深鉢 胴部	35	①明赤褐 ②黒褐 ③良好 ④普通 粗砂を含む	器厚6mm 内面ナデか	楕円形押型文	I	
11	深鉢 胴部	22	①明褐 ②黒褐 ③良好 ④普通 粗砂・雲母を少量含む	器厚6mm 内面ナデ	格子形押型文	I	
12	深鉢 胴部	31	①②褐 ③良好 ④普通 粗砂・礫を含む	器厚6mm 内面ナデ	格子形押型文	I	

7・8号住居跡出土石器観察表

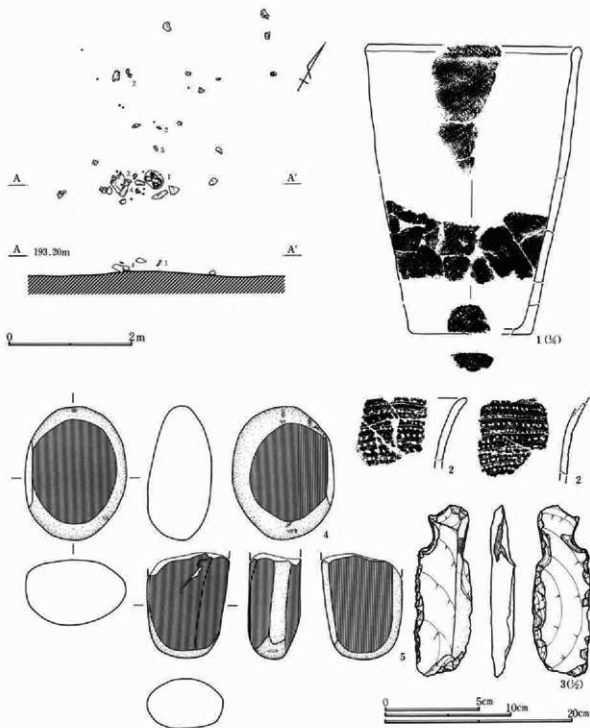
No	器種	床高 (cm)	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	残存状況	石材	特徴
13	石鏃	35	1.0	1.1	0.3	[0.4]	基部一部欠損	黒曜石	凹基無茎鏃 逆J字形のえぐり
14	石鏃	覆土	2.0	0.9	0.4	[0.4]	基部一部欠損	黒曜石	凹基無茎鏃 逆J字形のえぐり
15	石鏃	40	1.9	1.1	0.3	[0.7]	基部先端部欠	黒曜石	凹基無茎鏃 逆J字形のえぐり
16	石鏃	30	2.1	1.6	0.4	[0.9]	基部一部欠損	チャート	凹基無茎鏃 逆J字形のえぐり
17	ビューススキーユ	24	2.1	1.6	0.7	2.4	完形	黒曜石	
18	ビューススキーユ	35	2.0	2.1	0.5	2.5	完形	黒曜石	

10号住居跡

位置 C14~17-V54~55Gr 平面形態・規模等 不明

所見 南北4.5m、東西3.0mの楕円形の範囲で、土器・石器および礫が検出されている。何等かの遺構はあったものと考えられるが、柱穴・炉等は検出されていないため、住居とは考えられない。

出土遺物 土器はIV群土器3点、V群土器1点と時期不明土器36点が検出され、石器は石匙1点、二次加工のある剥片1点、磨石2点、不明1点が出土している。



第12図 10住居跡および出土遺物

10号住居跡出土土器観察表

No	器種 部位	床高 (cm)	①色調(表) ④胎土	②色調(裏)	③焼成	法 製 整	量 整	文 様 要 素	分 類	備 考
1	深鉢 口縁部	9.0	①明褐色 ②褐色 ③良好 ④粗 粗砂・塵・片岩を含む			口径(23.0cm) 底径 (12.0cm) 内面ナデ		口縁部R L 縄文横位施文 胴部 L R 縄文縦位施文	III	
2	深鉢 口縁部		①②にふい貫燈 ③良好 ④普通 粗砂を含む			器厚6mm 内面丸磨き		半截竹管状工具による平行沈 線・連続刺突文	III	

10号住居跡出土石器観察表

No	器種	床高 (cm)	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	残存状況	石材	特 徴
3	石匙		9.0	2.9	1.2	31	完形	硬質泥岩	縦型 側縁に刃部 片面に自然面
4	磨石	1.5	10.5	8.1	5.1	611	完形	粗粒安山岩	両面に磨面
5	磨石		[8.3]	6.6	4.2	[305]	2/3	ダイサイト	両面に磨面

(3) 土坑

6号土坑

位置 C30・31-V79・80Gr 重複 なし 平面形態 楕円形 規模 1.76m×1.30m

深さ 54cm 面積 2.0m² 主軸方位 N-67-E

概要 ややくずれた楕円形で、立ち上がりは傾斜している。底面はやや凹凸があるが、ほぼ平坦である。

出土遺物 III群土器が3点、時期不明土器が9点出土している。

7号土坑

位置 C27~29-V81~83Gr 重複 なし 平面形態 楕円形 規模 4.4m×3.2m

深さ 38cm 面積 11.1m² 主軸方位 N-83-E

概要 長径4.4mと規模は大きい、深さは38cmと浅い。立ち上がりは傾斜しており、底面は平坦である。

出土遺物 III群土器が3点、VI群土器が1点、時期不明土器が4点出土している。

8号土坑

位置 C30・31-V80・81Gr 重複 なし 平面形態 楕円形 規模 2.84m×2.02m

深さ 74cm 面積 5.0m² 主軸方位 N-62-E

概要 西側が膨らんだ楕円形を呈し、深さ74cmと深い。立ち上がりは垂直に近く、底面はやや凹凸がある。

出土遺物 III群土器が1点、IV群土器が2点、VI群土器が1点、時期不明土器が36点出土している。

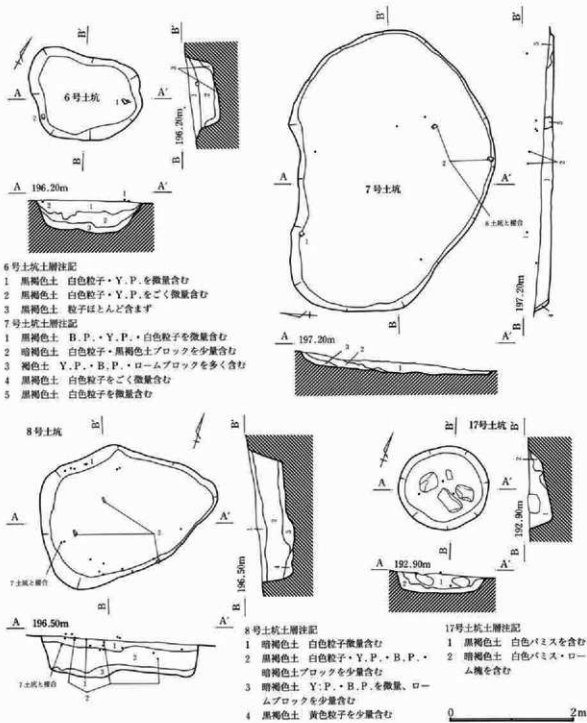
17号土坑

位置 C21・21-V59Gr 重複 なし 平面形態 円形 規模 1.42m×1.30m 深さ 38cm

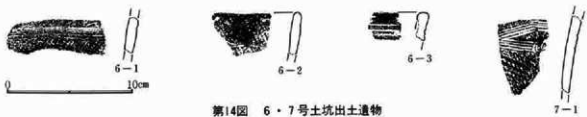
面積 1.5m² 主軸方位 N-70-W

概要 きれいな円形をした土坑で、立ち上がりはやや傾斜しており、底面は若干丸みを帯びる。

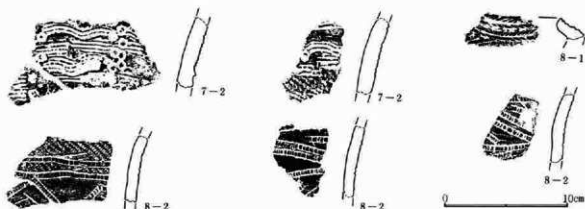
出土遺物 長径30~40cmの礫が3点出土している。他に、VI群土器が1点、時期不明土器が2点出土し、銅片が5点出土している。



第13図 6～8・17号土坑



第14図 6・7号土坑出土遺物



第15図 7・8号土坑出土遺物

土坑出土土器観察表

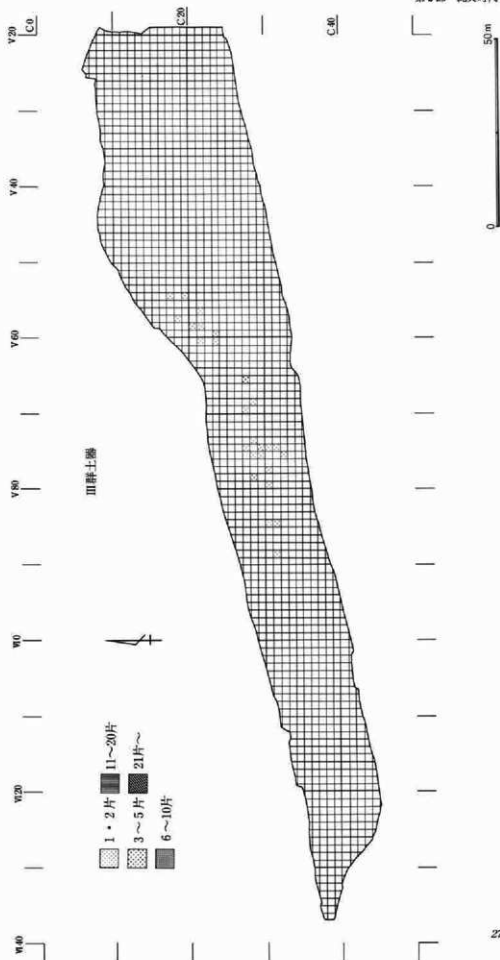
No	器種部位	①色調(表) ②色調(裏) ③焼成 ④胎土	法量 調 整	文 様 要 素	分 類	備 考
6	深鉢 1	①②明褐色 ③不良 ④普通 細砂・長石を含む	器厚7~9mm 内面荒磨き	5本1単位の櫛状工具による平行沈線 L R縄文横回転	III	
6	深鉢 2	①②褐色 ③良好 ④普通 細砂・粗砂を含む	器厚6~7mm 内面荒磨き	R L縄文横回転	III	
6	深鉢 3	①②にぶい黄褐色 ③良好 ④普通 細砂・黄砂を含む	器厚8~9mm	半截竹管状工具による平行沈線	III	
7	深鉢 1	①赤褐色 ②にぶい赤褐色 ③良好 ④普通 粗砂・礫・片岩を少量含む	器厚6~8mm 内面粗い荒磨き	R L縄文施文後、4本1単位の櫛状工具による平行沈線 竹管状工具による刺突文	III	
7	深鉢 2	①褐色 ②にぶい黄褐色 ③良好 ④粗 礫・片岩・チャートを多く含む	器厚12~14mm 内面荒磨き	4本1単位の櫛状工具による平行沈線 円形竹管状工具による刺突文 R L縄文	III	
8	深鉢 1	①にぶい黄褐色 ②黄灰 ③良好 ④粗 粗砂・礫を含む	器厚7~14mm 内面ナデ	浮線文上に刻目	IV	外面黒炭
8	深鉢 2	①②にぶい黄褐色 ③良好 ④普通 粗砂を多く含む	器厚8~10mm 内面荒磨き	R L縄文施文後、半截竹管状工具による連続爪形文	IV	

(4) 遺構外出土遺物

遺構外や弥生時代以降の遺構からも多くの縄文土器・石器が出土している。

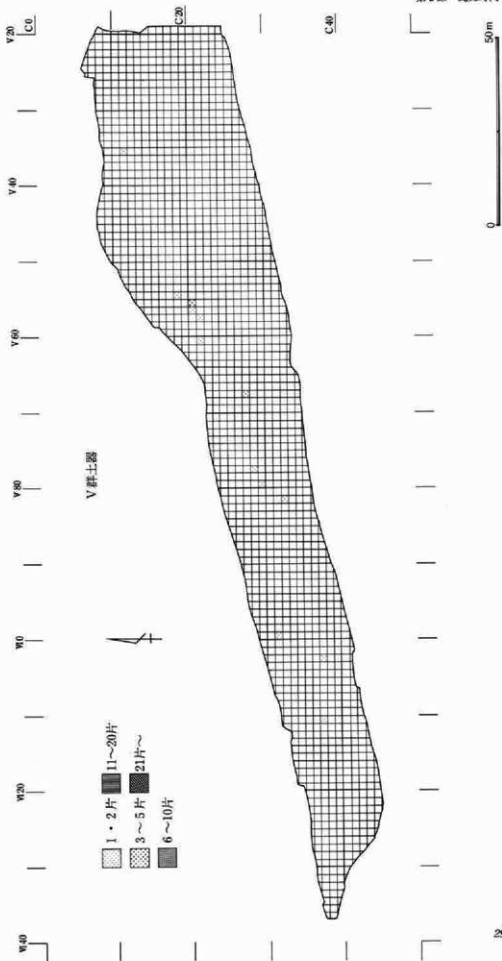
土器は、I群土器4点、II群土器が30点、III群土器が75点、IV群土器が91点、V群土器が54点、VI群土器が65点、VII群土器が19点、VIII群土器が19点、時期不明が811点、計1,168点出土している。分布を見ると、III・IV群は、調査区中央部からやや東にかけての微高地部から出土しており、V群も同様であるが、調査区西部からも出土している。V群もII・III群と同様の出土状況であるが、出土量は少なくなっている。

石器は、石鏃13点、石鏃1点、石匙2点、打製石斧14点、磨製石斧3点、スクレイパー8点、微細刻離痕のある剥片6点、二次加工痕のある剥片15点、磨石15点、くぼみ石2点、石皿5点、多孔石2点、丸石1点、石棒3点、剥片287点、黒曜石剥片114点、砕片12点、石核36点、黒曜石石核5点、不明9点、計553点出土している。分布を見ると、土器とほぼ同様な出土状況であるが、東側の低地部分からも若干出土している。

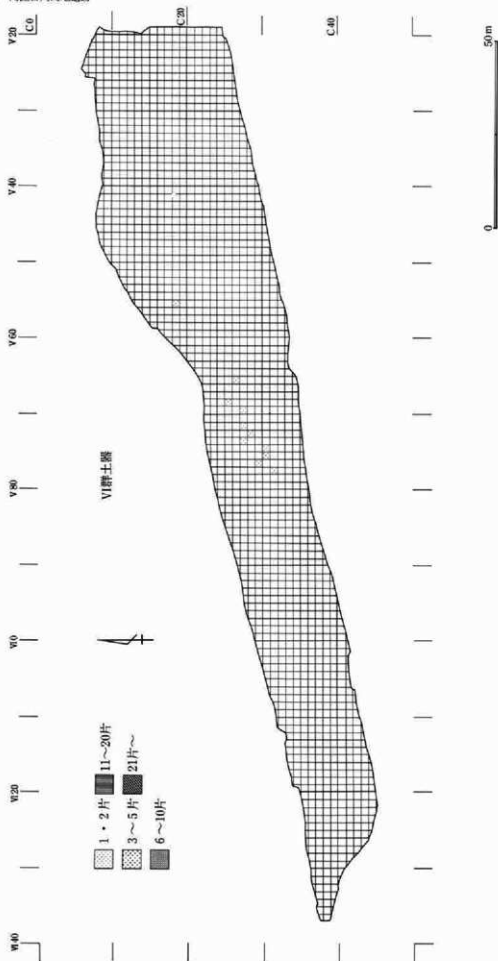




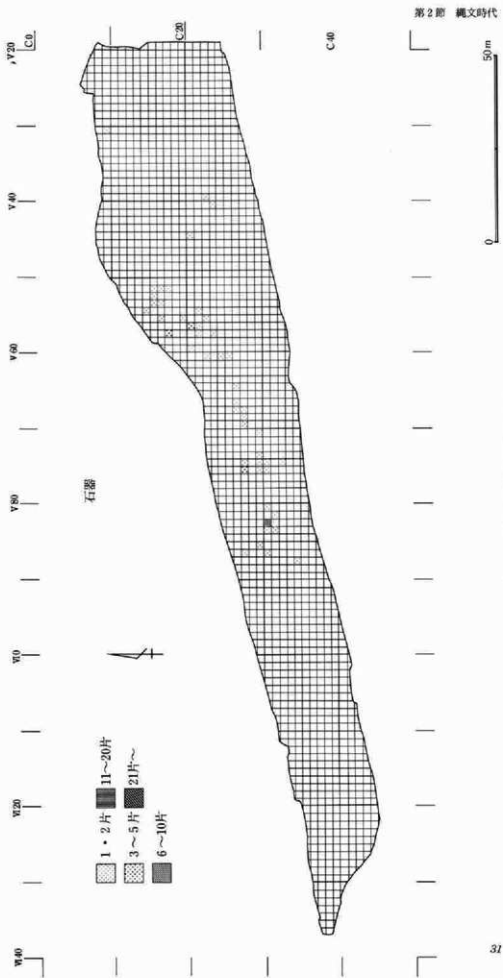
第17図 遺構外遺物出土状況(2)



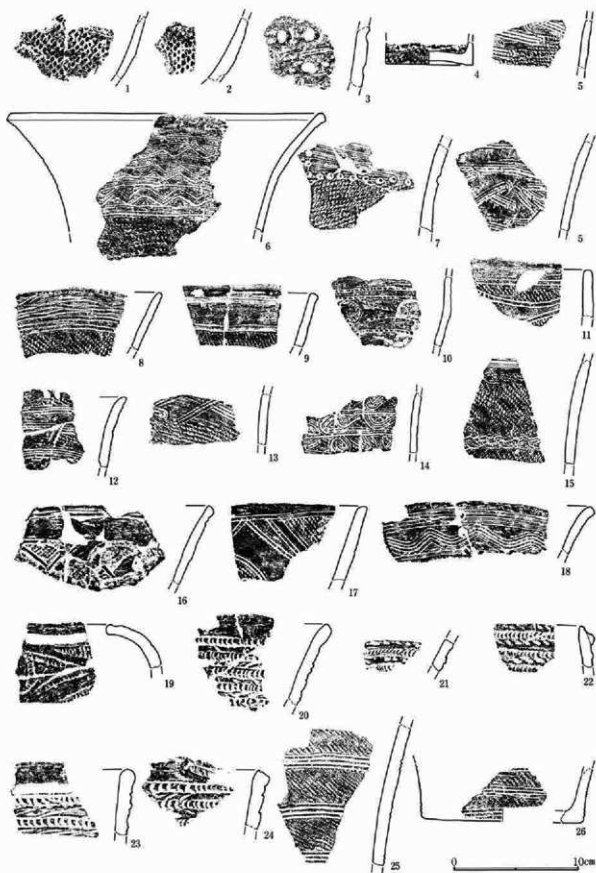
第18回 遺構外遺物出土状況 (3)



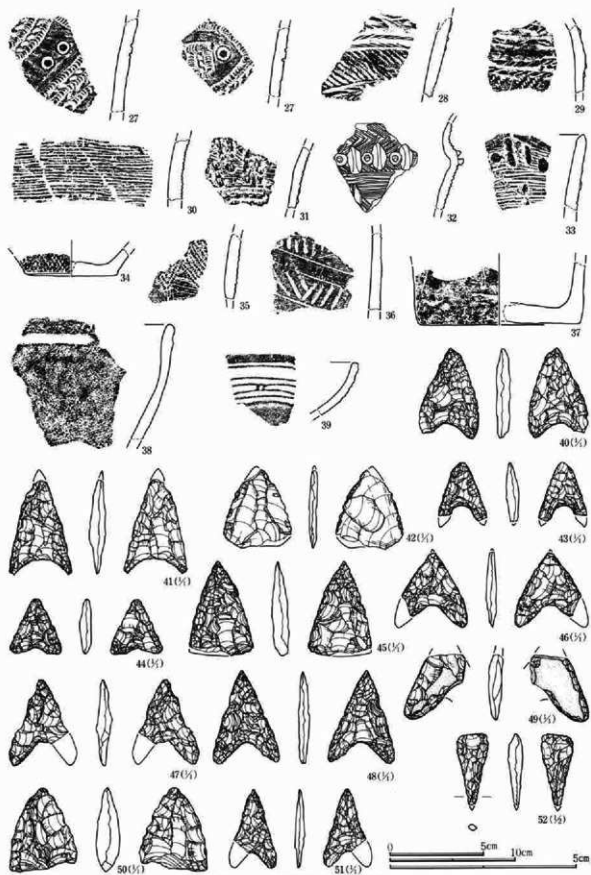
第19図 遺構外遺物出土状況(4)



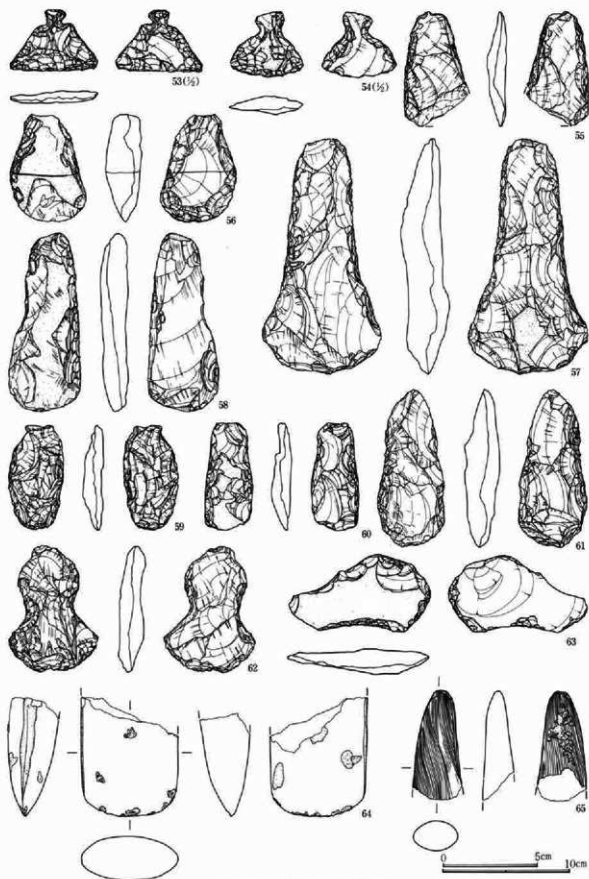
第20図 遺構外遺物出土状況(5)



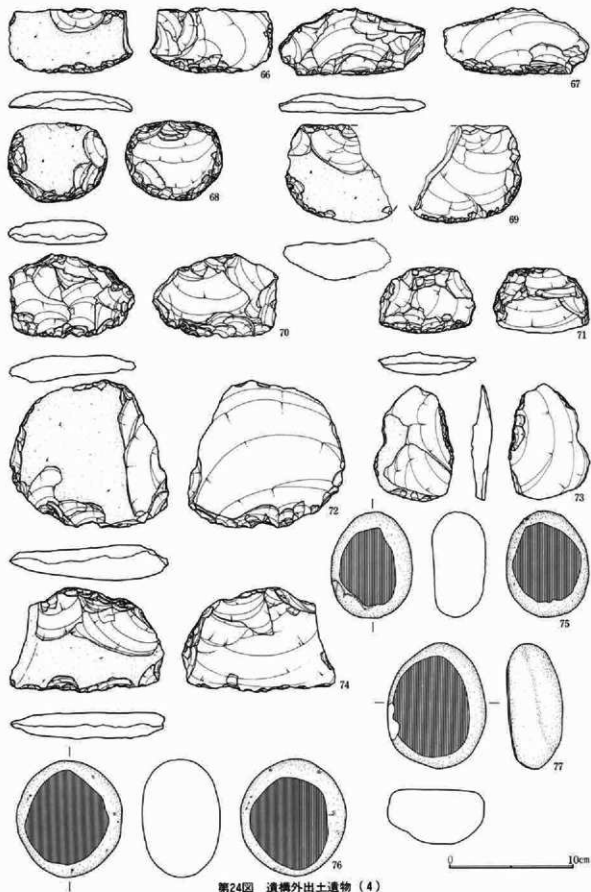
第21圖 遺構外出土遺物 (1)



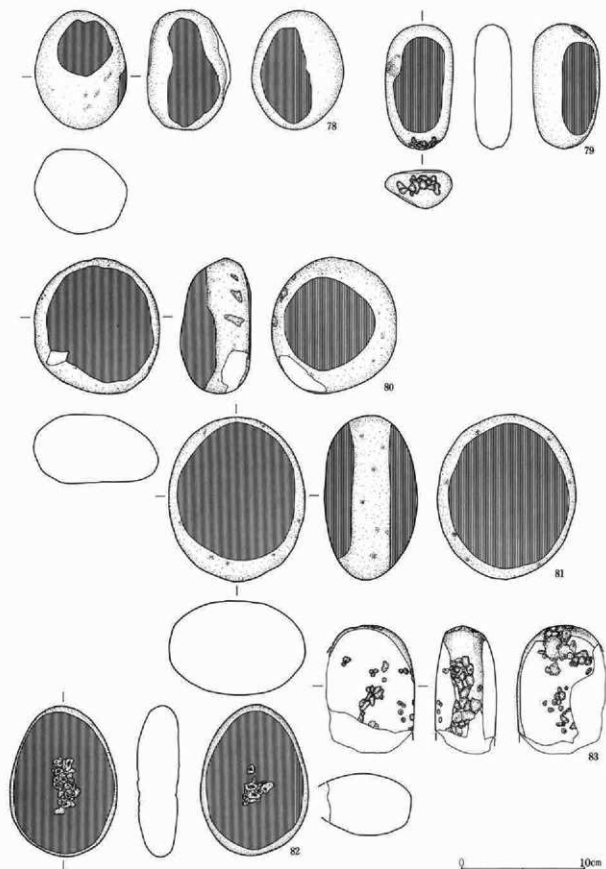
第22圖 遺構外出土遺物(2)



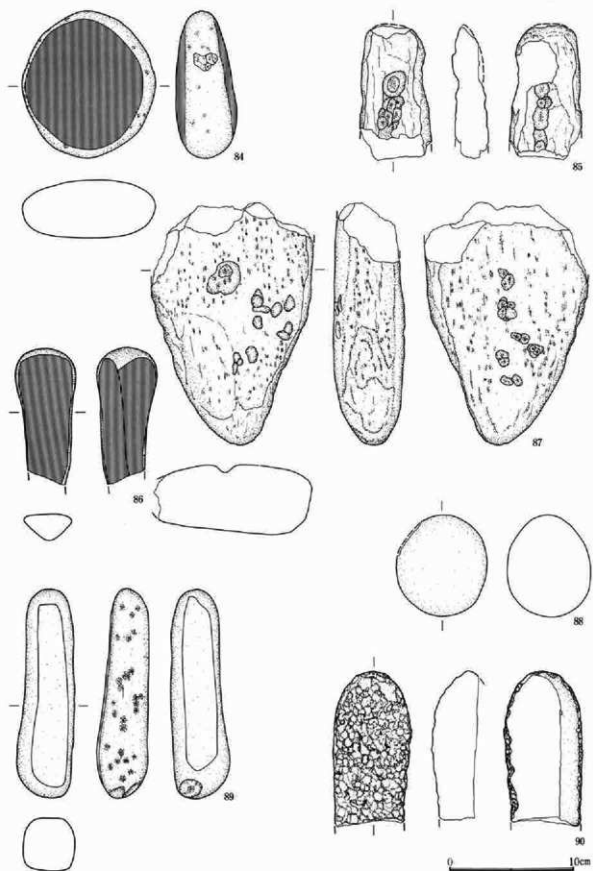
第23図 遺構外出土遺物 (3)



第24圖 遺構外出土遺物 (4)



第25図 遺構外出土遺物（5）



第26図 遺構外出土遺物(6)

遺構外出土土器観察表

No	器種 部位	出土 位置	①色調(表) ②色調(裏) ③焼成 ④胎土	法 量 調 整	文 様 要 素	分 類	備 考
1	深鉢 胴部	C37V15	①②明褐色 ③良好 ④粗 粗砂・礫・片岩をやや多く含む	器厚6~8mm 内面ナデ	楕円形押型文	I	
2	深鉢 胴部	表探	①褐色 ②にぶい黄褐色 ③良好 ④普通 粗砂・雲母を含む	器厚7~11mm 内面ナデ	楕円形押型文	I	
3	深鉢 胴部	C10V35	①暗褐色 ②褐色 ③良好 ④普通 粗砂・雲母・繊維を多く含む	器厚11mm 内面削りか	半截竹管状工具による外側刺突文	II	
4	深鉢 胴部	C9V24	①にぶい黄褐色 ②黄褐色 ③やや軟質 ④普通 粗砂・繊維を含む	器厚6~10mm 内面寛磨きか	R.L.縄文横位施文	II	
5	深鉢 胴部	C30V80	①②にぶい黄褐色 ③良好 ④粗 粗砂・礫・片岩を含む	器厚5~8mm 内面寛磨き	4本1単位の櫛状工具による平行沈線 R.L.縄文横位施文	III	
6	深鉢 口縁部	C28V75	①②明褐色 ③良好 ④普通 粗砂を含む	口径(25.0cm) 内面寛磨き	半截竹管状工具による平行沈線 山形沈線 R.L.縄文斜位施文	III	
7	深鉢 胴部	2号住居	①②にぶい褐色 ③良好 ④粗 粗砂をやや多く含む	器厚10mm 内面寛磨き	3本1単位の平行沈線 円形竹管による連続刺突文 R.L.縄文	III	
8	深鉢 口縁部	4号住居	①②にぶい赤褐色 ③良好 ④普通 粗砂・雲母をやや多く含む	器厚6~8mm 内面剝離のため不明	半截竹管状工具による平行沈線 R.L.縄文横位施文	III	
9	深鉢 口縁部	6号住居	①にぶい褐色 ②暗灰黄 ③良好 ④普通 粗砂を含む	器厚8mm 内面寛磨き	半截竹管状工具による平行沈線 R.L.縄文斜位施文	III	
10	深鉢 胴部	C16V50	①褐色 ②にぶい黄褐色 ③良好 ④普通 粗砂を少量含む	器厚6~7mm 内面寛磨きか	半截竹管状工具による平行沈線 施文後連続刺突文	III	
11	深鉢 口縁部	C30V76	①暗赤褐色 ②褐色 ③良好 ④普通 粗砂・片岩を含む	器厚9mm 内面寛磨き	半截竹管状工具による沈線区面内にR.L.縄文横位施文	III	
12	深鉢 口縁部	C30V80	①にぶい黄褐色 ②褐色 ③良好 ④普通 粗砂・雲母を含む	器厚6~9mm 内面寛磨き	R.L.縄文施文後4本1単位の櫛状工具による平行沈線	III	口唇部刻みあり
13	深鉢 胴部	3号住居	①にぶい黄褐色 ②明赤褐色 ③良好 ④普通 粗砂・雲母を含む	器厚7mm 内面寛磨き	上位半截竹管状工具による斜格子文、下位R.L.縄文横位施文	III	
14	深鉢 胴部	C29V74	①暗灰黄 ②にぶい黄 ③良好 ④粗 粗砂・礫を含む	器厚5~7mm 内面寛磨き	縄文施文後4本1単位の櫛状工具による平行沈線	III	
15	深鉢 胴部	C29V84	①にぶい黄褐色 ②洗黄 ③良好 ④普通 粗砂を含む	器厚9mm 内面寛磨き	平行沈線、R.L.縄文末端獨自編結縹横位施文	III	
16	深鉢 口縁部	C30V77	①②洗黄 ③良好 ④普通 粗砂を含む	器厚8mm 内面寛磨き	R.L.縄文施文後半截竹管状工具による沈線区面	III	
17	深鉢 口縁部	C25V65	①明赤褐色 ②にぶい赤褐色 ③良好 ④普通 粗砂・片岩を含む	器厚10mm 内面寛磨き	R.L.縄文横位施文後、半截竹管状工具による沈線区面	III	
18	深鉢 口縁部	C28V72	①にぶい黄 ②暗灰黄 ③良好 ④普通 粗砂・片岩を含む	器厚8~9mm 内面寛磨き	5本1単位の櫛状工具による平行沈線 円形竹管による刺突文	III	
19	深鉢 口縁部	C16V55	①②明赤褐色 ③良好 ④粗 粗砂・金雲母を含む	器厚7~9mm 内面寛磨きか	半截竹管状工具による連続爪形文	IV	
20	深鉢 口縁部	11号住居	①明褐色 ②褐色 ③良好 ④粗 粗砂・礫を含む	器厚10~11mm 内面寛磨き	半截竹管状工具による連続爪形文	IV	
21	深鉢 胴部	3号住居	①にぶい黄褐色 ②褐色 ③良好 ④普通 粗砂を含む	器厚7~9mm 内面寛磨き	半截竹管状工具による連続爪形文 爪形文間に押圧文	IV	
22	深鉢 口縁部	C27V80	①②褐色 ③良好 ④粗 粗砂を多く含む	器厚8~13mm 内面寛磨きか	半截竹管状工具による連続爪形文 爪形文間に押圧文	IV	
23	深鉢 口縁部	C14V2	①暗褐色 ②褐色 ③良好 ④粗 粗砂・礫を多く含む	器厚10~11mm 内面寛磨き	半截竹管状工具による連続爪形文 爪形文間に斜位沈線	IV	
24	深鉢 口縁部	C28V59	①にぶい黄 ②灰 ③良好 ④普通 粗砂を含む	器厚11mm 内面寛磨き	半截竹管状工具による連続爪形文 爪形文間に斜位沈線	IV	
25	深鉢 胴部	C25V65	①にぶい黄褐色 ②にぶい褐色 ③良好 ④普通 粗砂・雲母を含む	器厚10~11mm 内面寛磨き	R.L.縄文横位施文後、半截竹管による平行沈線に連続刺突文2条	IV	
26	深鉢 底部	C20V55	①②にぶい黄褐色 ③良好 ④粗 粗砂・礫・片岩をやや多く含む	底径(12.5cm) 内面ナデ	R.L.縄文横位施文後、半截竹管状工具による平行沈線を施文	IV	
27	深鉢 胴部	2号住居	①褐色 ②明褐色 ③良好 ④普通 粗砂を多く含む	器厚7~9mm 内面寛磨き	円形竹管による刺突文 半截竹管状工具による爪形文・刺突文	IV	
28	深鉢 胴部	表探	①明赤褐色 ②にぶい褐色 ③良好 ④粗 粗砂・礫・チャートを多く含む	器厚9~11mm 内面ナデ	R.L.縄文横位施文後、厚縁文上に刻目	IV	
29	深鉢 胴部	C29V74	①にぶい黄褐色 ②黄褐色 ③良好 ④普通 粗砂・雲母を含む	器厚7~11mm 内面寛磨き	R.L.縄文横位施文後、厚縁文上に刻目	IV	

No.	器種 部位	出土位置 床高(cm)	①色調(表) ②色調(裏) ③焼成 ④胎土	法 重 整	文 様 要 素	分 類	備 考
30	深鉢 胴部	C30V85	①ぶい黄褐色 ②褐 ③良好 ④普通 粗砂を含む	器厚12mm 内面ナデ	半軟竹管状工具による集合沈線 内面ナデ	V	
31	深鉢 胴部	C27V80	①ぶい黄褐色 ②オリーブ褐 ③良好 ④普通 粗砂・雲母を含む	器厚6~10mm 内面磨き	半軟竹管状工具による平行沈線 貼付文上に竹管による明突文	V	
32	深鉢 胴部	C29V84	①ぶい黄褐色 ②黄灰 ③良好 ④粗 粗砂・雲母を含む	器厚6~7mm 内面ナデ	半軟竹管による集合沈線施文後 楕円形・円形貼付文施文	V	
33	深鉢 口縁部	C32V90	①ぶい黄褐色 ②淡黄 ③良好 ④普通 粗砂を含む	器厚8~10mm 内面磨き	半軟竹管による集合沈線施文後 楕円形貼付文を施文	V	
34	深鉢 洗部	C27V69	①②褐 ③良好 ④普通 粗砂を多く含む	底径(7.3cm) 内面磨き	R.L.縄文斜位施文		
35	深鉢 胴部	C9V24	①②ぶい黄褐色 ③良好 ④普通 粗砂を含む	器厚8~9mm 内面磨き	半軟竹管状工具による平行沈線 連続爪形文を施文	VI	
36	深鉢 胴部	5号溝	①②ぶい黄褐色 ③良好 ④粗 粗砂・塵をやや多く含む	器厚7~9mm 内面磨き	沈線区画内に棒状沈線文	V	
37	深鉢 洗部	C20V59	①ぶい褐 ②黒褐 ③良好 ④粗 粗砂・雲母を多く含む	底径(12.6cm) 内面ナデ	沈線		
38	深鉢 口縁部	1号溝井	①明赤褐 ②橙 ③良好 ④粗 粗砂を多く含む	器厚8~9mm 内面割磨の為不明	口縁部下に沈線	V	
39	浅鉢 口縁部	C20V12	①②明黄灰 ③良好 ④普通 粗砂・雲母を含む	器厚5~6mm 内面磨きか	隣器で貼付	V	

遺構外出土石器観察表

No.	器種	出土位置	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	残存状況	石 材	特 徴
40	石 鏝	2号住居	2.4	1.6	0.3	1.1	完 形	黒曜石	凹基無蓋縁
41	石 鏝	3号住居 (2.8)	1.4	0.8	[1.4]		先端部一部欠	チャート	凹基無蓋縁
42	石 鏝	4号住居 (2.1)	1.7	0.9	[0.7]		先端部一部欠	黒曜石	平基無蓋縁
43	石 鏝	4号住居 (1.7)	1.0	0.4	[0.5]		基部欠損	黒曜石	凹基無蓋縁 逆U字形のえぐり
44	石 鏝	2号谷津	1.4	1.4	0.3	0.5	完 形	黒曜石	凹基無蓋縁
45	石 鏝	C27V70	2.5	1.5	0.4	[1.5]	基部一部欠損	黒曜石	平基無蓋縁
46	石 鏝	8号溝 (2.1)	(1.9)	0.3	[0.7]		基部一部欠損	黒曜石	凹基無蓋縁 挟りが大きい
47	石 鏝	4号溝井	2.3	(1.8)	0.4	[0.7]	基部一部欠損	黒曜石	凹基無蓋縁 挟りが大きい
48	石 鏝	C35V97	2.5	1.4	0.3	0.8	完 形	黒曜石	凹基無蓋縁 挟りが大きい
49	石 鏝	C41V10	(1.9)	[1.4]	0.3	[0.9]	先端部一部欠	黒曜石	凹基無蓋縁 挟りが大きい
50	石 鏝	C35V15	2.2	1.8	0.6	2.1	完 形	チャート	平基無蓋縁
51	石 鏝	表層	2.1	(1.3)	0.3	[0.3]	基部一部欠損	黒曜石	凹基無蓋縁 逆U字形のえぐり
52	石 鏝	C21V57 (4.1)	(1.6)	0.7	[3.9]		ほぼ完形	チャート	
53	石 鏝	C32V64	3.2	4.6	0.6	6.6	完 形	珪質頁岩	横型 直刃
54	石 鏝	C41V26	3.5	3.9	0.9	8.7	完 形	頁岩	横型 直刃 片面に自然面
55	打製石斧	C14V5	9.0	[4.9]	1.5	[65]	刃部欠損	硬質泥岩	楕円型 片面に自然面
56	打製石斧	4号住居	8.3	5.7	2.7	152	完 形	硬質泥岩	楕円型 凸刃 片面に自然面
57	打製石斧	5号住居	18.4	9.5	3.2	470	完 形	硬質泥岩	楕円型 凸刃
58	打製石斧	3号溝井	13.9	5.6	2.2	183	完 形	硬質泥岩	楕円型か 凸刃 片面に自然面
59	打製石斧	C9V24	8.1	4.3	1.4	57	完 形	細粒安山岩	楕円型か 凸刃
60	打製石斧	C30V12	8.4	3.7	1.5	52	完 形	硬質泥岩	短冊型 凸刃 片面に自然面
61	打製石斧	C16V51	12.2	5.3	2.7	169	完 形	硬質泥岩	楕円型 凸刃 刃部に使用痕
62	打製石斧	C30V95	9.8	7.1	1.9	112	完 形	硬質泥岩	分銅型 凸刃
63	スクレイパー	C43V17	6.0	10.8	2.0	115	完 形	硬質泥岩	側縁部に刃部 片面に自然面
64	磨製石斧	4号住居 [9.4]	7.7	3.8	[387]		基部1/2欠損	庚玄武岩	両面に縦打痕 刃部使用痕
65	磨製石斧	C14V54 [8.6]	[3.9]	[2.4]	[95]		刃部1/2欠損	庚玄武岩	側部・片面縦打痕 両面磨き
66	スクレイパー	C32V64	5.7	9.7	1.5	79	完 形	硬質泥岩	側縁部に刃部 片面に自然面
67	スクレイパー	C17V32	5.2	11.5	1.5	85	完 形	硬質泥岩	側縁部に刃部 片面に自然面一部残る
68	スクレイパー	C17V54	6.2	7.7	1.9	118	完 形	硬質泥岩	側縁部に刃部 片面に自然面
69	スクレイパー	C22V60	7.6	[8.5]	2.9	[191]	3/4	硬質泥岩	側縁部に刃部 片面に自然面
70	スクレイパー	C32V70	6.6	10.1	1.9	119	完 形	硬質泥岩	側縁部に刃部
71	スクレイパー	C13V6	5.1	7.6	1.7	66	完 形	黒色安山岩	側縁部に刃部
72	二次加工のある割片	C32V13	11.5	12.6	2.2	422	完 形	硬質泥岩	側縁部に刃部 片面に自然面
73	二次加工のある割片	C33V133	9.0	6.4	1.5	75	完 形	硬質泥岩	側縁部に刃部 片面に自然面
74	二次加工のある割片	11号住居	8.2	12.2	2.0	217	完 形	硬質泥岩	側縁部に刃部 片面に自然面

No	器種	出土位置	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	残存状況	石材	特徴
75	磨石	11号住居	8.4	6.6	4.3	289	完形	牛伏砂岩	両面に磨面
76	磨石	C25V60	9.3	8.4	6.2	697	完形	粗粒安山岩	両面に磨面
77	磨石	11号住居	9.9	7.8	4.4	[363]	ほぼ完形	牛伏砂岩	片面に磨面
78	磨石	C31V76	9.3	7.2	7.0	644	完形	粗粒安山岩	両面・片面に磨面
79	磨石	11号住居	9.8	5.4	3.0	228	完形	洗紋岩	両面に磨面 端部敲打法
80	磨石	C29V74	10.7	9.9	5.5	[885]	ほぼ完形	粗粒安山岩	両面に磨面 片面敲打法
81	磨石	C41V26	13.0	10.9	7.5	1588	完形	粗粒安山岩	両面に磨面
82	磨石	C10V30	11.9	8.6	3.4	500	完形	粗粒安山岩	両面に磨面・敲打法
83	磨石	C9V24	[10.0]	[7.0]	4.8	[508]	2/3	砂岩	両面に磨面 両面・側面・端部敲打法
84	磨石	C29V83	11.6	10.6	4.9	691	完形	粗粒安山岩	両面に磨面 側面敲打法
85	くぼみ石	5号住居	[10.7]	5.7	2.7	[227]	2/3	黒色片岩	両面にくぼみ・敲打法
86	砥石	C41V25	[10.9]	3.9	2.0	[156]	3/4	硬質泥岩	三面に研ぎ面
87	多孔石	C23V58	[19.0]	13.0	5.2	[2080]	2/3	緑色片岩	敲打法 両面にくぼみ
88	丸石	C27V63	8.0	7.3	6.6	[470]	ほぼ完形	粗粒安山岩	
89	石棒	C19V55	16.5	4.8	4.1	515	完形	緑色片岩	
90	石棒	C27V77	[12.4]	6.3	[3.8]	[444]	2/3	安山輝岩	片面敲打法

第3節 弥生時代

(1) 遺構外出土遺物

弥生時代は、遺構は検出されず、中期および後期の土器・石器が若干出土しているだけである。

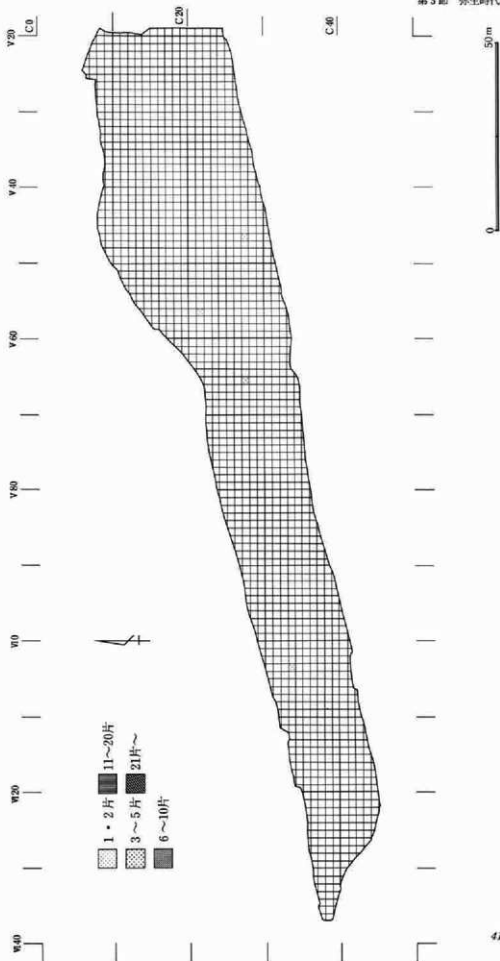
土器 中期は甕、不明土器が、後期は壺、甕が出土している。

出土土器一覧表

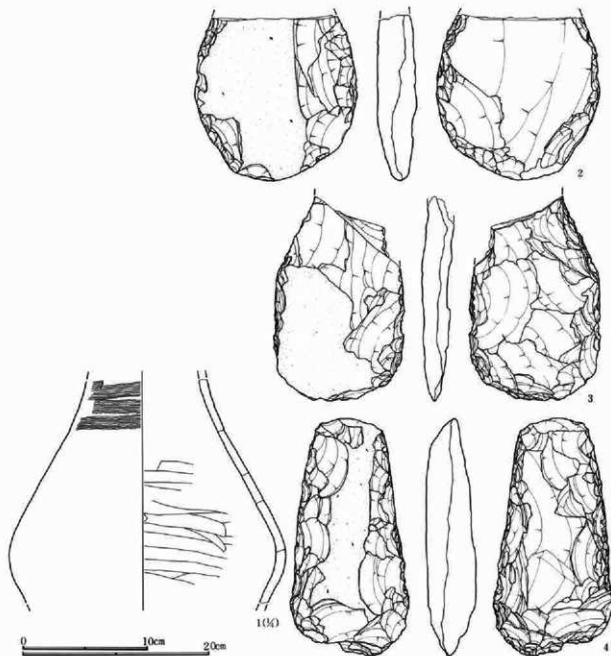
器種	中期壺	中期不明	小計	後期壺	後期甕	小計	計
点数	11	1	12	4	9	13	25

石器

石剣が3点出土している。



第27区 遺構外遺物出土状況



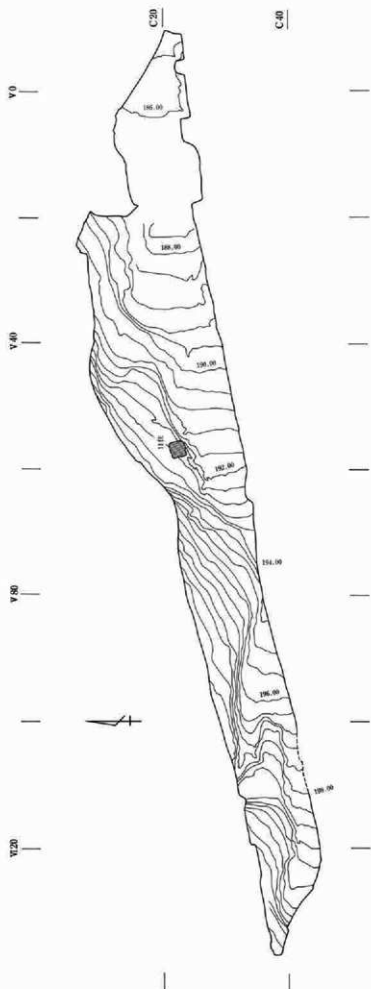
第28図 遺構外出土遺物

遺構外出土土器観察表

No	器種	出土位置	法量 ①口径②底径 ③高さ④残存	①色調(表) ②色調(裏) ③焼成 ④胎土	調整・文様	分期	備考
1	甕	2号台洋	①— ②— ③— ④肩部欠	①にぶい橙 ②にぶい橙 ③良好 ④粗 粗砂を多く含む	9本1単位の櫛状工具による波状文 内面ナデ		外面赤彩

遺構外出土石器観察表

No	器種	出土位置	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	残存状況	石材	特徴
2	石 鍬	C 9 V 24	[12.7]	13.0	3.1	[666]	基部1/2欠損	変質安山岩	凸刃 片面に自然面
3	石 鍬	C 34 V 12	[16.0]	10.1	2.0	[447]	基部1/3欠損	緑色片岩	凸刃か 片面に自然面
4	石 鍬	C 31 V 16	18.2	8.6	3.9	777	完 形	変質安山岩	直刃 片面に自然面



第3册 弥生時代

第29図 古墳時代前期遺構位置図

第4節 古墳時代前期

(1) 遺構・遺物の概要

遺構

調査区中央部の微高地上に、竪穴住居が1軒検出されたが、他に遺構は検出されなかった。

遺物

土器

高坏・甕・小型甕・台付甕・壺・埴が出土している。

I 高坏 1類 放射状磨き痕をもつもの 2類 放射状磨き痕のないもの

II 甕 1類 胴部に刷毛目を残すもの 2類 胴部が寛削りだけのもの

III 小型甕 1類 胴部に刷毛目を残すもの 2類 胴部が寛削りだけのもの

IV 台付甕 S字状口縁で胴部寛削り調整のもの V 壺 VI 埴

出土土器数量表

器種	高坏	甕	小型甕	台付甕	壺	埴	計
点数	17	69	6	7	5	6	110

石製品

砥石1点、滑石砂片9点が出土している。

(2) 竪穴住居跡

11号住居跡

位置 C20～23-V55～58Gr 重複 1号溜井より古 平面形態 隅丸方形

規模 5.04m×4.94m 壁高 34cm 面積 23.0㎡ 床面積 22.5㎡ 主軸方位 N-12°-W

壁溝 なし 貯蔵穴 なし

柱穴 P1 長径26cm短径20cm深さ18cm P2 長径16cm短径14cm深さ8cm P3 径28cm深さ24cm

P4 長径32cm短径30cm深さ36cm

床面 ロームを含む暗褐色土で貼床としており、比較的堅緻な床面である。

掘り方 床下を1号溜井に切られているため、北東部の掘り方は壊されて不明である。長径20～80cmのピットが数基検出されている他、北西部と南東部に浅い掘り込みがある。

遺物出土状況 比較的完形に近い土器が多く破片は少ない。特に北西部に完形に近い土器がまとまって出土しており、西側に高坏が、東側に甕・台付甕が集中している。

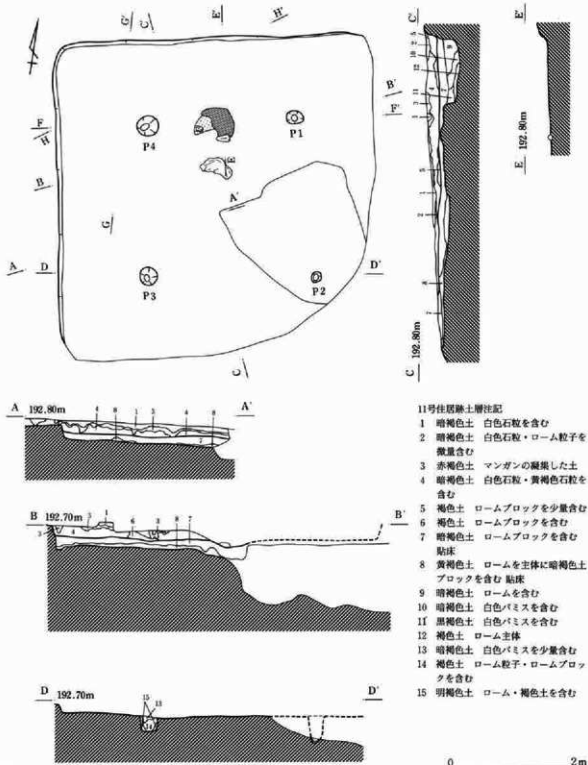
炉

位置 中央北寄り 規模 長径62cm 短径55cm 深さ5cm

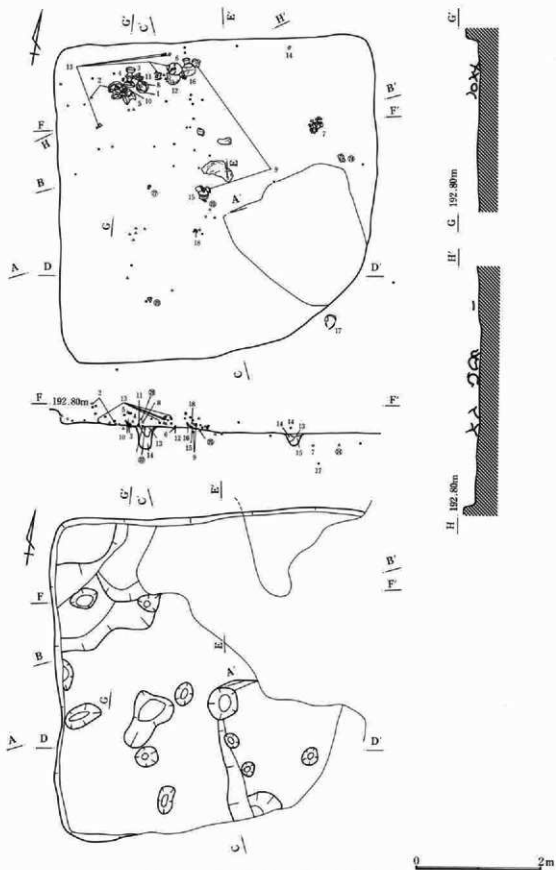
概要 南に枕石が存在し、その北に焼土が広がっている。火床面はほぼ平坦で、掘り込みはほとんど無い。焼土は一部西に張り出している。

出土遺物 完形に近い土器が多いため、出土点数は少ないが、量的には多い。高坏14点、甕53点、小型甕6点、台付甕3点が出土している。他に、砥石が1点、滑石砂片が9点出土している。

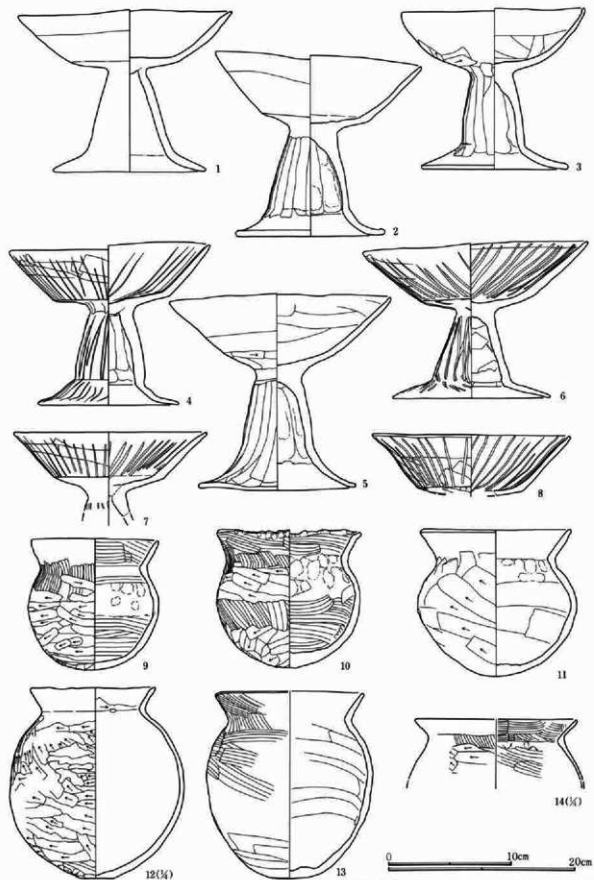
所見 S字状口縁で胴部寛削りの台付甕が出土しているため、古墳時代前期でも最終末の段階と考えられる。



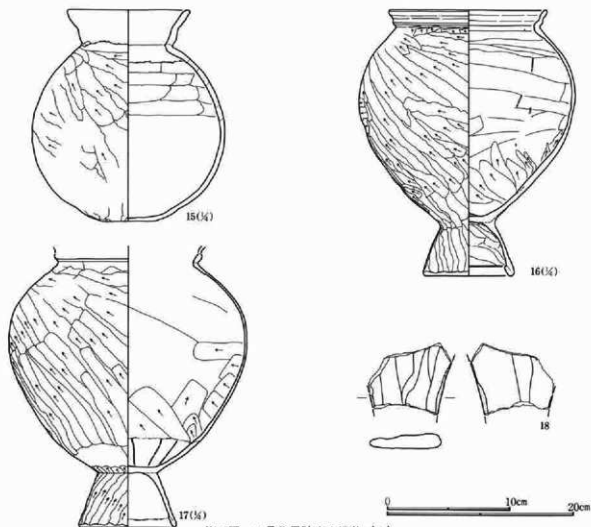
第30図 11号住居跡



第31図 11号住居跡遺物出土状況および掘り方



第32圖 11号住居跡出土遺物(1)



第33図 11号住居跡出土遺物(2)

11号住居跡出土土器観察表

No	種別 器種	床高 (cm)	法量	①口径②底径 ③高さ④残存	①色調(表) ②色調(裏) ③焼成 ④胎土	調 整	分類	備 考
1	土師器 高 杯	1	① 17.0cm ② 12.7cm	① 17.0cm ② 12.0cm ③ 12.7cm ④ ほぼ完形	①明赤褐 ②橙 ③良好 ④細 粗砂を少量含む	口縁・脚端部横ナゲ底部外面削り内面 ナゲ 脚部内面横方向置削り	1	器面摩滅 2 著しい
2	土師器 高 杯	1	① 16.4cm ② 14.5cm	① 16.4cm ② 11.7cm ③ 14.5cm ④ ほぼ完形	①②にふい橙 ③良好 ④普通 礫・雲母を少量含む	口縁・脚端部横ナゲ 体へ脚部外面置削り 脚部内面指ナゲ	1	脚部一部 2 黒変
3	土師器 高 杯	-1	① 14.4cm ② 12.7cm	① 14.4cm ② 11.4cm ③ 12.7cm ④ ほぼ完形	①②黄橙 ③良好 ④普通 粗砂・礫を少量含む	口縁・脚端部横ナゲ 体へ脚部外面置削り 脚部内面指ナゲ	1	内外面一 2 部黒変
4	土師器 高 杯	1	① 15.9cm ② 12.8cm	① 15.9cm ② 11.0cm ③ 12.8cm ④ ほぼ完形	①②にふい黄橙 ③良好 ④細 粗砂を少量含む	口縁・脚端部横ナゲ体部置削り 脚部内 面縦方向指ナゲ 内外面放射状置削り	1	1
5	土師器 高 杯	20	① 17.6cm ② 15.4cm	① 17.6cm ② 12.3cm ③ 15.4cm ④ 完形	①②橙 ③良好 ④普通 礫・雲母を少量含む	口縁・脚端部横ナゲ 体へ脚部外面置削り 脚部内面指ナゲ	1	外面一部 2 黒変
6	土師器 高 杯	-1	① 17.8cm ② 12.2cm	① 17.8cm ② 12.2cm ③ 12.2cm ④ ほぼ完形	①②橙 ③良好 ④普通 粗砂を少量含む	口縁・脚端部横ナゲ 体部置削り 脚部内 面置削り 内外面放射状置削り	1	1
7	土師器 高 杯	-19	① 15.3cm ② -	① 15.3cm ② - ③ - ④口へ体部	①②にふい黄橙 ③良好 ④細 粗砂を少量含む	口縁部横ナゲ体部外面置削り 内外面放 射状置削り	1	1
8	土師器 高 杯	6	① 15.6cm ② -	① 15.6cm ② - ③ - ④口へ体部	①②にふい黄橙 ③良好 ④細 粗砂を少量含む	口縁部横ナゲ体部外面置削り 内外面放 射状置削り	1	内外面一 1 部黒変
9	土師器 小型壺	-6	① 10.9cm ② 10.3cm	① 10.9cm ② - ③ 10.3cm ④ ほぼ完形	①②橙 ③良好 ④普通 粗砂・礫・雲母を含む	口縁部外面ナゲ内面ハケメ 胴へ底部外 面ハケメ後裏面内面指押しえハケメ	III	外面一部 1 黒変
10	土師器 小型壺	4	① 11.3cm ② 10.8cm	① 11.3cm ② - ③ 10.8cm ④ ほぼ完形	①②橙 ③良好 ④普通 粗砂・雲母を少量含む	口縁部内外面横ハケメ 胴へ底部外面ハ ケメ後裏面内面指押しえハケメ	III	口縁部に 1 押しえ痕
11	土師器 小型壺	3	① 11.6cm ② 11.6cm	① 11.6cm ② - ③ 11.6cm ④口へ底4/5	①②にふい黄橙 ③良好 ④普通 粗砂・礫・雲母を含む	口縁部横ナゲ 胴へ底部外面置削り内面 置ナゲ・押しえ	III	外面未変 2

No	種別 器種	床高 (cm)	法量 ①口部②底径 ③高さ④残存	①色調(表) ②色調(裏) ③焼成 ④胎土	調 整	分類 備考
12	土師器 壺	1	① 13.2cm ② 3.7cm ③ 20.5cm ④ほぼ球形	①明典焼 ②褐灰 ③良好 ④普通 粗砂・礫・雲母含む	口縁部外面ナデ内面蓋ナデ 胴～底部外 面蓋削り内面蓋ナデ・ハケメ	II 外面赤変 2
13	土師器 小型壺	1	① 11.8cm ② - ③ 14.7cm ④口～底1/2	①橙 ②にぶい黄橙 ③良好 ④普通 粗砂・雲母を含む	口縁部外面ハケメ内面ナデ 胴～底部外 面ハケメ・蓋削り内面蓋ナデ	II 外面赤変 1
14	土師器 壺	10	①(17.2cm) ② - ③ - ④口縁部片	①②にぶい橙 ③良好 ④普通 粗砂・片岩少量含む	口縁部外面ナデ内面ハケメ 胴～底部外 面ハケメ後蓋削り内面指押さえ後ハケメ	II 1 I
15	土師器 壺	1	① 12.2cm ② 6.3cm ③ 22.4cm ④口～底3/4	①②橙 ③良好 ④普通 粗砂・片岩含む	口縁部横ナデ 胴～底部外面蓋削り内面 蓋ナデ・指押さえ	II 外面赤変 2
16	土師器 台付壺	4	① 16.5cm ② 9.5cm ③ 28.3cm ④口～台4/5	①②橙 ③良好 ④普通 粗砂・礫・雲母含む	口縁部横ナデ 胴～脚部外面蓋削り内面 蓋ナデ・蓋削り 脚部内面ナデ・押さえ	IV 外面一部 黒変
17	土師器 台付壺	-47	① - ② 10.0cm ③ - ④口～台1/2	①②にぶい橙 ③良好 ④普通 粗砂・礫・雲母含む	口縁部横ナデ 胴～脚部外面蓋削り内面 蓋ナデ・蓋削り 脚部内面ナデ・押さえ	IV 外面一部 黒変

11号住居跡出土石器観察表

No	器 種	床高 (cm)	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	残存状況	石 材	特 徴
18	磁 石	7	[5.6]	5.7	1.2	[42]	1/3	凝灰質砂岩	両面に研ぎ面

第5節 古墳時代後期～平安時代

(1) 遺構・遺物の概要

遺構

竈穴住居跡7軒、水田1面、溜井4基、溝状遺構11条、谷津状遺構2が検出されている。

竈穴住居跡

①分布 調査区中央部の微高地上に6軒集中しており、他に調査区東寄りに1軒存在している。

②平面形態・規模 平面形態は、正方形が1軒、隅丸方形が3軒、隅丸長方形が3軒となっている。規模は、長辺が3.22～5.90m平均4.32m、短辺が2.84～4.28m平均3.61m、面積が9.3～20.5m²平均14.8m²、床面積が8.2～19.6m²平均13.5m²、壁高が18～86cm平均48cmとなっている。

③主軸方位 カマドのある辺に直角の方向を主軸とすると、北方向のものが4軒、東方向のものが2軒、西方向が1軒となっている。北方向のものはいずれもやや西に振れている。

④床面・掘り方 5軒は床面全面に貼床が施されており、厚さは5～25cmと差がある。5号住は一部に薄く施されているだけで、9号住は地山を床面としている。比較的良好に踏み固められているものが多いが、はっきりした硬化面が検出されたのは3軒である。掘り方は凹凸のあるものが多いが、平坦なものもある。ピットや溝状の掘り込みがあるものが多い。

⑤カマド 1号住を除いてすべての住居から検出されている。1号住は攪乱により壊されていると考えられる。位置は、北壁東寄りが2軒、北壁中央部が1軒、東壁中央部が2軒、西壁南寄りが1軒となっている。規模は、長さ1.30～2.36m平均1.87m、幅0.96～1.30m平均1.08mとなっている。

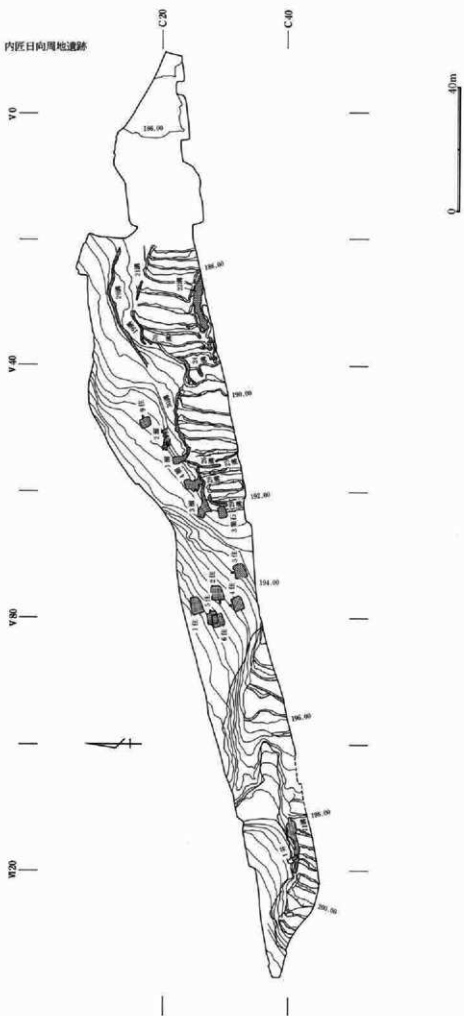
⑥柱穴 4軒で検出され、3軒で検出されていない。すべて4本で、住居の対角線上の四隅にある。

⑦貯蔵穴 4軒で検出されている。基本的にカマドの右脇に位置しているが、4号住は左脇にある。

⑧時期 出土遺物の少ない1号住は不明であるが、他はいずれも古墳時代後期の住居と考えられる。

水田

2号谷津状遺構の上部から、浅間B軽石に埋没した水田が1面検出されている。



第34図 古墳時代後期遺構位置図

溜井・井戸

溜井は4基検出されており、出土遺物が少ないためはっきりした時期は不明であるが、古墳時代後期～平安時代と考えられる。井戸は1基検出されている。

溝状遺構

11条検出されており、11号溝は出土遺物から8世紀代のものと考えられるが、他はすべて浅間B軽石下水田に伴うか、それに近い時代のものである。

集石遺構

1基検出されている。集石の間から多量の土器が出土している。

谷津状遺構

調査区西側の北壁から南東に向かってのびる1カ所（1号）と、調査区ほぼ全面の南側に東西に長く1カ所（2号）検出されているが、両者は1つにつながっている。2号は調査区中央で一旦切れるが、調査区の南側でつながっていると考えられる。土器が多量に出土しているが、1号に完形に近いものが多い。また2号からは木器が多量に出土している。

遺物

①土器 土師器、須恵器が出土している。

土師器 坏・埴・蓋・高坏・甕・小型甕・台付甕・鉢・甔等の器種が出土している。

I 坏 1類 底部は丸底で口縁部と体部を画す稜線から直立もしくは外傾するもの

2類 底部と体部を画す稜線がはっきりしており平底もしくは丸みを帯びた平底を呈するもの

II 埴 坏よりも深い器形 **III 蓋** 傘形の体部に紐がつくもの

IV 高坏 1類 脚部が長く比較的大きく開くもの 2類 脚部が短く広いもの

V 甕 1類 いわゆる長胴甕で口縁から頸部にかけては「く」の字状をなすもの

2類 いわゆる胴張甕で1類に比べ胴が張るもの

VI 小型甕 甕よりも小さく胴部は丸みを帯びている。

VII 台付甕 甕に台がつく器形で、やや小ぶりである。

VIII 鉢 口縁部が外反し胴部は緩やかに立ち上がって鍋形を呈するもの

IX 甔 1類 底部がなく胴部が直線的もしくはやや内傾して立ち上がるもの

2類 丸みを帯びた底部に円形の孔が1個もしくは複数あくもの

須恵器 坏・埴・蓋・瓶・甕・短頸甕・甔・鉢等の器種が出土している。

I 坏 平底で底部回転糸切り後無調整のもの **II 埴** 坏よりも深い器形 高台がつくものが多い

III 蓋 1類 天井部が丸みを帯びかえりのないもの 2類 天井部が直線的で紐がつくもの

IV 瓶 **V 甕** 胴部外面平形叩き・カキ目痕、内面当て具痕残る **VI 短頸甕** **VII 甔** **VIII 鉢**

出土土器数量表

種別	土 師 器								須 恵 器								総計			
	坏	埴	蓋	高坏	甕	小型甕	台付甕	鉢	甔	計	坏	蓋	埴	瓶	甕	短頸甕		甔	鉢	計
点数	887	4	2	24	5,044	13	3	3	45	6,025	37	8	10	15	291	16	1	1	379	6,404

②埴輪 円筒埴輪が1点出土している。

③石製品 紡錘車2点、玉類5点(勾玉1点、白玉1点、その他3点)、砥石4点、台石1点、こも編石34点、滑石碎片14点が出土している。なお、こも編石は実測していないため、次頁に一覧表を掲載した。

こも編み石一覧表

No	床高 (cm)	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	残存状況	石 材	特 徴
2-8	6	15.2	7.0	4.2	629	完 形	実質安山岩	
2-9	6.5	14.7	8.4	4.7	819	完 形	粗粒安山岩	
2-10	6	13.8	6.0	4.0	[582]	1/2	黒色片岩	
2-11	-6.5	14.7	5.6	3.8	448	完 形	ダイサイト	
2-12	-10	14.3	6.6	4.5	589	完 形	実質安山岩	
2-13	5	14.9	6.5	3.7	490	完 形	実質安山岩	
3-28	-0.5	14.8	6.0	5.8	667	完 形	粗粒安山岩	
3-29	-2	14.4	6.2	4.3	605	完 形	緑色片岩	
3-30	-2	14.3	6.8	4.1	529	完 形	実質安山岩	
3-31	-1	13.4	6.1	3.6	386	完 形	角閃石安山岩	
3-32	-2	15.3	7.3	5.0	736	完 形	砂岩	
3-33	-2	16.1	6.2	3.1	577	完 形	雲母石英片岩	
3-34	-2.5	13.4	6.5	6.0	631	完 形	実質安山岩	
3-35	5	14.5	7.4	4.6	720	完 形	実玄武岩	
3-36	-0.5	15.4	6.3	4.3	651	完 形	緑色片岩	
3-37	0	15.6	8.1	3.4	624	完 形	砥沢石	
3-38	-2.5	13.8	6.2	4.9	629	完 形	砥沢石	
3-39	-0.5	13.3	6.7	5.4	680	完 形	砥沢石	
3-40	-1.5	14.9	5.3	5.5	502	完 形	粗粒安山岩	
3-41	-2.5	14.0	7.1	4.6	605	完 形	砥沢石	
3-42	-2	14.3	8.2	4.5	[787]	ほぼ完形	実質安山岩	敲打痕あり
3-43	-2.5	13.3	6.1	4.0	558	完 形	粗粒安山岩	
3-44	-2	14.5	6.8	5.3	815	完 形	実質安山岩	
6-7	1.5	14.2	9.1	4.4	857	完 形	実玄武岩	
6-8	9.5	15.6	6.6	4.2	706	完 形	実玄武岩	
6-9	11.5	17.4	6.7	4.5	782	完 形	粗粒安山岩	
6-10	7.5	13.8	7.1	3.7	620	完 形	実質単片岩	
6-11	-2.5	18.4	8.6	5.2	1373	完 形	実玄武岩	
6-12	-3.5	16.5	9.8	6.3	1239	完 形	粗粒安山岩	
6-13	-20	17.9	8.3	4.0	768	完 形	粗粒安山岩	
6-14	-21	15.6	7.9	3.9	[900]	ほぼ完形	かんらん岩?	
6-15	-18	14.0	8.9	2.7	503	完 形	粗粒安山岩	
6-16	-5	14.7	8.8	4.8	693	完 形	ひん岩	
6-17	-17	14.3	7.5	4.8	857	完 形	粗粒安山岩	

④木製品 2号谷津状遺構を中心に多量の木製品が出土している。

(2) 竪穴住居跡

1号住居跡

位置 C24~26-V76~79Gr 重複 なし 平面形態 東西に長い隅丸長方形

規模 5.9m×4.28m 壁高 40cm 面積 20.5m² 床面積 19.6m² 主軸方位 N-9'-W

壁溝 なし 貯蔵穴 なし

柱穴 P1 長径46cm短径24cm深さ12cm P2 径30cm深さ20cm P3 長径36cm短径26cm深さ12cm

P4 長径42cm短径26cm深さ30cm

床面 ロームを少量含む黒褐色土で貼床としているが、南側を削平で、北側中央部を攪乱により壊されているため、詳細は不明である。

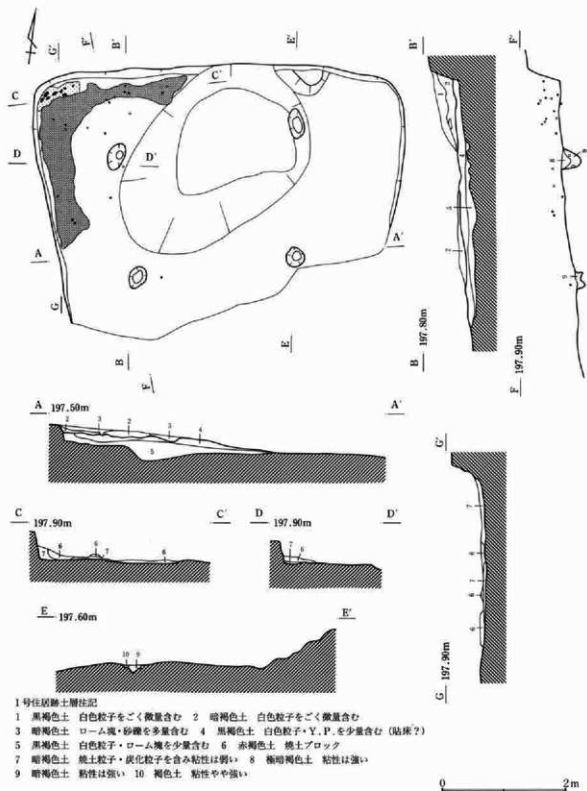
掘り方 ビットが2基あるだけで、比較的平坦な掘り方である。

遺物出土状況 削平のためあっても出土量は少なく、北西部から土師器小破片が少量出土している。

カマド 不明であるが、北壁中央の攪乱されている部分にあった可能性が高い。

出土遺物 土師器環17点、壺27点、甕1点、計45点が出土しているが、すべて小破片である。他に縄文土器57点、石器・剥片等4点が出土している。

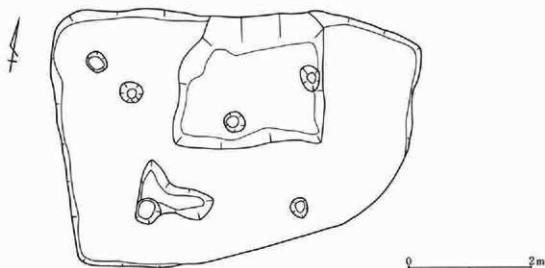
所見 出土遺物が少なく詳細な時期は不明であるが、古墳時代後期の住居と考えられる。



1号住居跡土層法記

- 1 黒褐色土 白色粒子をごく微量含む
- 2 暗褐色土 白色粒子をごく微量含む
- 3 暗褐色土 ローム塊・砂礫を多量含む
- 4 黒褐色土 白色粒子・Y, P.を少量含む(粘土?)
- 5 黒褐色土 白色粒子・ローム塊を少量含む
- 6 赤褐色土 焼土ブロック
- 7 暗褐色土 焼土粒子・炭化粒子を含み粘性は弱い
- 8 極暗褐色土 粘性は強い
- 9 暗褐色土 粘性は強い
- 10 褐色土 粘性はや強い

第35図 1号住居跡



第36図 1号住居跡掘り方

2号住居跡

位置 C27~29-V74~77Gr 重複 なし 平面形態 隅丸方形 規模 4.44m×4.24m

壁高 52cm 面積 17.7㎡ 床面積 16.4㎡ 主軸方位 N-92°-W 壁溝 なし

柱穴 なし 貯蔵穴 なし

床面 南西部は削平により壊されているが、黒褐色土で厚さ5~10cmの粘床としており、比較的堅緻な床面である。ほぼ平坦な床面であるが、南に向かってやや傾斜している。

掘り方 ビット等の掘り込みはなく、非常に平坦な掘り方であるが、床面同様南に向かって傾斜している。

遺物出土状況 ほぼ全面に散在しているが、カマド内およびその周辺に残りの良い遺物が集中している。垂直分布をみると、上部が削平されていることもあるが、覆土下層から床面付近にかけて多く出土している。接合関係が判明するものは5点あり、床面付近と覆土下層で接合しているものと、覆土下層で接合しているものがある。

カマド

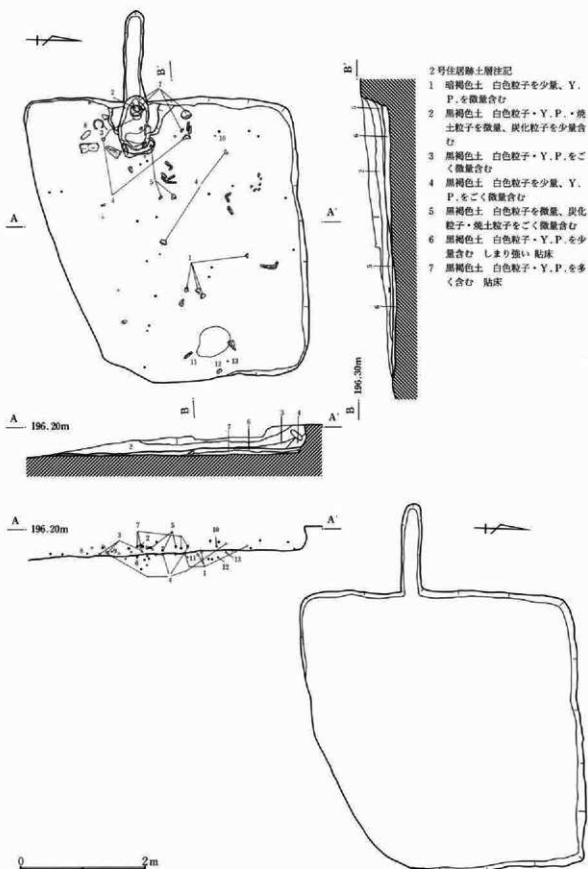
位置 西壁南寄り 主軸方位 N-93°-W 規模 全長2.36m 幅1.05m 煙道部長1.50m

構築 砂岩を袖石とし、地山泥岩を含む黄褐色粘土で袖を構築している。火床面は床面よりやや低く掘り込まれ、比較的好く焼けているが、特に袖石付近が強く焼けている。火床面前面に、天井部構築粘土が崩落したものが検出された。

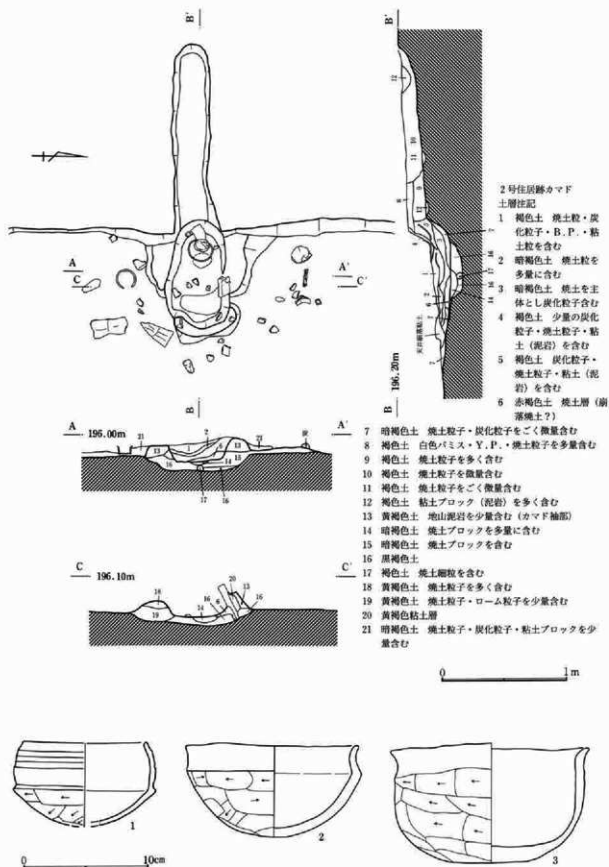
遺物出土状況 燃焼部から壺・甕の破片が出土しており、壺はカマド左脇の破片と、甕は右脇の破片と接合している。

出土遺物 土器は、土師器坏6点、壺2点、甕21点、甕2点、計31点と出土点数は少ないが、7点図示できた。石製品は、こも編石が6点出土している。他に縄文土器62点、石器・剥片等8点が出土している。

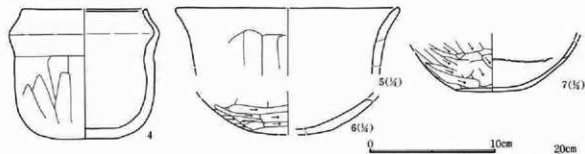
所見 出土遺物から住居の時期は6世紀後半代になると考えられる。



第37図 2号住居跡



第38図 2号住居跡カマドおよび出土遺物(1)



第39図 2号住居跡出土遺物(2)

2号住居跡出土土器観察表

No	種別 器種	床高 (cm)	法量	①口径②底径 ③高さ④残存	①色調(表) ②色調(裏) ③構成 ④胎土	調	整	分類	備考
1	土師器 杯	—5	①(10.0cm) ③(6.7cm)	②— ④口～底	①②におい楕 ③良好 ④普通 粗砂・雲母を含む	口縁部横ナデ	体～底部外面施削り内 面ナデ 口縁部に段あり	I 1	
2	土師器 杯	カマド	① 13.8cm ③ 7.2cm	②— ④ほぼ完形	①におい楕 ②黒 ③良好 ④普通 障・片岩を含む	口縁部横ナデ	体～底部外面施削り内 面ナデ後挖磨き	I 1	内面黒変
3	土師器 埴	カマド	① 15.9cm ③ 9.3cm	② 6.3cm ④ほぼ完形	①明赤帯 ②黒 ③良好 ④普通 粗砂・雲母を含む	口縁部横ナデ	体～底部外面施削り内 面施ナデ	II 1	内面一部 黒変
4	土師器 埴	—0.5	①(10.0cm) ③ 5.0cm	②— ④胴～底部	①におい楕 ②黒 ③良好 ④細 粗砂を少量含む	口縁部横ナデ	体部外面施削り内面施 ナデ後挖磨き	II 1	内面黒変
5	土師器 壺	カマド	①—	② 8.8cm ④胴～底部	①におい黄楕 ②黒 ③良好 ④細 粗砂・障を含む	胴～底部外面施削り内面ナデ		V 1	内外面一 部黒変
6	土師器 壺	カマド	①—	② 7.8cm ④口縁部片	①②楕 ③良好 ④普通 粗砂・片岩を含む	口縁部横ナデ	胴部外面施削り内面施 ナデ	V 2	
7	土師器 壺	カマド	①—	② 7.8cm ④—	①②におい楕 ③良好 ④普通 粗砂・障を少量含む	胴～底部外面施削り内面施ナデ一部 削り		V 2	外面一部 黒変

3号住居跡

位置 C30-33-V71-73Gr 重複 なし 平面形態 隅丸方形 規模 4.48m×3.74m

壁高 38cm 面積 15.9m² 床面積 14.1m² 主軸方位 N-16°-W 壁溝 なし

柱穴 住居の対角線上に4基検出されているが、南北方向の柱間(1.2m)が東西方向(2.8m)の半分以下と非常に短くなっている。P1 長径22cm短径20cm深さ28cm P2 径26cm深さ26cm

P3 長径28cm短径26cm深さ14cm P4 径26cm深さ16cm

貯蔵穴 位置 北東隅 規模 長径92cm 短径72cm 深さ48cm 形状 楕円形

床面 ロームを含む暗褐色土で貼床としており、カマド周辺から南の柱穴付近にかけての比較的大い範囲で、特に強く硬化している(図の実線の内側)。ほぼ水平で平坦な床面である。

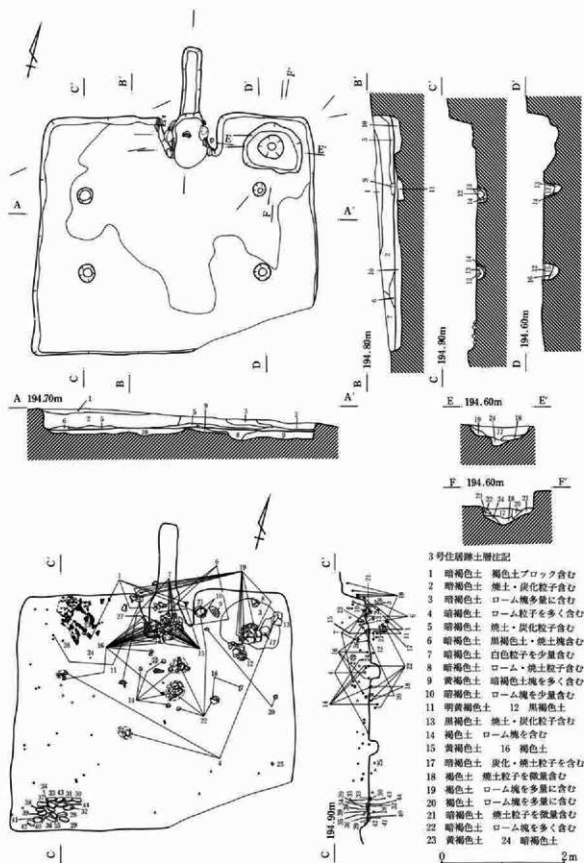
掘り方 南西部・北西部・南東部に浅い掘り込みがあり、他に径10～30cmの小ピットが数基存在している。

遺物出土状況 出土量は多く、カマド内、カマド全面、貯蔵穴に特に集中して出土している。また、こも綱石が、南東隅に集中して床面上から出土している。垂直分布をみると、床面付近から出土しているものが多いが、覆土中からも出土している。接合関係の判明するものは12点あり、床面付近で接合しているもの、床面付近と覆土中で接合しているものがある。他に、北西部から炭化材が壁から倒れた状態で出土している。

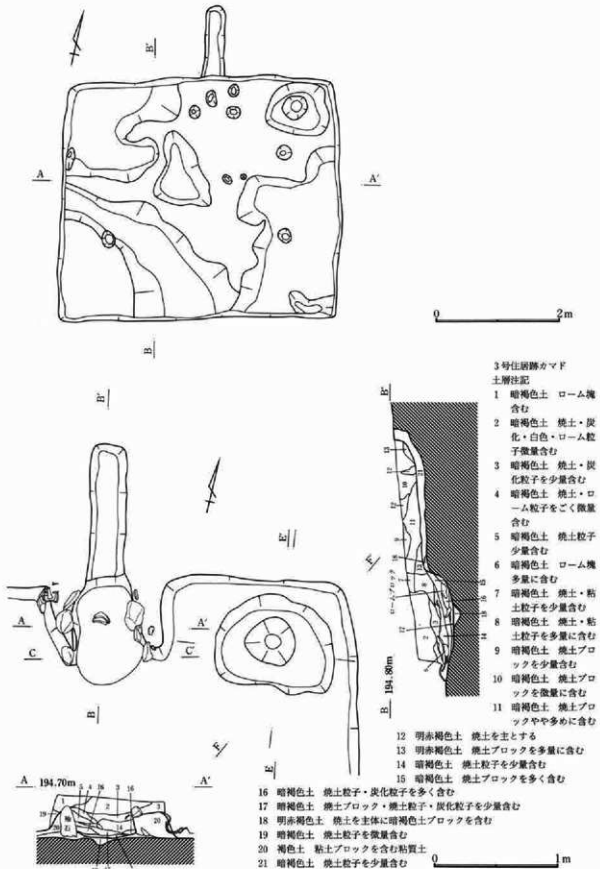
カマド

位置 北壁西寄り 主軸方位 N-16°-W 規模 全長1.89m 幅1.11m 煙道部長1.03m

構築 棒状の礫を立て並べて袖石とし、褐色粘質土で袖を構築している。火床面は床面よりもやや低く、あまり焼けていない。煙道部はごく緩やかに立ち上がっており、あまり焼けていない。



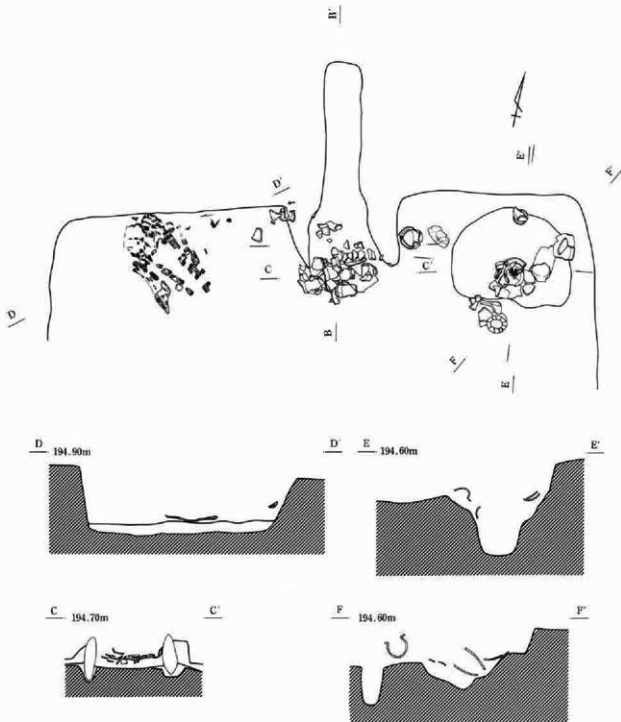
第40図 3号住居跡



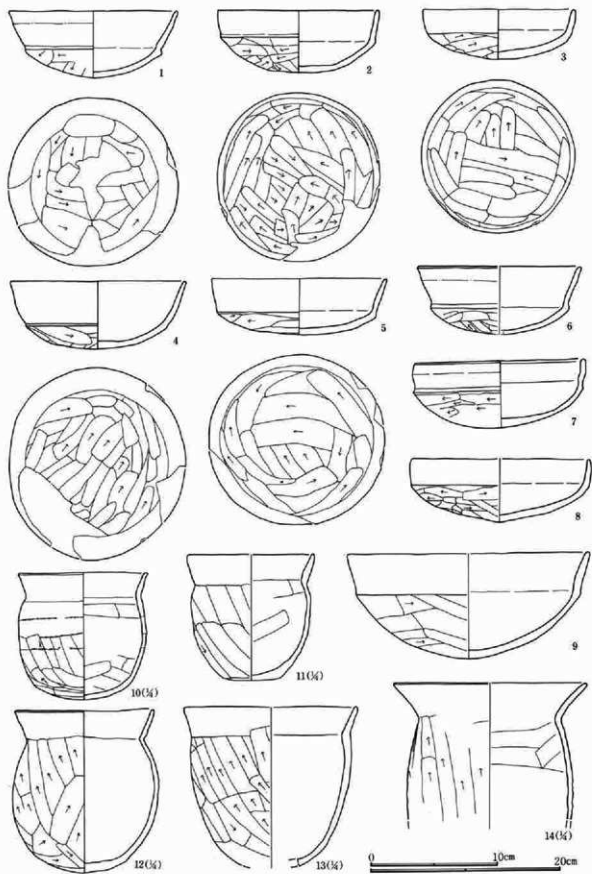
第41図 3号住居跡掘り方およびカマド

出土遺物 土器は、土師器杯66点、壺185点、小型壺4点、甌3点、計258点出土しており、石製品は、白玉1点、玉末製品1点、紡錘車1点、砥石1点、台石（多孔石転用か）1点、こも編石17点が出土している。遺棄された遺物が多いため、土器は22点図示できた。他に、縄文土器42点、石器・剥片等15点が出土している。

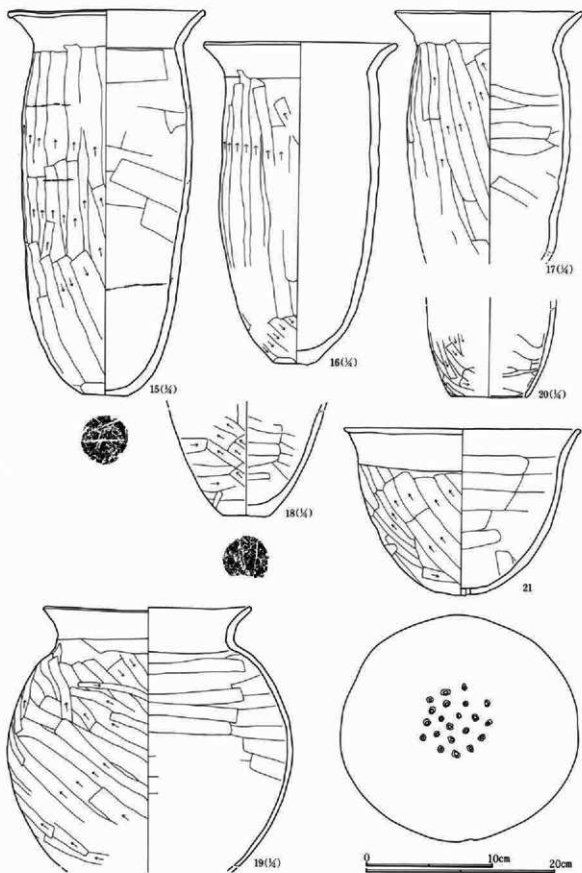
所見 出土遺物から、6世紀後半代の住居と考えられる。炭化材が出土しており、遺棄されたと考えられる遺物が多いことから、焼失住居の可能性はある。



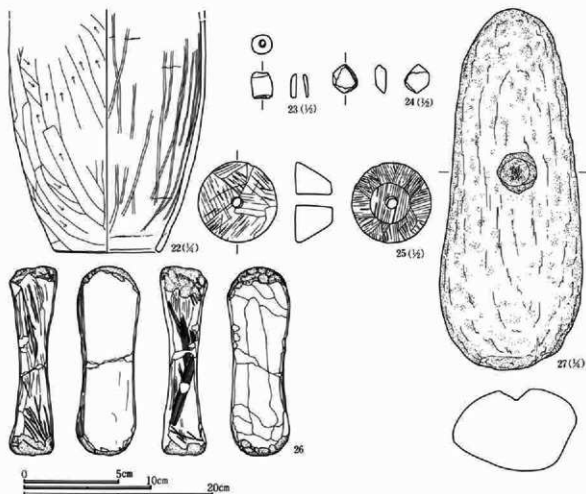
第42図 3号住居跡カマド遺物出土状況



第43図 3号住居跡出土遺物 (1)



第44号 3号住居跡出土遺物(2)



第45図 3号住居跡出土遺物(3)

3号住居跡出土土器観察表

No	種別 器種	床高 (cm)	法量	①口径②底径 ③高さ④残存	①色調(表) ②色調(裏) ③焼成 ④胎土	調	整	分類	備考
1	土師器 杯	カマド	① 13.4cm ② 5.3cm	② - ④口～底3/4	①明黄褐 ②橙 ③良好 ④普通 粗砂・礫を少量含む	口縁部横ナデ 面ナデ	体～底部外面黒雨り内	1	外面一部 黒変
2	土師器 杯	カマド 貯蔵穴	① 12.9cm ② 4.9cm	② - ④ほぼ定形	①②にぶい橙 ③良好 ④普通 粗砂・礫を少量含む	口縁部横ナデ 面ナデ	体～底部外面黒雨り内	1	外面一部 黒変
3	土師器 杯	貯蔵穴	① 12.0cm ② 3.9cm	② - ④ほぼ定形	①②橙 ③良好 ④普通 粗砂を少量含む	口縁部横ナデ 面ナデ	体～底部外面黒雨り内	1	
4	土師器 杯	-13	① 14.0cm ② 5.3cm	② - ④ほぼ定形	①②橙 ③良好 ④普通 粗砂を少量含む	口縁部横ナデ 面ナデ	体～底部外面黒雨り内	1	外面一部 黒変
5	土師器 杯	カマド	① 17.0cm ② 4.4cm	② - ④ほぼ定形	①②橙 ③良好 ④普通 粗砂を少量含む	口縁部横ナデ 面ナデ	体～底部外面黒雨り内	1	外面一部 黒変
6	土師器 杯	カマド	①(13.1cm) ②(5.4cm)	② - ④口～底1/3	①②にぶい橙 ③良好 ④普通 粗砂・片岩を少量含む	口縁部横ナデ 面ナデ	体～底部外面黒雨り内	1	外面一部 黒変
7	土師器 杯	カマド	① 13.3cm ② 5.2cm	② - ④ほぼ定形	①②にぶい橙 ③良好 ④普通 粗砂を少量含む	口縁部横ナデ 面ナデ	体～底部外面黒雨り内	1	
8	土師器 杯	貯蔵穴	①(14.1cm) ② 4.4cm	② - ④口～底1/2	①にぶい黄橙 ②灰黄褐 ③良好 ④粗 粗砂を少量含む	口縁部横ナデ 面ナデ	体～底部外面黒雨り内	1	
9	土師器 杯	4	①(19.3cm) ② 8.1cm	② - ④口～底1/3	①②橙 ③良好 ④粗 粗砂を少量含む	口縁部横ナデ 面ナデ	体～底部外面黒雨り内	1	
10	土師器 小型壺	-8	① 13.7cm ② 13.3cm	② - ④ほぼ定形	①橙 ②黒褐 ③良好 ④粗 粗砂・雲母を少量含む	口縁部横ナデ 面ナデ	胴～底部外面黒雨り内 内面黒色処理	VI	外面口縁 部黒変
11	土師器 小型壺	-13	①(13.4cm) ② 13.3cm	② 6.0cm ④口～底1/2	①にぶい橙 ②にぶい橘 ③良好 ④粗 礫・片岩を含む	口縁部横ナデ 面ナデ	胴～底部外面黒雨り内	VI	

No	種別 器種	床高 (cm)	法量 ①口径②底径 ③高さ④残存	①色調(表) ②色調(裏) ③焼成 ④胎土	調 整	分 類	備 考
12	土師器 小型甕	-5	①14.8cm ②7.8cm ③17.0cm ④ほぼ完成	①②にぶい橙 ③良好 ④粗 雜・片岩を含む	口縁部横ナデ 胴～底部外面磨り内 面磨ナデ	VI	外面一部 黒変
13	土師器 小型甕	野藏穴	①18.2cm ②- ③(17.1cm) ④口～胴1/3	①にぶい橙 ②にぶい黄橙 ③良 好 ④普通 粗砂・雜・片岩を含む	口縁部横ナデ 胴部外面磨り内面磨 ナデ	VI	
14	土師器 甕	-14	①20.4cm ②- ③- ④口～胴3/4	①②にぶい赤褐 ③良好 ④粗 雜・片岩を含む	口縁部横ナデ 胴部外面磨り内面ナ デ	V	外面一部 1 黒変
15	土師器 甕	カマド	①20.7cm ②5.0cm ③40.9cm ④口～底3/4	①②橙 ③良好 ④粗 雜・雪母・片岩を含む	口縁部横ナデ 胴部外面磨り内面ナ デ 底部外面木炭痕	V	外面一部 1 黒変
16	土師器 甕	カマド	①20.2cm ②3.5cm ③34.1cm ④口～底3/4	①橙 ②にぶい赤褐 ③良好 ④粗 雜・片岩を含む	口縁部横ナデ 胴部外面磨り内面磨 ナデ 底部外面磨り	V	外面一部 1 黒変
17	土師器 甕	野藏穴	①19.6cm ②- ③- ④口～胴3/4	①にぶい赤褐 ②にぶい黄橙 ③良好 ④粗 雜・片岩を含む	口縁部横ナデ 胴部外面磨り内面ナ デ	V	外面一部 1 黒変
18	土師器 甕	-2	①- ②- ③- ④胴～底1/4	①橙 ②にぶい橙 ③良好 ④粗 片岩・雪母を含む	胴部外面磨り内面ナデ 底部外面木 炭痕	V	1
19	土師器 野藏穴	①21.8cm ②- ③- ④口～胴部	①にぶい橙 ②黒 ③良好 ④細 粗砂を少量含む	口縁部横ナデ 胴部外面磨り内面ナ デ 内面黒色処理	V	外面一部 2 黒変	
20	土師器 甕	4.5	①- ②(8.0cm) ③- ④胴～底部片	①にぶい橙 ②にぶい褐 ③良好 ④細 粗砂を少量含む	胴部外面磨り内面磨ナデ 底部磨調 整	IX	外面一部 1 黒変
21	土師器 甕	カマド	①18.8cm ②- ③13.2cm ④ほぼ完成	①橙 ②明赤褐 ③良好 ④細 粗砂を少量含む	口縁部横ナデ 胴～底部外面磨り内 面磨ナデ 底部径2mmの孔2	IX	2
22	土師器 甕	-10	①- ②11.0cm ③- ④胴～底3/4	①にぶい橙 ②橙 ③良好 ④細 粗砂を少量含む	胴部外面磨り内面磨ナデ後縦方向磨 磨き 底部磨調整	IX	外面一部 1 黒変

3号住居跡出土石器観察表

No	器 種	床高 (cm)	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	残存状況	石 材	特 徴
23	白 玉	4	1.5	1.2	1.0	2.4	完 形	滑石	外面研磨
24	玉	1	1.5	1.3	0.6	1.8	完 形	滑石	外面一部研磨
25	粘輝石	-8.5	4.3	4.2	2.0	49	完 形	粘輝石	外面粗い研磨
26	砥 石	16	14.9	4.4	3.7	333	完 形	砥石	4面使用
27	カマド軸石	カマド	38.0	15.0	8.7	7750	完 形	緑色片岩	多孔孔組用 径3.5cmのくぼみ 敲打痕あり

4号住居跡

位置 C30～33-V76～78Gr 重複 なし 平面形態 隅丸長方形 規模 4.50m×3.32m

壁高 48cm 面積 14.7m² 床面積 12.6m² 主軸方位 N-22°-W 壁溝 なし

柱穴 住居の対角線上に4基検出されているが、柱間は3号住居と同様南北方向が狭く(1.4m)、東西方向が広く(2.9m)になっている。

P1 径24cm深さ28cm P2 長径28cm短径24cm深さ22cm P3 長径22cm短径18cm深さ10cm

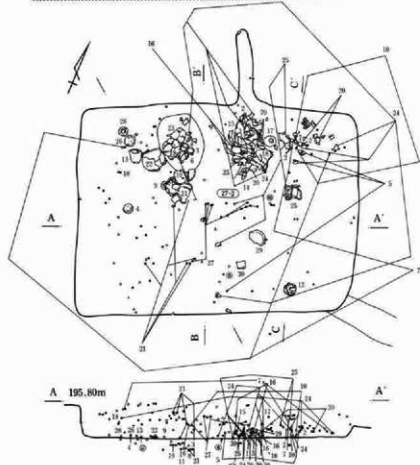
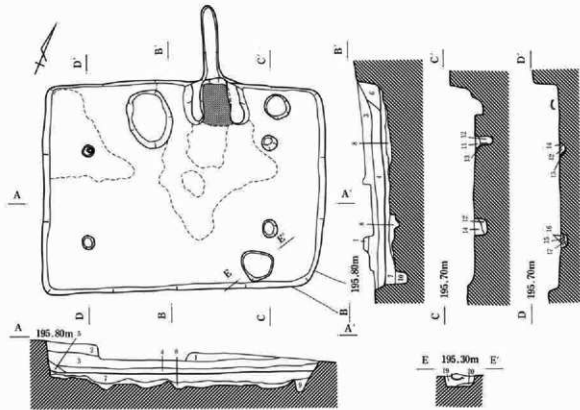
P4 径18cm深さ10cm

貯蔵穴 位置 北西部 規模 長径1.86m 短径1.42m 深さ1.65m 形状 楕円形

床面 ロームを含む暗褐色土で厚さ5～25cmの貼床としている。カマド前面が強く硬化しており、北西部も中程度に硬化している。ほぼ水平で平坦な床面である。

掘り方 中央やや南寄りに、東西に長く溝状の掘り込みがあり、北西隅にも掘り込みがある。他に長径20～40cmのピットが数基検出されている。

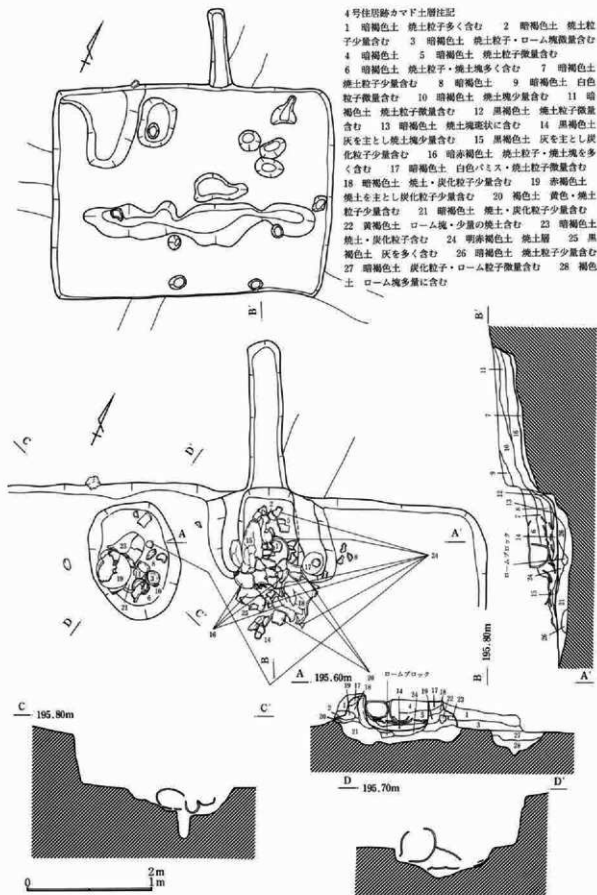
遺物出土状況 ほぼ全面から出土しているが、特にカマド内、カマド右脇、貯蔵穴、貯蔵穴周辺に残りの良い遺物が集中しており、特に貯蔵穴からは、完形に近い土器が数個体出土している。垂直分布をみると、上層から下層まで満遍なく出土しており、カマド・貯蔵穴周辺の遺物は床面付近が多いが、他は上・中層から



4号住居跡土層注記

- 1 黒褐色土 白色粒子・焼土粒子を微量、炭化粒子を少量含む
- 2 暗褐色土 白色粒子を少量、Y.P.・焼土粒子をごく微量含む
- 3 暗褐色土 白色粒子・Y.P.・焼土粒子・炭化粒子を微量含む
- 4 黒褐色土 白色粒子・Y.P.・炭化粒子をごく微量含む 粘性強い
- 5 黒褐色土 焼土粒子を多く含む
- 6 黒褐色土 炭化粒子微量含む 粘性強い
- 7 暗褐色土 白色粒子を少量含む 粘床
- 8 暗褐色土 ローム塊を多量に含む 粘床
- 9 暗褐色土 ローム粒子を微量含む
- 10 暗褐色土 白色粒子をごく微量、Y.P.を少量含む
- 11 黒褐色土 ローム粒子を微量含む
- 12 暗褐色土 ローム塊を少量含む
- 13 黄褐色土 ロームを主体に暗褐色土ブロックを多く含む
- 14 暗褐色土 白色粒子を微量含む
- 15 暗褐色土 白色粒子をごく微量含む 周囲は黒色の硬質土
- 16 暗褐色土 ローム塊・赤褐色土ブロック(鉄分沈着層)を少量含む
- 17 暗褐色土 赤褐色土ブロックを多く含む
- 18 暗褐色土 ローム塊を多量に含む
- 19 暗褐色土 白色粒子・焼土粒子微量含む
- 20 暗褐色土 ローム塊を多く含む

第46図 4号住居跡



第47図 4号住居跡掘り方およびカマド(1)

もかなり出土している。接合関係の判明するものは11点あるが、床面付近で接合しているものは少なく、床面付近と覆土上・中層の破片と接合しているものが多い特徴がある。

カマド

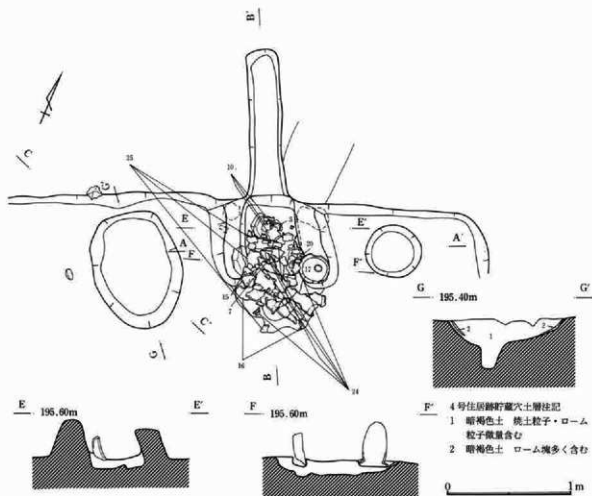
位置 北壁東寄り 主軸方位 N-27-W 規模 全長1.91m 幅96cm

構築 左袖は砂岩、右袖は土師器甕を補強材として、焼土を含む褐色土で袖を構築している。火床面は床面とほぼ同レベルで平坦であり、あまり焼けていない。煙道部はごく緩やかな傾斜で立ち上がっている。

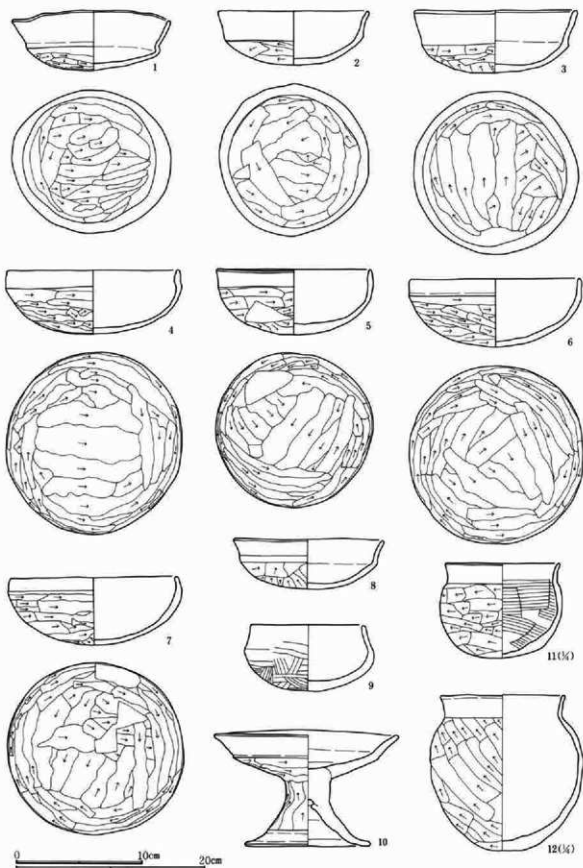
遺物出土状況 燃焼部から焼き口さらに前面にかけて、土師器甕・甕等が完形に近いものも含めて全面に重なって出土した。また袖の補強材としても土師器甕が使われている。

出土遺物 土器は、土師器坏が31点、高坏が2点、甕が149点、甕が14点、須恵器短頸壺が1点出土し、石製品は台石1点、砥石1点、滑石の破片3点が出土している。カマド・貯蔵穴に遺棄されたものが多いため残りの良い遺物が多く、28点の土器が図示できた。他に縄文土器44点、石器・刺片等28点が出土している。

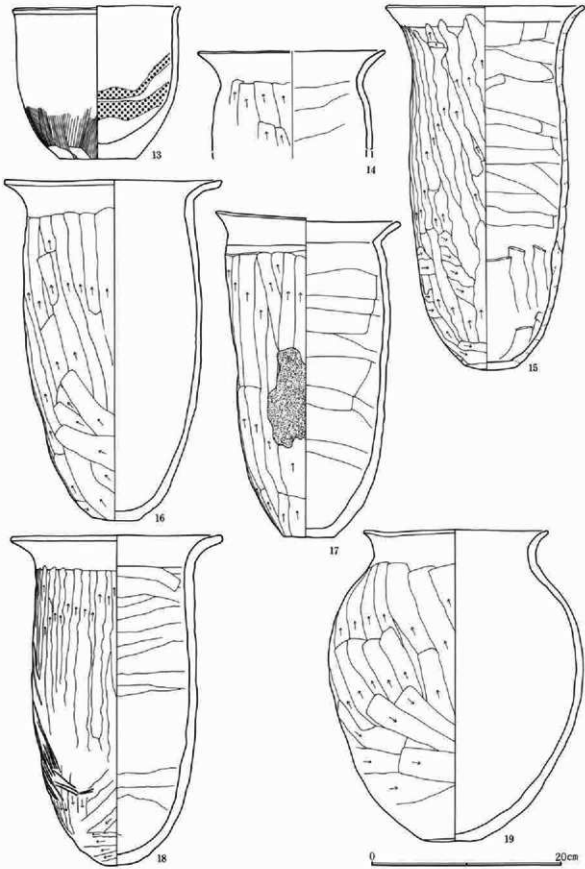
所見 出土遺物から、6世紀後半代の住居と考えられる。遺物は完形に近いものも多く、遺棄されたものである可能性が高いが、覆土上層の破片と接合しているものも多く、ほとんど床面付近で接合している3号住とは様相を異にしており、埋没状況に差があった可能性もある。



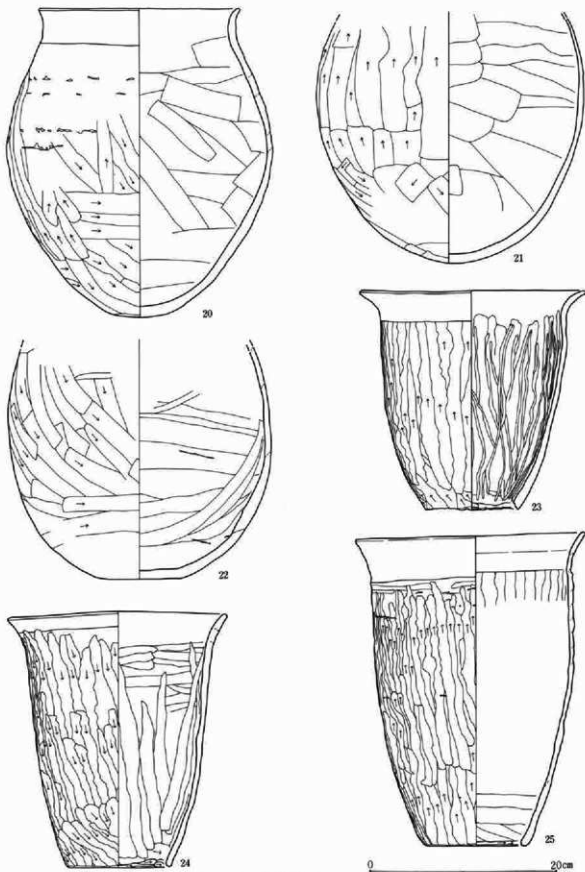
第48図 4号住居跡カマド(2)



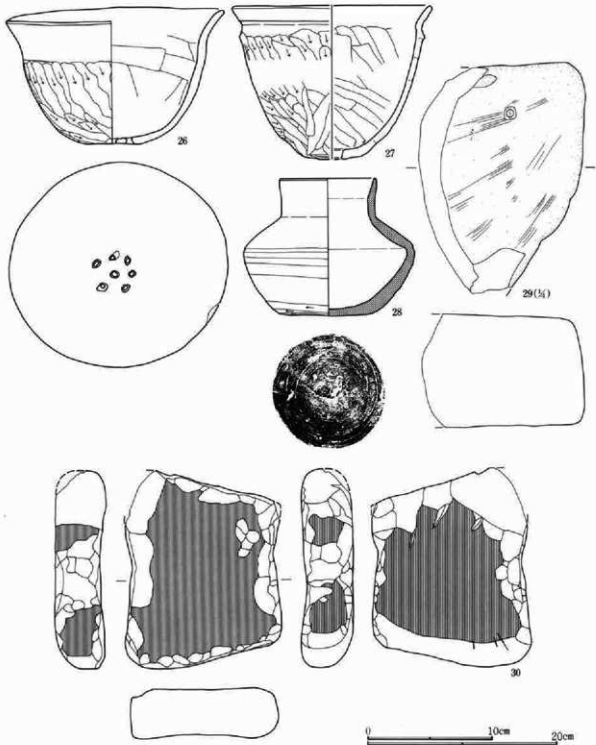
第49図 4号住居跡出土遺物(1)



第50図 4号住居跡出土遺物(2)



第51図 4号住居跡出土遺物(3)



第52図 4号住居跡出土遺物(4)

4号住居跡出土土器観察表

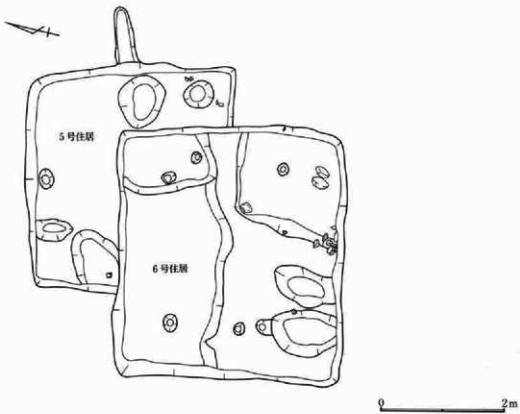
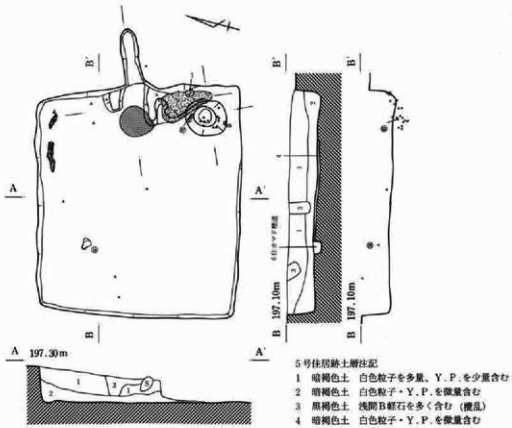
No	種別 器種	床高 (cm)	法量	①口縁②底径 ③高さ④残存	①色調(表) ②色調(裏) ③焼成 ④胎土	調 整	分 類	備 考
1	土師器 杯	カマド	① 12.4cm ③ 4.7cm	② — ④ 宛形	①②にふい粉 ③良好 ④普通 粗砂・貫母を少量含む	□縁部横ナデ 体～底部外面磨削り 内面ナデ	1 1	
2	土師器 杯	カマド	① 11.6cm ③ 4.2cm	② — ④ ほゞ宛形	①②横 ③良好 ④普通 粗砂を含む	□縁部横ナデ 体～底部外面磨削り 内面ナデ	1 1	

第10章 内匠日向周地遺跡

No	種別 器種	床高 (cm)	法量 ①口径②底径 ③高さ④残存	①色調(表) ②色調(裏) ③構成 ④胎土	調	整	分類	備考
4	土師器 貯蔵穴 環	1.5	① 12.8cm ② 4.9cm ③ ① ④ 定形	①②にぶい橙 ③良好 ④普通 粗砂・雲母を含む	口縁部横ナデ 体へ底部外面寛削り 内面ナデ		I I	
5	土師器 貯蔵穴 環	1.5	① 13.9cm ② 5.0cm ③ ① ④ 定形	①②にぶい橙 ③良好 ④普通 粗砂・雲母を含む	口縁部横ナデ 体へ底部外面寛削り 内面ナデ 口縁部一部黒炭		I I	
6	土師器 貯蔵穴 環	カマド	① 12.2cm ② 5.1cm ③ ① ④ ほぼ定形	①②にぶい橙 ③良好 ④普通 粗砂を少量含む	口縁部横ナデ 体へ底部外面寛削り 内面ナデ		I I	
7	土師器 貯蔵穴 環	カマド	① 15.0cm ② 5.3cm ③ ① ④ 定形	①②にぶい黄褐 ③良好 ④普通 粗砂を含む	口縁部横ナデ 体へ底部外面寛削り 内面ナデ 内面保付着		I I	
8	土師器 貯蔵穴 環	カマド	① 13.1cm ② 5.3cm ③ ① ④ ほぼ定形	①②にぶい橙 ③良好 ④普通 粗砂を少量含む	口縁部横ナデ 体へ底部外面寛削り 内面ナデ 内面一部保付着		I I	
9	土師器 貯蔵穴 環	カマド	① 11.8cm ② 4.0cm ③ ① ④ ほぼ定形	①②にぶい橙 ③良好 ④細 粗砂を含む	口縁部横ナデ 体へ底部外面寛削り 内面ナデ		I I	
10	土師器 貯蔵穴 環	3	① 9.5cm ② 4.2cm ③ ① ④ ほぼ定形	①②にぶい黄褐 ③良好 ④普通 粗砂・雲母・石英を含む	口縁部横ナデ 体へ底部外面寛削り 内面ナデ 内外面寛削り		I I	内外面黒 色処理
11	土師器 貯蔵穴 環	カマド	① 14.5cm ② 9.2cm ③ 9.7cm ④ ほぼ定形	①橙 ②良好 ③普通 粗砂・雲母を少量含む	口縁・脚端部横ナデ 環部内面ナデ 外面寛削り 脚部内面押さえ		IV	環部口縁 一部黒炭
12	土師器 貯蔵穴 環	カマド	① 12.1cm ② 4.5cm ③ ① ④ 定形	①②にぶい橙 ③良好 ④普通 粗砂・雲母を少量含む	口縁部横ナデ 胴へ底部外面寛削り 内面ハケム 内外面一部黒炭		VI	
13	土師器 貯蔵穴 環	カマド	① 13.3cm ② 6.0cm ③ ① ④ ほぼ定形	①②にぶい橙 ③良好 ④普通 粗砂を少量含む	口縁部横ナデ 胴へ底部外面寛削り 内面寛ナデ 外面一部黒炭		VI	
14	土師器 貯蔵穴 環	カマド	① 18.9cm ② 8.0cm ③ ① ④ ほぼ定形	①にぶい橙 ②にぶい黄褐 ③良好 ④粗 粗砂・雲母・石英を含む	口縁部横ナデ 胴部外面ハケム内面 寛ナデ 内面中位保付着		VI	
15	土師器 貯蔵穴 環	カマド	① 19.9cm ② ① ③ ① ④ 胴へ断面片	①②にぶい橙 ③良好 ④粗 砂・片岩を含む	口縁部横ナデ 胴部外面寛削り内面 ナデ		V I	
16	土師器 貯蔵穴 環	カマド	① 20.5cm ② 5.6cm ③ ① ④ ほぼ定形	①にぶい黄褐 ②にぶい黄褐 ③良好 ④粗 砂・片岩・雲母を含む	口縁部横ナデ 胴へ底部外面寛削り 内面ナデ 外面黒炭		V I	
17	土師器 貯蔵穴 環	カマド	① 23.0cm ② 4.7cm ③ ① ④ ほぼ定形	①②にぶい橙 ③良好 ④粗 砂・片岩を含む	口縁部横ナデ 胴へ底部外面寛削り 内面ナデ		V I	
18	土師器 貯蔵穴 環	カマド	① 20.0cm ② 5.2cm ③ ① ④ ほぼ定形	①②にぶい橙 ③良好 ④粗 砂・片岩を含む	口縁部横ナデ 胴部外面寛削り内面 横ナデ 胴部外面粘土付着		V I	
19	土師器 貯蔵穴 環	カマド	① 22.0cm ② ① ③ ① ④ ほぼ定形	①にぶい橙 ②にぶい黄褐 ③良好 ④粗 砂・片岩・雲母を含む	口縁部横ナデ 胴へ底部外面寛削り 内面ナデ 外面一部粘土付着		V I	外面一部 黒炭
20	土師器 貯蔵穴 環	カマド	① 19.3cm ② 6.5cm ③ ① ④ ほぼ定形	①明赤褐 ②赤褐 ③良好 ④粗 砂・片岩・チャートを含む	口縁部横ナデ 胴へ底部外面寛削り 内面ナデ		V I	
21	土師器 貯蔵穴 環	カマド	① 21.3cm ② 6.2cm ③ ① ④ ほぼ定形	①にぶい黄褐 ②褐 ③良好 ④粗 砂・片岩・チャートを含む	口縁部横ナデ 胴へ底部外面寛削り 内面ナデ 胴部一部輪痕残		V I	外面一部 黒炭
22	土師器 貯蔵穴 環	カマド	① ① ② ① ③ ① ④ 胴へ断面片	①②にぶい橙 ③良好 ④普通 粗砂・砂を少量含む	胴へ底部外面寛削り内面寛ナデ		V I	外面一部 黒炭
23	土師器 貯蔵穴 環	カマド	① ① ② ① ③ ① ④ 胴へ断面片	①黄褐 ②橙 ③良好 ④普通 粗砂・砂・片岩を少量含む	胴へ底部外面寛削り内面寛ナデ		V I	外面一部 黒炭
24	土師器 貯蔵穴 環	カマド	① 23.8cm ② 9.9cm ③ ① ④ ほぼ定形	①にぶい橙 ②にぶい黄褐 ③良好 ④普通 粗砂を少量含む	口縁部横ナデ 胴部外面寛削り内面 ナデ後縁方向寛削り端部調整		IX I	外面一部 黒炭
25	土師器 貯蔵穴 環	カマド	① 22.6cm ② 10.6cm ③ ① ④ ほぼ定形	①②にぶい橙 ③良好 ④粗 粗砂・雲母を含む	口縁部横ナデ 胴部外面寛削り内面 寛ナデ 底端部調整		IX I	
26	土師器 貯蔵穴 環	カマド	① 23.8cm ② 10.2cm ③ ① ④ ほぼ定形	①②にぶい黄褐 ③良好 ④粗 粗砂・砂・片岩を含む	口縁部横ナデ 胴部外面寛削り内面 ナデ 底端部調整		IX I	外面一部 黒炭
27	土師器 貯蔵穴 環	カマド	① 17.2cm ② 3.9cm ③ ① ④ 定形	①②にぶい橙 ③良好 ④普通 粗砂・雲母を含む	口縁部横ナデ 体へ底部外面寛削り 内面寛ナデ 底部径4mmの孔7		IX I	内外面一 部黒炭
28	土師器 貯蔵穴 環	カマド	① 16.0cm ② (4.8cm) ③ (12.0cm) ④ 胴へ断面片	①にぶい橙 ②にぶい黄褐 ③良好 ④普通 粗砂・雲母を少量含む	口縁部横ナデ 胴へ底部外面寛削り 内面寛ナデ 底部径15mmの孔1		IX I	内外面一 部黒炭
29	須恵器 短頸壺	8.5	① 7.6cm ② 6.6cm ③ ① ④ 定形	①灰白 ②還元焰 良好 ③細 粗砂を少量含む	①口調製(石) 胴部下へ底部回 転寛削り調整		VI	

4号住居跡出土石器観察表

No	器種	床高 (cm)	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	残存状況	石材	特徴
29	台石	13	24.3	17.0	12.0	10400	ほぼ定形	変文玄武岩	表面に縁状のキズあり
30	砥石	—	8	15.6	12.5	4.1	[997]	牛伏砂岩	4面使用 扇打刃、刃ならしキズあり



第53図 5号住居跡および5・6号住居跡掘り方

5号住居跡

位置 C26~28-V78~80Gr 重複 6号住居跡より新 平面形態 隅丸長方形
 規模 3.62m×3.28m 壁高 56cm 面積 11.6㎡ 床面積 10.8㎡ 主軸方位 N-109'-W
 壁溝 なし 柱穴 なし

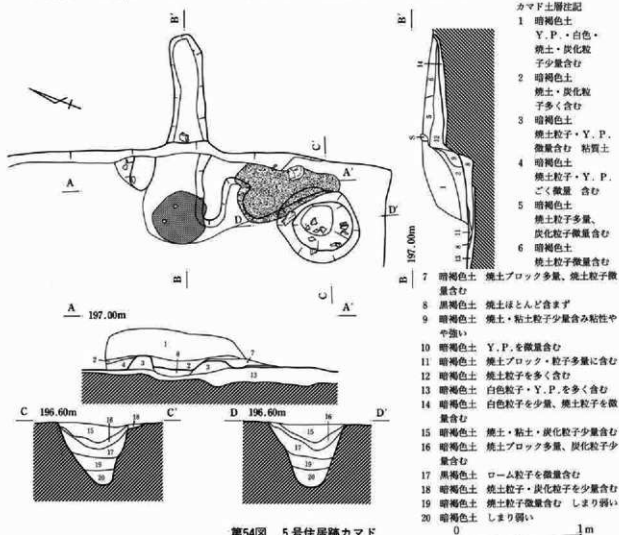
貯蔵穴 位置 南東隅 規模 長径64cm 短径56cm 深さ50cm 形状 円形

床面 暗褐色土で貼床としているが、2~3cmと非常に薄い。ほぼ平坦で、水平な床面であるが、軟弱である。
 掘り方 南西部は6号住居の覆土になるため、明確に検出できなかったが、北西部に浅い掘り込み、ピットが検出されただけである。

遺物出土状況 カマド右脇・貯蔵穴に集中しており、他の部分からはごくわずかに検出されていない。垂直分布でも、カマド・貯蔵穴付近に集中している。接合関係の判明するものはない。1の環はカマド右脇の粘土上から出土している。また、北東部から炭化材が出土している。

カマド

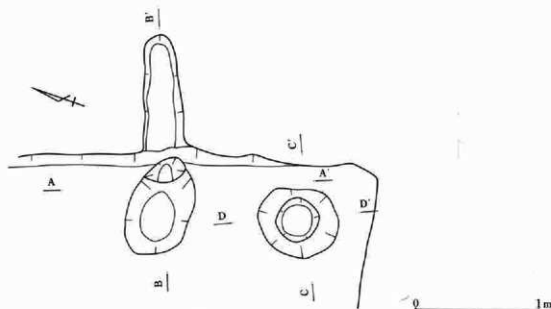
位置 東壁中央部 主軸方位 N-111'-W 規模 全長1.64m 幅98cm 煙道部長68cm
 構築 暗褐色粘質土で袖を構築しているが、袖石等は出土していない。火床面は床面とほぼ同レベルで、よく焼けており、特に焚き口部分が強く焼けている。また右脇に粘土が広範囲に検出されている。



第54図 5号住居跡カマド

出土遺物 遺物の出土量は少なく、土器は、土師器坏3点、壺26点、瓶4点が、石製品は滑石の破片が8点出土している。他に縄文土器20点、石器・剥片等が8点出土している。

所見 出土遺物が少ないため詳しい時期は不明であるが、古墳時代後期の住居と考えられる。炭化材が出土しているため、焼失住居の可能性もあるが、出土遺物が非常に少なく、遺棄された遺物もないため、家財を運び出してから火をかけた可能性が高い。



第55図 5号住居跡カマド掘り方



第56図 5号住居跡出土遺物

5号住居跡出土土器観察表

Na	種別 器種	床高 (cm)	法量	①口径②蓋径 ③高さ④残存	①色調(表) ②色調(裏) ③焼成 ④胎土	調	整	分類	備考
1	土師器 坏	9		①(16.8cm) ② - ③(5.5cm) ④口~底破片	①②橙 ③良好 ④普通 粗砂を少量含む	口縁部ナデ	体~底部外面削り内 面ナデ	I	底部外面 一部黒変

6号住居跡

位置 C27~29-V79~81Gr **重複** 5号住居跡より古 **平面形態** 正方形 **規模** 4.10m×3.54m

壁高 86cm **面積** 14.2m² **床面積** 12.3m² **主軸方位** N-13°-W **壁溝** なし

柱穴 住居の対角線上に4本検出された。P1 長径28cm短径26cm深さ28cm P2 径26cm深さ26cm

P3 長径26cm短径22cm深さ16cm P4 径20cm深さ16cm

貯蔵穴 **位置** 北東隅 **規模** 長径64cm 短径44cm 深さ16cm **形状** 楕円形

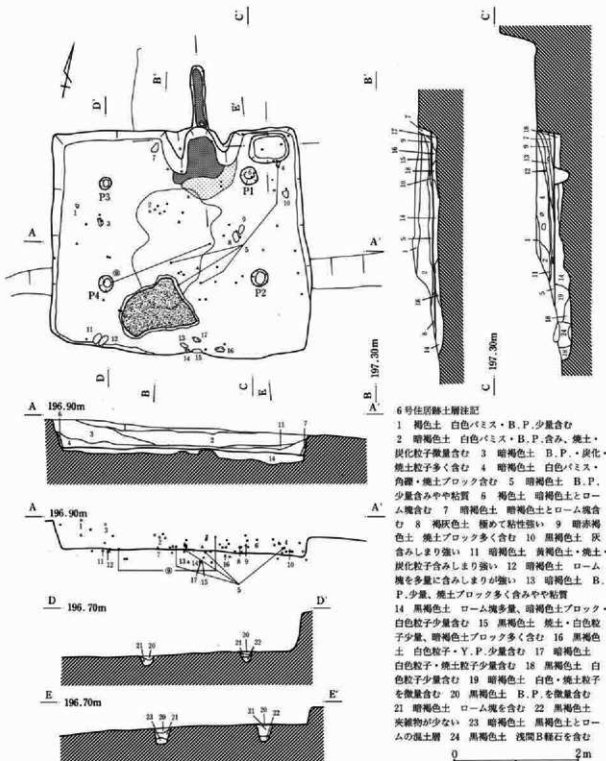
床面 ロームを含む黒褐色土で貼床としており、範囲は狭いが、住居中央部が硬化している。

掘り方 比較的規模の大きい、方形、円形の掘り込みがあり、ピットも数基検出されている。

遺物出土状況 ほぼ全面から出土しており、垂直分布でも上層から下層まで出土している。接合関係の判明するものは2点あり、床面付近と覆土中で接合している。

カマド

位置 北壁東寄り **主軸方位** N-17°-W **規模** 全長2.12m 幅1.30m 煙道部長1.02m

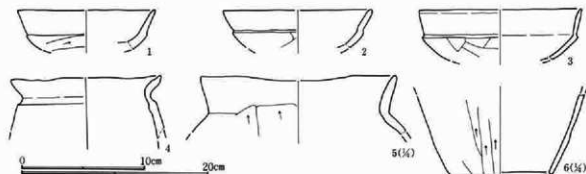
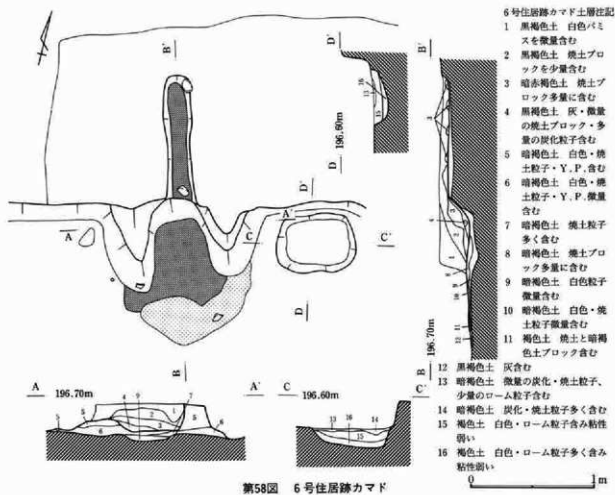


第57図 6号住居跡

構築 暗褐色土で袖を構築しているが、袖石等は出土していない。火床面は床面と同レベルで強く焼けている。煙道部はほぼ水平に延び立ち上がっており、強く焼けている。また焚き口前面に灰が多く散っている部分がある。

出土遺物 土器は、土師器坏11点、甕81点、小型甕1点、甕4点、須恵器蓋2点が出土し、石製品はこも編石が12点出土している。他に縄文土器42点、石器・剥片等が10点出土している。

所見 出土遺物から、6世紀代の住居と考えられる。



6号住居跡出土土器観察表

No	種別 器種	床高 (cm)	法量 ①口径②底径 ③高さ④残存	①色調(表) ②色調(裏) ③焼成 ④胎土	調査 調整	分類	備考
1	土師器 環	44	①(11.0cm) ② - ③ - ④口縁部片	①②におい橙 ③良好 ④普通 粗砂・菅母を含む	口縁部横ナデ 体部外面荒削り内面ナ デ	I 1	
2	土師器 環	18	①(12.0cm) ② - ③ - ④口縁部片	①②橙 ③良好 ④細 粗砂を少量含む	口縁部横ナデ 体部外面荒削り内面ナ デ	1 1	
3	土師器 環	39	①(13.0cm) ② - ③ - ④口縁部片	①におい黄橙 ②黒 ③良好 ④細 粗砂を少量含む	口縁部横ナデ 体部外面荒削り内面ナ デ	1 1	内面黒炭
4	土師器 壺	11	①(12.0cm) ② - ③ - ④口縁部片	①②橙 ③良好 ④普通 粗砂を少量含む	口縁部横ナデ 胴部外面荒削り内面ナ デ	V 1	
5	土師器 壺	-2	①(21.0cm) ② - ③ - ④口縁部1/4	①暗赤褐 ②におい赤褐 ③良好 ④普通 粗砂・菅母を少量含む	口縁部横ナデ 胴部外面荒削り内面横 ナデ	V 2	
6	土師器 甕	22	① - ②(11.0cm) ③ - ④底部片	①②におい橙 ③良好 ④普通 粗砂・菅母を含む	胴部外面荒削り内面ナデ 底部内面横 方向荒削り端部ナデ調整	IX 1	外面一部 黒炭

9号住居跡

位置 C16~18-V48~50Gr 重複 2号暗渠より古 平面形態 隅丸方形

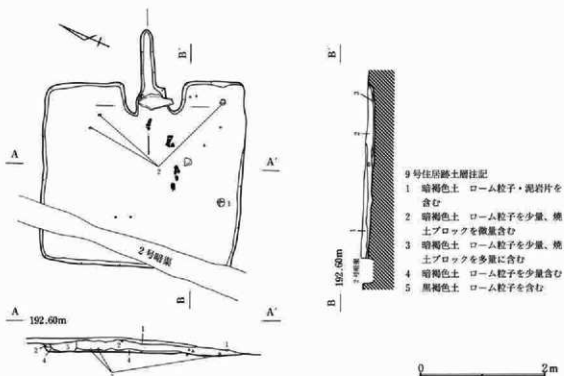
規模 3.22m×2.84m 壁高 18cm 面積 9.3㎡ 床面積 8.2㎡ 主軸方位 N-117-W

壁溝 なし 柱穴 なし 貯蔵穴 なし

床面 地山を床面としており、やや凹凸があるがほぼ水平で、軟弱な床面である。

掘り方 掘り方を床面としている。

遺物出土状況 出土量は非常に少なく、住居内に小破片が散在している。接合関係の判明するものは1点で、



第60図 9号住居跡

床面付近のものが接合している。また、カマド前から住居中央にかけて炭化材が出土している。

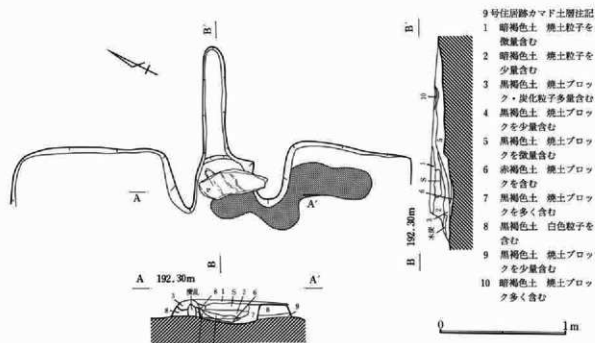
カマド

位置 北壁中央部 軸方位 N-117-W 規模 全長1.30m 幅1.06m 煙道部長0.84m

構築 黒褐色土で袖を構築しているが、袖石は出土していない。燃焼部の火床面から15cm上の位置に天井石と考えられる砂岩が出土している。火床面は床面とほぼ同レベルで、上部に焼土層が検出された。焼土はカマド右脇まで広がっている。

出土遺物 出土量は竪穴住居中で最も少なく、土器は、土師器坏4点、甕2点、計6点が出土しているだけであるが、坏2点が図示できた。他に石器・剥片等3点が出土している。

所見 出土遺物から、6世紀後半代の住居と考えられる。



第61図 9号住居跡カマド



第62図 9号住居跡出土遺物

9号住居跡出土土器観察表

No	種別 器種	床高 (cm)	法量 ①口径②底径 ③高さ④残存	①色調(表) ②色調(裏) ③焼成 ④胎土	調 整	分 類	備 考
1	土師器 坏	7	① 11.9cm ② - ③ - ④ほぼ完形	①明赤褐 ②におい黄褐 ③良好 ④普通 粗砂・礫を少量含む	口縁部横ナゲ 体～底部外面寛削り内 面ナゲ 口・体部間に粘附沈線	I	
2	土師器 坏	2.5	①(11.5cm) ② - ③(3.6cm) ④口～底1/4	①におい橙 ②橙 ③良好 ④普通 礫・片岩を少量含む	口縁部横ナゲ 体～底部外面寛削り内 面ナゲ 口・体部間に粘附沈線	I	

(3) 溝状遺構

奈良時代と考えられる溝状遺構が1条検出されている。他に水田に伴うあるいは近似した時期の溝が検出されているが、後述する。

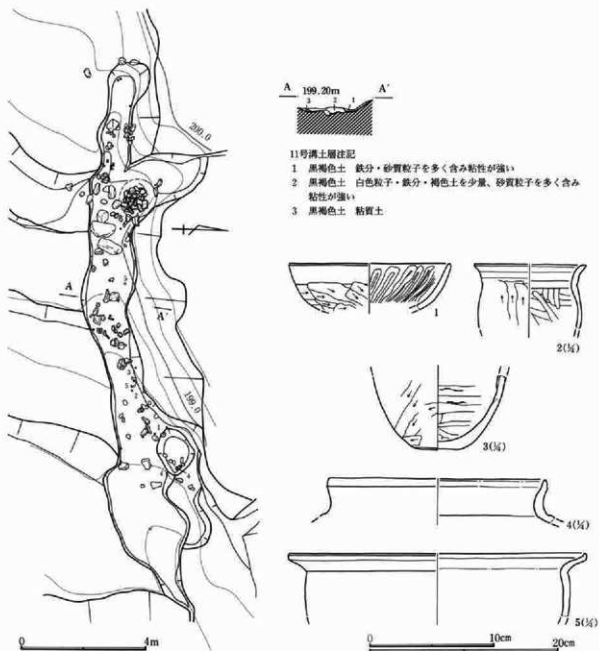
11号溝

位置 C39~41-IV11~20Gr 重複 浅間B軽石下水田より古

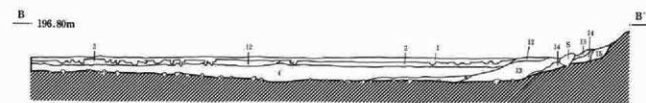
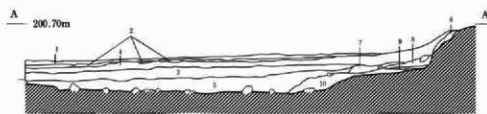
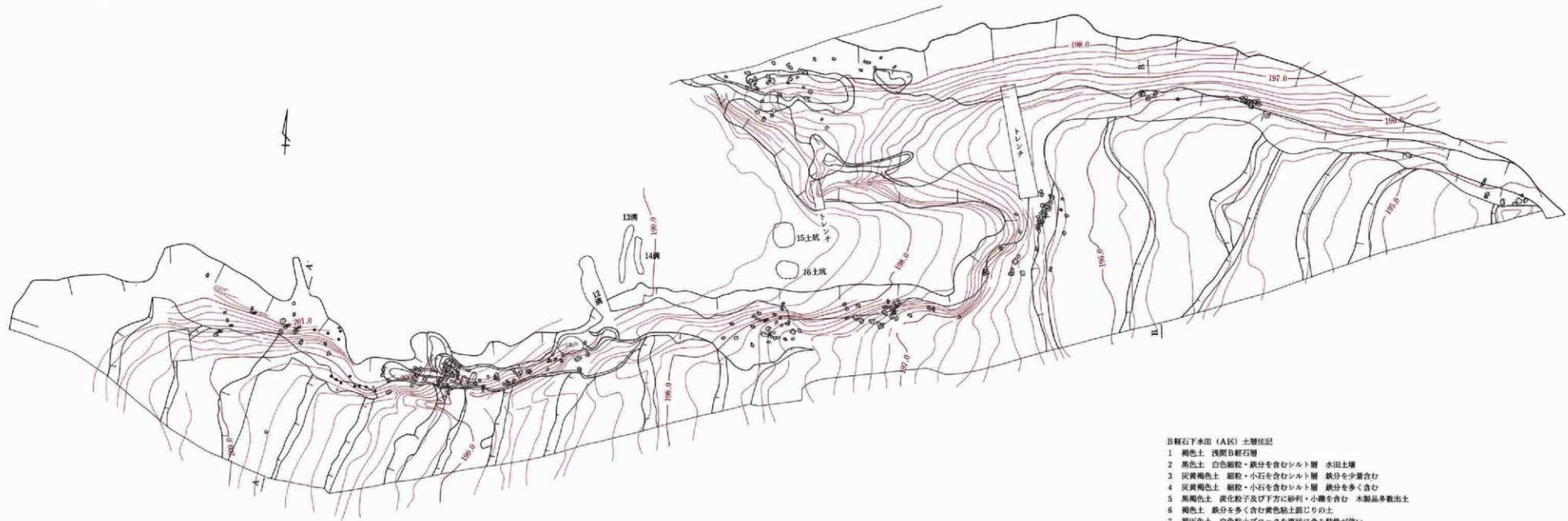
規模 長さ17.36m 幅0.8~3.04m 深さ 40cm 走向 N-81°-E

概要 調査区東側の谷状遺構縁辺部から検出された。B下水田とは覆土による新旧関係は不明であるが、出土遺物から溝が古くなると考えられる。

出土遺物 土師器坏24点、埴89点、甗1点、須恵器甕3点が出土している。



第63図 11号溝および出土遺物

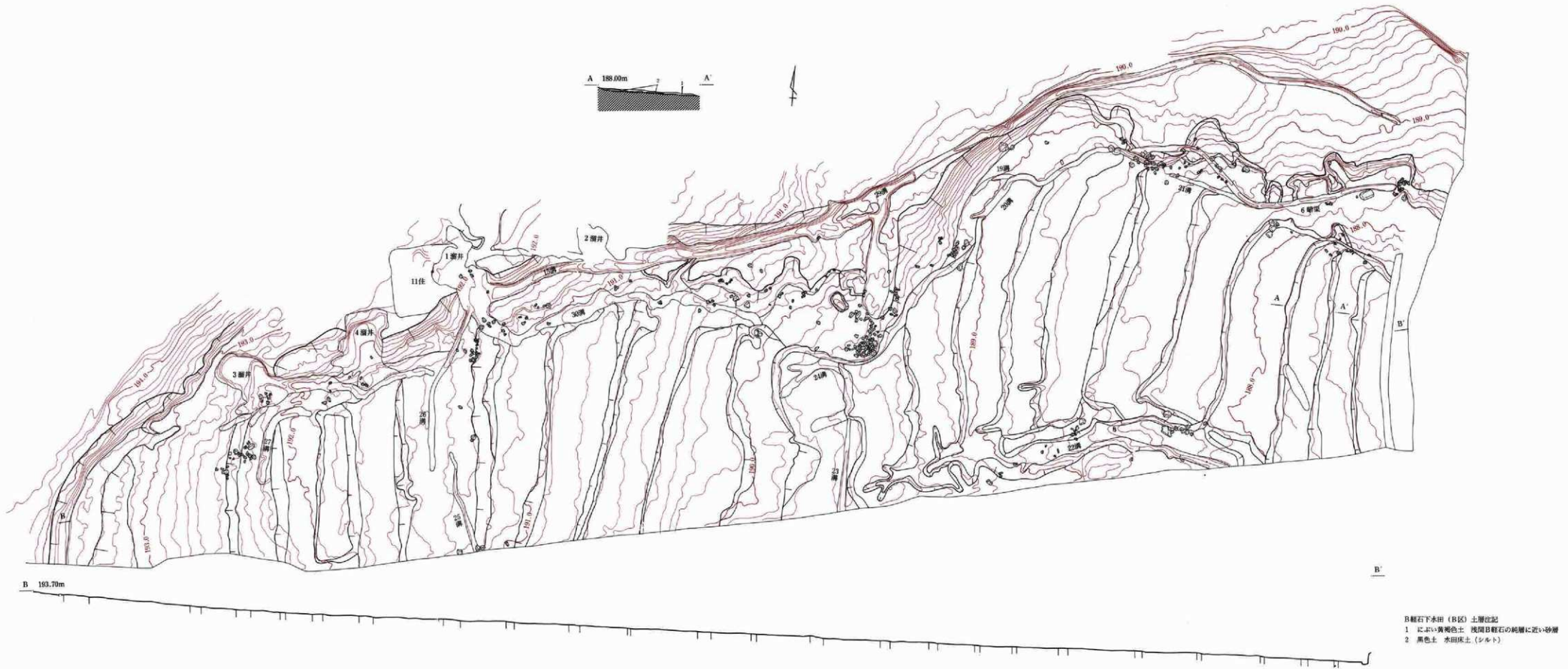


(セクションは1/100)

- B軽石下水田 (A区) 土層注記
- 1 褐色土 浅層B軽石層
 - 2 黒色土 白色細粒・鉄分を含むシルト層 水田土層
 - 3 灰黄褐色土 細粒・小石を含むシルト層 鉄分を少量含む
 - 4 灰黄褐色土 細粒・小石を含むシルト層 鉄分を多く含む
 - 5 黒褐色土 炭化粒子及び下方に砂粒・小礫を含む 木製品多数出土
 - 6 褐色土 鉄分を多く含む黄色粘土混じりの土
 - 7 褐色土 白色粘土ブロックを塊状に含む粘性が強い
 - 8 灰黄褐色土 鉄分・粘質土を含む砂質土
 - 9 黒色土 白色細粒・鉄分を含むシルト層
 - 10 によい黄褐色土 鉄分を含む砂質土
 - 11 黒褐色土 細粒・小石を含むシルト層 鉄分を少量、炭化粒子を多く含む
 - 12 褐色土 白色粘土・鉄分を含む粘質土
 - 13 灰黄褐色土 砂粒・小礫・少量の鉄分を含む粘質土
 - 14 灰黄褐色土 砂粒・多量の細礫・少量の鉄分を含む
 - 15 灰黄褐色土 多量の白色粒子・によい黄褐色粘土を含む粘質土

第64図 浅間B軽石下水田 (1)





第65図 浅間B軽石下水田(2)

11号清出土土器観察表

No	種別 器種	法量 ①口径②底径 ③高さ④残存	①色調(表) ②色調(裏) ③焼成 ④胎土	調 整	分類	備 考
1	土師器 坏	①(12.6cm) ② - ③ - ④口～体1/4	①にぶい橙 ②橙 ③良好 ④普通 粗砂を少量含む	口縁部横ナデ 体～底部外面削り内面ナ デ後笠状(?)破文	I 2	外面一部 黒変
2	土師器 壺	①(12.0cm) ② - ③ - ④口～胴部片	①②にぶい黄橙 ③良好 ④普通 粗砂・雲母を含む	口縁部横ナデ 胴部外面削り内面ナデ	V	外面一部 黒変
3	土師器 壺	① - ② 5.4cm ③ - ④胴～底部	①②にぶい黄橙 ③良好 ④粗 磯・片岩を含む	胴～底部外面削り内面ナデ	V 1	
4	土師器 壺	①(23.0cm) ② - ③ - ④口縁部片	①②にぶい黄橙 ③良好 ④普通 粗砂を少量含む	口縁部横ナデ	V 2	
5	土師器 鉢	①(31.7cm) ② - ③ - ④口縁部片	①②明黄地 ③良好 ④普通 粗砂を少量含む	口縁部横ナデ 胴部外面削り内面ナデ	VII	

(4) 水田等

浅間B軽石下水田

位置 C33～45-V82-VI32Gr (A区) C15～33-V20～69Gr (B区) C13～24-IV90～V4Gr (C区)

重複 2号谷津状遺構より新、中世水田より古、その他多数の遺構と重複。

規模 長さ [103.0m] (A区) [99.2m] (B区) [29.6m] (C区)

幅 [7.8～15.4m] (A区) [10.4]～23.2m (B区) [19.8m] (C区)

深さ 1.15m (A区) 0.90m (B区) 1.20m (C区)

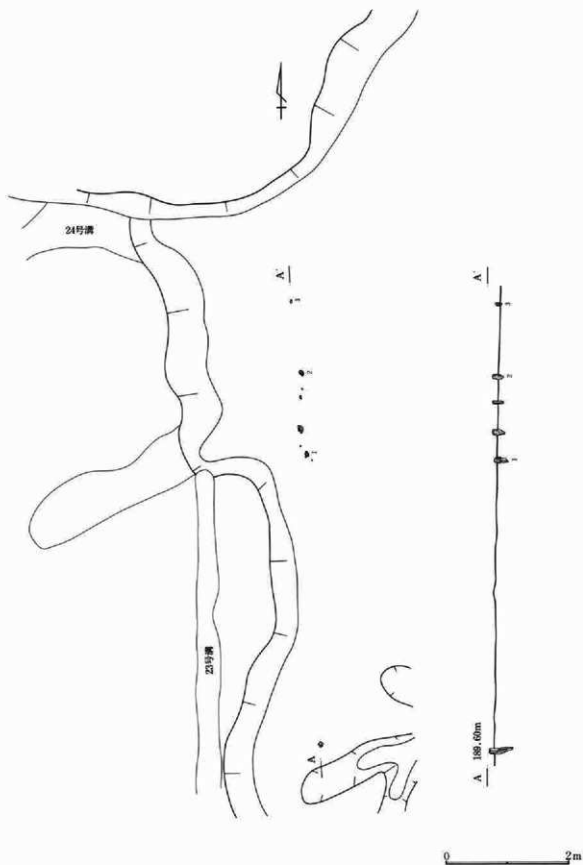
概要 調査区南側に東西に長く存在しているが、中央部で一旦切れ、さらに東へ続き、東の調査区外へ続くと考えられる(東側にある池の部分は壊されているため、中央から西側をA区、中央から池までをB区、池の東をC区とする)。下層には2号谷津状遺構がほぼ同位置で存在しており、谷津の埋没土の上に水田が作られている。上部は浅間B軽石で覆われているため、火山灰の堆積により廃棄されたと考えられる。

水田は、A区17枚、B区23枚、C区2枚、計42枚検出されている。いずれも南北に細長くなっており、東西長はA区が2.0～9.1m平均4.2m、B区が2.4～7.2m平均3.9m、C区が10.8～13.2mとなっている。C区は調査区が狭く水田も2枚しか検出されていないためはっきりと言えないが、A・B区が4m前後であるのに対し、C区は10m以上と比較的長くなっている。ほとんどの水田が南側の調査区外に続いているため南北長は不明なものが多いが、B区東側の7枚は南端まで検出されていると考えられ、長さは15.0～21.1m平均18.0mとなっている。

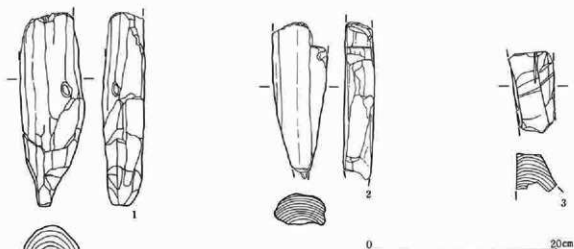
標高は西から東に向かって低くなっており、水田は階段状に作られている。西端部から東端部の標高差は15.1mある。畦状の高まりはほとんど検出されていないが、各水田の東端部にわずかな高まりがあった可能性はある。

水田櫛列

B区中央やや東寄りのC23～27-V39Grから、杭が南北方向に直線的に並んで検出された。杭は計6本出土しているが、各杭間の距離は北から1.15m、0.40m、0.45m、0.45m、4.60mとなっており、2本目から5本目の間はほぼ等距離であるが、5・6本目の間は非常に離れている。



第66図 浅間B 軽石下水道田槽列



第67図 浅間B軽石下水田柵列出土遺物

浅間B軽石下水田柵列出土木器観察表

No	器種	出土位置	法量(cm)		残存状況	木取り	加工形状の特徴
			長さ×	幅×厚さ			
1	杭	C25V39	[8.4]×	4.6×3.8	先端部残存	分割材	丸木を半載した材を使用し先端部を削って尖らせている
2	杭	C25V39	[16.5]×	5.5×3.2	一部残存	分割材	分割材を用い先端部を削って尖らせている
5	杭	C24V39	[20.5]×	6.5×4.0	一部残存	分割材	杭の先端部付近が残ったものか、断面多角形で各面は平坦である

溜井

湧水を溜めて使用したと考えられる溜井が4基検出されている。時期の判明する遺物の出土しているものは少ないが、浅間B軽石下水田と近い時期になると考えられる。

1号溜井

位置 C21～24-V55～57Gr 重複 11号住居跡より新 規模 長さ [6.96m] 幅5.36m

深さ 1.28m 主軸方位 N-26'-W

備考 11号住の下を挟っており、2・3の土器は11号住のものと考えられる。

2号溜井

位置 C20～22-V50～54Gr 重複 15号溝と重複 規模 長さ [7.64m] 幅3.28m

主軸方位 N-89'-W 備考 礫が多数出土

3号溜井

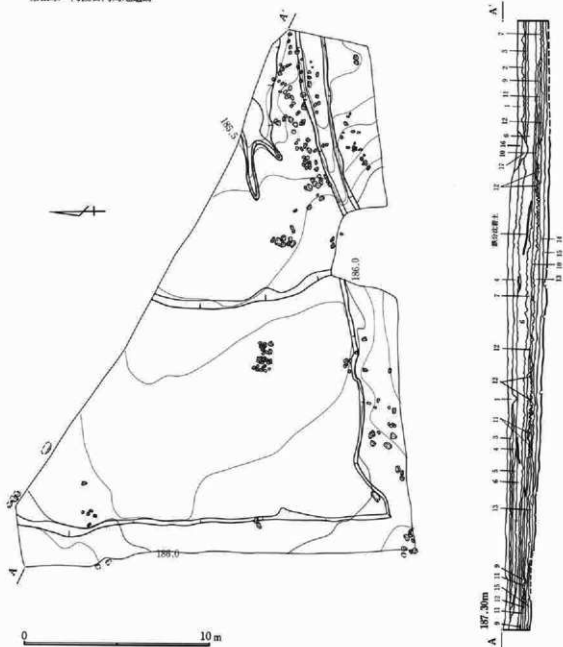
位置 C25～27-V61～64Gr 重複 28号溝と重複 規模 長さ [5.60m] 幅4.24m

深さ 1.08m 主軸方位 N-74'-W

4号溜井

位置 C23～26-V57～60Gr 重複 28号溝と重複 規模 長さ [5.96m] 幅3.80m

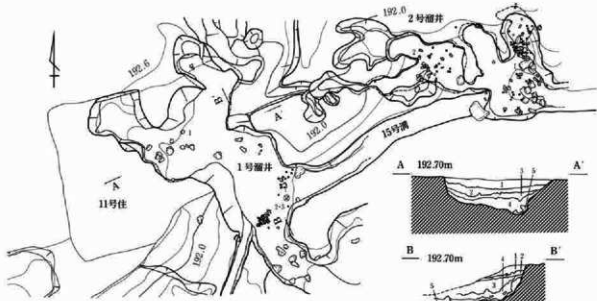
深さ 1.08m 主軸方位 N-19'-W



B軽石下水田（C区）土層注記

- 1 褐色土 浅間A軽石含む 耕作土
- 2 褐色土 浅間A軽石含む 田耕作土
- 3 明褐色土 黄褐色細砂粒・白色細砂粒・白色バミス・鉄分を含みしる
- 4 明褐色土 黄褐色細砂粒・白色細砂粒・白色バミスを含む 上面に鉄分沈着層
- 5 暗褐色土 白色バミス・黄褐色バミスを多く含む鉄分沈着層
- 6 暗褐色土 白色バミス・黄褐色バミスを多く含む 鉄分沈着多い
- 7 極暗褐色土 浅間B軽石を多量に含み、鉄分を含む
- 8 極暗褐色土 浅間B軽石を多量に含み、鉄分を少量含む
- 9 黒褐色土 浅間B軽石を多量に含む 10 黒褐色土 浅間B軽石・黒色土ブロックを含む
- 11 明褐色土 浅間B軽石をほぼ純層に近く含む 12 黒色土 夾雑物の少ないシルト層（水田面）
- 13 灰褐色土 シルト層 鉄分わずかに沈着 14 灰褐色土 シルト層 15 灰褐色土 植物・木器を含む
- 16 浅間A軽石を含む地境溝埋土 17 浅間A軽石と水田土の混土

第68図 浅間B軽石下水田（3）

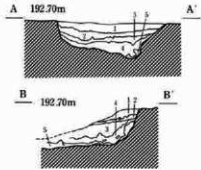


1号掘井土層注記

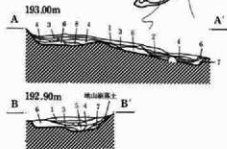
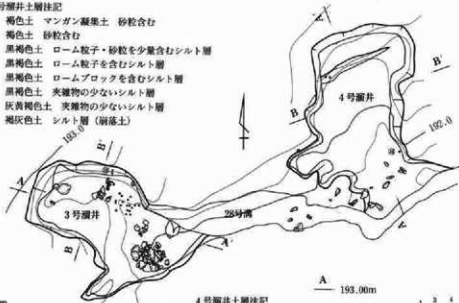
- 1 黒褐色土 二次堆積の浅間山粗石を含む砂質土
- 2 黒褐色土 ローム粒子・土薄片を含みしる
- 3 暗褐色土 ローム粒子を微量含みやや粘性でしまりは強い
- 4 暗褐色土 夾雑物は少なく粘性あり
- 5 褐色土 地山ロームへの移行層

3号掘井土層注記

- 1 褐色土 マンガン凝集土 砂粒含む
- 2 褐色土 砂粒含む
- 3 黒褐色土 ローム粒子・砂粒を少量含むシルト層
- 4 黒褐色土 ローム粒子を含むシルト層
- 5 黒褐色土 ロームブロックを含むシルト層
- 6 黒褐色土 夾雑物の少ないシルト層
- 7 灰黄褐色土 夾雑物の少ないシルト層
- 8 褐灰色土 シルト層 (崩落土)

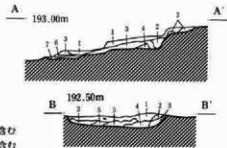


0 4m



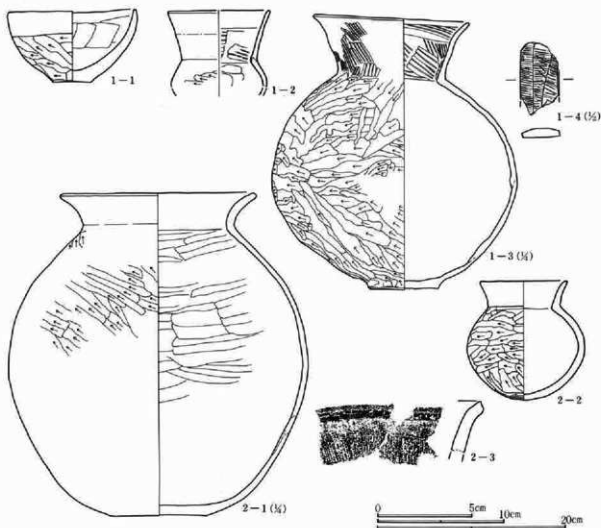
4号掘井土層注記

- 1 暗褐色土 白色石粒・ローム粒子を含む
- 2 暗褐色土 白色石粒を含む
- 3 暗褐色土 白色石粒・ローム粒子を多く含む
- 4 暗褐色土 白色石粒を含む
- 5 暗褐色土 ローム塊を含む
- 6 赤褐色土 マンガン凝集土
- 7 褐灰色土 シルト層



0 4m

第69図 1～4号掘井



第70図 1・2号溜井出土遺物

1・2号溜井出土土器観察表

No	種別 器種	法量 ①口径②底径 ③高さ④残存	①色調(表) ②色調(裏) ③焼成 ④胎土	調 整	分 類	備 考
1	土 師 器 1 碗	① 10.1cm ② 3.1cm ③ 5.6cm ④ほぼ完形	①にぶい黄橙 ②黒褐 ③良好 ④普通 粗砂・礫・雲母を含む	口縁部横ナゲ 体~底部外面ナゲ内面荒 ナゲ	II	内外面一 部黒変
2	古式土師器 2 壇	①(8.0cm) ② - ③ - ④口縁部片	①②橙 ③良好 ④普通 粗砂・礫を少量含む	口縁部横ナゲ内面一部ハケメ 胴部外面 荒削り内面ナゲ	VI	胴部内外 面黒変
3	古式土師器 3 甕	① 16.7cm ② 7.1cm ③ 28.5cm ④ほぼ完形	①にぶい橙 ②浅黄橙 ③良好 ④普通 粗砂・礫・雲母を少量含む	口縁部横ナゲ後ハケメ 胴~底部外面荒 削り内面荒削りハケメ	V	外面一部 黒変
1	土 師 器 1 罍	①(20.1cm) ②(10.0cm) ③(34.2cm) ④口~底3/4	①②にぶい黄橙 ③良好 ④普通 細砂を少量含む	口縁部横ナゲ 胴~底部外面荒削り内面 荒ナゲ 外面一部黒変	V	外面一部 2 黒変
2	土 師 器 2 小型 甕	① 6.9cm ② - ③ 9.3cm ④ほぼ完形	①②にぶい橙 ③良好 ④普通 粗砂・礫・雲母を少量含む	口縁部横ナゲ 胴~底部外面荒削り内面 荒ナゲ	VI	外面一部 黒変
2	内陶輪軸 器	厚9~11mm ④口縁部片	①②にぶい橙 ③良好 ④普通 粗砂・礫を含む	外面荒ハケ 内面ナゲか		

1号溜井出土土器観察表

No	器 種	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	残存状況	石 材	特 徴
1-4	石製模造品	(4.9)	2.1	0.5	(5.7)	2/3	蛇紋岩	削か、表面粗い研磨

溝

水田に伴うあるいはきわめて近似した時期の溝が検出されている。いずれもB区の水田部分から検出されており、排水路等の機能を有していたと考えられる。

溝は計10条検出されており、走向が東西方向のものが7条、南北方向のものが3条となっている。19・20・21・24～27の7条は、浅間B軽石で埋設しているため水田と同時期と考えられ、他の3条も位置から水田に伴う可能性が高い。また、26・28・30号溝は溜井と重複しているが、同時存在も考えられるため、溜井と同時期の可能性もある。いずれの溝からも遺物は出土していない。

溝状遺構一覧表

No	位 置 (Gr)	重 複	長 さ (m)	幅 (m)	深 さ (cm)	走 向	備 考
19	C17・18-V35・36	20号溝と重複	[3.48]	0.12～0.36	4	N-60°-E	浅間B軽石で埋設
20	C16-18-V31-36	19号溝と重複	[12.10]	0.32～0.56	8	N-61°-E	浅間B軽石で埋設
21	C15・16-V26-29	6号溝より古	[7.24]	0.24～0.32	4	N-76°-W	浅間B軽石で埋設
22	C24-27-V25-35	なし	[7.12]	0.24～0.36	40	N-46°-E	
24	C21-25-V38-43	なし	[12.20]	0.48～1.68	11	N-46°-E	浅間B軽石で埋設
25	C28-32-V53-55	なし	[7.60]	0.16～0.36	16	N-20°-W	浅間B軽石で埋設
26	C23-29-V54-56	1溜井と重複	[12.04]	0.24～0.36	4	N-8°-E	浅間B軽石で埋設
27	C27-30-V60-62	なし	[6.52]	0.44～0.72	15	N-30°-E	浅間B軽石で埋設
28	C25・26-V56-60	3溜井と重複	[8.40]	0.32～1.08	10	N-78°-E	
30	C22-25-V44-53	1溜井と重複	[18.04]	0.32～1.32	5	N-81°-E	

(5) 井戸

1号井戸

位置 C40・41-V17・18Gr 重複 なし 平面形態 円形

規模 上端径 1.25×1.12m 底径 0.85×0.82m 深さ 1.72m 主軸方位 N-70°-W

概要 円形の掘り方であるが、南東部に95×80cmの溝状の掘り込みが存在する。底部には凹凸があり、立ち上がりはやや上に開いている。途中に弱い段が存在している。

出土遺物 覆土中から多数の礫が出土しているが、特に上層に長径10～25cmの礫が集中しており、下層からは長径50cmの礫が2点出土している。土器は出土しておらず、銅片が1点出土している。

(6) 集石遺構

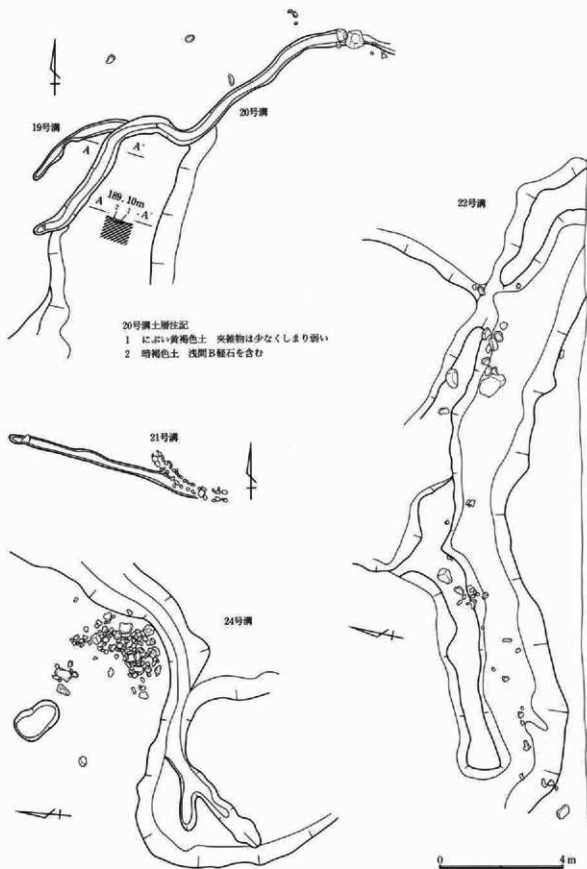
3号集石

位置 C28-30-V62-64Gr 重複 なし 規模 4.08m×2.92m 深さ 68cm

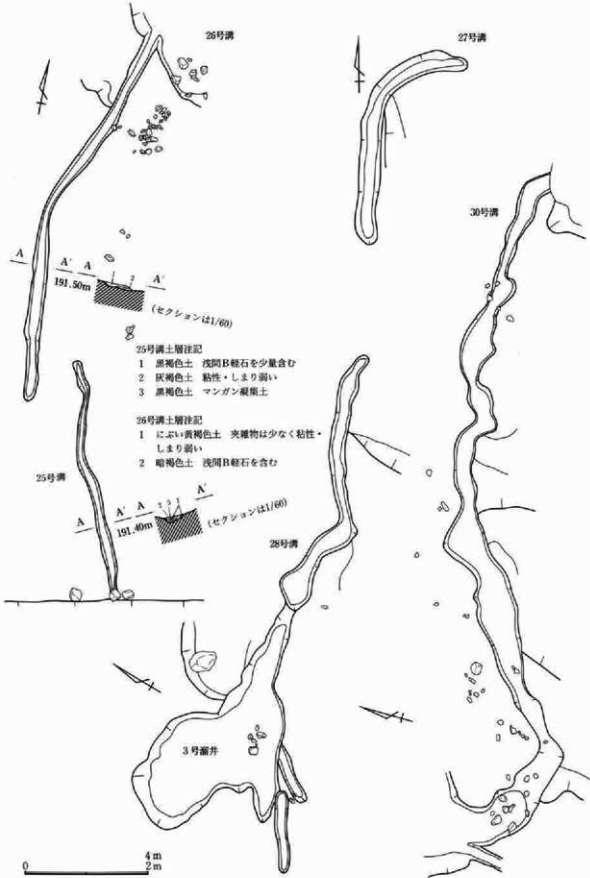
主軸方位 N-89°-W

概要 長径20～60cmの礫が2～3層重なって検出された。礫の間からは土師器・須恵器の破片も多数出土しており、接合関係の判明しているものも5点ある。

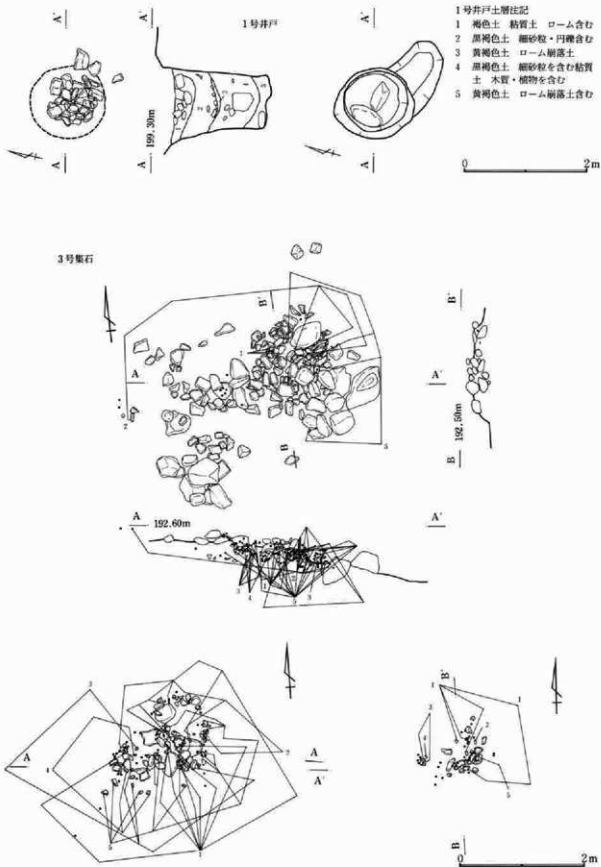
出土遺物 土器は、土師器壺242点、須恵器壺91点、短頸壺13点、計346点出土している。土師器杯・須恵器杯等の器種が出土していない特徴がある。他に礫が多数出土している。



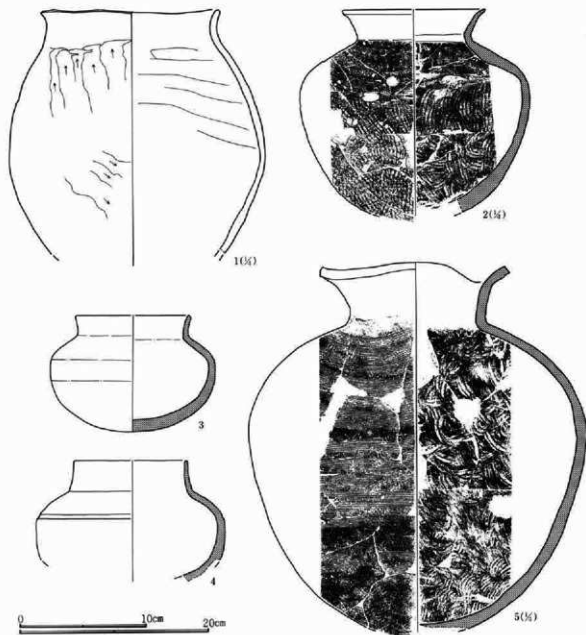
第71図 19～22・24号溝



第72図 25～28・30号溝



第73図 1号井戸および3号集石



第74図 3号集石出土遺物

3号集石出土土器観察表

No	種別 器種	流量 ①口径②底径 ③高さ④残存	①色調(表) ②色調(裏) ③焼成 ④胎土	調 整	分類	備 考
1	土師器 壺	① 18.8cm ② - ③ - ④口～胴3/4	①②橙 ③良好 ④普通 粗砂・糠・雲母・片岩含む	口縁部横ナゲ 胴部外面寛削り内面残ナゲ	V	外面一部 2 黒灰
2	須恵器 壺	①(15.2cm) ② - ③ - ④口～胴1/3	①②灰白 ③還元焰 良好 ④細 細砂を少量含む	口縁部横ナゲ 胴部外面格子状印き内面青 海波文当て具痕	V	
3	須恵器 短頸壺	①(9.0cm) ② - ③(9.1cm) ④口～底1/3	①灰白 ②灰 ③還元焰 良好 ④細 細砂を少量含む	口縁部調整(右) 底部回転削削り 外面に 一部自然輪付着	VI	
4	須恵器 短頸壺	①(8.8cm) ② - ③ - ④口～胴1/3	①灰白 ②灰黄 ③還元焰 良好 ④細 細砂・粗砂を少量含む	口縁部調整	VI	
5	須恵器 壺	① 18.8cm ② - ③ - ④口～底3/4	①②灰 ③還元焰 良好 ④細 細砂を少量含む	口縁部横ナゲ 胴～底部外周平行印き後部 転々目痕 内面青海波文当て具痕	V	

(7) 谷津状遺構

1号谷津状遺構

位置 C32~35-V92~VI9 Gr 規模 長さ [31.1m] 幅0.8~5.8m 深さ 2.1m

走向 N-82°-W

概要 調査区西寄りの北側の調査区外から続いており、ほぼ東西方向に走って、2号谷津状遺構とつながっている。自然の谷と考えられ、調査時点でも湧水があった。西側は幅2.5mと細く、非常に小規模な谷津と考えられる。底部はやや丸みを帯び、立ち上がりはなだらかである。多量の土器が出土しており、廃棄場所としての機能を有していた可能性がある。

遺物出土状況 土器は全面から出土しているが、中央部付近に残りの良い遺物が集中している。礫は中央部と西部に集中している。接合関係の判明するものは10点あり、広範囲で接合しているものが多く、10m以上離れた破片が接合しているものもある。木器・木片は1号谷津状遺構中央部から2号谷津状遺構にかけて多く出土しており、特に1号谷津状遺構中央部に比較的大きな破片が集中している。西側には非常に少なく中央から東側と対照的である。

出土遺物 出土量は多く、土器は、土師器環24点、高坏2点、壺516点、須恵器壺8点、蓋1点、短頸壺1点、壺104点、甕1点、計657点出土している。須恵器の割合が高くなっている特徴がある。他に、縄文土器7点、石器・剃片等9点、弥生石鍬2点が出土している。2号谷津状遺構に比べ残りの良い物が多く、これらは他から廃棄されたものと考えられる。木器・木片は1号谷津状遺構だけで約60点出土しており、製品は少ないが5点図示した。

2号谷津状遺構

位置 C32~45-V80~VI29Gr

規模 長さ A区 [99.2m] B・C区 [161.0m] 全長 [279.6m]

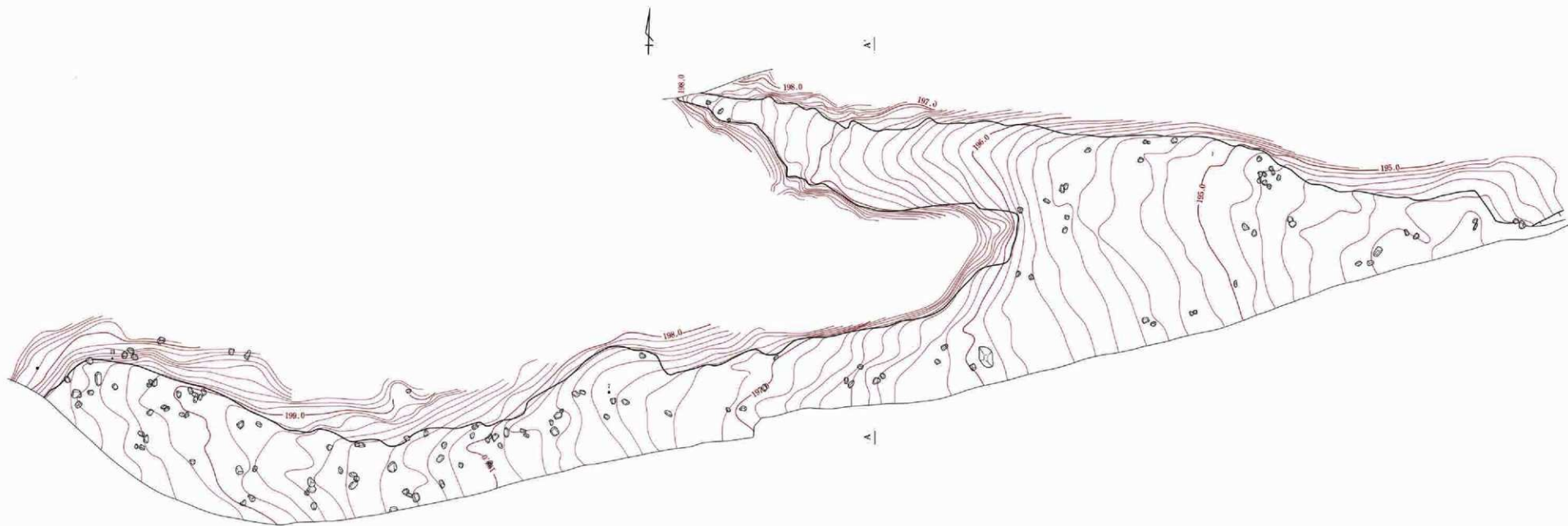
幅 A区 [3.6m] ~ [13.0m] B・C区 [13.3m] ~24.3m

深さ 2.3m (A区) 2.1m (B・C区) 走向 A区 N-81°-E B・C区 N-81°-E

概要 調査区南側に東西に長く存在しており、南側はほとんど調査区外に続いている。浅間B軽石下水田のほぼ真下に位置しており、平安時代には水田として利用されている。さらにその上層には中世水田も存在している。浅間B軽石下水田と同じく中央部で一旦切れているが、南の調査区外ではつながっていると考えられる。また東側の池の下部にも続いており、さらに東の調査区外に続いている。(中央部から西側をA区、東側をB区、池から東側をC区とするが、B区とC区は続いている。) 1号谷津状遺構同様自然の谷と考えられ、西から東に向かって傾斜しており、調査区内の底部の標高差は15.5mある。当遺跡の約150m西側に位置する、下高瀬上之原遺跡の谷津状遺構から続き、さらに東へ延びる大規模な谷津となり、丘陵を分断する小支谷の一部になると考えられる。

土器出土状況 土師器、須恵器が多数出土しているが、A区は少なく、B・C区から多数出土しており、特にC区北側に集中している。接合関係の判明するものは6点あり、10m以上離れて接合して入るものも2点あるが、他は2~3mと比較的近いものが接合している。

木器・木片出土状況 木器・木片は、A・B・Cいずれの区からも、ほぼ全面的に出土している。A区は、西側と東側の1号谷津から続く部分から特に多く出土しており、比較的大きな破片が多い。B・C区はA区に比べ出土量は少なく、特にB区は小片が多く、出土していない部分がかかなりある。C区はB区よりやや多



第75图 1号谷状道槽·2号谷状道槽(A区)



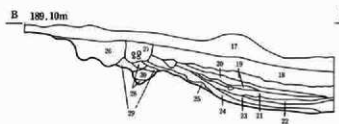
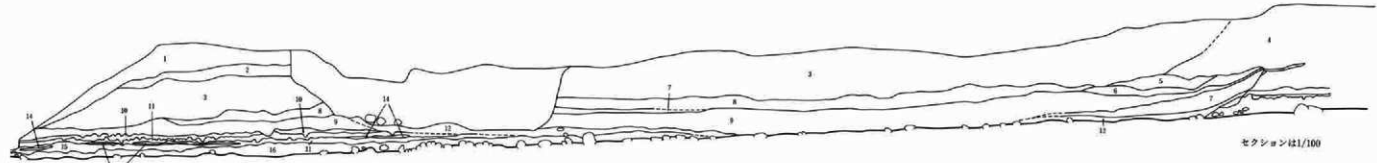
第76图 2号谷津状遺構 (B区)

0 10 m



A 188.0m

A'



B 188.10m

B'

2号谷津状遺構 (C区) 土層注記

- | | | | |
|------------------|--------------------------------------|---------------------|---------------------|
| 1 暗褐色土 | 11 水田床土 | 21 灰褐色土 シルト層 | 28 黒褐色土 細砂を含む |
| 2 褐色土 | 12 褐灰色土 シルト層 | 22 にぶい褐色土 細砂を含む | 29 褐色土 細砂を含む |
| 3 褐色土 池の埋土 植物を含む | 13 灰褐色土 シルト層 | 23 黒褐色土 シルト層 | 30 褐色土 やや黒みを帯びたシルト層 |
| 4 褐色土 鉄分沈着 細砂を含む | 14 灰褐色土 細砂層 | 24 黒褐色土 灰褐色土ブロックを含む | |
| 5 灰褐色土 シルト層 | 15 灰褐色土 シルト層 | 25 黒褐色土 シルト層 | |
| 6 暗褐色土 細砂層 | 16 灰褐色土 シルト層 植物含む | 26 黒褐色土 実植物が少ない | |
| 7 暗褐色土 細砂互層 | 17 調査時の遺土 | 27 黒褐色土 暗果の覆土か | |
| 8 黒褐色土 やや粘質 | 18 明褐色土 鉄分の沈着した細砂・シルト互層 (池が埋まりかけている) | | |
| 9 灰褐色土 やや粘質 | 19 にぶい褐色土 細砂を含む | | |
| 10 浅間石礫石層 | 20 褐灰色土 シルト層 | | |

0 10m

第77図 2号谷津状遺構 (C区)

く出土しているが、小片が多い。木簡が3点出土しているが、1はB区東側の南寄り、2はC区東側の北寄り、3はC区中央の北寄りと、いずれも谷津状遺構東部に集中している。

竊出土状況 地山礫層のものと考えられる礫が底面から出土している。A区は比較的少なく、径30～60cmの中程度の大きさの礫が多い。B区はA区より多く、径20～80cmとA区よりも小さな礫も出土している。C区は最も多いが、径10～40cm程度の小さいものが多くなっている。

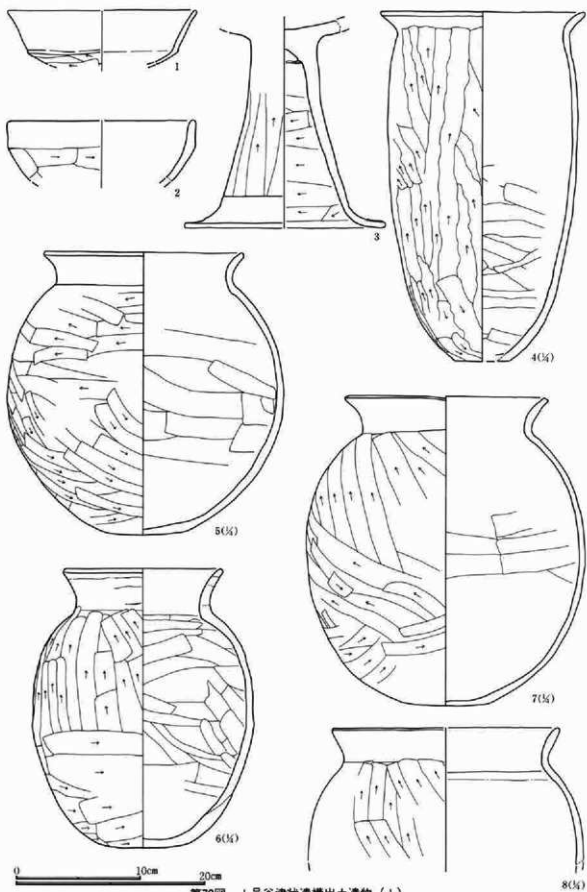
出土遺物 出土量は多く、土器は、土師器坏409点、埴2点、高坏18点、甕2,213点、小型甕1点、台付甕1点、甗12点、埴5点、鉢3点、壺3点、須恵器坏11点、蓋2点、埴3点、甕53点、瓶9点、短頸壺1点、計2,746点出土し、石製品は、紡錘車1点、勾玉1点、玉1点が出土している。他に、縄文土器が130点、石器・剥片等が143点出土している。1号谷津状遺構に比べ残りの良い遺物が少ないが、廃棄されたものより流入したものが多いためであろうか。木器・木片は約650点出土しており、製品と考えられる254点を図示した。器種は木筒、鉢、碇、曲物底板、脚付皿、柄、器種不明の板状木製品・棒状木製品、枕、角材、板等が出土している。

木筒 2号谷津状遺構から木筒が3点出土している。いずれも東部B・C区からの出土で、出土位置は、1がB区C26V24Gr、2がC区C14V7Gr、3がC区池下のC18V14Grで、出土層位はいずれも谷津底面の地山礫層直上である。

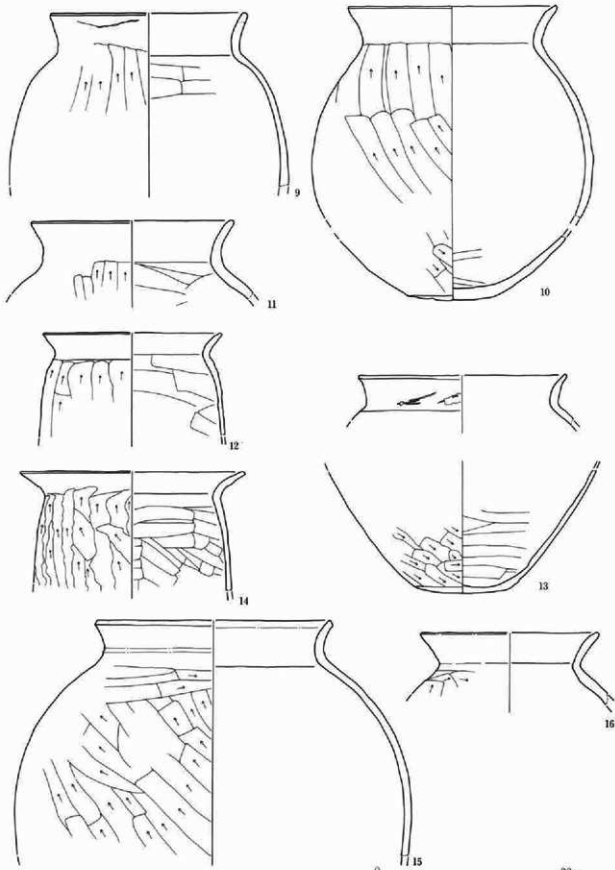
1は、左側部と下端部を欠損しており、現存長20.9cm、現存幅3.4cm、厚さ0.5cmである。7文字墨書され



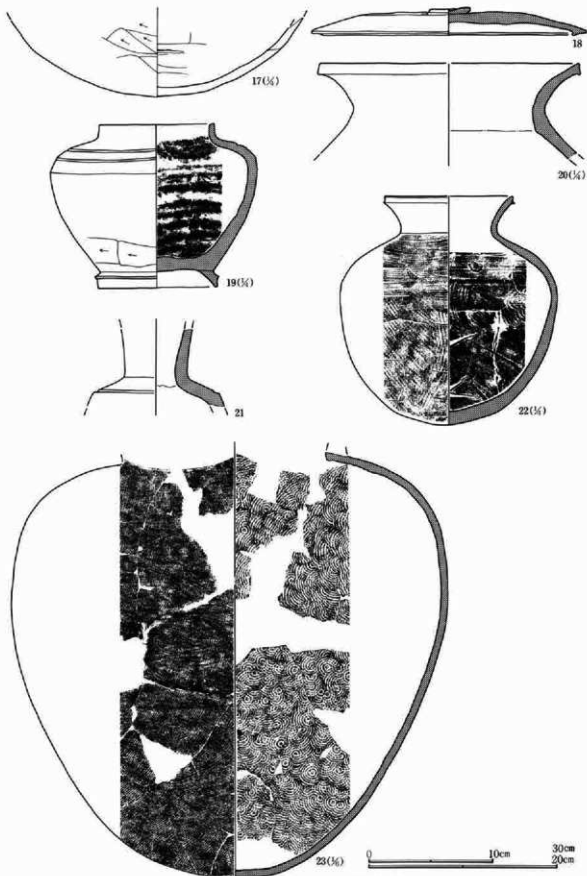
第78図 1号谷津状遺構遺物出土状況



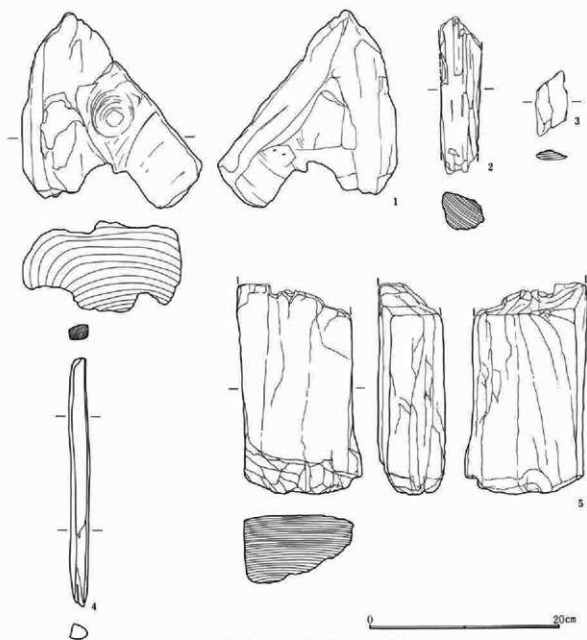
第79図 1号谷津状遺構出土遺物(1)



第80圖 1号谷津状遺構出土遺物(2)



第81回 1号谷津状遺構出土遺物(3)



第82図 1号谷津状遺構出土遺物(4)

1号谷津状遺構出土土器観察表

No	種別 器種	出土 位置	法量	①口径②底径 ③高さ④残存	①色調(表) ②色調(裏) ③焼成 ④胎土	調	整	分類	備考			
1	土師器 坏	C32VI16	①(15.0cm) ②—	③—	④口～底1/4	①②にぶい雫 ③良好	口縁部横ナゲ	体部外面寛削り内 面ナゲ	口縁部歪み有り	I		
			①—	③—	④口～体1/4	④細 粗砂を少量含む	口縁部横ナゲ	体部外面寛削り内 面ナゲ	I			
2	土師器 坏	C32VI15	①(14.7cm) ②—	③—	④口～体1/4	①②にぶい黄橙 ③良好	口縁部横ナゲ	体部外面寛削り内 面ナゲ		I		
			①—	③—	④口～体1/4	④普通 粗砂を少量含む			I			
3	土師器 高坏	C31VI8	①— ②(16.0cm)	③—	④胴部1/2	①②橙 ③良好	脚部横ナゲ外面寛削り内面横方 向寛削り			IV		
			①—	③—	④胴部1/2	④粗 粗砂・礫・片岩を含む			I			
4	土師器 壺	C32VI5	①21.6cm ②(5.8cm)	③36.8cm	④口～底1/2	①にぶい黄橙 ②にぶい黄橙 ③良 好 ④粗 粗砂・礫・片岩を多く含む	口縁部横ナゲ	胴～底部外面寛削 り内面ナゲ		V	底部木葉 痕か	
			①20.9cm	②8.7cm	③29.9cm	④ほぼ完形	①②にぶい雫 ③良好	口縁部横ナゲ	胴～底部外面寛削 り内面ナゲ		V	外面一部 黒皮
5	土師器 壺	C33VI5	①20.9cm	②29.9cm	④ほぼ完形	④普通 粗砂を少量含む	口縁部横ナゲ	胴～底部外面寛削 り内面ナゲ		V	外面一部 黒皮	
			①16.5cm	②(9.0cm)	③29.5cm	④口～底2/3	①②にぶい雫 ③良好	口縁部横ナゲ	胴～底部外面寛削 り内面ナゲ		V	外面一部 黒皮
6	土師器 甕	C32VI6	①16.5cm	②(9.0cm)	③29.5cm	④口～底2/3	④普通 粗砂・礫・雲母を含む	口縁部横ナゲ	胴～底部外面寛削 り内面ナゲ		V	外面一部 黒皮
			①16.5cm	②(9.0cm)	③29.5cm	④口～底2/3	④普通 粗砂・礫・雲母を含む	口縁部横ナゲ	胴～底部外面寛削 り内面ナゲ		V	外面一部 黒皮

No	種別 器種	出土 位置	法量 ①口径②底径 ③高さ④残存	①色調(表) ②色調(裏) ③焼成 ④胎土	調 整	分類	備 考
7	土師器 壺	C33V15	① 21.0cm ② 9.0cm ③ 32.8cm ④ほぼ完形	①にぶい黄褐色 ②灰黄 ③良好 ④普通 粗砂を少量含む	口縁部横ナデ 胴～底部外面磨削 り内面ナデ	V 2	外面一部 黒変
8	土師器 壺	C32V14	①(24.0cm) ②一 ③一 ④口～胴1/5	①明赤褐 ②にぶい黄褐色 ③良好 ④粗 粗砂・塵・片岩を多く含む	口縁部横ナデ 胴部外面磨削り内 面ナデ	V 2	器面等減 著しい
9	土師器 壺	C32V14	①(20.8cm) ②一 ③一 ④口～胴1/5	①②洗黄 ③良好 ④普通 粗砂を含む	口縁部横ナデ 胴部外面磨削り内 面ナデ	V 2	器面等減 著しい
10	土師器 壺	C32V14	① 22.2cm ② 9.8cm ③(31.0cm) ④口～底3/4	①②にぶい黄褐色 ③良好 ④粗 粗砂・塵・片岩を多く含む	口縁部横ナデ 胴～底部外面磨削 り内面ナデ	V 2	外面一部 黒変
11	土師器 壺	C32V16	①(21.6cm) ②一 ③一 ④口縁部片	①橙 ②にぶい橙 ③良好 ④普通 粗砂を含む	口縁部横ナデ 胴部外面磨削り内 面ナデ	V 2	器面等減 著しい
12	土師器 壺	C31V17	① 19.0cm ②一 ③一 ④口～胴1/2	①②にぶい橙 ③良好 ④粗 粗砂・塵・雲母を多く含む	口縁部横ナデ 胴部外面磨削り内 面ナデ	V 1	外面一部 黒変
13	土師器 壺	覆土	①(22.0cm) ② 10.0cm ③一 ④口縁部片・底部	①②黄褐 ③良好 ④粗 粗砂・塵・雲母を含む	口縁部横ナデ 胴～底部外面磨削 り内面ナデ	V 2	
14	土師器 壺	C31V17	①(24.0cm) ②一 ③一 ④口～胴1/3	①②にぶい橙 ③良好 ④粗 粗砂・塵・雲母を含む	口縁部横ナデ 胴部外面磨削り内 面ナデ	V 1	外面一部 黒変
15	土師器 壺	覆土	①(24.8cm) ②一 ③一 ④口～胴1/4	①②にぶい橙 ③良好 ④粗 粗砂・塵・片岩を多く含む	口縁部横ナデ 胴部外面磨削り内 面ナデ	V 2	外面一部 黒変
16	土師器 壺	C32V17	① 19.0cm ②一 ③一 ④口縁部片	①②洗黄 ③良好 ④細 塵を微量含む	口縁部横ナデ 胴部外面磨削り内 面ナデ	V 2	器面等減 著しい
17	土師器 壺	C32V16	①一 ② 8.9cm ③一 ④底部	①②にぶい黄褐色 ③良好 ④普通 粗砂を含む	胴～底部外面磨削り内面ナデ 外 部一部黒変	V 2	器面等減 著しい
18	須恵器 蓋	C32V14	①(20.0cm) ②径3.3cm ③ 2.0cm ④天～口1/2	①②灰 ③還元焰 良好 ④細 細砂を少量含む	クロコ調整(右) 反り有り 天井 部回転蓋用 円形鋸貼付け		
19	須恵器 短頸壺	C31V11	①(12.2cm) ② 12.6cm ③ 17.2cm ④口～台3/4	①オリーブ灰 ②暗灰 ③還元焰 良好 ④細 粗砂を微量含む	クロコ調整 胴部外面下半部磨 削部に比喩2条 付け高台	VI	
20	須恵器 壺	覆土	①(27.8cm) ②一 ③一 ④口縁部片	①②灰 ③還元焰 良好 ④細 粗砂を少量含む	口縁部横ナデ 胴部外面平行印き 目内面当て具痕か	V	器面等減 著しい
21	須恵器 壺	C31V18	①一 ②一 ③一 ④胴部片	①灰 ②灰白 ③還元焰 良好 ④細 細砂を僅かに含む	クロコ調整 胴部に沈線	VI	
22	須恵器 壺	C32V15	①(13.4cm) ②一 ③ 24.2cm ④口～底3/4	①オリーブ灰 ②暗オリーブ灰 ③ 還元焰 良好 ④細 細砂を少量含む	口縁部横ナデ 胴～底部外面回転 カキ目格子状印き内面当て具痕	V	
23	須恵器 壺	覆土	胴部最大径69.5cm ③(67.0) ④胴～底部	①暗灰 ②灰 ③還元焰 良好 ④細 細砂を少量含む	胴～底部外面平行印き 内面青黄 波文当て具痕 外面自然輪付着	V	

1号谷状遺構出土木器観察表

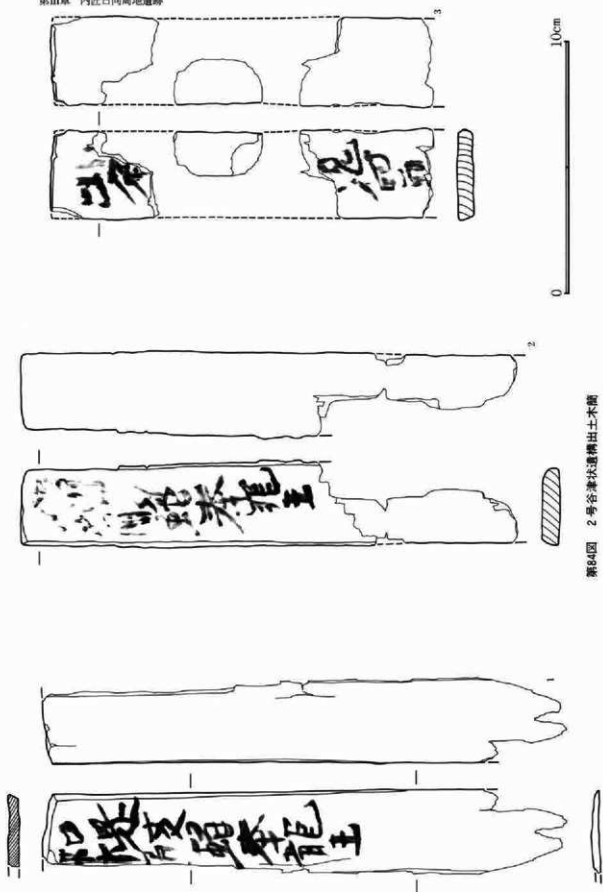
No	器 種	出土位置	法量(cm) 長さ×幅×厚さ	残存状況	木取り	加工形状の特徴
1	不明	C33V12	20.7 × 16.9 × 9.6	完形?	割り材	表面に円形ボタン状の突起あり
2	角材	C33V12	[16.7] × 4.1 × 3.8	両端部欠損	割り材	断面台形に調整
3	板状木製品	C33V12	[6.9] × [3.4] × [1.0]	一部残存	板目	
4	角材	C33V12	[26.1] × 2.0 × 1.5	完形?	割り材	断面長方形に調整か
5	板状木製品	C33V12	[22.1] × 11.8 × 7.0	一部残存	割り材	割り材を厚い板状に加工か

ており、釈文は「^[印]龍王」である。裏面は未加工で、墨痕は認められない。2は下部を欠損しており、現存長19.7cm、幅3.4cm、厚さ0.75cmである。文字は1よりはっきりしないが、1と同じ7文字と考えられ、釈文は「^[印]龍王」であり、1と同文である可能性がある。裏面は未加工で墨痕は認められない。3は3片に割れており、中央部・下部を欠損する。長さは3片の合計で13.1cm、推定で15cm以上あり、幅3.5cm、厚さ0.6cmである。中央を欠損するため全体の文字構成ははっきりしないが、釈文は「^[印] × 鬼^[印]」

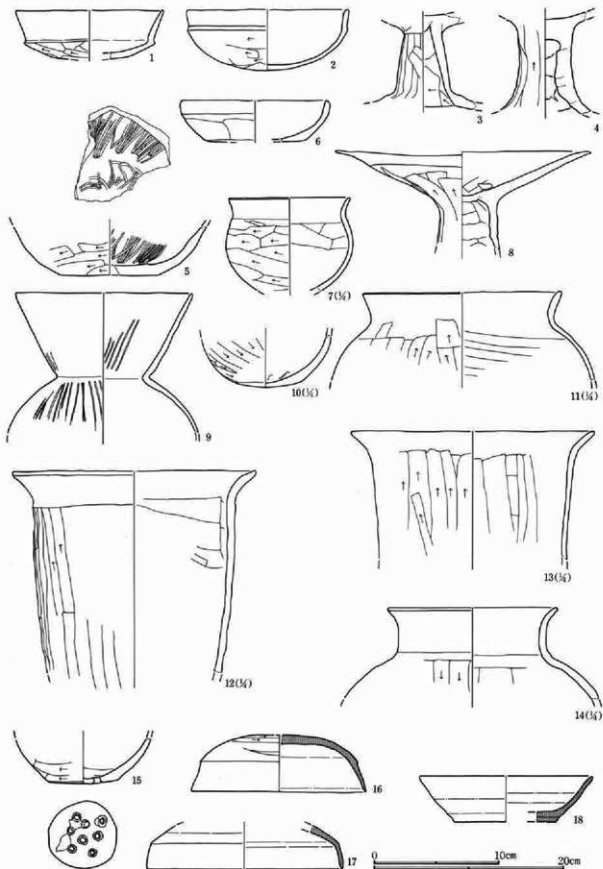
□]であり、1・2とは同文でないと考えられる。裏面は1・2同様未加工で墨痕は認められない。1・2と3で文は違うが、いずれも呪符木簡と考えられる。(第VI章第2節参照)



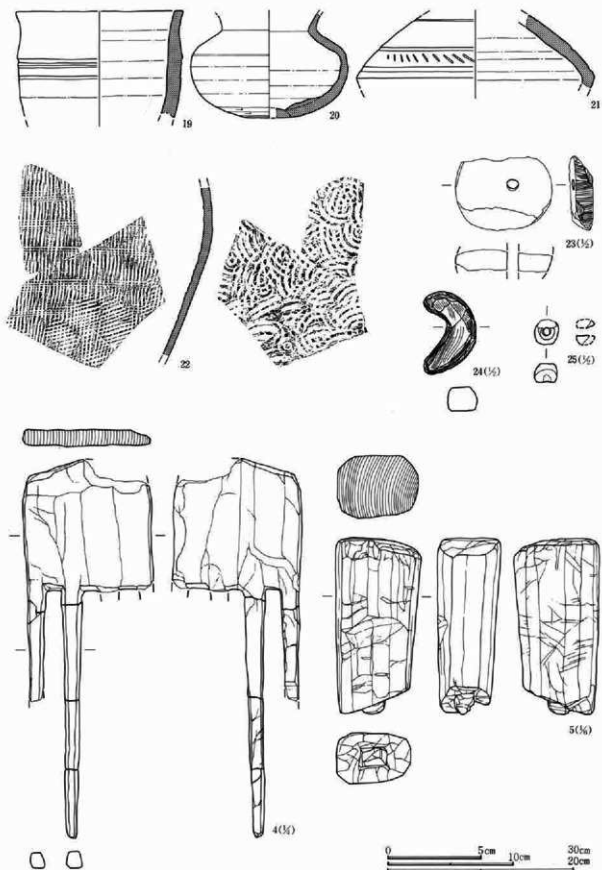
第83図 2号谷津状遺構木簡出土状況



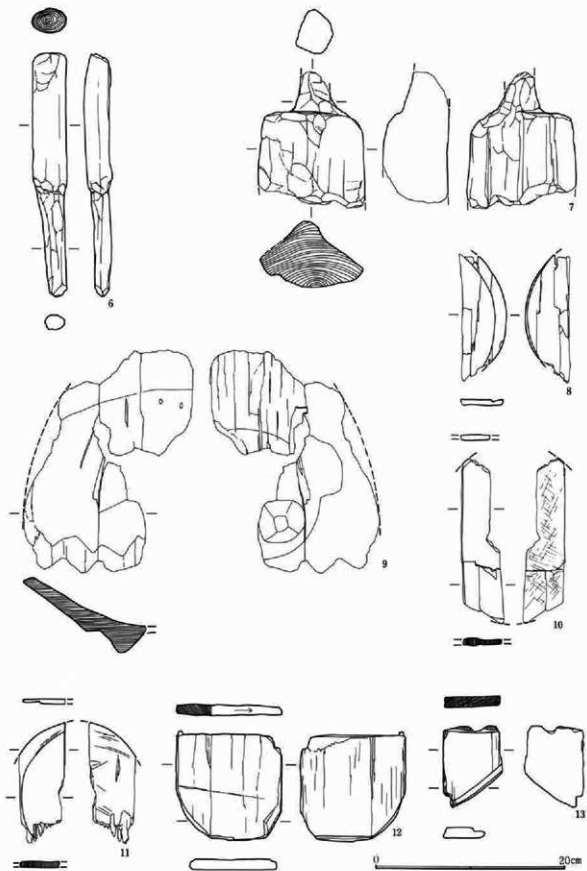
第64図 2号谷津神社遺構出土木簡面



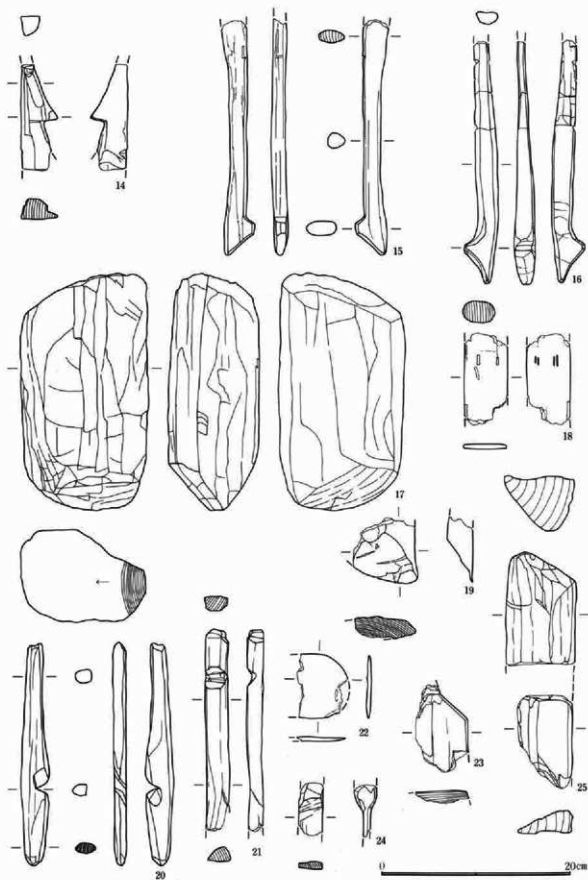
第85図 2号谷津状遺構出土遺物(1)



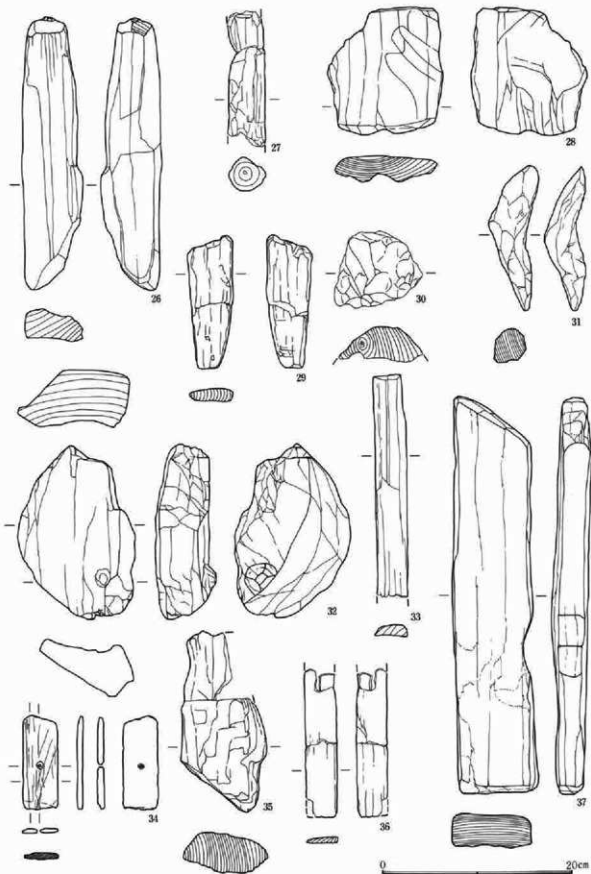
第86図 2号谷津状遺構出土遺物(2)



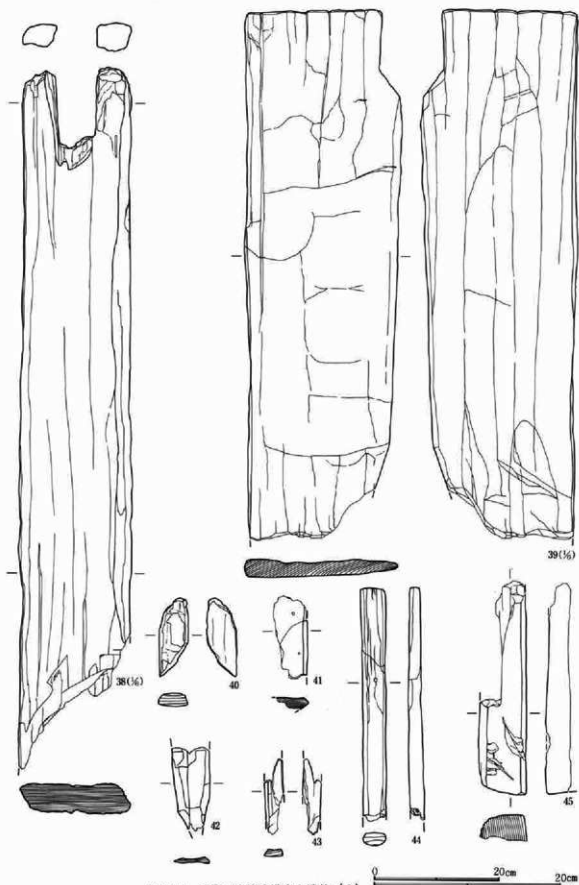
第87図 2号谷津状遺構出土遺物(3)



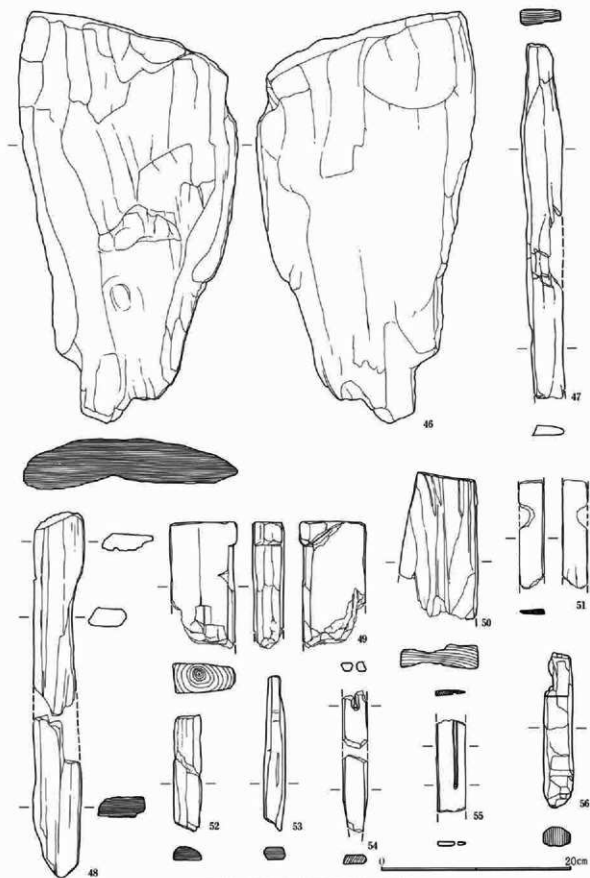
第88図 2号谷津状遺構出土遺物(4)



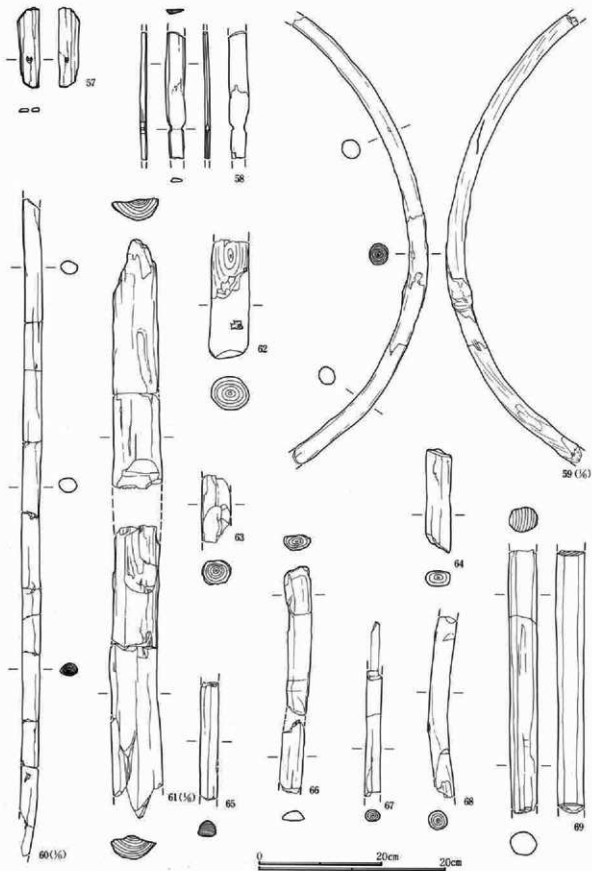
第89図 2号谷状遺構出土遺物(5)



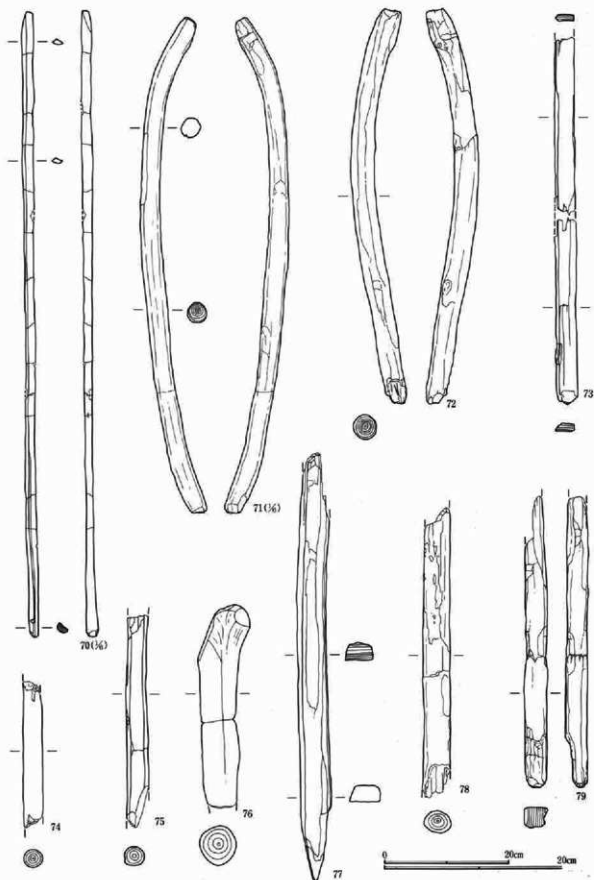
第90図 2号谷津状遺構出土遺物 (6)



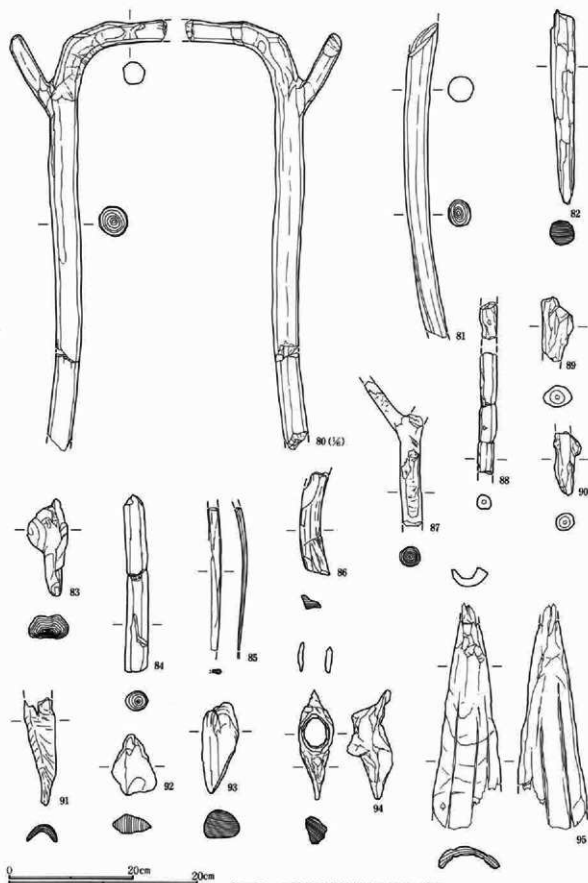
第91図 2号谷状遺構出土遺物(7)



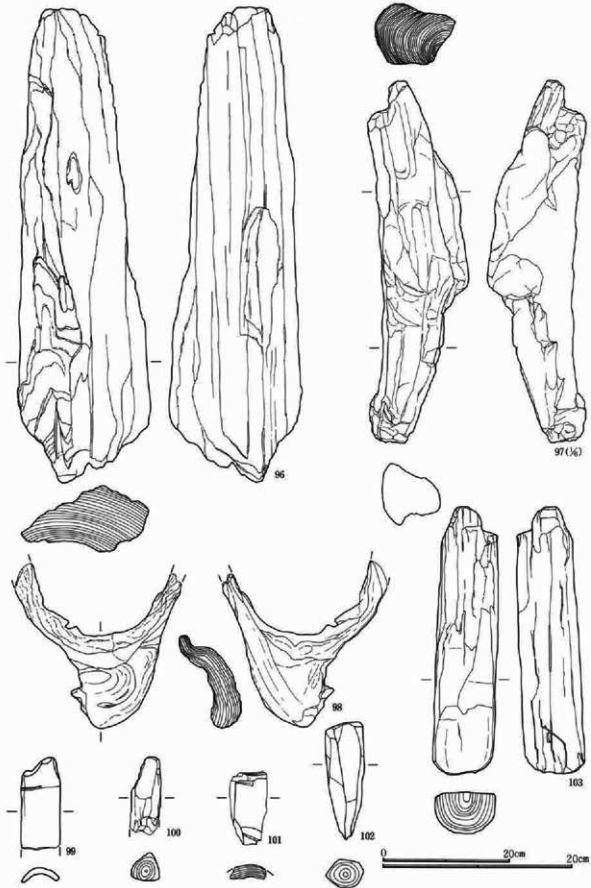
第92图 2号谷津状遺構出土遺物(8)



第93図 2号谷状遺構出土遺物(9)



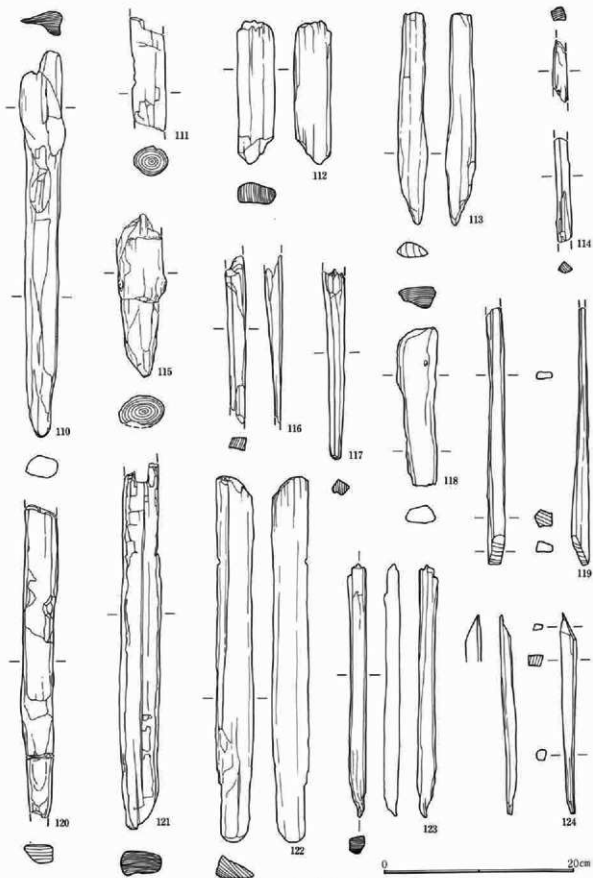
第94図 2号谷津状遺構出土遺物 (10)



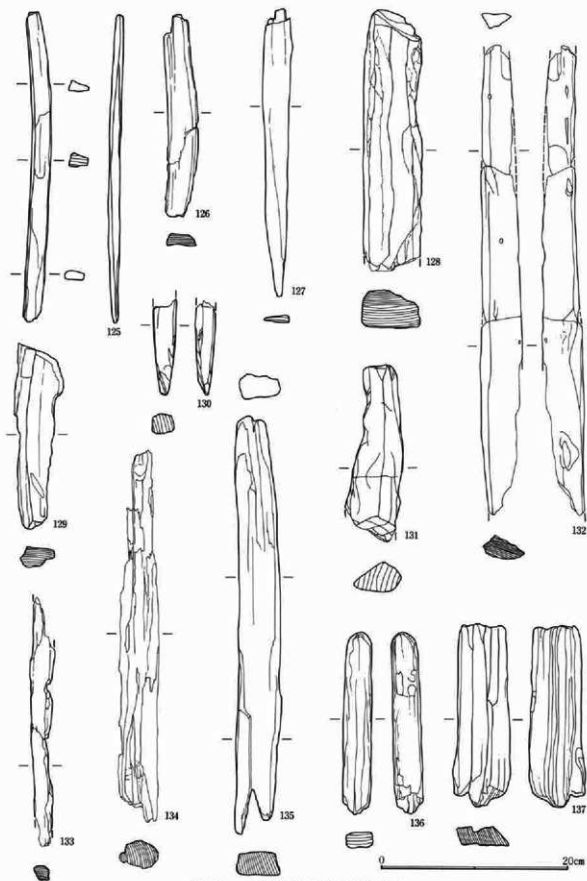
第95図 2号谷状遺構出土遺物(11)



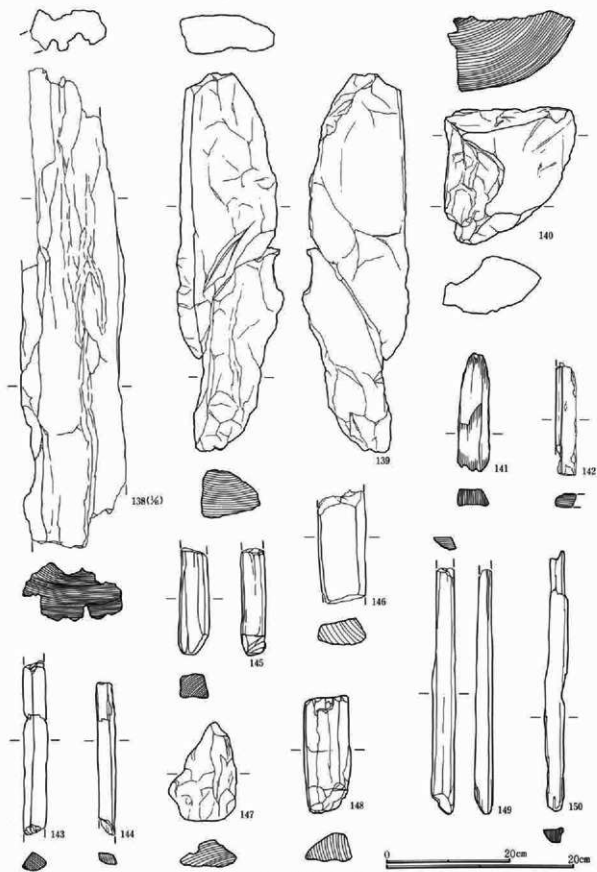
第96图 2号谷津状遺構出土遺物(12)



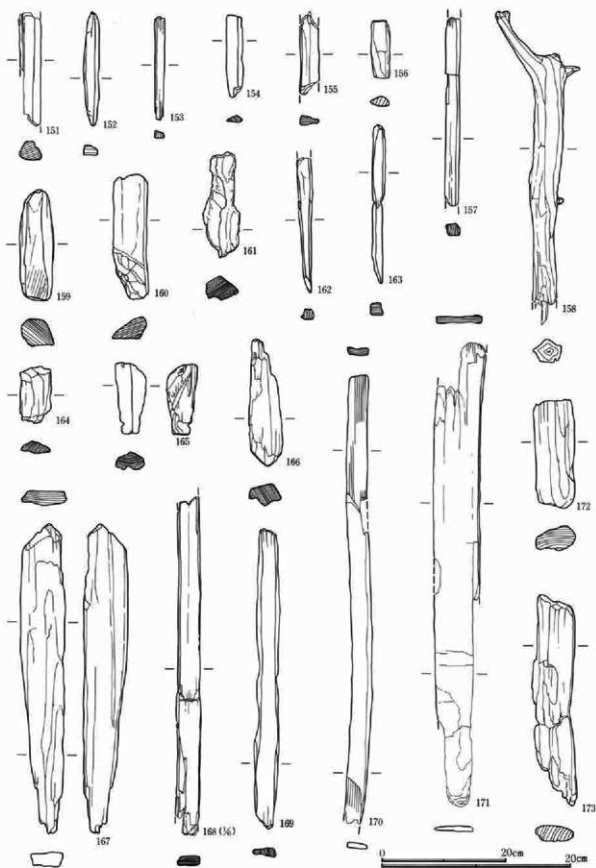
第97圖 2号谷津状遺構出土遺物 (13)



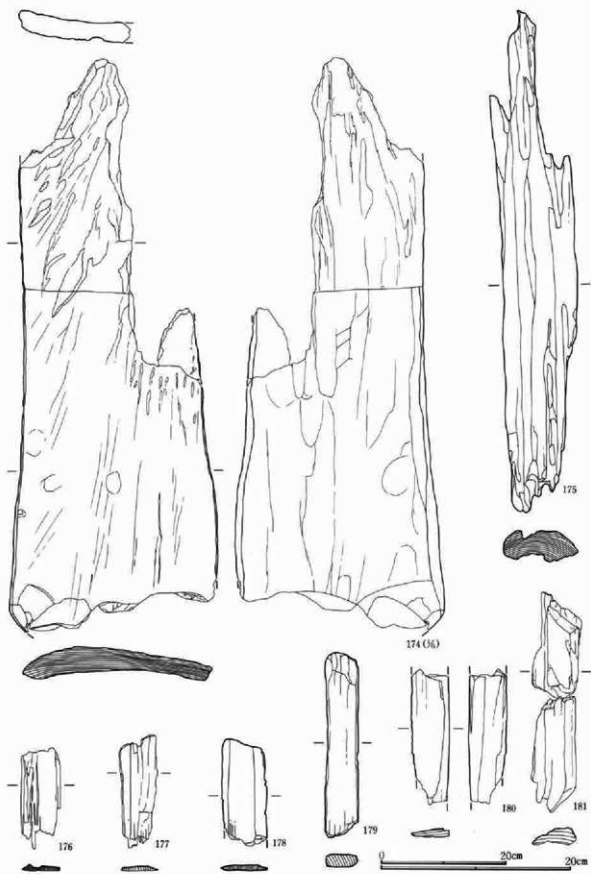
第98图 2号谷津状遺構出土遺物 (14)



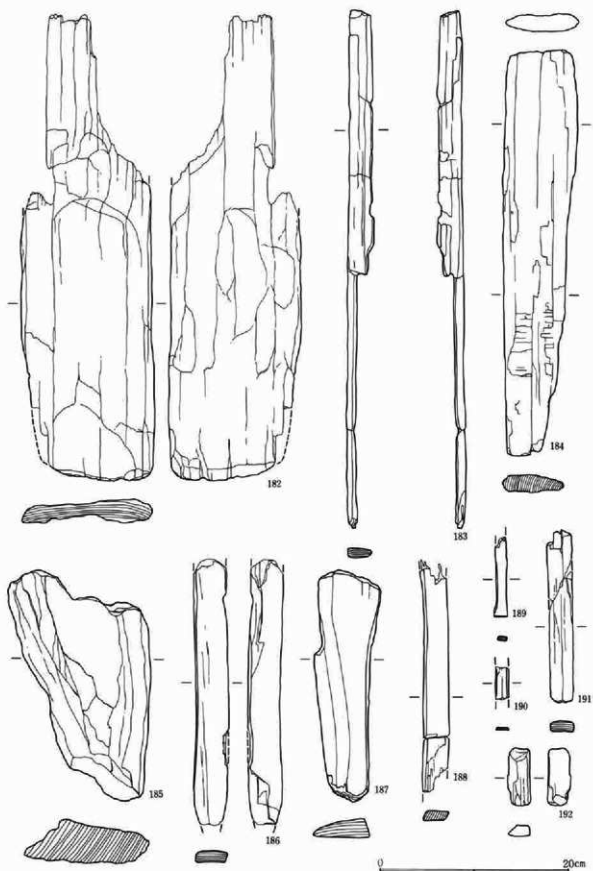
第99图 2号谷津状遺構出土遺物(9)



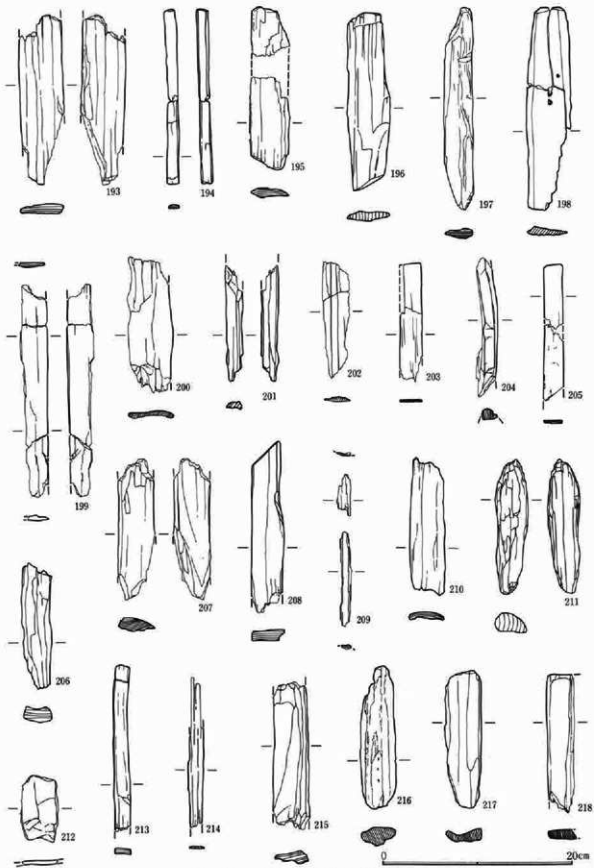
第100図 2号谷津状遺構出土遺物⑩



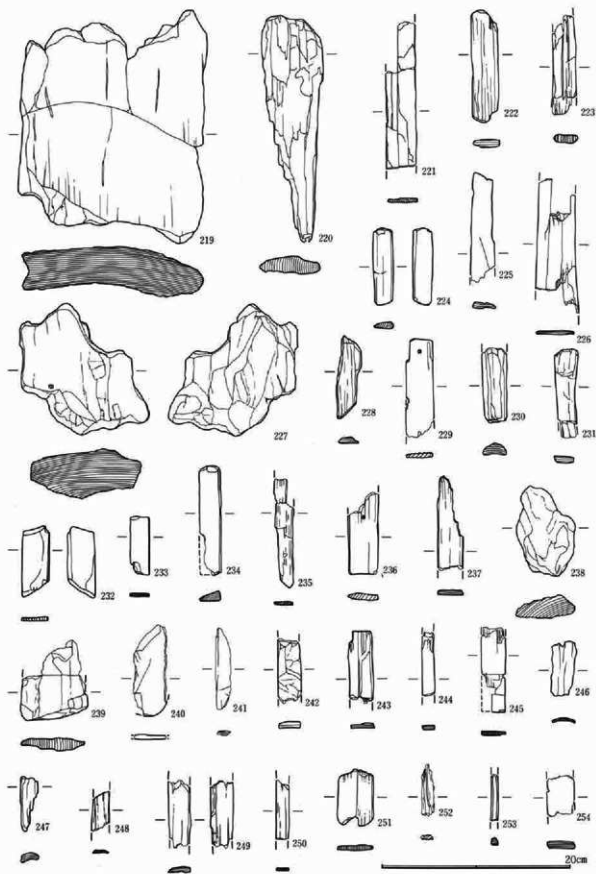
第101図 2号谷津状遺構出土遺物(7)



第102図 2号谷津状遺構出土遺物00



第103図 2号谷状遺溝出土遺物⑨



第104图 2号谷津状遺構出土遺物29

2号谷津状遺構出土土器観察表

No	種別 器種	出土 位置	法量 ①口徑②底径 ③高さ④残存	①色調(表) ②色調(裏) ③焼成 ④胎土	調 整	分 類	備 考
1	土師器 壺	覆土	①(11.7cm) ②— ③(3.9cm) ④口～底1/2	①明赤褐色 ②橙 ③良好 ④細 細砂・澱を僅かに含む	口縁部横ナデ 体～底部外面直り内面ナデ	I	1
2	土師器 壺	C40V111	①(12.8cm) ②— ③4.7cm ④口～底1/4	①におい黄 ②黄褐色 ③良好 ④普通 粗砂を少量含む	口縁部横ナデ 体～底部外面直り内面ナデ	I	外面一部 黒炭
3	土師器 高 杯	C41V125	①— ②— ③— ④胴部2/3	①橙 ②におい橙 ③良好 ④普通 粗砂・雲母を少量含む	脚部横ナデ 脚部外面直り内面直ナデ	IV	1
4	土師器 高 杯	C27V158	①— ②— ③— ④脚部1/2	①におい黄褐色 ②におい橙 ③良好 ④普通 粗砂・澱を少量含む	脚部横ナデ 脚部外面直り内面直ナデ	IV	1
5	土師器 杯	C31V165	①— ②(7.8cm) ③— ④体～底1/5	①暗灰黄 ②黄褐色 ③良好 ④普通 粗砂・澱を少量含む	口縁部横ナデ 体～底部外面直り内面ナデ後縁段状・放射状暗文	I	2
6	土師器 杯	C35V190	①(11.5cm) ②— ③3.3cm ④口～底1/3	①②におい橙 ③良好 ④普通 粗砂・澱を少量含む	口縁部横ナデ 体～底部外面直り内面ナデ 器面磨減著しい	I	2
7	土師器 小型壺	C41V111	①(13.0cm) ②— ③— ④口～胴1/3	①橙 ③良好 ④普通 粗砂・雲母・片岩を含む	口縁部横ナデ 胴部外面直り内面直ナデ	VI	
8	土師器 高 杯	C27V156	①20.3cm ②— ③— ④口～脚2/3	①におい黄褐色 ②におい橙 ③良好 ④普通 粗砂を少量含む	口縁部横ナデ 体～底部外面直り内面ナデ 脚部内外面直り	IV	1 黒炭
9	古式土師器 埴	覆土	①(14.1cm) ②— ③— ④口～胴1/3	①橙 ③良好 ④細 細砂を少量含む	口縁部横ナデ後放射状磨き 胴部外面放射状磨き内面ナデ	VI	器面磨減 著しい
10	土師器 壺	C30V164	①— ②(7.4cm) ③— ④胴～底部	①におい黄褐色 ②黒褐色 ③良好 ④普通 粗砂を少量含む	胴～底部外面直り内面ナデ	V	1
11	土師器 壺	覆土	①(21.2cm) ②— ③— ④口～脚1/3	①におい橙 ②におい黄褐色 ③良好 ④粗 粗砂・澱・片岩・雲母を含む	口縁部横ナデ 胴部外面直り内面ナデ	V	2
12	土師器 瓶	C40V125	①(25.8cm) ②— ③— ④口～脚1/3	①②橙 ③良好 ④普通 粗砂・澱・雲母を含む	口縁部横ナデ 胴部外面直り内面直ナデ 器面磨減著しい	IX	1 黒炭
13	土師器 瓶	C41V126	①(25.6cm) ②— ③— ④口～胴部片	①におい黄褐色 ②におい橙 ③良好 ④普通 粗砂・澱を含む	口縁部横ナデ 胴部外面直り内面直ナデ	IX	1
14	土師器 壺	C40V125	①(18.0cm) ②— ③— ④口～胴3/4	①橙 ③良好 ④普通 細砂を僅かに含む	口縁部横ナデ 胴部外面直り内面ナデ	V	2
15	土師器 瓶	C40V127	①— ②5.4cm ③— ④胴～底部	①灰黄褐色 ②におい黄褐色 ③良好 ④普通 粗砂・澱を少量含む	胴～底部外面直り内面ナデ 底部に径4mmの孔8個あり	IX	2
16	須恵器 蓋	C40V127	①(14.0cm) ②4.5cm ④口～天井部1/4	①②灰白 ③還元焰 良好 ④細 細砂を僅かに含む	クロク調整 天井部回転直り	III	1
17	須恵器 蓋	C41V126	①(15.6cm) ②— ③— ④口～天井部1/4	①②褐色 ③還元焰 良好 ④細 細砂を僅かに含む	クロク調整	III	1
18	須恵器 杯	C27V155	①(13.8cm) ②(8.2cm) ③3.6cm ④口～底1/5	①灰 ②灰オリーブ ③還元焰 良好 ④細 細砂を少量含む	クロク調整(右) 底部回転糸切り無調整	I	1
19	須恵器 埴	C23V150	①(13.4cm) ②— ③— ④口～体1/4	①②灰白 ③還元焰 良好 ④細 細砂を僅かに含む	クロク調整 体部に沈線3条	I	
20	須恵器 短梨壺	C27V158	胴径12.6cm ④胴～底1/3	①灰 ②オリーブ灰 ③還元焰 良好 ④細 細砂を少量含む	クロク調整 胴部に沈線1条 底部回転直り	VI	
21	須恵器 長梨壺	C40V125	①— ②— ③— ④胴部片	①②灰 ③良好 ④細 細砂を少量含む	クロク調整 胴部外面直り工具による研突文	IV	
22	須恵器 壺	覆土	胴厚4～7mm ④胴部片	①褐色 ②灰 ③還元焰 良好 ④細 細砂を僅かに含む	胴部外面平行・格子状叩き目内面青灰文状で具痕	V	

2号谷津状遺構出土石器観察表

No	器 種	出土位置	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	残存状況	石 材	特 徴
23	紡錘車	C21V4	[3.8]	5.2	[1.1]	[36.8]	3/4	緑色片岩	側面粗い研磨 表面割離
24	勾 玉	C18V22	4.4	1.6	1.3	21.9	完 形	帯石	外面やや粗い研磨 未穿孔か
25	白 玉	C13V5	1.3	1.3	1.0	[1.4]	3/4	蛇紋岩	外面研磨

2号谷津状遺構出土木製品観察表

No	器 種	出土位置	法量(cm) 長さ×幅×厚さ	残存状況	本取り	加 工 形 状 の 特 徴
4	敷	C43VI16	40.0 × 13.5 × 1.8	刃2本欠欠1本半欠	紐目	両面とも平坦に加工 刃部は断面方形もしくは五角形に加工 基部は中央がやや上がつて山形を呈するか

第三章 内匠日向周地遺跡

No	器 種	出土位置	法量(cm) 長さ× 幅 ×厚さ	残存状況	木取り	加 工 形 状 の 特 徴
5	碇(?)	C41V25	28.0 × 13.0 × 10.0	完形もしくは柄部欠損か	柱目	柄部は四隅を面取りして断面八角形に調整 握り部側は斜めに直線的に加工 握り部は断面方形に調整か
6	碇	C41V23	25.7 × 3.7 × 2.7	完形	丸木	柄部は断面楕円形に加工 握り部も楕円形に削っているが若干角が残る
7	碇(?)	覆土	[14.4] × 11.5 × 6.9	柄部および握り部一部残存	分割材	柄部断面丸みを帯びた三角形 握り部は方形に加工か
8	曲物底板	C35V96	[13.4] × 4.6 × 5.0 直径(15.8)	底部1/3残存		円形の曲物の底板 両面とも平坦に加工 側縁部には幅1.2cmの段
9	大皿(?)	C42V116	[23.5] × [14.3] × [3.1]	1/3残存	分割材	両面とも平帯に調整 両面に四角垂形の足あり断面は方形に加工
10	曲物底板	C35V96	[17.3] × 4.2 × 0.8 直径(18.8)	1/4残存	柱目	円形もしくは楕円形の曲物の底板
11	曲物底板	覆土	[12.7] × [4.9] × [0.6] 直径(15.6)	1/3残存	柱目	円形の曲物の底板 両面とも平坦に加工 側縁部には幅1.2cmの段
12	曲物底板	C19IV93	11.2 × 11.2 × 1.0		柱目	楕円形の曲物の底板か 両面とも平坦に加工
13	曲物底板	C22V 8	8.2 × 6.6 × 1.1 径約20.0)	1/4残存	柱目	円形もしくは楕円形の曲物の底板 両面とも平坦に加工 側縁部には幅0.6cmの段
14	不明	C42V119	[11.2] × 3.9 × 2.2	一部残存	分割材	棒状の材に楔形のえぐり入り 梯子の一部の可能性あり
15	不明	C42V114	[24.7] × 3.2 × 1.5	一部欠損	柱目	棒状の材の先端に台形の突起を削り出す 断面は楕円形で表面は平滑に調整
16	不明	C23V48	[25.5] × 3.5 × 2.3	一部欠損	柱目	棒状の材の先端に三角形の突起を削り出す 断面は丸みを帯びた長方形で表面は平滑に調整
17	不明	C22V 8	25.0 × 13.5 × 9.7	完形か	分割材	断面はほぼ六角形に加工 端部は斜めに削っており、平面形は台形を呈す
18	曲物底板(?)	C36V97	[9.6] × 4.6 × 0.6	一部残存		両面平坦に加工 縦じ目が2カ所あり
19	不明	覆土	[6.6] × [6.9] × [2.8]	一部残存	板目	やや厚い板状の材を斜めに削っている
20	不明	C42V122	23.5 × 2.9 × 1.4	完形か	柱目	棒状の材を中央のやや膨らんだ厚い板状に加工し、斜めに挟りをいれている 表面は平滑に調整
21	柄(?)	C41V26	[21.2] × 2.5 × 1.7	一部残存	分割材	断面台形に加工 端部近くにV字状の刻みあり
22	不明	C41V17	[6.8] × 5.3 × 0.5	一部残存		楕円楕円形の薄い板状の木製品 両面とも平坦に加工
23	不明	覆土	[9.2] × 5.6 × 1.2	一部残存	板目	表面は平坦に加工 側縁は直線的で角がしっかりしている
24	不明	C20V 5	[5.6] × 2.6 × 2.4	一部残存	柱目	厚い板材の途中から両面を削って薄く加工
25	不明	C42V122	[21.5] × 7.4 × 5.7	一部残存	分割材	断面三角形の分割材を使用 端部はやや丸みを帯び斜めに加工
26	不明	C42V122	28.6 × 6.2 × 3.1	完形か	柱目	厚い板材を全面加工
27	不明	C35V92	[14.3] × 3.9 × 3.6	一部残存	丸木	丸木の一部に欠れあり
28	不明	C42V123	13.5 × 11.0 × 2.7	完形か	板目	表面を平坦に加工
29	不明	C25V46	14.0 × 4.5 × 1.4	完形か	柱目	両面とも平坦に加工
30	不明	C21V15	[8.2] × [9.5] × [3.8]	一部残存	分割材	断面多角形に加工した木製品の一部か
31	不明	C20IV98	15.4 × 4.2 × 3.5	完形か	分割材か	平面形は不整形であるが、全面を加工
32	不明	C14V 7	20.0 × 11.5 × 5.5	完形か	板目	両面に四角垂形の足状の突起あり 皿の一部分の可能性もあるが厚さはかなりある
33	板状木製品	C41V24	[23.6] × 3.4 × 1.1	一部残存	柱目	やや厚い板材を断面台形に加工
34	板状木製品	C40V129	9.8 × 3.8 × 7.5	完形か	板目	長方形の板材の中央に径8mmの孔あり 両面は平坦に加工

No	器 種	出土位置	法量(cm) 長さ×幅×厚さ	残存状況	木取り	加工形状の特徴
35	不明	C34V89	19.2×9.1×4.3	一部欠損	柱目	厚い板状の木製品 両側縁部は断面三角形で全面粗い加工
36	板状木製品	C43VI22	[15.7]×3.4×0.6	一部残存	柱目	薄い板状木製品で断面は三角形に近い 両面とも平坦に加工
37	板状木製品	C42VI16	42.0×8.5×3.3	完形か	板目	厚い板状の木製品 両面ともほぼ平坦に加工 片方の端部を斜めに削る 側面片側に浅いV字状の刻みあり
38	板状木製品	C41VI26	[111.9]×17.7×4.8	一部欠損	板目	大型で厚い板状の木製品 端部に長方形の抉りあり 建築材の可能性あり
39	板状木製品	C41VI24	[83.0]×24.0×3.0	一部欠損	柱目	大型で厚い板状の木製品 端部の側縁部片側を鈍角に削る 両面ともほぼ平坦に加工
40	板	C41VI26	[11.3]×4.8×0.5	一部残存か	板目	やや厚い板材の両面を加工
41	板状木製品	覆土	[8.7]×[3.6]×[1.1]	一部残存	板目	薄い板材の表面を台形に加工
42	板状木製品	C14V5	[8.8]×4.0×0.5	一部残存	板目	表面は平坦に加工 側縁部は断面三角形に削る
43	板状木製品	C40VI25	[7.9]×2.0×0.7	一部残存	板目	やや厚い板材を加工
44	棒状木製品	C42VI26	[24.6]×2.4×1.4	一部残存	板目	断面は丸みを帯びており、楕円形を呈す 表面は平滑に調整
45	板状木製品	C42VI22	22.6×5.0×2.7	一部残存	柱目	厚い板材の表面を平坦に加工
46	板状木製品	C19V16	43.4×23.8×6.6	完形か	板目	大型で厚い板状の木製品 両面とも加工
47	板状木製品	C43VI22	[37.5]×4.3×1.7	一部欠損	板目	両面を平坦に加工
48	板状木製品	C41VI13	38.4×5.4×2.1	一部欠損	板目	厚い板材を加工 端部片側丸みを帯びる
49	板状木製品	C41VI25	[13.3]×7.2×3.4	一部残存	柱目	厚い板材を全面加工し長方形を呈す 側面片側面取りし端部片側に方形の突起あり
50	板状木製品	C40VI25	[15.4]×8.2×2.4	一部残存	板目	側縁部は直線的で端部から次第に広がる 両面とも粗い加工
51	板状木製品	C40V97	[12.2]×2.6×0.5	一部残存	柱目	薄い板材の両面を平坦に加工 断面は三角形に近い
52	板状木製品	C42VI13	12.1×3.0×1.4	完形か	板目	厚い板材を断面やや角を残す半円形に加工
53	板状木製品	覆土	16.3×2.3×1.2	完形か	板目	厚い板材の両面を平坦に加工 側縁部は断面三角形に削り 断面はつぶれた六角形を呈す
54	板状木製品	C35V97	[14.2]×2.8×1.0	一部残存	柱目	両面を平坦に加工 現存端部に孔もしくは縁あり
55	板状木製品	覆土	[9.8]×3.1×0.5	一部残存	柱目	薄い板材の両面を平坦に加工 中心やや右寄りに径3mmの孔あり、そこに幅3mmの溝がつかがる
56	板状木製品	覆土	16.2×3.0×2.0	完形か	柱目	厚い板材を面取りし、断面つぶれた六角形に加工
57	板状木製品	覆土	8.3×2.0×0.5	完形か		薄い板材の中央に径6mmの孔あり
58	板状木製品	C36V97	[13.3]×2.1×0.4	一部残存	柱目	断面三角形の薄い板材の両側縁部に「く」の字状の抉りあり
59	棒状木製品	C34V96	[71.0]×3.4×3.0	両端部欠損	丸木	丸木材を円弧状に曲げる 丸木弓か
60	棒状木製品	C41VI28	[104.8]×3.0×2.4	両端部欠損	丸木	丸木の表面を平滑に加工
61	棒状木製品	C42VI25	[91.4]×8.0×3.8	一部欠損	分割材	丸木を半載して表面を加工
62	棒状木製品	覆土	[12.5]×4.2×3.5	一部残存	丸木	丸木の表面を平滑に加工
63	棒状木製品	覆土	[7.1]×3.0×2.5	一部残存	丸木	丸木の表面を平滑に加工
64	棒状木製品	覆土	10.0×2.7×1.5	一部残存	丸木	扁平な材を使用

No	器 種	出土位置	法量 (cm) 長さ× 幅 ×厚さ	残存状況	木取り	加 工 形 状 の 特 徴
65	棒状木製品	C41V18	[12.5]× 1.9 × 1.6	一部残存	板目	片面を新鹿山形に加工し新面五角形の棒状の木製品とする
66	棒状木製品	覆土	[23.9]× 2.8 × 2.0	一部残存	丸木	断面楕円形の丸木の表面を加工
67	棒状木製品	覆土	[18.4]× 1.6 × 1.2	一部残存	丸木	丸木材の表面を加工
68	棒状木製品	覆土	長[19.0]×径 2.0	一部残存	丸木	表面を平滑に調整
69	棒状木製品	C42V27	[27.7]× 3.0 × 2.7	一部残存	柱目	棒状の材を断面丸みを帯びた六角形に加工
70	棒状木製品	C42V22	100.0 × 1.9 × 1.0	完形		断面三角形に加工された非常に長い棒状木製品
71	棒状木製品	C34V96	長 79.0 × 径 3.0	完形	丸木	丸木を加工した棒状木製品 円弧状に曲がる 端部はやや丸みを帯びる
72	棒状木製品	C21V 4	40.5 × 2.5 × 2.6	完形	丸木	丸木を加工した棒状木製品 円弧状に曲がる
73	板状木製品	C44V18	[38.3]× 2.3 × 0.9	一部欠損	板目	やや厚い板材を断面台形に加工 両面は平坦
74	棒状木製品	C18V 9	[15.3]× 2.1 × 1.9	一部残存	丸木	丸木を使用した棒状木製品
75	棒状木製品	C31V66	長[22.3]×径 2.3	一部残存	丸木	丸木を断面丸みを帯びた六角形に加工
76	棒状木製品	覆土	[21.3]× 4.3 × 4.2	一部残存	丸木	丸木を使用した棒状木製品 端部は丸く一部斜めに削る
77	棒状木製品	C43V25	[45.0]× 3.0 × 1.8	一部残存	柱目	棒状の材を断面丸みを帯びた長方形に加工
78	棒状木製品	覆土	[30.5]× 2.9 × 2.3	一部残存	丸木	丸木を使用した棒状木製品
79	棒状木製品	C41V26	[30.5]× 2.5 × 2.0	一部残存	柱目	棒状の材を断面方形に加工 端部は丸みを帯びる
80	棒状木製品	C34V96	長[68.5]×径 4.5	一部欠損	丸木	ほぼ直角に曲がった棒状の丸木を利用 枝が一部残る
81	棒状木製品	C34V96	長[50.0]×径 3.5	一部残存	丸木	丸木を使用した棒状木製品
82	棒状木製品	覆土	長 20.6 × 径 2.5	完形か	板目	棒状の材を加工し先端部を尖らせる
83	不明	C19V 6	10.3 × 3.0 × 2.5	完形か	丸木	丸木を加工したものか
84	棒状木製品	覆土	18.7 × 2.4 × 2.1	完形か	丸木	丸木を使用した棒状木製品 端部片側は尖る
85	不明	C40V25	[15.0]×[1.0]×[0.5]	一部残存	柱目	薄い板材を使用しているが、先端部に向かってさらに非常に薄くなる
86	不明	C37V87	[10.9]× 1.6 × 1.5	一部残存	板目	棒状の材を断面三角形に加工
87	棒状木製品	覆土	長[15.2]×径 2.2	一部残存	丸木	丸木を使用し枝が残る
88	棒状木製品	C37V91	長[16.7]×径 1.5	一部残存	丸木	丸木を使用した棒状木製品 表面をやや平滑に調整
89	棒状木製品	C37V91	長[6.8]×径 1.8	一部残存	丸木	丸木を使用した棒状木製品
90	棒状木製品	C37V91	[6.8]× 3.0 × 2.3	一部残存	丸木	丸木を使用した棒状木製品
91	不明	C37V89	[11.4]× 3.2 × 0.6	一部残存	分割材	2分割材の中心をくりぬき表面を加工
92	不明	覆土	6.5 × 4.7 × 2.0	完形か	柱目	断面菱形の木製品
93	不明	覆土	9.5 × 3.8 × 2.9	完形か	板目	断面丸みを帯びた多角形で、先端の尖った木製品
94	不明	C21V 4	11.5 × 3.7 × 4.7	完形か	分割材か	不整形の木製品の中央に長径2.8cm短径2.2cmの孔あり

No	器 種	出土位置	法量 (cm) 長さ× 幅 × 厚さ	残存状況	木取り	加工形状の特徴
95	不明	C34V93	[23.7]× 7.3 × 1.2	一部残存	分割材	分割材の中心をくりぬき表面を加工
96	不明	C34V89	50.0 × 13.6 × 6.9	完形か	分割材	断面菱形で表面は粗い加工
97	不明	C23V22	58.0 × 14.0 × 9.8	完形か	分割材	不整形で断面丸みを帯びた台形 表面粗い加工か
98	不明	C20V20	[15.2]× 17.6 × 3.2	一部欠損		表面粗い加工か
99	不明	覆土	[9.7]× 4.2 × 0.6	一部残存		竹の一部を削るか
100	杭	C35V92	[8.3]× 3.2 × 3.0	一部残存	丸木	丸木を断面三角形に加工
101	杭(?)	覆土	[7.8]×[3.9]×[1.3]	一部残存	丸木か	杭の端部の一部か 先端を削る
102	杭(?)	覆土	12.5 × 4.2 × 3.0	一部残存か	丸木	杭の先端部が残ったものか 断面六角形に削る
103	杭(?)	C40V27	28.2 × 6.3 × 4.4	一部欠損か	分割材 2分割	丸木を平載して杭としたものか
104	杭	C35V87	[105.0]×10.8 × 9.6	先端部欠損	分割材	分割材を断面五角形に加工して杭としている
105	杭(?)	C41V26	[110.8]×11.8 × 8.0	先端部欠損	分割材 4分割か	分割材を断面五角形に加工して杭としたものか
106	杭	C42V19	長[98.5]×径 9.0	一部欠損	丸木	丸木の先端部を削って杭としている
107	杭	C43V22	[89.0]× 10.1 × 10.5	一部欠損	丸木	丸木を断面方形に加工して杭としている
108	杭(?)	C14V 8	6.6 × 4.0 × 2.0	一部残存	分割材	丸木を平載して杭としたものの一部か
109	杭	C35V92	[11.4]× 4.8 × 3.3	一部残存	丸木	丸木を加工した杭の先端部
110	杭(?)	C41V28	40.7 × 4.5 × 2.5	完形か	板目	断面楕円形の棒状の材を先端を細く杭状に加工
111	杭	覆土	[12.0]× 3.6 × 3.0	一部残存	丸木	丸木を加工した杭の胴部
112	角材	C39V27	15.1 × 4.0 × 2.0	完形か	板目	断面丸みを帯びた長方形に加工
113	角材	C42V25	22.3 × 3.2 × 1.6	完形か	板目	断面丸みを帯びた三角形で端部片側を尖らせる
114	角材	C40V25	[17.5]× 1.6 × 1.4	一部残存	板目	断面つぶれた方で各面は平坦
115	杭	C24V20	[17.2]× 4.8 ×[3.2]	先端部残存	丸木	丸木を加工した杭の先端部
116	角材	C41V25	[17.6]× 1.9 × 1.4	一部残存	板目	断面台形で各面は平坦 片側は薄くなる
117	角材	C40V25	[20.0]× 1.7 × 1.6	一部残存	板目	断面台形で各面は平坦 先端部は細くなっている
118	角材	C41V24	16.6 × 4.0 × 2.5	完形か	板目	断面つぶれた台形もしくは五角形で各面とも凹凸が多い
119	角材	C21V16	[27.0]× 1.8 × 1.7	一部残存	板目	断面側面は長方形で薄いが端部は方形もしくは五角形となっている 先端部は斜めに切断される
120	角材	C14V 8	[33.0]× 3.0 × 2.0	一部残存	板目	断面丸みを帯びた台形で端部に向かい細くなる
121	角材	C43V18	[58.4]× 6.4 × 3.5	一部残存	板目	断面丸みを帯びた長方形で端部は丸みを帯びる
122	角材	C42V24	38.4 × 4.1 × 2.4	完形か	板目	断面三角形で両端部は丸みを帯びる
123	角材	C43V26	26.7 × 1.7 × 1.7	完形か	板目	断面五角形で両端部は尖る
124	角材	C41V26	21.1 × 1.5 × 1.2	完形か	板目	断面台形で端部片側を斜めに加工し反対側は細くなる

第三章 内匠日向周地遺跡

No.	器 種	出土位置	法量(cm) 長さ×幅×厚さ	残存状況	木取り	加工形状の特徴
125	角材	C41V25	32.6 × 1.9 × 1.5	完形か	板目	断面長方形もしくは台形で端部片側は丸みを帯びる
126	角材	C41V23	21.3 × 3.3 × 1.3	完形か	板目	断面台形でやや薄い
127	角材	C42V14	30.3 × 2.7 × 0.9	完形か	板目	断面三角形で端部片側が細くなっている
128	角材	覆土	[27.5] × 6.2 × 3.8	一部残存	板目	断面長方形の一端が欠けた五角形で端部は斜めである
129	角材	覆土	19.5 × 5.2 × 2.1	完形か	板目	断面五角形であるが各面とも凹凸が多い
130	角材	C15V0	[10.1] × 2.4 × 2.1	一部残存	板目	断面長方形で先端部は尖る
131	角材	C34V96	[18.7] × 5.0 × 3.2	一部残存	板目	断面不正方形で端部は細くなっている
132	角材	C39V99	[49.5] × 4.3 × 2.4	一部残存	板目	断面三角形で片側は平組であるが片側は丸みを帯びる
133	角材	C33V90	[26.2] × 1.5 × 1.5	一部残存	板目	断面丸みを帯びた台形で各面とも凹凸が多い
134	角材	C35V88	[50.0] × [6.1] × [4.5]	一部残存	板目	断面多角形になるか
135	角材	C32V65	44.0 × 4.5 × 2.5	一部欠損か	板目	断面丸みを帯びた長方形
136	角材	C16V10	19.1 × 2.7 × 1.7	完形か	板目	断面丸みを帯びた長方形で両端部は丸みを帯びる
137	角材	C16V5	18.9 × 5.3 × 2.0	完形か	板目	断面台形であるが各面とも凹凸が多く表面には溝状のくぼみあり
138	角材(?)	C23V34	[76.8] × 16.4 × 9.2	一部残存	分割材か	断面不整形で各面とも凹凸が多い
139	角材	C23V14	39.8 × 11.3 × 5.1	一部欠損か	分割材か	断面丸みを帯びた台形もしくは三角形で各面とも凹凸が多い
140	不明	C14V7	14.5 × 13.9 × 8.4	完形か	分割材	丸木を4分割した材を使用し平面形は扇形に加工
141	角材	C21V97	12.5 × 3.3 × 1.7	完形か	板目	断面台形で各面とも平組である 端部片側丸みを帯びる
142	角材	C20V98	[11.9] × [2.2] × [1.4]	一部残存	板目	断面台形か、表裏面とも平坦
143	角材	C20V98	[18.4] × 2.5 × 1.8	一部残存	板目	断面三角形であるが二面は平組で一面は丸みを帯びる
144	角材	C20V10	[16.1] × 1.9 × 1.1	一部残存	板目	断面台形で各面とも比較的平坦である 端部は方形に調整
145	角材	C20V31	[11.2] × 3.0 × 2.6	一部残存	板目	断面方形で端部は丸みを帯びる
146	角材	覆土	[12.0] × 5.1 × 2.8	一部残存	板目	断面長方形であるが片側は平組で片側は丸みを帯びる
147	不明	覆土	10.5 × 7.3 × 2.8	完形か	板目	平面形は不整形で断面は丸みを帯びた三角形を呈す
148	角材	覆土	12.2 × 5.0 × 3.0	完形か	板目	平面形は長方形であるが断面は丸みを帯びた三角形を呈す
149	角材	覆土	[25.7] × 2.5 × 1.2	一部残存	板目	断面は三角形であるが一面は丸みを帯びる
150	角材	覆土	27.4 × 1.5 × 1.3	完形か	板目	断面は台形で端部片側は丸みを帯びる
151	角材	C36V87	[12.0] × 2.2 × 2.3	一部残存	板目	断面台形で各面とも平坦である
152	角材	C26V51	12.0 × 1.5 × 1.0	完形か	板目	断面台形で両端部は尖る
153	角材	C20V7	10.9 × 1.1 × 0.8	完形か	板目	断面台形で各面とも平坦である
154	角材	C22V7	8.7 × 1.7 × 0.7	完形か	板目	断面三角形に近く各面とも平坦である

No	器 種	出土位置	法量(cm) 長さ× 幅 ×厚さ	残存状況	木取り	加工形状の特徴
155	角材	覆土	[8.7]× 2.0 × 1.0	一部残存	板目	断面薄い台形であるが表面面とも凹凸が多い
156	角材	C15V4	5.1 × 2.0 × 1.0	完形か	板目	平面形は長方形で断面は丸みを帯びた三角形
157	角材	C17V8	[19.8]× 14.0 × 1.2	一部残存	板目	断面方形であるが一面は丸みを帯びる
158	不明	C33V90	[33.0]× 3.0 × 2.5	一部残存	丸木	丸木の端部片側を細くしたものか
159	角材	覆土	11.7 × 3.6 × 2.8	完形か	板目	断面方形であるが一面は丸みを帯びる 四端部は丸みを帯びる
160	角材	覆土	13.0 × 3.5 × 2.2	完形か	板目	断面丸みを帯びた三角形で端部片側を一部加工
161	角材	C22V15	11.1 × 3.5 × 2.5	完形か	板目	平面形は不整形で断面も不整形で各面とも凹凸が多い
162	角材	C21V4	[14.2]× 1.6 × 1.1	一部残存	板目	断面丸みを帯びた方形で端部片側に向かい細くなる 先端部は尖っている
163	角材	覆土	16.7 × 1.3 × 1.3	完形か	板目	断面方形で端部片側は尖る
164	角材	C24V47	6.0 × 3.2 × 1.2	一部残存か	板目	断面三角形であるが各面とも凹凸が多い
165	角材	覆土	7.5 × 3.2 × 1.7	一部残存か	分割材か	断面丸みを帯びた三角形で片面に溝状のくぼみあり
166	角材	覆土	13.4 × 3.4 × 2.2	一部残存か	板目	断面五角形であるが片面は凹凸が多い
167	板	C42V27	32.8 × 4.7 × 1.7	完形か	板目	やや厚い板材を使用 両面ともやや凹凸があるがほぼ平坦である
168	板	C21V97	[54.2]× 3.7 × 1.5	一部残存	板目	やや厚い板材を使用 両面とも平坦である
169	板	C41V19	31.7 × 2.5 × 0.8	完形か	板目	片面はほぼ平坦であるが片面は凹凸がある
170	板	C42V16	[47.4]× 2.2 × 0.8	一部欠損	板目	両面ともほぼ平坦である
171	板	C15V8	[49.0]× 4.9 × 0.9	一部残存	板目	両面ともやや凹凸があるがほぼ平坦である
172	板	C38V83	11.5 × 4.2 × 2.6	一部残存か	板目	厚い板材を使用 両面とも凹凸が多い
173	板	C22V98	22.0 × 4.0 × 1.7	一部残存か	板目	厚い板材を使用 両面とも丸みを帯び凹凸が多い
174	板	C41V26	[90.3]× 32.5 × 3.9	一部欠損	板目 分割材か	厚い板材を使用 ややアーチ型にまがる
175	板	C41V28	43.0 × 7.7 × 3.2	一部残存か	分割材	両面とも凹凸が多い
176	板	C44V17	[10.7]×[4.2]×[0.6]	一部残存か	板目	両面とも凹凸が多い
177	板	C37V97	[12.0]×[4.0]×[0.5]	一部残存か	板目	両面ともほぼ平坦
178	板	C41V24	8.4 × 3.1 × 1.4	一部残存	板目	断面薄い台形を呈す 両面ともほぼ平坦
179	板	C43V118	19.5 × 3.4 × 1.2	完形か	板目	厚い板材を使用 両面ともほぼ平坦
180	板	C41V27	[14.2]× 4.0 × 0.9	一部残存	板目	両面ともほぼ平坦 片面側縁部に段あり
181	板	C41V22	23.2 ×[5.0]×[1.7]	一部残存	板目	表面に凹凸が多い
182	板	C39V98	[49.0]× 14.0 × 2.5	一部残存	板目	表面面とも凹凸が多い 端部はやや丸みを帯びる
183	板	C43V25	54.7 × 2.5 × 1.1	一部残存か	板目	表面面ともほぼ平坦
184	板	C42V18	42.7 × 7.7 × 1.8	完形か	板目	表面面ともやや凹凸があるがほぼ平坦 片面やや丸みを帯びる

第3章 内匠日向周地遺跡

No	器 種	出土位置	法量(cm) 長さ× 幅 ×厚さ	残存状況	木取り	加工形状の特徴
185	板	C41V26	24.2 × 13.4 × 4.3	一部残存か	柾目	厚い板材を使用 両面とも凹凸が多い
186	板	C41V27	[28.0] × 3.5 × 1.2	一部残存	板目	両面ともほぼ平坦
187	板	C25V35	24.5 × 6.0 × 1.9	完形か	板目	断面三角形を呈す 両面ともほぼ平坦 端部は丸みを帯びる
188	板	C36V97	[24.5] × 2.8 × 1.0	一部残存	柾目	両面とも平坦
189	板	C21V 6	[8.4] × 1.5 × 4.5	一部残存	柾目	両面とも平坦
190	板	覆土	[3.5] × 1.4 × 0.2	一部残存	板目	両面ともほぼ平坦
191	板	C43V26	18.2 × 2.5 × 1.1	一部残存か	板目	やや厚い板材を使用 両面ともほぼ平坦
192	板	C33V99	5.1 × 2.4 × 1.2	一部残存か		やや厚い板材を使用 断面台形を呈す
193	板	C41V26	[18.0] × 4.5 × 1.0	一部残存	板目	両面ともやや凹凸がある 断面薄い台形を呈す
194	板	C40V25	18.5 × 1.2 × 0.4	完形か	板目	片面はやや丸みを帯びる
195	板	C44V24	9.8 × 4.2 × 1.0	一部残存	板目	両面ともやや凹凸がある 断面薄い三角形であるが片面はやや丸みを帯びる
196	板	C42V21	18.6 × 4.6 × 1.0	完形か	柾目	両面ともやや凹凸がある
197	板	C40V28	21.3 × 3.1 × 1.1	完形か	板目	両面とも凹凸が多い 両端部とも先端尖る
198	板	C42V15	21.4 × 4.2 × 0.9	一部残存か	柾目	両面ともほぼ平坦 断面薄い三角形であるが片面はやや丸みを帯びる
199	板	C40V10	[22.4] × [2.8] × [0.6]	一部残存	板目	片面に一段あり
200	板	C41V23	[14.3] × [4.7] × [0.6]	一部残存	柾目	両面ともほぼ平坦であるがややアーチ型に曲がる
201	板	C19V16	[12.4] × 1.6 × 0.8	一部残存	柾目	両面とも凹凸が多い
202	板	C40V25	12.2 × [3.0] × [0.5]	一部残存	柾目	表面に凹凸が多い
203	板	C41V11	[12.5] × 2.3 × 0.2	一部残存	板目	両面とも平坦
204	角材	C36V92	[14.7] × [2.2] × [1.2]	一部残存	板目	側縁部に段あり
205	板	C35V95	[14.4] × 2.0 × 0.4	一部残存	板目	片面は平坦 片面はやや凹凸がある
206	板	C39V10	13.3 × 3.0 × 1.5	一部残存か	板目	厚い板材を使用 アーチ型に反る
207	板	C35V93	[15.0] × 3.9 × 1.4	一部残存	板目	断面丸みを帯びた三角形で片面は凹凸が少なく片面は凹凸が多い
208	板	覆土	[18.0] × 3.3 × 1.1	一部残存	板目	両面ともほぼ平坦 端部は斜めに切断
209	板	C32V97	[14.5] × [1.4] × [0.4]	一部残存	板目	表面に凹凸が多い
210	板	覆土	14.5 × 3.8 × 0.7	完形か	板目	アーチ型にやや反る 片面は凹凸が多い
211	板	C43V16	14.2 × 3.4 × 1.9	完形か	柾目	厚い板材を使用 片面は丸みを帯びる
212	板	C41V22	[7.1] × [4.0] × [0.5]	一部残存		両面とも凹凸が少ない
213	板	C19V29	[17.6] × 1.7 × 0.5	一部残存	板目	両面とも平坦
214	板	C26V50	[16.0] × 1.5 × 0.2	一部残存	柾目	両面とも平坦

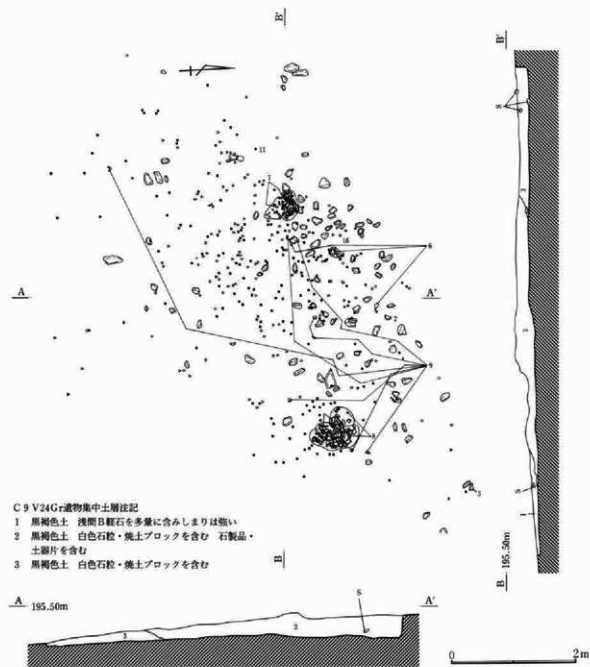
№	部 種	出土位置	法量(cm) 長さ×幅×厚さ	残存状況	木取り	加工形状の特徴
215	板	C19V22	[15.5]×3.6×1.4	一部残存	板目	両面とも凹凸が多い
216	板	C33V10	15.1×3.8×1.9	完形か	板目	両面とも丸みを帯び凹凸がある
217	板	C15V5	14.5×3.9×1.3	完形か	板目	側縁部片削が戻る
218	板	C23V9	[14.6]×[2.9]×[1.0]	一部残存	板目	両面とも平坦
219	板	C13V4	24.6×19.7×4.5	一部残存	板目	アーチ型にやや戻る 両面とも凹凸が少ない
220	板	覆土	23.9×6.5×1.7	一部残存	板目	両面とも凹凸が多い
221	板	C14V8	[15.5]×3.2×0.5	一部残存	板目	両面とも平坦であるが片面には一段あり
222	板	C33V89	11.8×2.9×0.8	完形か	板目	両面とも若干丸みを帯びる
223	板	C36V91	[10.4]×2.5×0.9	一部残存	板目	両面ともやや凹凸がある
224	板	C41V128	8.1×2.1×0.7	完形か	板目	片面は丸みを帯びる
225	板	C27V56	[11.5]×2.5×0.6	一部残存	板目	両面とも凹凸が多い
226	板	覆土	[4.1]×4.1×0.5	一部残存	板目	両面ともほぼ平坦
227	板	覆土	13.8×11.8×4.8	一部残存	板目	厚い板材を使用 両面とも凹凸が多い
228	板	C17V0	8.8×2.2×0.8	一部残存	板目	断面台形を呈す 両面ともほぼ平坦
229	板	C40V10	[10.4]×2.9×0.5	一部残存	板目	両面ともほぼ平坦
230	板	C34V91	[7.9]×2.5×1.0	一部残存	板目	片面は丸みを帯び片面はくぼむ
231	板	覆土	[9.4]×2.1×0.6	一部残存	板目	片面はやや丸みを帯びる
232	板	C41V125	7.5×2.9×0.5	一部残存	板目	両面ともほぼ平坦
233	板	C36V97	6.1×2.0×0.3	完形か	板目	両面とも平坦 両端は直角に加工
234	板	覆土	11.5×2.3×1.0	一部欠損	板目	断面薄い三角形で両面ともほぼ平坦
235	板	C29V51	[11.5]×2.0×0.4	一部残存	板目	両面ともほぼ平坦
236	板	C20V40	[8.7]×3.2×0.7	一部残存	板目	両面ともほぼ平坦 端部は直角に加工
237	板	覆土	[10.0]×2.7×0.4	一部残存	板目	両面とも平坦
238	不明	覆土	9.5×6.2×2.1	完形か	板目	両面とも凹凸が多い
239	板	覆土	[8.5]×7.2×1.4	一部残存	板目	両面ともやや丸みを帯び凹凸が多い
240	板	覆土	[9.6]×[3.5]×[0.6]	一部残存	板目	両面ともほぼ平坦
241	板	C38V90	8.7×[1.6]×[0.6]	一部残存	板目	片面はほぼ平坦
242	板	C33V90	[7.0]×2.5×0.7	一部残存	板目	片面はやや丸みを帯びる
243	板	C20V94	[7.7]×2.5×0.5	一部残存	板目	片面に浅い段あり
244	板	C35V86	[6.7]×1.4×0.5	一部残存	板目	両面ともほぼ平坦
245	板	C40V97	[8.9]×2.6×0.4	一部残存	板目	両面とも平坦 片面側縁部に浅い段あり
246	板	C16V3	5.8×2.5×0.3	一部残存	板目	アーチ型にやや戻る
247	板	C16V3	5.8×1.9×0.7	一部残存	板目	アーチ型にやや戻る
248	板	C36V97	[4.1]×1.7×2.5	一部残存	板目	片面は丸みを帯びる
249	板	C36V95	[7.1]×2.4×0.5	一部残存	板目	片面は丸みを帯びる 片面には段あり
250	板	C31V65	[6.2]×1.3×0.3	一部残存	板目	両面とも平坦
251	板	覆土	6.0×3.8×0.5	一部残存	板目	両面ともほぼ平坦
252	板	C37V93	[5.4]×[1.3]×[0.4]	一部残存	板目	表面に凹凸が多い
253	板	C22V10	[4.9]×0.8×0.76	一部残存	板目	断面台形に近い
254	板	覆土	[4.3]×2.9×0.8	一部残存	板目	両面ともほぼ平坦

(8) 遺構外出土遺物

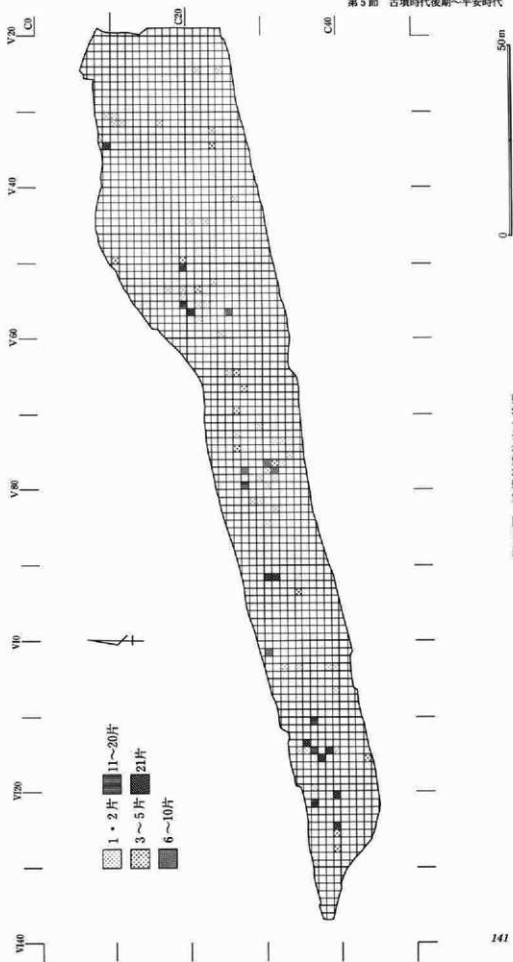
遺構外や中世以降の遺構からも多くの遺物が出土している。C9 V24Gr付近には特に集中しており、土師器環・甕が多量に出土している。接合関係の判明するものも4点ある。他に鏝も多数出土している。

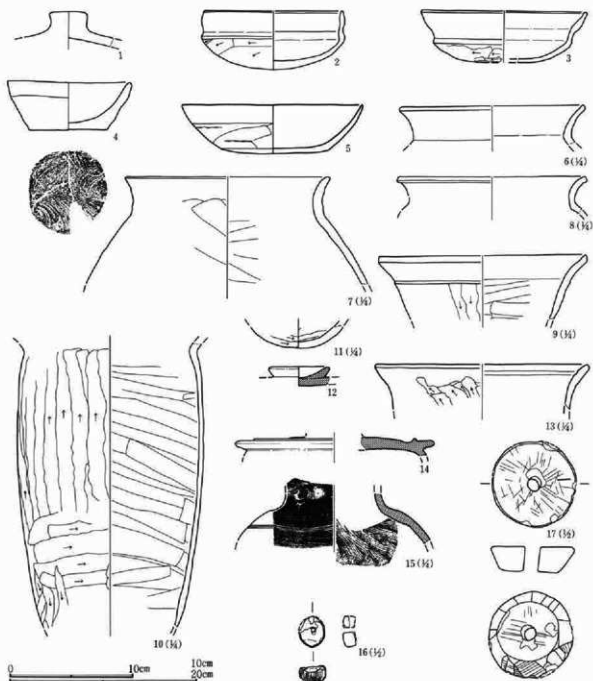
他の遺構外出土遺物は、北側の微高地部分から多く出土しており、特に西端部に多くなっている。

出土遺物 土師器環281点、蓋1点、高坏2点、甕1,385点、小型甕8点、台付甕2点、甌4点、須恵器環17点、蓋3点、埴7点、瓶6点、甕40点、鉢1点、計1,757点が出土している。



第105図 C9 V24Gr付近遺物出土状況





第107図 遺構外出土遺物

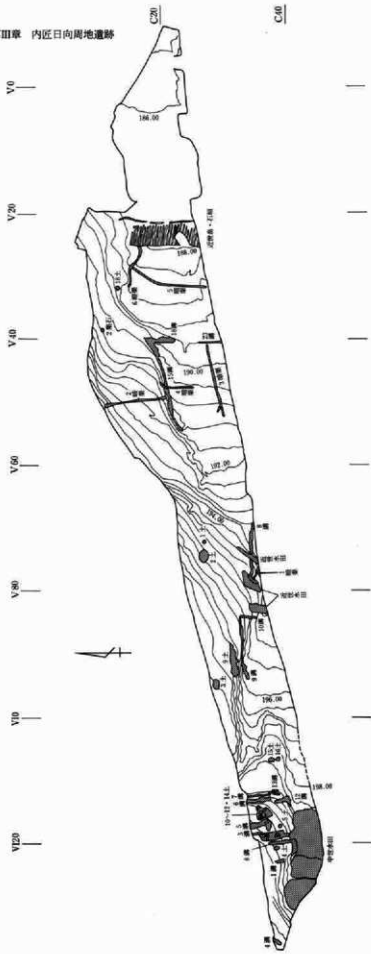
遺構外出土土器観察表

No.	種別 器種	出土 位置	法量 ①口径②底径 ③高さ④残存	①色調(表) ②色調(裏) ③焼成 ④胎土	調 整	分類	備 考
1	土師器 蓋	C38VI25	総径2.1cm ④紐~天井部	①②橙 ③良好 ④細 粗砂を少量含む	内外面著しく摩滅	III	
2	土師器 坏	C9V24	①(11.6cm) ② - ③(4.6cm) ④体~底1/3	①②橙 ③良好 ④普通 細砂・粗砂を少量含む	口縁部横ナゲ 体~底部外面磨削 り内面ナゲ	I 1	
3	土師器 坏	C9V24	①(13.6cm) ② - ③ 4.6cm ④口~底1/3	①②にぶい橙 ③良好 ④普通 粗砂を含む	口縁部横ナゲ 体~底部外面磨削 り内面ナゲ	I 1	
4	土師器 坏	C30VI2	① 9.8cm ② 6.3cm ③ 9.7cm ④ほぼ完形	①②にぶい褐 ③良好 ④普通 粗砂・雲母を少量含む	口縁調整 底部回転糸切り □ I 縁部横ナゲ	I	内外側一 部黒変

No	種別 器種	出土 位置	法量 ①口径②底径 ③高さ④残存	①色調(表) ②色調(裏) ③焼成 ④胎土	調 型	分類	備考
5	土師器 杯	15号溝	①(14.5cm) ② 8.5cm ③ 3.8cm ④口～底1/2	①②にぶい黄褐色 ③良好 ④普通 粗砂を少量含む	口縁部横ナデ 体～底部外面篋削り内面ナデ 表面摩滅著しい	I 2	
6	土師器 壺	C9V24	①(20.0cm) ② - ③ - ④口縁部片	①②にぶい黄褐色 ③良好 ④粗 細砂・塵を僅かに含む	口縁部横ナデ	V	外面一部 黒皮
7	土師器 壺	C9V24	①(21.8cm) ② - ③ - ④口～肩部片	①②明褐色 ③良好 ④粗 粗砂・片岩を含む	口縁部横ナデ 胴部外面篋削り内面篋ナデ	V 2	
8	土師器 壺	C9V24	①(20.0cm) ② - ③ - ④口縁部片	①②にぶい褐色 ③良好 ④普通 粗砂・塵を僅かに含む	口縁部横ナデ	V	
9	土師器 甕?	C9V24	①(22.0cm) ② - ③ - ④口縁部片	①橙 ②にぶい橙 ③良好 ④粗 細砂・塵を含む	口縁部横ナデ 胴部外面篋削り内面篋ナデ	IX	
10	土師器 壺	C32V13	① - ② - ③ - ④胴部片	①にぶい黄褐色 ②橙 ③良好 ④粗 粗砂・塵・片岩を含む	口縁部横ナデ 胴部外面篋削り内面篋ナデ	V 1	外面一部 黒皮
11	土師器 壺	C9V24	① - ② - ③ - ④底部	①明褐色 ②にぶい橙 ③良好 ④粗 細砂・塵・片岩を含む	外面篋削り内面ナデ	V 1	
12	須恵器 蓋	15号溝	直径4.9cm ④底部	①②灰 ③還元焰 良好 ④細 細砂を少量含む	クロコ調整 鋳貼付け	III	
13	土師器 壺	12号溝	①(22.0cm) ② - ③ - ④口縁部片	①灰黄 ②淡黄 ③良好 ④普通 粗砂を少量含む	口縁部横ナデ 胴部外面篋削り内面ナデ 口縁部内面に改線1条	V 1	
14	須恵器 蓋	C30V12	天井部径(16.0cm) ④天井部片	①灰オリーブ ②灰黄 ③良好 ④細 細砂を含む	クロコ調整 天井部回転篋削り	III	
15	須恵器 壺	C40V15	① - ② - ③ - ④胴部片	①②灰白 ③良好 ④細 夾雑物含まず	クロコ調整 胴部外面ナデ後回転カキ目肌 内面青緑文当て具肌	V	

遺構外出土石器観察表

No	器 種	出土位置	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	残存状況	石材	特 徴
16	白玉	C9V24	1.6	1.4	0.7	[2.1]	3/4	滑石	側面粗い研磨
17	紡錘車	C29V78	4.5	4.5	1.3	44.9	完 形	かんらん岩	側面一部鬚状工具肌



新108図 中世以降遺構位置図

第6節 中世以降

中世以降の遺構は、土坑・溝・暗渠・集石が検出されている。

(1) 土坑

土坑は13基検出されている。

①分布 調査区南側やや北寄りに12基集中しており、調査区北側やや東よりには小規模な土坑が数十基集中している。他は、調査区東側と南側に散在している。

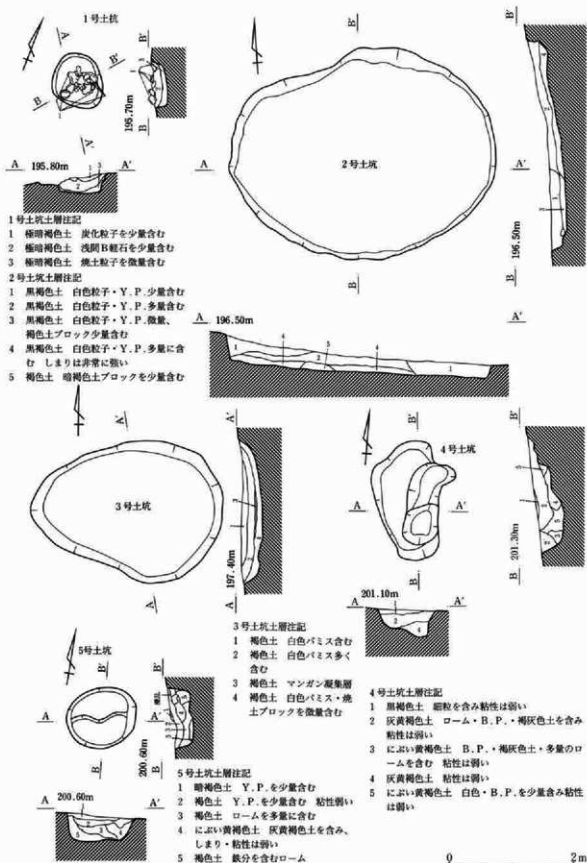
②平面形態 楕円形が5基で最も多く、続いて円形・不整形3基、隅丸長方形2基となっている。

③規模 長さ0.56～4.76m平均2.56m、短径0.56～4.64m平均1.65m、深さ8～128cm平均46cm、面積0.3～19.7㎡平均4.6㎡である。

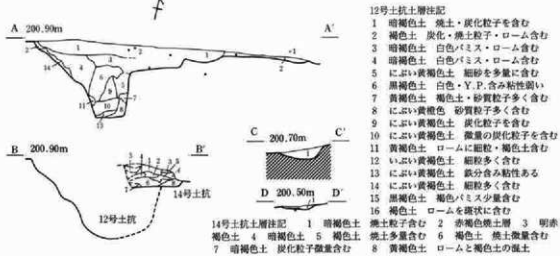
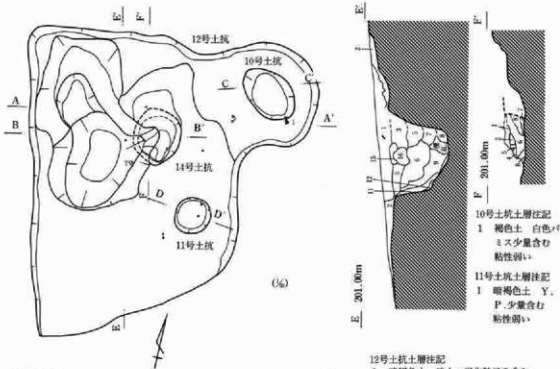
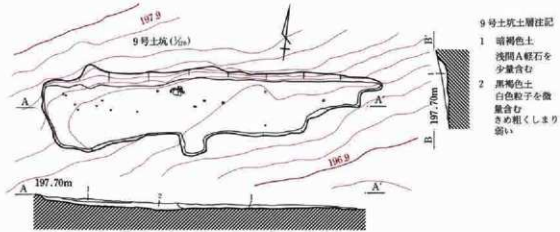
④時期 出土遺物がほとんど無く、時期不明の土坑がほとんどであるが、1号土坑からは石臼が出土しているため、中世～近世の土坑と考えられる。また、12号土坑から土師器杯・壺等の破片が出土しているが、小破片であり、覆土上層の出土であるため、土坑に伴うものではないと考えられる。

中世以降土坑一覧表

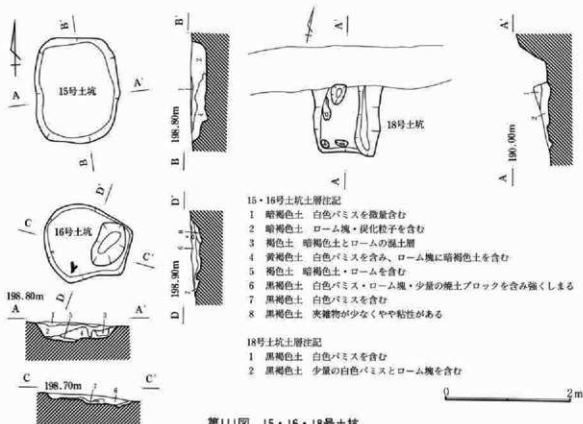
No	位置 (Gr)	重複関係	平面形態	規模 (m)	深さ (cm)	面積 (㎡)	主軸方位	備考
1	C26-V71・72	なし	楕円形	0.92×0.76	30	0.5	N-40°-W	
2	C25-27-V74-76	なし	楕円形	4.26×3.34	70	10.7	N-90°-W	
3	C27-28-V94-96	なし	楕円形	3.06×2.24	40	5.0	N-82°-W	
4	C37-38-V120-21	なし	楕円形	1.86×1.32	60	1.6	N-3°-W	
5	C37-38-V15-16	なし	円形	1.12×0.96	44	0.9	N-82°-W	
9	C30-31-V88-93	なし	不整形	10.84×2.72	44	19.7	N-79°-W	
10	C34-V114	12号土坑より新	楕円形	1.00×0.64	20	0.5	N-63°-W	
11	C35-V114	12号土坑より新	円形	0.56×0.56	8	0.3	N-90°-W	
12	C34-37-V114-16	10・11・14土坑より古	不整形	4.76×4.64	128	16.0	N-23°-W	
14	C35-V115	12号土坑より新	円形	0.84×0.74	50	0.6	N-90°-W	
15	C36-37-V15-16	なし	隅丸長方形	1.66×1.32	30	2.0	N-7°-W	
16	C37-38-V15-16	なし	不整形	1.38×1.24	22	1.3	N-69°-W	
18	C12-13-V31-32	なし	隅丸長方形	1.04×1.00	58	1.0	N-11°-W	



第109図 1～5号土坑



第110図 9～12・14号土坑



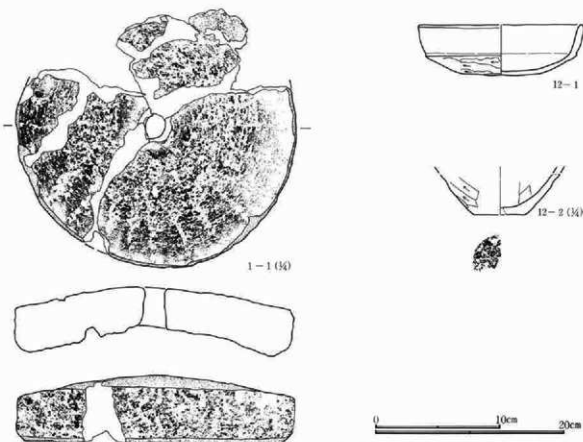
15・16号土坑土層注記

- 1 暗褐色土 白色パミスを微量含む
- 2 暗褐色土 ローム塊・炭化粒子を含む
- 3 褐色土 暗褐色土とロームの混土層
- 4 黄褐色土 白色パミスを含み、ローム塊に暗褐色土を含む
- 5 褐色土 暗褐色土・ロームを含む
- 6 黒褐色土 白色パミス・ローム塊・少量の焼土ブロックを含み強くしまる
- 7 黒褐色土 白色パミスを含む
- 8 黒褐色土 夾雑物が少なくやや粘性がある

18号土坑土層注記

- 1 黒褐色土 白色パミスを含む
- 2 黒褐色土 少量の白色パミスとローム塊を含む

第111図 15・16・18号土坑



第112図 1・12号土坑出土遺物

12号土坑出土土器観察表

No	種別 器種	法量 ①口径②底径 ③高さ④残存	①色調(表) ②色調(裏) ③焼成 ④胎土	調 整	分 類	備 考
12	土師器	①(13.1cm) ②-	①②特 ③良好	口縁部横ナデ 体~底部外面削り内面ナ	I	
1	環	③ 4.0cm ④口~底1/4	④細 細砂を少量含む	デ 器壁厚減著しい	I	
12	土師器	①-	①②灰 ③良好	胴~底部外面削り内面ナデ	V	
2	甕	③-	④粗 粗砂・糠を多く含む		I	

1号土坑出土土器観察表

No	器 種	直径 (cm)	孔径 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	残存 状況	石 材	特 徴
1-1	石 臼	30.0	2.1	7.1	[5150]	3/4	溶結凝灰岩(風見石?)	折挽き臼白田 厚減著しいが6分割溝4~5本か

(2) 溝

溝は18条検出されている。

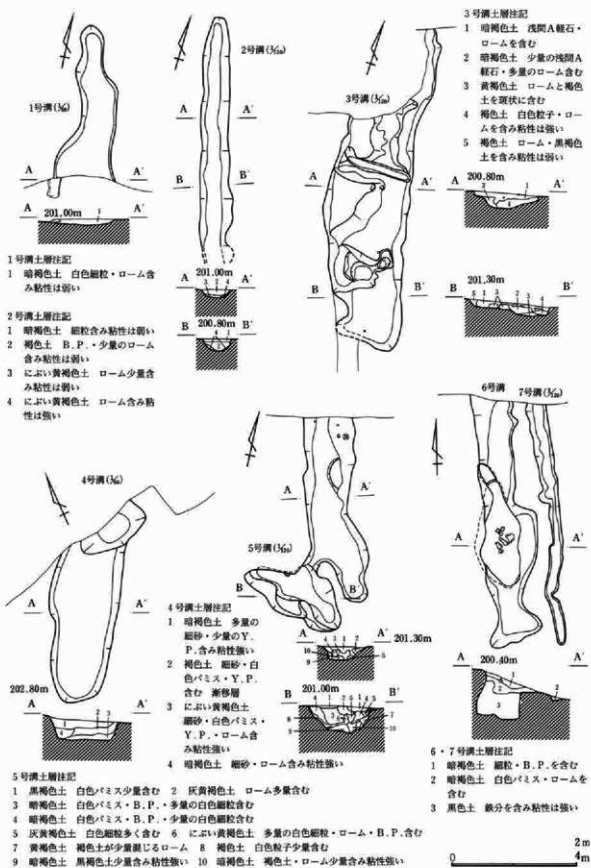
①分布 調査区西側の微高地上に10条、中央部の微高地の縁辺部に3条、東の谷津上および谷津縁辺部に4条検出されている。特に西側の微高地上に集中している。

②規模 調査区内で完結しているものは9・10・13・15・18号溝の5条だけで、他は調査区外に続いているか、他の遺構との重複により、全体は不明となっている。長さは、調査区内で完結しているものだけで、3.90~32.80m平均14.7m、調査区外に続くものも含めると、2.24~39.28m平均11.50mとなる。幅は、最小0.20~1.52m平均0.51m、最大0.40~3.16m平均1.48m、深さ4~152cm平均41cmである。

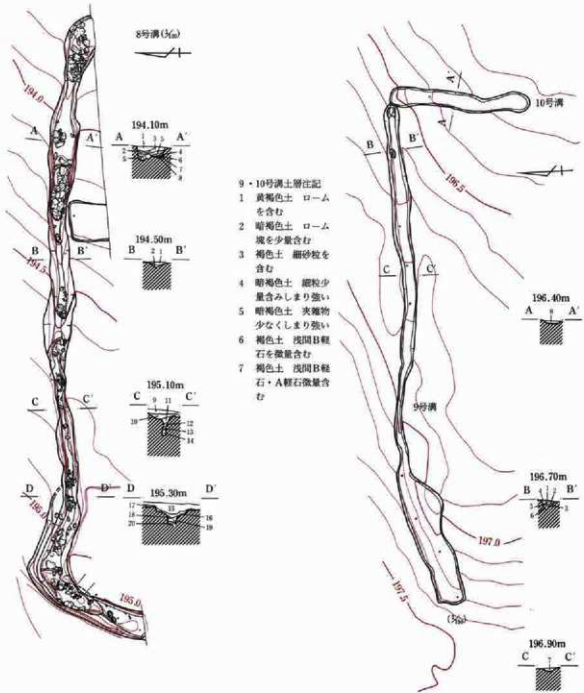
③時期 出土遺物が少ないものが多いため、時期の分かるものは少ないが、12号溝からは、破片であるが内耳鍋が出土しているため中世の可能性があり、8号溝からは近世陶器が出土し、15号溝は、覆土最上層に浅間A軽石が混入し、近世陶器も出土しており、29号溝からも近世陶器が出土しているため、近世の溝の可能性が高い。

中世以降溝一覧表

No	位 置 (Gr)	重複関係	長さ (m)	幅 (m)	深さ (cm)	走 向	出 土 遺 物
1	C37-38-V22-23	なし	[2.44]	0.32~0.96	8	N-16°-W	土師器環5, 甕16
2	C36-40-V19-20	なし	[7.68]	0.28~1.04	4	N-5°-W	
3	C33-38-V117-19	なし	[10.16]	1.52~2.72	56	N-89°-W	陶器碗2, 土師器1, 縄文1, 剥片1
4	C36-38-V135-36	なし	[3.30]	0.24~1.1	40	N-35°-E	
5	C33-36-V116-18	なし	[6.72]	0.56~2.08	84	N-17°-W	
6	C32-36-V112-13	なし	[7.68]	0.84~1.80	152	N-6°-W	土師器壺3, 縄文土器1
7	C33-36-V112	なし	[7.60]	0.29~0.64	16	N-6°-W	
8	C33-35-V69-78	近水田より古	[17.4]	0.28~1.28	68	N-86°-W	陶器皿2, 土師器7, 須恵壺2, 石皿1, 剥片4
9	C31-34-V84-94	10号溝と重複	[19.85]	0.20~1.55	35	N-83°-E	軟陶内耳1, 陶器碗1, 陶器壺2, 土師器1, 須恵壺1, 縄文土器1, 剥片3
10	C32-34-V83-84	9号溝と重複	[5.45]	0.55~0.80	10	N-4°-E	磁器碗1
11	C39-41-V111-20	1号戸・12溝と重複	[17.36]	0.80~3.04	40	N-81°-E	軟質陶器鉢1
12	C37-39-V112-14	11溝と重複	[4.80]	0.84~3.16	76	N-15°-W	軟質陶器内耳鍋1, 土師器環1, 甕1, 瓶1
13	C37-39-V111-12	なし	[3.90]	0.26~0.42	24	N-9°-E	
14	C37-39-V111	なし	[2.24]	0.32~0.40	16	N-5°-W	
15	C16-22-V39-54	1・2号戸・18溝・4遺構と重複	[32.8]	0.64~2.64	32	N-70°-E	軟陶内耳3, 銅鉢1, 陶器碗7, 皿1, 甕2, 磁器碗3, 皿1, 瓶1, 土師器9, 甕50, 須恵壺2, 蓋1, 剥片等8
18	C17-23-V39-40	15号溝と重複	[11.28]	0.64~1.76	24	N-2°-W	
23	C25-29-V40	なし	[7.12]	0.24~0.36	8	N-2°-W	
29	C11-17-V21-41	なし	[39.28]	0.40~0.96	7	N-77°-E	陶器碗1, 土師器壺1



第113図 1～7号溝

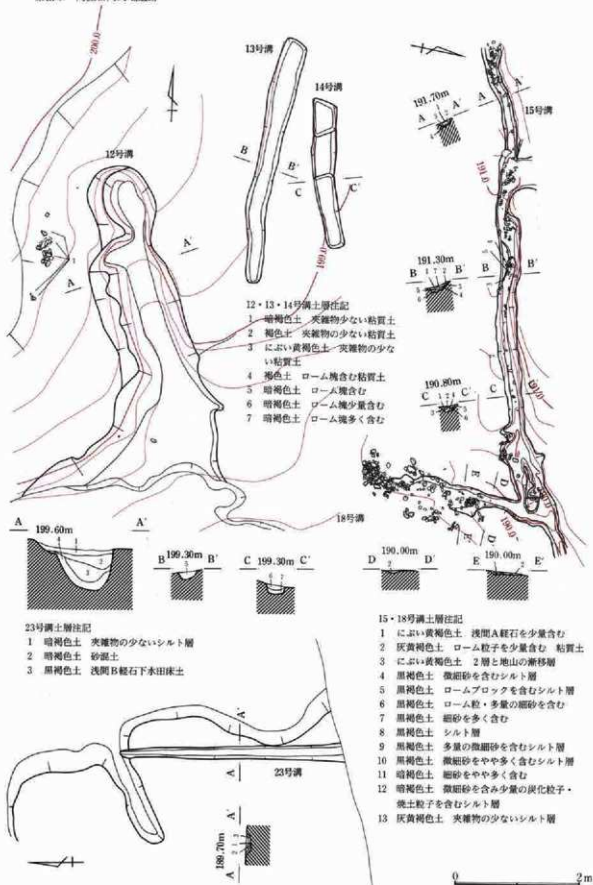


8号溝土層注記

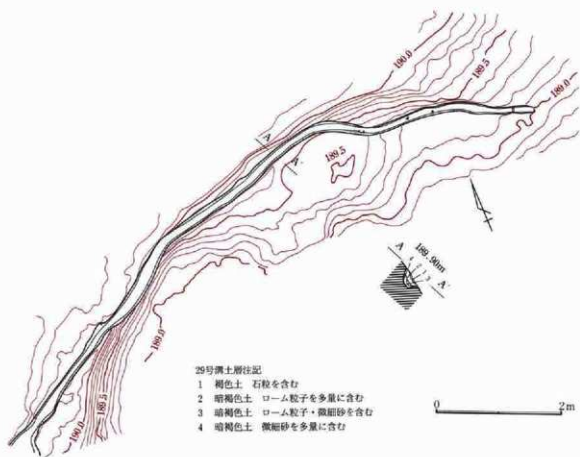
- 1 暗褐色土 浅間目軽石多く含む上面は強くなる
- 2 褐色土 シルト質でややしめる
- 3 暗褐色土 シルト質で砂粒少量含む
- 4 によい褐色土 砂粒含む
- 5 暗褐色土 砂粒含む
- 6 暗褐色土 砂質層
- 7 黒褐色土 シルト層
- 8 によい褐色土 砂質層
- 9 暗褐色土 浅間目軽石多く含む強くなる
- 10 褐色土 浅間目軽石少量含みやヤシルト質
- 11 灰褐色土 シルト質でローム塊少量含む
- 12 灰褐色土 シルト質でローム塊多く含む
- 13 明赤褐色土 鉄分沈着の砂粒含む
- 14 赤褐色土 鉄分沈着の砂粒含む
- 15 暗褐色土 浅間目軽石を多量に、赤褐色土ブロック (鉄分沈着層) を少量含む
- 16 暗褐色土 浅間目軽石・赤褐色土ブロック (鉄分沈着層) 微量含む
- 17 暗褐色土 浅間目軽石を少量、赤褐色土ブロック (鉄分沈着層) を多量含む
- 18 黒褐色土 粒子をほとんど含まず
- 19 黒褐色土 赤褐色土 (鉄分沈着層) 多量に含む
- 20 黒褐色土 粘性は強い



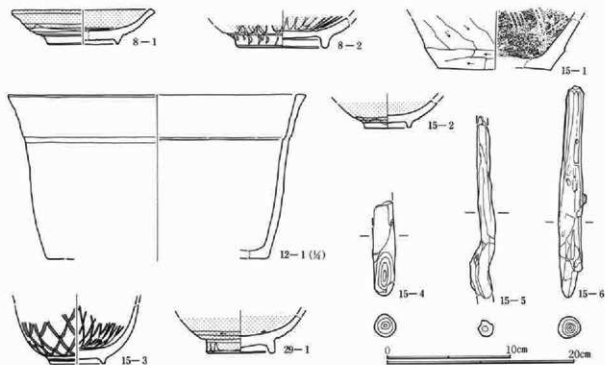
第114図 8～10号溝



第115図 12～15・18・23号溝



第116図 29号溝



第117図 8・12・15・29号溝出土遺物

溝出土土器観察表

No	類別 器種	①口径②底径 ③高さ④残存	①色調(表) ②色調(裏) ④胎土	③焼成	調	整	分類	備考
8	陶器	①(10.0cm) ②(5.6cm)	素地 灰白	③ 洗黄 ④良好	ロクロ調整	削り出し高台	内面重ね焼き	
1	皿	③ 2.7cm ④口～底1/3	④細 細砂含む		瓶	外面底部保付着		
8	陶器	① - ② 7.0cm	素地 洗黄橙	③ 輪 オリーブ黄	ロクロ調整	削り出し高台		
2	皿	③ - ④体～底1/2	④細 細砂含む		内面重ね焼き			
12	土新器	①(31.8cm) ②(23.6cm)	①黒 ②にぶい黄褐	③良好	口縁部横ナゲ	胴～底部外面削り内面ナゲ		
1	内耳鍋	③(17.2cm) ④口～底1/3	④普通	粗砂を少量含む	外	外面保付着		
15	軟黄陶器	① - ②(12.0cm)	①黒褐 ②灰	③良好	体～底部外面ナゲ	後面削り内面ナゲ		
1	罐鉢	③ - ④底部片	④普通	粗砂を少量含む	内	面使用痕有り		
15	磁器	① - ② 3.8cm	素地 洗黄	③ 輪 明黄褐 ④良好	ロクロ調整	削り出し高台		
2	碗	③ - ④体～底部	④普通	粗砂を少量含む				
15	磁器	① - ② 4.4cm	素地 灰白	③ 輪 青灰 ④良好	ロクロ調整	削り出し高台		
2	碗	③ - ④体～底1/2	④細	夾雑物含まず				
29	陶器	① - ② 5.3cm	素地 灰白	③ 輪 黒褐 ④良好	ロクロ調整	削り出し高台		
1	碗	③ - ④体～底部	④細	夾雑物含まず				

溝出土木器観察表

No	器種	法量(cm) 長さ×幅×厚さ	残存状況	木取り	加工形状の特徴
15	4	9.6 × 2.5 × 2.4	一部残存	丸木	丸木を斜めに切断して枕にしたものか
15	5	19.2 × 径1.6	両端部欠損	丸木	途中2段に曲がる
15	6	22.3 × 2.4 × 2.2	先端部欠損	丸木	丸木を使用し端部を調整

(3) 暗渠

暗渠は8条検出されている。

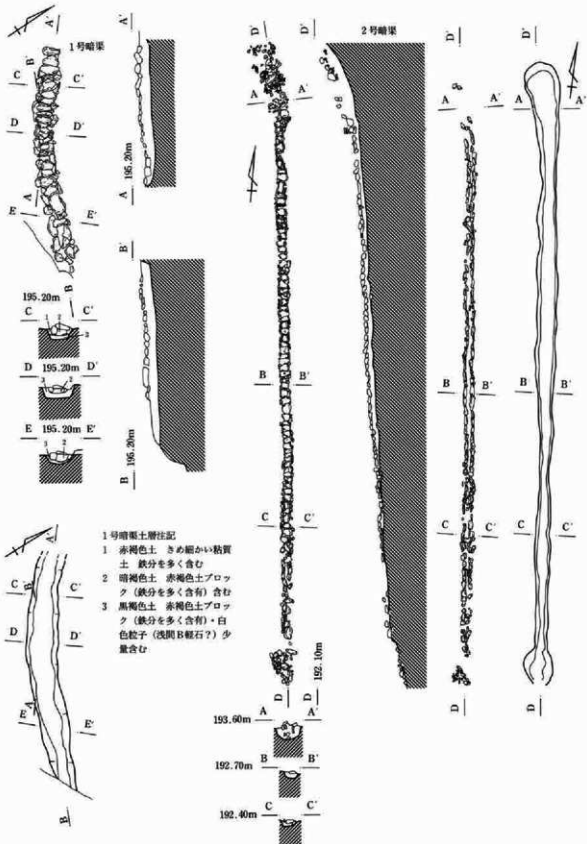
①分布 中央部の微高地上に1条、東側の微高地上に1条、谷津埋没土上に6条検出されており、谷津付近の低地に存在するものが多くなっている。

②規模 2～5号暗渠は調査区内で完結しており、1・6～8号暗渠は調査区外へ続くか重複により、全体は不明である。長さは、調査区内で完結しているものだけで、10.88～24.96m平均19.68m、調査区外へ続くものも含めると、2.40～24.96m平均14.2mとなる。幅は、最小0.12～0.40m平均0.27m、最大0.36～1.40m平均0.72m、深さ20～44cm平均30cmとなっている。

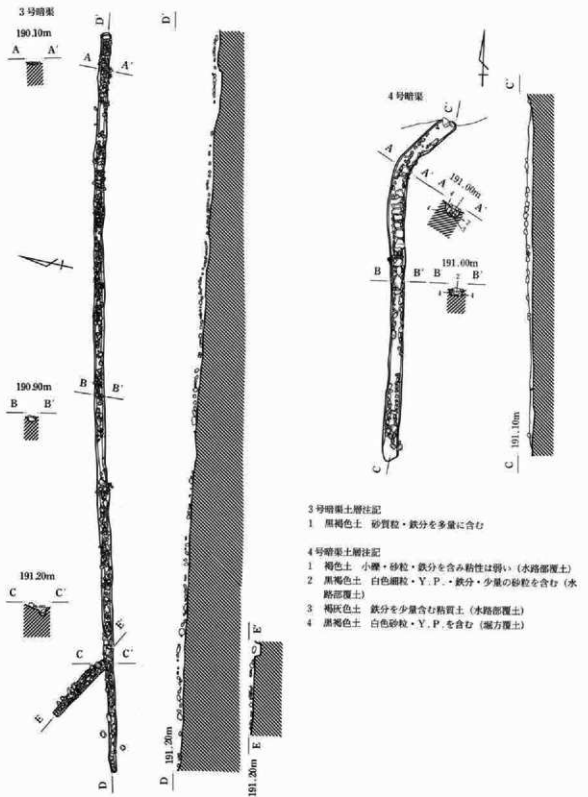
③時期 石組に使用している石以外に出土遺物がほとんど無いため、詳細な時期は不明であるが、4号暗渠からは石臼が、5号暗渠からは板碑が、6号暗渠からは、五輪塔の一部がそれぞれ石組として使用されているため、中世～近世のものである可能性が高い。

中世以降暗渠一覧表

No	位置 (Gr)	重複関係	長さ (m)	幅 (m)	深さ (cm)	走向	出土遺物
1	C35-36-V76-78	近水田より古	[3.56]	0.16～0.52	20	N-62°-W	磨石1、石皿1、多孔石1、不明石器1
2	C11-21-V49-50	9往より新	[19.6]	0.28～1.08	40	N-8°-W	陶器1、土師器1、杯1、縄文1、石皿1
3	C27-30-V40-52		[23.28]	0.16～0.36	36	N-77°-E	
4	C21-26-V46-47	15-30溝より新	[10.88]	0.40～0.56	32	N-19°-E	石臼1、土師器1、杯1、石皿3、剃片2
5	C15-27-V28-31	6溝より古-22溝より新	[24.96]	0.32～0.52	24	N-25°-E	板碑1
6	C15-17-V20-31	21溝-5暗渠より古	[22.92]	0.12～1.40	44	N-85°-W	五輪塔1、須恵器壺1、不明石器1
7	C14-V19-20	なし	[2.4]	0.28～0.40	20	N-88°-E	縄文土器1
8	C12-13-V19-21	なし	[5.80]	0.40～0.92	20	N-82°-W	土師器壺1



第118図 1・2号暗渠



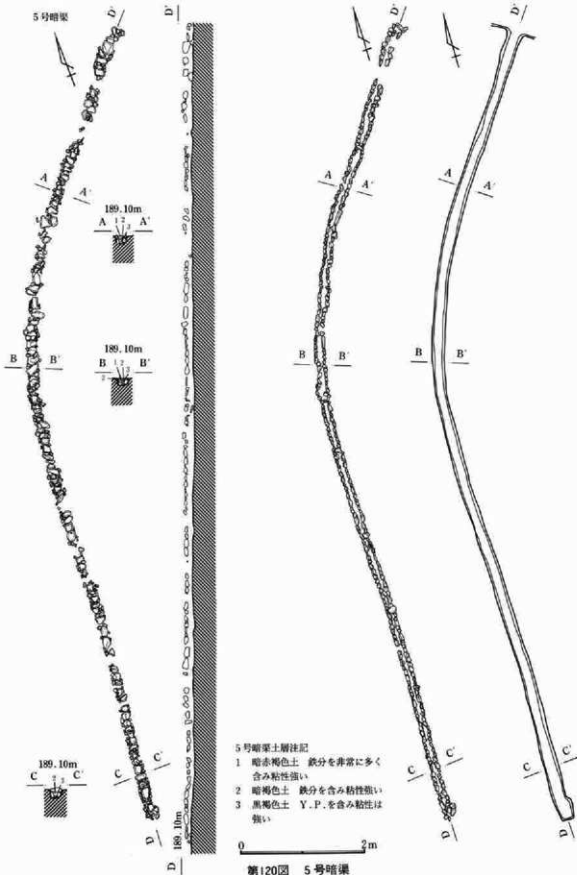
3号暗渠土層注記

- 1 黒褐色土 砂質粒・鉄分を多量に含む

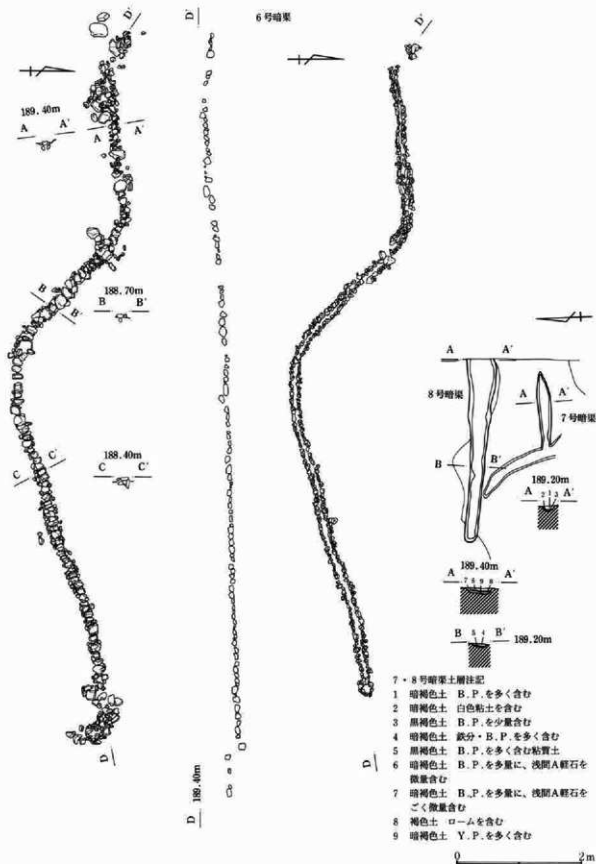
4号暗渠土層注記

- 1 褐色土 小礫・砂粒・鉄分を含み粘性は弱い(水路部覆土)
- 2 黒褐色土 白色細粒・Y.P.・鉄分・少量の砂粒を含む(水路部覆土)
- 3 褐色土 鉄分を少量含む粘質土(水路部覆土)
- 4 黒褐色土 白色砂粒・Y.P.を含む(堀方覆土)

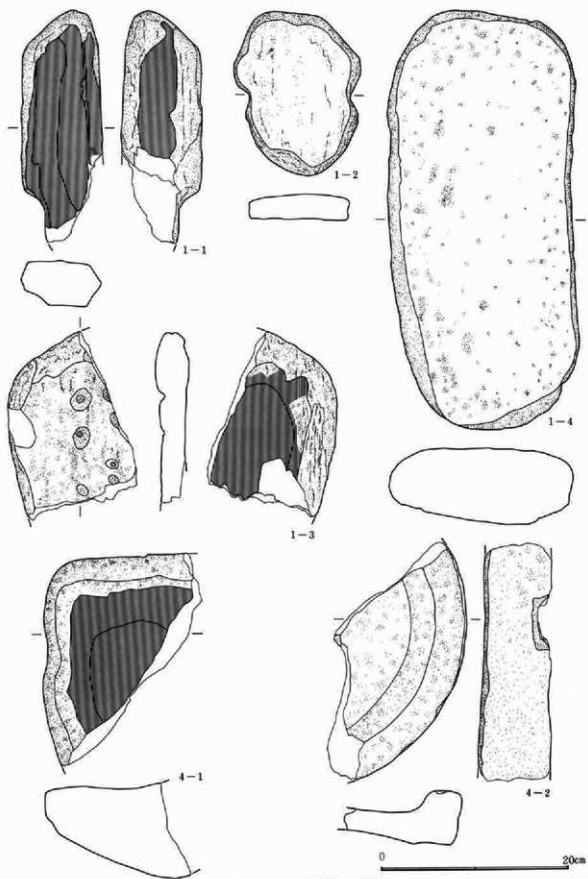
第119図 3・4号暗渠



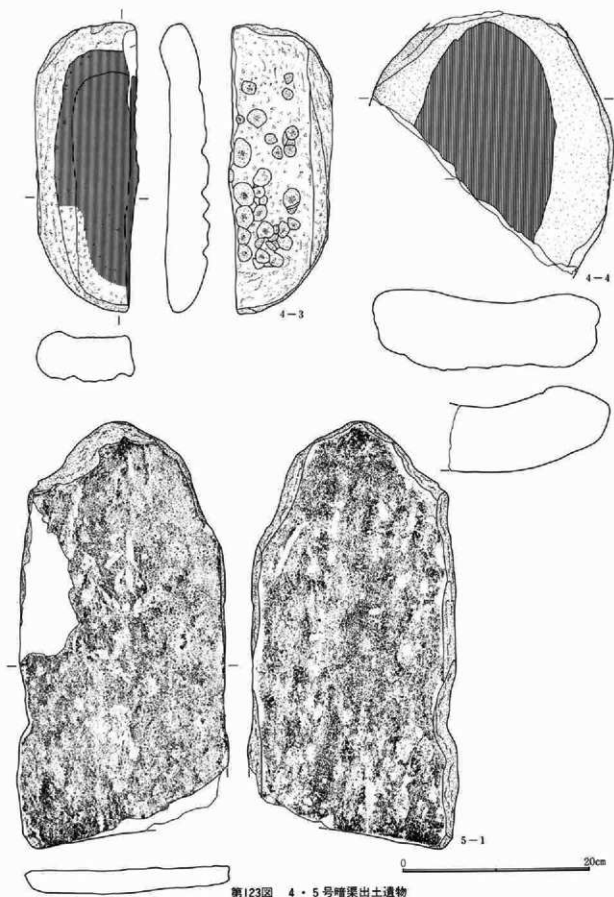
第120図 5号暗渠



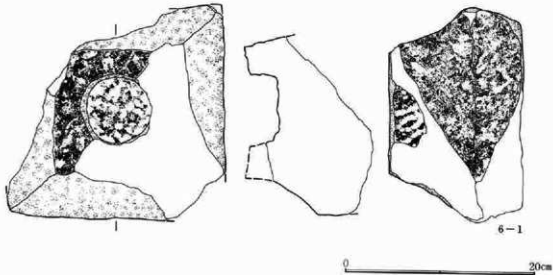
第121図 6～8号暗渠



第122図 1・4号噴渠出土遺物



第123図 4・5号暗渠出土遺物



第124図 6号暗渠出土遺物

暗渠出土石器観察表

No	器種	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	残存状況	石材	特徴
1-1	砥石	24.5	8.7	4.7	[1597]	ほぼ完形	緑色片岩	両面に研ぎ面
1-2	不明	17.3	13.5	2.6	1014	完形	雲母石英片岩	両側面に抉りあり
1-3	石皿	[19.7]	[13.7]	3.6	[1300]	1/4	緑色片岩	片面に磨面、片面にくぼみ7個以上
1-4	台石	44.1	19.5	8.0	13350	完形	安貴安山岩	
4-1	石皿	[22.5]	[16.9]	10.0	(4500)	1/2	粗粒安山岩	片面に磨面
4-2	石臼	徑(23.0)	[14.1]	5.6	(1653)	1/4	凝灰岩質凝灰岩	粉挽き臼上臼 調・分割不明
4-3	石皿	[30.5]	[10.9]	4.5	(2960)	1/2	緑色片岩	片面に磨面、片面にくぼみ35個以上
4-4	石皿	[27.7]	[24.2]	8.6	(7550)	2/3	粗粒安山岩	片面に磨面
5-1	板碑	45.1	22.5	2.6	(5150)	ほぼ完形	緑色片岩	阿弥陀三尊種子 主尊のみ蓮台に坐る 裏面に工具痕あり
6-1	五輪塔	23.5	[23.0]	13.6	(4750)	3/4	牛伏砂岩	火輪 一部工具痕残る

(4) 集石遺構

時期不明の集石遺構が1基検出されている。

2号集石遺構

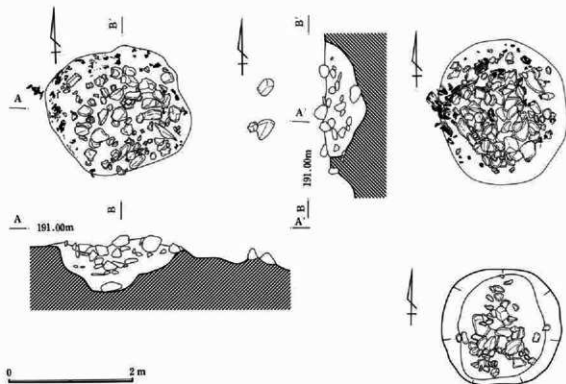
位置 C10-V38Gr 重複 なし 平面形態 円形

規模 1.18×1.04m (集石・炭化物の範囲) 0.95×0.90m (掘り方) 深さ 36cm

主軸方位 N-87°E

概要 約1mの円形の範囲から長径5～20cmの礫が多量に出土している。また礫の間および周囲から、炭化物が多量に出土している。掘り方は、集石・炭化物の範囲よりも一回り小さく、平面形態は円形に近いが、断面は底部が丸みを帯び、鍋底状を呈している。

出土遺物 集石・炭化物以外に出土遺物は無かった。



第125図 2号集石

(5) 水田・畠

中世水田

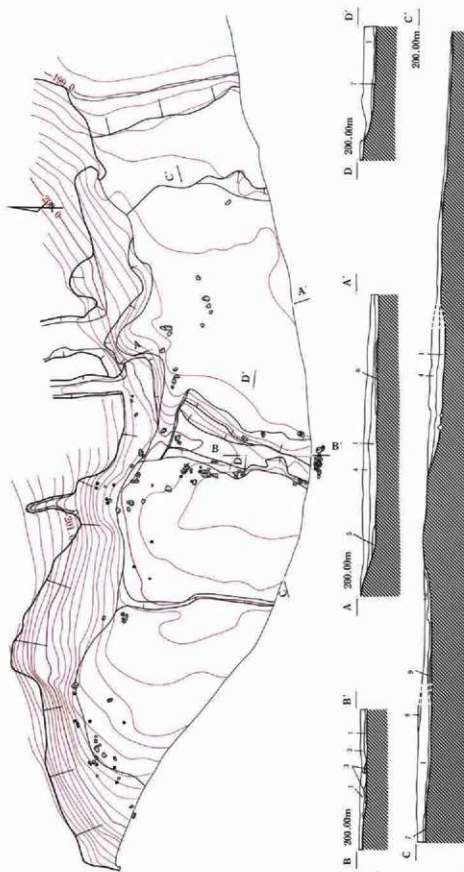
位置 C37~44-VII1~32Gr

重複 2号谷津状遺構・浅間B軽石下水田・11号溝・1号井戸より新、1~3号溝と重複

規模 42.6×[15.8] m 深さ 40cm 主軸方位 N-84°-W

概要 調査区南西部、浅間B軽石水田の上部に作られている。全長が約42mと、浅間B軽石下水田に比べ全体の規模がかなり小さくなっている。南側は調査区外のため南北長は不明である。水田は3枚検出されており、各水田の東西長は、西から9.3m・7.6m・12.2mとなっており、浅間B軽石下水田よりも1枚がかなり大きくなっている。西から東に向かって階段状に作られているが、西から2枚目と3枚目の間に、幅2.5~4.0m、高さ45cmの畦が検出されている。また東の水田から木製杭2本が出土している。

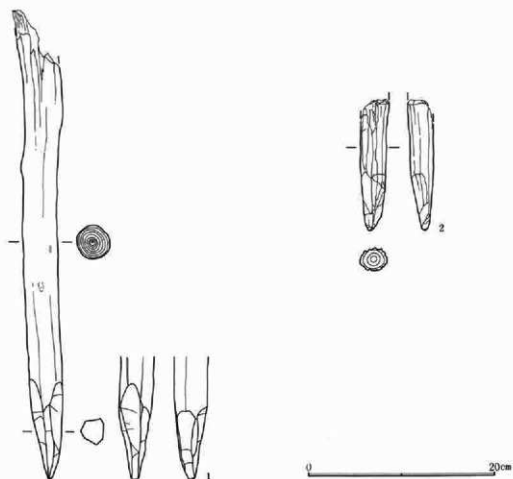
出土遺物 中世の遺物は、軟質陶器内耳鍋1点が出土しているだけだが、他に土器は土師器環10点、甕87点、台付壺2点、甕1点、計100点、須恵器環2点、埴1点、蓋1点、瓶1点、甕2点、鉢1点、計8点、縄文土器2点、石器は剥片4点、黒曜石剥片1点が出土している。



- 中世水田 土層注記
- 1 褐灰色土 砂質粒子多く含み粘性強い
 - 2 浅間A軽石ブロック
 - 3 褐灰色土 砂質粒子多く、白色粘土塊少量含み粘性強い
 - 4 褐灰色土 Y、P、少量の鉄分を含む砂質層 水田土壌
 - 5 におい黄褐色土 多量の白色粘土に鉄分含む
 - 6 褐灰色土 細砂・鉄分含むシルト層
 - 7 褐灰色土 砂質粒子多く含み粘性強い
 - 8 暗褐色土 少量の浅間A軽石・B、P、ローム塊含む
 - 9 水田床土

第126図 中世水田

0 25m 10m



第127図 中世水田出土遺物

中世水田出土木器観察表

No	器種	出土位置	法量 (cm)		残存状況	木取り	加工形状の特徴
			長さ × 幅 × 厚さ				
1	杭	C43V120	49.4 × 3.6 × 3.5		一部欠損	丸木	丸木の先端部を断面六角形に削って杭にしている
2	杭	C43V120	13.8 × 径3.0		先端部残存	丸木	丸木の先端部を尖らせて杭にしている

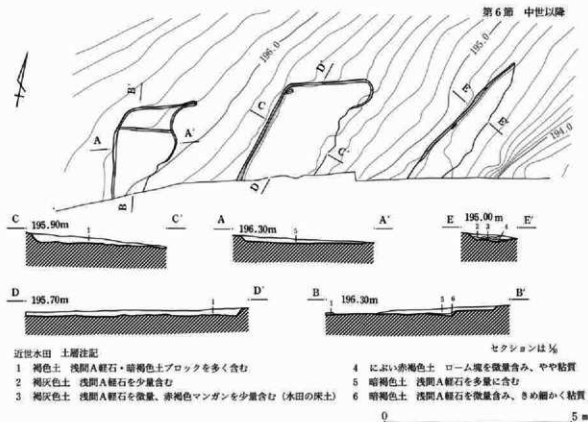
近世水田

位置 C31~36-V73~83Gr 重複 3号住居跡・8号溝・1号暗渠・浅間B軽石下水田より新

規模 21.0 × [9.2] m 深さ 20cm 主軸方位 N-80°-E

概要 調査区中央やや西寄りの南壁にかかって検出された。覆土に浅間A軽石を含む。計3枚であるが、遺構の残存状態は悪く、各水田とも東側の半分以上を削平されて西側しか残っていない。

出土遺物 土器は、土師質土器1点、軟質陶器内耳鍋1点、土師器壺6点、縄文土器2点、石器は剃片等が3点出土している。



第128図 近世水田

近世畠・石垣

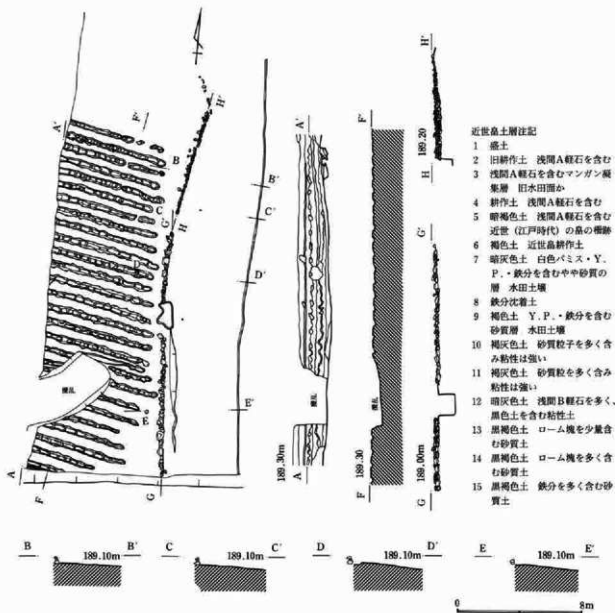
位置 C13-26-V20-25Gr 重複 2号谷津状遺構・浅間B軽石下水田より新

規模 畠 南北 [22.16m] 東西 [6.48m] 石垣 全長 [25.36m] 幅 8~48cm 深さ 16cm

主軸方位 N-4°-E

概要 調査区東側の池の西から検出された。南側は調査区外に続き、西側は削平により不明である。浅間A軽石により埋没しているため、火山灰降下により廃絶されたものと考えられる。東側には径10~40cmの礫を1~3段積んだ石垣が検出されており、畠の区画と考えられる。

出土遺物 土器・石器の出土はなく、銅製の煙管雁首が1点出土しているだけである。



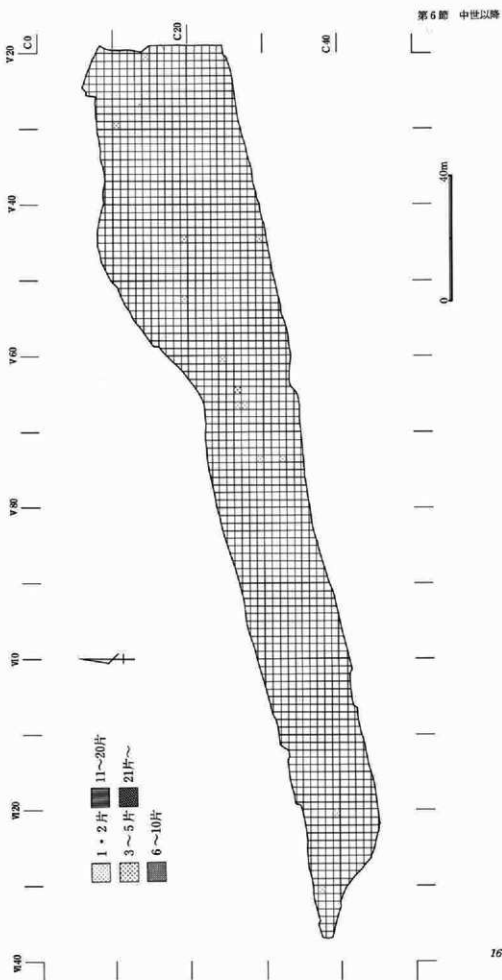
第129図 近世畠・石垣



第130図 近世畠出土遺物

近世畠出土銅製品観察表

No	器種	出土位置	全長 (cm)	径 (cm)	厚さ (mm)	重量 (g)	残存状況	特 徴
1	埋管鎌首	覆土	[6.5]	[0.9]	[0.9]	4.4	火皿部・基部欠損	

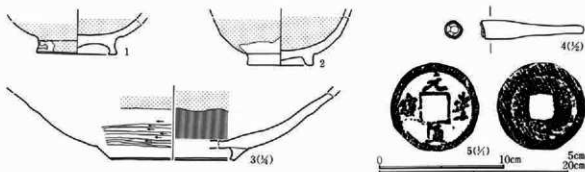


第131図 遺構外遺物出土状況

(6) 遺構外出土遺物

遺構外からも少量ながら遺物が出土している。分布図を見ると調査区内に散在している状況だが、中央部からややまとまって出土している。

出土遺物 土器・陶器は、土師質土器皿5点、軟質陶器内耳鍋6点、鉢7点、陶器碗12点、皿2点、壺・壺3点、磁器碗1点、皿1点、計37点が出土しており、銅製品は煙管吸口1点、銅銭は元豊通寶1点が出土している。



第132図 遺構外出土遺物

遺構外出土土器観察表

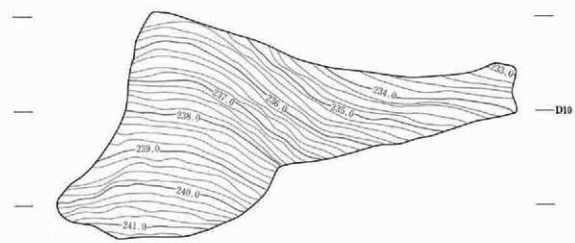
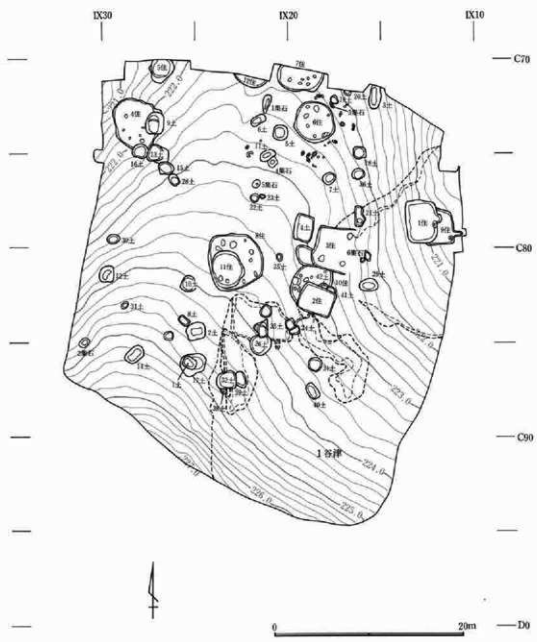
No	種別 器種	出土 位置	法量 ①— ②— ③— ④—	①口径②底径 ③高さ④残存	①色調(表) ②色調(裏) ④胎土	③焼成	調 整	分 類	備 考
1	陶 器 碗	C30V91	①— ③—	②(6.4cm)	紫地 淡黄 粘 黒褐	③良好	ロクロ調整		
2	陶 器 碗	C20V45	①— ③—	② 5.2cm	紫地 灰黄 粘 黒	③良好	ロクロ調整 天目軸		
3	陶 器 こね鉢	2号掘井	①— ③—	②(13.0cm)	①②灰白 ③良好	④普通	ロクロ調整 付け高台 体~底部 外面置削り 内面下半摩滅		
				④底部片	④普通	粗砂を少量含む			

遺構外出土銅製品観察表

No	器 種	出土位置	全長 (cm)	径 (cm)	厚さ (mm)	重量 (g)	残存状況	特 徴
4	煙管吸口	C32V95	5.5	1.0	0.8	3.6	ほぼ完形	扉字一部残存(藤竹製)

遺構外出土銅銭観察表

No	種 別	出土位置	径 (cm)	孔 (cm)	厚さ (mm)	重量 (g)	銭貨名	残存状況	特 徴
5	銅銭	C31V69	2.4	0.7	1.2	2.6	元豊通寶	完形	方穿

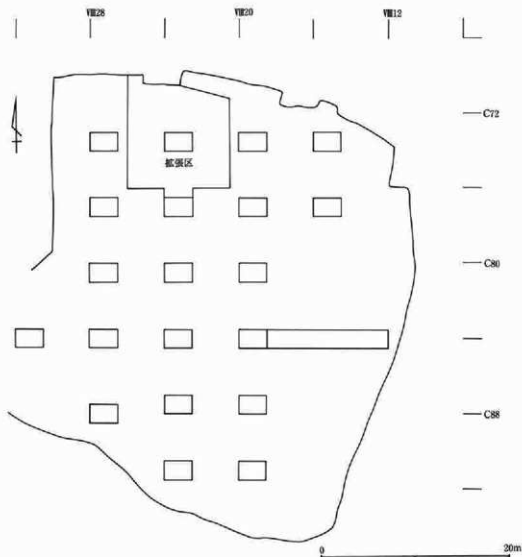


第133図 下高瀬寺山遺跡全体図

第IV章 下高瀬寺山遺跡

第1節 旧石器時代

旧石器時代の調査は、縄文時代の遺構の調査終了後、ロームの残りの良い部分に、2×3mのトレンチを5m毎に設定して掘り下げた。土層は表土の下が直接ローム層になっており、ロームの下は褐色・黄褐色粘土層である。試掘ではこの粘土層まで掘り下げて石器の有無を確認した。試掘により、C72IX23Gr付近の、ローム上面から約40cm下のぶい黄褐色土層中から、細石刃核・剝片が出土した。このためこのトレンチの周辺約11m四方を拡張して掘り下げたところ、C75IX24Gr付近からさらに剝片が1点出土している。石器の出土した層は、浅間板鼻黄色軽石（Y. P.）を多量に含む黄褐色土と浅間板鼻褐色軽石（B. P.）を多量に含む明褐色土の間にあり、夾雑物を含まないぶい黄褐色土層である。



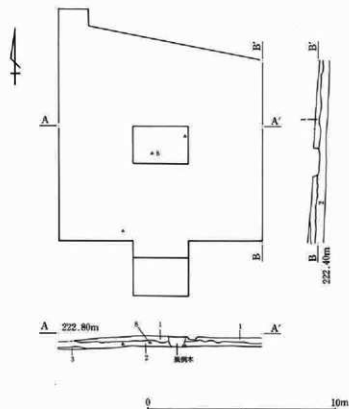
第134図 旧石器トレンチ位置図

石器は、トレンチおよび拡張区以外に、10号住南壁南側の黒褐色土中と、1・5・6号住の覆土中から尖頭器が、4・12号住の覆土から細石刃が、10号住の覆土中から細石刃核が、12号住の覆土中から石核が出土している。旧石器拡張区、4・6・12・5号住はいずれも調査区北西部に位置しており、ここに石器出土の中心があると考えられるが、10号住だけは中央部に位置している。

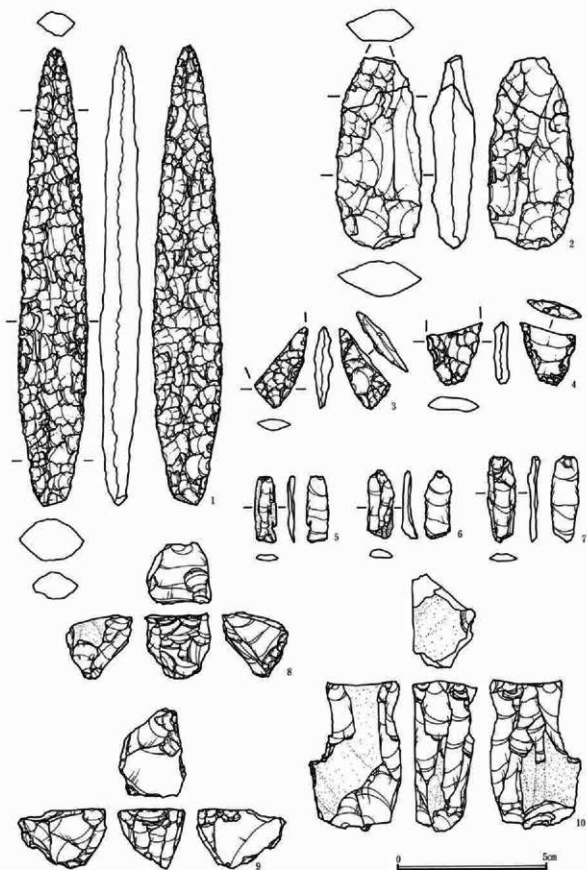
出土石器 尖頭器4点、細石刃3点、細石刃核2点、石核1点、剥片2点が出土している。

旧石器観察表

No	器種	出土位置	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	残存状況	石材	特徴
1	ポイント	C83IX18	15.3	2.3	1.4	42.9	完形	硅質頁岩	剥片素材で基部に素材打面残す 全面に押圧剥離による調整痕
2	ポイント	5号住居 [6.4]		2.8	1.5	[24.7]	先端部欠	黒色安山岩	剥片素材で比較的厚手 調整は丁寧だが背面一部に素材面残す
3	ポイント	6号住居 [2.7]	[1.8]		0.7	[1.2]	基部破片	黒曜石	両面全面に調整
4	ポイント	1号住居 [2.1]	[1.9]		0.5	[1.6]	基部破片	チャート	剥片素材で両面全面に調整痕
5	細石刃	12号住居	2.2	0.8	0.2	0.3	完形	黒曜石	背面に自然面残す
6	細石刃	12号住居	2.3	0.9	0.5	0.7	完形	黒曜石	背面に5条の剥離痕 打面点状
7	細石刃	4号住居	2.9	1.0	0.3	0.6	完形	黒曜石	調整打面
8	細石刃核	C72IX23	2.1	2.2	2.2	8.8	完形	黒曜石	分割剥離素材 石核調整ほとんど行わず打面作出打面調整なし 作業面がステップ状となり、細石刃剥離はほとんど行われない
9	細石刃核	10号住居	2.0	3.0	2.3	11.0	完形	黒曜石	当初右側面を打面として細石刃剥離試み、打面転移して最小4枚の細石刃剥離
10	石核	12号住居	5.0	3.1	2.1	29.9	完形	黒曜石	角礫素材 上部の平穏な自然面を打面とし石刃剥離 打面調整なし



第135図 旧石器トレンチ拡張区



第136図 旧石器実測図

第2節 縄文時代

(1) 遺構・遺物の概要

遺構

竪穴住居跡7軒、土坑21基、谷津状遺構1が検出されている。

竪穴住居跡

①分布 北側調査区の北部に4軒、中央部に3軒の2つの群に分かれている。北部の群は調査区外にさらに住居が存在する可能性がある。

②平面形態 平面形態は様々で、円形1軒、楕円形2軒、不正円形1軒、隅丸方形若しくは隅丸長方形3軒となっている。

③規模 長軸が4.06～5.97m平均5.11m、短軸が3.60～5.77m平均4.73m、壁高が、40～126cm平均71cm、床面積が、8.8～25.9m²平均16.8m²となっている。

④床面・掘り方 掘り方を直接床面としているものが多く、10号住に貼床が施されているだけである。

⑤柱穴 すべての住居の床面から柱穴と考えられるピットが検出されている。基本的には、壁に沿って、等間隔に配置されているものと思われるが、配置は不規則で間隔も不均等なものが多い。

⑥炉 検出されたのは3軒だけで、一部しか調査されていない7号住を除いて、3軒からは検出されなかった。すべて地床炉で、あまり焼けていないものが多い。

⑦時期 出土遺物から、すべて前期後半諸磯b式期の住居と考えられる。

土坑

発掘調査時点で竪穴住居として掘ったが、土坑として扱った1基（5号住）と、他に20基、計21基検出されている。

①分布 竪穴住居と同様に北側調査区北西部に寄っているが、住居より範囲は広く、調査区中央やや南寄りまで分布している。調査区北西部と中央部がやや多くなっている。後述する時期不明の土坑は北側中央部と南側やや西寄りに集中しており、分布状況が異なっている。

②平面形態 平面形態は、円形4基、楕円形10基、隅丸方形1基、隅丸長方形3基、不正形2基で楕円形が全体の半数と、最も多くなっている。

③規模 長径が0.76～2.74m平均1.64m、短径が0.76～2.26m平均1.33m、深さが20～130cm平均64cm、面積が、0.3～4.3m²平均2.4m²となっている。

④遺物出土状況 多量に出土しているものから少ないものまで出土量は様々であるが、多い土坑でも完形に近い状態で出土したものはほとんど無く、破片で出土しているものが多い。破片が接合しているものは多く、半完形に復元できたものもある。

⑤時期 出土遺物から、前期後半諸磯a式期のものが1基で、他はすべて前期後半諸磯b式期の土坑と考えられる。

谷津状遺構

調査区の東部に存在し、北側調査区の1/3程度をしめている。自然の谷津と考えられる。

遺物

①土器

縄文時代の土器は総数7,518点出土している。時代的には早期から後期に及ぶが、前期のものが圧倒的に多い。本書では便宜的に、時期によりⅠ～Ⅷ群に分類することにする。

群別出土土器数量表

群	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	不明	その他	計
遺構内	1	18	34	3,810	32	22	6	1	2,173	0	6,097
遺構外	2	1	4	600	40	34	3	3	732	2	1,421
総点数	3	19	38	4,410	72	56	9	4	2,905	2	7,518
%	0.04	0.3	0.5	58.7	1.0	0.7	0.1	0.05	38.6	0.03	

Ⅰ群 早期の土器を一括して本群とする。

Ⅱ群 前期中葉（関山・黒浜式期）の土器を一括して本群とする。

Ⅲ群 前期後半諸磯a式期の土器を一括して本群とする。

- 1類 沈線・竹管による刺突文を施すもの
- 2類 縄文施文だけのもの

Ⅳ群 前期後半諸磯b式期の土器を一括して本群とする。

- 1類 縄文地文で浮線文に刻みをいれるもの
- 2類 縄文地文で沈線で文様をかくもの
- 3類 縄文施文だけのもの
- 4類 浅鉢型土器

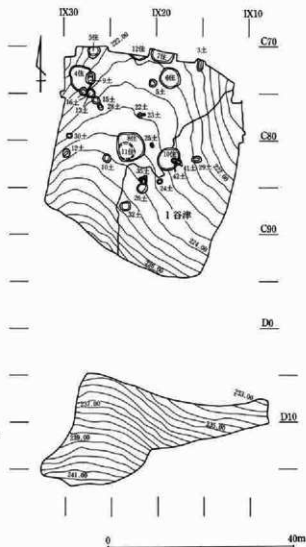
Ⅴ群 前期後半諸磯c式期の土器を一括して本群とする。

- 1類 沈線で文様をかくもの
- 2類 集合沈線に貼付文を施すもの

Ⅵ群 前期末～中期初頭（十三音提式期～五領ヶ台式期）の土器を一括して本群とする。

Ⅶ群 中期中葉（勝坂・阿玉台式期）の土器を一括して本群とする。

Ⅷ群 後期の土器を一括して本群とする。



第137図 縄文時代遺構位置図

②石器

縄文時代の石器・剥片等は総数3,536点出土して

いる。このうち2,745点が石器製作時の剥片・砕片・石核であり、石器（本来の意味の道具としての石器）は791点である。器種は、石鏃、尖頭器椽石器、石鏃、ピエスエスキュー、石匙、異形石器、打製石斧、磨製石斧、スクレイパー、微細剥離痕のある剥片、二次加工痕のある剥片、磨石、くぼみ石、石皿、多孔石、台石、敲打石、丸石、砥石、石棒の計20種類が出土している。石器については、時期を確定することは難しく、個々の石器の属する時期は不明であるが、ほぼ土器と同時期になると考えられる。

石鏃 49点出土している。基部の判明するものは44点あり、基部形態で分類すると、凹基無茎25点(56.8%)、平基無茎8点(18.2%)、凸基無茎7点(15.9%)、凹基有茎1点(2.3%)、平基有茎1点(2.3%)、凸基有茎2点(4.5%)となっている。

尖頭器椽石器 8点出土している。 **石鏃** 2点出土している。

ピエスエスキュー 6点出土している。

石匙 26点出土している。平面形態により分類可能なものは23点で、横型が13点(56.5%)、縦型が10点(43.5%)である。

異形石器 2点出土している。定型的な石器の範疇に入らないもの。

打製石斧 170点出土している。平面形態により分類可能なものは147点あり、分銅型・撥I型(側縁が内湾する)・撥II型(側縁が直線状)・短冊型の4種類に分類できる。各型の点数は、分銅型2点(1.3%)、撥I型32点(21.8%)、撥II型88点(59.9%)、短冊型25点(17.0%)となっている。刃部形態で分類すると、直刃24点(39.3%)、凸刃37点(60.7%)で凸刃が多くなっている。

磨製石斧 8点出土している。刃部形態の分かるものは4点ですべて凸刃である。

スクレイパー 25点出土している。刃部形態の判明するものは22点ですべて側縁に刃部をもっている。

微細剥離痕のある剥片 意図的な刃部加工とは考えられない、微細な剥離痕を有する剥片を一括した。一般的に使用痕のある剥片とされるものであるが、必ずしも使用痕と断定できないものもあるためこの名称を用いた。計111点出土している。

二次加工痕のある剥片 剥片に二次的に加工を施したものであるが、スクレイパーのように明確に刃部を作り出していないものをここに入れた。計167点出土している。

磨石・くぼみ石 磨石・くぼみ石については、磨面とくぼみを両方もつものがあり、明確な区別ができないものもあるが、磨面のないものをくぼみ石、くぼみがあっても磨面のあるものを磨石とした。計123点出土している。磨面・くぼみの有無により分類可能なものは92点あり、1類一片面に磨面をもつもの、2類一面面に磨面をもつもの、3類一片面に磨面とくぼみ・敲打痕をもつもの、4類一面面に磨面とくぼみ・敲打痕をもつもの、5類一面面に磨面片面にくぼみ・敲打痕をもつもの、6類一片面にくぼみをもつもの、7類一面面にくぼみをもつものに分類できる。各型の点数は、1類6点(6.5%)、2類26点(28.3%)、3類3点(3.3%)、4類25点(27.2%)、5類17点(18.5%)、6類3点(3.3%)、7類12点(13.0%)となっている。

石皿 13点出土している。完形品は少なく平面形態による分類は不能である。磨面・くぼみの有無による分類が可能なものは9点で、磨面が片面だけのもの4点、磨面を両面にもつもの1点、片面に磨面片面にくぼみをもつもの2点、片面に磨面両面にくぼみをもつもの2点となっている。

多孔石 1点出土している。

台石 工作台等の台と考えられる。30点出土しているが、遺構外のは縄文時代以外の可能性もある。

敲打石 2点出土している。 **丸石** 球形もしくはつぶれた球形を呈する。19点出土している。

砥石 8点出土している。 **石棒** 5点出土している。

出土石器数量表

部種	石鏃	尖頭	石鏃	ピエ	石匙	異形	打斧	磨斧	スク	微細	二次	磨石	凹石	石皿	多孔	台石	敲石	丸石	砥石
遺構内	33	7	1	5	21	2	121	4	22	73	138	48	20	5	1	10	0	9	4
遺構外	16	1	1	1	5	0	48	3	3	38	29	19	6	2	0	10	2	5	3
計	49	8	2	6	26	2	169	7	25	111	167	67	26	7	1	20	2	14	7
%	6.6	1.1	0.3	0.8	3.5	0.3	22.9	0.9	3.4	15.1	22.7	9.1	3.5	0.9	0.1	2.7	0.3	1.9	0.9
部種	石鏃	不明	小計	割片	黒割	砂片	石核	黒核	計										
遺構内	4	9	537	1,356	655	11	102	57	2,718										
遺構外	1	7	200	332	160	0	40	9	741										
計	5	16	737	1,688	815	11	142	66	3,459										
%	0.7	2.2	21.3	48.8	23.6	0.3	4.1	1.9											

※部種名中、「尖頭」は尖頭器様石鏃、「ピエ」はピエエスキュー、「異形」は異形石器、「打斧」は打製石斧、「磨斧」は磨製石斧、「スク」はスクレイパー、「微細」は微細列離面のある割片、「二次」は二次加工面のある割片、「凹石」はくぼみ石、「多孔」は多孔石、「敲石」は敲打石、「黒割」は黒曜石割片、「黒核」は黒曜石石核を表す。

%は石鏃から不明までは小計に対する割合を表し、小計から黒核までは総計に対する割合を表す。

石材

ここでは器種別の石材組成について見てみることにする。

石鏃 黒曜石が34点(73.9%)で圧倒的に多く、他にチャート10点(21.7%)、黒色安山岩・赤色珪質岩各1点(2.2%)が出土している。

尖頭器様石器 チャートが2点である。

石鏃 チャート2点となっている。

ピエエスキュー 黒曜石5点となっている。

石匙 硬質泥岩8点、チャート6点、黒色頁岩5点、頁岩2点、珪質頁岩1点、黒曜石1点である。

異形石器 黒曜石2点となっている。

打製石斧 硬質泥岩が52点(65.8%)で最も多く、続いて緑色片岩7点(8.9%)、頁岩6点(7.6%)、変玄武岩・細粒安山岩各4点(5.1%)、珪質頁岩2点(2.5%)、粗粒安山岩・黒色安山岩・ホルンフェルス・海緑石(?)質砂岩各1点(1.3%)となっている。

磨製石斧 変玄武岩6点、緑色片岩2点となっている。

スクレイパー 硬質泥岩12点(54.5%)、頁岩・チャート各2点(9.1%)、黒曜石・黒色頁岩・変玄武岩・細粒安山岩・緑色片岩・ホルンフェルス各1点(4.5%)となっている。

磨石 粗粒安山岩34点(44.2%)、デイサイト13点(16.9%)、変質安山岩・流紋岩各7点(9.1%)、砂岩6点(7.8%)、硬質泥岩・変玄武岩各3点(3.9%)、ひん岩・閃緑岩・石英閃緑岩・流紋岩質凝灰岩各1点(1.3%)となっている。

くぼみ石 粗粒安山岩4点、緑色片岩・黒色片岩各3点、砂岩2点、牛伏砂岩・雲母石英片岩1点となっている。

石皿 粗粒安山岩4点と最も多く、他はひん岩2点、緑色片岩2点、雲母石英片岩1点となっている。

多孔石 緑色片岩1点となっている。

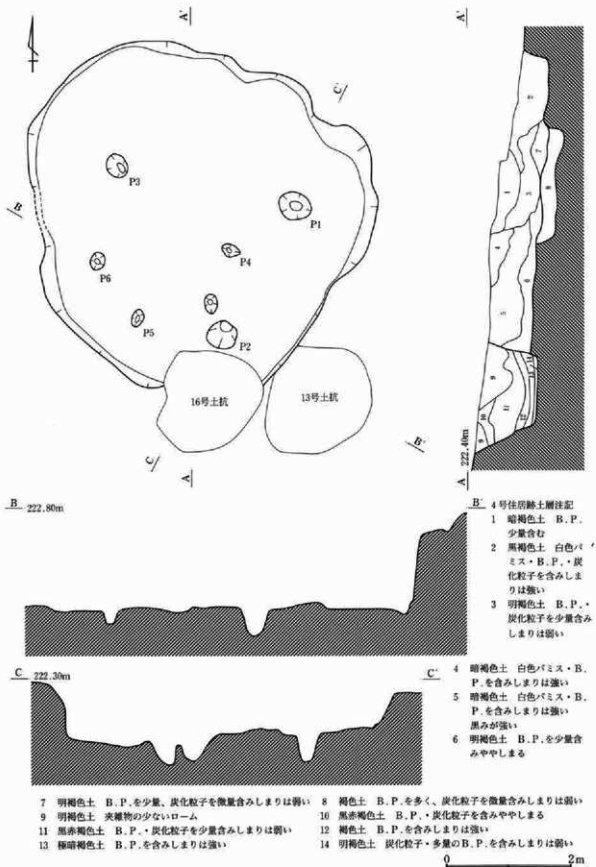
台石 粗粒安山岩14点、細粒安山岩2点、変質安山岩2点、緑色片岩2点となっている。

敲打石 硬質泥岩1点、流紋岩1点である。

丸石 粗粒安山岩13点、流紋岩2点、緑色片岩1点となっている。

砥石 牛伏砂岩5点、砂岩4点となっている。

石棒 砂岩1点、雲母石英片岩1点、緑色片岩1点となっている。



第138図 4号住居跡

(2) 竪穴住居跡

4号住居跡

位置 C72~74-IX26~29Gr 重複 9号土坑・16号土坑より古 13号土坑と重複

平面形態 不正円形 規模 5.84m×5.65m 壁高 1.26m 面積 23.3m² 床面積 21.3m²

主軸方位 N-26°-W

柱穴 (長径×短径×深さ cm 以下同じ) P1 54×42×46 P2 50×43×50 P3 38×32×58

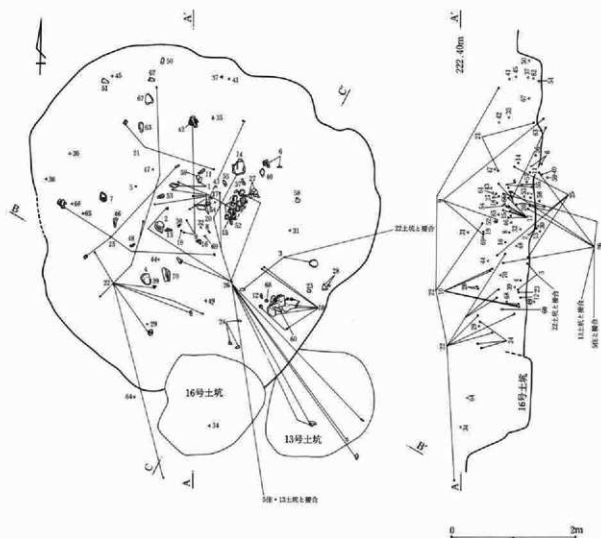
P4 30×20×29 P5 28×20×28 P6 28×24×23

炉 なし

床面 凹凸の多い床面であり、軟弱ではっきりした硬化面は検出されなかった。

掘り方 はっきりとしないが、掘り方を直接床面としている部分が多いと考えられる。

遺物出土状況 全面から多量に出土しているが、特に住居中央部に集中している。垂直分布をみると、上層から下層まで満遍なく出土しており、偏りがない。接合関係の判明するものは11点あり、床面付近と覆土中

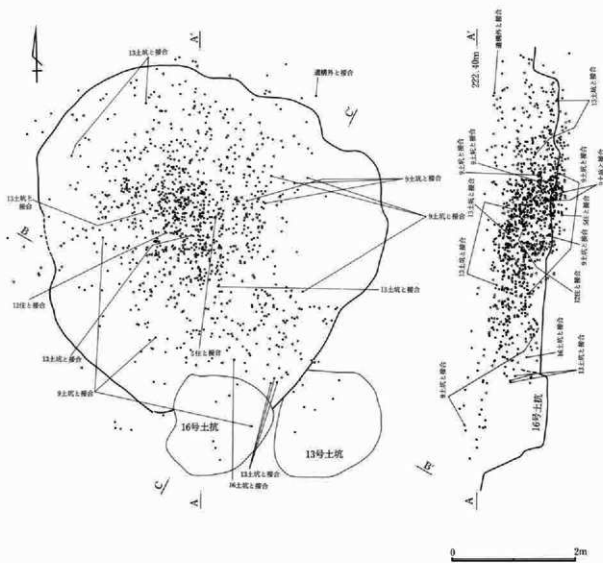


第139図 4号住居跡遺物出土状況(1)

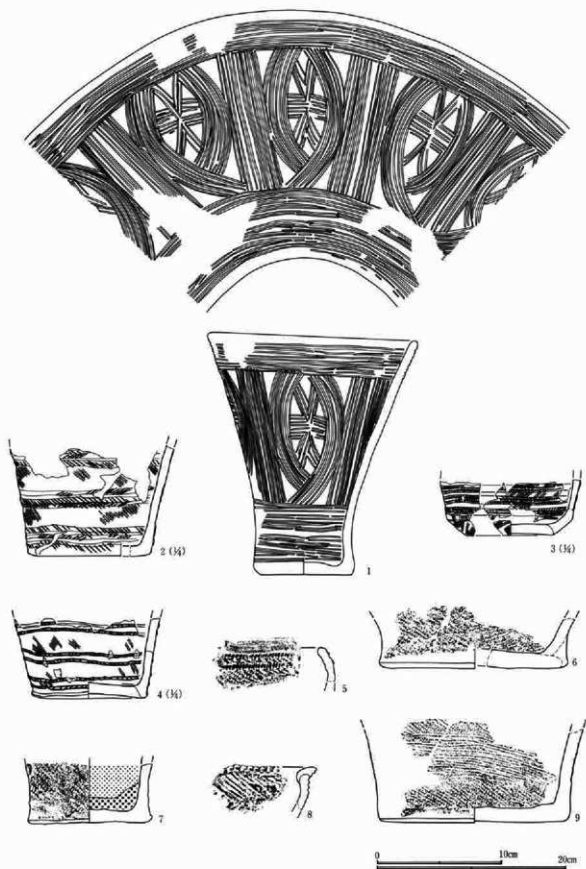
で接合しているものが多く、覆土中で接合しているものもある。また、6の深鉢が22号土坑の破片と接合し、26の浅鉢が5号住・13号土坑の破片と接合している。

出土遺物 出土量は多く、土器は、I類1点、IV類678点、時期不明293点が出土している。完形に近いものは少ないが、比較的大きな破片や底部付近の残りのよい破片が多数出土している。石器は、石鏃4点、尖頭器様石器1点、ピエスエスキュー1点、石匙6点、打製石斧23点、スクレイパー1点、二次加工痕のある剃片39点、磨石5点、くぼみ石1点、石皿1点、丸石1点、剃片184点、黒曜石剃片86点、砕片1点、石核24点、黒曜石石核12点、計390点である。

所見 出土遺物から、前期後半諸磯b式期の住居と考えられる。遺物出土量は多く、形態から住居であると考えられるが、柱穴位置は不規則であり、炉も検出されていない。



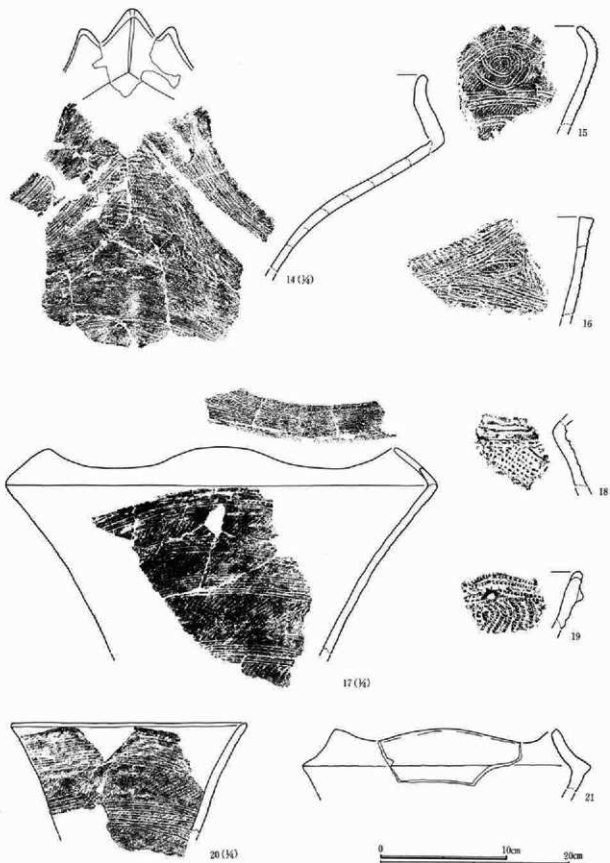
第140図 4号住居跡遺物出土状況(2)



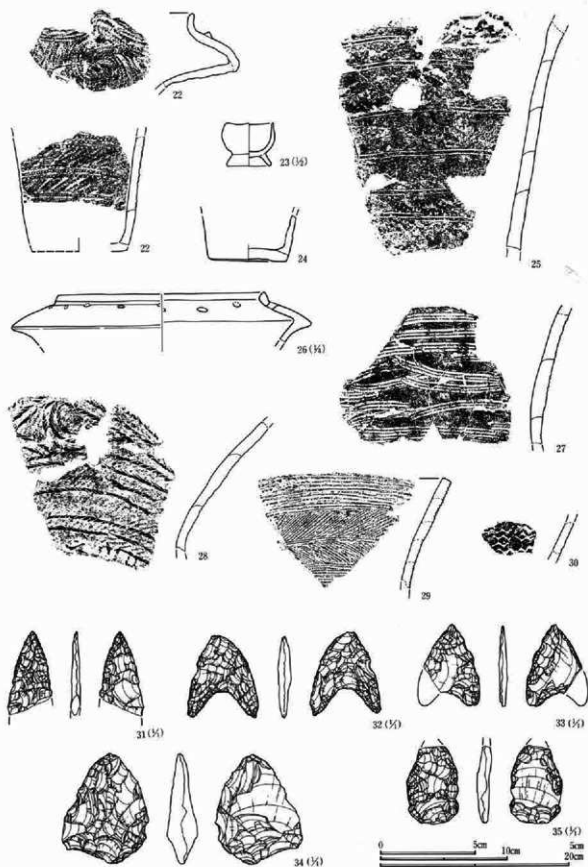
第141图 4号住居跡出土遺物(1)



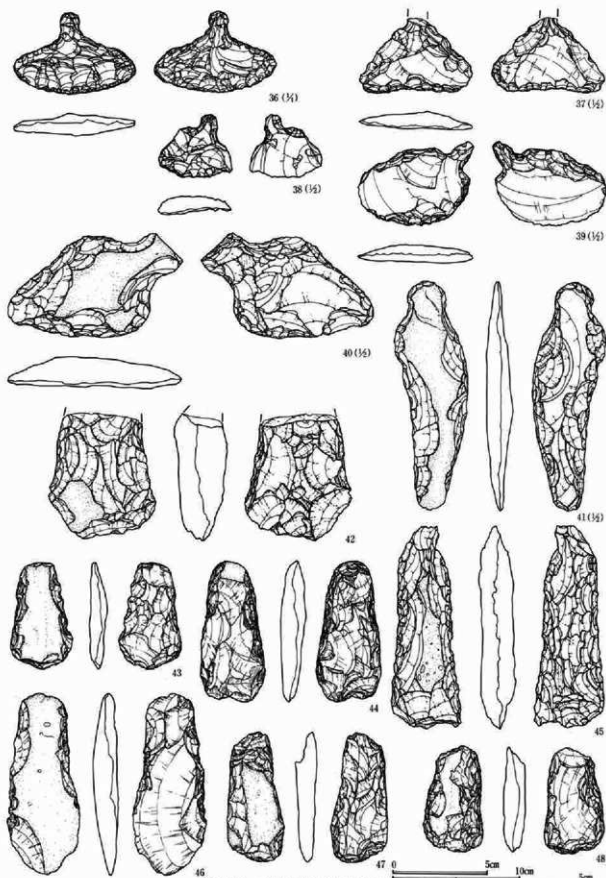
第142図 4号住居跡出土遺物(2)



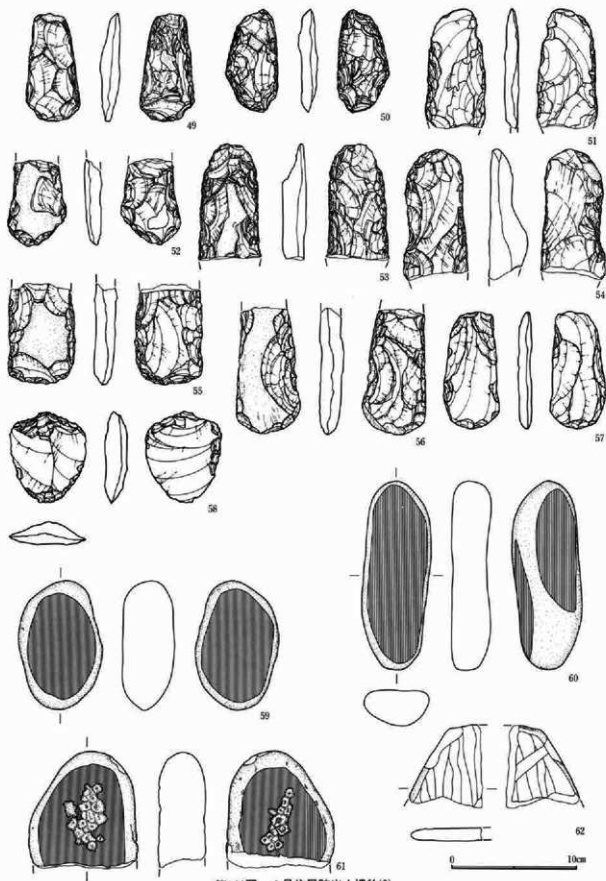
第143図 4号住居跡出土物(3)



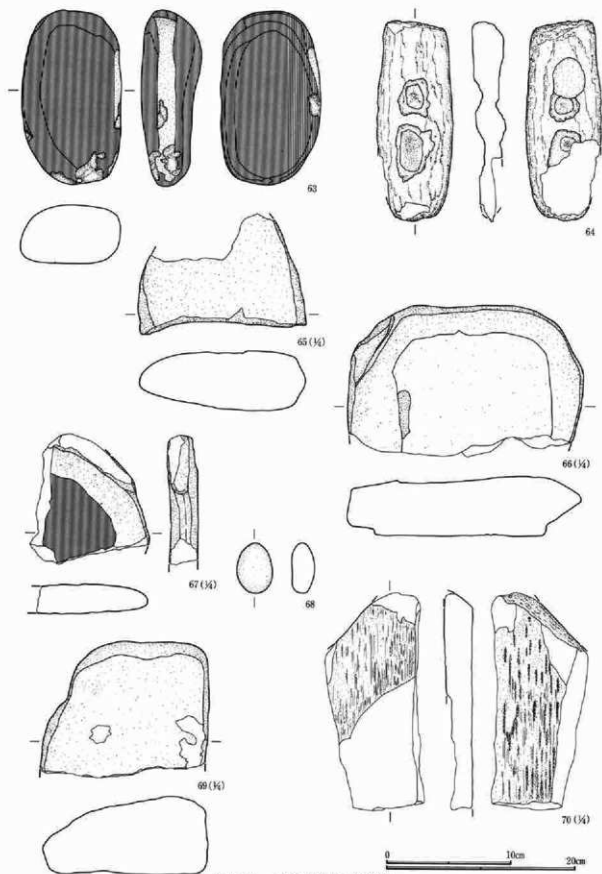
第144図 4号住居跡出土遺物(4)



第145図 4号住居跡出土遺物(5)



第146図 4号住居跡出土遺物(6)



第147図 4号住居跡出土遺物(7)

4号住居跡出土土器観察表

No.	器種 部位	床高 (cm)	①色調(表) ②色調(裏) ③焼成 ④胎土	法 量 測 整	文 様 要 素	分類	備考
1	深鉢 口～底	4	①にぶい黄橙 ②明黄褐 ③良好 ④粗 粗砂・礫を多く含む	口径16.7cm 底7.3cm 高19.0cm	半截竹管状工具による2～7単位の集合沈線	IV 2	
2	深鉢 口～底	～2	①にぶい橙 ②にぶい黄橙 ③良好 ④粗 粗砂・礫を含む	高径13.1cm 内面削り	R.L縄文横位施文後、3本1単位の浮線文上に 刻み	IV 1	
3	深鉢 口～底	4	①浅黄橙 ②にぶい黄 ③良好 ④粗 粗砂・礫・片岩を含む	底径9.1cm 内面削り後ナデ	L.R縄文横位施文後、3本1単位の浮線文上 に刻み 刺突文	IV 1	
4	深鉢 口～底	12	①②にぶい黄橙 ③良好 ④粗 粗砂を多く含む	底径12.3cm 内面削り	R.L縄文横位施文後、2本1単位の浮線文上 に刻み	IV 1	
5	深鉢 口縁部	42	①褐 ②明赤褐 ③良好 ④普通 粗砂・炭母を含む	器厚5～7mm 内面ナデ後磨き	R.L縄文横位施文後、浮線文上に半截竹管状 工具による連続刺突文		
6	深鉢 口～底	～2	①明赤褐 ②明黄褐 ③良好 ④粗 粗砂を多く含む	底径14.2cm 内面ナデか	R.L縄文横位施文	IV 3	
7	深鉢 口～底	7	①橙 ②にぶい黄 ③良好 ④粗 粗砂・礫を含む	高径9.4cm 内面削り	R.L縄文横位施文	IV 3	内面一部 保存費
8	深鉢 口縁部	38.5	①にぶい黄橙 ②褐灰 ③良好 ④普通 粗砂を含む	器厚6～10mm 内面ナデ後磨き	半截竹管状工具による連続爪形文・集合沈線 横刃形貼付文		
9	深鉢 口～底	～9.5	①②明黄褐 ③良好 ④粗 粗砂・礫を含む	底径15.0cm 内面ナデか	R.L縄文横位施文後、半截竹管状工具による 平行沈線	IV 2	
10	深鉢 口縁部	12	①②にぶい黄橙 ③良好 ④普通 粗砂・炭母を含む	器厚8～10mm 内面磨き	R.L縄文横位施文後、2本1単位の浮線文上 に刻み 円形貼付文	IV 1	
11	深鉢 口縁部	10	①黄橙 ②にぶい黄橙 ③良好 ④普通 粗砂を含む	器厚5～7mm 内面ナデ後磨き	R.L縄文横位施文後、2～3本1単位の浮線文上 に刻み・刺突文	IV 1	
12	深鉢 口縁部	9	①②明褐 ③良好 ④粗 粗砂を多く含む	器厚8～12mm 内面ナデ	浮線文を貼付後、R.L縄文施文 貼付文	IV 1	
13	深鉢 口縁部	～9	①にぶい橙 ②橙 ③良好 ④粗 粗砂・礫を含む	器厚6～10mm 内面磨きか	R.L縄文施文後、半截竹管状工具による平行 沈線の幾何学文	IV 2	
14	深鉢 口縁部	35	①にぶい黄橙 ②浅黄橙 ③良好 ④粗 粗砂・礫を含む	器厚11～16mm 内面ナデ後磨き	R.L縄文斜位施文後、半截竹管状工具による 平行沈線	IV 2	
15	深鉢 口縁部	40	①②黄褐 ③良好 ④粗 粗砂・礫を含む	器厚6～8mm 内面ナデ	L.R縄文横位施文後、半截竹管状工具による 平行沈線	IV 2	
16	深鉢 口縁部	37	①灰黄褐 ②明黄褐 ③良好 ④粗 粗砂を多く含む	器厚8～10mm 内面ナデ・磨き	R.L縄文横位施文後、半截竹管状工具による 平行沈線	IV 2	
17	深鉢 口縁部	～9	①②にぶい黄橙 ③良好 ④粗 粗砂・礫を含む	器厚7～10mm 内面ナデ	L.R縄文横位施文後、半截竹管状工具による 平行沈線 4単位の波状口縁か	IV 2	
18	深鉢 口縁部	61	①にぶい黄橙 ②赤褐 ③良好 ④粗 粗砂・礫・炭母を含む	器厚7～10mm 内面磨き	半截竹管状工具による連続爪形文		
19	深鉢 口縁部	78	①褐灰 ②にぶい黄橙 ③良好 ④粗 粗砂・礫・炭母を含む	器厚7～8mm 内面ナデ	縄文施文後、浮線文上に半截竹管状工具による 連続爪形文		
20	深鉢 口縁部	～14.5	①黄橙 ②にぶい黄橙 ③良好 ④粗 粗砂・礫を含む	口径25.4cm 内面ナデか	L.R縄文横位施文後、半截竹管状工具による 平行沈線	IV 2	
21	深鉢 口縁部	5	①明黄褐 ②にぶい黄 ③良好 ④粗 粗砂を多く含む	口径(25.0cm) 内面ナデ	4単位の波状口縁か	IV	
22	深鉢 口・胴部	18.5	①②にぶい黄褐 ③良好 ④粗 粗砂・片岩を含む	器厚5～7mm 内面削り後磨き	R.L縄文施文後、3本1単位の浮線文上に刺 突文	IV 1	
23	小型土器 台付鉢	12.5	①橙 ②明褐 ③良好 ④普通 粗砂を少量含む	口径2.4cm 台径 (2.2cm) 高2.2cm	塊形の胴部に台貼付け		
24	深鉢 底部	68.5	①②にぶい黄橙 ③良好 ④普通 粗砂を多く含む	底径(6.0cm) 内面削り	外面磨き	IV	
25	深鉢 胴部	4	①②にぶい黄橙 ③良好 ④粗 粗砂を多く含む	器厚9～13mm 内面ナデ	R.L縄文横位施文後、半截竹管状工具による 平行沈線	IV 2	
26	浅鉢 口縁部	～5	①にぶい黄橙 ②褐灰 ③良好 ④普通 粗砂を少量含む	口径22.0cm 内外面磨き	胴部に径8mmの穿孔16～20個	IV 4	
27	深鉢 胴部	51	①灰黄褐 ②にぶい黄橙 ③良好 ④普通 粗砂を含む	器厚8～11mm 内面ナデ	半截竹管状工具による平行沈線	IV 2	
28	深鉢 胴部	76.5	①にぶい黄橙 ②褐 ③良好 ④粗 粗砂を多く含む	器厚6～11mm 内面ナデ	L.R縄文施文後、2～3本1単位の浮線文上 に刻み	IV 1	
29	深鉢 口縁部	72.5	①②にぶい黄橙 ③良好 ④粗 粗砂・礫・片岩を多く含む	器厚8～9mm 内面ナデ	半截竹管状工具による2～5単位の集合沈線	IV 2	

第IV章 下高瀬寺山道跡

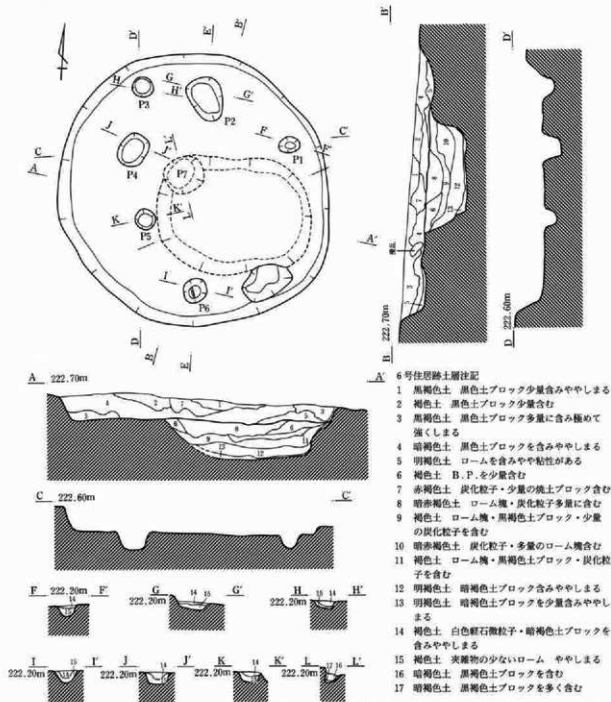
No	器種 部位	床高 (cm)	①色調(赤) ④胎土	②色調(黄)	③焼成	法 量 調 整	文 様 要 素	分 類	備 考
30	深鉢 胴部	-5	④に、よい湯 ④普通	②に、よい橙	④良好	器厚7mm 内面ナデ	山形押型文	I	

4号住居跡出土石器観察表

No	器種	床高 (cm)	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	残存状況	石 材	特 徴
31	石 鉢	102	[2.2]	1.1	0.2	[0.5]	基部欠損	黒曜石	基部形態不明
32	石 鉢	22	2.3	1.9	0.3	1.0	完 形	黒曜石	凹基無茶縁 挟りが大きい
33	石 鉢	覆土	2.1	[1.6]	0.2	[0.6]	基部一部欠損	チャート	凹基無茶縁
34	石 鉢	100	2.9	2.3	0.8	4.0	完 形	チャート	凸基無茶縁
35	ビスエスキューズ	45	[2.0]	1.3	0.3	[1.1]	一部欠損	黒曜石	
36	石 匙	8.5	2.1	3.3	0.6	2.3	完 形	黒曜石	横型
37	石 匙	21	[3.8]	6.0	0.9	[18.0]	基部欠損	黒色頁岩	横型
38	石 匙	30	3.3	3.9	0.9	11.0	完 形	チャート	横型
39	石 匙	19	4.5	6.1	0.9	21.0	完 形	黒色頁岩	横型
40	石 匙	-10	5.2	7.6	1.5	71.0	完 形	硬質泥岩	横型 片面に自然面
41	石 匙	50	12.0	3.5	1.9	52.0	完 形	硬質泥岩	縦型 片面に自然面
42	打製石斧	60	[9.9]	8.4	3.9	[361]	基部1/3欠損	硬質泥岩	撥1型 凸刃 片面に自然面
43	打製石斧	67.5	8.4	4.9	1.3	62	完 形	硬質泥岩	撥II型 凸刃
44	打製石斧	66	11.1	5.2	2.0	119	完 形	硬質泥岩	撥II型 直刃
45	打製石斧	41	15.8	5.5	2.5	275	完 形	変玄武岩	撥I型 凸刃 磨製石斧の二次利用か
46	打製石斧	38	14.3	5.8	2.0	158	完 形	硬質泥岩	撥II型 凸刃 片面に自然面
47	打製石斧	67	10.2	4.5	1.7	79	完 形	変玄武岩	撥II型 凸刃 片面に自然面
48	打製石斧	20	8.3	4.7	1.8	84	完 形	硬質泥岩	撥II型 凸刃
49	打製石斧	-13	8.5	4.2	1.5	62	完 形	硬質泥岩	撥II型 凸刃
50	打製石斧	20	8.0	4.1	1.3	55	完 形	黒色安山岩	撥II型 凸刃 片面に自然面
51	打製石斧	4	[9.4]	4.8	1.1	[59]	刃部1/4欠損	硬質泥岩	短冊型か
52	打製石斧	覆土	[6.7]	4.6	1.2	[38]	基部1/3欠損	硬質泥岩	撥I型 片面に自然面
53	打製石斧	16	[9.2]	5.0	1.9	[100]	刃部1/4欠損	細粒安山岩	短冊型か
54	打製石斧	51	[10.3]	5.0	3.1	[136]	刃部1/4欠損	硬質泥岩	撥I型か
55	打製石斧	20	[7.8]	5.2	1.7	[91]	基部1/3欠損	硬質泥岩	短冊型 片面に自然面
56	打製石斧	覆土	[9.9]	5.5	1.7	[103]	基部1/4欠損	硬質泥岩	撥II型 片面に自然面
57	打製石斧	11	9.2	4.2	1.0	56	完 形	ホルンフェルス	撥II型
58	ストレイバー	P1	7.1	6.0	1.8	70	完 形	硬質泥岩	端部に刃部
59	磨 石	-20	10.1	6.5	4.1	427	完 形	変安山岩	両面に磨面
60	磨 石	39	14.9	5.6	3.1	352	完 形	粗粒安山岩	両面・片側面に磨面
61	磨 石	66	[9.3]	8.6	3.9	[400]	2/3	粗粒安山岩	両面に磨面・敲打痕
62	砥 石	12	[6.5]	[5.5]	1.0	[47]	1/4	砂岩	両面に研ぎ面
63	磨 石	0	13.3	7.9	4.7	823	完 形	粗粒安山岩	両面に磨面 両側面・端部に敲打痕
64	くぼみ石	100	15.8	6.0	2.5	[307]	ほぼ完形	黒色片岩	両面にくぼみ4個
65	台 石	60	[12.7]	17.7	6.4	[1799]	1/3	粗粒安山岩	
66	台 石	49	[16.1]	25.0	6.4	[4550]	1/2	粗粒安山岩	
67	石 皿	21	[13.4]	[12.7]	3.1	[473]	1/5	粗粒安山岩	片面に磨面
68	丸 石	32	4.0	2.9	1.8	25	完 形	粗粒安山岩	
69	台 石	75	[14.3]	17.5	8.3	[3270]	1/2	細粒安山岩	
70	台 石	44	[23.0]	[10.2]	3.0	[1170]	1/4	緑色片岩	

6号住居跡

位置 C72~74-IX17~19Gr 重複 なし 平面形態 円形 規模 4.62m×4.18m
 壁高 48cm 面積 14.7㎡ 床面積 12.7㎡ 主軸方位 N-57°-W 壁溝 なし 炉 なし
 柱穴 住居の壁際に計7基検出されているが、西側の柱穴は壁からやや離れている。
 P1 34×24×21 P2 72×50×24 P3 34×32×18 P4 55×45×30 P5 34×32×19
 P6 40×37×20 P7 66×62×26
 床面 床下土坑部分を除いて、地山を直接床面としている。ほぼ水平な床面で、比較的軟弱である。



6号住居跡土層注記

- 1 黒褐色土 黒色土ブロック少量含みやしまる
- 2 褐色土 黒色土ブロック少量含む
- 3 黒褐色土 黒色土ブロック多量に含み極めて強くしまる
- 4 暗褐色土 黒色土ブロックを含みやしまる
- 5 明褐色土 ロームを含みや粘性がある
- 6 褐色土 B.P.を少量含む
- 7 赤褐色土 炭化粒子・少量の焼土ブロック含む
- 8 暗赤褐色土 ローム塊・炭化粒子多量に含む
- 9 褐色土 ローム塊・黒褐色土ブロック・少量の炭化粒子を含む
- 10 暗赤褐色土 炭化粒子・多量のローム塊含む
- 11 褐色土 ローム塊・黒褐色土ブロック・炭化粒子を含む
- 12 明褐色土 暗褐色土ブロック含みやしまる
- 13 明褐色土 暗褐色土ブロックを少量含みやしまる
- 14 褐色土 白色軽石微粒子・暗褐色土ブロックを含みやしまる
- 15 褐色土 夾雑物の少ないローム やしまる
- 16 暗褐色土 黒褐色土ブロックを含む
- 17 暗褐色土 黒褐色土ブロックを多く含む

第148図 6号住居跡

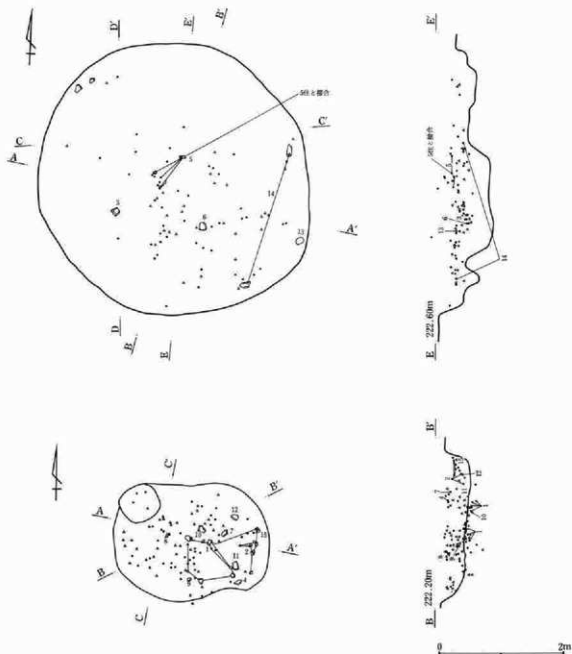
0 2m

掘り方 掘り方を直接床面としているが、住居のやや南東寄りに、長径2.45m短径1.79m深さ63cmの東西に長い楕円形の掘り込みが検出されており、床下土坑と考えられる。

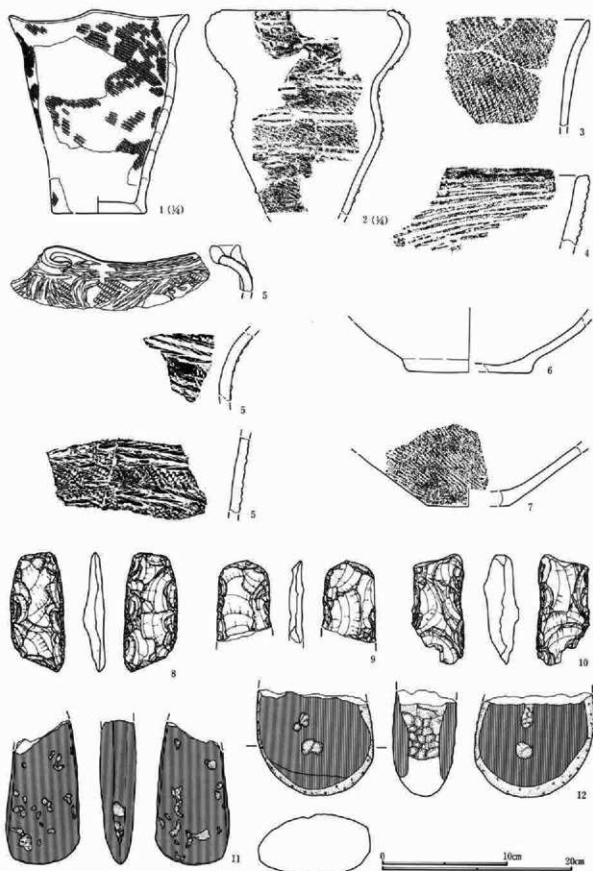
遺物出土状況 住居中央から南東部にかけて集中しており、床下土坑からも多数出土している。垂直分布をみると、上層から下層まで出土しているが、中下層から多く出土している。床下土坑は上層から下層まで分布している。接合関係の判明するものは4点あり、覆土中および床下土坑覆土の破片が接合している。

出土遺物 土器は、IV類43点、時期不明72点、計115点が出土し、石器は、石鏃1点、尖頭器燻石器1点、打製石斧3点、磨製石斧1点、微細刻離痕のある剥片2点、二次加工痕のある剥片7点、磨石3点、石棒1点、剥片73点、黒曜石剥片3点、石核1点、黒曜石石核2点、不明1点、計99点が出土している。

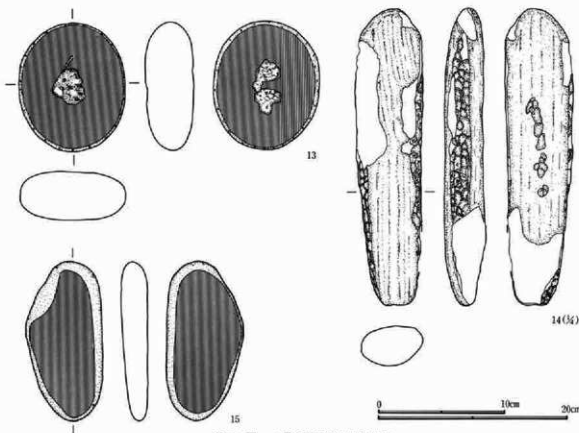
所見 出土遺物から、前期後半諸磯b式期の住居であると考えられるが、灰は検出されていない。



第149図 6号住居跡・床下土坑遺物出土状況



第150図 6号住居跡出土遺物(1)



第151図 6号住居跡出土遺物(2)

6号住居跡出土石器観察表

No	器種部位	床高(cm)	①色調(表) ②色調(裏) ③焼成 ④胎土	法量 調整	文様要素	分類	備考
1	深鉢 口～底	12.5	①②にふい赤褐 ③良好 ④普通 粗砂を多く含む	口19.3cm 底10.1cm 高21.4cm	R L 縄文横位施文	IV 3	
2	深鉢 口～胴	12	①にふい赤褐 ②赤褐 ③良好 ④粗 粗砂・礫を含む	口径(17.0cm) 内面削り後磨き	R L 縄文横位施文後、3本1単位の浮線文上に刻み	IV 1	
3	深鉢 口縁部	7.5	①②赤褐 ③良好 ④普通 粗砂・雲母を多く含む	器厚6～8mm 内面ナデカ	R L 縄文横位施文	IV 3	
4	深鉢 口縁部	32	①褐 ②明褐 ③良好 ④粗 粗砂・礫・雲母を含む	器厚12mm 内面磨磨き	半截竹管状工具による集合沈積	IV 2	
5	深鉢 口～胴	21	①②淡黄 ③良好 ④普通 粗砂・礫・雲母少量含む	器厚9～10mm 内面削り後磨き	R L 縄文横位施文後、3本1単位の浮線文上に刻み	IV 1	
6	浅鉢 底部	1	①淡黄 ②橙 ③良好 ④普通 粗砂・雲母を含む	底径(9.0cm) 内面ナデ	外面磨きか	IV 4	
7	深鉢 底部	30	①淡黄橙 ②にふい黄橙 ③良好 ④普通 粗砂を少量含む	底径(6.6cm) 内面磨磨き	R L 縄文横位施文	IV 3	

6号住居跡出土石器観察表

No	器種	床高(cm)	全長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	残存状況	石材	特徴
8	打製石斧	26	9.3	4.3	1.6	66	完形	頁岩	撥型 刃部欠損後再加工か
9	打製石斧	7	[6.4]	4.3	1.1	[35]	刃部1/2欠損	硬質泥岩	短冊型か
10	打製石斧	-7.5	8.6	4.4	2.8	94	完形	硬質泥岩	撥型 刃部欠損後再加工か
11	磨製石斧	0	[11.3]	5.8	2.8	[292]	基部1/4欠損	灰玄武岩	研磨段階 一部敲打痕残る 凸刃
12	磨石	12	[8.3]	9.5	4.9	[541]	2/3	粗粒安山岩	両面に磨面、両面・片側面に敲打痕
13	磨石	17	10.1	8.5	3.9	531	完形	粗粒安山岩	両面に磨面・敲打
14	石棒	7	31.3	7.3	4.5	[1600]	ほぼ完形	緑色片岩	裏面・両側面に敲打痕
15	磨石	16	12.6	6.1	2.1	254	完形	灰玄武岩	両面に磨面

7号住居跡

位置 C70・71-IX18~20Gr 重複 なし 平面形態 隅丸方形または隅丸長方形

規模 4.6m×[2.34m] 壁高 40cm 面積 [10.0m²] 床面積 [8.2m²]

主軸方位 N-76°-W 壁溝 なし

柱穴 住居の壁際に4基検出されているが、柱間距離は一定でなく北西部からは検出されていない。

P1 36×30×8 P2 42×36×10 P4 52×50×12 P5 26×22×6

埋設土器 位置 南側中央部 規模 長径32cm 短径28cm 深さ18cm

概要 掘り方は断面方形で、底部から5cm上に深鉢下半部が埋設されている。

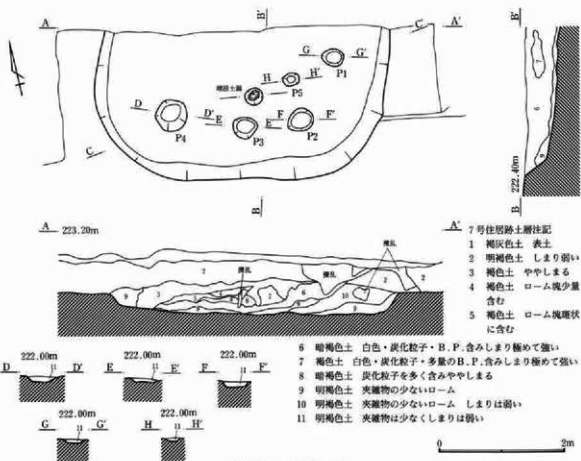
床面 地山を直接床面としており、比較的軟弱である。

掘り方 掘り方を床面としている。

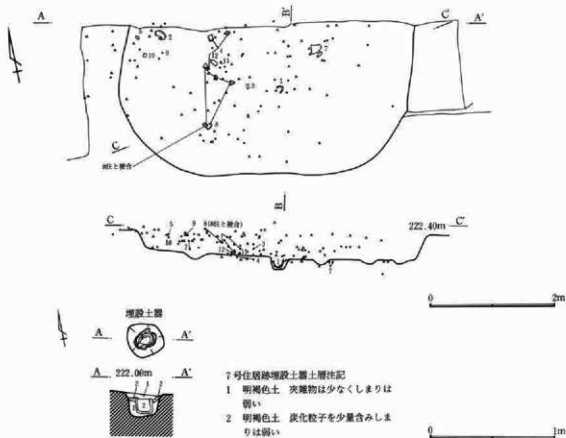
遺物出土状況 ほぼ全面から出土しているが、東壁際は少ない。垂直分布をみると、上層から下層まで出土している。接合関係の判明するものは2点あり、覆土上層と中層、床面付近と覆土上層が接合している。

出土遺物 土器は、IV類45点、時期不明56点、計101点が出土している。石器は、石鏃1点、尖頭器様石器1点、微細剥離痕のある剥片2点、二次加工痕のある剥片4点、磨石2点、石棒3点、剥片52点、黒曜石剥片4点、石核8点、黒曜石石核4点、不明2点、計83点が出土している。

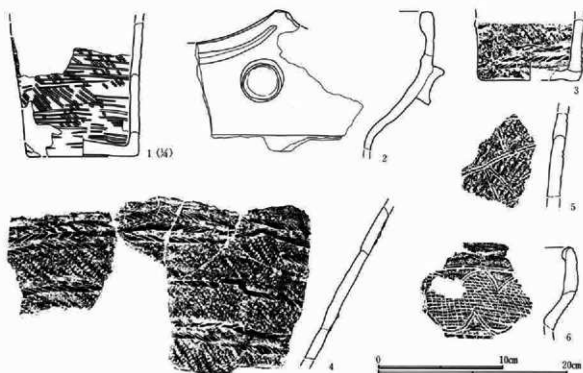
所見 出土遺物から、前期後半諸磯b式期の住居と考えられる。



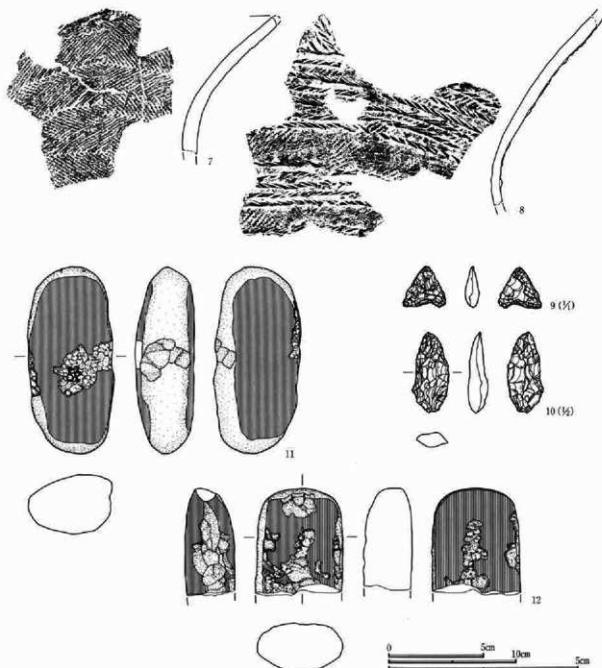
第152図 7号住居跡



第153図 7号住居跡遺物出土状況および埋設土器



第154図 7号住居跡出土遺物(1)



第155図 7号住居跡出土遺物(2)

7号住居跡出土土器観察表

No	器種部位	床高(cm)	①色調(表) ②色調(裏) ③構成 ④胎土	法量 調整	文様要素	分類	備考
1	深鉢 胴～底 土器	埋設	①②にぶい黄褐色 ③良好 ④粗 粗砂・泥・雲母を多く含む	底径12.0cm 内面磨削り	R.L.縄文横位施文後、半軟竹管状工具による 平行沈線	IV 2	
2	深鉢 口縁部	12	①赤褐色 ②にぶい黄褐色 ③良好 ④粗 粗砂・泥・片岩を含む	器厚6～11mm 内外面磨削り	口縁部下に沈線 径3.3cmの円形貼付文	IV	
3	深鉢 底部	11	①灰黄 ②にぶい黄 ③良好 ④普通 粗砂を少量含む	底径(7.8cm) 内面磨り後磨き	R.L.縄文横位施文後、3本1単位の浮線文上に 刻み	IV 1	
4	深鉢 胴部	-5	①明黄褐色 ②にぶい黄褐色 ③良好 ④普通 粗砂を少量含む	器厚7～10mm 内面ナデ	R.L.縄文横位施文後、浮線文上に刻み	IV 1	

No	器種 部位	床高 (cm)	①色調(表) ②色調(裏) ③構成 ④胎土	法 調	量 整	文 様 要 素	分 類	備 考
5	深鉢 胴部	25	①にぶい濁 ②にぶい黄濁 ③良好 ④粗 粗砂・糠を含む	器厚9~12mm 内面黄褐色		L R縄文を施文後、半截竹管状工具による平 行沈線で幾何学文を施文	IV 2	
6	深鉢 口縁部	覆土	①②赤褐 ③良好 ④普通 糠・片岩を僅かに含む	器厚8~11mm 内 面ナゲ後黄褐色		半截竹管状工具による平行沈線文区画内に斜 格子文を施文	IV	
7	深鉢 口縁部	~4	①②にぶい黄濁 ③良好 ④普通 粗砂を少量含む	器厚9~12mm 内 面ナゲ後黄褐色		R L縄文・L R縄文の結束第1種	IV 3	
8	深鉢 胴部	9.5	①秋黄濁 ②にぶい黄濁 ③良好 ④粗 粗砂・糠を含む	器厚7~11mm 内面ナゲ		L R縄文施文後、浮線文上に刻み	IV 1	

7号住居跡出土石器観察表

No	器種	床高 (cm)	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	残存状況	石 材	特 徴
9	石 鏃	25	1.1	1.1	0.4	0.3	完 形	黒曜石	巴基無茎鏃
10	尖頭器石器	21	4.2	1.9	1.0	8.0	完 形	チャート	無茎
11	磨 石	1.5	14.7	6.9	4.7	686	完 形	安賀安山岩	両面に磨面、片面・両側面に敲打痕
12	磨 石	2.5	[8.5]	7.1	3.9	[259]	1/2	粗粒安山岩	両面に磨面、両面・片側面に敲打痕

8号住居跡

位置 C79~82-IX21~24Gr 重複 11号住居跡より新

平面形態 隅丸方形であるが、各辺は丸みを帯びており、また西壁に比べ東壁がかなり短くなっている。

規模 5.97m×5.77m 盤高 60cm 面積 29.3m² 床面積 25.9m² 主軸方位 N-1°-W

盤溝 なし

柱穴 住居の比較的壁に近い位置に9基検出されているが、柱間距離は不均等で、特に西壁際のP7とP8の間はかなり離れている。

P1 31×29×40 P2 60×51×32 P3 59×24×30 P4 35×30×28 P5 40×38×34 P6 55×54×39

P7 92×33×62 P8 68×54×75 P9 90×82×74

床面 11号住居の覆土部分以外は地山を床面としており、比較的堅緻である。ほぼ平坦な床面であるが、北東部に向かってやや傾斜している。炉の南側の、住居のほぼ中央部に、炭化物が多く散っている部分が検出されている。

掘り方 掘り方を床面としている。

遺物出土状況 ほぼ全面から出土しており偏りがない。垂直分布でも上層から下層まで満遍なく出土しているが、下層からやや多く出土している。接合関係の判明するものは9点あり、床面付近で接合しているものが多いが、床面付近と覆土上層、覆土上層と下層で接合しているものもある。

炉 位置 中央北寄り 主軸方位 N-79°-W 規模 全長47cm 幅31cm 深さ6cm

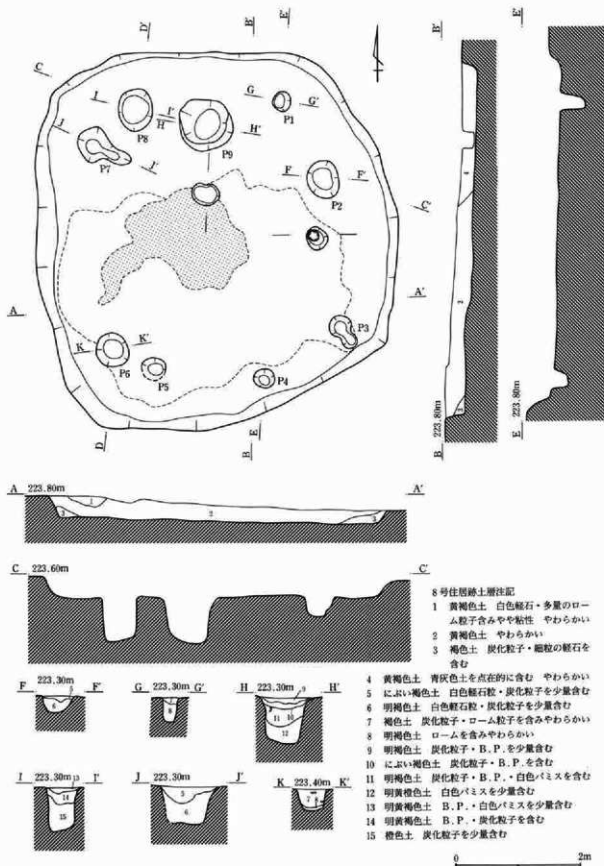
概要 掘り方は、底部がやや丸みを帯び鍋底状を呈す。底部はあまり焼けていないが、覆土には焼土を多く含んでいる。

埋設土器 位置 中央東寄り 規模 全長37cm 幅32cm 深さ15cm

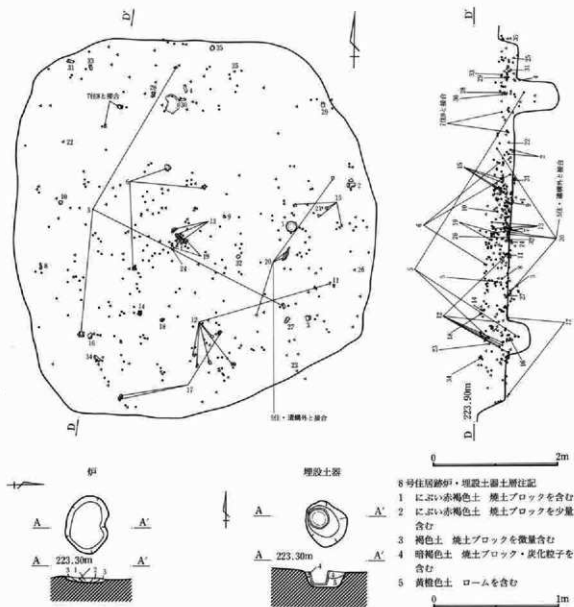
概要 掘り方は、底部が平坦で断面台形である。掘り方の北西部で底面から2cm上に深鉢下半部を埋設している。

出土遺物 土器は、IV類196点、時期不明96点、計291点が出土している。石器は、石鏃4点、石匙2点、打製石斧8点、磨製石斧1点、微細刻離痕のある剃片2点、二次加工痕のある剃片9点、磨石3点、くぼみ石1点、丸石1点、剃片85点、黒曜石剃片57点、石核6点、黒曜石石核4点、不明2点、計185点が出土している。

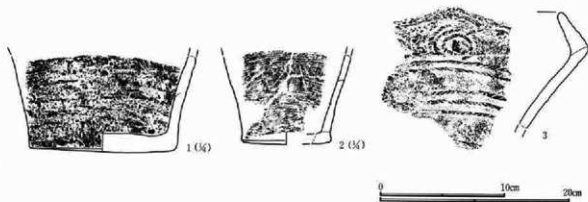
所見 出土遺物から、前期後半諸磯b式期の住居と考えられる。



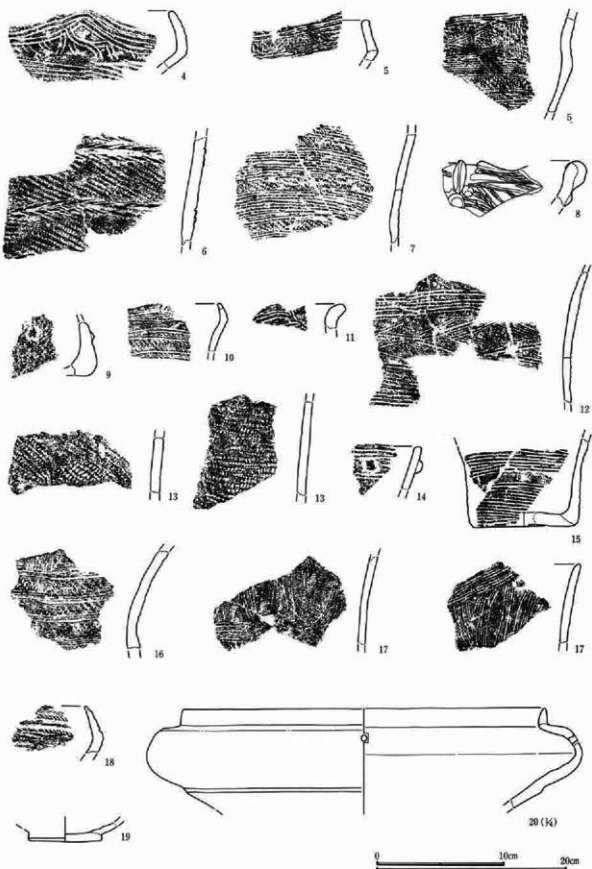
第156図 8号住居跡



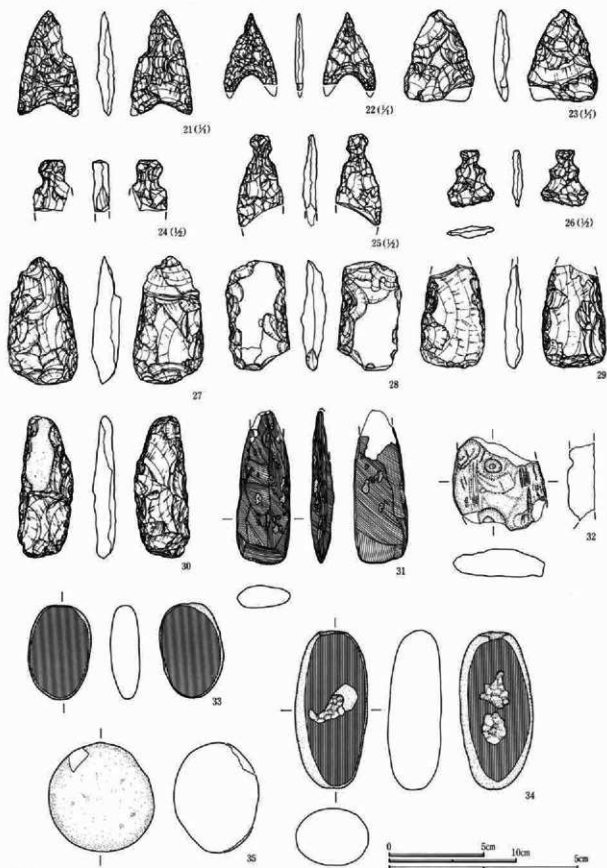
第157図 8号住居跡遺物出土状況および炉・埋設土器



第158図 8号住居跡出土遺物(1)



第159図 8号住居跡出土遺物(2)



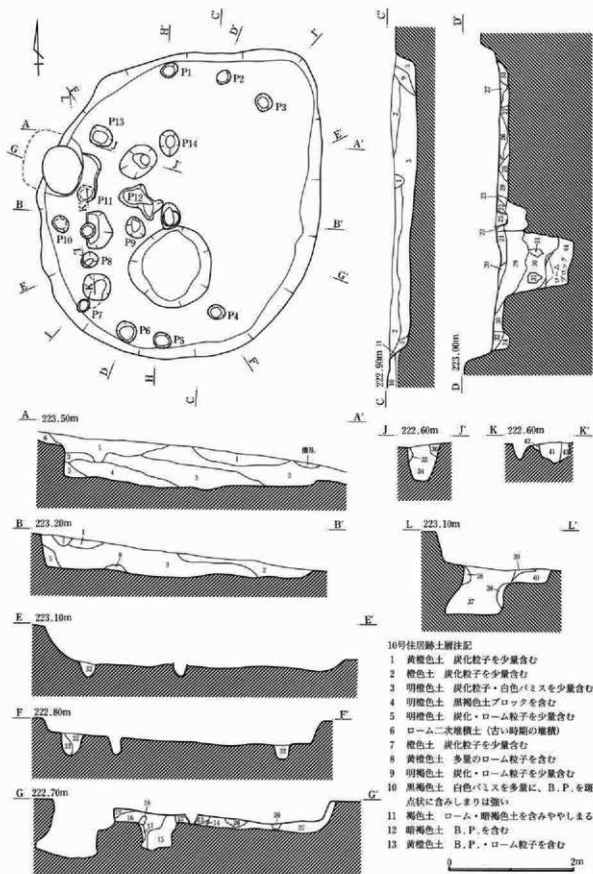
第160図 8号住居跡出土遺物(3)

8号住居跡出土土器観察表

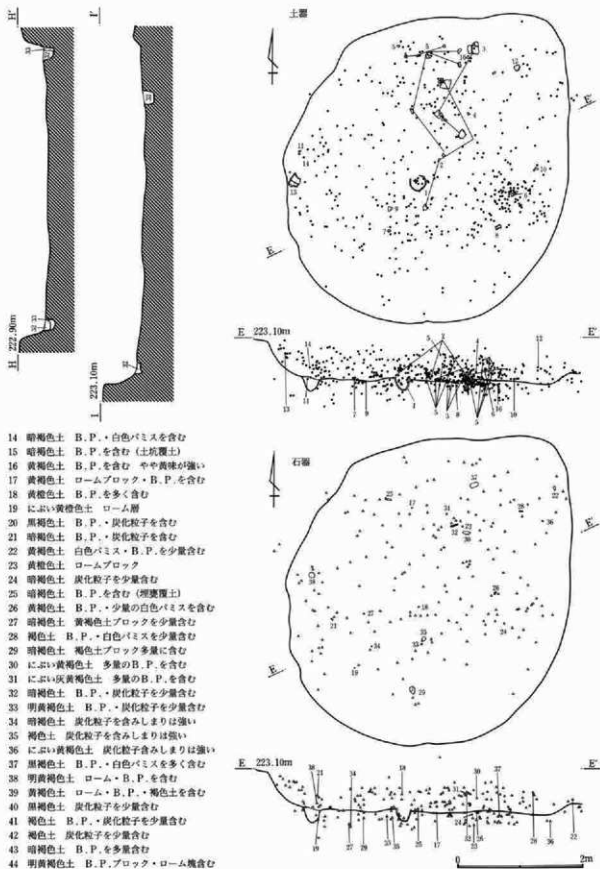
No	器種部位	床高(cm)	①色調(表) ②色調(裏) ③焼成 ④胎土	法量調整	文様要素	分類備考
1	深鉢 口・底	7	①にぶい黄 ②粗 ③やや軟質 ④粗 粗砂を含む	底径15.6cm 内面ナデか	外面指痕によるナデか	IV 2
2	深鉢 口・底	7	①②浅黄 ③良好 ④粗 粗砂を多く含む	底径(9.6cm) 内面削り後磨き	半軟竹管状工具による平行沈線	IV 2
3	深鉢 口・縁部	-3	①②明黄褐 ③良好 ④粗 粗砂・礫・片岩・骨母を含む	器厚8~12mm 内面磨きか	R.L縄文横位施文後、3本1単位の浮線文上に刻み	IV 1
4	深鉢 口・縁部	-5	①明黄褐 ②浅黄 ③良好 ④粗 粗砂を含む	器厚7~10mm 内面磨きか	半軟竹管状工具による平行沈線	IV 2
5	深鉢 口・胴部	P.6	①にぶい黄褐 ②にぶい黄 ③良好 ④粗 粗砂を含む	器厚6~10mm 内面磨き	R.L縄文施文後、半軟竹管状工具2~5本1単位による平行沈線	IV 2
6	深鉢 胴部	5	①にぶい黄褐 ②黒褐 ③良好 ④粗 粗砂を含む	器厚9~11mm 内面ナデか	R.L縄文斜施文後、2~3本1単位の浮線文上に刻み	IV 1 内面黒色 付着物
7	深鉢 胴部	0	①にぶい黄褐 ②暗伏黄 ③良好 ④粗 粗砂・礫・片岩を含む	器厚8mm 内面ナデ	R.L縄文施文後、半軟竹管状工具5~6本1単位による平行沈線	IV 2
8	深鉢 口・縁部	1	①浅黄 ②にぶい黄褐 ③良好 ④普通 礫を多く含む	器厚8~10mm 内面磨き	浮線文上に刻み 棒状・円形貼付文	IV 1
9	深鉢 口・縁部	5.5	①明赤褐 ②赤褐 ③良好 ④粗 粗砂を多く含む	器厚7~14mm 内面ナデか	縄文施文か 半軟竹管状工具による平行沈線	IV 2
10	深鉢 口・縁部	5	①明黄褐 ②にぶい黄褐 ③良好 ④粗 粗砂・片岩を少量含む	器厚6~7mm 内面磨き	R.L縄文横位施文後、半軟竹管状工具による平行沈線	IV 1
11	深鉢 口・縁部	5.5	①②にぶい赤褐 ③良好 ④普通 粗砂・礫を多く含む	器厚8~10mm 内面磨き	半軟竹管状工具による平行沈線	IV 2
12	深鉢 胴部	-3	①②浅黄 ③良好 ④粗 粗砂を多く含む	器厚6~9mm 内面ナデ	R.L縄文横位施文後、半軟竹管状工具2~3本1単位による平行沈線	IV 2
13	深鉢 胴部	28	①にぶい黄褐 ②にぶい黄 ③良好 ④粗 粗砂・礫を含む	器厚8~9mm 内面ナデか	R.L縄文横位施文	IV 3
14	深鉢 口・縁部	41.5	①にぶい黄 ②黄褐 ③良好 ④粗 粗砂・礫・骨母を含む	器厚7mm 内面磨き	縄文施文か 半軟竹管状工具による平行沈線 円形貼付文	IV 2
15	深鉢 底部	1	①②浅黄 ③良好 ④普通 粗砂を少量含む	底径(8.0cm) 内面磨き	半軟竹管状工具による7~8単位の平行沈線	IV 2
16	深鉢 胴部	P.6 (32)	①にぶい黄褐 ②浅黄 ③良好 ④粗 粗砂・片岩を多く含む	器厚8~11mm 内面削り後磨き	R.L縄文横位施文後、半軟竹管状工具2本1単位による平行沈線	IV 2
17	深鉢 口・胴部	-5.5	①②にぶい黄褐 ③良好 ④粗 粗砂・礫を含む	器厚6~7mm 内面磨き	半軟竹管状工具4本1単位による平行沈線 円形貼付文	IV 2 外面黒染
18	深鉢 口・縁部	39	①黒褐 ②明黄褐 ③良好 ④粗 粗砂・骨母を多く含む	器厚4~8mm 内面削り後磨き	浮線文上に刻み 棒状工具による刺突文	IV 1
19	浅鉢 底部	24.5	①②にぶい黄褐 ③良好 ④粗 粗砂・骨母を多く含む	底径7.6cm 内面ナデか	外面磨きか	IV 4
20	浅鉢 口・胴部	-1	①明赤褐 ②明褐 ③良好 ④粗 粗砂・片岩・骨母を含む	口径(38.6cm) 内面磨き	外面磨き 肩部径5mmの穿孔あり	IV 4

8号住居跡出土土器観察表

No	器種	床高(cm)	全長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	残存状況	石材	特徴
21	石 鏝	-1	2.7	1.6	0.5	[1.5]	ほぼ球形	黒曜石	凹基無基線
22	石 鏝	9	(2.2)	1.4	0.2	[0.4]	基部欠損	黒曜石	凹基無基線 挟りが大きい
23	石 鏝	28	2.4	1.8	0.4	[1.5]	基部一部欠損	黒曜石	平基無基線
24	石 鏝	6	[2.6]	[1.9]	0.8	[4.6]	1/3	チャート	縦線か
25	石 鏝	6	[4.8]	2.4	0.7	[6.0]	2/3	チャート	縦線
26	二次加工痕のある片石	2	2.9	2.5	0.4	[2.5]	ほぼ球形	チャート	縦線に刃部
27	打製石片	2	10.0	5.4	2.0	132	完 形	変文武岩	横II型 凸刃
28	打製石片	18	8.6	4.7	1.9	85	完 形	硬質岩	短冊型か
29	打製石片	18	[8.1]	5.1	1.3	[72]	基部1/4欠損	硬質岩	横II型 直刃
30	打製石片	19	11.2	4.3	1.8	82	完 形	黒曜石(?)黄砂岩	横II型 直刃 片面に自然面
31	磨製石片	1	[12.1]	4.2	1.6	[130]	基部一部欠損	緑色片岩	研削途中か 両面に一部敲打痕
32	くぼみ石	2.5	[7.6]	7.5	2.1	[163]	2/3	緑色片岩	表面にくぼみ
33	磨 石	22.5	7.5	5.1	2.4	138	完 形	変文武岩	両面に磨面
34	磨 石	40	12.4	5.8	4.3	470	完 形	粗粒安山岩	両面に磨面・敲打痕
35	丸 石	12	8.6	8.3	6.8	[532]	ほぼ球形	粗粒安山岩	



第161図 10号住居跡



第162図 10号住居跡遺物出土状況

10号住居跡

位置 C80-83-IX17~20Gr 重複 2号住居跡・41号土坑・42号土坑より古

平面形態 楕円形であるが、北東部は丸みを帯びた角があり、ほぼ直角に曲がっている。

規模 5.56m×4.44m 壁高 70cm 面積 18.2m² 床面積 15.2m² 壁溝 なし

柱穴 床面上から計14基のピットが検出されているが、壁に非常に近いものが多く、一般的な柱穴とすることはできない。また配置も不規則で、東部からは全く検出されていない。

P1 28×23×18 P2 25×20×18 P3 29×26×19 P4 28×22×24 P5 30×26×16

P6 35×32×32 P7 24×19×13 P8 27×25×24 P9 35×28×63 P10 28×24×28 P11 30×30×29

P12 73×38×45 P13 40×35×38 P14 43×32×45

床面 黄褐色土で厚さ15~20cmの貼床としている。中央やや南寄りと西部の壁にかかる部分に土坑状の掘り込みが検出されている。

掘り方 ほぼ平坦な掘り方で、凹凸は少ない。

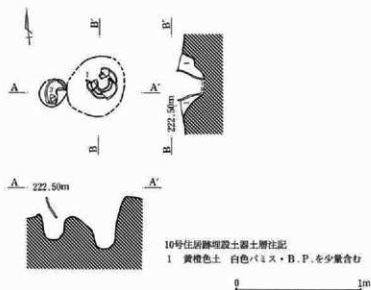
遺物出土状況 ほぼ全面から出土しているが、住居北部と東部に分布の濃い部分がある。垂直分布をみると、上層から下層まで出土しているが、東部の床面付近から特に多く出土している。接合関係の判明するものは3点あり、床面付近と覆土上・中層のものが接合している。

埋設土器 位置 住居中央部 規模 長径52cm短径43cm深さ20cm

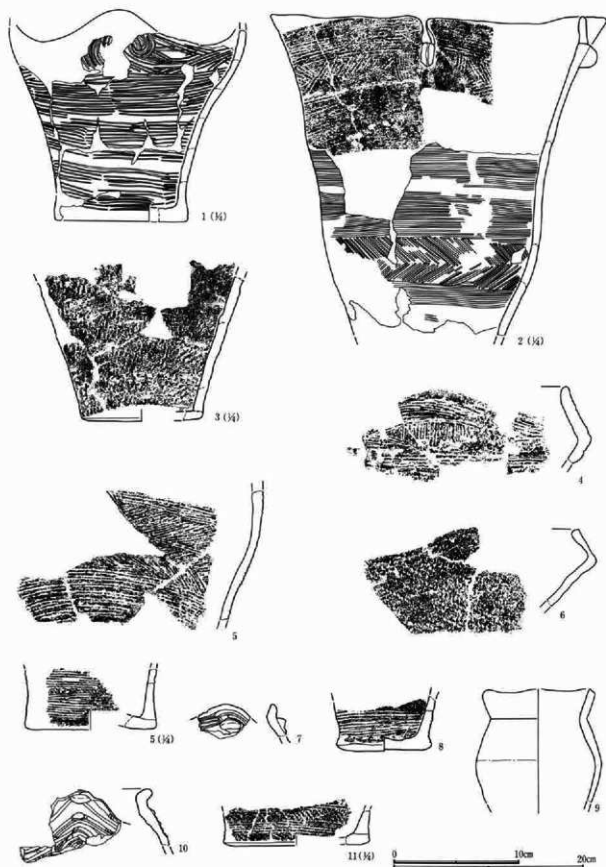
概要 掘り方は楕円形で断面は台形に近いが途中段がある。底面に接して1の深鉢が埋設されている。また、これに接するように径20cm深さ20cmのピットがあり、3の深鉢が出土している。

出土遺物 土器は、IV類492点、時期不明159点、計651点が出土し、石器は、石鏃4点、尖頭器様石器1点、ピレスエスキュー1点、石匙4点、打製石斧4点、スクレイパー3点、微細制層度のある剥片11点、二次加工痕のある剥片10点、磨石2点、くぼみ石3点、石皿1点、台石1点、丸石4点、剥片111点、黒曜石剥片109点、石核8点、黒曜石石核14点、不明1点、計292点が出土している。

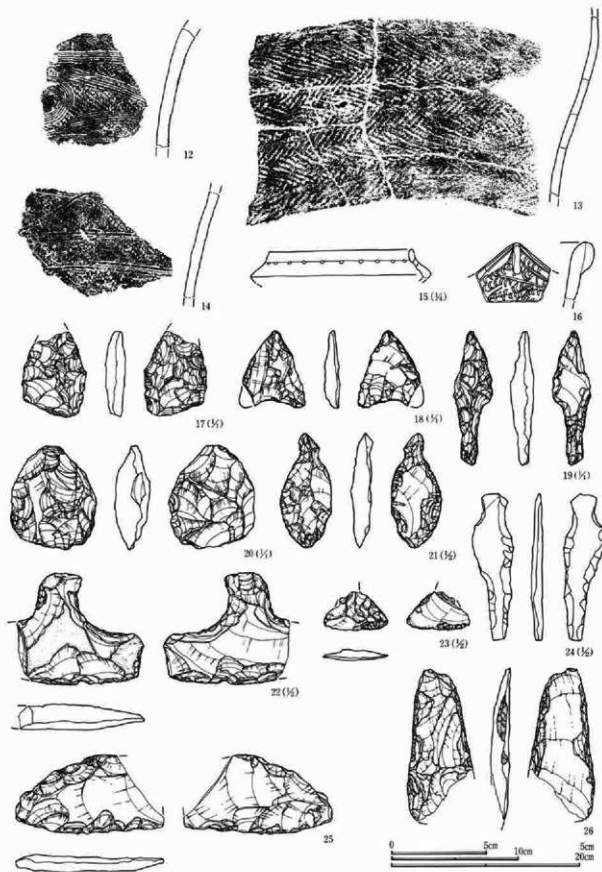
所見 出土遺物から前期後半諸磯b式期の住居と考えられる。



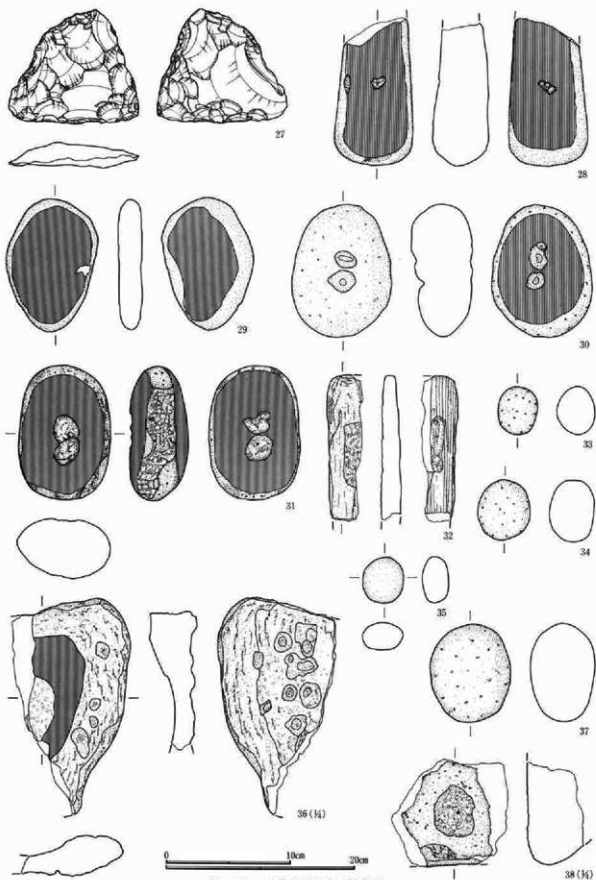
第163図 10号住居跡埋設土器



第164図 10号住居跡出土遺物(1)



第165図 10号住居跡出土遺物(2)



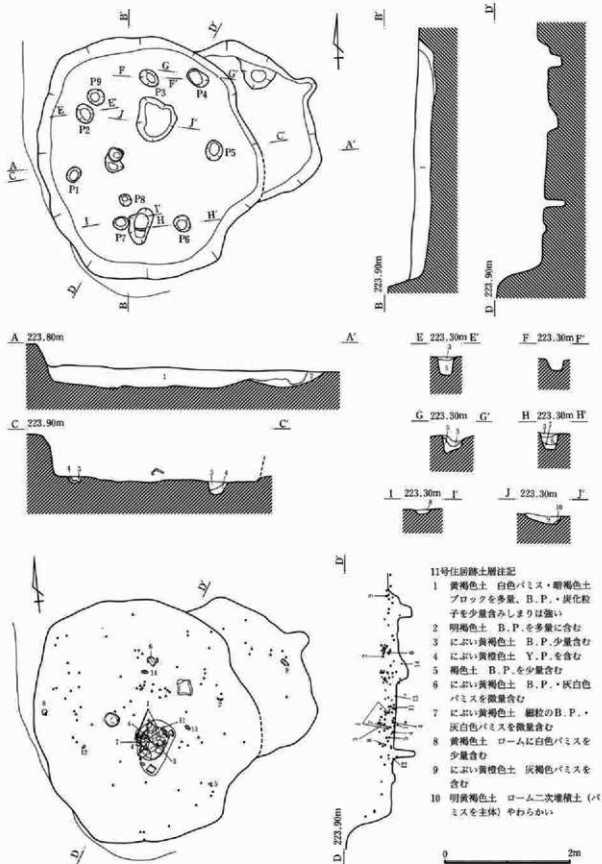
第166図 10号住居跡出土遺物(3)

10号住居跡出土土器観察表

No	器種 部位	床高 (cm)	①色調(表) ②色調(裏) ③焼成 ④胎土	法 量 調 整	文 様 要 素	分 類	備 考
1	深鉢 底土器		①②明赤褐 ③良好 ④粗 粗砂を多く含む	底径(13.8cm) 高さ(22.3cm)	半截竹管状工具による平行沈線	IV 2	
2	深鉢 胴部	3	①②にぶい橙 ③良好 ④粗 粗砂・塵・骨母を含む	口径(24.0cm) 内面寛磨き	半截竹管状工具による集合沈線 口縁部に挟りありその下に棒状貼付文	IV 2	
3	深鉢 胴部	埋設	①にぶい黄橙 ②黄橙 ③良好 ④粗 粗砂・塵を含む	底径(12.6cm) 内面寛磨き	3本1単位の浮線文を貼付後、R.L縄文横位施文 浮線文はほとんど削られる	IV 1	
4	深鉢 口縁部	11	①②にぶい黄橙 ③良好 ④粗 粗砂・塵・骨母を含む	器厚10mm 内面寛磨き	半截竹管状工具による集合沈線	IV 2	
5	深鉢 胴部	3 41	①②にぶい橙 ③良好 ④粗 粗砂・塵・片岩を多く含む	器厚8~9mm 底径(14.0cm)	縄文施文か 半截竹管状工具による集合沈線	IV 2	
6	深鉢 口縁部	14	①②明黄褐 ③良好 ④普通 粗砂・塵を多く含む	器厚8mm 内面ナ デ後磨き	R.L縄文横位施文	IV 3	
7	深鉢 口縁部	0	①②にぶい橙 ③良好 ④普通 粗砂を含む	器厚7~12mm 内面ナデか	半截竹管状工具による平行沈線 棒状貼付文	IV 2	
8	深鉢 底土器	-2	①②にぶい橙 ③良好 ④普通 粗砂を含む	底径7.6cm 内面ナデ	半截竹管状工具による集合沈線	IV 2	
9	深鉢 胴部	0	①②にぶい黄橙 ③良好 ④粗 粗砂・塵・骨母を含む	器厚7mm 内面寛磨きか	外面寛磨き		
10	深鉢 口縁部	4	①②浅黄橙 ③良好 ④普通 粗砂を少量含む	器厚6~8mm 内面寛磨り	浮線文上に刻み 棒状貼付文	IV 2	
11	深鉢 底土器	-4	①②にぶい黄橙 ③良好 ④普通 粗砂を多く含む	底径(16.0cm) 内面ナデか	R.L縄文横位施文後、半截竹管状工具による平行沈線を施文	IV 2	
12	深鉢 胴部	26	①②にぶい黄橙 ③良好 ④粗 粗砂・塵を含む	器厚10~12mm 内面寛磨き	R.L縄文横位施文後、棒状工具による施文か	IV 2	
13	深鉢 胴部	26	①②にぶい黄橙 ③良好 ④粗 粗砂・塵・片岩を多く含む	器厚8~9mm 内面ナデ後磨き	R.L・I.R縄文による結束第1種	IV 3	
14	深鉢 胴部	4	①②にぶい黄橙 ③良好 ④粗 粗砂・塵・片岩を含む	器厚10~12mm 削り後磨きか	R.L縄文横位施文後、半截竹管状工具2本1単位による平行沈線	IV 2	
15	深鉢 口縁部	覆土	①②黒褐 ③良好 ④普通 粗砂・塵を含む	口径(15.0cm) 内面寛磨き	外面寛磨き 胴部に径4mmの穿孔2cm間隔で20~24個か		
16	深鉢 口縁部	-10	①明赤褐 ②にぶい赤褐 ③良好 ④普通 粗砂を多く含む	器厚7~10mm 内面寛磨き	半截竹管状工具による連続爪形文、棒状貼付文		

10号住居跡出土土器観察表

No	器種	床高 (cm)	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	残存状況	石 材	特 徴
17	石 鉢	0	[2.2]	1.6	0.5	[1.7]	先端部欠損	黒曜石	凸基無蓋縁
18	石 鉢	25	2.0	(1.7)	0.4	[1.0]	基部一部欠損	黒曜石	凹基無蓋縁
19	石 鉢	-15	3.5	1.0	0.6	1.7	完 形	チャート	凸基有蓋縁
20	石 鉢	2土坑	2.7	2.2	0.9	5.2	完 形	黒曜石	凸基有蓋縁
21	石 鉢	23	6.0	2.7	1.2	14.0	完 形	チャート	椀型
22	石 鉢	7	5.9	[6.7]	1.4	[40.0]	3/4	硬質泥岩	横型 片面に自然面
23	石 鉢	-22	[2.0]	3.4	0.7	[3.3]	紐部欠損	チャート	横型
24	石 鉢	-4	7.8	2.2	0.6	9.0	完 形	硬質泥岩	横型 側面が不明
25	スタレイバー	4	6.2	[11.8]	1.5	[87]	3/4	硬質泥岩	側縁に刃部
26	打製石斧	-1	[11.9]	5.2	1.7	[101]	刃部欠損	緑色片岩	側面に刃部
27	スタレイバー	-21	6.0	6.9	1.3	49	完 形	黒色頁岩	側縁部に刃部
28	磨 石	34	[11.6]	6.2	4.4	[428]	3/4	ゲイサイト	両面に磨面・敲打痕
29	磨 石	-11	10.5	7.3	1.8	160	完 形	砂岩	両面に磨面
30	くぼみ石	20	10.5	8.0	4.8	479	完 形	粗粒安山岩	両面にくぼみ、片面に磨面
31	磨 石	26	10.6	7.2	4.6	533	完 形	粗粒安山岩	両面に磨面、側面に敲打痕
32	くぼみ石	30	[11.5]	[2.8]	1.4	[83]	2/5	黒色片岩	両面にくぼみ
33	丸 石	-10	4.8	4.2	3.5	86	完 形	粗粒安山岩	
34	丸 石	-26	3.8	3.1	3.0	51	完 形	粗粒安山岩	
35	丸 石	-13	3.6	3.2	2.1	36	完 形	砂岩	
36	石 皿	-10	[23.0]	[12.5]	5.2	[1712]	1/2	緑色片岩	片面に磨面 両面にくぼみ
37	丸 石	-6	7.8	6.5	5.1	270	完 形	流紋岩	
38	台 石	11	[11.3]	[12.3]	[6.0]	[1132]		硬 片	粗粒安山岩 片面に敲打痕



- 11号住居跡土層注記
- 1 黄褐色土 白色パミス・暗褐色土ブロックを多量、B.P.・炭化粒子を少量含みしまりは強い
 - 2 明褐色土 B.P.を多量に含む
 - 3 におい黄褐色土 B.P.少量含む
 - 4 におい黄褐色土 Y.P.を含む
 - 5 褐色土 B.P.を少量含む
 - 6 におい黄褐色土 B.P.・灰白色パミスを微量含む
 - 7 におい黄褐色土 細粒のB.P.・灰白色パミスを微量含む
 - 8 黄褐色土 ロームに白色パミスを少量含む
 - 9 におい黄褐色土 灰褐色パミスを含む
 - 10 明黄褐色土 ローム二次堆積土(パミスを主体) やわらかい

第167図 11号住居跡

11号住居跡

位置 C 80-82-IX21-24Gr 重複 なし 平面形態 楕円形 規模 4.06m×3.60m

壁高 76cm 面積 10.8㎡ 床面積 8.8㎡ 主軸方位 N-95°-W

柱穴 比較的壁に近い位置に9基検出されている。竪穴住居中でも最も整然と配置されており、柱間も等間隔に近い。

P1 24×22×8 P2 32×27×31 P3 33×24×20 P4 36×26×27 P5 32×27×21

P6 30×25×28 P7 36×20×8 P8 20×18×34 P9 28×24×13

床面 地山を直接床面としており、貼床は施されていない。ほぼ水平であるが、やや凹凸の多い床面であり、比較的軟弱である。

掘り方 掘り方を直接床面としている。

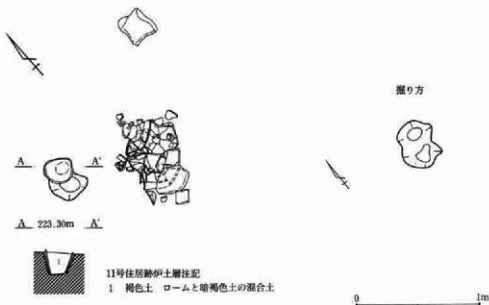
遺物出土状況 出土量は少なく、全面に散在している。中央やや南よりの床面上から、1の土器が潰れた状態で出土している。垂直分布を見ると、上層から下層まで出土している。接合関係の判明するものは1点で、覆土中層の破片が接合している。

炉 位置 中央やや西寄り 主軸方位 N-150°-E 規模 全長39cm 幅25cm 深さ18cm

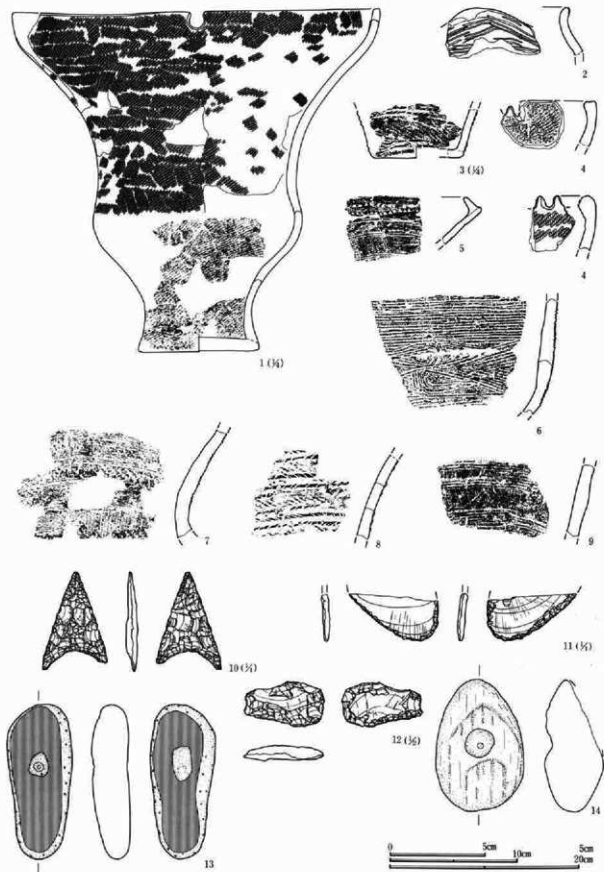
概要 底部の無い深鉢の下半部を埋設して炉体としており、よく焼けている。掘り方は2つ重なった形になっており、作り直している可能性がある。

出土遺物 土器は、IV類57点、時期不明28点、計85点が出土し、石器は、石鏃1点、スクレイパー1点、微細刻離痕のある剝片4点、二次加工痕のある剝片1点、磨石1点、くぼみ石1点、剝片32点、黒曜石剝片12点、石核3点、不明1点、計57点が出土している。

所見 出土遺物から、前期中半諸磯B式期の住居と考えられるが、重複関係から8号住より古い住居とすることができ。



第168図 11号住居跡炉



第169図 11号住居跡出土遺物

11号住居跡出土土器観察表

No	器種 部位	床高 (cm)	①色調(表) ②色調(裏) ③焼成 ④胎土	法 量 調 整	文 様 要 素	分 類	備 考
1	深鉢 口～底	4.5	①②にぶい橙 ③良好 ④粗 粗砂・塵・片岩を含む	口39.3cm 底13.0 cm 高さ6cm	L.R縄文横位施文 口縁部に4単位のU字状 袈りあり	IV 3	
2	深鉢 口縁部	27.5	①橙 ②明黄褐色 ③良好 ④普通 粗砂を多く含む	器厚6～7mm 内面磨き	半截竹管状工具による平行沈線	IV 2	
3	深鉢 底部	17.5	①明黄褐色 ②にぶい黄 ③良好 ④普通 粗砂を含む	底径(9.6cm) 内面 ナデ後磨き	R.L縄文横位施文後、2～3本1単位の浮線 文上に刻み	IV 1	
4	深鉢 口縁部	2.5	①②橙 ③良好 ④粗 粗砂・塵を含む	器厚8～12mm 内面磨き	L.R縄文横位施文 口縁部にU字状の袈りあり	IV 3	
5	深鉢 口縁部	7.5	①明褐 ②橙 ③良好 ④普通 粗砂を含む	器厚5mm 内面磨き	半截竹管状工具による連続刻突文・平行沈線	IV 2	
6	深鉢 胴部	17	①②明黄褐色 ③良好 ④粗 粗砂・塵・片岩を含む	器厚11mm 内面ナデ	半截竹管状工具による集合沈線	IV 2	
7	深鉢 胴部	7	①②にぶい黄褐色 ③良好 ④普通 粗砂を含む	器厚9～13mm 内面磨き	R.L縄文横位施文後、6本1単位の帯状工具 による平行沈線	IV 2	
8	深鉢 胴部	13.5	①灰黄 ②にぶい黄 ③良好 ④普通 粗砂を含む	器厚7～9mm 内面磨き	R.L縄文横位施文後、3本1単位の浮線文 上に刻み	IV 1	
9	深鉢 胴部	14	①②黄褐色 ③良好 ④普通 粗砂を含む	器厚10mm 内面磨き	半截竹管状工具2本1単位による平行沈線	IV 2	

11号住居跡出土土器観察表

No	器種	床高 (cm)	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	残存状況	石 材	特 徴
10	石 壺	覆土	2.6	1.7	0.3	0.8	完 形	黒曜石	凹基無蓋壺 袈りが大きい
11	不 明	5.5	[1.2]	[2.4]	0.3	[0.4]	1/2	黒曜石	縁辺部を加工
12	スクレイパー	0	2.4	4.3	0.8	7.0	完 形	チャート	側縁部に刃部
13	磨 石	0	12.3	5.2	3.0	290	完 形	安芸安山岩	両面に磨面・くぼみ
14	くぼみ石	土坑6.5	10.4	7.0	4.6	[491]	ほぼ完形	緑色片岩	裏面にくぼみ

12号住居跡

位置 C69～71-IX20～23Gr 重複 なし

平面形態 調査区外になる部分が多いため、全体の形態は不明であるが、楕円形もしくは隅丸方形か隅丸長方形になると考えられる。

規模 [4.32m] × [2.22m] 壁高 78cm 面積 10.4m² 床面積 7.8m²

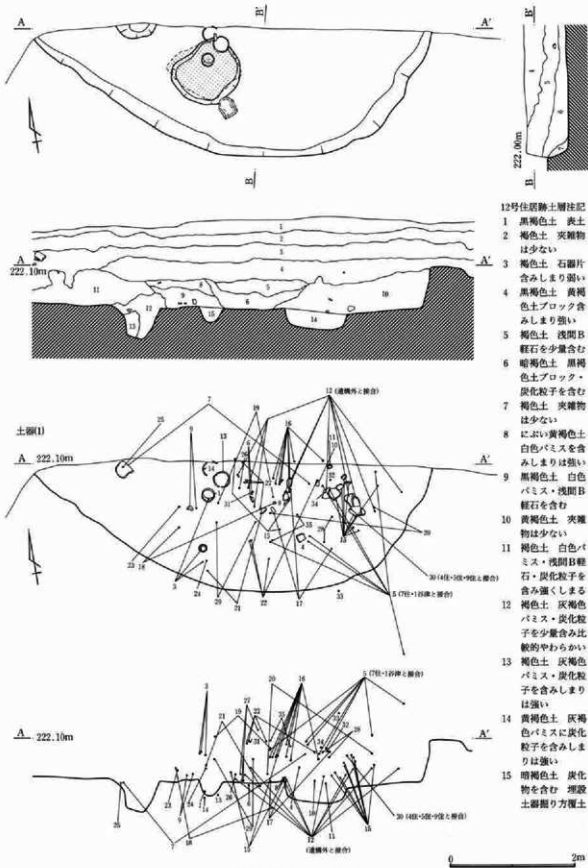
主軸方位 N-142°-W

柱穴 北西部に1基検出されているが、他には検出されていない。調査区外に存在する可能性はあるが、全面に規則的に配置されるとは考えられない。 P1 66×24×73

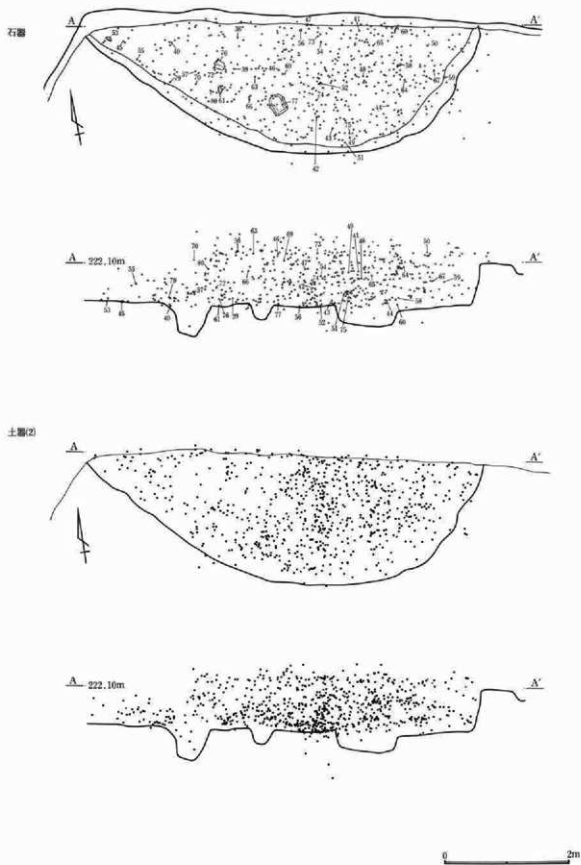
床面 明確な貼床は検出されていないため、地山を直接床面としていたと考えられる。ほぼ水平で平坦な床面である。

掘り方 掘り方を直接床面としている部分が多いが、やや東寄りに、長径1.98m短径1.26m深さ66cmの楕円形の掘り込みが検出されており、床下土坑と考えられる。また、床下土坑の西壁に重なって、0.78×0.67mのピットも検出されている。

遺物出土状況 土器、石器とも全面から多量に出土している。垂直分布を見ても、上層から下層まで満遍なく出土しており偏りが無い。接合関係の判明するものは18点と多く、床面付近・覆土下層で接合しているものと、覆土上層で接合しているものが多いが、上層と下層で接合している破片もある。



第170図 12号住居跡



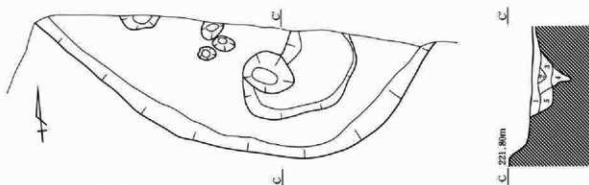
第171图 12号住居跡遺物出土状況

炉 位置 南壁寄り中央 主軸方位 N-123°-W 規模 全長40cm 幅25cm

概要 35×31cm深さ4cmの楕円形の掘り方の北部に、底部のある深鉢の下半部が2個体、底部が無く割れた状態の深鉢が1個体、計3個体埋設されて出土している。

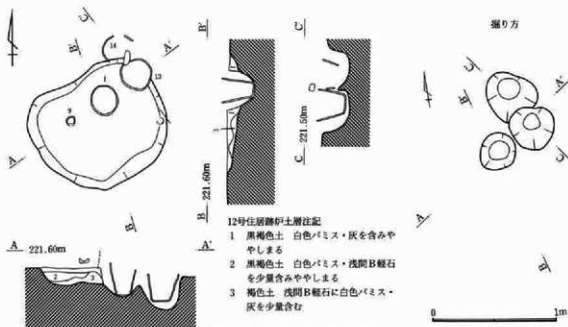
出土遺物 出土量は非常に多く、土器は、IV類700点、時期不明319点、計1,019点が出土しており、石器は、石鏃11点、石錐1点、ピエスエスキュー3点、石匙3点、打製石斧15点、スクレイパー2点、微細剥離痕のある剥片6点、二次加工痕のある剥片17点、磨石13点、くぼみ石2点、石皿1点、台石1点、丸石4点、砥石1点、剥片321点、黒曜石剥片235点、碎片10点、石核2点、黒曜石石核9点、計655点が出土している。

所見 出土遺物から、前期後半諸磯b式期の住居と考えられる。上層から下層まで多量に遺物が出土しているため、遺物は覆土が堆積中に継続して廃棄されたものと考えられる。



12号住居跡床下土坑土層注記

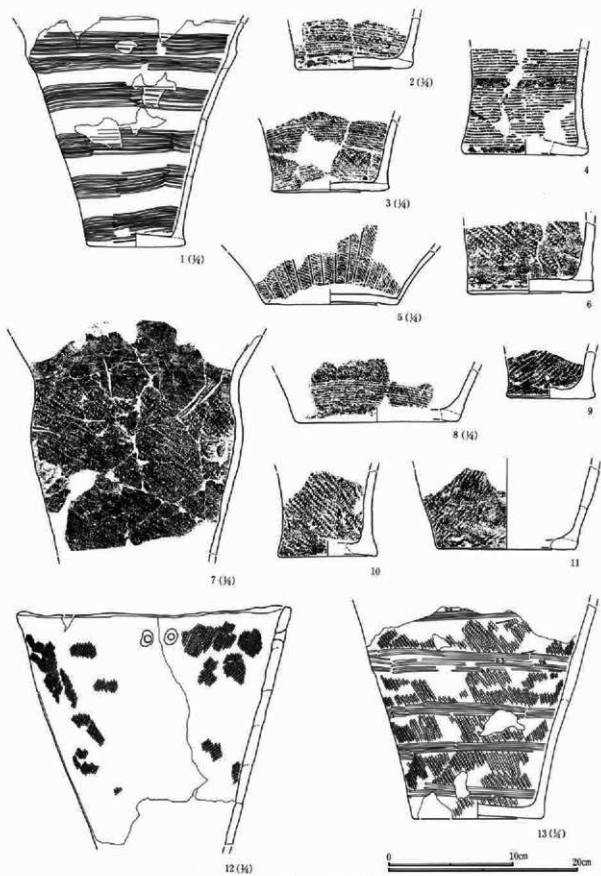
- 1 によい黄褐色土 炭化粒子・B、P.を含みしまりは強い
- 2 褐色土 炭化粒子・B、P.を少量含みしまりは強い
- 3 褐色土 炭化粒子を少量、B、P.を微量含む
- 4 灰黄褐色土 B、P.・灰褐色パミスを多く含む
- 5 灰黄褐色土 灰褐色パミスを多く、炭化粒子を少量含む やわらかい



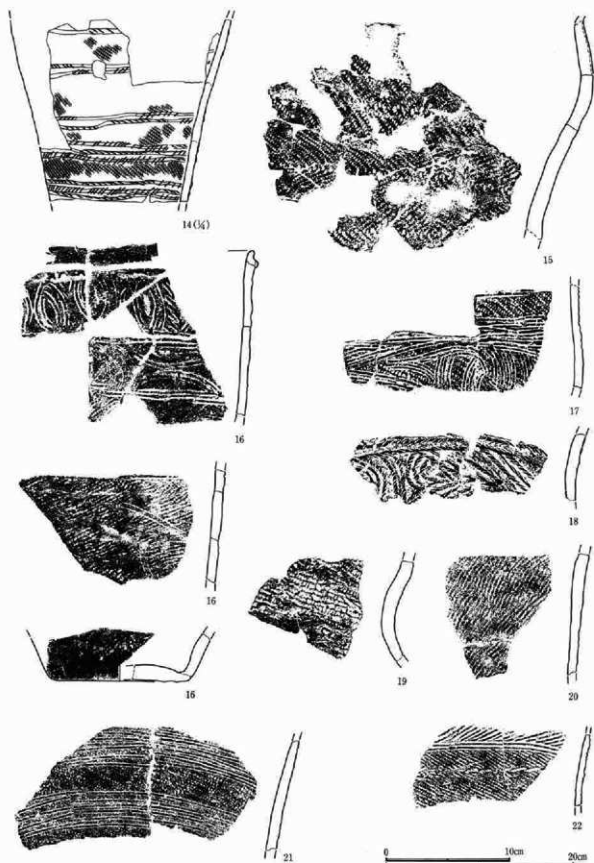
12号住居跡炉土層注記

- 1 黒褐色土 白色パミス・灰を含みややしまる
- 2 黒褐色土 白色パミス・浅間B軽石を少量含みややしまる
- 3 褐色土 浅間B軽石に白色パミス・灰を少量含む

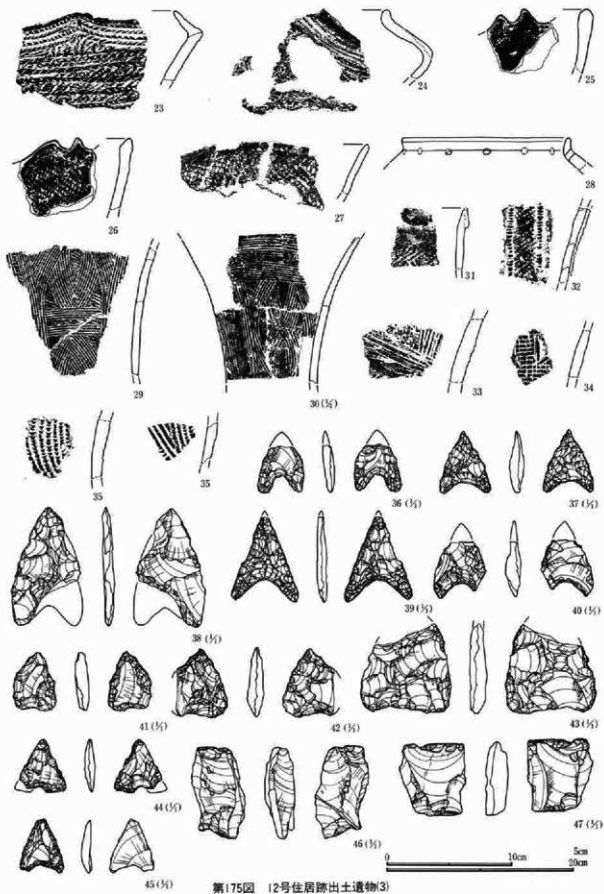
第172図 12号住居跡掘り方および炉



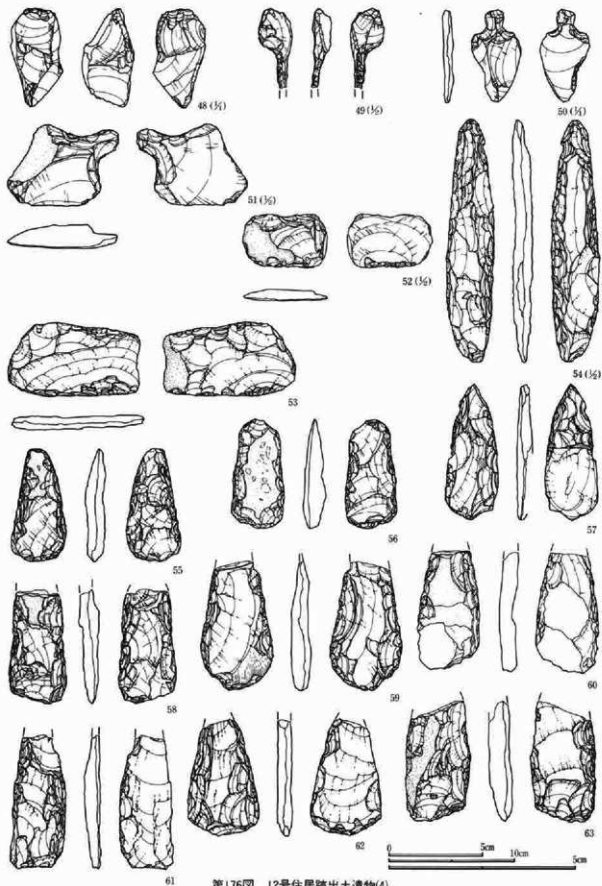
第173図 12号住居跡出土物(1)



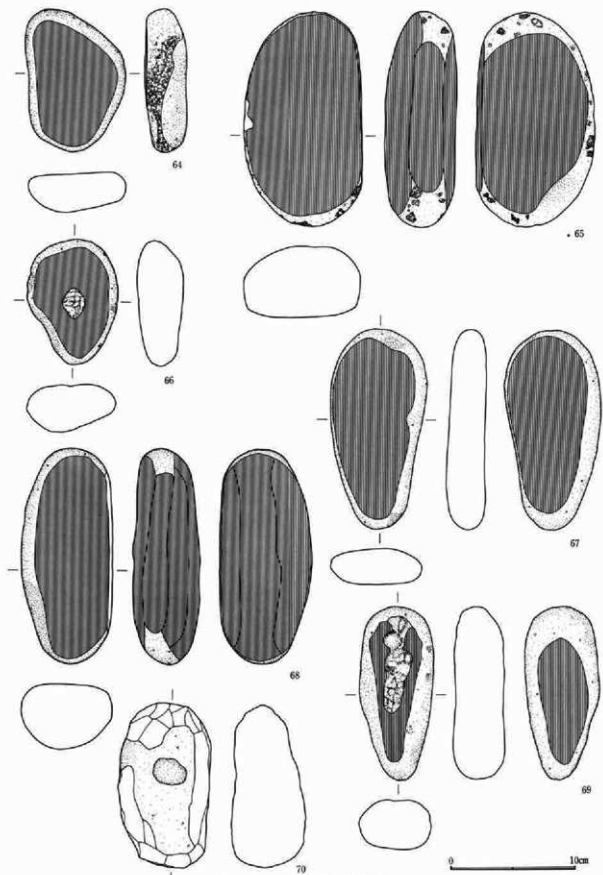
第174図 12号住居跡出土遺物(2)



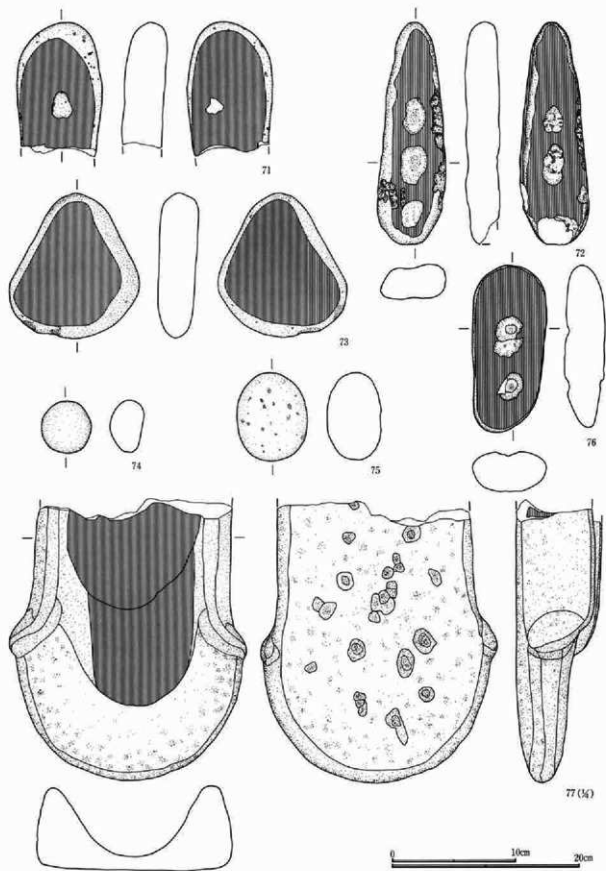
第175図 12号住居跡出土遺物(3)



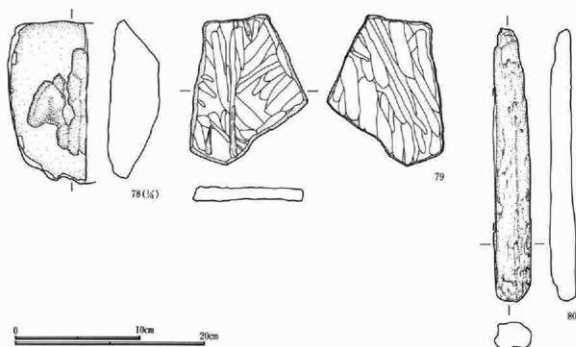
第176図 12号住居跡出土遺物(4)



第177図 12号住居跡出土遺物(5)



第178図 12号住居跡出土遺物(6)



第179図 12号住居跡出土遺物(7)

12号住居跡出土土器観察表

No.	器種部位	床高(cm)	①色調(表) ②色調(裏) ③焼成 ④胎土	法 量 測 整	文 様 要 素	分 類	備 考
1	深鉢 胴～底	埋設 土層	①②良好 ④粗 粗砂・礫・片炭を多く含む	底径10.5cm 内面 縦方向磨き	半截竹管状工具4～5本1単位による平行沈線。縄文施文なし	IV	外面皮化 物付着
2	深鉢 底	覆土	①②浅黄 ③良好 ④普通 粗砂を含む	底径12.5cm 内面ナデカ	R.L.縄文横位施文後、半截竹管状工具による平行沈線	IV	2
3	深鉢 底	38.5	①明黄 ②におい黄 ③良好 ④粗 粗砂・礫を含む	底径12.7cm 内面磨りか	R.L.縄文横位施文後、半截竹管状工具4～5本1単位による平行沈線	IV	外面皮化 物付着
4	深鉢 底	24	①浅黄 ②におい黄 ③良好 ④普通 粗砂を含む	底径10.0cm 内面ナデカ	半截竹管状工具による集合沈線	IV	
5	深鉢 底	51	①②褐 ③良好 ④粗 粗砂・礫を少量含む	底径14.3cm 内面磨きか	R.L.縄文横位施文後、半截竹管状工具による縦方向の平行沈線	V	
6	深鉢 底	—4	①におい黄 ②におい黄 ③良好 ④普通 粗砂を含む	底径10.1cm 内面ナデ	R.L.縄文横位施文	IV	3
7	深鉢 胴部	—5.5	①におい黄 ②浅黄 ③良好 ④粗 粗砂・礫を含む	器厚7～10mm 内面ナデカ	R.L.縄文横位施文	IV	3
8	深鉢 底	1	①におい黄 ②黄灰 ③良好 ④普通 粗砂を含む	底径17.2cm 内面磨き	R.L.縄文横位施文後、半截竹管状工具5本1単位による平行沈線	IV	2
9	深鉢 底	6	①②におい黄 ③良好 ④普通 粗砂・礫を含む	底径7.1cm 内面ナデ	L.R.縄文横位施文	IV	3
10	深鉢 底	5	①におい黄 ②浅黄 ③良好 ④普通 粗砂を含む	底径(6.0cm) 内面磨き	R.L.縄文横位施文	IV	3
11	深鉢 底	3.5	①②におい黄 ③良好 ④粗 粗砂・礫を含む	底径(11.0cm) 内面磨きか	L.R.縄文横位施文か	IV	3
12	深鉢 口縁部	5	①②におい黄 ③良好 ④粗 粗砂・礫を含む	口径29.3cm 内面磨き	L.R.縄文横位施文 口縁部下に径7mmの1対の補穿孔あり	IV	3
13	深鉢 胴～底	埋設 土層	①明黄褐 ②明褐 ③良好 ④粗 粗砂・礫を含む	底径13.7cm 内面磨き	R.L.縄文横位施文後、半截竹管状工具による平行沈線	IV	2
14	深鉢 胴部	埋設 土層	①②におい黄 ③良好 ④粗 粗砂・礫を含む	器厚7～9mm 内面磨き	R.L.縄文横位施文後、2～3本1単位の浮線文上に刻み	IV	1
15	深鉢 胴部	5	①におい黄 ②灰黄 ③良好 ④粗 粗砂・礫をややく含む	器厚9～12mm 内面磨き	R.L・L.R.縄文結束第1種を施文	IV	3
16	深鉢 口・胴・底	34	①②におい黄 ③良好 ④粗 粗砂・雲母を多く含む	器厚7～10mm 底径(11.0cm)	L.R.縄文横位施文後、半截竹管状工具による平行沈線 内面磨き	IV	2

No	器種 部位	床高 (cm)	①色調(表) ②色調(裏) ③構成 ④胎土	法 量 調 整	文 様 要 素	分 類	備 考
17	深鉢 胴部	—1	①にぶい黄褐色 ②浅黄 ③良好 ④普通 粗砂・雲母を多く含む	器厚7～9mm 内面磨磨き	R・L縄文横位施文後、半縦竹管状工具による 平行沈線	IV 2	
18	深鉢 胴部 肩下ビ コ口	—	①②にぶい黄褐色 ③良好 ④普通 粗砂を多く含む	器厚10mm 内面ナデ	R・L縄文横位施文後、3本1単位の浮線文上 に刻み	IV 1	
19	深鉢 胴部	53	①浅黄 ②にぶい黄 ③良好 ④普通 粗砂・雲母を含む	器厚11mm 内面ナ デ後磨磨き	R・L縄文横位施文	IV 3	
20	深鉢 胴部	14	①②にぶい黄 ③良好 ④普通 粗砂を多く含む	器厚8～10mm 内面ナデ	L・R縄文横位施文	IV 3	
21	深鉢 胴部	—5	①明黄褐 ②浅黄 ③良好 ④粗 粗砂・礫を含む	器厚7～9mm 内面磨磨きか	R・L縄文を施文後、半縦竹管状工具5～6単 位による平行沈線	IV 2	
22	深鉢 胴部	50	①褐 ②にぶい黄褐 ③良好 ④普通 粗砂を含む	器厚5～6mm 内面ナデ	半縦竹管状工具による集合沈線 R・L縄文末 端自糸結線横位施文	V	
23	深鉢 口縁部	19	①粗 ②にぶい黄褐 ③良好 ④粗 粗砂・礫を多く含む	器厚6～9mm 内面磨磨き	L・R縄文施文後、浮線文上に刻み	IV 1	
24	深鉢 口縁部	17	①②にぶい黄褐色 ③良好 ④粗 粗砂をやや多く含む	器厚7～9mm 内面磨磨き	縄文施文か 浮線文に刻み	IV 1	
25	深鉢 口縁部	—7	①②灰褐 ③良好 ④粗 粗砂・雲母を含む	器厚8～10mm 内面ナデ	無文か	IV	
26	深鉢 口縁部	12.5	①灰黄褐 ②褐 ③良好 ④粗 粗砂・礫・片岩を含む	器厚8～9mm 内面ナデ	R・L縄文横位施文	IV 3	
27	深鉢 口縁部	2.5	①にぶい黄褐 ②明黄褐 ③良好 ④粗 粗砂を多く含む	器厚6mm 内面磨磨き	R・L縄文横位施文	IV 3	
28	浅鉢 口縁部	44	①黄褐 ②暗灰黄 ③良好 ④普通 粗砂を含む	口径(14.4cm) 内面磨磨き	外面磨磨き 頸部に径4mmの孔12～16個あり	IV 4	
29	深鉢 胴部	33	①にぶい黄 ②にぶい黄褐 ③良好 ④普通 粗砂をやや多く含む	器厚6～7mm 内面磨磨き	R・L縄文横位施文後、半縦竹管状工具による 平行沈線	IV 2	
30	深鉢 胴部	50	①明黄褐 ②にぶい黄褐色 ③良好 ④普通 粗砂・雲母をやや多く含む	器厚7～9mm 内面磨磨き	R・L・R縄文横位施文後、半縦竹管状工具に よる平行沈線	IV 2	
31	深鉢 口縁部	65	①②赤褐 ③良好 ④粗 粗砂・礫・片岩・雲母含む	器厚6mm 内面磨磨き	R・L縄文縦位施文 口縁部折り返し	V	
32	深鉢 胴部	53	①②橙 ③良好 ④普通 粗砂を含む	器厚7～9mm 内面磨磨き	L・R縄文横位施文後、半縦竹管状工具による 結節浮線	V	
33	深鉢 胴部 住居外	—	①②暗赤褐 ③良好 ④粗 粗砂・礫を含む	器厚12mm 内面磨磨きか	半縦竹管状工具による集合沈線	V	
34	深鉢 胴部	60	①②明褐 ③良好 ④普通 粗砂を少量含む	器厚8mm 内面磨磨きか	柳竹工具による格子状沈線	V	
35	深鉢 胴部	55	①明赤褐 ②灰褐 ③良好 ④粗 粗砂・礫を含む	器厚8～10mm 内面磨磨き	半縦竹管状工具による結節浮線	V	

12号住居跡出土石器観察表

No	器 種	床高 (cm)	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	残存状況	石 材	特 徴
36	石 鏃	82.5	(1.7)	1.2	0.3	[0.4]	先端部欠損	黒曜石	凹基無茎鏃 逆J字形の袈刈に近い
37	石 鏃	覆土	1.6	1.3	0.4	0.5	完 形	黒曜石	凹基無茎鏃
38	石 鏃	覆土	3.2	(1.9)	0.3	[1.1]	基部欠損	黒曜石	凹基無茎鏃
39	石 鏃	10	(2.4)	1.8	0.3	[0.6]	先端部一部欠	黒曜石	凹基無茎鏃 袈刈が大きい
40	石 鏃	—3	(2.0)	1.4	0.4	[0.3]	先端部欠損	黒曜石	凹基無茎鏃
41	石 鏃	56	1.5	1.1	0.3	0.6	完 形	黒曜石	平基無茎鏃
42	石 鏃	28	1.8	[1.4]	0.4	[0.6]	一部欠損	黒曜石	平基無茎鏃
43	石 鏃	8	[2.3]	2.4	0.5	[2.0]	先端部欠損	黒曜石	平基無茎鏃
44	石 鏃	15	1.4	(1.4)	0.3	[0.5]	基部一部欠損	黒曜石	凹基無茎鏃
45	石 鏃	—1	1.4	1.2	0.3	0.9	完 形	黒曜石	凹基無茎鏃
46	ピエスエスキュー	80	2.4	1.4	0.8	2.7	完 形	黒曜石	
47	ピエスエスキュー	60	2.0	1.8	0.6	1.7	完 形	黒曜石	
48	ピエスエスキュー	46	2.6	1.4	1.4	4.3	完 形	黒曜石	
49	ドリル	53	[2.1]	0.9	0.5	[5.3]	ほぼ完形	チャート	
50	石 鏃	89	2.4	1.3	0.2	0.8	完 形	チャート	縦型
51	石 鏃	覆土	4.3	5.9	1.2	23	完 形	黒色頁岩	横型 片面に自然面
52	スライバー	1	4.2	6.7	0.9	28	完 形	頁岩	側縁に刃部 直刃 片面に自然面

No.	器種	床高 (cm)	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	残存状況	石 材	特 徴
53	スクレイパー	5.5	5.8	10.5	1.2	71	完 形	頁岩	側縁に刃部 直刃 片面に自然面
54	スクレイパー	47.5	12.8	2.5	1.1	34	完 形	緑色片岩	両側縁に刃部
55	打製石斧	29	8.8	4.2	1.6	62	完 形	硬質泥岩	楕円型 片面に自然面 凸刃
56	打製石斧	0	8.6	4.1	1.8	62	完 形	硬質泥岩	短冊型 凸刃 片面に自然面
57	打製石斧	18	10.7	4.2	1.2	[41]	ほぼ完形	硬質泥岩	楕円型 裏面に火焼ね
58	打製石斧	20	[9.0]	4.6	1.6	[65]	基部1/4欠損	頁岩	短冊型 直刃か 片面に自然面
59	打製石斧	40	[10.2]	5.8	1.6	[103]	基部1/4欠損	硬質泥岩	楕円型 凸刃 刃部摩耗著しい
60	打製石斧	10	[9.4]	4.9	1.5	[64]	基部1/4欠損	硬質泥岩	楕円型 凸刃か 両面に火焼ね
61	打製石斧	0	[10.5]	4.4	1.3	[58]	基部1/4欠損	緑色片岩	楕円型 直刃
62	打製石斧	覆土	[9.2]	5.7	1.2	[66]	基部1/4欠損	緑色片岩	楕円型 凸刃
63	打製石斧	78	[9.4]	5.2	1.9	[100]	基部1/3欠損	硬質泥岩	短冊型か 直刃 片面に自然面
64	磨石	68	11.2	8.0	3.1	376	完 形	デイサイト	片面に磨面、両側面敲打
65	磨石	52	16.9	9.4	5.6	1526	完 形	粗粒安山岩	片面・片側面に磨面、一部敲打
66	磨石	51	9.9	7.3	3.8	337	完 形	粗粒安山岩	片面に磨面・敲打
67	磨石	42.5	15.7	7.7	3.1	515	完 形	流紋岩	両面に磨面
68	磨石	覆土	17.0	7.3	5.1	1005	完 形	粗粒安山岩	両面・片側面に磨面
69	磨石	71	13.7	5.9	4.1	463	完 形	砂岩	両面に磨面・片面に敲打
70	くぼみ石	69	13.0	7.4	5.9	807	完 形	粗粒安山岩	片面にくぼみ1個、裏面に粗い敲打
71	磨石	覆土	[10.6]	6.8	3.6	[343]	3/4	デイサイト	片面に磨面、片面に敲打
72	磨石	29	17.5	5.2	2.7	[3588]	ほぼ完形	硬質泥岩	両面に磨面・くぼみ4個、両側面敲打
73	磨石	85	11.5	10.3	3.0	470	完 形	デイサイト	両面に磨面
74	丸石	36	6.9	5.6	4.4	57	完 形	粗粒安山岩	
75	丸石	14	4.1	4.0	2.7	208	完 形	粗粒安山岩	
76	磨石	11	13.2	5.9	3.1	404	完 形	安玄武岩	片面に磨面・くぼみ2個
77	石皿	3	[29.7]	25.2	9.0	[6000]	2/3	粗粒安山岩	片面に磨面、裏面にくぼみ23個以上
78	台石	覆土	17.2	[8.5]	5.6	[1006]	1/2	粗粒安山岩	片面に敲打
79	砥石	9	11.5	9.1	1.2	140	完 形	砂岩	両面に研ぎ面
80	石棒	57	21.5	3.1	2.1	[204]	ほぼ完形	雲母石英片岩	

(3) 土坑

5号住居跡

位置 C69-71-IX26・27Gr 重複 なし 平面形態 不正円形 規模 2.74m×2.39m

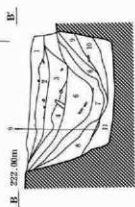
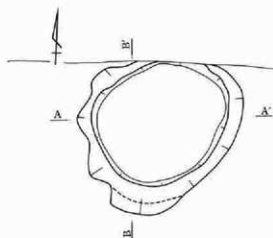
深さ 1.43m 面積 4.8m² 床面積 3.3m² 主軸方位 N-36°-E

概要 発掘調査時点では、竪穴住居跡として調査したが、規模が小さく、柱穴・坪等は検出されていないため、竪穴住居ではなく土坑と考えられる。

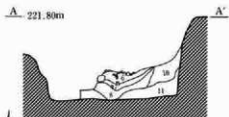
遺物出土状況 土坑のほぼ全面から出土しているが、中央部に多く周辺の壁際は少なくなっている。特に図示できた残りのよい土器は中央に集中している。垂直分布を見ると、壁際のいわゆる三角堆積の部分からはほとんど出土しておらず、中央が低く周辺が高い、レンズ状の堆積の上から多く出土している。接合関係の判明するものは16点と多く、比較的レベル差の小さい破片が接合しているものが多いが、上層と下層で接合しているものもある。

出土遺物 出土量は多く、土器は、IV類270点、時期不明122点、計392点が出土しており、石器は、石鏃2点、尖頭器様石器2点、打製石斧9点、スクレイパー5点、微細刺離痕のある剥片4点、二次加工痕のある剥片11点、磨石3点、くぼみ石4点、石皿1点、丸石3点、砥石3点、剥片82点、黒曜石剥片31点、石核12点、黒曜石石核1点、不明1点、計174点が出土している。

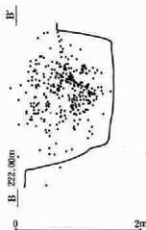
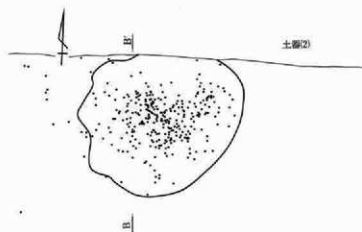
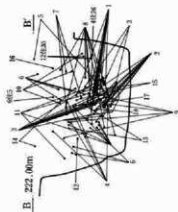
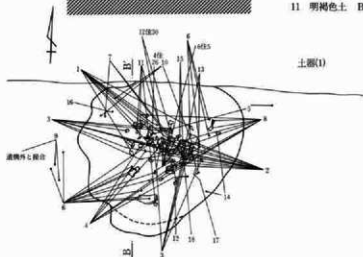
所見 出土遺物から、前期後半諸磯b式期の土坑と考えられる。三角堆積中からはほとんど遺物が出土していないため、遺物は、土坑がある程度自然堆積した後で、他から廃棄されたものと考えられる。



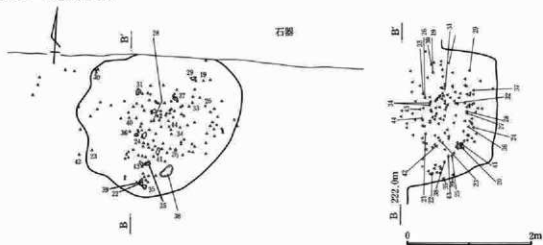
- 5号住居跡土層注記
- 1 ぶい・褐色土 白色石粒を少量含む
 - 2 黒褐色土 白色微細・黄褐色石粒・少量の炭化細粒子含む 粘性・しまりは強い
 - 3 極暗褐色土 白色微細石粒・B.P.・炭化粒子を含む やや粘性でしまりは強い



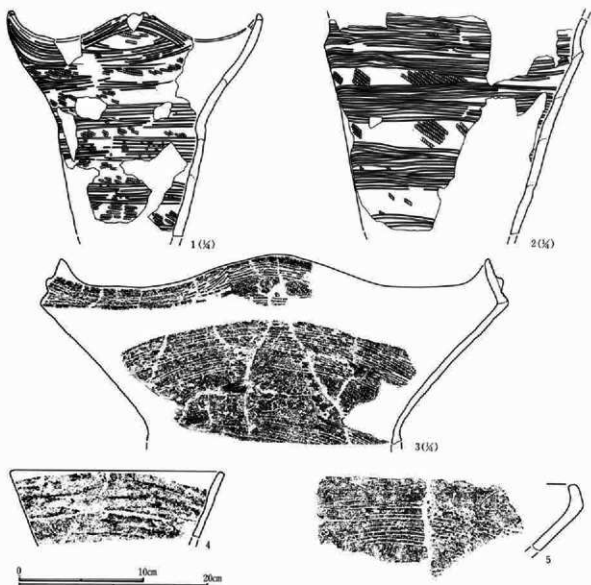
- 4 暗褐色土 白色微細石粒・B.P.・炭化粒子を少量含む やや粘性でしまりは強い
- 5 褐色土 白色微細石粒を含む やや粘性でしまりは強い
- 6 暗褐色土 ローム塊・黄褐色土・炭化粒子を含み粘性がある
- 7 褐色土 ローム塊・少量のB.P.・炭化粒子を含み粘性がある
- 8 明褐色土 炭化粒子を少量含む 粘性・しまりがある
- 9 明褐色土 夾雑物は少なく粘性・しまりがある
- 10 明褐色土 B.P.を少量含む粘性・しまりがある
- 11 明褐色土 B.P.を多く含む粘性・しまりがある



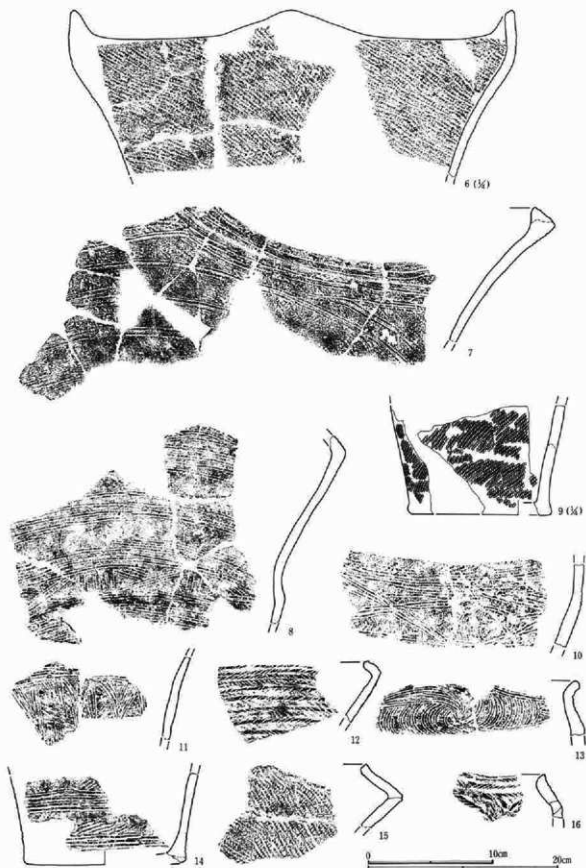
第180図 5号住居跡



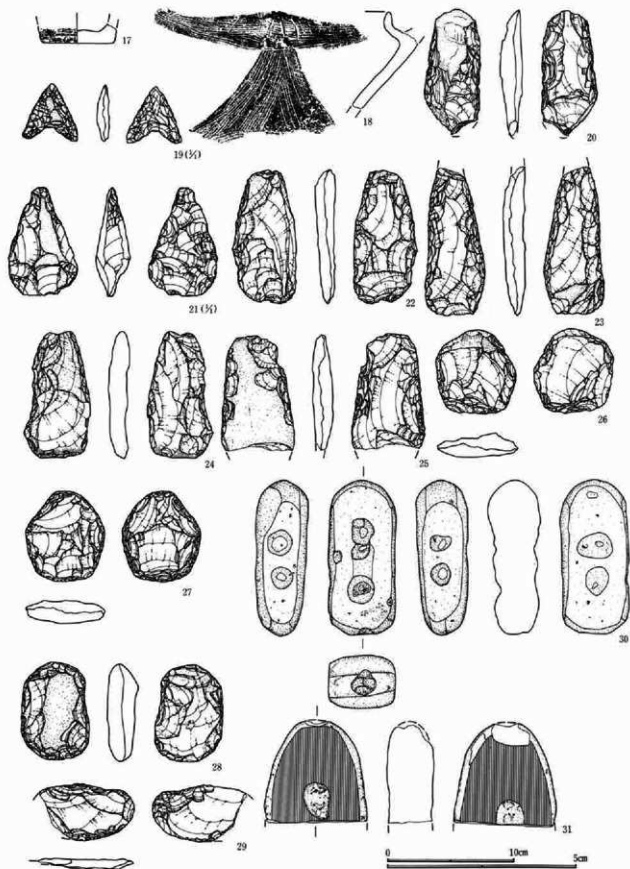
第181图 5号住居跡遺物出土状況



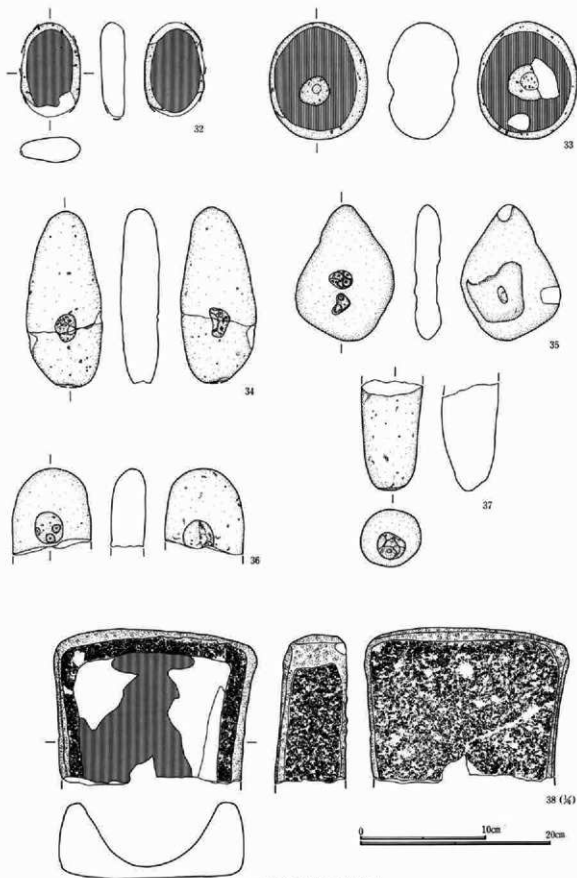
第182图 5号住居跡出土遺物(1)



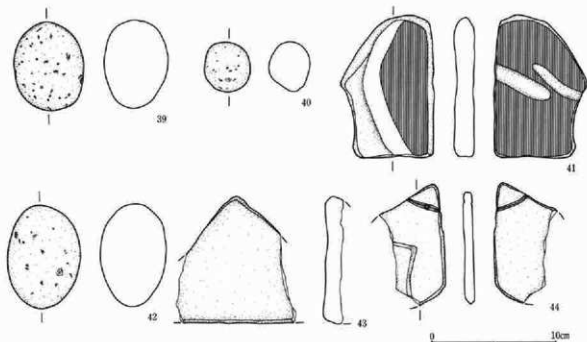
第183図 5号住居跡出土遺物(2)



第184図 5号住居跡出土遺物(3)



第185図 5号住居跡出土遺物(4)



第186図 5号住居跡出土遺物(5)

5号住居跡出土土器観察表

No.	器種位	床高(cm)	①色調(黄) ②色調(黒) ③焼成 ④胎土	法 量 調 整	文 様 要 素	分 類	備 考
1	深鉢 口～胴	39	①②にふい橙 ③良好 ④粗 粗砂・塵を含む	口径26.7cm 内面 ナデ後磨き	R L縄文横位・斜位施文後、半截竹管状工具2 ～4本1単位による平行沈線	IV 2	
2	深鉢 胴部	41	①②灰黄 ③良好 ④粗 粗砂・塵を含む	器厚9～11mm 内面ナデ	R L縄文横位施文後、半截竹管状工具10本前 後1単位平行沈線	IV 2	外面被熱 2の為斜線
3	深鉢 口縁部	30	①明黄緑 ②にふい黄橙 ③良好 ④粗 粗砂・塵を含む	口径(45.4cm) 内面ナデ後磨き	R L縄文横位施文後、半截竹管状工具5本1 単位による平行沈線 棒状貼付文	IV 2	外面被熱 2の為斜線
4	深鉢 口縁部	35	①②にふい黄橙 ③良好 ④粗 粗砂を多く含む	口径(22.0cm) 内面ナデ	外面指環によるナデか	IV	
5	深鉢 口縁部	36	①②にふい黄 ③良好 ④粗 粗砂・塵を含む	器厚7～11mm 内面磨き	半截竹管状工具5本1単位による平行沈線	IV 2	
6	深鉢 口縁部	46	①②にふい黄橙 ③良好 ④粗 粗砂・塵を含む	口径(46.6cm) 内面ナデ	R L縄文横位施文	IV 3	
7	深鉢 口縁部	77.5	①②にふい黄橙 ③良好 ④粗 粗砂・塵を含む	器厚8～11mm 内面削り後磨き	R L縄文横位施文の後、半截竹管状工具2～ 4本1単位の平行沈線	IV 2	
8	深鉢 胴部	17	①②にふい黄橙 ③良好 ④普通 塵を少量含む	器厚6～10mm 内面磨き	半截竹管状工具による2～4本1単位の平行 沈線	IV 2	
9	深鉢 底部	37	①橙 ②にふい橙 ③良好 ④粗 粗砂を多く含む	底径14.6cm 内面削り	L R縄文横位施文	IV 3	内面削部 3 棒状着
10	深鉢 胴部	74	①②にふい黄 ③良好 ④粗 粗砂・塵を多く含む	器厚6～10mm 内面ナデ	L R縄文を施文後、半截竹管状工具による平 行沈線	IV 2	
11	深鉢 胴部	65	①淡黄橙 ②にふい黄橙 ③良好 ④粗 粗砂を多く含む	器厚5～8mm 内面削り後ナデ	R L縄文施文後、半截竹管状工具による平行 沈線	IV 2	
12	深鉢 口縁部	75	①②にふい黄 ③良好 ④普通 粗砂を多く含む	器厚5～7mm 内面磨り	R L縄文施文後、浮線文上に刻み	IV 1	
13	深鉢 口縁部	92	①淡黄 ②にふい黄 ③良好 ④普通 粗砂を多く含む	器厚7～11mm 内面ナデ	半截竹管状工具3本1単位による平行沈線	IV 2	
14	深鉢 底部	86	①②にふい黄橙 ③良好 ④普通 粗砂を含む	底径(13.6cm) 内面削り後磨き	L R縄文横位施文後、半截竹管状工具4本1 単位による平行沈線	IV 2	
15	深鉢 口縁部	73.5	①②にふい黄 ③良好 ④普通 粗砂を含む	器厚6～11mm 内面ナデ後磨き	R L縄文横位施文	IV 3	
16	深鉢 口縁部	119	①②にふい黄灰 ③良好 ④普通 粗砂を多く含む	器厚8～9mm 内面ナデ	R L縄文施文後、浮線文上に刻み 口縁部に 8mmの穿孔あり	IV 1	

No	器種 部位	床高 (cm)	①色調(表) ②色調(裏) ③焼成 ④胎土	法 調 整	文 様 要 素	分 類	備 考
17	深鉢 底	83.5	①②褐 ③良好 ④普通 粗砂を多く含む	底径 5.8cm 内面ナデ	半軟竹管状工具による平行沈線		
18	深鉢 口縁部	51.5	①にぶい黄 ②にぶい黄橙 ③良好 ④粗 粗砂・泥・骨母を含む	総厚 6～10mm 内面ナデ	半軟竹管 4～5本 1単位による平行沈線		

5号住居跡出土石器観察表

No	器 種	床高 (cm)	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	残存状況	石 材	特 徴
19	石 鏝	101.5	1.5	1.5	0.3	0.5	完 形	チャート	凹基無基鏝 片面に自然面
20	打製石斧	58	[9.8]	4.3	1.8	[79]	刃部一部欠損	硬質泥岩	横H型 凸刃
21	石 鏝	101	2.9	1.8	0.9	3.2	完 形	黒曜石	凸基無基鏝 片面に自然面
22	打製石斧	95	10.5	5.0	1.6	87	完 形	硬質泥岩	横H型 凸刃
23	打製石斧	81	[11.6]	4.6	1.6	[111]	基部一部欠損	硬質泥岩	横H型 直刃
24	打製石斧	37	10.0	5.2	1.4	74	完 形	硬質泥岩	横H型か 直刃
25	打製石斧	65	[9.1]	5.8	1.6	[102]	刃部1/4欠損	硬質泥岩	横H型 片面に自然面
26	スクレイパー	115	6.6	6.2	1.7	85	完 形	硬質泥岩	傾縁に刃部 片面に自然面
27	スクレイパー	48	7.1	6.3	1.8	96	完 形	硬質泥岩	傾縁に刃部
28	スクレイパー	48	7.6	5.3	2.4	125	完 形	硬質泥岩	傾縁に刃部 片面に自然面
29	スクレイパー	42	4.4	[7.5]	0.8	[28]	3/4	硬質泥岩	傾縁に刃部
30	くぼみ石	103	12.2	5.4	4.2	410	完 形	粗粒安山岩	両面・両側面にくぼみ 端部に敲打痕
31	磨 石	83	[8.2]	8.2	3.7	[340]	2/3	流紋岩	両面に磨面・敲打痕
32	磨 石	66	[7.4]	4.7	2.0	[103]	ほぼ完形	デイサイト	両面に磨面
33	磨 石	117	9.2	7.9	5.6	419	完 形	流紋岩	両面に磨面・くぼみ 2個
34	くぼみ石	107	13.9	6.0	3.1	[354]	ほぼ完形	変質安山岩	両面にくぼみ 2個
35	くぼみ石	76	10.7	7.9	2.0	[182]	ほぼ完形	牛伏砂岩	両面にくぼみ 3個
36	くぼみ石	45	[6.7]	6.3	2.7	[165]	1/2	粗粒安山岩	両面にくぼみ
37	磨 石	37.5	[10.7]	4.8	4.4	[241]	2/3	流紋岩	端部に敲打痕
38	石 皿	72	[16.3]	21.8	7.9	[3340]	1/2	粗粒安山岩	表面・両側面・側面に敲打調整痕
39	丸 石	60	7.1	5.6	5.2	236	完 形	粗粒安山岩	
40	丸 石	123	4.9	3.6	3.3	61	完 形	緑色片岩	
41	砥 石	53	11.3	7.5	1.6	184	完 形	牛伏砂岩	両面に研ぎ面
42	丸 石	99	8.2	5.8	5.3	334	完 形	粗粒安山岩	
43	砥 石	79	10.0	[9.5]	[1.5]	[157]	3/4	牛伏砂岩	片面に研ぎ面
44	砥 石	120	[9.6]	[4.9]	0.8	[44]	2/3	牛伏砂岩	両面に研ぎ面 上部に横切り状刻み

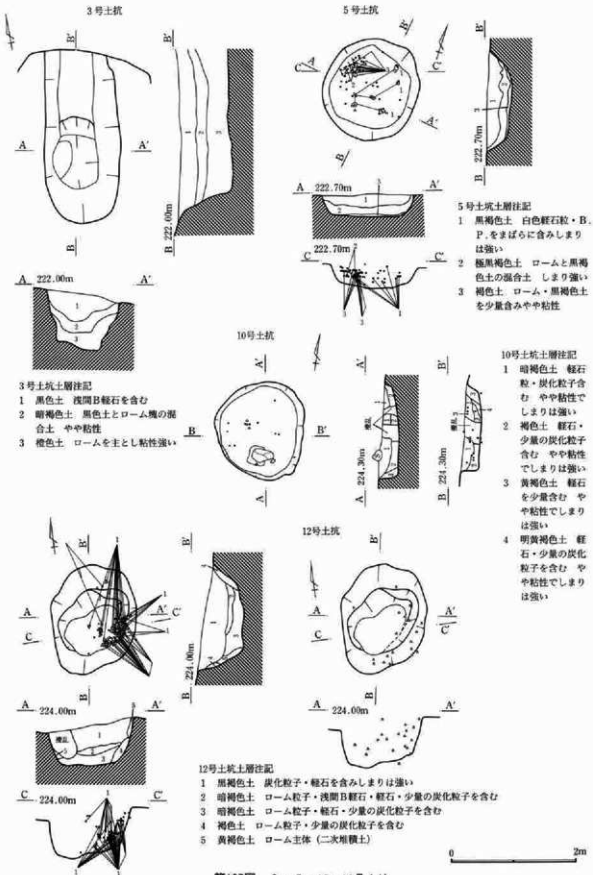
寺山縄文土坑一覽表

No	位 置 (Gr)	重 複 関 係	平面形態	規模 (m)	深さ (cm)	面積 (㎡)	主軸方位	備 考
3	C71-72-IX14-15	なし	隅丸長方形	[2.74]×1.22	97	3.0	N-10°-E	前期踏査b式期
5	C73-74-IX20	なし	円形	1.66×1.50	42	2.0	N-65°-E	前期踏査a式期
9	C72-73-IX26-27	4号住居より新	楕円形	2.56×2.05	94	4.0	N-18°-E	前期踏査b式期
10	C81-82-IX25	なし	楕円形	1.56×1.48	35	1.7	N-43°-W	前期踏査b式期
12	C80-81-IX29-30	なし	楕円形	1.68×1.42	82	1.8	N-35°-E	前期踏査b式期
13	C74-75-IX26-27	4住より新・15土坑と重複	不正形	2.34×2.18	130	4.3	N-85°-W	前期踏査b式期
15	C75-76-IX26	13号土坑と重複	楕円形	1.72×1.28	68	1.5	N-64°-W	
16	C74-75-IX27-28	4号住居より新	楕円形	1.72×1.48	108	1.8	N-17°-E	前期踏査b式期
22	C77-IX21-22	なし	円形	0.96×0.94	28	0.7	N-41°-W	前期踏査b式期
23	C77-IX21	なし	楕円形	0.76×0.45	34	0.3	N-88°-W	
24	C84-IX19-20	なし	隅丸長方形	1.22×0.68	20	0.7	N-15°-W	
25	C80-IX29	なし	楕円形	0.80×0.71	44	0.4	N-20°-E	
26	C84-85-IX21-22	35号土坑より古	楕円形	2.42×2.26	74	4.2	N-130°-W	前期踏査b式期
28	C76-IX25-26	なし	隅丸長方形	1.30×1.03	32	1.1	N-37°-W	前期踏査b式期
29	C81-82-IX15-16	なし	楕円形	2.02×1.28	42	2.1	N-89°-E	前期踏査b式期
30	C79-IX29	なし	楕円形	1.22×1.11	88	1.1	N-84°-W	前期踏査b式期
32	C86-87-IX22-23	38-39土坑より古	隅丸方形	2.02×1.94	92	3.2	N-3°-W	前期踏査b式期
35	C83-84-IX21	26号土坑より新	不正形	1.64×1.36	54	2.1	N-28°-W	前期踏査b式期
41	C82-IX17-18	42号土坑より新	円形	1.23×1.12	64	1.1	N-77°-E	前期踏査b式期
42	C81-82-IX17-18	41号土坑より古	円形	1.23×1.16	56	1.1	N-22°-W	

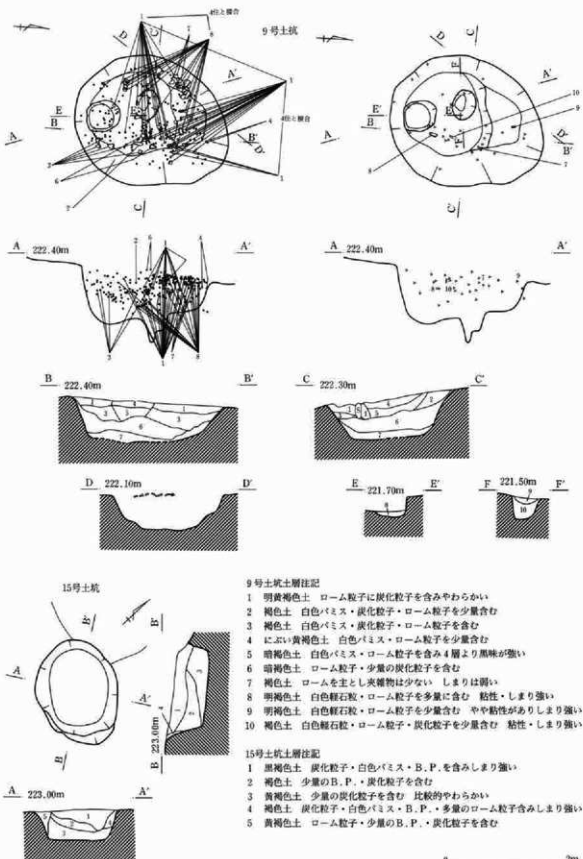
土坑出土遺物数量一覽表

No	土										石										計						
	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	他	不明	計	石	打	打	ス	微	二	凹	台	他		小	割	黒	石	黒	計
3				5					4	9						1	1					2	1	1	1		5
5			20							77															4		4
9				205					132	337		1	3			1	1					6	27	3	7	1	44
10				37					12	49					1	2	1					4	14	2			20
12				29					11	40				2			5				1	8	23	3		1	35
13				328					67	395				2	5	2	8	3				20	80	25	3		128
16				66					24	90		2	2		3	5	1	1	1		15	8		1		24	
22				7					2	9						1						1	1				2
23				1						1												0					0
24				3						3												0					0
25				1						1					1							0					1
26				24					17	41					2						2	2	5				9
28				6					5	11						1	2				3	1					4
29				15					13	28	1				2	2		1			6	6	2				14
30				11					5	16									1		1	2					3
32				58					15	73	1				9	1					11	14	9		2		36
35				9					1	10											0						0
41				41						41											0	2		2			4
42				4						4											0	1					1

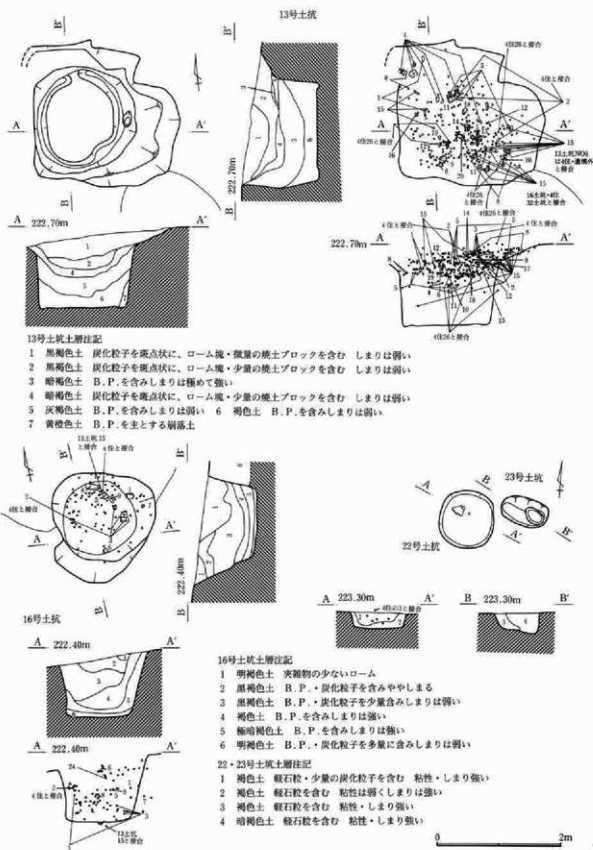
※土器のタイトル欄のⅠ～Ⅷは群を表し、石器のタイトル欄の、「打穿」は打製石斧、「スク」はスクレイパー、「微割」は微細彫刻のある割片、「二割」は二次加工痕のある割片、「凹石」はくぼみ石、「黒割」は黒曜石割片、「黒核」は黒曜石核を表す。また小計は石核から他までの合計を表す。



第187図 3・5・10・12号土坑

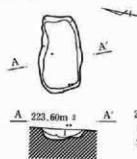


第188図 9・15号土坑



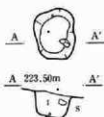
第189図 13・16・22・23号土坑

24号土坑



- 24号土坑土層注記
 1 明赤褐色土 焼土を含む
 2 暗赤褐色土 ローム塊少量含む

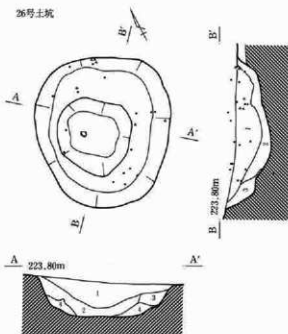
25号土坑



25号土坑土層注記

- 1 明褐色土 炭化粒子を微量含みしまりは弱い

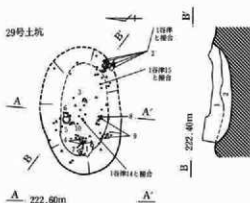
26号土坑



26号土坑土層注記

- 1 褐色土 炭化粒子・ローム塊・暗褐色ブロックを含む
 2 灰褐色土 ローム塊・暗褐色ブロックを含む
 3 褐色土 ローム塊・暗褐色ブロックを含む
 4 明褐色土 ロームを主とする

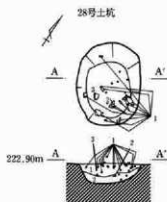
29号土坑



29号土坑土層注記

- 1 黒褐色土 白色バミス・炭化粒子・B・Pを含む
 2 黒褐色土 白色バミス・ローム粒子・B・Pを少量含む

28号土坑

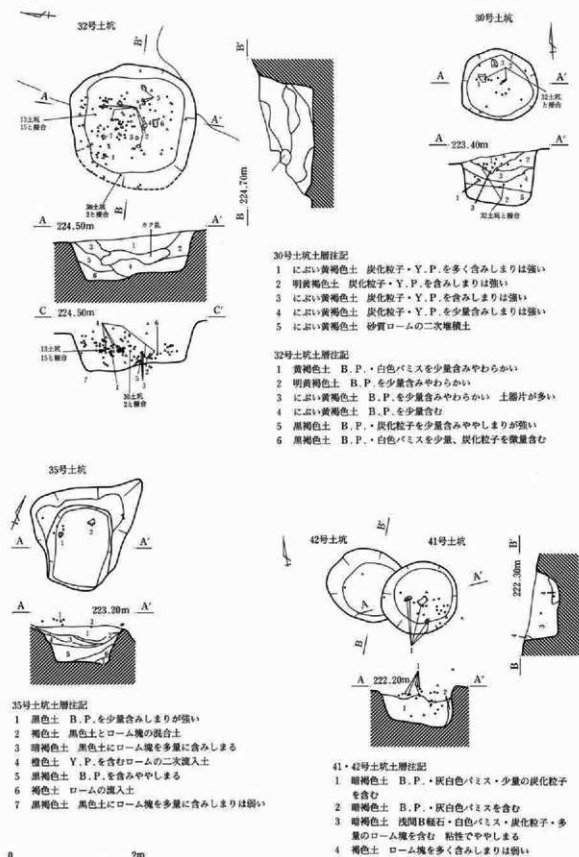


28号土坑土層注記

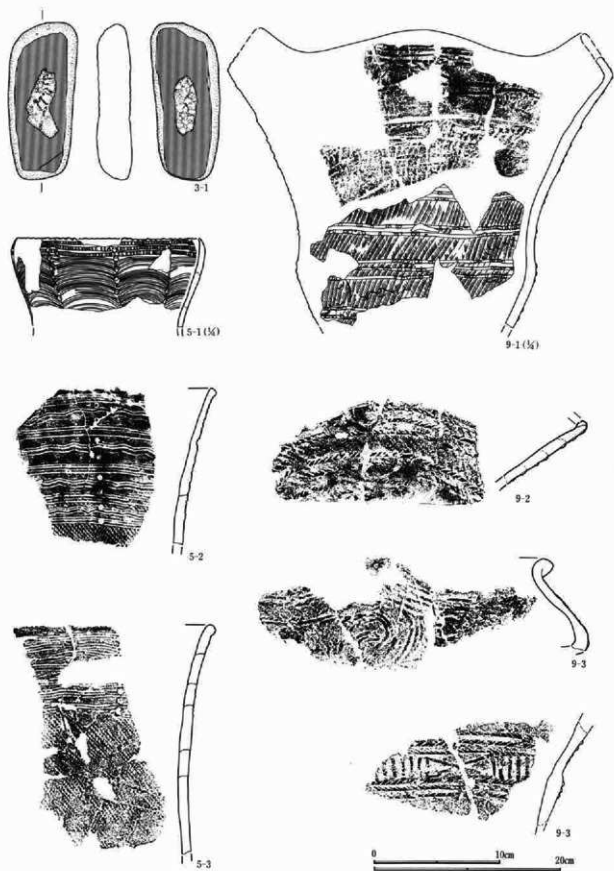
- 1 明黄褐色土 白色バミス・B・P・炭化粒子を含む
 2 明黄褐色土 炭化粒子と少量の白色バミス・B・Pを含む

0 2m

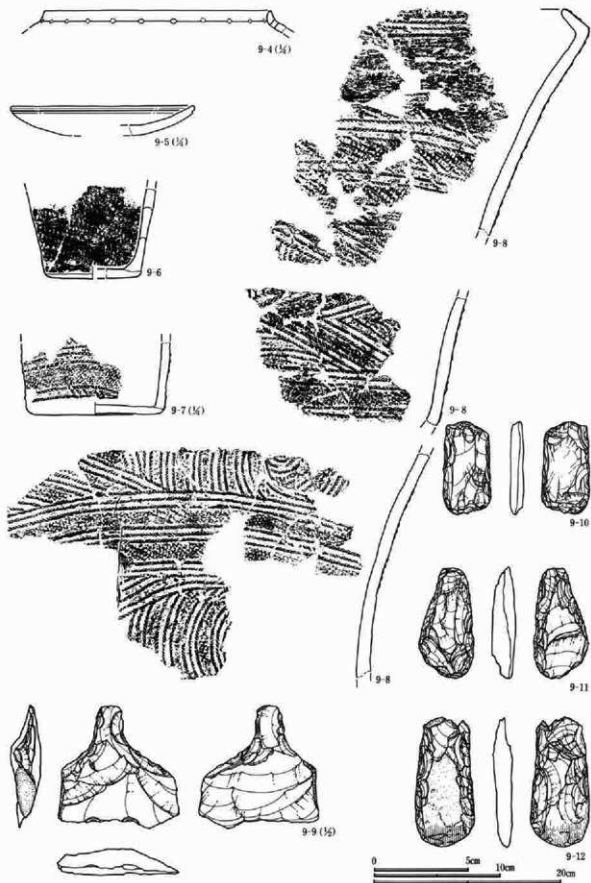
第190図 24～26・28・29号土坑



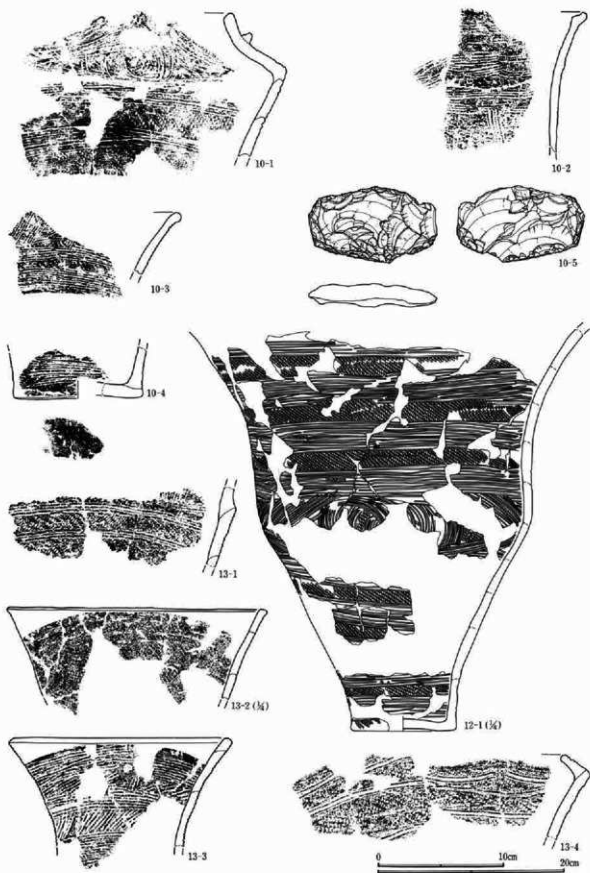
第191図 30・32・35・41・42号土坑



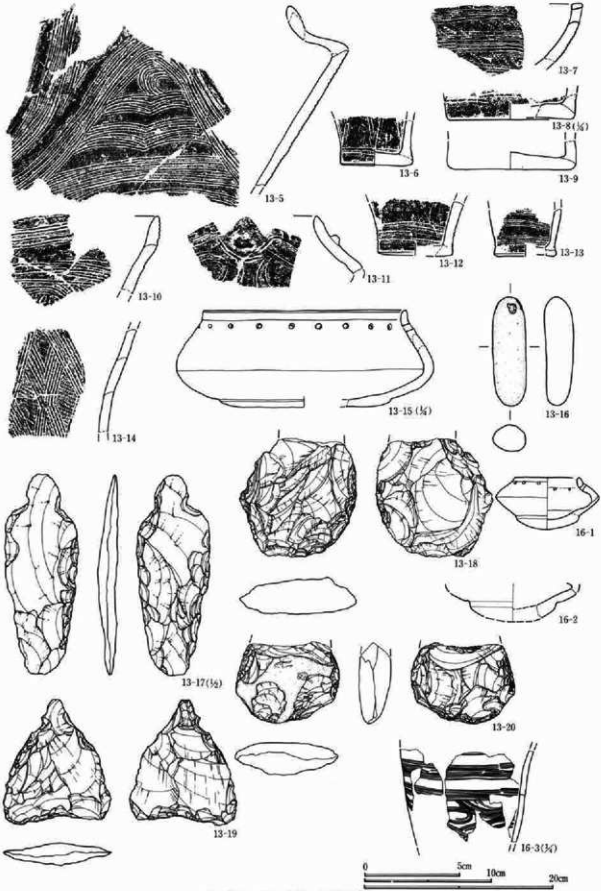
第192図 3・5・9号土坑出土遺物



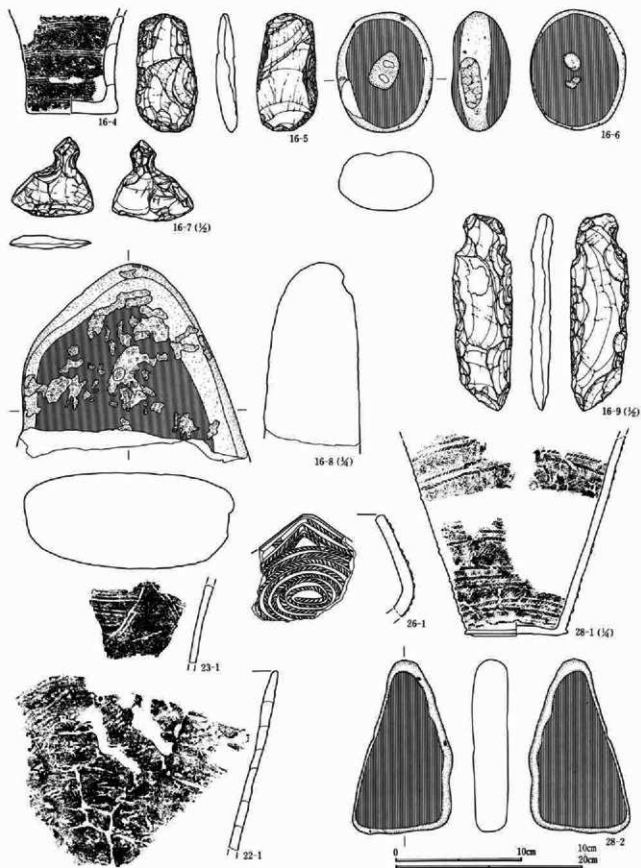
第193圖 9号土坑出土遺物



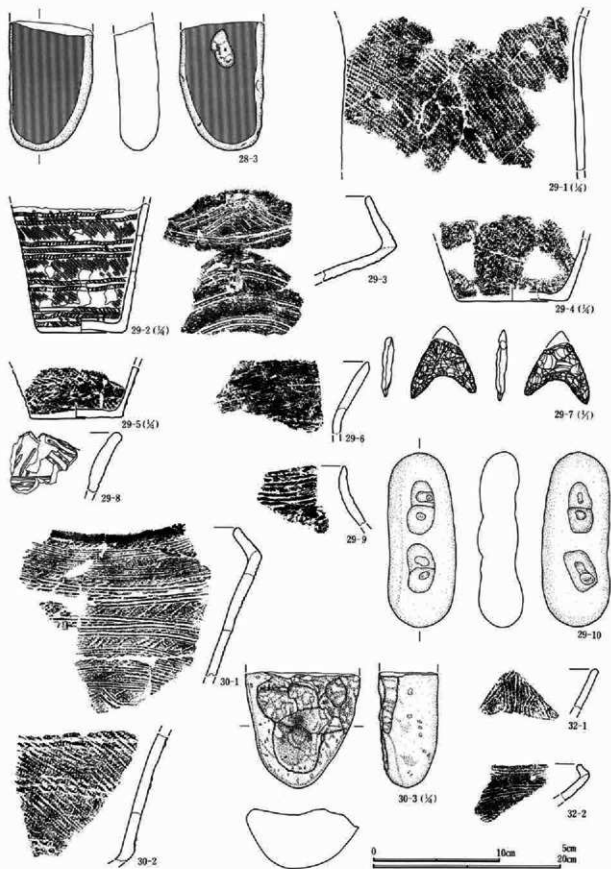
第194図 10・12・13号土坑出土遺物



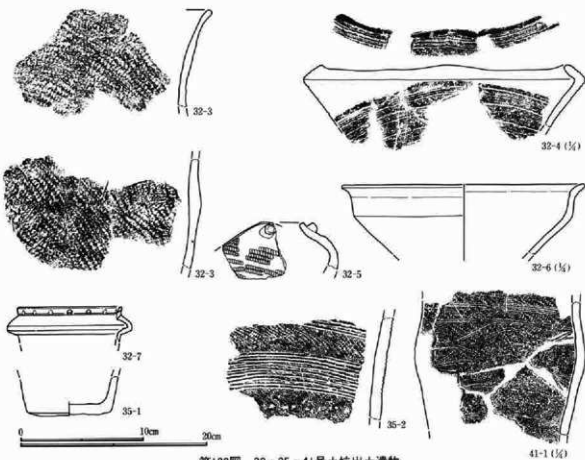
第195图 13・16号土坑出土遺物



第196图 16・22・23・26・28・号土坑出土遺物



第197図 28・29・30・32号土坑出土遺物



第198図 32・35・41号土坑出土遺物

土坑出土土器観察表

No	器種 部位	①色調(表) ②色調(裏) ③焼成 ④胎土	法 量 調 整	文 様 要 素	分 類	備 考
1	深鉢 口・胴	①暗褐色 ③良好 ④普通 粗砂・雲母を多く含む	口径19.6cm 内面磨き	口唇部刻み 平截竹管状工具による連続爪形文・肋骨文 円形竹管状工具による刻突文	III 1	
5	深鉢 口縁部	①②にぶい黄褐色 ③良好 ④普通 粗砂を僅かに含む	器厚6~9mm 内面磨き	4本1単位の彫状工具による平行比線 円形竹管状工具による刻突文 下位R.L織文横位施文	III 1	
5	深鉢 口縁部	①にぶい黄褐色 ②明褐色 ③良好 ④普通 粗砂を含む	器厚8~9mm 内面磨き	4本1単位の彫状工具による平行比線 円形竹管状工具による刻突文 下位R.L織文横位施文	III 1	
1	深鉢 口・胴	①暗褐色 ②褐色 ③良好 ④粗 粗砂・礫を含む	口径(35.0cm) 内面磨き	Lr無節織文横位施文 2~3本1単位の浮線文	IV 1	
2	深鉢 胴部	①②明黄褐色 ③良好 ④粗 粗砂・礫を含む	器厚7mm 内面磨削り	R.L織文施文後、浮線文上に刻み	IV 1	
3	深鉢 口・胴	①②褐色 ③良好 ④粗 粗砂・礫をやや多く含む	器厚8mm 内面ナデ	織文施文後、浮線文上に刻み	IV 1	
4	浅鉢 口縁部	①暗褐色 ②灰黄褐色 ③良好 ④普通 粗砂・雲母を含む	口径(24.0cm) 内面磨き	頸部径4mmの孔22~24個外 外面磨き	IV 4	
9	皿 口縁部	①明黄褐色 ②にぶい黄褐色 ③良好 ④普通 粗砂を含む	口径(19.5cm) 内面磨き	口縁部に沈線	IV	
5	深鉢 底部	①褐色 ②にぶい黄褐色 ③良好 ④普通 粗砂・雲母を含む	底径(7.8cm) 内面磨き	R.L織文横位施文	IV 3	
9	深鉢 底部	①②明黄褐色 ③良好 ④粗 粗砂・礫を含む	底径13.5cm 内面ナデか	R.L織文横位施文後、3本1単位の浮線文上に刻み	IV 1	
9	深鉢 口・胴	①褐色 ②明黄褐色 ③良好 ④粗 粗砂・礫を含む	器厚8~11mm 内面ナデ	R.L織文横位施文後、3本1単位の浮線文上に刻み	IV 1	
10	深鉢 口縁部	①②にぶい黄褐色 ③良好 ④縁部 粗砂を多く含む	器厚8mm 内面ナデ	R.L織文横位施文後、平截竹管状工具による平行沈線	IV 2	
2	深鉢 胴部	①②にぶい黄褐色 ③良好 ④普通 粗砂・雲母を含む	器厚7~8mm 内面削り後磨き	平截竹管状工具による平行沈線か	IV 2	

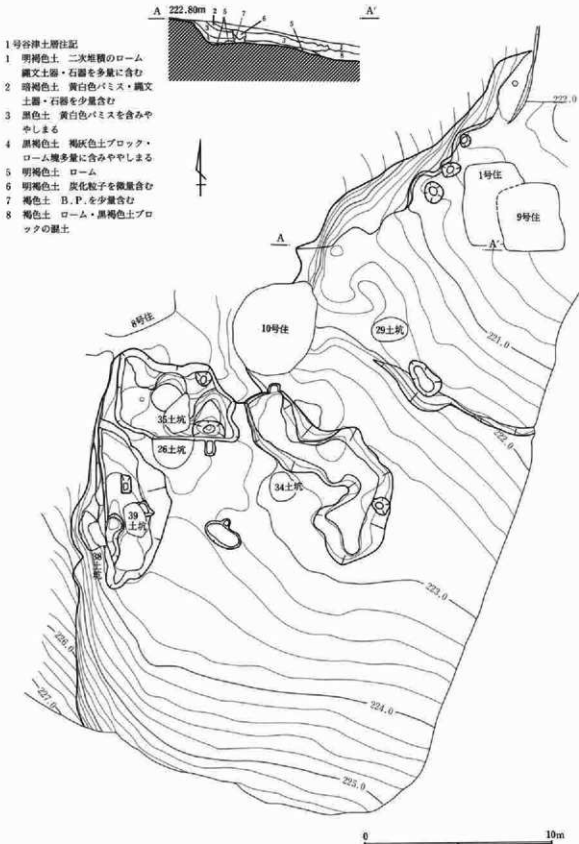
No	部 種 部 位	①色調(表) ②色調(裏) ③焼成 ④粘土	法 量 調 整	文 様 要 素	分 類	備 考
10	深 鉢 2 口縁部	①にぶい黄橙 ②にぶい黄 ③良好 ④普通 粗砂を多く含む	器厚6～8mm 内面蹴磨き	R.L織文横位施文後、半載竹管状工具による平行沈線	IV 2	
10	深 鉢 4 底 部	①洗灰 ②黄灰 ③良好 ④普通 粗砂を多く含む	底径(10.4cm) 内面蹴磨りか	L.R織文施文後、半載竹管状工具による平行沈線 底部網代紙か	IV 2	
12	深 鉢 5 胴～底	①黒褐 ②にぶい黄橙 ③良好 ④粗 粗砂・礫をやや多く含む	底径11.2cm 内面蹴磨き	R.L織文横位施文後、半載竹管状工具5～6本1単位による平行沈線	IV 2	
13	深 鉢 1 胴 部	①②黒 ③良好 ④粗 粗砂を多く含む	器厚7～13mm 内面蹴磨き	R.L織文横位施文後、半載竹管状工具2本1単位による平行沈線	IV 2	
13	深 鉢 2 口縁部	①にぶい黄橙 ②にぶい黄褐 ③良好 ④粗 粗砂・礫を多く含む	口径(28.0cm) 内面ナデか	R.L織文横位施文	IV 3	
13	深 鉢 3 口～胴	①明黄褐 ②にぶい黄橙 ③良好 ④普通 粗砂をやや多く含む	口径(17.0cm) 内面削り・ナデ	半載竹管状工具による集合沈線	IV 2	
13	深 鉢 4 口縁部	①②赤褐 ③良好 ④普通 粗砂を多く含む	器厚7mm 内面ナデ	R.L織文横位施文後、半載竹管状工具2本1単位による平行沈線	IV 2	
13	深 鉢 5 口縁部	①②明黄褐 ③良好 ④粗 粗砂を多く含む	器厚7～9mm 内面蹴磨き	半載竹管状工具5～6本1単位による平行沈線	IV 2	
13	深 鉢 6 底 部	①にぶい黄橙 ②にぶい黄褐 ③良好 ④普通 粗砂を少量含む	底径5.8cm 内面ナデか	半載竹管状工具による平行沈線	IV 2	
13	深 鉢 7 口縁部	①②黒褐 ③良好 ④普通 粗砂を含む	器厚8mm 内面蹴磨き	R.L織文横位施文後、半載竹管状工具5本1単位による平行沈線	IV 2	
13	深 鉢 8 底 部	①明黄褐 ②灰黄褐 ③良好 ④粗 粗砂・礫・片岩を多く含む	底径13.0cm 内面ナデ	R.L織文横位施文後、半載竹管状工具による平行沈線	IV 2	
13	深 鉢 9 底 部	①にぶい黄橙 ②にぶい黄褐 ③良好 ④粗 粗砂・礫を少量含む	底径9.5cm 内面ナデか		IV	
13	深 鉢 10 口縁部	①②赤褐 ③良好 ④普通 粗砂を含む	器厚8～10mm 内面蹴磨き	織文施文か 半載竹管状工具による平行沈線	IV 2	
13	深 鉢 11 口縁部	①明褐 ②黄褐 ③良好 ④普通 粗砂を少量含む	器厚8mm 内面削り後磨き	半載竹管による平行沈線 棒状貼付文	IV 2	
13	深 鉢 12 底 部	①橙 ②明黄褐 ③良好 ④普通 粗砂をやや多く含む	底径(6.0cm) 内面削り後磨き	半載竹管状工具5本1単位による平行沈線	IV 2	
13	深 鉢 13 底 部	①②にぶい黄 ③良好 ④普通 粗砂をやや多く含む	底径(5.0cm) 内面ナデ	R.L織文横位施文後、半載竹管状工具2～3本1単位の平行沈線	IV 2	
13	深 鉢 14 胴 部	①②にぶい黄橙 ③良好 ④普通 粗砂を含む	器厚7mm 内面蹴磨き	R.L織文横位施文後、半載竹管状工具による平行沈線	IV 2	
13	洗 鉢 1 口～底	①②にぶい黄 ③良好 ④普通 粗砂を多く含む	口径(21.6cm) 内面蹴磨き	胴部に径4mmの孔16～20個 外面蹴磨き	IV 4	
16	洗 鉢 1 口～底	①②にぶい黄 ③良好 ④普通 粗砂・金粟母を少量含む	口径5.2cm 高4.1cm 内面蹴磨き	胴部に径2mmの孔10～12個 外面蹴磨き	IV 4	
16	洗 鉢 2 底 部	①②にぶい黄 ③良好 ④普通 粗砂・金粟母を多く含む	器厚6～12mm 内面蹴磨き	外面蹴磨き	IV 4	
16	深 鉢 1 胴 部	①にぶい黄橙 ②明赤褐 ③良好 ④粗 粗砂・礫をやや多く含む	器厚6～7mm 内面蹴磨き	半載竹管状工具による平行沈線	IV 2	
16	深 鉢 2 底 部	①②洗灰 ③良好 ④普通 粗砂をやや多く含む	底径(7.0cm) 内面蹴磨きか	半載竹管状工具2本1単位による平行沈線	IV 2	
22	深 鉢 1 口縁部	①にぶい黄褐 ②明黄褐 ③良好 ④粗 粗砂・礫を含む	器厚7～9mm 内面蹴磨き	L.R無節織文横位施文	IV 3	
23	深 鉢 1 胴 部	①②明赤褐 ③良好 ④粗 粗砂・礫を少量含む	器厚5～6mm 内面ナデ	半載竹管状工具による平行沈線を施文		
26	深 鉢 1 口縁部	①②明黄褐 ③良好 ④粗 粗砂・礫をやや多く含む	器厚10mm 内面蹴磨きか	織文施文後、浮線文上に刷み	IV 1	
28	深 鉢 1 胴～底	①黄灰 ②黄褐 ③良好 ④粗 粗砂を多く含む	底径10.5cm 内面蹴磨き	L.R織文施文後、3本1単位の浮線文上に刷み	IV 1	
29	深 鉢 1 胴 部	①にぶい黄褐 ②にぶい黄橙 ③良好 ④普通 粗砂を含む	器厚8～10mm 内面蹴磨きか	R.L織文横位施文	IV 3	
29	深 鉢 2 胴～底	①にぶい黄橙 ②にぶい黄褐 ③良好 ④粗 粗砂・礫を含む	底径9.0cm 内面蹴磨き	R.L織文横位施文後、2～3本1単位の浮線文上に刷み	IV 1	
29	深 鉢 3 口縁部	①②明黄褐 ③良好 ④粗 粗砂・礫を少量含む	器厚7～10mm 内面ナデか	織文施文後、半載竹管状工具による平行沈線	IV 2	

第IV章 下高瀬寺山道跡

No.	器種 部位	①色調(表) ④胎土	②色調(裏) ③焼成	法 量 整	文 様 要 素	分 類	備 考
29	深鉢 4 底部	①②にぶい黄褐色 ④普通 粗砂・曹母を少量含む	③良好	底径(11.0cm) 内面ナデ	R L 縄文横位施文	IV 3	
29	深鉢 5 底部	①にぶい黄褐色 ②明黄褐色 ③良好 ④粗 粗砂・礫を含む	③良好	底径10.2cm 内面ナデ	R L 縄文横位施文後、浮線文上に列み	IV 1	
29	深鉢 6 口縁部	①②にぶい黄褐色 ③良好 ④粗 粗砂・曹母・片岩多く含む	③良好	器厚6～8mm 内面削り・ナデ	口唇部棒状工具による押圧文	IV 1	
29	深鉢 8 口縁部	①黄褐色 ②灰黄褐色 ③良好 ④粗 粗砂を多く含む	③良好	器厚6～12mm 内面ナデか	半截竹管状工具による平行沈線	IV 2	
29	深鉢 9 口縁部	①②褐色 ③良好 ④粗 粗砂を多く含む	③良好	器厚6～8mm 内面ナデ	浮線文上に列み	IV 1	
29	深鉢 10 口縁部	①暗赤褐色 ②暗赤 ③良好 ④粗 粗砂・礫を含む	③良好	器厚7～11mm 内面磨き	L R 縄文横位施文後、半截竹管状工具による平行沈線	IV 2	
30	深鉢 2 胴部	①褐色 ②にぶい褐色 ③良好 ④普通 粗砂をやや多く含む	③良好	器厚8～10mm 内面磨き	2本1単位の浮線文貼付後、R L 縄文横位施文	IV 1	
32	深鉢 1 口縁部	①褐色 ②明褐色 ③良好 ④普通 粗砂・片岩多く含む	③良好	器厚6mm 内面磨き	R L 縄文施文後、半截竹管状工具による平行沈線	IV 2	
32	深鉢 2 口縁部	①黄褐色 ②明黄褐色 ③良好 ④普通 粗砂をやや多く含む	③良好	器厚6mm 内面磨き	半截竹管状工具による平行沈線を施文	IV 2	
32	深鉢 3 口・胴部	①②褐色 ③良好 ④粗 粗砂・片岩を多く含む	③良好	器厚6mm 内面磨き	R L 縄文横位施文	IV 3	
32	深鉢 4 口縁部	①明黄褐色 ②黄 ③良好 ④粗 粗砂・礫を多く含む	③良好	口径26.0cm 内面磨き	R L 縄文横位施文後、半截竹管状工具による平行沈線	IV 2	
32	深鉢 5 口縁部	①褐色 ②にぶい黄 ③良好 ④普通 粗砂・金雲母を多く含む	③良好	器厚7mm 内面磨き	R L 縄文横位施文 円形貼付文	IV 3	
32	洗鉢 6 口縁部	①②明黄褐色 ③良好 ④粗 粗砂・礫をやや多く含む	③良好	口径(26.0cm) 内面磨き	外面磨き	IV 4	
32	洗鉢 7 口・胴部	①②にぶい赤褐色 ③良好 ④普通 粗砂を少量含む	③良好	口径8.0cm 内面磨き	胴部に径5mmの孔16～20個あり 外面磨き	IV 4	
35	深鉢 1 底部	①②明黄褐色 ③良好 ④粗 粗砂を多く含む	③良好	底径5.8cm 内面ナデ		IV	
35	深鉢 2 胴部	①明黄褐色 ③良好 ④粗 粗砂・礫をやや多く含む	③良好	器厚9mm 内面ナデか	R L 縄文施文後、半截竹管状工具6本1単位による平行沈線	IV 2	
41	深鉢 1 胴部	①褐色 ②にぶい褐色 ③良好 ④粗 粗砂・礫・曹母を少量含む	③良好	器厚9～10mm 内面磨き	R L 縄文横位施文後、半截竹管状工具による平行沈線	IV 2	

土坑出土石器観察表

No.	器 種	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	残存状況	石 材	特 徴
3-1	磨石	12.5	5.5	2.8	328	完 形	変質安山岩	両面に磨面・敲打痕
9-9	石 匙	6.5	6.4	1.7	44	完 形	頁岩	横型
9-10	打製石斧	7.3	3.8	1.1	37	完 形	緑色片岩	短型型 直刃
9-11	打製石斧	8.7	4.3	1.9	74	完 形	緑色片岩	短型型 凸刃
9-12	打製石斧	10.2	4.7	1.6	76	完 形	頁岩	短型型 凸刃 刃部摩耗著しい
10-4	スクレイパー	6.0	10.2	1.9	94	完 形	硬質泥岩	側縁に刃部
13-16	石 棒	8.6	2.7	2.3	66	完 形	砂岩	
13-17	石 匙	10.5	4.0	1.1	38	完 形	硬質泥岩	縦型 側縁に刃部
13-18	打製石斧	[6.5]	8.3	2.5	[142]	基部1/2欠損	硬質泥岩	片面に自然面 楔として使用か
13-19	スクレイパー	6.6	5.7	1.2	31	完 形	粗粒安山岩	側縁に刃部
13-20	打製石斧	[9.3]	9.3	2.9	[256]	基部1/3欠損	硬質泥岩	分型型 直刃 石核の可能性有る
16-5	打製石斧	9.3	4.9	1.7	71	完 形	粗粒安山岩	短型型 凸刃か
16-6	磨 石	9.5	7.6	4.6	71	完 形	粗粒安山岩	両面に磨面、両面・片側面くぼみ
16-7	石 匙	4.2	4.3	0.7	9.0	完 形	黒色頁岩	横型 側縁に刃部
16-8	台 石	[21.0]	[24.3]	10.2	[7450]	3/5	粗粒安山岩	表面に敲打痕
16-9	石 匙	10.4	3.2	1.1	36	完 形	黒色頁岩	縦型 側縁に刃部
28-2	磨 石	13.7	8.0	2.8	476	完 形	粗粒安山岩	両面に磨面
28-3	磨 石	[10.1]	6.5	3.3	[409]	2/3	粗粒安山岩	両面に磨面、片面に敲打痕
29-7	石 鏝	(1.9)	1.7	0.3	[0.5]	先端部欠損	チャート	凹基無基盤 狭りが大きい
29-10	くぼみ石	13.8	5.4	3.6	352	完 形	砂岩	両面にくぼみ
30-3	台 石	[12.4]	12.3	6.3	[1235]	1/2	粗粒安山岩	表面に敲打痕



1号谷津状遺構

位置 C74~94-IX10~24Gr

重複関係 1・2・3・9・10号住、21・24・26・29・32・34・35・38・39・40・41・42号土坑、6号集石より古

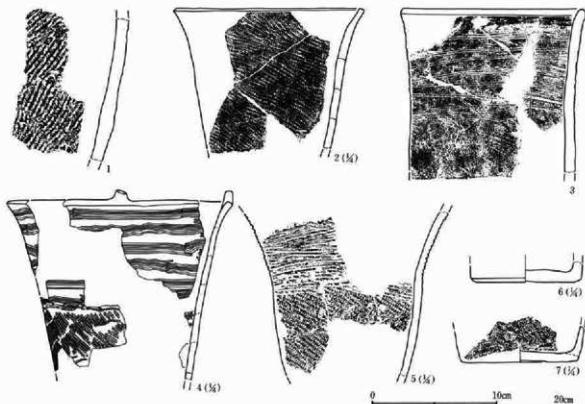
規模 長さ [42.2m] 幅 [23.0m] 深さ 130cm 走向 N-28°-E

概要 北側調査区北東部隅から南壁中央部にかけて西側の立ち上がりが存在し、その東側に広がっている。

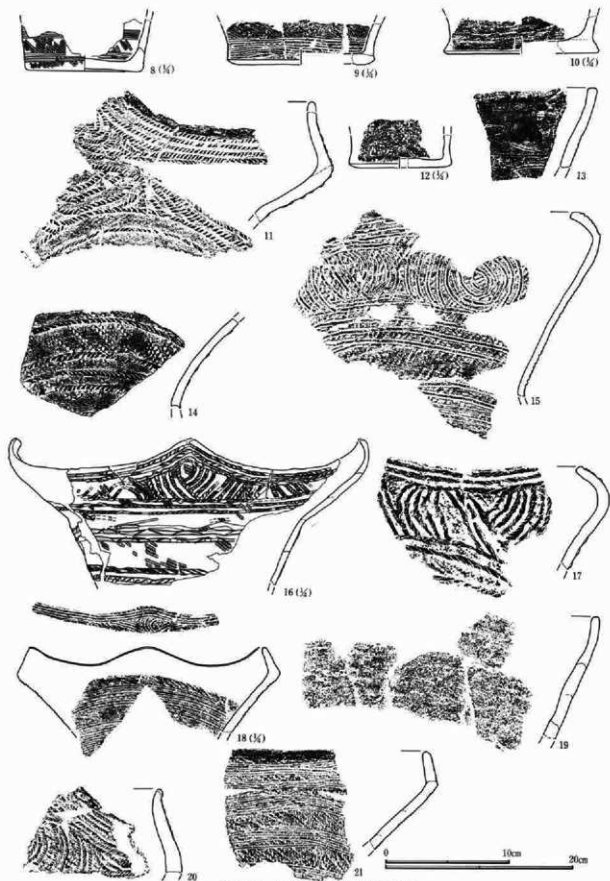
北側調査区の約1/3を占めており、東と南は更に調査区外に続いている。そのため全体の形状は不明である。

自然の谷と考えられるが、西の立ち上がり部とその東側に長径6~10mの落ち込みが検出され、また長径0.5~2mの更に小規模な土坑状の掘り込み（あるいは落ち込み）も検出されている。底面は周辺の地形と同様南から北に向かって低くなっており、標高差は約5.4mである。中央やや北寄りに東西に延びる段が存在している。

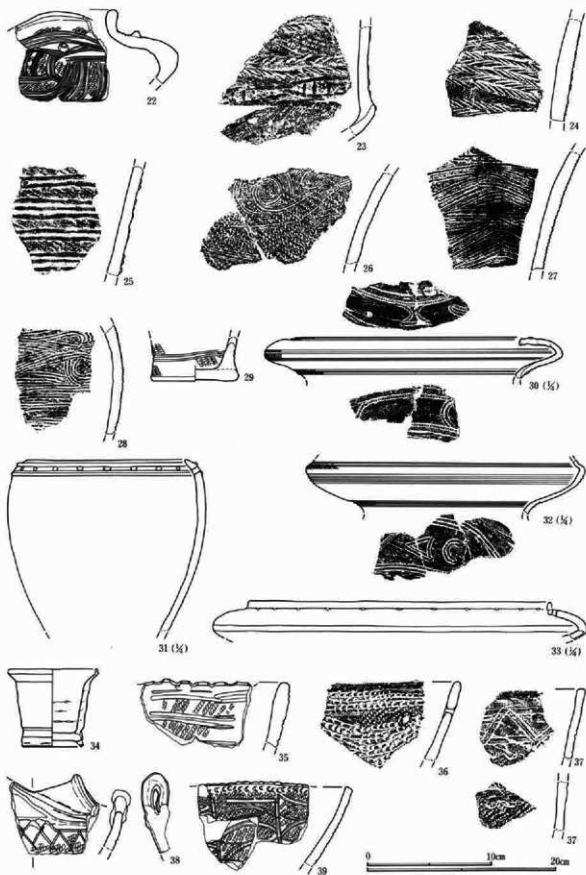
出土遺物 出土量は多く、土器は、II群18点、III群14点、IV群452点、V群32点、VI群22点、VII群6点、IX群1点、時期不明629点、計1,174点が出土している。石器は、石鏃4点、尖頭器様石器1点、石匙1点、異形石器2点、打製石斧46点、磨製石斧3点、スクレイパー7点、微細剥離痕のある剥片13点、二次加工痕のある剥片20点、磨石27点、くほみ石7点、石皿3点、多孔石1点、台石6点、丸石1点、剥片225点、黒曜石剥片59点、石核27点、黒曜石石核4点、計457点が出土している。



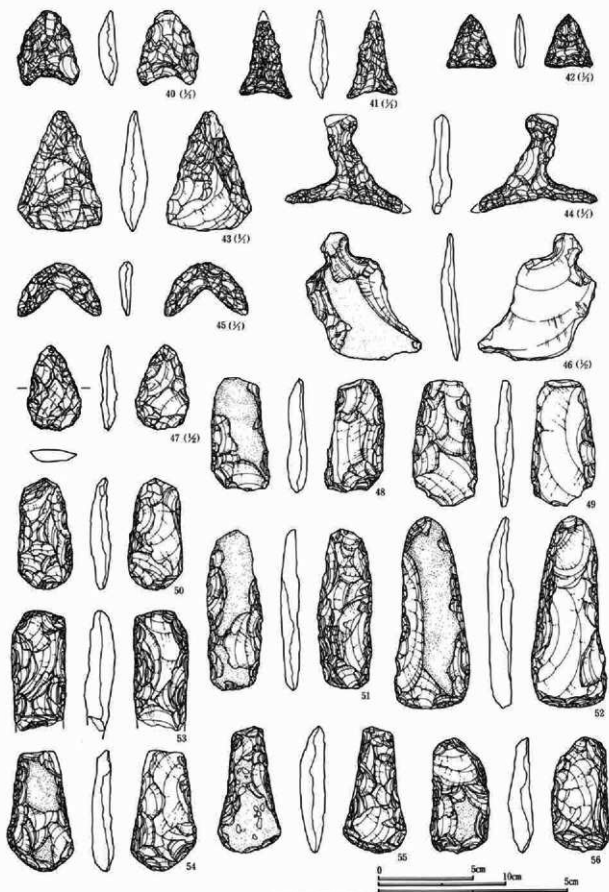
第200図 1号谷津状遺構出土遺物(1)



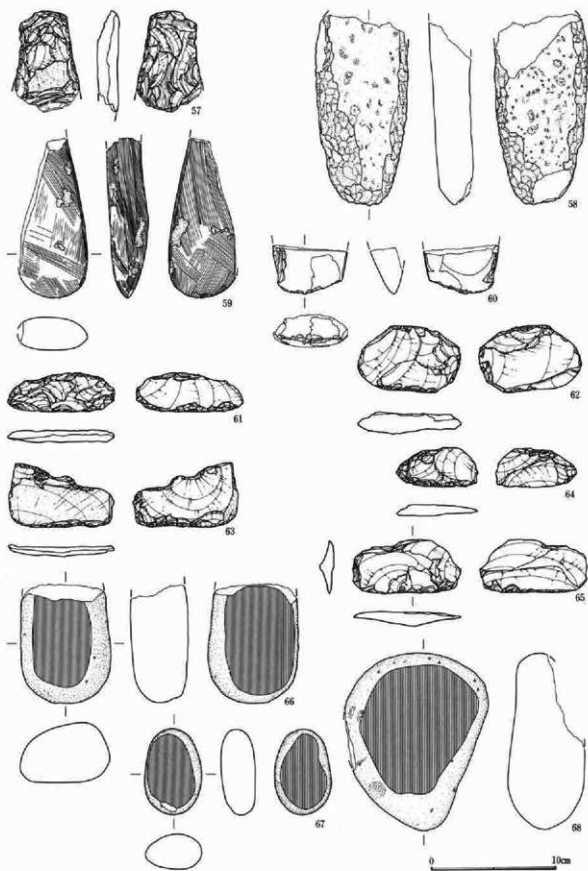
第20|図 1号谷津状遺構出土遺物(2)



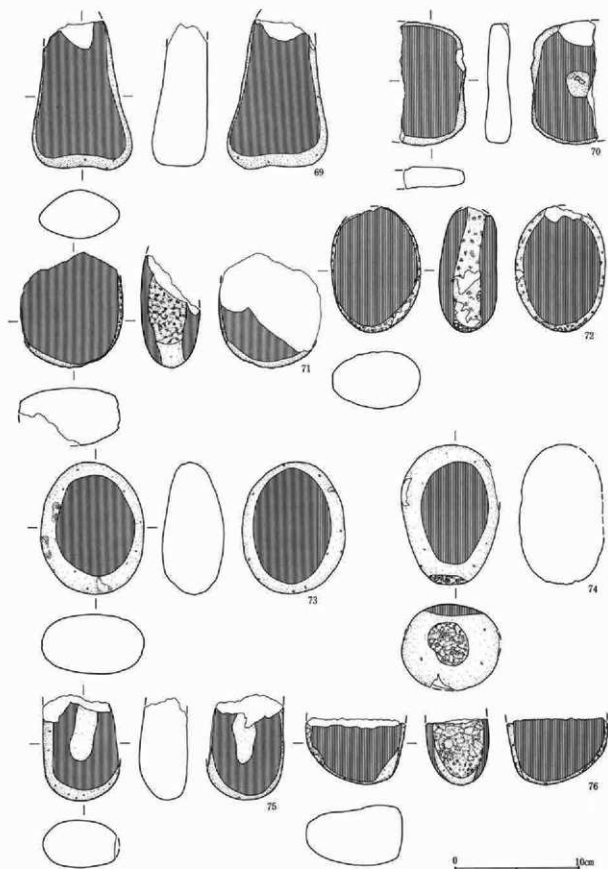
第202図 | 号谷津状遺構出土遺物(3)



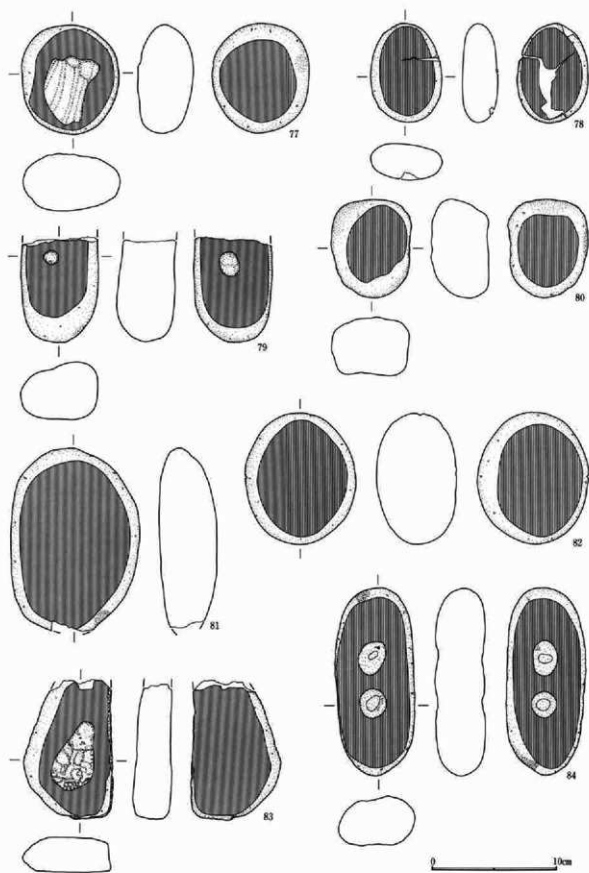
第203图 1号谷津状遺構出土遺物(4)



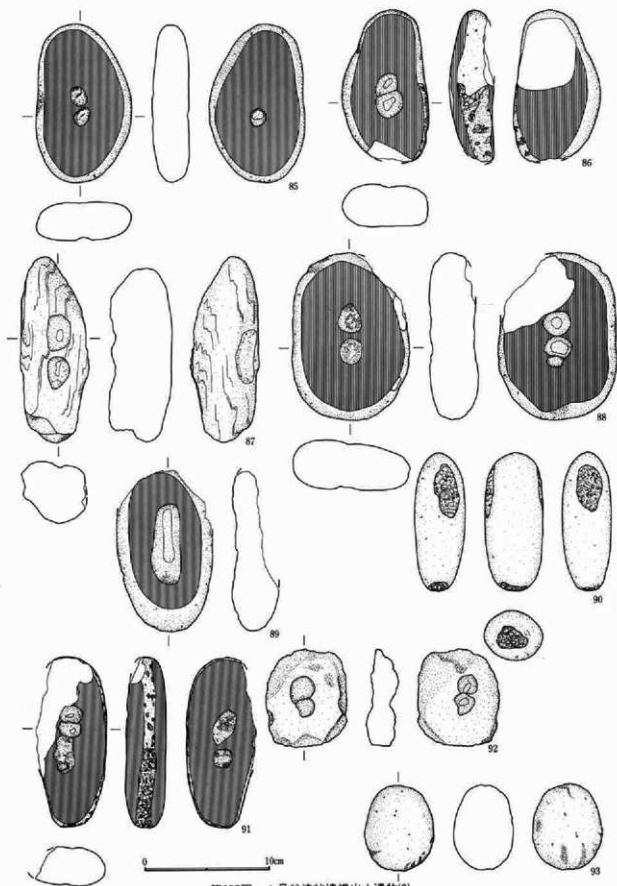
第204図 I号谷津状遺構出土遺物(5)



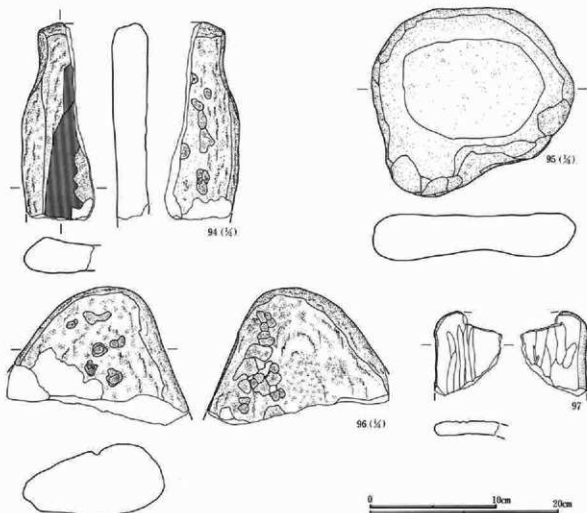
第205图 1号谷津状遺構出土遺物(6)



第206図 1号谷津状遺構出土遺物(7)



第207図 1号谷津状遺構出土遺物(8)



第208図 1号谷津状遺構出土遺物(9)

1号谷津状遺構出土土器観察表

No	器種 部位	出土 位置	①色調(表) ②色調(裏) ③焼成 ④胎土	法 量 調 整	文 様 要 素	分 類	備 考
1	深鉢 胴部	C80IX13	①②にふい黄橙 ③良好 ④普通 粗砂・繊維を含む	器厚12mm 内面荒磨き	無印 L r 縄文横位施文	II	編織土器
2	深鉢 口~胴	C80IX15	①にふい黄橙 ②にふい橙 ③良好 ④普通 粗砂・雲母を含む	口径(19.5cm) 内面荒磨き	R L 縄文横位施文	III 2	
3	深鉢 口~胴	覆土	①②にふい黄橙 ③良好 ④普通 粗砂を含む	口径(14.4cm) 内面荒磨き	半截竹管状工具による平行沈線	III 1	
4	深鉢 口縁部	覆土	①②明褐色 ③良好 ④普通 粗砂を含む	器厚24.0cm 内面荒磨き	R L 縄文末端白糸結縹横位施文 4本1単位 の態状工具による平行沈線	III 1	
5	深鉢 胴部	覆土	①②明赤褐色 ③良好 ④普通 粗砂を含む	器厚7~9mm 内面荒磨き	R L 縄文横位施文 半截竹管状工具による平 行沈線	III 1	
6	深鉢 底部	覆土	①橙 ②にふい黄橙 ③良好 ④普通 粗砂・雲母を少量含む	底径11.3cm 内面ナデか	縄文施文か 表面摩滅		
7	深鉢 底部	C79IX12	①橙 ②にふい橙 ③良好 ④粗 粗砂・礫をやや多く含む	底径12.3cm 内面ナデ	R L 縄文施文		内面脱化物付着
8	深鉢 底部	C80IX13	①橙 ②明褐色 ③良好 ④粗 粗砂・礫・片岩をやや多く含む	底径12.3cm 内面ナデ	R L 縄文横位施文後、半截竹管状工具2~3 本1単位による平行沈線	IV 2	
9	深鉢 底部	C83IX17	①②にふい黄橙 ③良好 ④粗 粗砂・礫をやや多く含む	底径(17.0cm) 内面ナデ	R L 縄文斜位施文後、半截竹管状工具による 平行沈線	IV 2	
10	深鉢 底部	C82IX18	①明黄橙 ②にふい黄橙 ③良好 ④粗 粗砂・礫を含む	底径(18.0cm) 内面ナデ	外面指痕によるナデか	IV	

No.	器種部位	出土位置	①色面(黄) ②色面(黒) ③焼成 ④胎土	法 量 調 整	文 様 要 素	分類	備考
11	深鉢 口・底	覆土	①②にぶい黄褐色 ③良好 ④粗 粗砂を多く含む	器厚7~11mm 内面磨き	R.L縄文横位施文後、浮線文上に刻み	IV 1	
12	深鉢 底部	覆土	①②にぶい黄褐色 ③良好 ④普通 粗砂を含む	直径(10.5cm) 内面ナデ	L.R縄文施文	IV 3	
13	深鉢 口縁部	覆土	①にぶい黄褐色 ②にぶい黄褐色 ③良好 ④粗 粗砂・礫を多く含む	器厚7mm 内面削り	半截竹管状工具による平行沈線	IV 2	
15	深鉢 口縁部	覆土	①②にぶい黄褐色 ③良好 ④普通 粗砂を含む	器厚5~9mm 内面削り後磨き	L.R縄文施文後、半截竹管状工具による平行沈線	IV 2	
16	深鉢 口へ側	覆土	①②にぶい黄褐色 ③良好 ④粗 粗砂・礫・雲母やや多く含む	口径(36.5cm) 内面磨き	R.L縄文横位施文後、3本1単位の浮線文上に刻み	IV 1	
17	深鉢 口縁部	C81DX13	①②にぶい黄褐色 ③良好 ④粗 粗砂・礫を少量含む	器厚7~9mm 内面磨き	R.L縄文横位施文後、浮線文上に刻み	IV 1	
18	深鉢 口へ側	C79DX14	①②洗黄 ③良好 ④粗 粗砂を多く含む	口径24.8cm 内面磨き	R.L縄文横位施文後、半截竹管状工具6本1単位による平行沈線	IV 2	
19	深鉢 口縁部	覆土	①②にぶい黄褐色 ③良好 ④粗 粗砂・礫・片岩を多く含む	器厚7~9mm 内面磨き	外面磨き	IV	
20	深鉢 口縁部	覆土	①②にぶい黄褐色 ③良好 ④粗 粗砂・礫を含む	器厚9~11mm 内面ナデ	R.L縄文施文後、浮線文上に刻み	IV 1	
21	深鉢 口縁部	C82DX19	①洗黄 ③良好 ④粗 粗砂・礫・片岩・雲母を含む	器厚7mm 内面磨き	R.L縄文横位施文後、半截竹管状工具4本1単位による平行沈線	IV 2	
22	深鉢 口縁部	C81DX19	①②赤褐色 ③良好 ④粗 粗砂を多く含む	器厚8mm 内面磨き	R.L縄文施文後、半截竹管状工具による平行沈線	IV 2	
23	深鉢 胴部	C80DX19	①②明黄褐色 ③良好 ④普通 粗砂を含む	器厚7~12mm 内面磨き	R.L縄文斜位施文後、浮線文上に刻み	IV 1	
24	深鉢 胴部	C79DX14	①②にぶい黄褐色 ③良好 ④粗 粗砂・礫を少量含む	器厚11~12mm 内面磨き	縄文施文か 浮線文上に刻み	IV 1	
25	深鉢 胴部	覆土	①②にぶい黄褐色 ③良好 ④普通 粗砂を多く含む	器厚8~9mm 内面割落著しい	R.L縄文施文後、2~3本1単位の浮線文	IV 1	
26	深鉢 胴部	C80DX14	①洗黄 ③良好 ④普通 粗砂を含む	器厚9~10mm 内面磨き	R.L縄文横位施文後、半截竹管状工具による平行沈線	IV 2	
27	深鉢 胴部	覆土	①②明黄褐色 ③良好 ④粗 粗砂・礫を少量含む	器厚10mm 内面磨き	R.L縄文施文後、半截竹管状工具による平行沈線	IV 2	
28	深鉢 胴部	C81DX14	①にぶい黄褐色 ②褐色 ③良好 ④粗 粗砂・礫・片岩を含む	器厚9mm 内面ナデ	R.L縄文横位施文後、半截竹管状工具による平行沈線	IV 2	
29	深鉢 底部	覆土	①②にぶい黄褐色 ③良好 ④普通 粗砂を多く含む	直径6.6cm 内面磨き	L.R縄文横位施文後、半截竹管状工具による平行沈線	IV 2	
30	浅鉢 口へ側	覆土	①灰黄褐色 ②にぶい黄褐色 ③良好 ④粗 粗砂・礫をやや多く含む	口径(23.5cm) 内面磨き	外面磨き後、半截竹管状工具による連続爪形文	IV 4	
31	深鉢 口へ側	覆土	①②にぶい黄褐色 ③良好 ④普通 粗砂・雲母を含む	口径(16.8cm) 内面磨き	口縁部に浮線文平行に2本貼付し、その間に径5mmの孔16~20個 外面磨き	IV 4	
32	浅鉢 胴部	C80DX14	①②にぶい黄褐色 ③良好 ④普通 粗砂をやや多く含む	器厚5mm 内面磨き	外面磨き後、半截竹管状工具による連続爪形文	IV 4	
33	浅鉢 口へ側	C82DX13	①②洗黄褐色 ③良好 ④普通 粗砂を多く含む	口径(32.0cm) 内面ナデ	外面磨き 口縁部に径6mmの孔22~26個	IV 4	
34	小笠鉢 口へ底	C82DX15	①②明黄褐色 ③良好 ④普通 粗砂を含む	口(7.0cm)底(4.8cm)高(6.1cm)	外面磨き 内面に一部輪模痕	IV	
35	深鉢 口縁部	C82DX15	①黄褐色 ②明黄褐色 ③良好 ④普通 粗砂を僅かに含む	器厚7~12mm 内面磨き	L.R縄文横位施文後、半截竹管状工具による平行沈線	V	
36	深鉢 口縁部	C81DX13	①②にぶい赤褐色 ③良好 ④普通 粗砂をやや多く含む	器厚8mm 内面磨き	L.R縄文横位施文後、半截竹管状工具による連続爪形文	V	
37	深鉢 口縁部	C81DX13	①洗黄 ③良好 ④粗 粗砂・礫をやや多く含む	器厚6~8mm 内面磨き	L.R縄文末端白糸結縛施文後、半截竹管状工具による平行沈線	V	
38	深鉢 口縁部	C80DX14	①②にぶい黄褐色 ③良好 ④普通 粗砂を多く含む	器厚8mm 内面磨き	L.R縄文横位施文後、沈線 口縁部にアーチ状に粘土貼付	V	
39	深鉢 口縁部	C81DX14	①にぶい黄褐色 ②にぶい赤褐色 ③良好 ④粗 粗砂・礫を少量含む	器厚6~7mm 内面磨き	L.R縄文施文後、半截竹管状工具による平行沈線	V	

1号谷津状遺構出土石器観察表

No	器種	出土位置	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	残存状況	石材	特徴
40	石 鏃	C86IX20	2.0	1.7	0.5	1.4	完 形	黒曜石	凸基無茎鏃
41	石 鏃	覆土	(2.3)	1.4	0.5	[0.9]	先端部一部欠	黒曜石	平基無茎鏃か
42	石 鏃	C79XI13	1.4	1.3	0.3	0.4	完 形	黒曜石	平基無茎鏃
43	石 鏃	C81IX15	3.2	2.2	0.7	4.1	完 形	チャート	凸基無茎鏃
44	異形石鏃	覆土	2.6	(3.3)	0.6	[1.5]	一部欠損	黒曜石	用途不明の石製品
45	異形石鏃	C83IX2	1.5	2.2	0.3	0.7	完 形	黒曜石	大きい持ちを有す
46	石 匙	C83IX21	6.7	6.2	1.0	24	完 形	瑠璃質頁岩	縦型 側縁に刃部 片面に自然面
47	尖頭無柄石匙	C78IX14	4.5	2.9	0.9	8.8	完 形	チャート	
48	打製石斧	C82IX15	8.9	4.7	1.5	70	完 形	瑠璃質頁岩	楕円型 直刃 片面に自然面
49	打製石斧	C88IX21	9.9	5.1	1.4	78	完 形	硬質泥岩	楕円型 凸刃
50	打製石斧	C80IX13	8.7	4.2	1.5	59	完 形	細粒安山岩	楕円型 凸刃
51	打製石斧	C81IX17	12.6	4.3	1.5	91	完 形	硬質泥岩	短冊型 直刃 片面に自然面
52	打製石斧	C82IX17	15.1	5.9	2.0	174	完 形	硬質泥岩	楕円型 直刃 片面に自然面
53	打製石斧	C83IX22	[9.4]	4.3	2.4	[124]	刃部1/4欠損	実玄武岩	短冊型
54	打製石斧	C82IX18	9.4	5.0	1.7	81	完 形	硬質泥岩	楕円型 凸刃 片面に自然面
55	打製石斧	C79IX14	9.8	5.0	1.9	95	完 形	硬質泥岩	楕円型 凸刃 片面に自然面
56	打製石斧	C83IX21	9.0	4.6	2.0	88	完 形	頁岩	楕円型 直刃 片面に自然面
57	打製石斧	C82IX17	[7.9]	[5.1]	1.7	[69]	刃部1/3欠損	瑠璃質頁岩	楕円型か 片面に自然面
58	磨製石斧	C78IX14	[14.8]	7.4	2.9	[588]	基部1/4欠損	実玄武岩	楕円型中 側面に敲打痕
59	磨製石斧	C82IX19	[12.5]	[5.3]	2.9	[309]	基部1/4欠損	実玄武岩	研削段面 一部敲打痕残
60	磨製石斧	C78IX14	[3.9]	[5.9]	[2.6]	[67]	基部3/4欠損	実玄武岩	楕円型中 刃部に敲打痕 側面に割離面
61	スクレイパー	C81IX12	3.0	8.5	0.9	30	完 形	実玄武岩	側縁に刃部
62	スクレイパー	C84IX21	5.3	8.1	1.7	54	完 形	硬質泥岩	側縁に刃部
63	スクレイパー	C83IX17	5.0	8.3	0.9	30	完 形	硬質泥岩	側縁に刃部
64	スクレイパー	C79IX13	3.1	6.5	0.9	19	完 形	硬質泥岩	側縁に刃部
65	スクレイパー	C82IX14	4.1	8.5	1.1	31	完 形	硬質泥岩	側縁に刃部
66	磨 石	C79IX15	[9.4]	7.2	4.8	[566]	3/4	閃緑岩	両面に磨面
67	磨 石	C86IX20	6.8	4.5	2.8	101	完 形	実質安山岩	両面に磨面
68	磨 石	C87IX21	14.1	[11.4]	6.2	[1306]	ほぼ完形	かんらん岩	片面に磨面
69	磨 石	C79IX16	[11.8]	7.9	4.3	[437]	5/6	ゲイサイト	両面に磨面
70	磨 石	覆土	9.8	[5.4]	2.1	[126]	2/3	砂岩	両面に磨面、片面に敲打痕
71	磨 石	C80IX13	[9.0]	8.2	4.6	[344]	2/3	粗粒安山岩	両面に磨面、側面に敲打痕
72	磨 石	C82IX15	9.9	7.1	4.6	[368]	ほぼ完形	流紋岩	両面に磨面、側面に敲打痕
73	磨 石	覆土	10.4	8.2	4.9	559	完 形	ひん岩	両面に磨面
74	磨 石	C80IX13	11.0	[7.8]	6.7	[588]	ほぼ完形	粗粒安山岩	片面に磨面、端部に敲打痕
75	磨 石	C80IX12	[8.4]	[6.0]	3.9	[304]	2/3	硬質泥岩	両面に磨面・敲打痕か
76	磨 石	C79IX14	[5.2]	7.9	4.8	[286]	1/3	粗粒安山岩	両面に磨面、側面に敲打痕
77	磨 石	C81IX18	8.6	7.7	4.6	427	完 形	粗粒安山岩	両面に磨面、片面に敲打痕・横溝か
78	磨 石	C78IX14	7.8	5.7	2.8	[131]	ほぼ完形	流紋岩質凝灰岩	両面に磨面
79	磨 石	C79IX13	[8.4]	6.2	4.6	[389]	2/3	ゲイサイト	両面に磨面・敲打痕
80	磨 石	C78IX14	7.8	6.4	4.6	379	完 形	粗粒安山岩	両面に磨面
81	磨 石	C81IX12	[14.3]	10.3	4.6	[943]	ほぼ完形	粗粒安山岩	片面に磨面
82	磨 石	覆土	10.4	8.8	6.4	665	完 形	粗粒安山岩	両面に磨面
83	磨 石	C80IX13	[11.0]	7.2	3.0	[346]	ほぼ完形	粗粒安山岩	両面に磨面、片面に敲打痕
84	磨 石	C84IX21	14.8	6.4	4.0	540	完 形	流紋岩	両面に磨面・くぼみ4個
85	磨 石	覆土	12.5	7.6	3.0	460	完 形	閃緑岩	両面に磨面・敲打痕
86	磨 石	C82IX12	[11.7]	6.9	3.4	[382]	ほぼ完形	砂岩	両面に磨面、片面にくぼみ2個・敲打痕
87	くぼみ石	C80IX12	14.7	5.5	4.8	560	完 形	雲母石英片岩	片面に2か所、片面に1か所くぼみ
88	磨 石	C78IX11	13.2	9.4	3.9	[630]	ほぼ完形	ゲイサイト	両面に磨面・くぼみ4個
89	磨 石	覆土	[12.7]	7.6	3.7	[325]	ほぼ完形	ゲイサイト	片面に磨面・くぼみ1個
90	磨 石	C76IX13	10.9	4.6	3.9	296	完 形	硬質泥岩	両面・端部に敲打痕
91	磨 石	C80IX12	13.4	[5.5]	3.0	[323]	ほぼ完形	ゲイサイト	両面に磨面・くぼみ4個、側面敲打痕
92	くぼみ石	C81IX19	7.7	6.4	2.3	149	完 形	砂岩	両面にくぼみ4個
93	丸 石	覆土	6.8	5.6	4.7	193	完 形	粗粒安山岩	
94	石 皿	覆土	[20.8]	[7.9]	3.8	[864]	1/4	緑色片岩	片面に磨面、片面にくぼみ9個以上
95	台 石	C82IX17	19.8	21.6	4.9	2970	完 形	実質安山岩	
96	多孔石	C79IX14	[14.3]	[19.4]	7.5	[2830]	1/2	緑色片岩	両面にくぼみ26個以上
97	砥 石	覆土	[6.6]	[5.3]	1.1	[42]	2/5	砂岩	両面に研ぎ面

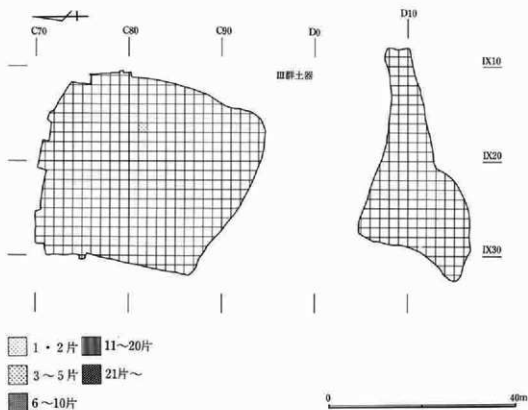
遺構外出土遺物

遺構外や弥生時代以降の遺構からも、多くの土器・石器が出土している。

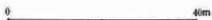
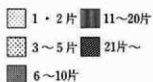
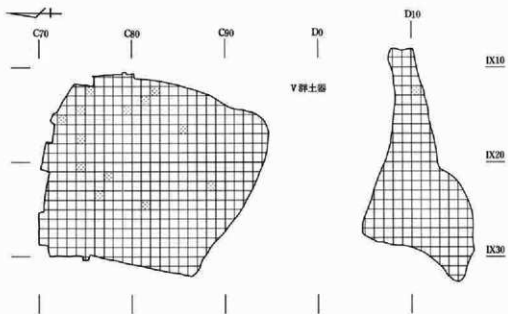
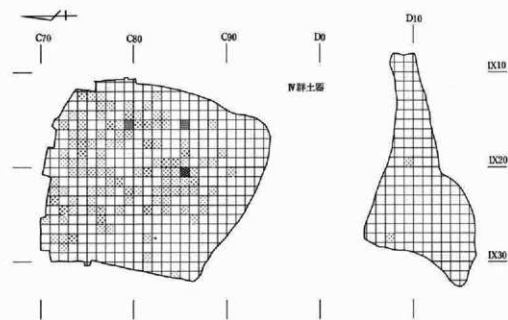
分布状況を見ると、遺構とほぼ同様の分布を示しており、遺構のある北側調査区から多く出土し、南側調査区からの出土は少量である。各群別に見ると、III群土器は、出土量が少ないこともあって、北側調査区中央東側の1グリッドしか出土していない。IV群土器は出土量が最も多く、北側調査区では南壁際を除いてほぼ全面から出土しており、南側調査区からも少量出土している。V群土器は、北側調査区の北部から西部にかけて出土しているが、出土量は少なく、東部から南部にかけてはほとんど出土していない。南側調査区からも少量出土している。VI群土器は北側調査区の北半部から出土しており、南半部や南側調査区からは出土していない。

石器をみると、出土量は多くほぼ土器と同様の分布を示しているが、北側調査区ではほぼ全面から出土しており、特に中央部から多く出土している。また南側調査区からも少量出土している。

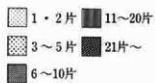
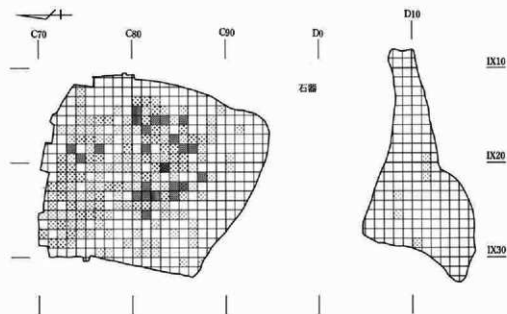
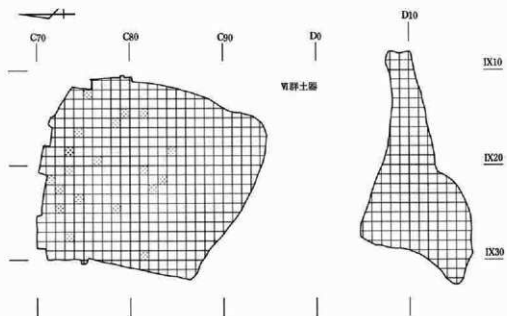
出土遺物 土器は、I群2点、II群1点、III群4点、IV群600点、V群40点、VI群34点、VII群3点、VIII群4点、時期不明732点、他に北白川下層式と考えられる破片が1点、計1,421点が出土している。石器は、石鏃16点、尖頭棒石器1点、石錐1点、ピエスエスキュー1点、石匙5点、打製石斧49点、磨製石斧3点、スクレイパー3点、微細刻離痕のある剥片38点、二次加工痕のある剥片29点、磨石33点、くぼみ石6点、石皿6点、台石20点、敲打石2点、丸石7点、砥石4点、石棒1点、不明7点、剥片355点、黒曜石剥片160点、石核40点、黒曜石石核9点、計796点が出土している。



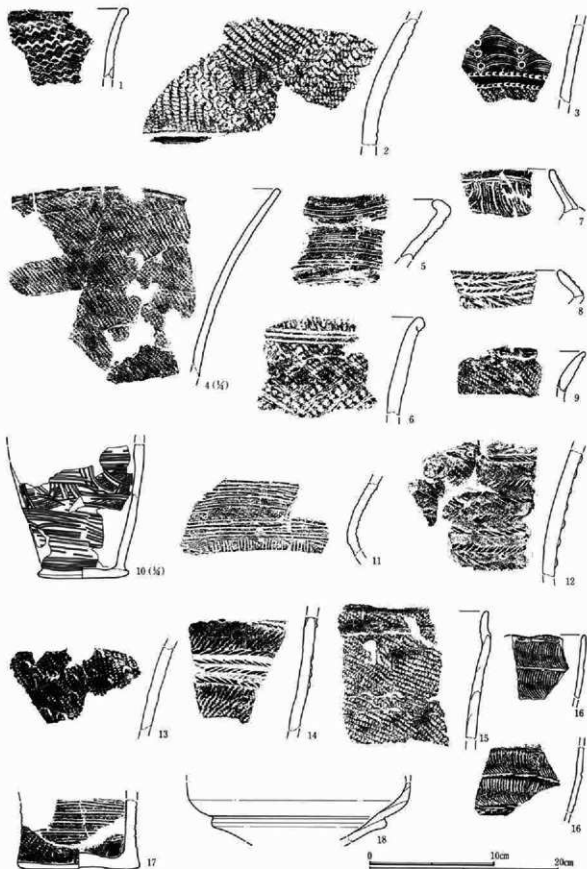
第209図 遺構外遺物出土状況(1)



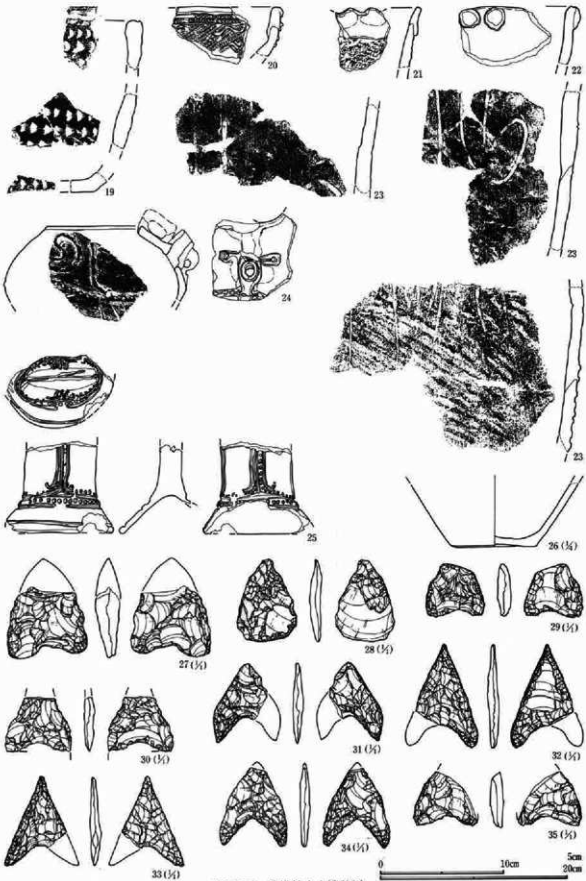
第210図 遺構外遺物出土状況(2)



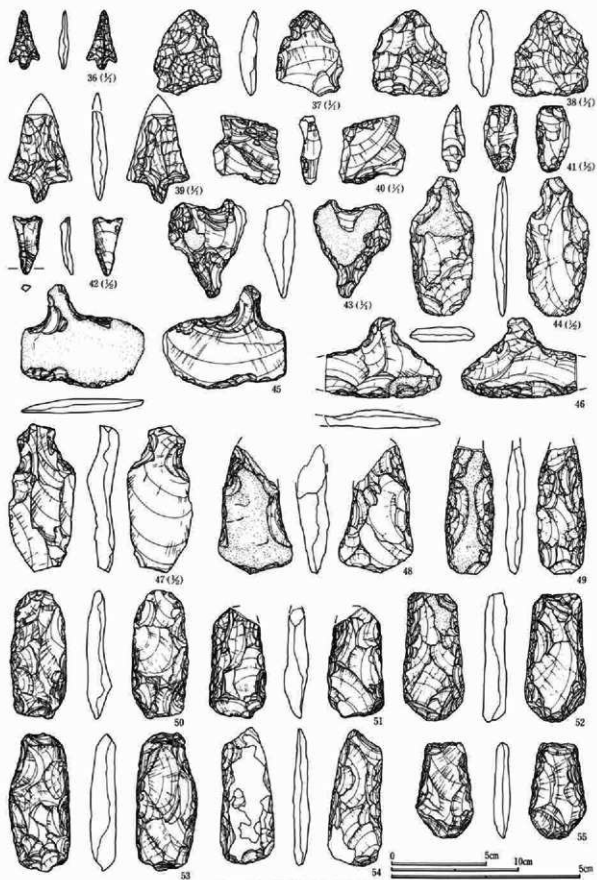
第211図 遺構外遺物出土状況(3)



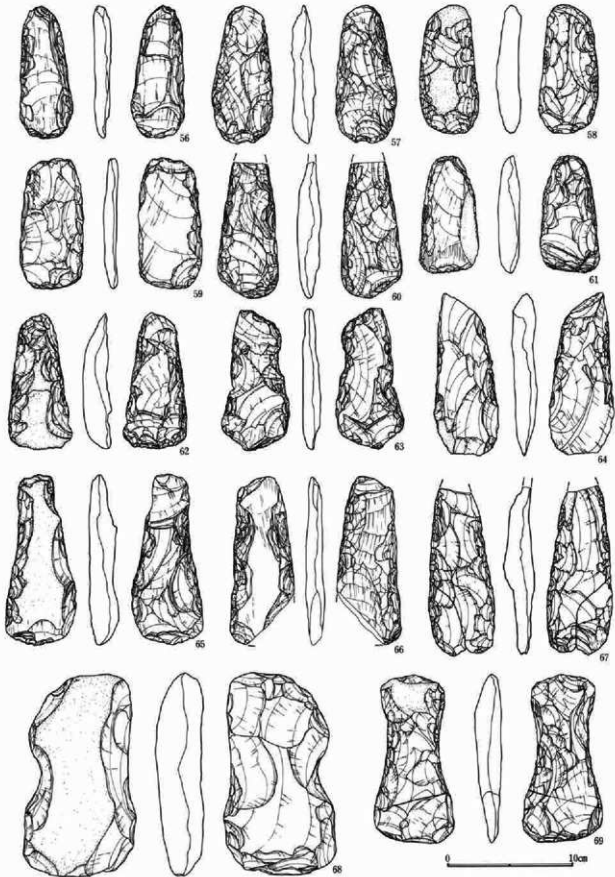
第212図 遺構外出土遺物(1)



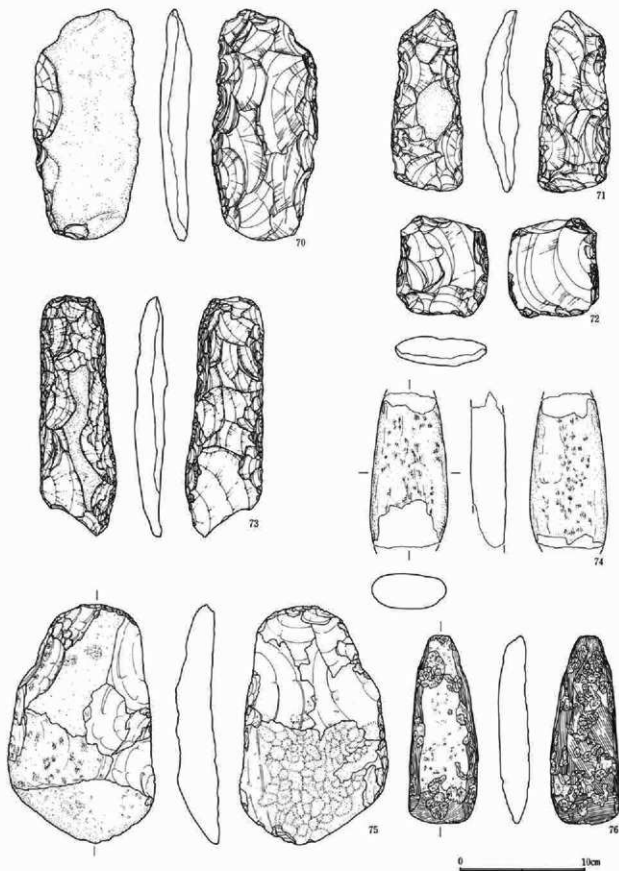
第213図 遺構外出土遺物(2)



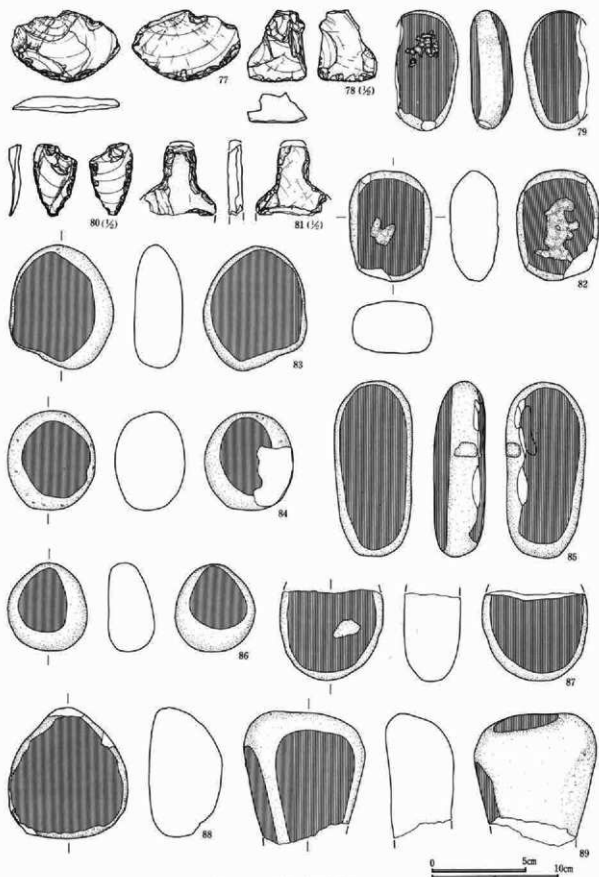
第214図 遺構外出土遺物(3)



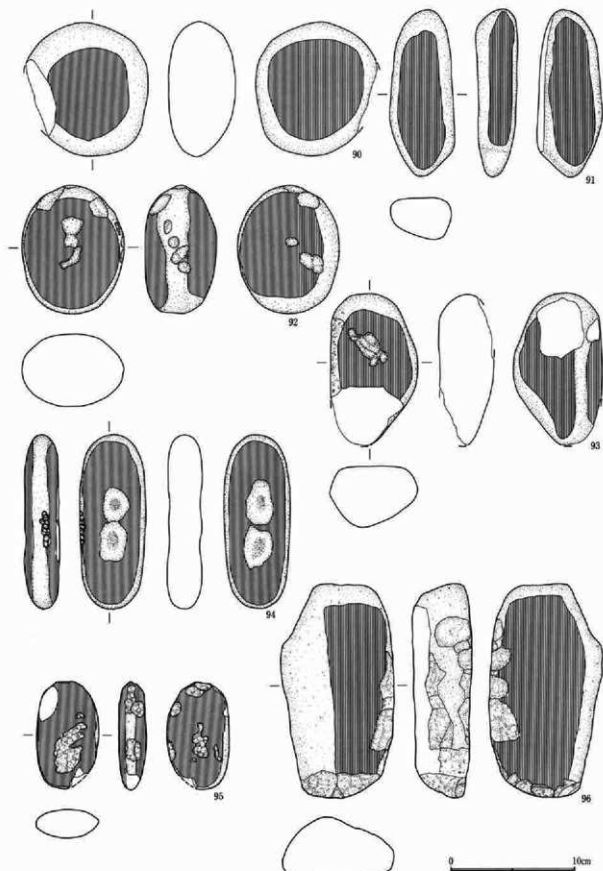
第215図 遺構外出土遺物(4)



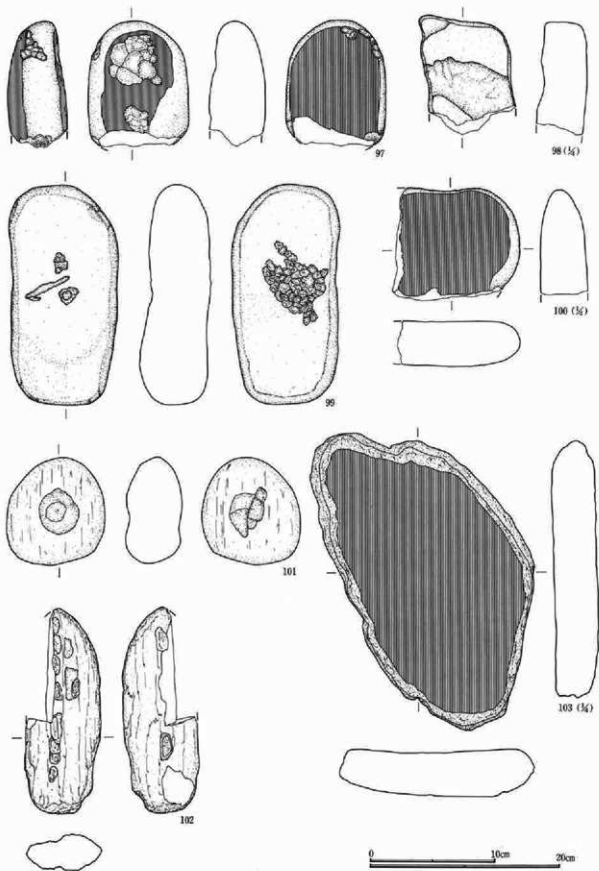
第216図 遺構外出土遺物(5)



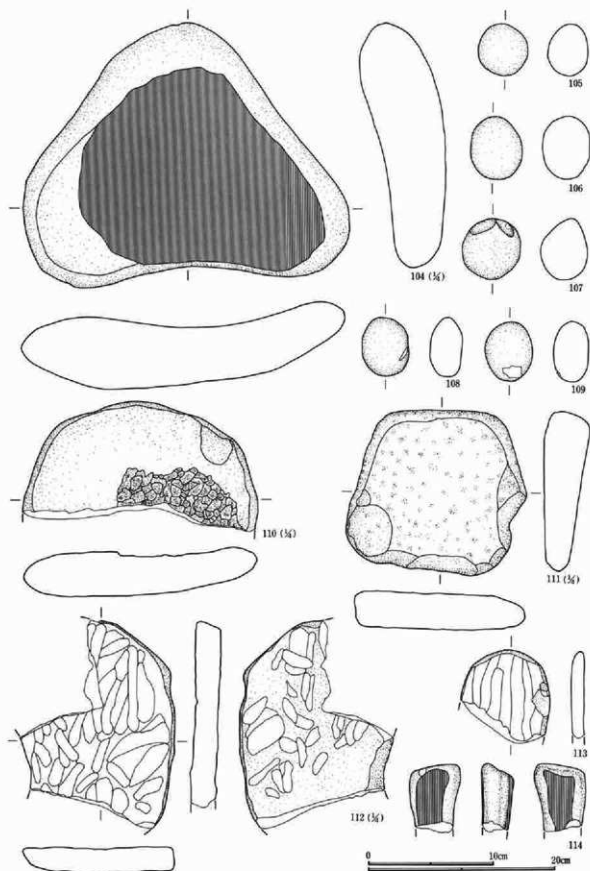
第217図 遺構外出土遺物(6)



第218図 遺構外出土遺物(7)



第219図 遺構外出土遺物(8)



第220図 遺構外出土遺物(9)

遺構外出土土器観察表

No	器種 部位	出土 位置	①色調(表) ②色調(裏) ③焼成 ④胎土	法 量 調 型	文 様 要 素	分 類	備 考
1	深鉢 口縁部	C74IX23	①②にぶい橙 ③良好 ④粗 粗砂・礫片岩を含む	器厚7mm 内面寛磨き	山形押型文	I	
2	深鉢 胴部	C71IX17	①橙 ②にぶい橙 ③良好 ④普通 粗砂を少量含む	器厚11mm 内面寛磨き	R.L縄文施文後、半截竹管状工具による沈線	II	縄織土器
3	深鉢 胴部	C82IX27	①②橙 ③良好 ④普通 粗砂を含む	器厚8mm 内面寛磨き	櫛状工具による平行沈線 円形竹管による刻突文 半截竹管による爪形文 R.L縄文	III	I
4	深鉢 口縁部	3号住居	①浅黄 ②にぶい黄褐 ③良好 ④普通 粗砂を含む	器厚7~9mm 内面寛磨き	R.L縄文横位施文	III	
5	深鉢 口縁部		①②明黄橙 ③良好 ④粗 粗砂・礫を少量含む	器厚7~11mm 内面寛磨き	半截竹管状工具による平行沈線	IV	2
6	深鉢 口縁部	C73IX13	①明褐 ②明黄褐 ③良好 ④普通 粗砂を少量含む	器厚10mm 内面ナデ	直前段合器工 $\begin{Bmatrix} R \\ L \end{Bmatrix} \cdot R \begin{Bmatrix} L \\ R \end{Bmatrix}$ 縄文 口唇部胎状工具による刻み 沈線	II	縄織土器
7	深鉢 口縁部	C75IX26	①②にぶい橙 ③良好 ④粗 粗砂・礫を含む	器厚7mm 内面ナデか	半截竹管状工具による平行沈線	IV	2
8	深鉢 口縁部	3号住居	①②にぶい黄褐 ③良好 ④普通 粗砂を含む	器厚7mm 内面ナデ	浮線文上に刻み	I	1
9	深鉢 口縁部	C81IX23	①②にぶい赤褐 ③良好 ④普通 粗砂・片岩を含む	器厚8mm 内面寛磨き	R.L縄文横位施文	IV	3
10	深鉢 胴部	表採	①②にぶい黄橙 ③良好 ④粗 粗砂・礫を含む	底径9.6cm 内面寛磨き	無節L形縄文施文後、半截竹管状工具による平行沈線	IV	2
11	深鉢 胴部	1号住居	①②浅黄橙 ③良好 ④普通 粗砂を含む	器厚8~11mm 内面寛磨き	R.L縄文横位施文後、半截竹管状工具による平行沈線	IV	2
12	深鉢 胴部	3号住居	①②浅黄 ③良好 ④粗 粗砂・礫を少量含む	器厚8~9mm 内面寛磨き	R.L縄文横位施文後、浮線文上に刻み	IV	1
13	深鉢 胴部	3号住居	①にぶい赤褐 ②にぶい橙 ③良好 ④普通 粗砂を少量含む	器厚6~8mm 内面ナデか	R.L縄文未端自条結縛施文	IV	3
14	深鉢 胴部	C76IX26	①にぶい黄橙 ②浅黄橙 ③良好 ④普通 粗砂をやや多く含む	器厚8mm 内面ナデ後磨き	L.R縄文施文後、浮線文上に刻み	IV	1
15	深鉢 口縁部	C72IX23	①にぶい黄褐 ②にぶい橙 ③良好 ④普通 粗砂を含む	器厚7mm 内面寛磨き	R.L縄文未端自条結縛施文	IV	3
16	深鉢 口・胴	C85IX25	①②にぶい黄橙 ③良好 ④普通 粗砂を少量含む	器厚4mm 内面寛磨き	口唇部に刻み 胴部貝殻による連続爪形文		北白川下層式か
17	深鉢 底部	C83IX29	①②にぶい橙 ③良好 ④普通 粗砂をやや多く含む	底径9.8cm 内面ナデ	L.R縄文横位施文後、半截竹管状工具による平行沈線	IV	2
18	浅鉢 胴部	C81IX23	①②橙 ③良好 ④普通 粗砂を含む	器厚5mm 内面ナデか	外面寛磨き	IV	4
19	深鉢 口・胴	C75IX21	①②橙 ③良好 ④普通 粗砂を含む	器厚11mm 内面寛磨き	水平方向に連続刻突文施文		
20	深鉢 口縁部	C79IX15	①②にぶい橙 ③良好 ④普通 粗砂・片岩を多く含む	器厚8mm 内面寛磨き	R.L縄文施文後、結縛浮文	V	
21	深鉢 口縁部	C75IX28	①橙 ②にぶい赤褐 ③良好 ④粗 粗砂・礫・質母をやや多く含む	器厚8mm 内面ナデ	R.L縄文未端自条結縛施文	V	
22	深鉢 口縁部	C81IX23	①②橙 ③良好 ④粗 粗砂・礫をやや多く含む	器厚8mm 内面ナデ	円形貼付文	V	
23	深鉢 胴部	表採	①②橙 ③良好 ④粗 粗砂・礫を含む	器厚10~12mm 内面ナデか	沈線	V	
24	非口土器 口・胴	C86IX18	①浅黄橙 ②にぶい黄褐 ③良好 ④普通 粗砂をやや多く含む	口径(7.5cm) 内面寛磨き	帯文を貼付一部刻み 外面寛磨き		
25	土偶 胴部	C83IX21	①②浅黄橙 ③良好 ④粗 粗砂・礫を含む	幅(8.8cm) 内面寛磨き	沈線区画内に刻突文 胴部に2方向からの穿孔あり 外面寛磨き	V	
26	深鉢 底部	表採	①②明赤褐 ③良好 ④普通 粗砂を多く含む	底径8.8cm 内面寛磨きか	外面寛磨き		

遺構外出土土器観察表

No	器種	出土位置	全長 (cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	重量 (g)	残存状況	石材	特徴
27	石鏃	C80IX18	(2.6)	2.1	0.7	(1.9)	先端部欠損	黒曜石	凹基無茎鏃
28	石鏃	2号住居	2.2	1.6	0.4	0.9	完形	黒曜石	凸基無茎鏃

第IV章 下高瀬寺山遺跡

No.	器種	出土位置	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	残存状況	石 材	特 徴
29	石 鉢	C85D19	1.4	1.6	0.4	9.7	完 形	黒曜石	凹基無蓋縁
30	石 鉢	C82D15	[1.4]	1.8	0.3	[0.6]	先端部欠損	黒曜石	凹基無蓋縁
31	石 鉢	1号住居	2.1	(1.8)	0.3	[0.6]	基部一部欠損	チャート	凹基無蓋縁 挟りが大きい
32	石 鉢	C85D15	2.7	(1.9)	0.3	[0.8]	基部一部欠損	黒曜石	凹基無蓋縁 挟りが大きい
33	石 鉢	表層	2.3	(2.0)	0.3	[0.6]	基部一部欠損	チャート	凹基無蓋縁 挟りが大きい
34	石 鉢	1号住居	(2.2)	1.8	0.3	[0.6]	先端部一部欠	黒曜石	凹基無蓋縁 挟りが大きい
35	石 鉢	C70D25	[1.5]	1.7	0.4	[0.7]	先端部欠損	黒曜石	凹基無蓋縁
36	石 鉢	1号住居	1.5	0.8	0.3	9.2	完 形	赤色珪質岩	凹基有蓋縁
37	石 鉢	C81D22	2.2	1.8	0.5	1.4	完 形	黒曜石	凸基無蓋縁
38	石 鉢	C81D22	2.3	2.1	0.6	3.0	完 形	チャート	平基無蓋縁
39	石 鉢		[2.3]	[1.5]	0.4		先端部欠損		凸基有蓋
40	ピエンススキーユ	C78D20	1.8	1.8	0.6	1.3	完 形	黒曜石	平基無蓋縁
41	ピエンススキーユ	C72D22	3.5	1.8	1.2	9.5	完 形	黒曜石	
42	石 皿	C81D19	3.1	1.5	0.4	1.6	完 形	黒曜石	
43	石 皿	C85D15	2.6	2.1	0.8	2.9	完 形	黒曜石	
44	石 匙	C85D13	7.3	3.3	0.8	18	完 形	頁岩	楕型 片面に自然面
45	石 匙	C81D21	8.1	9.7	1.1	73	完 形	硬質泥岩	楕型 片面に自然面
46	石 匙	1号住居	6.3	[9.2]	1.5	[67]	ほぼ完形	硬質泥岩	楕型 片面に自然面
47	石 匙	C70D21	7.7	3.5	1.3	31	完 形	硬質泥岩	楕型
48	打製石斧	C80D15	[10.1]	6.0	2.6	[116]	基部1/3欠損	硬質泥岩	楕型 凸刃 片面に自然面
49	打製石斧		[10.2]	3.8	1.5		基部1/4欠損		楕型 凸刃 片面に自然面
50	打製石斧	3号住居	10.1	4.5	2.0	86	完 形	硬質泥岩	短筒型 直刃
51	打製石斧	1号住居	[8.6]	4.4	1.9	[71]	基部一部欠損	硬質泥岩	短筒型 直刃
52	打製石斧	C75D20	10.9	4.9	1.8	122	完 形	細粒安山岩	短筒型 凸刃 片面に自然面
53	打製石斧	1号住居	10.8	4.8	2.1	135	完 形	細粒安山岩	短筒型 凸刃
54	打製石斧	C80D25	10.6	4.2	1.3	65	完 形	硬質泥岩	楕型 凸刃
55	打製石斧	C87D19	7.5	4.5	1.3	50	完 形	頁岩	楕型 凸刃
56	打製石斧	C73D27	10.4	4.2	1.5	74	完 形	緑色片岩	楕型 直刃か
57	打製石斧	C72D19	10.9	4.9	1.9	94	完 形	硬質泥岩	楕型 凸刃
58	打製石斧	C80D20	10.1	4.6	1.9	105	完 形	硬質泥岩	短筒型か 凸刃 片面に自然面
59	打製石斧	C88D16	10.3	5.0	1.2	79	完 形	硬質泥岩	短筒型か 直刃
60	打製石斧	C72D25	[10.7]	4.8	1.9	[98]	基部1/4欠損	硬質泥岩	楕型 凸刃
61	打製石斧	C72D22	9.3	4.7	1.7	88	完 形	硬質泥岩	楕型 直刃 片面に自然面
62	打製石斧	C80D14	10.7	5.0	2.3	113	完 形	硬質泥岩	楕型 直刃 片面に自然面
63	打製石斧	C79D16	11.1	5.4	1.5	80	完 形	硬質泥岩	楕型 凸刃
64	打製石斧	C75D24	[12.7]	5.1	2.0	[123]	完 形	硬質泥岩	楕型 直刃 片面に自然面
65	打製石斧	C78D20	13.5	5.6	2.5	157	完 形	硬質泥岩	楕型 凸刃か 片面に自然面
66	打製石斧	C74D17	[13.1]	5.1	1.6	[128]	刃部1/4欠損	緑色片岩	楕型
67	打製石斧	C89D14	[13.7]	5.2	2.4	[139]	基部1/4欠損	硬質泥岩	楕型 凸刃か
68	打製石斧	C91D16	16.0	9.0	3.8	645	完 形	硬質泥岩	分割型 直刃 片面に自然面
69	打製石斧	C71D22	13.2	6.3	2.1	166	完 形	硬質泥岩	楕型 直刃 片面に自然面
70	打製石斧	C79D17	18.2	8.5	2.5	397	完 形	硬質泥岩	短筒型か 凸刃 片面に自然面
71	打製石斧	表層	14.3	5.6	2.9	195	完 形	硬質泥岩	短筒型か 直刃 片面に自然面
72	スタレイバー	C84D22	7.9	7.2	2.4	170	完 形	ホルンフェルス	側縁に刃部
73	打製石斧	C80D20	18.9	6.1	2.6	293	完 形	頁岩	短筒型か 凸刃か 片面に自然面
74	磨製石斧	C85D20	[12.3]	6.2	2.8	[366]	両端部欠損	緑色片岩	敲打途中 両面に敲打痕
75	磨製石斧	C80D20	18.8	11.8	3.2	947	完 形	変玄武岩	荒削り途中 片面に自然面
76	磨製石斧	C85D15	14.8	5.3	2.3	323	完 形	変玄武岩	研削途中 両面に敲打痕残る
77	スタレイバー	1号住居	5.6	8.5	1.3	59	完 形	硬質泥岩	側縁に刃部 片面に一部自然面
78	スタレイバー	2号住居	3.8	3.2	1.6	14	完 形	チャート	側縁に刃部
79	磨 石	3号住居	9.4	[5.0]	3.3	[224]	4/5	流紋岩	両面に磨痕、片面に敲打痕
80	スタレイバー	C81D22	3.8	2.3	0.7	2.8	完 形	黒曜石	側縁に刃部
81	不 明	C72D20	[3.7]	[3.8]	0.8	[11]	1/3	緑色片岩	片面に自然面
82	磨 石	1号住居	8.6	6.5	4.1	[304]	ほぼ完形	粗粒安山岩	両面に磨痕・敲打痕
83	磨 石	1号住居	9.6	8.0	3.8	411	完 形	粗粒安山岩	両面に磨痕
84	磨 石	表層	7.8	7.0	5.5	[395]	ほぼ完形	粗粒安山岩	両面に磨痕
85	磨 石	C79D22	13.9	6.3	4.1	493	完 形	流紋岩	両面に磨痕
86	磨 石	C80D15	6.9	6.4	3.6	243	完 形	粗粒安山岩	両面に磨痕
87	磨 石	C87D21	[7.1]	8.3	4.4	[339]	2/3	デイスイト	両面に磨痕
88	磨 石	C80D23	10.3	9.5	5.8	[708]	ほぼ完形	粗粒安山岩	表面・側面に磨痕

No.	器 種	出土位置	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	残存状況	石 材	特 徴
89	磨石	C86IX13	[10.5]	9.7	5.4	[732]	3/4	ひん岩	表面・側面に磨面
90	磨石	C74IX25	10.5	[9.7]	5.3	[805]	ほぼ完形	粗粒安山岩	両面に磨面
91	磨石	C86IX13	13.2	5.2	3.4	316	完 形	粗粒安山岩	両面・片側面に磨面
92	磨石	C78IX21	10.1	8.1	5.7	691	完 形	石英閃緑岩	両面に磨面、両面・側面一部に敲打痕
93	磨石	C70IX28	[12.0]	6.9	4.8	[470]	ほぼ完形	粗粒安山岩	両面に磨面、片面敲打痕
94	磨石	C76IX26	13.7	5.3	2.8	322	完 形	砂岩	両面に磨面・くぼみ、片側面に敲打痕
95	磨石	1号住居	8.4	4.9	2.2	[125]	ほぼ完形	硬質泥岩	両面に磨面、両面・側面・端部敲打痕
96	磨石	1号住居	16.7	8.9	4.8	1037	完 形	実質安山岩	両面に磨面、片側面・端部敲打痕
97	磨石	C84IX22	[9.9]	8.6	4.7	[567]	3/4	実質安山岩	両面に磨面、表面・側面敲打痕
98	台石	C72IX13	[12.4]	10.3	5.4	[799]	1/2	粗粒安山岩	
99	磨石	1号住居	17.3	8.7	5.7	1402	完 形	粗粒安山岩	両面に磨面・敲打痕
100	石皿	C85IX15	[11.9]	[13.6]	5.5	[1333]	2/3	粗粒安山岩	片面に磨面
101	くぼみ石	C76IX15	8.3	7.8	4.3	480	完 形	緑色片岩	両面にくぼみ
102	くぼみ石	C86IX17	16.2	5.9	2.9	[357]	5/6	黒色片岩	両面にくぼみ
103	石皿	C85IX14	31.4	23.8	5.1	5250	完 形	雲母石英片岩	片面に磨面
104	石皿	C79IX18	27.9	34.7	9.2	10000	完 形	ひん岩	片面に磨面
105	丸石	C82IX23	4.1	4.0	3.1	76	完 形	粗粒安山岩	
106	丸石	C85IX15	5.0	4.2	3.8	98	完 形	粗粒安山岩	
107	丸石	C82IX16	4.9	4.7	3.7	94	完 形	粗粒安山岩	
108	丸石	C74IX24	4.6	3.6	2.5	99	完 形	流紋岩	
109	丸石	C78IX14	4.7	3.8	2.8	[71]	ほぼ完形	粗粒安山岩	
110	台石	C80IX20	[13.8]	28.0	5.1	[2280]	1/2	粗粒安山岩	表面に敲打痕
111	台石	C87IX17	17.7	19.1	4.1	2280	完 形	実質安山岩	表面に敲打痕か
112	砥石	C81IX24	[22.0]	[16.4]	2.8	[1055]	2/3	牛伏砂岩	両面に研磨痕
113	砥石	C74IX20	[7.4]	7.1	1.0	[66]	2/3	牛伏砂岩	両面に研磨痕
114	不明	C75IX28	[5.4]	4.0	2.6	[70]	1/2	粗粒安山岩	両面に磨面

第3節 弥生時代

(1) 遺構・遺物の概要

遺構

後期の竪穴住居跡1軒が検出されている。

遺物

土器、石器が出土している。

①土器 中期の甕、後期の壺・甕・高坏、時期不明の壺・甕・鉢が出土している。

I 壺

II 甕 1類 条痕文を主とするもの(中期)

2類 縄文を主とするもの(中期)

3類 櫛描文を主とするもの(後期)

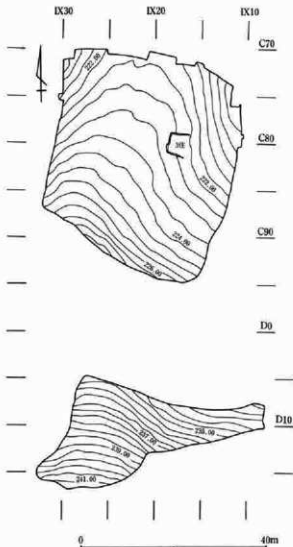
III 鉢

IV 高坏

出土土器数量表

器種	壺	甕	高坏	鉢	計
中期	0	7	0	0	7
後期	0	75	1	0	76
時期不明	7	34	0	1	42
総計	7	116	1	1	125

②石器 石剣1点、砥石1点が出土している。



第22図 弥生時代遺構位置図

(2) 竪穴住居跡

3号住居跡

位置 C78～81-IX16～18Gr 重複 10号住より新 平面形態 隅丸方形又は隅丸長方形

規模 [4.6m]×5.0m 壁高 38cm 面積 [21.7㎡] 床面積 [20.8㎡]

主軸方位 N-102°-E 壁溝 なし

柱穴 床面から5基のピットが検出されているが、南西隅の1基以外は東側に南北に1列に並んでおり、すべて柱穴とするには疑問が残る。

P1 長径44cm短径42cm深さ37cm P2 長径55cm短径46cm深さ24cm P3 長径46cm短径43cm深さ39cm

P4 長径40cm短径35cm深さ46cm P5 長径42cm短径36cm深さ29cm

床面 地山を床面としており、やや凹凸のある床面である。南から北に向かってやや下がっている。

掘り方 掘り方を直接床面としている。

遺物出土状況 東側は削平のため遺物は少なく、西側に多くなっている。垂直分布を見ると覆土が薄いこともあり下層～床面付近および炉に集中している。接合関係の判明する物は2点あり、覆土下層と床面付近の

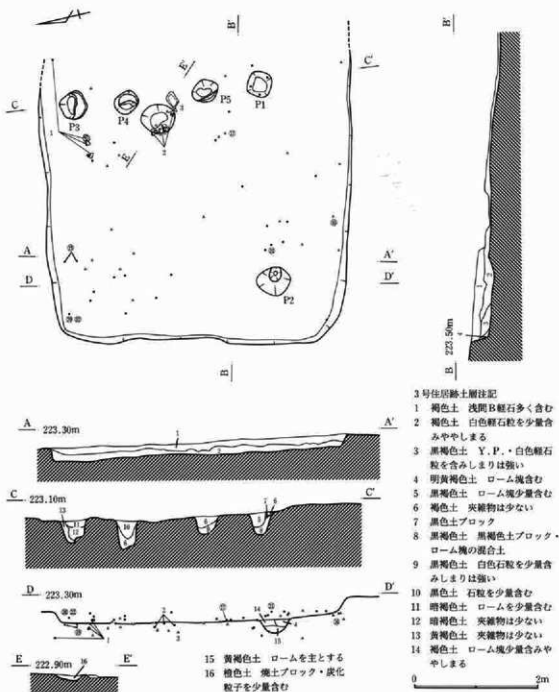
破片が接合しているものと、炉出土の破片が接合しているものがある。

炉位置 中央北西寄り **主軸方位** N-139°-E **規模** 全長50cm 幅48cm

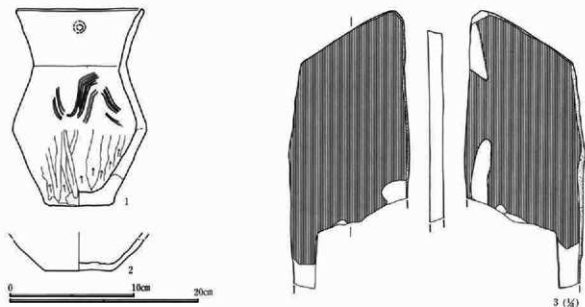
概要 主軸は住居の長軸方向を向くがやや南に振れている。火床面は余り焼けておらず、覆土に焼土ブロックを含む程度である。枕石が検出されており、砂岩の砥石を転用している。

出土遺物 土器は、壺が75点出土しており、石製品は枕石に転用された砥石が1点出土している。

所見 上部の削平が著しく出土遺物も少ないため、詳しい時期は不明であるが、弥生後期棒式期の住居と考えられる。



第222図 3号住居跡



第223図 3号住居跡出土遺物

3号住居跡出土土器観察表

No	器種	床高 (cm)	法量 ①口径②底径 ③高さ④残存	①色調(表) ②色調(裏) ③焼成 ④胎土	調整・文様	分期	備考
1	壺	-25	①10.0cm ②5.5cm ③(15.5cm) ④口縁・底部	①②にふい粉 ③良好 ④普通 粗砂を含む	縄文工具による波状文 内外面磨き 口縁部下に径6mmの孔あり	II 3	
2	壺	87	① - ②5.3 ③ - ④底部	①②にふい黄粒 ③良好 ④粗 粗砂・礫をやや多く含む	外面磨き 内面割落の為不明	II	

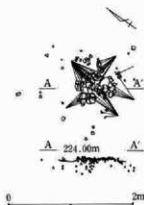
3号住居跡出土石器観察表

No	器種	床高 (cm)	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	残存状況	石材	特徴
3	砥石	-16	[29.2]	12.9	1.5	[812]	2/3	砂岩	両面に研磨面

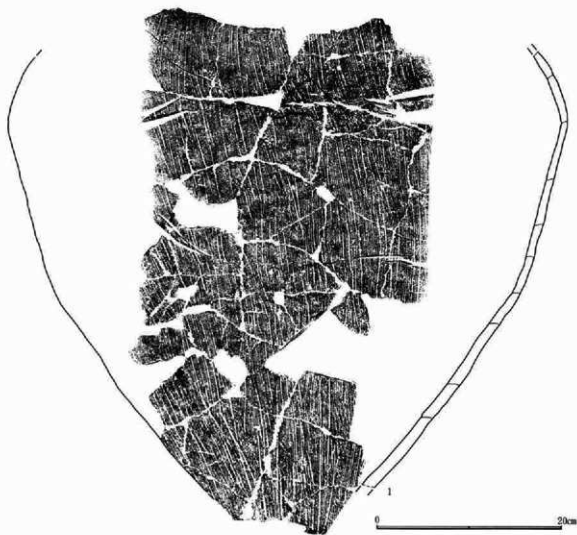
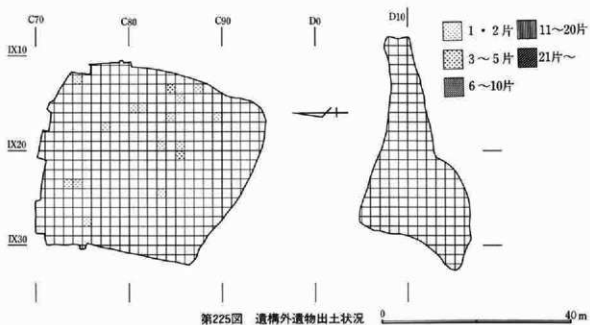
(3) 遺構外出土遺物

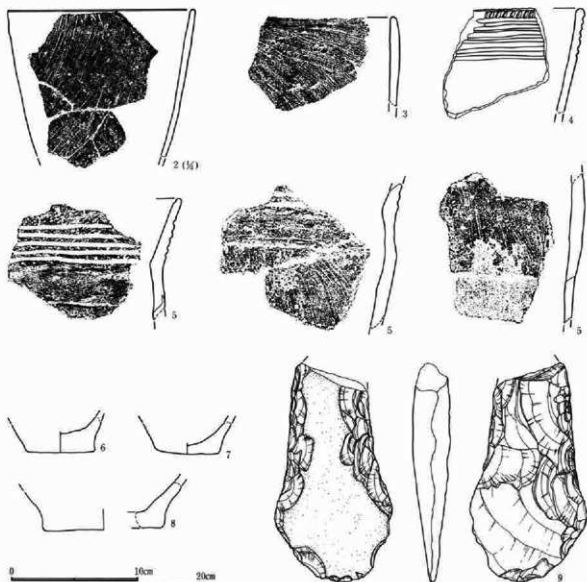
遺構外や1号谷津状遺構からも少量ではあるが、弥生中期・後期の遺物が出土している。C85IX20Grには1の中期の壺が潰れた状態で集中して出土している。他にも北側調査区の北西部から南東部にかけて少量出土しており、特に3号住居の両側に多くなっている。

土器は、中期の壺が7点、後期の高坏が1点、時期不明の壺が34点、時期不明の壺が7点、時期不明の鉢が1点、計50点出土している。石器は石剣1点が出土している。



第224図 C85IX20Gr遺物集中地点





第227図 遺構外出土遺物(2)

遺構外出土土器観察表

No	器種	出土位置	法量 ①口径②底径 ③高さ④残存	①色調(表) ②色調(裏) ③焼成 ④胎土	調整・文様	分類	備考
1	甕	C-85IX20	① - ② - ③ - ④肩~胴部	①②におい橙 ③良好 ④粗 粗砂・礫をやや多く含む	外面ハケメ 内面明りか	II 1	
2	鉢	C-89IX18	①(20.0cm)② - ③ - ④口~底部	①②におい黄橙 ③良好 ④粗 粗砂・礫を多く含む	外面ハケメ 内面明りか	III	
3	鉢	2号住居	① - ② - ③ - ④口縁部片	①②におい黄橙 ③良好 ④粗 粗砂・礫・片岩を多く含む	外面ハケメ 内面寛削り後上位置磨き	III	
4	鉢		① - ② - ③ - ④口縁部片	①②におい黄橙 ③良好 ④粗 粗砂・礫・片岩を多く含む	口縁部に刻み、平行沈線	III	
5	甕	C-85IX15	① - ② - ③ - ④口縁・胴部片	①②におい黄橙 ③良好 ④粗 粗砂・礫・片岩を多く含む	R L縄文施文後、平行沈線 ハケメ	II 1	
6	甕	C-88IX18	① 5.4cm ② - ③ - ④底部	①黄橙 ②橙 ③良好 ④普通 粗砂を含む	内外面とも摩滅により調整不明	I	
7	甕	C-89IX18	① 5.6cm ② - ③ - ④底部	①黄橙 ②明黄褐 ③良好 ④普通 粗砂を含む	内外面とも摩滅により調整不明	I	

No	器種	出土位置	法量 ①口径②高径 ③高さ④残存	①色調(表) ②色調(裏) ③焼成 ④胎土	調整・文様	分類	備考
8	壺	C87IX17	①(9.0cm)②— ③— ④底部	①におい黄褐色 ②明黄褐 ③良好 ④普通 粗砂を含む	内外面とも摩滅により調整不明	I	

遺構外出土石器観察表(弥生)

No	器種	出土位置	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	残存状況	石材	特徴
9	石鏃	C43IX20	[17.3]	9.3	3.0	[433]	ほぼ完形	火山岩	凸刃 片面に自然面

第4節 奈良時代

(1) 遺構・遺物の概要

遺構

竪穴住居跡3軒が検出されている。

①分布 東側に集中しており、北側調査区北東部に重複して2軒、その南西にやや離れて1軒検出されている。

②平面形態・規模 平面形態は隅丸方形1軒(9号住)、隅丸長方形2軒(1・2号住)である。規模は長辺が3.52~4.40m平均3.97m、短辺が3.08~3.30m平均3.20m、壁高が34~97cm平均62cm、床面積が9.3~10.8㎡平均9.9㎡である。

③主軸方位 カマドのある辺に直角の方向を主軸とすると(カマドの無いものは長軸の方向)、カマドのある2軒は東で、他の1軒も東西方向である。

④床面・掘り方 1号住は貼床が施されており堅緻な床面であり、9号住は掘り方を床面としており軟弱である。2号住は貼床があると思われるがはっきりしない。

⑤カマド 2軒で検出され、1軒で検出されなかった。位置は2軒とも東壁である。規模は長さ1.17~1.76m幅0.78~0.80m煙道部長0.33~0.60mである。火床面は2軒ともあまり焼けていない。袖構築材には棒状の礎が使用されているが、煙道部には1号住は扁平な石、9号住は土師器甕が使用されている。

⑥時期 1・9号住の2軒は8世紀中葉から後半代の住居と考えられる。2号住は遺物の残りが悪く確実ではないが、これも8世紀代のものと考えられる。

遺物

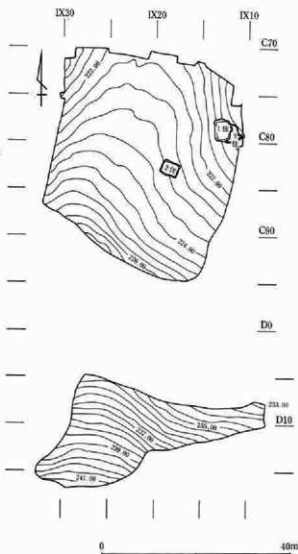
①土器 土師器、須恵器が出土している。

土師器

坏・蓋・甕・小型壺・台付壺・瓶・鉢が出土している。

I 坏 1類 底部は丸底で湾曲する体部から短い口縁部が直立もしくははやや内傾するもの

2類 底部と体部を画す稜線がはっきりしており丸みを帯びた平底を呈す



第228図 奈良時代遺構位置図

るもの

- 3類 底部と体部を画す稜線がはっきりしており完全な平底のもの
- II 蓋 傘形の体部に紐がつくもの
- III 甕 1類 いわゆる長胴甕で口縁から頸部にかけて「く」の字状をなすもの
2類 いわゆる胴張甕で1類に比べ胴が張るもの
- IV 小型甕 甕よりも小さく胴部は丸みを帯びている
- V 台付甕 甕に台が付く器形で甕に比べやや小ぶりである
- VI 鉢 口縁部が外反し胴部は緩やかに立ち上がって鏡形を呈するもの
- VII 瓶 1類 底部がなく胴部が直線的もしくはやや内傾して立ち上がるもの
2類 底部に円形の孔が1つもしくは多数あくもの

須恵器

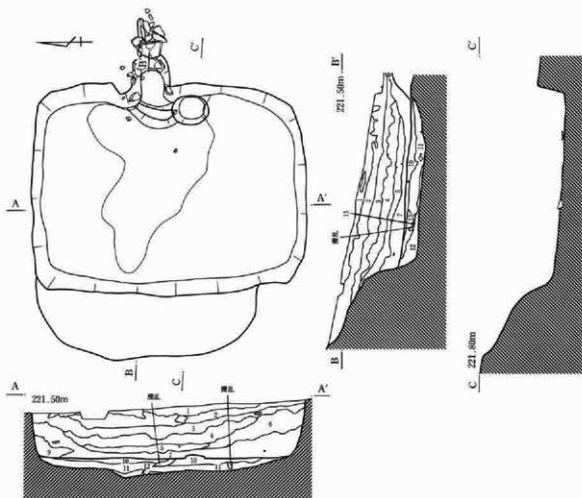
- 坏・蓋・高坏・甕・瓶が出土している。
- I 坏 平底で底部回転糸切り後回転削削りのもの
- II 蓋 天井部が直線的でかえりのないもの
- III 高坏 脚部のみの出土で透孔は無い
- IV 甕
- V 瓶

出土土器数量表

種別	土 器								須 恵 器					総計	
	坏	蓋	甕	小型甕	台付甕	鉢	瓶	小計	坏	蓋	高坏	甕	瓶		小計
遺構内	97	1	101	2	25	0	66	292	0	19	1	0	0	20	312
遺構外	207	0	102	0	1	2	4	316	1	1	0	6	1	9	325
計	304	1	203	2	26	2	70	608	1	20	1	6	1	29	637

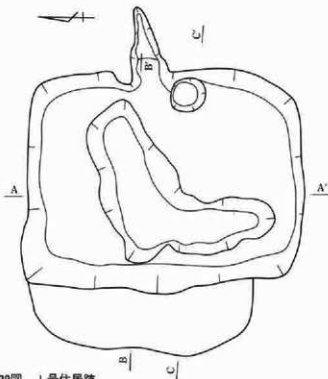
②埴輪 円筒埴輪が2点出土している。

③石製品 台石6点、砥石1点が出土している。



1号住居跡土層注記

- 1 にぶい黄褐色土 ローム・B.P.の混合土
- 2 黒色土 粒子が極めて細かくややしまる
- 3 黒褐色土 粒子が極めて細かくやや粘性
- 4 にぶい黄褐色土 ローム塊・黒褐色土ブロックの混合土 やや粘性
- 5 暗褐色土 ローム塊・黒褐色土ブロック・少量の炭化粒子含む
- 6 明褐色土 ローム塊・黒褐色土ブロック・少量の炭化粒子含む
- 7 暗褐色土 ローム塊・黒褐色土ブロック・少量の炭化粒子を含む 粘性・しまりは強い
- 8 褐色土 塊土ブロックを少量含む、粘性・しまりは強い
- 9 褐色土 褐色土ブロックを含みしまりは強い
- 10 褐色土 粘性・しまりは弱い
- 11 褐色土 黒色土ブロック・褐色土ブロックの混土
- 12 褐色土 黒色土ブロック・褐色土ブロックの混土でB.P.を少量含む
- 13 明褐色土 B.P.・灰白色粒ブロックを少量含む 粘性・しまりは弱い



0 2m

第229図 1号住居跡

(2) 竪穴住居跡

1号住居跡

位置 C77~79-IX11~14Gr 重複 9号住居跡より新

平面形態 南北に長い隅丸長方形で、西側に半円形の浅い掘り込みが存在するが、性格は不明である。

規模 4.4m×3.3m 壁高 97cm 面積 13.9m² 床面積 10.8m² 主軸方位 N-90°-E

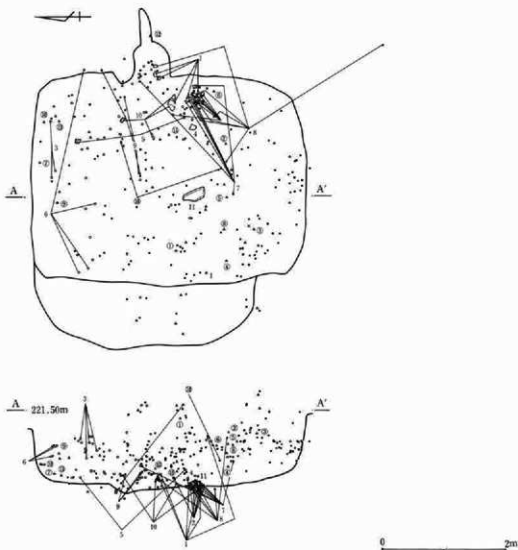
壁溝 なし 柱穴 なし

貯蔵穴 位置 カマド右脇 規模 長径59cm 短径48cm 深さ12cm

形状 平面形態は楕円形で、断面形態は台形を呈し、底面は平坦、立ち上がりは直線的でやや傾斜している。

床面 黒色土を含む褐色土で貼床としており、比較的堅緻である。特に、カマド前から西壁付近にかけて東西に長く硬化面が検出されている。

掘り方 比較的的水平で平坦な掘り方であるが、北東部から南西部にかけて、「く」の字状に溝状の掘り込みが検出されている。



第230図 1号住居跡遺物出土状況

遺物出土状況 住居全面から出土しているが、カマド・貯蔵穴付近から比較的多く出土している。垂直分布を見ると、上層から下層まで満遍なく出土している。接合関係の判明するものは10点あり、床面付近、覆土下層で接合しているものが多いが、上層と下層で接合しているものもある。

カマド

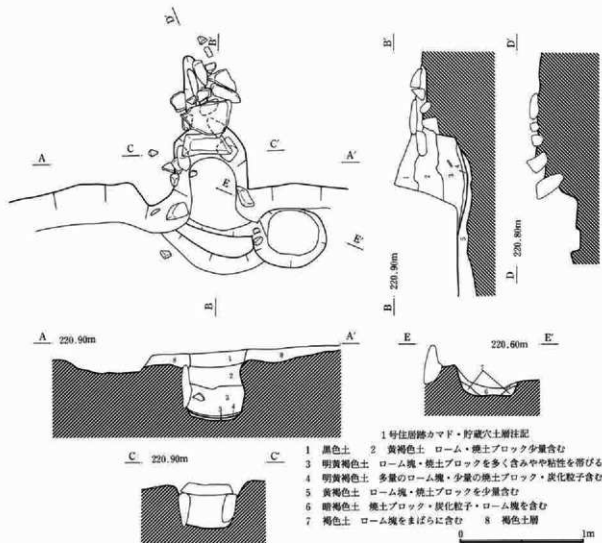
位置 東壁中央部 **主軸方位** N-83°-E **規模** 全長1.76m 幅0.80m 煙道部長0.60m

構築 棒状の自然石を袖石として、褐色土で袖を構築しているが、同様の礫を煙道部手前にも立て、さらに上から天井石を乗せている。天井石は煙道部にも乗せられていたと考えられる。火床面は床面よりやや低く、丸みを帯びており、あまり焼けていない。

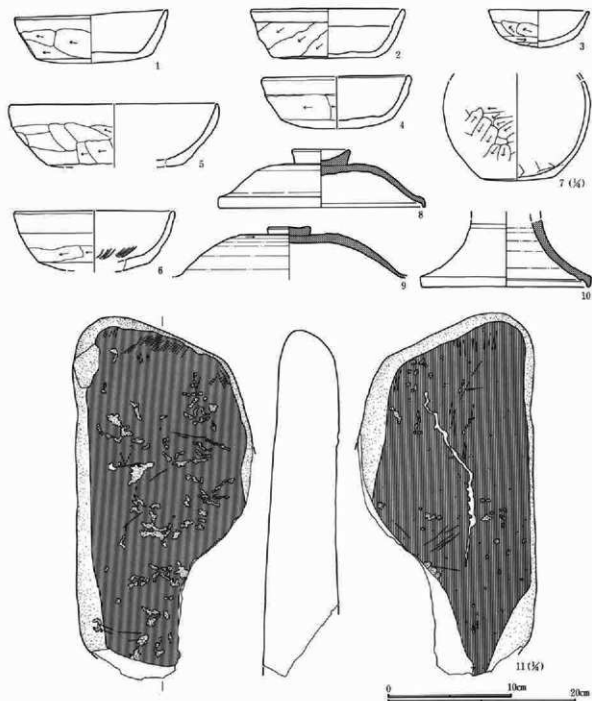
遺物出土状況 構築材の石の他、燃焼部・焚口部から土器片が出土している。

出土遺物 土器は、土師器坏47点、甕43点、小型甕1点、甔1点、須恵器蓋15点、高坏1点、計108点出土しており、石製品は台石3点が出土している。他に、縄文土器151点、石器・剥片等50点が出土している。

所見 出土遺物から、8世紀中葉から後半代の住居と考えられる。



第231図 1号住居跡カマド



第232図 1号住居跡出土遺物

1号住居跡出土土器観察表

No	種別 器種	株高 (cm)	法量	①口縁②底径 ③高さ④残存	①色調(表) ②色調(裏) ③焼成 ④胎土	調	整	分類	備考
1	土師器 钵	カマド 貯蔵穴	① 12.2cm	② 9.0cm	①②にふい橙 ③良好 ④普通 粗砂を微量含む	口縁部横ナデ 底～体部外面黄雨り内 面ナデ		1	
			③ 3.7cm	④ほぼ完形				2	
2	土師器 钵	貯蔵穴	① 12.1cm	② 8.5cm	①②にふい橙 ③良好 ④細 細砂を少量含む	口縁部横ナデ 底～体部外面黄雨り内 面ナデ 器面摩滅著しい		1	
			③ 3.9cm	④ほぼ完形				3	

No	種類 器種	床高 (cm)	法量 ①口径②底径 ③高さ④残存	①色調(裏) ②色調(表) ③構成 ④胎土	調 整	分類	備 考
3	土師器 環	36	①(7.8cm) ② 3.8cm ③ 3.0cm ④口～底1/2	①②にぶい橙 ③良好 ④普通 片石・礫を微量含む	口縁部横ナゲ 底～体部外面寬削り内 面ナゲ	1 2	口縁部一 部黒変
4	土師器 環	15	①(11.6cm) ②(9.0cm) ③ 4.1cm ④口～底1/4	①②橙 ③良好 ④普通 粗砂・片石含む	口縁部横ナゲ 底～体部外面寬削り内 面ナゲ 器面準直	1 2	
5	土師器 環	10	①(16.4cm) ②(10.7cm) ③ — ④口～体部片	①②にぶい橙 ③良好 ④細 粗砂を少量含む	口縁部横ナゲ 底～体部外面寬削り内 面ナゲ 器面準直	1 3	
6	土師器 環	40	①(12.8cm) ② 9.0cm ③ — ④口～底1/4	①②にぶい橙 ③良好 ④普通 粗砂を少量含む	口縁部横ナゲ 底～体部外面寬削り内 面ナゲ後放射状寬削き	1 2	口縁部一 部黒変
7	土師器 甕	- 5	① — ② 7.5cm ③ — ④肩～底部	①②にぶい橙 ③良好 ④普通 粗砂・雲母含む	胴～底部外面寬削り内面置ナゲ	III 2	胴部外面 一部黒変
8	須恵器 蓋	- 4	① 16.3cm 紐径 4.5cm ③ 3.7cm ④ほぼ完形	①②オリーブ灰 ③還元相 良好 ④細 粗砂・礫を僅かに含む	ロクロ調整(右) 天井部回転蓋削り 円形鋸貼付け	II	
9	須恵器 蓋	27	① — 紐径 3.0cm ③ — ④天井～体部	①②灰 ③還元相 やや軟質 ④粗 礫・片石を含む	ロクロ調整(右) 天井部回転蓋削り 円形鋸貼付け	II	
10	須恵器 高 杯	貯蔵穴 高 杯	① — 脚部径13.0cm ③ — ④脚部	①②灰白 ③還元相 良好 ④細 粗砂を微量含む	ロクロ調整	III	

1号住居跡出土石器観察表

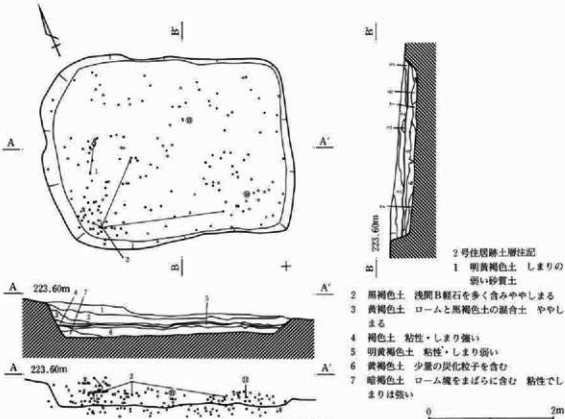
No	器 種	床高 (cm)	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	残存状況	石 材	特 徴
11	台 石	13.5	38.0	18.8	7.8	9500	3/4	変玄武岩	両面に融打痕 擦痕

2号住居跡

位置 C81～83-IX17～19Gr 重複 10号住居跡・41号土坑・42号土坑より新

平面形態 東西に長い隅丸長方形 規模 3.98×3.08m 壁高 56cm 面積 10.8m²

床面積 9.3m² 主軸方位 N-71°-W 壁溝 なし 柱穴・貯蔵穴・カマド なし



第233図 2号住居跡

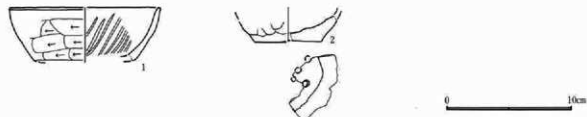
床面 土層図の5層の上面を床面としたが、軟弱ではっきりせず、貼床とした5～7層からも遺物がかなり出土しているため、貼床ではない可能性もある。

掘り方 ほぼ水平で平坦な掘り方であり、床面の可能性もある。

遺物出土状況 住居全面から出土しているが、西南部からやや多く出土している。垂直分布を見ると、上層から下層まで出土しており、床下(?)からもかなり出土している。接合関係の判明するものは2点あり、覆土上層・中層の破片が接合している。

出土遺物 土器は、土師器杯35点、甕41点、甕2点、計78点が出土し、石製品は、台石3点が出土している。他に、縄文土器61点、石器・剥片等が38点出土している。

所見 カマドがなく、床面もはっきりしないため、住居でない可能性もあるが、土坑とするには規模が大きすぎるため性格は不明である。出土遺物から時期は8世紀代と考えられるが、破片が多いため確実ではない。



第234図 2号住居跡出土遺物

2号住居跡出土土器観察表

No.	類別 器種	床高 (cm)	法量	①色調(表) ②色調(裏) ③焼成 ④胎土	調	整	分類	備考
1	土師器 杯	7	①(11.2cm) ②(8.0cm) ③— ④口～体部片	①②に白い瘻 ③良好 ④普通 粗砂を含む	口縁部横ナデ	口～体部外面裏内 面ナデ放射状寛磨き	I	外面一部 黒変
2	土師器 甕	12	①— ②(5.4cm) ③— ④底部片	①②粗 ③良好 ④普通 粗砂を微量含む	胴～底部外面裏内 面は割落	底部に径4mmの孔複数あり	Ⅶ 2	

9号住居跡

位置 C80・81-IX11・12Gr **重複** 1号住居跡より古

平面形態 隅丸方形であるが、北西部は1号住に切られているため不明の部分がある。

規模 3.52×3.22m **壁高** 34cm **面積** 10.7m² **床面積** 9.5m² **主軸方位** N-85°-E

壁溝 なし **柱穴** なし

貯蔵穴 **位置** 南東隅 **規模** 長径53cm 短径49cm 深さ10cm

形状 平面形態はほぼ円形を呈し、断面形態は台形であるが、底部はやや丸みを帯びる。

床面 地山を床面としており、比較的軟弱で、はっきりした硬化面は検出されなかった。ほぼ水平な床面であるが、やや凹凸がある。

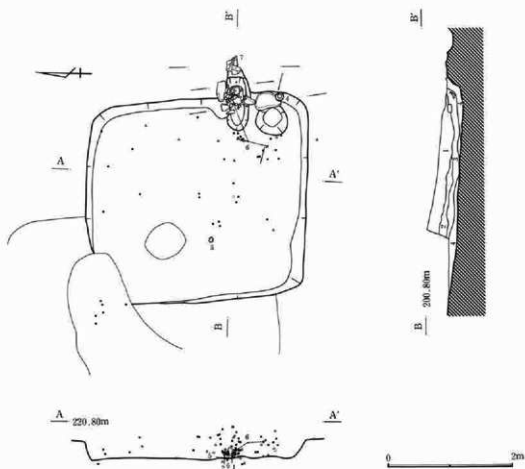
掘り方 掘り方を直接床面としている。

遺物出土状況 カマド付近に集中しており、1号住と重複していることもあり、西部からはほとんど出土していない。垂直分布をみても、上層から下層まで出土しているが、カマド付近に集中している。接合関係の判明するものは1点で、覆土中とカマドの破片が接合している。

カマド

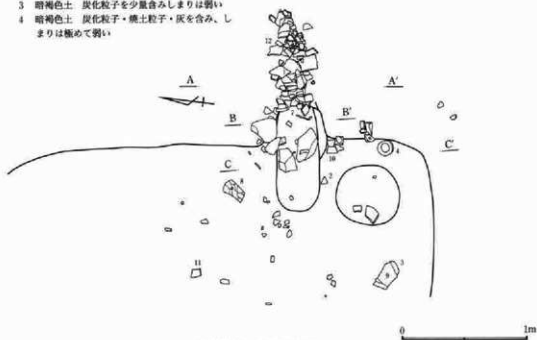
位置 東壁南寄り **主軸方位** N-84°-E **規模** 全長1.17m 幅0.78m 煙道部長0.33m

構築 棒状の礎を袖石として、袖を構築しており、煙道部には長胴壺を使用している。火床面は床面より



9号住居跡土層注記

- 1 褐色土 しまりは弱い
- 2 にぶい褐色土 しまりは弱い
- 3 暗褐色土 炭化粒子を少量含みしまりは弱い
- 4 暗褐色土 炭化粒子・焼土粒子・灰を含み、しまりは極めて弱い



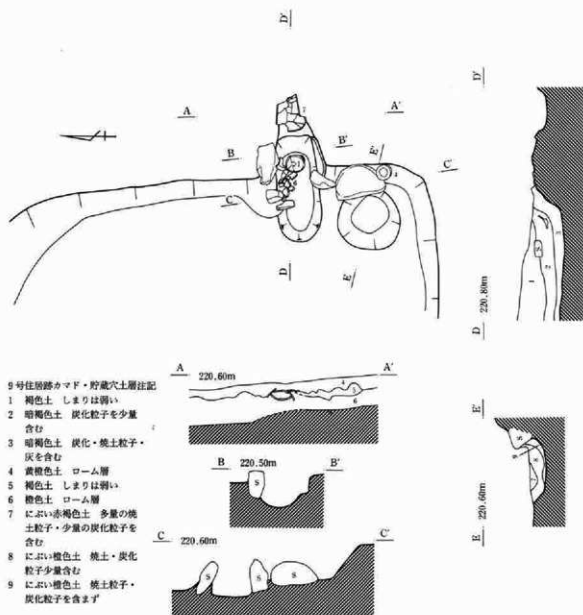
第235図 9号住居跡

若干低いが、ほぼ平坦である。

遺物出土状況 燃焼部から1の蓋が出土している他、構築材の石や、煙道部の礎等が出土している。

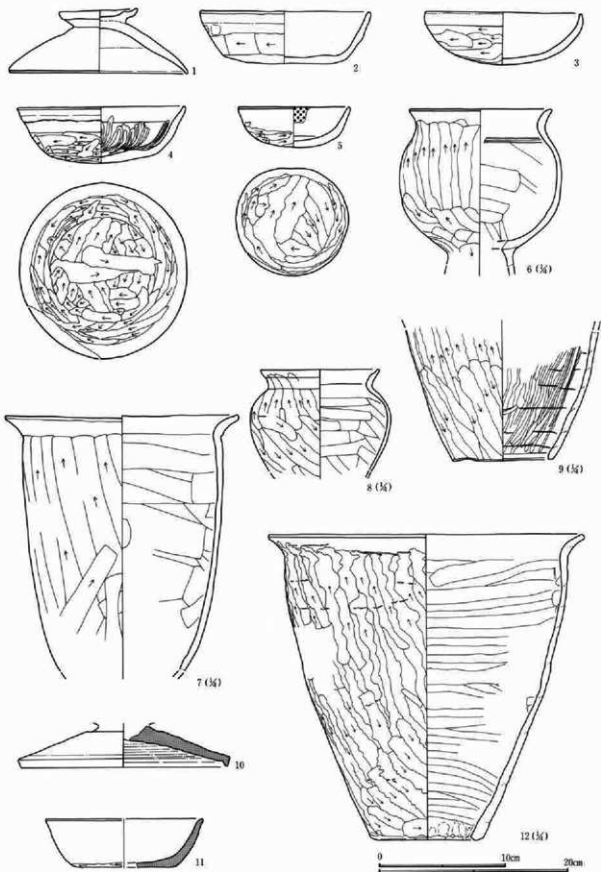
出土遺物 土器は、土師器環13点、蓋1点、壺10点、小型壺1点、台付壺15点、甗21点、須恵器蓋3点、計64点が出土している。他に縄文土器が42点、銅片等が14点出土している。

所見 出土遺物から、8世紀中葉から後半代の住居と考えられる。重複している1号住はカマド煙道部の構築材に石を使用しているが、9号住は土師器礎を使用しており、若干の差が見られる。



第236図 9号住居跡カマド

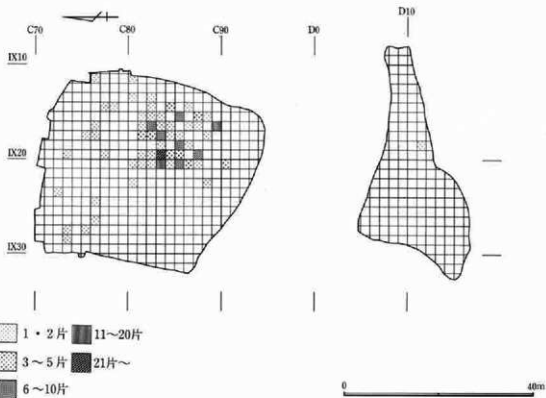
第IV章 下高瀬寺山遺跡



第237図 9号住居跡出土遺物

9号住居跡出土土器観察表

No	種別 器種	床高 (cm)	①口径②底径 ③高さ④残存				①色調(表) ②色調(裏) ③焼成 ④胎土	調 整	分 類	備 考
			法量							
1	土師器 蓋	4	① 14.2cm ② 4.4cm	③ 6.3cm ④ほぼ完形	①②橙 ③良好 ④普通 粗砂・礫・片岩を少量含む	縁部横ナデ 天井部外面削り内 面ナデ 外面一部黒変	II	器面摩滅 著しい		
2	土師器 坏	カマド	① 13.6cm ② 4.1cm	③ 9.5cm ④口〜底3/4	①橙 ②明赤黒 ③良好 ④普通 粗砂を含む	口縁部横ナデ 体〜底部外面削り り内面ナデ	I 2	器面摩滅 2 著しい		
3	土師器 坏	13	① 12.4cm ② — ③ 4.1cm	③ — ④ほぼ完形	①橙 ②にぶい橙 ③良好 ④普通 粗砂・礫を少量含む	口縁部横ナデ 体〜底部外面削り り内面ナデ	1	器面摩滅 1 著しい		
4	土師器 坏	9	① 12.3cm ② 4.5cm	③ 8.5cm ④ほぼ完形	①②にぶい黄橙 ③良好 ④普通 粗砂・礫・片岩・パミスを含む	口縁部横ナデ 体〜底部外面削り り内面ナデ後放射状蓋跡	1 2			
5	土師器 坏	9	① 8.8cm ② — ③ 3.2cm	③ — ④ほぼ完形	①にぶい黄橙 ②にぶい橙 ③良好 ④普通 粗砂・礫・片岩を少量含む	口縁部横ナデ 体〜底部外面削り り内面ナデ 外面一部黒変	I 2	口縁部内 面僅け付		
6	土師器 台付壺	カマド	① 15.3cm ② — ③ —	③ — ④口〜底3/4	①②にぶい橙 ③良好 ④粗 粗砂・礫・片岩を含む	口縁部横ナデ 胴部外面削り内 面ナデ	V	外面一部 黒変		
7	土師器 壺	カマド 煙道部	① 24.8cm ② — ③ —	③ — ④口〜胴3/4	①②にぶい橙 ③良好 ④普通 粗砂・礫を含む	口縁部横ナデ 胴部外面削り内 面ナデ	III	外面一部 黒変		
8	土師器 台付壺	17	①(12.6cm) ② — ③ —	③ — ④口〜胴1/2	①②にぶい黄橙 ③良好 ④普通 細砂・粗砂を含む	口縁部横ナデ 胴部外面削り内 面ナデ	V	外面一部 黒変		
9	土師器 瓶	12.5	① — ② — ③ —	② 10.6cm ③ 胴〜底部	①②にぶい橙 ③良好 ④普通 粗砂・礫・片岩・雲母含む	胴部外面削り内面ナデ後縦方向 蓋跡	VII	外面一部 黒変		
10	須恵器 蓋	34	①(16.3cm) ② — ③ —	③ — ④天井〜端部1/4	①灰白 ②還元焰良好 ③細 細砂を僅かに含む	ロクロ調整	II			
11	須恵器 坏	3.5	①(12.4cm) ② 3.8cm ③ —	②(8.2cm) ③口〜底片	①灰白 ②灰 ③還元焰良好 ④普通 粗砂を少量含む	ロクロ調整(右) 底部回転痕あり	I			
12	土師器 瓶	カマド 煙道部	① 34.0cm ② 32.3cm	③ 12.0cm ④口〜底1/2	①にぶい橙 ②橙 ③良好 ④普通 粗砂・礫・片岩を含む	口縁部横ナデ 胴部外面削り内 面ナデ 底端部調整	VII 1	外面一部 黒変		

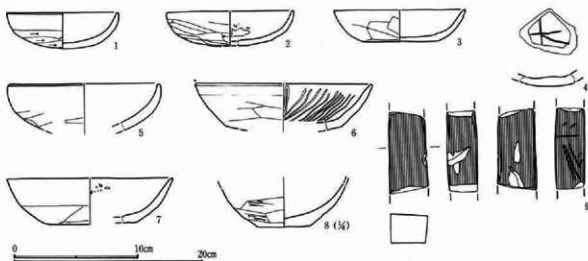


第236図 遺構外遺物出土状況

(3) 遺構外出土遺物

遺構外からも遺物が出土している。分布をみると、北側調査区の中央やや南東寄りから多く出土しており、遺構の分布とややずれている。

土器は、土師器環207点、壺102点、台付壺1点、鉢2点、甕4点、計316点、須恵器環1点、蓋2点、甕6点、瓶1点、計10点、総計326点が出土している。埴輪は、円筒埴輪が2点出土している。石製品は砥石1点が出土している。



第239図 遺構外出土遺物

遺構外出土土器観察表

No	種別 器種	出土 位置	流量 ①口径②底径 ③高さ④残存	①色調(表) ②色調(裏) ③焼成 ④胎土	調 整	分類	備 考
1	土師器 環	C74IX16	① 9.0cm ② - ③ 2.8cm ④口～底3/4	①②にふい黄橙 ③良好 ④普通 粗砂を含む	口縁部横ナデ 体～底部外面削り 内面ナデ 口縁部内面煤付着	I 1	外面一部 黒変
2	土師器 環	C84IX20	①(10.2cm) ② - ③ 2.7cm ④口～底1/4	①②明黄褐 ③良好 ④普通 粗砂を微量含む	口縁部横ナデ 体～底部外面削り 内面ナデ	I 1	内面一部 煤付着
3	土師器 環	C76IX12	①(10.6cm) ②(6.6cm) ③ 2.5cm ④口～底1/4	①にふい黄橙 ②にふい黄 ③良好 ④普通 粗砂を微量含む	口縁部横ナデ 体～底部外面削り 内面ナデ	I 3	内面一部 煤付着
4	土師器 環	C81IX16	① - ② - ③ - ④底部片	①②にふい橙 ③良好 ④普通 粗砂を少量含む	底部外面削り内面ナデ 底部内面線刻あり	I	
5	土師器 環	C85IX18	①(12.0cm) ② - ③ - ④口～体1/2	①②にふい黄橙 ③良好 ④普通 粗砂を微量含む	口縁部横ナデ 体～底部外面削り 内面ナデ	I 1	底部外面 黒変
6	土師器 環	C85IX18	①(14.2cm) ②(9.3cm) ③ - ④口～底1/4	①②にふい黄橙 ③良好 ④普通 粗砂を少量含む	口縁部横ナデ 体～底部外面削り 内面ナデ後放射状彫り	I 2	
7	土師器 環	C82IX16	①(13.2cm) ②(7.6cm) ③ - ④口～底1/3	①②橙 ③良好 ④普通 粗砂を含む	口縁部横ナデ 体～底部外面削り 内面ナデか 器底摩滅著しい	I 3	内面一部 煤付着
8	土師器 壺	C83IX19	① - ② 5.7cm ③ - ④胴～底部	①②にふい赤褐 ③良好 ④普通 粗砂を含む	胴～底部外面削り内面ナデ	III 1	

遺構外出土土器観察表

No	器 種	出土位置	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	残存状況	石 材	特 徴
9	砥 石	表掘	[6.4]	3.1	2.3	[90]	1/2	ダイサイト	西面に研ぎ面

第5節 時期不明・その他

出土遺物が非常に少なく、時期の限定できない土坑・集石が検出されている。

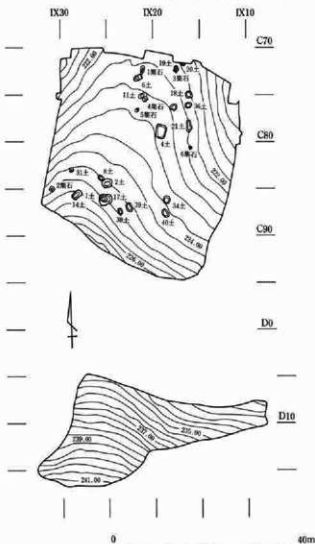
土坑

①分布 北側調査区の北側中央部と南側やや西寄りの2カ所に集中している。北側から9基、南側から10基検出されている。

②平面形態 平面形態は、円形が3基、楕円形が7基、隅丸長方形が8基、不整形が1基となっており、楕円形と隅丸長方形が多くなっている。

③規模 長径が0.76~2.78m平均1.71m、短径が0.60~2.34m平均1.28m、深さが16~99cm平均57cm、面積が0.3~5.0m²平均1.9m²となっている。

④時期 出土遺物がほとんどないため時期は不明であるが、覆土や他の遺構から縄文時代になるのもあると考えられる。



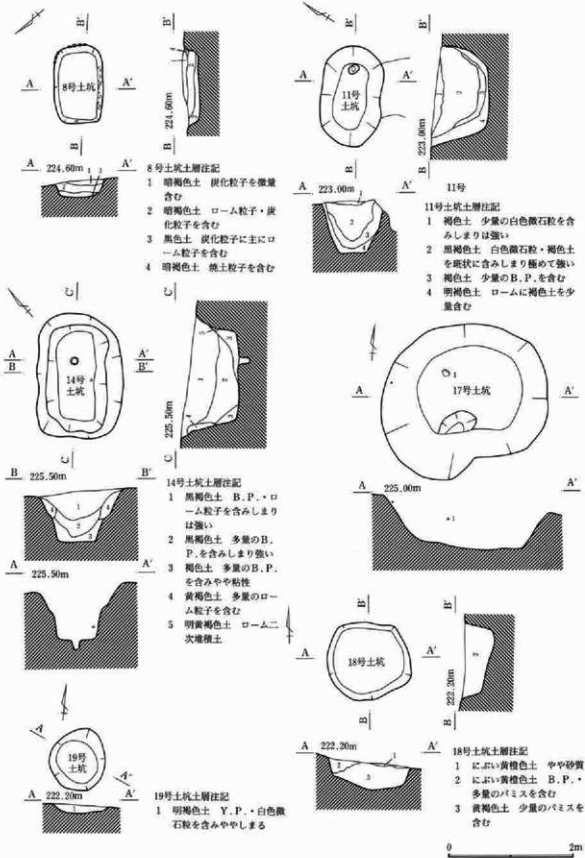
第240図 時期不明遺構位置図

時期不明土坑一覧表

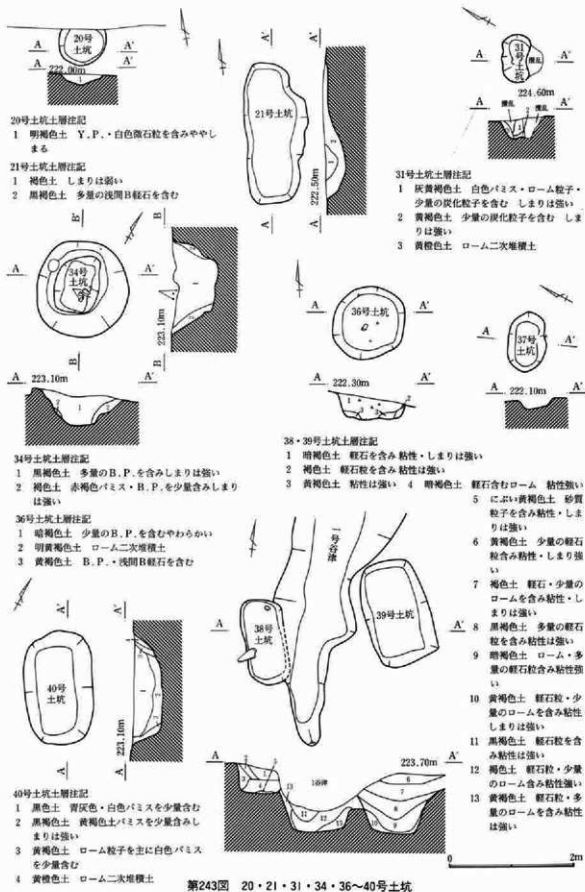
No	位 置 (Gr)	重複関係	平面形態	規模 (m)	深さ (cm)	面積 (m ²)	主軸方位	備 考
1	C85-86-IX25	17号土坑より新	隅丸長方形	1.50×1.20	32	1.6	N-55°-W	
2	C83-84-IX24-25	なし	隅丸長方形	2.10×1.58	99	2.7	N-81°-E	
4	C78-79-IX18-19	なし	隅丸長方形	2.90×1.95	26	5.4	N-8°-E	
6	C72-73-IX21	なし	楕円形	1.69×1.06	33	1.4	N-65°-E	
7	C76-IX17-18	なし	円形	1.40×1.32	48	1.3	N-47°-E	
8	C83-84-IX26-27	4号住居より新	楕円形	2.56×2.05	94	4.0	N-49°-W	
11	C71-75-IX20-21	4号集石より新	隅丸長方形	1.58×0.98	94	1.3	N-64°-E	
14	C85-86-IX27-28	なし	楕円形	1.94×1.38	95	2.4	N-43°-E	
17	C85-86-IX24-25	1号土坑より古	楕円形	2.78×2.34	88	5.0	N-47°-E	
18	C74-75-IX15-16	なし	楕円形	1.40×1.25	53	1.3	N-73°-E	
19	C71-72-IX17	なし	楕円形	1.00×0.89	16	0.7	N-22°-E	
20	C71-IX16-17	なし	楕円形	0.80×[0.60]	20	0.3	N-70°-E	
21	C77-78-IX15-16	なし	隅丸長方形	2.22×0.92	32	1.8	N-1°-W	
23	C82-83-IX28-29	なし	不整形	0.76×0.66	36	0.3	N-58°-E	
34	C85-86-IX18-19	なし	円形	1.77×1.50	75	1.8	N-52°-W	
36	C75-76-IX15-16	なし	円形	1.24×1.12	42	1.0	N-70°-E	
38	C87-IX23	1号谷津より新	隅丸長方形	1.36×0.64	48	0.8	N-15°-E	
39	C86-87-IX23	32号土坑より古	隅丸長方形	1.70×1.04	78	1.5	N-22°-W	
40	C87-88-IX18-19	なし	隅丸長方形	1.80×1.08	48	1.7	N-32°-W	



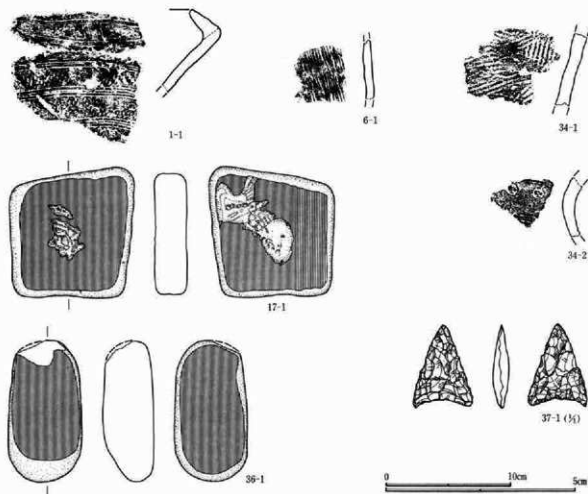
第241図 1・2・4・6・7号土坑



第242図 8・11・14・17~19号土坑



第243図 20・21・31・34・36~40号土坑



第244図 1・6・17・34・36・37号土坑出土遺物

土坑出土土器観察表

No	器種 部位	①色調(表) ④胎土	②色調(裏)	③焼成	法 調 整	文 様 要 素	分 類	備 考
1	深鉢 1 口縁部	①②にふい黄褐色 ④普通 粗砂・泥を少量含む	③良好		器厚8~9mm 内面磨き	R L 縄文施文後、半截竹管状工具による平行沈線	IV 2	
6	深鉢 1 胴部	①②にふい赤褐色 ④粗 粗砂・泥・片岩をやや多く含む	③良好		器厚5~6mm 内面ナデ	棒状工具による縦方向沈線		
34	深鉢 1 胴部	①にふい黄褐色 ④普通 粗砂・泥・繊維を少量含む	②にふい黄褐色 ③良好		器厚10~12mm 内面磨き	L R 縄文横位・斜位施文	II	縦線土器
34	深鉢 2 胴部	①②浅黄 ④普通 粗砂をやや多く含む	③良好		器厚8~11mm 内面磨き	半截竹管状工具による平行沈線 円形竹管状工具による刺突文	III 1	

土坑出土石器観察表

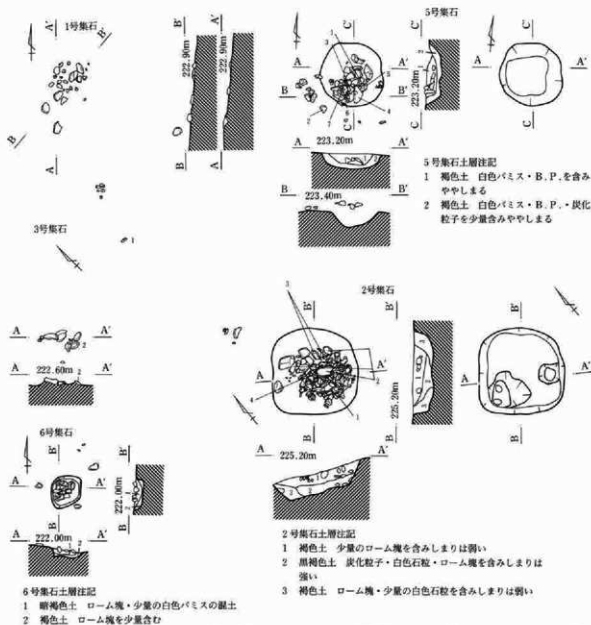
No	器種	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	残存状況	石 材	特 徴
17-1	磨石	10.3	10.0	2.5	524	完形	デイサイト	両面に磨面・敲打痕
36-1	磨石	11.3	5.7	4.1	[423]	ほぼ完形	砂岩	両面に磨面
37-1	石鏃	2.2	1.6	0.4	1.1	完形	チャート	平基無茎鏃か

集石遺構

集石遺構は6基検出されている。北側調査区の北側中央部に5基と南東隅に1基離れて存在している。縄文時代の遺構の可能性もあるが、土器が出土していないため正確な時期は不明である。

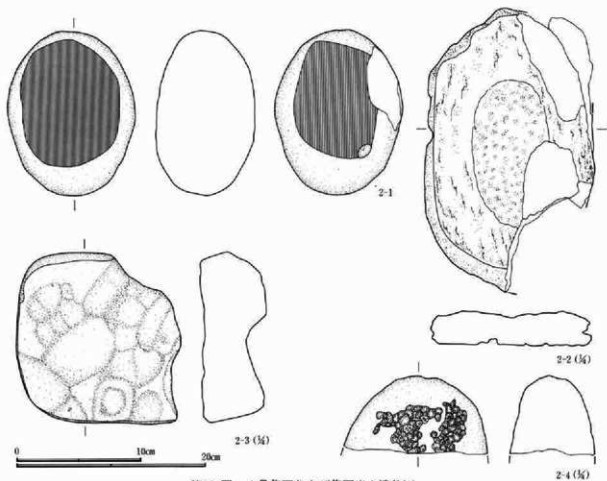
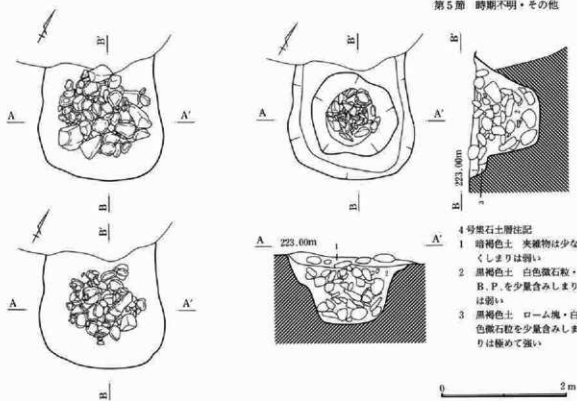
集石遺構一覧表

No	位 置 (Gr)	重複関係	平面形態	規模 (m)	深さ (cm)	主軸方位	備 考
1	C72-IX20-21	なし	楕円形	1.15×0.63		N-25°-E	掘り方不明
2	C84+85-IX30+31	なし	楕丸方形	1.54×1.50	68	N-90°-W	
3	C72-IX17	なし	楕円形	0.69×0.35		N-45°-W	掘り方不明
4	C75-IX20-21	11号土坑より古	楕丸長方形	2.00×1.80	110	N-57°-E	
5	C76-IX21	なし	円形	1.08×1.00	25	N-57°-E	
6	C80-IX15-16	なし	楕円形	0.60×0.48	16	N-38°-E	

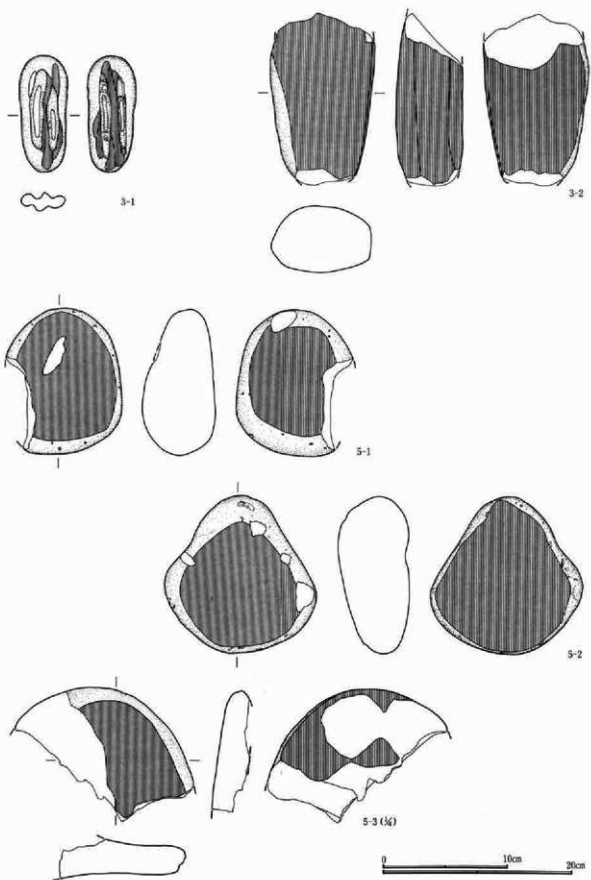


第245図 1～3・5・6号集石

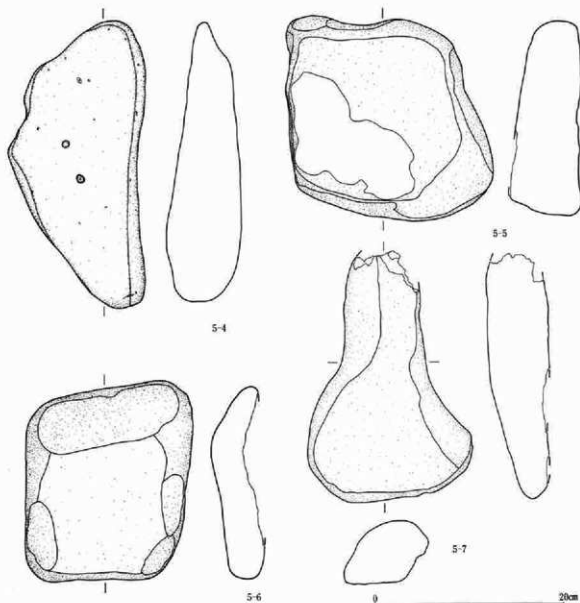
0 2m



第246図 4号集石および集石出土遺物(1)



第247図 集石出土遺物(2)



第248図 集石出土遺物(3)

集石出土石器観察表

No.	器種	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	残存状況	石材	特徴
2-1	磨石	13.0	10.2	7.8	[1272]	ほぼ完形	粗粒安山岩	両面に磨面
2-2	台石	[29.9]	18.0	3.7	[2280]	4/5	緑色片岩	表面中央に鋭打痕
2-3	台石	18.0	17.6	7.1	3320	完形	粗粒安山岩	表面に大型の鋭打痕か
2-4	台石	[8.3]	[15.3]	[9.0]	[1263]	1/2	粗粒安山岩	表面に鋭打痕
3-1	砥石	9.2	3.9	1.5	52	完形	砂岩	両面に研磨痕
3-2	磨石	[13.6]	8.4	5.4	[669]	3/4	グイサイト	両面・片側面に磨面
5-1	磨石	11.5	[9.4]	5.7	[760]	4/5	粗粒安山岩	両面に磨面
5-2	磨石	12.5	12.1	5.6	875	完形	粗粒安山岩	両面に磨面
5-3	石皿	[14.2]	[19.0]	4.1	[888]	1/3	かん岩	両面に使用痕
5-4	台石	14.5	30.5	8.0	[4170]	ほぼ完形	粗粒安山岩	
5-5	台石	22.1	21.0	7.7	[6150]	ほぼ完形	粗粒安山岩	
5-6	台石	18.0	21.0	5.6	[3300]	ほぼ完形	粗粒安山岩	
5-7	台石	[26.4]	17.4	6.5	[2840]	ほぼ完形	粗粒安山岩	

第V章 下高瀬前田遺跡

第1節 古墳～奈良時代

奈良時代の竪穴住居跡1軒、性格不明の特殊遺構2基が検出されている。

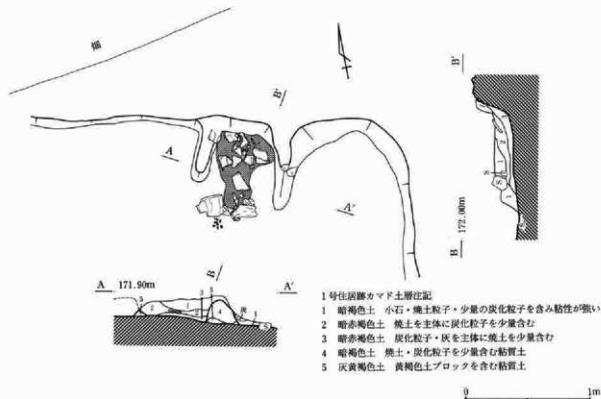
(1) 竪穴住居跡

1号住居跡

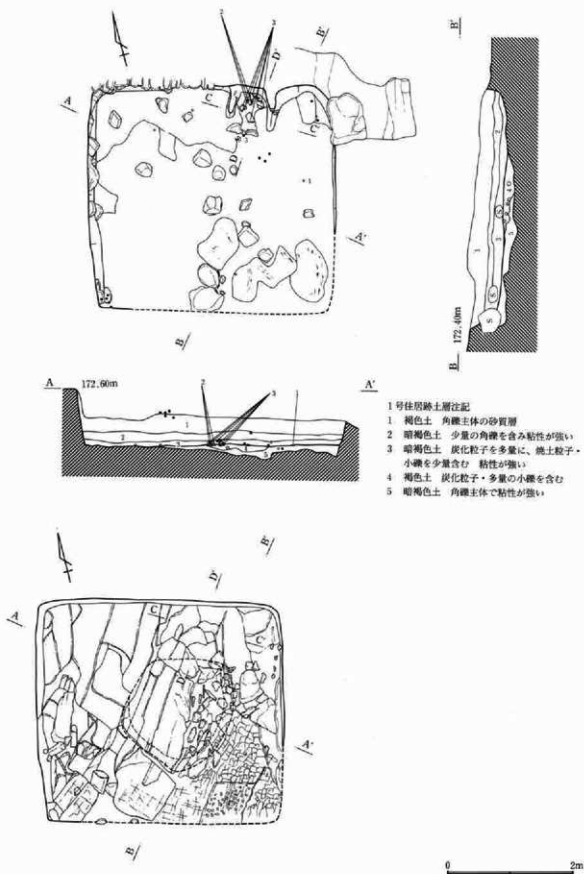
位置 B34～36-VI85～87Gr **重複** なし **平面形態** 隅丸方形 **規模** 3.94×3.54m
壁高 92cm **面積** 13.7m² **床面積** 12.3m² **主軸方位** N-75°-W **柱穴・貯蔵穴** なし
床面 貼床は全面ではなく一部地山の岩盤が露呈している部分がある。やや凹凸があるが水平な床面である。
掘り方 地山の岩盤を掘ってつくられており、壁にも岩盤が露呈している部分がある。住居中央やや東寄りに径1.78m深さ20cmの土坑状の掘込みが検出されており、床下土坑と考えられる。
遺物出土状況 出土量は少なく、カマド内とその周辺に集中している。

カマド

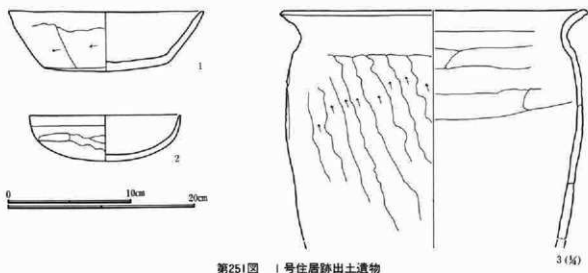
位置 北壁東寄り **主軸方位** N-69°-W **規模** 全長79cm 幅75cm
構築 暗褐色土で袖を構築しており、袖石は出土していないが前面から天井石と思われる破片が出土している。火床面は床面とほぼ同レベルでよく焼けている。煙道部は削平されていると考えられる。
出土遺物 土器は、土師器坏28点、埴8点、甕40点、器種不明1点、計77点出土している。
所見 出土遺物から8世紀前半から中葉の住居と考えられる。



第249図 1号住居跡カマド



第250図 1号住居跡



第251図 1号住居跡出土遺物

3(5)

1号住居跡出土土器観察表

No	種別 器種	床高 (cm)	法量	①口径②底径 ③高さ④残存	①色調(表) ②色調(裏) ③焼成 ④胎土	調 整	分 類	備 考
1	土師器 杯	0	① 15.5cm ③ 4.7cm	② 10.0cm ④ほぼ完形	①明赤褐 ②橙 ③良好 ④普通 粗砂を少量含む	口縁部横ナデ 体~底部外面裏削り 内面ナデか		器面摩滅 著しい
2	土師器 杯	カマド	①(12.0cm) ③ 3.6cm	② - ④口~底1/4	①②橙 ③良好 ④粗 粗砂・塵を少量含む	口縁部横ナデ 体~底部外面裏削り 内面ナデか		器面摩滅 著しい
3	土師器 釜	カマド	①(24.3cm) ③ -	② - ④口~胴1/2	①明赤褐 ②にぶい赤褐 ③良好 ④粗 粗砂・塵・片岩を多く含む	口縁部横ナデ 胴部外面裏削り内面 ナデ		

(2) 特殊遺構

南側調査区の斜面部分から、礫を多量に使用した遺構が2基検出されている。礫の配置は不規則で性格は不明である。

1号特殊遺構

位置 B80~82-VII 0~3Gr 重複 なし 規模 6.78×5.94m 深さ 18cm

主軸方位 N-59°-E

概要 長さ10~50cmの礫が楕円形の範囲で検出されているが、大きさ・配置ともに不規則であり、部分的に礫の多い場所や、少ない場所がある。特に北西部の1.8×1.7m範囲には、比較的大きな礫が集中している。

2号特殊遺構

位置 B73~77-VI92~97Gr 重複 なし 規模 [10.41]×6.24m 深さ 16cm

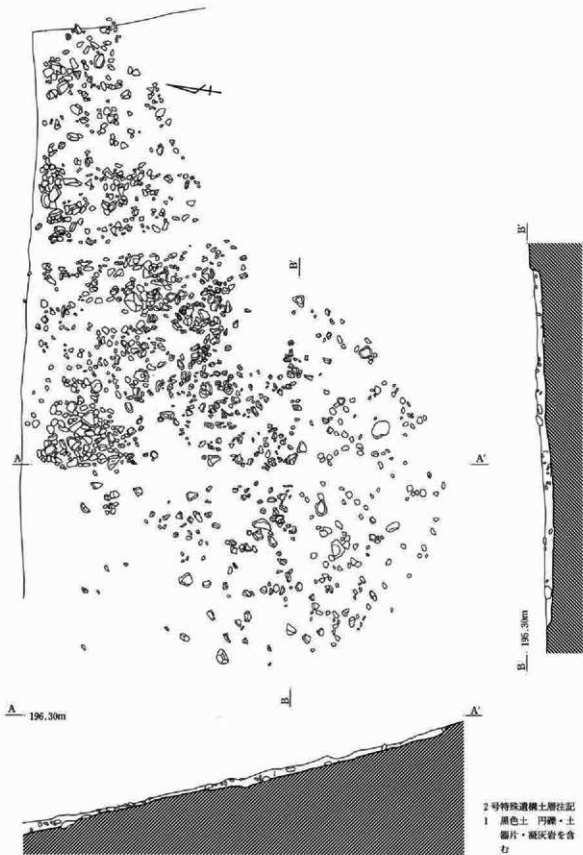
主軸方位 N-42°-E

概要 長さ5~30cmの礫が楕円形のかかなり広い範囲で検出されており、北側の調査区外にさらに続いている。

1号特殊遺構同様礫の分布に濃淡があり、北東部に多く南西部に少なくなっている。



第252図 1号特殊遺構



第253図 2号特殊遺構

0 2m

第2節 近世以降

(1) 墓

近世の墓石が出土している。

1号墓

位置 B47・48-VII1・12Gr 重複 なし 規模 南北1.03m東西1.40mの範囲

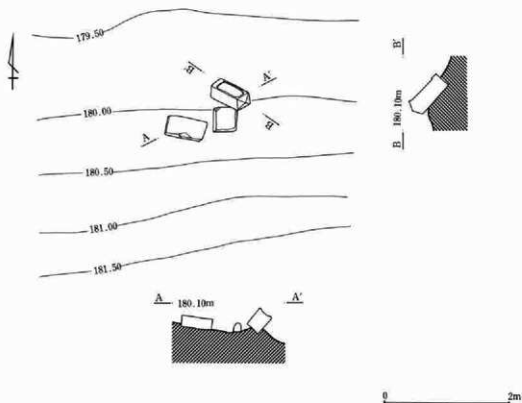
概要 61×27×21cmの墓石が、台座と考えられる60×30×8cmと41×38×15cmの石と近接して出土しており、台座の上に墓石が乗っていたものが倒れたと考えられ、出土地点から近い場所に立っていたと推定できるが、墓石下部や周辺から墓壇は検出されていない。

墓石 銘のある墓石1点と、台座と考えられる石が2点出土している。1の墓石は頂部が四角垂形になっており、正面に「滋相空性信士」、右側面に「天明八戊申歲」、左側面に「五月初七旦」の銘があるため、天明8（1788年）年のものであることがわかる。裏面・底面には鑿状工具痕がある。2の石は全面に鑿状工具痕があるが、側面1面は中央が浅く抉れている。3の石も全面に鑿状工具痕があるが、2よりも粗い仕上げである。

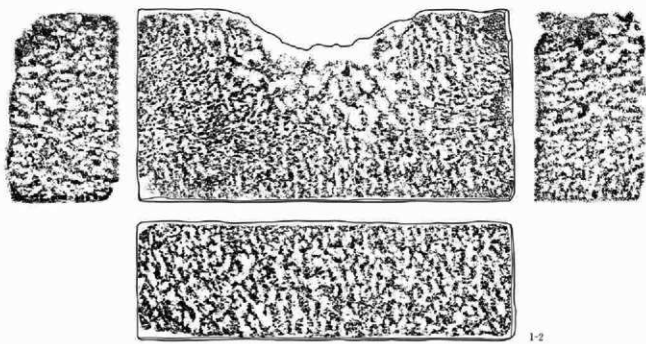
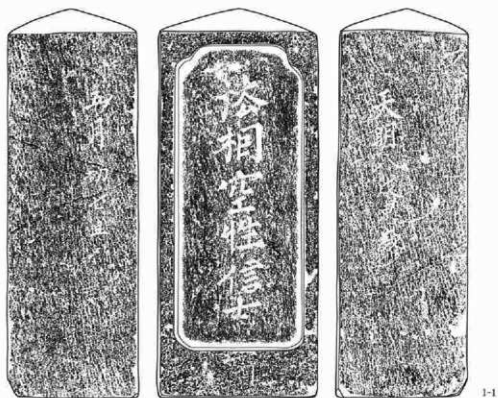
3号墓

位置 B46-VII2Gr 平面形態・規模 不明

概要 1号墓の東に陶器が1点出土し墓壇の可能性があると考えられたため、掘り下げたが明確な掘り込みは検出されなかった。1は陶器であるが器種不明である。

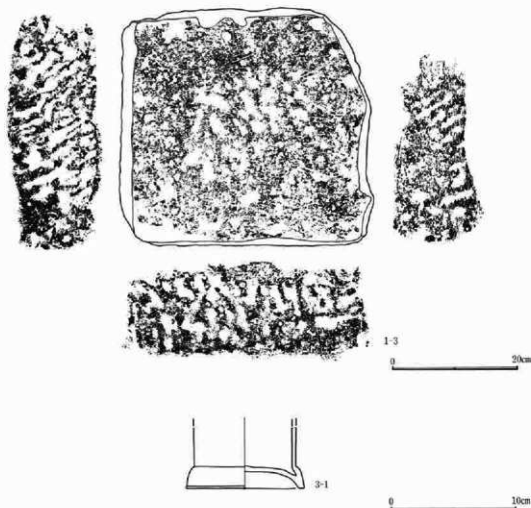


第254図 1号墓



0 20cm

第255図 1号墓出土遺物



第256図 1・3号墓出遺物

1号墓出土石製品観察表

No	種類	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (kg)	石 材	特 徴
1-1	基石	61.1	26.6	20.8	63.2	牛伏砂岩	正面・両側面に鉋あり(本文参照) 裏面・底面に鑿状工具痕あり 他は粗い研磨
1-2	基石	60.2	30.4	7.8	54.8	牛伏砂岩	全面に鑿状工具痕あり
1-3	基石	40.8	37.5	15.3	44.2	流紋岩質凝灰岩	全面に鑿状工具痕あり

3号墓出土土器観察表

No	種 別 器 種	法量	①口径②底径 ③高さ④残存	①色調(表) ②色調(裏) ③焼成 ④胎土	調 整	分 類	備 考
3 1	不明	①— ⑤—	②(9.4cm) ④底部片	①②淡黄緑 ③良好 ④普通 粗砂を含む	クロロ調整		

(2) 近世品

位置 A48~59-V65~73, A78~97-V51~69Gr 重複 なし

1号 規模 [14.0]×20.5m 主軸方位 N-6°-W 2号 規模 14.9×13.0m 主軸方位 N-4°-E

3号 規模 16.3×[15.0]m 主軸方位 N-2°-E 4号 規模 12.5×12.8m 主軸方位 N-78°-W

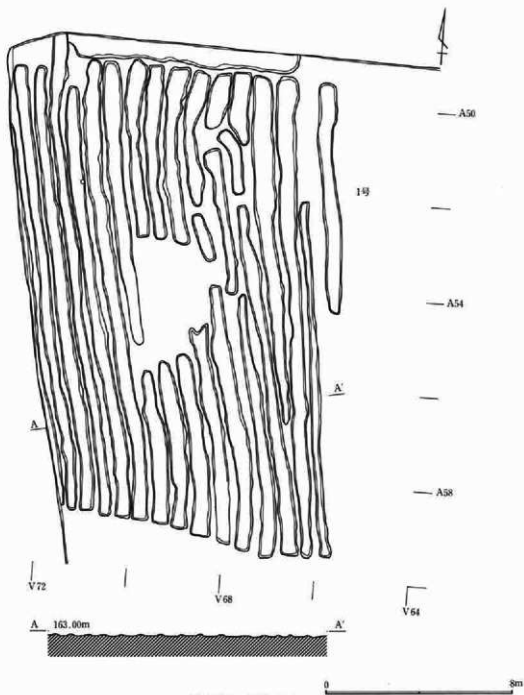
5号 規模 [11.5]×8.7m 主軸方位 N-80°-W 6号 規模 15.6×14.5m 主軸方位 N-69°-W

7号 規模 [18.9]×18.0m 主軸方位 N-73°-W

深さ 5~16cm

概要 丘陵下の低地部分に位置する北側調査区から検出された。浅間A軽石により埋没しており、これにより廃棄されたと言える。畑は計7枚検出され、6枚が南部に、1枚が北端部に位置しており、その間は約30mある。西側と北側は調査区外にさらに続いている。7枚中柵が南北方向を向くものが2枚(2・3号)、東西方向を向くもの5枚(1・4~7)となっている。

出土遺物 陶器碗の破片が1点出土しているだけである。



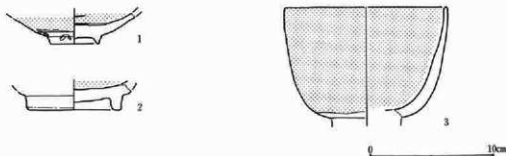
第257図 近世遺(1)



第258图 近世遺(2)

(3) 遺構外出土遺物

遺構外からも少量の遺物が出土しており、軟質陶器内耳鍋2点、陶器碗5点、陶器壺4点、陶器壺2点、陶器播り鉢1点、磁器碗6点、計20点が出土している。



第259図 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物観察表

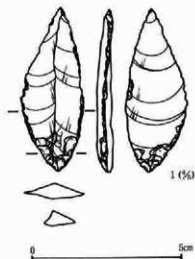
No	種別	出土位置	法量	①口径②総径 ③高さ④残存	①色調(表) ②色調(裏) ③焼成 ④胎土	調	整	分類	備考
1	陶器	表探	①—	②3.9cm ③— ④底部片	素地 灰白 胎 灰白 ③良好 ④細 夾雑物含まず	ロクロ調整	削り出し高台 内面 重ね焼きあり		
2	陶器	表探	①—	②7.1cm ③— ④底部	素地 灰白 胎 暗灰黄 ③良好 ④細 夾雑物含まず	ロクロ調整	削り出し高台		
3	陶器	表探	①(12.8cm)	②— ③— ④口縁部片	素地 灰白 胎 灰白 ③良好 ④細 夾雑物含まず	ロクロ調整	削り出し高台 貫入 あり		

補遺

すでに報告書が刊行されている内匠諏訪前遺跡の弥生時代の土坑から出土し、整理作業以前に紛失していた、ナイフ形石器1点が見つかったためここに掲載する。

完形で、全長5.4cm、幅2.2cm、厚さ0.5cm、重量3.8gである。石材は黒曜石を使用している。

石刃素材で右側縁と左側縁下半分の背面に調整を加えており、基部は両面に調整を加えている。



第260図 内匠諏訪前遺跡出土尖頭器実測図

第VI章 調査の成果と問題点

第1節 旧石器時代～近世にかけての遺構・遺物について

ここでは、通称「離れ山」丘陵上の他の遺跡との比較も含めて、各時代の集落における時期毎の変遷を追ってみることにする。土器は、副葬品として埋納する等の特殊な用途以外は生活用具であると考えられるため、遺構の有無にかかわらず、土器が出土すれば何らかの居住活動が行われていたとする。

(1) 旧石器時代

旧石器時代～縄文時代草創期にかけては、内匠日向周地遺跡から尖頭器1点が、下高瀬寺山遺跡から、尖頭器4点、細石刃核2点、細石刃3点、石核1点、剥片2点が出土している。ブロックは検出されていないため居住活動の痕跡は見られない。出土状況を見ると、黒色土中や縄文時代の遺構覆土からのものが多く原位置をとどめているものはほとんど無いため遺跡の性格については不明であるが、尖頭器が4点出土していることや、舌状台地状の小規模な張り出し上に位置していることなどから、狩猟地であった可能性も考えられる。

(2) 縄文時代

縄文時代の遺構は、内匠日向周地遺跡で住居状遺構2基と土坑4基が、下高瀬寺山遺跡で竪穴住居7軒と土坑16基が検出されている。以下、時期毎の変遷を追ってみることにする。

①早期 内匠日向周地遺跡では、押型文土器が出土した住居状遺構が1基検出されているが、炉・柱穴等はなく、竪穴住居の可能性は低いものである。押型文土器は12点出土しており、他に1号谷津状遺構から1点、遺構外から3点、計16点の土器が出土している。下高瀬寺山遺跡からは押型文土器が3点出土している。丘陵上の他の遺跡をみても押型文土器の出土は少なく、内匠諏訪前遺跡・内匠日影周地遺跡^①で11点、下高瀬上之原遺跡^②で1点出土しているだけである(内匠諏訪前・内匠日影周地遺跡では押型文土器の他に燃糸文系土器20点、沈線文土器6点が出土している)。このことは、内匠日向周地遺跡が丘陵上におけるこの時期の居住活動の中心であることを示しているとともに、丘陵上では頻繁なあるいは長期に亘る居住活動はなされず、短期間で移動していることを表していると言えよう。

②前期 前期前半の遺構・遺物は、丘陵上の遺跡からはほとんど出土しておらず、人々の居住活動はなされていなかったと考えられる。前期中葉の黒浜式期になると、遺構は検出されていないが、内匠日向周地遺跡で31点、下高瀬寺山遺跡で19点の土器が出土している。丘陵上における他の遺跡をみると、当遺跡の西に位置する下高瀬上之原遺跡で土坑1基が検出され、31点の土器が出土し、北から東にかけて存在する内匠諏訪前・内匠日影周地遺跡では、竪穴住居2軒と土坑3基が検出され、遺構外から74点の土器が出土している。また更にその東に位置する内匠上之宿遺跡^③でも、遺構は検出されていないが土器は100点以上出土している。このように黒浜式期になると、丘陵上の各遺跡から遺構・遺物が検出されるようになるが、遺構・遺物とも少なく、丘陵上に早期同様この時期も人々は丘陵上で居住活動はしたがきわめて短期間であったと想定できる。

前期後半諸磯a式期は、内匠日向周地遺跡で住居状遺構1基、土坑2基が検出され、土器は79点出土している。下高瀬寺山遺跡では、土坑1基が検出され、土器は38点出土している。丘陵上では、他に内匠日影周

地・内匠諏訪前遺跡から竪穴住居跡が2軒、土坑が2基検出されており、他に遺構外から27点の土器が出土している。下高瀬上之原遺跡では竪穴住居が1軒検出され、土器が約30点出土している。この時期も遺構・遺物ともに少なく、黒浜期同様短期間の居住活動であったと言える。

諸磯b式期は内匠日向周地遺跡で土坑1基が検出され、土器は100点出土している。下高瀬山遺跡では、竪穴住居7軒、土坑15基が検出され、土器も総計で4,410点、遺構外だけでも600点の土器が出土している。丘陵上の他の遺跡を見ると、内匠諏訪前遺跡から諸磯b式期の竪穴住居跡1軒が検出されているが、他に遺構は検出されておらず、遺構外出土遺物も14点と少ない。

下高瀬山遺跡の竪穴住居7軒は、北側調査区北東隅から中央部にかけて楕円形に分布しており、中心には住居は無い。また、6・7・12号住、8・10・11号住が近接もしくは重複しており、小群を形成している。4号住のみ1軒単独で存在している。小群内の住居はいずれも近接し、小群内での同時存在は考えにくい。よって竪穴住居は多くても1時期に3軒、最低3時期に分かれる可能性が高いと言える。

諸磯c式期は、内匠日向周地遺跡で土器が58点、下高瀬山遺跡で土器が72点出土しているだけで遺構は検出されていない。丘陵上の他の遺跡でも内匠諏訪前・内匠日影周地遺跡で20点、内匠上之宿遺跡で数点の土器が出土しているだけで、居住活動はごく短期間であったと考えられる。

③前期末～後期 前期末～中期初頭は、内匠日向周地遺跡で土器が67点、下高瀬山遺跡で土器が63点出土しているが、遺構は検出されていない。丘陵上の他の遺跡を見ると、内匠諏訪前遺跡からは土坑が12基検出され、遺構外出土遺物も380点と多い。内匠上之宿遺跡からも、土坑1基、埋設土器1基が検出され、遺構外出土遺物は247点出土している。このためこの時期の分布の中心がこれらの遺跡にあり、竪穴住居跡は検出されていないが、比較的頻繁な居住活動がなされていたと考えられる。

中期中葉は、内匠日向周地遺跡で土器20点、下高瀬山遺跡で土器9点が出土しているだけである。丘陵上の他の遺跡では、下高瀬上之原遺跡で土器19点、内匠上之宿遺跡で竪穴住居跡1軒、土器407点が検出されている。この時期も、住居は検出されているが、遺構・遺物ともに少なく、短期間の居住活動を示している。

中期後半から後期にかけては遺構は検出されず、土器が、内匠日向周地遺跡で19点、下高瀬山遺跡で5点出土しているだけである。内匠上之宿遺跡では、中期後半～後期前半にかけての竪穴住居跡3軒、土坑100基以上が検出され、遺構外からも40,000点以上の土器が出土しており、丘陵上の他の遺跡に比べ圧倒的に多くなっている。これは、長期にわたって連続してあるいは短い断絶期をさきんで断続的に居住活動がなされた結果と考えられる。しかしながら、丘陵上の他の遺跡では、土器が少量出土しただけで、他の時期に比べ極端に少なくなっており、内匠上之宿遺跡以外ではほとんど居住活動はなされていなかったと考えられる。

(3) 弥生時代

弥生時代は、内匠日向周地遺跡は遺構は無く、土器が、中期12点、後期13点出土している。下高瀬山遺跡では、後期の竪穴住居が1軒検出され、土器は中期7点、後期76点、時期不明42点が出土している。

①中期 内匠日向周地遺跡、下高瀬山遺跡とも遺構は無く、土器片が少量出土しただけである。丘陵上では、内匠日影周地遺跡で中期後半の竪穴住居1軒と中期初頭～後半の土坑数基が、内匠諏訪前遺跡で中期前半の土坑1基が、下高瀬上之原遺跡で中期後半の土坑7基が検出されている。遺構外出土遺物も、内匠諏訪前・内匠日影周地遺跡で239点、下高瀬上之原遺跡で596点となっており、更に調査区外に遺構のある可能性もあるため、この時期の居住活動の中心がこの3遺跡周辺にあったと考えられ、内匠日向周地・下高瀬山遺跡の土器はこれらの人々が残したものであろう。しかしながら、中期初頭から後半にわたっているため、

居住活動はそれほど頻繁なものではなく、短期間であったと考えられる。

②後期 下高瀬寺山遺跡で竪穴住居が1軒検出されている。内匠日向周地遺跡では土器片が少量出土しただけである。丘陵上では、内匠日影周地遺跡で樽式期の竪穴住居が12軒検出されており、また内匠上之宿遺跡から後期末～古墳時代初頭の赤井戸系の土器が出土した竪穴住居4軒が検出されている。下高瀬寺山遺跡の竪穴住居は出土遺物が少なく細かい時期は不明である。遺構外出土遺物も少なく調査区外に遺構のある可能性も低いと、非常に短期間の居住であったと考えられる。

(4) 古墳時代前期

内匠日向周地遺跡で竪穴住居1軒と土器が110点出土している。出土土器にはS字状口縁をもち胴部寛割り調整の台付甕があり、古墳時代前期末の住居と考えられる。丘陵上では、下高瀬上之原遺跡で竪穴住居4軒、内匠日影周地遺跡で竪穴住居2軒（1軒は不確実）と方形周溝墓1基が検出されているが、いずれも内匠日向周地遺跡の住居より古く、断絶期間がある。すなわちこの時期は丘陵上では内匠日向周地遺跡の1軒だけで、遺構外出土土器も少ないため、居住活動はきわめて短期間で終わったものと考えられる。

(5) 古墳時代後期

古墳時代後期は、内匠日向周地遺跡で竪穴住居が7軒検出されている。土器は、遺構内から1,254点、谷津状遺構から3,403点、遺構外から1,757点、計6,414点出土しており、頻繁な居住活動を示している。

7軒の竪穴住居は2つの群に別れ、調査区中央部に6軒、調査区東寄りに1軒となっている。出土遺物が少なくはつきりしない住居もあるが、遺物にはほとんど時期差は見られない。よって6軒の住居の前後関係および東側の1軒（9号住）との共存関係を考えるに当たって、遺物による時期区分が不可能であるため、住居の主軸方位により一部検討してみたい。子持村の黒井峯遺跡は火山灰により埋没し1時期の集落の様相が判明しているが、そこでは竪穴住居の主軸方位はほぼ同一である⁶⁴。また、内匠諏訪前遺跡では、カマド位置が同じ住居が同時存在している可能性が示唆されている⁶⁵。よって同時存在する住居の主軸方位は同一であることが考えられる。内匠日向周地遺跡では、主軸方位が北・東・西の3方向の住居が検出されているが、東は5・9号住、西は2号住で他は北である。同時存在の住居の主軸方位が同じだとすると、9号住と同時存在の可能性があるのは5号住となる。5・9号住は他にも、柱穴が無い、出土遺物が少ない等の類似点があるため、その可能性がより高くなっている。また、重複関係を見ると、5号住と6号住が重複しており主軸を北にもつ6号住より東にもつ5号住が新しくなっている。このことから、主軸を北にもつ住居より東にもつ住居の方が新しくなる可能性が指摘できる。また主軸を西にもつ2号住は、前後関係は不明であるが、他の住居と同時存在していないとすることができる。主軸を北にもつ4軒は同時存在していた可能性もあるが、いずれも近接しており、最も離れているものでも15m程である。前述の黒井峯遺跡や子持村の西組遺跡、淡川市の中筋遺跡等で、火山灰により埋没したこの時代の集落が検出されているが、そこでは、竪穴住居1軒と柴垣で囲まれた家屋群（平地式住居・平地式建物・高床式建物・家畜小屋等）が検出されている。例えば、黒井峯遺跡では、その範囲の面積は700～1,600㎡あり、竪穴住居間の距離は20～100m離れている⁶⁶。すなわち、竪穴住居1軒について、家屋群の存在するかなりの面積の土地が必要となる。4軒の住居をみると、南に位置する3・4号住の南側は調査区外になるが、すぐに谷津状遺構になると思われ、家屋群の広がる余地は少ない。また東西も谷津状遺構に近い。よってこの2軒に伴う家屋群は北側に広がる可能性が高く、他の住居と同時存在する可能性は低くなる。他の2軒も近接しているため、これも互いに同時存在する可能性

は低い。すなわち、この4軒はすべて同時存在していなかった可能性が高いと言える。つまり、内匠日向周地遺跡の古墳時代後期の集落は6期にわたっており、1時期には多くても2軒の住居しかなかった状況が想定される。

丘陵上の他の遺跡を見ると、内匠上之宿遺跡で14軒、内匠諏訪前遺跡で10軒、内匠日影周地遺跡で8軒、下高瀬上之原遺跡で26軒の竪穴住居が検出されており、丘陵上において居住活動の盛んな時期であると言える。遺構外出土土器も、内匠上之宿遺跡で1,500点以上、下高瀬上之原遺跡で古墳時代後期～奈良時代の土器が10,000点以上と多く、頻繁な居住活動を示している。各遺跡の住居は、内匠上之宿遺跡で5期以上にわたり1時期2～3軒、内匠諏訪前遺跡でも2軒ずつ3期以上、下高瀬上之原遺跡では6期以上にわたり1時期3～4軒の集落が想定されている¹⁰⁾。このように、古墳時代後期の集落は、竪穴住居1～4軒程度（調査区外の遺構の広がりをも考えると若干増える可能性はある）1単位で丘陵上に散在していた状況が想定できる。1～4軒1単位と非常に小規模に感じられるが、他の時代に比べれば規模は大きく、また比較的長期にわたって続いていたと言えよう。

(6) 奈良時代

奈良時代は、内匠日向周地遺跡で溝1条、下高瀬寺山遺跡で竪穴住居3軒、下高瀬前田遺跡で竪穴住居1軒が検出されている。丘陵上では、下高瀬上之原遺跡で竪穴住居12軒が検出されているが、他には検出されていない。下高瀬寺山遺跡では1軒はカマドもなく一般的な住居とは言えず、他の2軒は重複しているため、1軒ずつの2期に分かれると言える。調査区外に遺構の存在する可能性もあるが、地形を見ると多数の住居が存在する可能性は低い。下高瀬上之原遺跡の12軒の住居も、最低6期に分かれ、1時期には2軒程度、多くても4軒しか存在していないと考えられるため¹⁰⁾、この時期の集落も小規模であったことが想定できる。

(7) 平安時代

この時代は、内匠日向周地遺跡で浅間B軽石下水田が検出されており、さらにそれに伴うか極めて近接した時期の溝状遺構が検出されている。水田は谷津状遺構の上部に作られており、谷地を開発して水田にした状況が推定できる。丘陵上ではこの時代の遺構は少なく、下高瀬上之原遺跡で竪穴住居1軒と土坑1基、内匠諏訪前遺跡で土坑10基、内匠日影周地遺跡で土坑7基が検出されている。土坑は規模・形態等から墓墳と想定される。下高瀬上之原遺跡の竪穴住居は9世紀後半代と考えられるため、天仁元年（1108年）降下と考えられる浅間B軽石下水田より古くなる。よって内匠日向周地遺跡の水田は、丘陵以外の場所の人々が耕作した可能性が高いと言える。

(8) 中近世

中近世は、内匠日向周地遺跡で水田2面と畠・石垣・溝状遺構・暗渠・土坑等が検出され、下高瀬前田遺跡で畠が検出されている。いずれの遺構も出土遺物が少なく時期を特定できないものが多い。中世と考えられるのは水田1面と12号溝であるが、この2つは近接しており、溝は水田に伴うものであった可能性がある。近世と考えられるのは、水田1面と8・15・29号溝、畠・石垣である。畠・石垣は浅間A軽石で埋没しているため天明3（1783）年に廃絶したものである。水田は覆土に浅間A軽石を含むため、A軽石降下に近い年代が考えられる。8号溝は水田と重複し水田より古くなっており、15号溝は覆土上層に浅間A軽石を含むためA軽石降下よりやや古く、29号溝は浅間A軽石を含まないためA軽石降下より古くなると言えよう。よっ

て溝は水田・畠とは時期がずれる可能性が高いが、遺構の性格から水田と関係しているものであろう。

[注]

- (1) 木村 敬編 1992 『内匠遺跡前遺跡・内匠日影周地遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
 (2) 新井 仁編 1994 『下高瀬上之原遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
 (3) 新井 仁編 1993 『内匠上之原遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
 (4) 石井克巳 1999 『黒井峯遺跡』『古墳時代の研究 第2巻』 想山閣出版
 (5) 前掲注1) (6) 前掲注4) (7) 前掲注1)・(2)・(3) (8) 前掲注2)

第2節 群馬県富岡市内匠日向周地遺跡出土の木簡

平川 南

1. 木簡出土遺構概要

木簡の出土した内匠日向周地遺跡は、内匠・下高瀬遺跡群のほぼ中央部に位置し、西接する下高瀬上之原遺跡に源を発する湧水によって西から東に向かい開析された谷津状地形の底部に位置する。この開析谷は、発掘調査の結果によると、かつては緩い蛇行を繰り返して東流する小河川状を呈していたものと思われる。また、調査区の上流側3分の1程のところで北西方向からもう一本の支流が合流し、調査区の間部分では流れが南に蛇行したことにより、谷底北側にわずかな舌状の微高地を形成している。この微高地に古墳時代前期・後期の竪穴住居6棟、および縄文時代草創期の遺物包含層、土坑、溝が認められた。谷部では、上面から順に近世水田3枚、近世畠1枚、中世水田3枚、浅間山噴出B軽石(1108年)により埋没した古代水田40数枚、およびそれに伴う水路等が検出された。古代の水田面の下にはおおむね15~30cmの灰褐色シルトの間層があり、このシルト層は、堆積の良好な所では、さらに3層に細分される傾向がうかがえるが、木簡は、3層のうちのヨシ・アシの茎が混じる最下層の河床礫面に密着した状態で出土している。河床礫面からは、木簡の他に四叉鎌、鎌の柄状木製品、曲物、建築部材等数百点の木製品や多数の土器片が検出された。出土する木製品は上流側で濃密に、下流になるにしたがい粗い分布が認められることから、これらの木製遺物の大半は、この谷の上流部から運ばれてきたものと考えられる。

2. 木簡の年代

木簡の年代は、同一層から出土する土器の破片から古墳時代後期以降、浅間B軽石降下以前であり、この軽石をかぶった水田面と木簡を検出した河床面の間に詰まるシルト層の存在は、比較的長期にわたって沼沢地化していたことを思わせるもので、浅間B軽石降下よりかなり以前のものと考えられる。また、支流部分で灰褐色シルト層の直上に堆積する黒褐色土中で8世紀後半から9世紀前半の土器が検出されたことから、この年代より以前の年代の可能性が考えられる。今後詳細な整理を経なければ断定できないものの、現在のところでも、7世紀後半以降8世紀後半以前の年代が想定される。

[以上は、津金澤吉茂「群馬・内匠日向周地遺跡」(『木簡研究』14号 1992年)より]

3. 形状と釈文

第1号木簡

下端部と左側面をわずかに欠失しているが、ほぼ完形である。ただ、左側端部分は若干材が収縮しているため、文字の篇部の判読を困難にしている。裏面は未加工面を呈し、墨痕は認められない。[釈文1]

第2号木簡

2つに折れ、さらに下部を欠失する。墨痕は第1号木簡より残りが悪い。裏面は未加工で、墨痕は認められない。〔釈文2〕

第3号木簡

表面に墨痕が認められるが、中央部が欠損しており、全体の文字構成は判然としな
ない。〔釈文3〕

4. 内容

第1～3号木簡は20～30m程の近接した範囲で検出されている。現状から判断して
も、3点とも、形状は方頭、幅3.3～3.5cm、下端部をいづれも欠くが、おそらく全長
は約1尺(30cm弱)程度で、下端を尖らせていた可能性もある。

内容は、1・2号木簡は、ほぼ同文と推定されるが、3号木簡はやや文章を異にす
るものと考えられる。しかし、3点とも、いわゆる呪符木簡と判断して良いであろう。

1・2号の冒頭に見える「□翌」は、いわゆる天罡星を表記していると思われるが、
天罡星は道教の神で、北斗星の別名である。天罡星の効能は後世になるほど拡大され
るが、除災・治病・延命が主たるものとされている。「蛟龍」の「蛟」は「和名類聚抄」
では「美都知(みつち)」と訓み、水中に住み蛇に似て角や四足をそなえ、毒気を吐い
て人を害するという想像上の動物とされている。

〔例〕『日本書紀』仁徳天皇67年は歳条

吉備中国の川輪河の派に、大蛇ありて人を苦しむ。時に路人、其の處に触れて
行けば、必ず其の毒を被りて、多に死ぬ。〔下略〕

〔岩波・日本古典文学大系『日本書紀 上』〕

南方熊楠によれば、ミは蛇の古称、ツチは尊称で、蛇の主の義と解している〔『蛇に関する民俗と伝説』(南
方熊楠選集1『十二支考I』1984年)〕。また、「みずち」の表記としては、蛟・虵のほかにも蚪・蝮などがあり、
「蛟龍」としても「みずち」と訓む。おそらく本木簡の「蛟龍」も「みずち」と訓み、ここでは、南方熊
楠のいう蛇の主の義と理解しておきたい。「龍王」は龍の形をして水中に住む水の神である。〔『今昔物語集』
巻16の第15話「仕観音人、行竜宮得富語」によれば、龍王は「蛇ノ祖」とされている。本木簡においては、
蛟龍は龍王の使いと理解すべきであろう。

古代東国社会において、蛇といえは、すぐに「常陸国風土記」行方郡条の箭括麻多智の谷戸開発説話を想
起するであろう。

古老のいへらく、石村の玉穂の宮に大八洲蛟しめし天皇のみ世、人あり。箭括の氏の麻多智、郡より
西の谷の葦原を蔽ひ、壘竊きて新に田に治りき。此の時、夜刀の神、相替れ引率て、恙恙に到來たり、
左右に防陣へて、耕佃らしむることなし。邪いはく、蛇を誦ひて夜刀の神と爲す。其の形は、蛇の身にして齒に角あり。
葦原で齧を免る時、見る人あらば、家門を破損し、子孫絶がす。凡て、此の部の箇の葦原に甚多に住り、是に、麻多智、大き
に怒の情を起し、甲冑を着被けて、自身仗を執り、打殺し断絶らひき。乃ち、山口に至り、櫛の梶を
崩の堀に置て、夜刀の神に告げていひしく、「此より上は神の地と爲すことを聽さむ。此より下は人の田
と作すべし。今より後、吾、神の祝と爲りて、永代に戦ひ祭らむ。冀はくは、な累りそ、な恨みそ」と
いひて、社を設けて、初めて祭りき、といへり。郡ち、遠、耕田一十町餘を發して、麻多智の子孫、相
承けて祭を致し、今に至るまで絶えず。

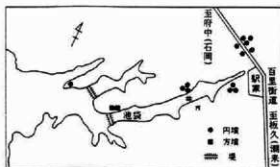
〔岩波・日本古典文学大系『風土記』〕

行方郡の西方、霞ヶ浦に面した各地には、複雑に入り込む何本もの樹枝状の谷がある。箭括の麻多智はこ

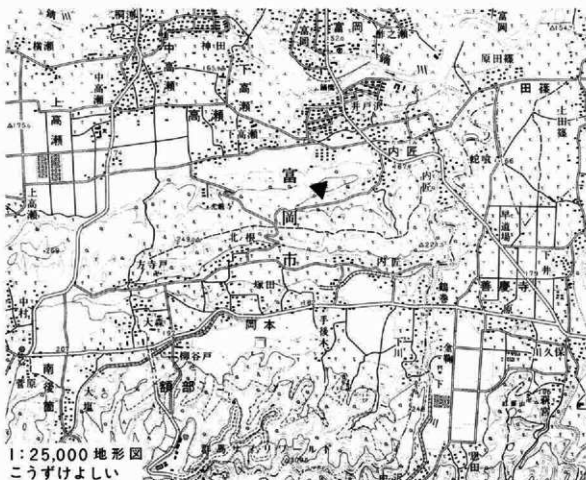
〔釈文1〕	〔釈文2〕	〔釈文3〕
□翌	□翌	□翌
□蛟龍	□蛟龍	□蛟龍
□龍王	□龍王	□龍王
(250)	(145)	(42+55)
33×4	33×7	33×6
051	019	019

の谷口の低湿地に広がる葦原を切りはらって、あらたに水田を開発した。その開発に際して、谷に住む谷戸（夜刀）の神である蛇を鎮めるために、麻多智自らが神の祝=神官となって、夜刀の神を祭ったのである。木簡の年代は7世紀後半～8世紀後半で、『風土記』編纂時期とほぼ同じ頃である（説話は、継体朝のこととされている）。しかも、出土地点は、『常陸国風土記』が描く行方郡の谷戸と非常に類似した景観を呈している（第261図参照）。

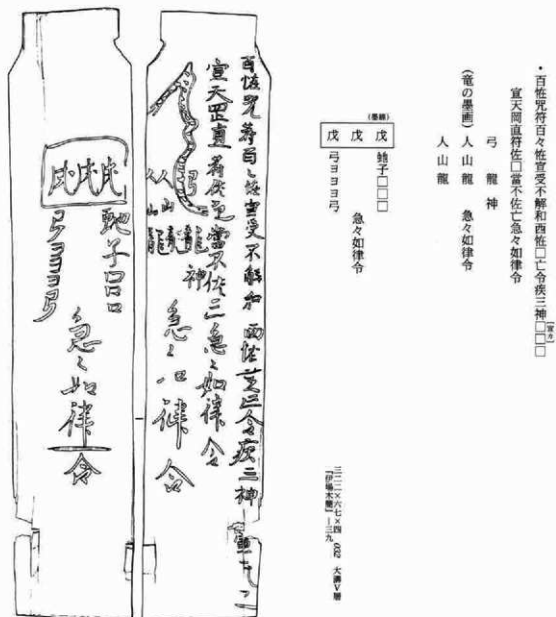
また、この蛇と龍王との関係をものがたる例としては、伊場遺跡（静岡県浜松市）の呪符木簡があげられ



『常陸国風土記』行方郡桑の谷戸田開発に関する略図
関和彦『風土記と古代社会』1984年より



第261図 木簡出土地と周辺地形



第262図 伊場遺跡出土呪符木簡
浜松市教育委員会「伊場木簡」1976年より

〔静岡県「静岡県史」資料編4〕
1989年

る。伊場木簡は8世紀後半から10世紀中頃のものと考え、年代幅のある資料である。この木簡には表に「天罡(岡)」「龍神」、裏に「蛇(蛇)」の文字が確認できる。こうした文言については、例えば康暦3年(1381)の和合祭文(元興寺蔵)に「咄吠罡龍形鬼鬼鬼」とみえる。この木簡を止雨祈願呪符〔芝田文雄「百怪呪符」(竹内理三編『伊場木簡の研究』所収 東京堂出版)1981年〕か、疾病除去〔和田萃「呪符木簡の系譜」(『木簡研究』第4号)1982年〕か、あるいは雨乞い神事に伴うものか、釈文全体が確定しないのでいずれとも決めたいが、内匠日向周地遺跡出土木簡が伊場遺跡の呪符木簡とほぼ同様の性格のものであることは間違いないであろう。

さらに、最近の報告例では、藤原京右京9条4坊発掘調査において、南北道路である西4坊坊間小路東側

溝SD01からは、次のような呪符木簡が出土している。

これは表の「龍王」「送々打々」「急々如律令」の記載から排水を祈願する呪符と考えられている。

結局のところ、本木簡は、「天罡、蛟蛇、龍王に奉る」と訓むことができるであろう。文意は、龍神の使いで、谷戸(夜刀)の神である蛟蛇が水の枯渇または大雨による洪水を恐れ、水神である龍王に雨乞いまたは止雨を祈願した札ではないか。もちろん、その祈願神事は人の手によるものである。すなわち、蛟蛇と龍王の間に介在するもの、いいかえれば、祭りを司るものは、『常陸国風土記』にみえる谷戸(夜刀)の神を祭る祝(神職)たる開発者であろう。谷戸の開発者が谷戸(夜刀)の神である蛟蛇の祝(神職)として龍王に祈願した止雨、雨乞い等の神事にかかわる呪符木簡であると理解できるのではないが、当時の谷水田は雨の多い年は稔らず、比較的旱天に近い年の方が豊作となるなど、非常に不安定な条件下にあり、水の神(龍王)に対する依存・祈願の念は想像以上のものがあつたと推される。

このように龍王への祈願を止雨または雨乞いに関わるものと理解する可能性をあげたが、この他に、谷戸開発に伴う犯土の際に龍王に対する祭祀を実施した可能性も、考えられるであろう。

以上の検討から、不確定要素を多く含む資料ではあるが、現段階で次のような意義を提示しておきたい。

本木簡は7～8世紀代における谷戸開発に伴う重要な祭祀行為の一端を伝える資料であり、『常陸国風土記』行方郡条で描かれた谷戸開発の実態を実物資料(呪符)によってはじめて具体的に裏付けられるものではないだろうか。

なお、末尾ながら、本木簡の検討にあたり、有益なご教示をいただいた矢野建一氏(専修大学)、高島英之氏(群馬県埋蔵文化財調査事業団)に対して深く感謝の意を表したい。

[注]

津金澤吉茂「群馬・内匠日向周地遺跡」(『木簡研究』14号)に記載された釈文は次のとおりである。

- (1) 「□□□□奉龍王
- (2) 「□□□□奉□王
- (3) 「□□

木簡「呪符」 長さ四六・七cm、幅八・三cm、厚さ〇・七cmを測る。縦に半截されているが、二片とも出土位置はSB101の北側に近接して出土した。短冊型の板で、側辺左右には台形の切り込みを入れ、方頭にする。

・「四方卅□大神龍王 七里□□内^内送々打々急々如律令」 032形式

「東方木神王

南方火神王

婢麻佐女生年廿九黒色

・中央土神王 (人物像)

婢□□女生年□□□□^(書)

(北方水神王)

(人物像)

(西方金神王)

付載 浅間B軽石直下水田の自然科学分析調査

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

富岡市内匠日向周地遺跡は、高瀬丘陵（通称離れ山丘陵）上から丘陵を解析する支谷にかけて位置する。本遺跡では、縄文時代～江戸時代にかけての遺構・遺物が確認されている。とくに支谷では浅間A軽石（As-A；荒牧，1968）降灰以前の水田址と浅間B軽石（As-B；新井，1979）と思われる粗粒火山砕屑物に覆われた水田址が確認された。

粗粒火山砕屑物に覆われた水田址は支谷の斜面を利用し、谷の出口に向かって階段状に構築されている。畦畔は支谷を横断する形で数条設けられている。支谷の北端には湧水を溜める導水路が認められたことから、そこでは一定時水を温めてから水田内に流したものと推測される。それぞれの水田区画には、水田層が砕黒色粘土であるものと黒色味の弱い土壌であるものが認められる。群馬県内におけるこれまでの発掘調査事例から、黒色粘土はAs-B直下の水田耕作土にみられることの多い土壌に類似するとされ、本遺跡では支谷上流部～下流部にわたるほとんどの水田址に認められる。一方、黒色味の弱い土壌は支谷中流部のいくつかの水田址に認められる。発掘調査所見では、後者は休耕田のように一次的に稲作を行わなかった（ここでは「非生産地」と称される。一方、前者は「生産地」とされる）のではないかと考えられている。

今回、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団より、粗粒火山砕屑物の起源とこれに覆われる水田址を対象とした自然科学分析調査の要望があった。その後の協議により、次に示す分析調査課題と分析調査項目を設定した。

(1) 粗粒火山砕屑物の由来について

本遺跡の土層断面に認められた粗粒火山砕屑物の由来を明らかにするためにテブラ分析を行う。発掘調査所見によれば、本砕屑物は浅間B軽石（As-B）と考えられている。

(2) 粗粒火山砕屑物下位の水田層の生成要因について

水田層とそれの黒色粘土の成因が稲作に伴う腐植の蓄積であるのか確認するために、土壌化学分析を行う。また、生産地と非生産地の水田層の土壌化学性について比較・検討を行う。

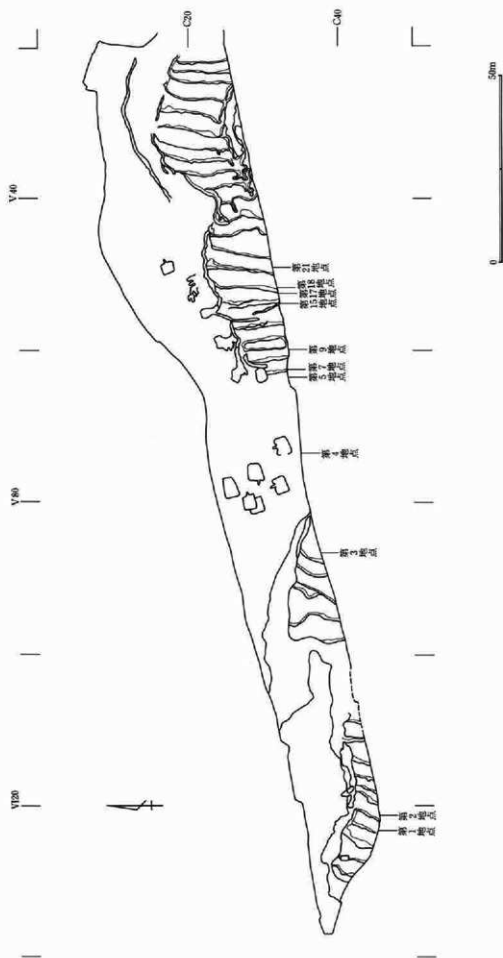
(3) 稲作の様態について

As-Bとみられる粗粒火山砕屑物下位の水田における稲作の様態を検討するために花粉分析と植物珪酸体分析を行う。また、黒色粘土層と黒色味の弱い粘土層において微化石の産状や土壌の科学性の相違を調査し、土層の違いが生産地と非生産地を意味するものかについて検討を加える。

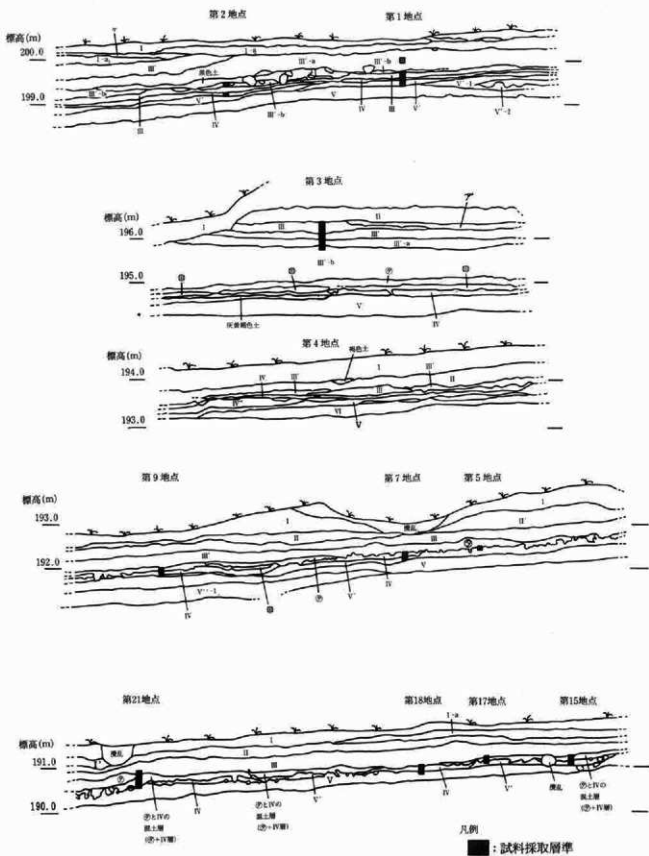
1. 調査区の層序および試料

(1) 層序

調査を実施するにあたり、第1地点～第21地点までを設定した(各地点名は、便宜上当社にて付した)。本遺跡の支谷部の基本土層は大きくVI～I層に分層され(第262図)、VI層が古墳時代以前の灰黄色シルト層、V層が古墳時代～古代の灰色～暗褐色を呈するシルト層、IV層が黒色粘土層、III層がAs-Bとみられる粗粒火山砕屑物を含む層、II層が褐色シルト層、I層がAs-A軽石が混在する暗褐色シルト層である。発掘調査所見によると、IV層がAs-B降灰以前の水田層、II層がAs-A軽石降灰以前の水田層とされ、I層が近・



第263图 分析调查对象地点位置图



第264図 分析調査対象地点の土層断面および試料採取層準

現代の水田耕作土である。次に、分析調査対象地点ごとに当社が観察した層相を示す(第263・264図)。

・第1地点

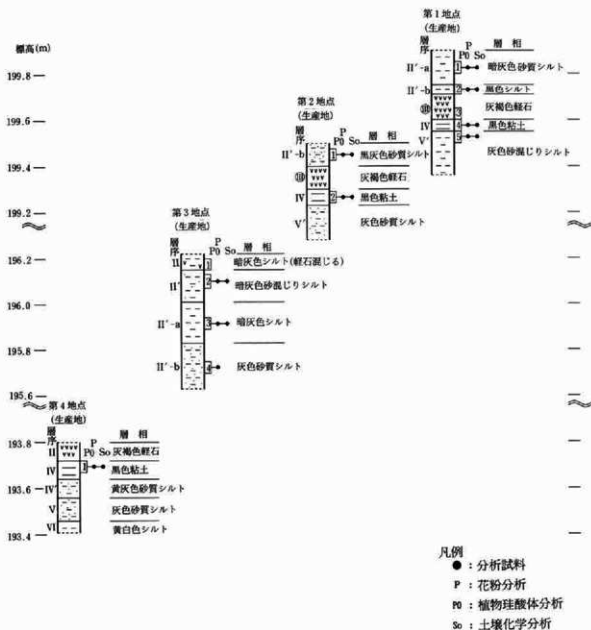
下位よりV'層(灰色砂混じりシルト)、IV層(黒色粘土)、III層(灰褐色軽石)、III'-b層(黒色シルト)、III'-a層(暗灰色砂質シルト)の順に堆積する。

・第2地点

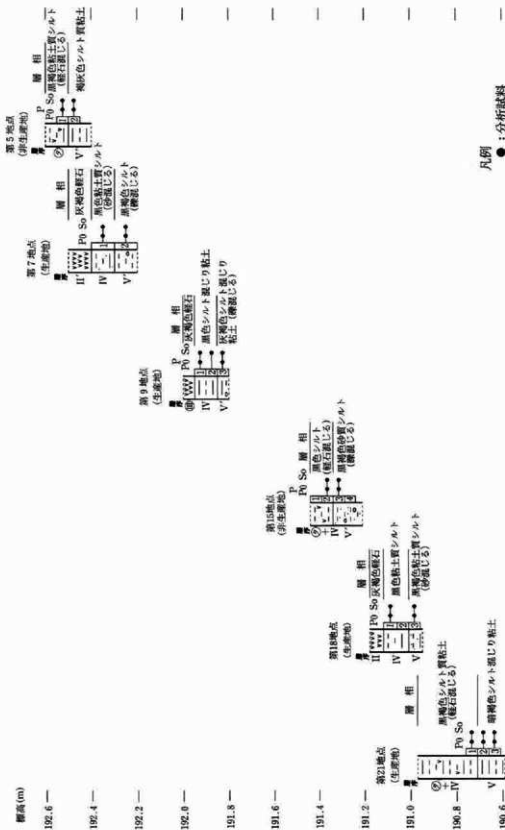
下位よりV'層(灰色砂質シルト)、IV層(黒色粘土)、III層(灰褐色軽石)、III'-b層(黒灰色砂質シルト)の順に堆積する。

・第3地点

下位よりIII'-b層(灰色砂質シルト)、III'-a層(暗灰色シルト)、III層(暗灰色砂混じりシルト)、III層(灰



第265図 第1地点～第4地点の模式柱状図



凡例 ● : 分析試料

P : 花粉分析

So : 植物硅酸体分析

So : 土壌化学分析

第266図 第5・7・9・15・18・21地点の様式柱状図

褐色軽石混じり暗灰色シルト)の順に堆積する。

・第4地点

下位よりVI層(黄白色シルト)、V層(灰色砂質シルト)、IV'層(黄灰色砂質シルト)、IV層(黒色粘土)、III層(灰褐色軽石)の順に堆積する。

・第5地点

下位よりV'層(灰褐色シルト質粘土)、㊸層(黒褐色粘土質シルト:軽石混じり)の順に堆積する。

・第7地点

下位よりV'層(黒褐色シルト:礫混じり)、IV層(黒色粘土質シルト:砂混じり)、III'層(灰褐色軽石)の順に堆積する。

・第9地点

下位よりV'層(灰褐色シルト混じり粘土:礫混じり)、IV層(黒色シルト混じり粘土)、㊸層(灰褐色軽石)の順に堆積する。

・第15地点

下位よりV'層(黒褐色砂質シルト:礫混じり)、㊸+IV層(黒色シルト:軽石混じり)の順に堆積する。

・第18地点

下位よりV層(黒褐色粘土質シルト:砂混じり)、IV層(黒色粘土質シルト)、III層(灰褐色軽石)の順に堆積する。

・第21地点

下位よりV層(暗褐色シルト混じり粘土)、㊸+IV層(黒褐色シルト質粘土:軽石混じり)の順に堆積する。

(2) 試料

試料は、各分析調査課題を考慮して土層の堆積状態が良好な北壁セクションより22ヶ所(第1地点～第22地点)を設定し、粗粒火山砕屑物層および黒色土層を挟む上下の土層から層位試料あるいは柱状試料として採取した。分析調査では、調査課題に基づいてこれらの試料採取地点から10ヶ所を選択した。(第262図)すなわち、黒色粘土を水田層とする地点(生産地)では、第1地点・第2地点・第3地点・第4地点・第7地点・第9地点・第18地点・第21地点の7ヶ所、黒色味の弱い土壌を水田層とする地点(非生産地)では、第5地点・第15地点の2ヶ所である。分析調査地点対象地点の試料は、室内で層相を観察して分析用試料を抽出した(第263・264図)。

2. 粗粒火山砕屑物の由来について

III層で認められた粗粒火山砕屑物は、発掘調査所見では浅間B軽石(As-B)と考えられている。ここではテフラ分析を行って、指標テフラとの対比を行い、粗粒火山砕屑物の由来を検討する。

(1) 分析方法

試料の秤量(30g)、超音波洗浄による泥分除去、恒温乾燥(80℃)により試料中からテフラ粒子を濃集し、実体顕微鏡下で検鏡する。

(2) 結果

テフラ分析の結果を表1に示す。第1地点III'-a層には、灰褐色の細粒軽石層が認められた。層厚は11cmである。ごくわずかであるが、最大径13mmの粗粒の軽石も認められる。分析試料に含まれる軽石の最大径は5

mmである。軽石は褐色を呈する。

第3地点III層でも灰褐色の細粒軽石が多く認められた。ごくわずかに最大径8mm程度の粗粒の軽石も認められる。分析試料に含まれる軽石の最大径は4mmである。軽石は褐色を呈する。同地点III層は暗灰色土であり、層厚は14cmである。ごくわずかに最大径4mm程度の褐色軽石が認められる。軽石は褐色を呈する。

表1 テフラ分析結果

地点	試料	軽石の量	軽石の色調	軽石の最大径(mm)
第1地点	III-a層	++++	褐色	5
第3地点	III層	+++	褐色	5
第3地点	III層	+	褐色	4

++++:とくに多い, ++++:多い, ++:中程度, +:少ない。

(3) 指標テフラとの対比

今回、分析対象とした第1地点のIII-a層、第3地点のIII層・III層のいずれにも、褐色の軽石が認められた。軽石の特徴から、西暦1108年(天仁元年)に浅間火山から噴出したAs-Bに由来すると考えられる。As-Bの降灰層厚は、第1地点と第3地点のIII層下部に軽石の集積が認められることから、III層基底と推定される。

3. 土壌の科学的測定方法及び結果

(1) 測定方法

測定方法は、粘土含量がピベット法、腐植含量がチューリン法、リン酸吸収係数が2.5%リン酸アンモニウム法である。以下に各項目ごとの操作過程を示す。

a. 分析試料の調製

粘土含量・リン酸吸収係数の測定では、採取した土壌を風乾後、すべてを軽く粉砕して2m篩通過試料(風乾細土試料)に調製する。また、腐植含量の測定では風乾細土試料の一部を細かく粉砕し、0.5mm篩全通試料(微粉砕試料)を作成する。

b. 粘土・シルト・砂含量(ピベット法)

第1地点～第4地点の粘土含量は、次のように測定した。風乾細土試料10.00gを秤り取る。蒸留水と30%過酸化水素水を加え、熱板上で有機物を分解する。分解終了後、水を約500ml加えて攪拌しながら超音波処理(30分間)を行う。1/沈底瓶に音波処理後の試料をすべて移し、分散剤を加えて往復振とう機で1時間振とうし、水で1/に定容する。この沈底瓶を1分間激しく振り、直ちに静置して所定の時間が通過した後、5cmの深さから10mlのホールピベットで懸濁液を採取する。採取された懸濁液を湯煎上で蒸発乾固し、乾燥・秤量して粘土含量を求める。

第5地点・第7地点・第9地点・第15地点・第18地点・第21地点の粘土・シルト・砂含量は、次のように測定した。第1地点～第4地点の粘土含量測定と同様に、秤量、有機物分解・音波処理、振とう、定容を行う。沈底瓶を1分間激しく振り、直ちに静置して所定の時間に5cmの深さから10mlのホールピベットで懸濁液を採取する。採取された懸濁液を湯煎上で蒸発乾固し、乾燥・秤量してシルトと粘土の含量を求める。さらに所定の時間が経過した後、沈底瓶の懸濁液を同様に採取して湯煎上で蒸発乾固し、乾燥・秤量して粘土含量を求める。沈底瓶に残ったシルトと粘土を、サイフォンを使ってすべて洗い流す。沈底瓶の残渣を乾燥・秤量して砂含量を求める。これを0.2mmの篩でふるい分け、篩上残留物を秤量して砂含量中の粗砂含量を求める。また、砂含量から粗砂含量を差し引いて細砂含量を求める。求められた粗砂・細砂・シルト・粘土の4成分含量の合計を100%とした重量百分率(重量%)を求める。なお、今回は砂分の混入のしかたを概観する

ため、細砂・粗砂の含量を砂含量として一括し、砂・シルト・粘土の重量%を表示する。

c. 腐植含量 (チューリン法)

微粉砕資料の秤量 (正確に0.1~0.5g)、100ml三角フラスコへの移入、0.4Nクロム酸・硫酸混液 (正確に10ml) による煮沸 (砂浴上。約200°C・5分間)、冷却の手順で資料を処理する。0.2N硫酸第1鉄アンモニウム液での滴定 (指示薬: 0.2% フェニルアントラニル酸液) により有機炭素量 (org-C%) を求める。この有機炭素量に係数1.724を乗じて腐植含量を算出する。

d. リン酸吸収係数 (2.5%リン酸アンモニウム法)

風乾細土試料の秤量 (乾土換算で10.0g)、2.5%リン酸アンモニウム溶液 (pH7.0) を正確に注入、時々振とうしながら室温で24時間放置、ろ過、ろ液0.1mlを50mlメスフラスコに正確に採取、蒸留水 (約30ml) を注入、リン酸発色a液 (10ml) を注入、50mlに定溶の手順で試料を処理する。30分間放置後、420nmでこれを比色定量してリン酸量を求める。

試料液とは別に2.5%リン酸アンモニウム溶液 (pH7.0) を0.1ml採取し、50mlメスフラスコに採取して蒸留水約30mlを加えた後、リン酸発色a液10mlを加えて50mlに定容し、30分間放置後に420nmでこれを比色定量してリン酸量を求める。定量された試料液のリン酸量を2.5%リン酸アンモニウム溶液のリン酸量から差し引いてリン酸吸収係数を求める。

本分析法では、加えた2.5%リン酸アンモニウム液 (pH7.0) のリン酸量は2688mgに調整してあるので、リン酸吸収係数がこの値を超えることはない。

e. 陽イオン交換容量 (CEC: ショウレンベルガー法)

土壌浸出装置の浸透管の底部に脱脂綿とろ紙バルブにより過層をつくり、下端口に栓をする。洗浄液容器に酢酸アンモニウム液100mlを入れて、浸透管の上につけ、浸透管内部に酢酸アンモニウム液を浸透管の2/3程度まで入れる。ここへ、分析試料4~6gを気泡が入らないように入れ、液内に自然沈降させる。浸透管下端口の栓をはずして受器を連結する。洗浄液容器から酢酸アンモニウム溶液を4~20時間のうちに浸透が終わり、NH₄⁺で飽和するように滴下する。滴下終了後、受器を取り替え、過剰の酢酸アンモニウム溶液を除去するために、少量のエタノールで浸透管および試料を洗浄する。

洗浄液溶液を塩化カリウム溶液100ml入りのものと交換し、受器を再び取り替える。塩化カリウム容器を浸透管内に滴下し、試料内に飽和しているNH₄⁺を交換浸出させる。この浸出液を200mlメスフラスコに移し、標線まで水を入れて混合する。

この混合液から一定量を取り、水蒸気蒸留法によりNH₄⁺を定量し、乾土100g当たりのmg当量 (me/乾土100g) として算出する。

(2) 結果

結果を表2-1、表2-2に示す。また、土壌の化学成分の特徴をレーダーチャートに示す (表6)。以下に各地点毎の結果を述べる。

・第1地点

IV層はIII'-a層やIII'-b層、あるいはV'層より粘土含量・腐植含量・リン酸吸収係数がともに高く、明らかな差異が認められる。

・第2地点

IV層は、粘土含量・腐植含量・リン酸吸収係数とも第1地点のIV層と近似した値を示し、本地点のIII'-b層と差異が認められる。III'-b層の各項目の値は、第1地点のIII'-a層のものと近似した値を示す。

・第3地点

III'層では、粘土含量・腐植含量が第1地点のIV層あるいは第2地点のIV層よりも低く、リン酸吸収係数が高い値を示している。しかし、この層直下のIII'-a層との比較では粘土含量・腐植含量とも高い値を示し、いずれの項目においても明らかな差異が認められる。III'-a層は、第1地点のV'層に比較して粘土含量が低く、腐植含量がやや高い値を示している。

・第4地点

IV層は、第1地点～第3地点の試料に比較して各項目ともやや低い値を示している。

・第5地点

本地点では、第1地点～第4地点で認められたAs-Bの純層とその直下のIV層（黒色粘土層）に対比される層が認められず、㊸層とその下位にV'層が認められる。

㊸層は、砂含量が多い。腐植含量・リン酸吸収係数は、いずれも第1地点～第4地点の黒色粘土層試料よ

表2-1 第1地点～第4地点の土壌化学分析結果

調査地点	層名	土色	粘土含量	腐植含量	リン酸吸収係数
第1地点	III'-a	黄灰(2.5Y4/1)	11.7	2.02	860
	III'-b	黒褐(2.5Y3/2)	11.2	2.52	970
	IV	黒(2.5Y2/1)	42.5	5.82	1,340
	V'	黄褐(2.5Y3/3)	34.0	1.78	1,060
第2地点	III'-b	黄灰赤(2.5Y4/1)	13.3	2.09	700
	IV	黒(2.5Y2/1)	42.2	5.27	1,300
第3地点	III'	黒褐(2.5Y3/1)	30.3	4.58	1,470
	III'-a	暗灰黄(2.5Y4/2)	25.2	2.28	1,100
第4地点	IV	黒褐(2.5Y3/2)	40.2	4.21	1,120

1) 各項目の単位は、乾土当たりで表示。

2) この土色判定は、各分析試料についてマンセル表色系に準じた新版標準土色粘(農林省農林水産技術会議監修, 1967)によるもので、現地での観察結果と多少異なるところがある。

表2-2 第5・7・9・15・18・21地点の土壌化学分析結果

調査地点	層名	土色	砂含量%	シルト含量%	粘土含量%	腐植含量%	リン酸吸収係数	C E C
第5地点	㊸	暗灰黄(2.5Y4/2)	61.3	14.4	24.3	2.25	830	17.4
	V'	黄灰(2.5Y4/1)	38.3	23.3	38.5	2.02	1,060	22.7
第7地点	IV	黒(10YR1.7/1)	26.4	21.1	52.5	8.33	1,300	39.2
	V'	灰黄褐(10YR5/2)	43.2	21.5	35.3	2.32	990	21.0
第9地点	IV	黒(10YR1.7/1)	23.6	24.0	52.4	0.63	1,400	42.9
	V'	黒褐(2.5Y3/1)	40.3	22.7	37.0	3.70	1,020	21.7
第15地点	㊸+IV	黒褐(2.5Y3/2)	49.0	16.5	34.5	3.01	1,000	20.6
	V'	黒褐(2.5Y3/2)	46.0	18.3	33.7	3.35	1,050	20.9
第18地点	IV	黒(10YR1.7/1)	18.7	20.4	60.9	8.62	1,530	43.3
	V	黒褐(2.5Y3/2)	42.9	19.9	37.2	3.12	1,060	22.3
第21地点	㊸+IV	黒褐(2.5Y3/1)	59.3	13.6	27.1	3.54	890	18.5
	V'	黒褐(2.5Y3/1)	46.1	18.2	35.7	3.84	1,110	21.1

1) 各項目の単位は、乾土当たりで表示。

2) この土色判定は、各分析試料についてマンセル表色系に準じた新版標準土色粘(農林省農林水産技術会議監修, 1967)によるもので、現地での観察結果と多少異なるところがある。

り低い値を示している。また、CECも低い。

一方、②層直下に堆積するV'層では、粘土含量・腐植含量・リン酸吸収係数が黒色粘土層直下の試料（第1地点のV'層あるいは後述する第7地点のV'層）に近似する。②層と比較して砂含量が少なく、リン酸吸収係数・CECともに高い。

・第7地点

IV層は、第1地点～第4地点の黒色粘土層試料よりも粘土含量・腐植含量が高い。また、CECも高い。一方、IV層直下のV'層では前述した第1地点のV'層あるいは第5地点のV'層に近似した値を示している。

・第9地点

IV層では、第7地点のIV層よりも腐植含量・リン酸吸収係数がやや高い値を示すが、化学的性質はほとんど同じとみられる。また、IV層直下のV層も腐植含量がやや高い値を示す他は、第7地点のV'層と化学的性質が似ていると言える。

・第15地点

本地点は、第5地点と同様にAs-Bの純層あるいはその直下のIV層（黒色粘土層）が認められず、As-Bと黒色粘土の混合層とみられる②+IV層が認められる。本地点の②+IV層は、第21地点とともに他の地点より黒味がやや強い。

②+IV層は、第5地点の②層よりも粘土含量・腐植含量・リン酸吸収係数・CECともに高い値を示している。一方、②+IV層直下のV'層は、②+IV層や他の地点のV層とも近似した値を示している。

・第18地点

IV層は、第9地点のIV層と近似した値を示す。しかし、粘土含量は60%を越え、リン酸吸収係数も1,500を越える高い値を示す。

・第21地点

本地点は、第5地点・第15地点と同様にAs-Bの純層あるいはその直下のIV層（黒色粘土層）に対比される層が認められないが、As-Bと黒色粘土の混合層とみられる②+IV層が認められる。本地点の②+IV層はやや黒味が強い。

②+IV層は、腐植含量が第5地点の②や第15地点の②+IV層よりやや高い値を示している。粘土含量・リン酸吸収係数は第5地点の②層と近似している。

4. 微化石分析方法と結果

(1) 分析方法

a. 花粉分析

花粉・孢子化石は、湿重約10gの試料について、HF処理、重液分離（ZnBr₂；比重2.2）、アセトリシス処理、KOH処理の順に物理・化学的な処理を施して試料から分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査しながら出現する全ての種類（Taxa）について同定・計数を行う。また、出現するイネ科花粉100個以上についてノマルスキー微分干渉装置を使用して表面微細構造を観察し、発芽孔周辺の肥厚状況・花粉粒径を考慮しながら、栽培植物のイネ属と他のイネ科に区分する。

結果は同定・計数結果の一覧表と花粉化石群集の変遷図として表示する。図中の出現率は、本本花粉が本本花粉総数、草木花粉・胞子が総数より不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として百分率で算出する。また、

図表中で複数の種類をハイフォン（－）で結んだものは、種類間の区別が困難なものである。また、イネ属の同定結果はイネ科総数に対してイネ属が占める割合であるイネ属比率（鈴木・中村, 1977）として示す。

b. 植物珪酸体分析

試料中の植物珪酸体は、過酸化水素水（ H_2O_2 ）・塩酸（HCl）処理、超音波処理（70w, 250KHz, 1分間）、沈定法、重液分離法（臭化亜鉛、比重2.3）の順に物理、化学処理を行って分離・濃集する。これを封入（封入剤：プリユウラックス）し、プレパラートを作製して、400倍の光学顕微鏡下で全面を走査する。その間に、出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐藤（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

計数結果を表に示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から稲作について検討するために、植物珪酸体組成図を作成する。各種類（Taxa）の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の各珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求める。なお、計測数が短細胞珪酸体では200個未満、機動細胞珪酸体では100個未満の試料については、組成が歪曲している恐れがあるため、植物珪酸体組成を求めずに出現した種類を＋で示す。

(2) 結果

a. 花粉化石の座状

結果は表3に、イネ属同定結果は表4に示す。また、第5地点・第9地点・第15地点の花粉化石群集を図4に示す。花粉化石の保存状態は、第1地点～第4地点、第5地点①層・第9地点IV層で悪い。とくに第1地点～第4地点では、検出個体数も少ない。

表3 花粉分析結果

種類 (Taxa)	第1地点				第2地点		第3地点		第4地点	
	III' -a層	III' -b層	IV層	V'層	III' -b層	IV層	III'層	III' -a層	III' -b層	IV層
木本花粉										
モミ属	—	—	—	2	—	—	—	—	—	—
ツグ属	—	—	—	4	—	—	—	—	—	—
マツ属	—	—	1	3	—	—	—	—	—	—
クマシダ属-アサダ属	—	—	—	3	—	—	—	—	—	—
ハンノキ属	—	—	—	2	—	—	—	—	—	—
ブナ属	—	—	—	6	—	—	—	—	—	—
コナラ属コナラ亜属	—	—	—	13	—	—	—	—	—	—
コナラ属アカシヤ属	—	—	—	8	—	—	—	—	—	—
ツタ属	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—
草本花粉										
イネ科	—	—	—	23	—	1	—	—	—	—
カヤツリダサ科	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—
サナエダ属-ウナギツカミ節	—	—	2	5	—	1	—	—	—	—
オミナエシ属	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—
ヨモギ属	—	—	1	6	—	—	—	—	—	—
他のキク亜属	1	1	1	—	—	4	—	—	—	1
不明花粉	—	—	—	2	—	—	—	—	—	—
シダ類胞子										
シダ類胞子	6	3	103	28	2	108	2	6	9	22
合計										
木本花粉	0	0	1	42	0	0	0	0	0	0
草本花粉	1	1	4	36	0	6	0	0	1	1
不明花粉	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0
シダ類胞子	6	3	103	28	2	108	2	6	9	22
総花粉・胞子	7	4	108	108	2	114	2	6	10	23

表3の続き

種類 (Taxa)	試料番号	第5地点		第9地点		第15地点	
		②層	V層	IV層	V層	②+ IV層	V層
木 本 花 粉							
マキ属	—	2	—	1	—	—	—
モミ属	—	5	6	10	11	7	7
ツグ属	—	12	6	7	7	8	8
トウヒ属	1	1	—	—	2	—	—
マツ属(総管束近縁)	2	4	1	—	2	2	2
マツ属(不明)	3	4	7	1	4	3	3
コウヤマキ属	5	3	2	1	—	1	—
スギ属	9	23	21	17	8	20	20
イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科	5	11	9	12	5	14	14
ヤブヅルミ属	2	2	2	1	7	5	5
ケルミ属	1	1	2	1	1	2	2
クマシラ属—アサギ属	25	27	16	25	27	16	16
ハシバミ属	—	1	—	1	—	—	—
カバノキ属	1	4	—	5	5	1	1
ハンノキ属	5	12	5	2	3	5	5
ブナ属	10	29	5	24	6	9	9
コナラ属コナラ亜属	93	91	90	71	59	39	39
コナラ属アカガシ亜属	37	110	34	44	48	40	40
クナ属—レイノキ属	12	8	3	2	7	5	5
ニレ属—ケヤキ属	6	11	1	15	15	11	11
エノキ属—ムクロノキ属	2	4	1	4	4	5	5
カワウ属	—	1	—	—	—	1	1
カラスギヤシロウ属	—	1	—	—	—	—	—
ウルシ属	—	1	—	—	—	—	—
カエデ属	1	1	1	—	—	1	1
トチノキ属	5	—	—	1	—	—	—
ブドウ属	1	3	2	1	—	1	1
ウコギ科	—	—	—	1	1	1	1
トネリコ属	1	—	—	1	1	2	2
チイカカズラ属	1	—	—	—	—	—	—
草 本 花 粉							
ガマ属	1	1	—	—	—	—	—
ヒルムシロ属(近似種)	—	—	—	1	—	—	—
サジメカダ属	—	—	—	—	—	1	1
オモダカ属	8	20	3	8	6	6	6
スズメ属	—	—	—	1	—	—	—
イネ科	193	227	82	267	206	194	194
カヤツリグサ科	168	84	78	115	63	67	67
イボクサ属	—	—	—	—	1	—	—
ミズアオイ属	1	—	—	1	1	2	2
アヤメ科(近似種)	—	—	—	1	—	—	—
タワ科	7	6	3	10	8	11	11
サナエタダ属—ウナギツカミ属	1	4	—	2	—	1	1
タデ属	—	1	—	—	—	—	—
アカザ科	3	—	1	—	1	2	2
ナadeshiko科	—	2	2	—	1	—	—
カラマツソウ属	2	4	1	—	1	—	—
キンボウグ科	2	1	—	—	1	—	—
タケニギサ属	—	—	—	—	1	—	—
アブラナ科	2	2	—	—	—	—	—
マメ科	—	—	2	—	1	1	1
トウダイグサ科	—	1	—	—	—	—	—
キカシグサ科	—	—	—	—	1	—	—
セリ科	2	3	—	—	—	—	—
シソ科	—	—	—	—	—	1	1
オミナエシ属	1	—	1	—	—	—	—
ヨモギ属	45	58	55	18	55	33	33
他のキク亜科	14	6	6	2	5	2	2
タンポポ科	8	13	5	13	3	5	5
不明花粉	62	59	13	16	9	12	12
シダ 類 胞 子							
ミスニラ属(近似種)	8	—	—	—	—	—	—
シダ類胞子	368	89	384	34	35	19	19
合 計							
木 本 花 粉	228	371	214	248	223	199	199
草 本 花 粉	460	433	239	439	355	326	326
不 明 花 粉	62	59	13	16	9	12	12
シダ 類 胞 子	376	89	384	34	35	19	19
総 花 粉・胞 子	1126	952	850	737	622	556	556

花粉化石の出現傾向は、各地点とも類似する。木本花粉ではコナラ属コナラ亜属コナラ属アカガシ亜属が多産し、スギ属・クマシダ属-アサダ属・ニレ属-ケヤキ属などを伴う。草本花粉では、イネ科・カヤツリグサ科が多産する。また、ガマ属・オモダカ属・ミズアオイ属などが随伴しない希に出現する。

イネ属は、第5地点V'層、第9地点V'層、第15地点②+IV層・V'層で検出される。イネ属比率は、各層とも約30%である。なお、第5地点②層と第9地点IV層ではイネ科花粉の表面微細構造が観察できないものが多く認められるため、イネ属同定を行っていない。

表4 イネ属同定結果 (イネ属比率:%)

地点	層名	イネ属	他のイネ属
第5地点	V'層	30	70
第9地点	V'層	32	68
第15地点	②+IV層	28	72
#	V'層	30	70

b. 植物珪酸体の産状

計数結果を表5、各地点の植物珪酸体組成を図5に示す。イネ科葉部起源の植物珪酸体は各地点の試料で多く検出される。その保存状態は、単細胞珪酸体で良好であるが、機動細胞珪酸体ではその表面に多数の小孔(溶食痕)が生じているものが認められる。

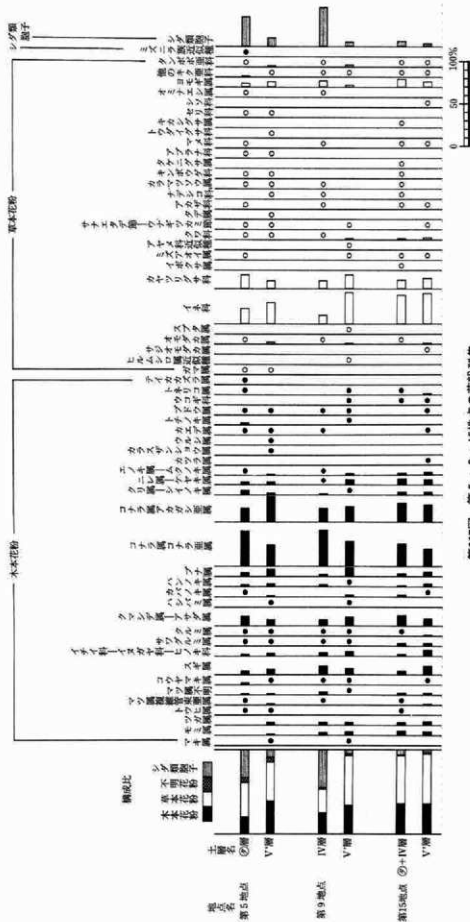
イネ属は、単細胞珪酸体と機動細胞珪酸体がIV層や②層、②+IV層試料から検出され、黒色粘土と黒色味の弱い土壌で産状に大きな違いは認められない。その出現率は各層でほぼ同様であり、単細胞珪酸体が3%前後、機動細胞珪酸体が10%前後である。単細胞珪酸体では細胞列を形成するものもわずかながら認められる。また、IV層より下位のV層、V'層、上位のIII層、III-a'層でも認められる。

イネ属の他に、各層試料ではタケ亜科(ネザサ節・その他)の両珪酸体の出現率が高い。しかし、第1地点の各層ではキビ族・ヨシ属、ヨシ属の単細胞珪酸体も高い。各地点では、この他にウシクサ族(コブナグサ属・ススキ属)、イチゴツナギ亜科(オオムギ族・その他)も産出する。

5. 黒色粘土層の生成要因

群馬県内では、As-B直下の水田層に黒色土が見られることが多く、本遺跡でも同様に黒色粘土層が確認された。この黒色粘土層の成因については、水田耕作に伴う腐食の蓄積、周囲に形成された黒ボク土の流入などが考えられる。しかし、As-B直下の粘土層における黒色化の要因は、明確にされていない。我国では、黒色を呈する土壌として黒ボク土と黒泥土があげられる。この両者は、安定腐食を多量に含む点で共通するが、生成過程や土壌の物理性が異なる。すなわち、黒ボク土が火山噴出物を母材として生成した土壌であるのに対して、黒泥土は泥炭を母材とした土壌である。また、黒ボク土は概して団粒構造が発達し、水分が少ない土壌であるのに対して、黒泥土は粘性が高く、水分の多い土壌である。しかし、台地あるいはその斜面で形成された黒ボク土が低地や谷底部に移動堆積した場合には土層が黒泥土とよく似ている場合があり、肉眼観察では判別することが困難なことがある。このような場合に、リン酸吸収係数などが手がかりになることがある。一般的に火山灰土壌では、リン酸吸収係数が1,500以上と高いことが知られている。

IV層における粘土含量・腐食含量・リン酸吸収係数の測定値から、黒色粘土層(IV層)の物理・化学的性質はほぼ共通することが判明した。すなわち、概して粘土含量が40~60%前後、腐食含量が5~10%、リン酸吸収係数が1,300~1,500前後の範囲で推移する。この物理・化学的性質から、黒色粘土は腐食に富む火山灰土壌、いわゆる黒ボク土に由来すると推定される。これより、黒色粘土層は、谷内に堆積していることを



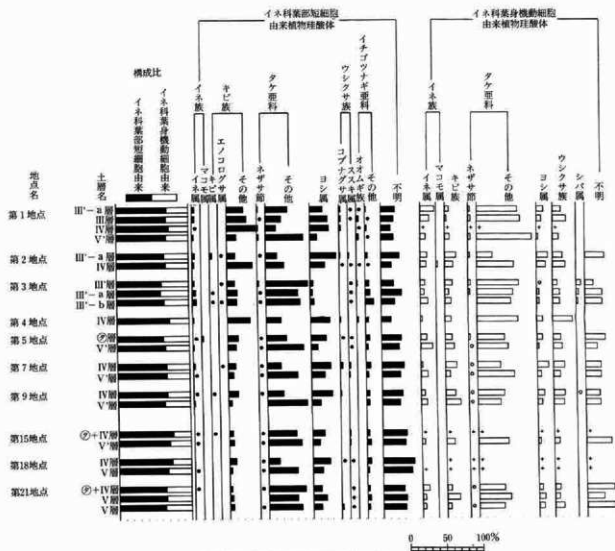
第267図 第5・9・15地点の花粉群集

出回率は木本花粉総数、草本花粉・シダ類孢子は総数より不明花粉を除く数を基数とし百分率で算出した。なお、○●は1%未満、+は木本花粉100個体未満の試料で出現した種類を示す。

考慮すれば、IV層は台地上で土壌化した黒ボク土がAs-B降灰以前に移動・再堆積して形成された可能性が高い。

6. 稲作の様態について

イネ属に由来する微化石の産状と土壌の化学的性質を表6に示す。As-B層直下の黒色粘土層(IV層)では、栽培植物とされるイネ属植物珪酸体が、単細胞珪酸体・機動細胞珪酸体とも検出される。これより、As-B降灰直前の時期、谷内部では稲作がおこなわれていた可能性がある。発掘調査でも水田址が検出されていることを考慮すると、本調査区内部が生産域に相当していたことがうかがえる。また、本層は、先に述べたようにいわゆる「黒ボク土」が再堆積した可能性があるが、V層あるいはV'層などと比較して、腐食含量や養分を保持する能力(CEC)が相対的に高いことから、V層あるいはV'層よりも肥沃な土壌であったと推定される。



第268図 各地点の植物珪酸体組成

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体とイネ科葉部機動細胞珪酸体のそれぞれの総数を基数とした百分率で算出した。なお、●○は1%未満、+はイネ科葉部機動細胞珪酸体の総数が100個未満の試料で産出した種類を示す。

ところで、As-Bの下位に黒色粘土層 (IV層) が堆積する場所 (第7地点・第9地点・第18地点) が生産地とされ、As-Bと黒色粘土層が混在する層位 (㊷層あるいは㊸+IV層) が堆積する地点 (第5地点・第15地点・第21地点) が非生産地とされている。非生産地㊷層あるいは㊸+IV層における土壌化学的性質は、生産地IV層と比較すると劣っていることがわかる。しかし、㊷層あるいは㊸+IV層の中にはAs-Bの軽石が混在しており、IV層と比較して砂分が多い。一般的に砂分が多くなれば腐食含量やCECが低くなることを考慮すると、非生産地の㊷層あるいは㊸+IV層で土壌化学的性質が劣っているのは、As-Bが混在していることに起因していると判断される。一方、イネ属珪酸体の出現傾向をみると、第18地点を除く地点で単細胞珪酸体・機動細胞珪酸体とも検出される。イネ属機動細胞珪酸体の出現率は、非生産地とされている第21地点・第15地点・第5地点の方が若干高い傾向にあるが、各地点とも10%以下と低率である。これより、IV層および

層名	分析項目	第3地点 (生産地)	第2地点 (生産地)	第1地点 (生産地)
III層	P	不明		
	PO			
	S o			
III-a層	P	不明		不明
	PO			
	S o			
III-b層	P	不明	不明	不明
	PO			
	S o			

層位区分

㊷層: As-BとIV層 (黒色粘土層) が攪乱されて混ざっている層である。ただし、第18・9

・7・4・3・2・1地点には本層は認められない。

IV層: As-B直下の黒色粘土層である。

V層: 黒色粘土層直下に認められる。IV層とV層の漸移的な層である。層相は、地点により多少異なり、砂あるいは礫の混じるシルトや粘土質シルト、砂質シルトを呈する。また、土色の黒味も地点により多少異なる。

V層: IV層とは明らかに層相が異なり、灰～灰褐色の砂質シルトである。ただし、第18・15・4・2・1地点には本層は認められない。

P: 花粉分析 (イネ属比率)

PO: 植物珪酸体分析 s: 短細胞珪酸体 b: 機動細胞珪酸体 ●: 検出層位

S o: 土壌化学分析



- 1: 砂含量 (1日盛り: 10%)
- 2: シルト含量 (1日盛り: 10%)
- 3: 粘土含量 (1日盛り: 10%)
- 4: 腐植含量 (1日盛り: 2%)
- 5: リン酸吸収係数 (1日盛り: 500)
- 6: CEC (1日盛り: 10me/100g)

第269図 分析結果のまとめ (1)

標名	分析項目	第12地点 (非生産地)	第13地点 (生産地)	第14地点 (生産地)	第15地点 (非生産地)	第4地点 (生産地)	第2地点 (生産地)	第1地点 (生産地)
②期・ ③+ IV期	P	未分析			不明			
	PO							
	So							
IV期	P	未分析	未分析	不明	不明	不明	不明	不明
	PO							
	So							
V期	P	未分析	未分析	未分析	未分析	未分析	未分析	不明
	PO							
	So							

単位区分
 ②期：A・BとIV期（黒色粘土質）が混在するまで混ざっている層である。ただし、第18・9
 ③期：A・BとIV・3・4・5・1地点には本層は認められない。
 IV期：A・B直下の黒色粘土層である。
 V期：黒色粘土層直下に認められる。IV期とV期の層的な交錯は、地点により、
 多少異なる。砂あるいは礫の混じるシルトや粘土質シルト、砂質シルトを指す。ま
 た、土色の黒褐色の地点により多少異なる。
 V期：IV期とは明らかに層相が異なり、灰〜灰褐色の砂質シルトである。ただし、第18・15
 ・4・2・1地点には本層は認められない。

P：在场分析（ノル風比層）
 PO：植物残渣体分析
 So：土質化学分析

1：砂含量（1日盛り：10%）
 2：シルト含量（1日盛り：10%）
 3：粘土含量（1日盛り：10%）
 4：腐植含量（1日盛り：2%）
 5：リン酸吸収係数（1日盛り：500）
 6：CEC（1日盛り：10me/100g）

第270図 分析結果のまとめ (2)

び⑨層あるいは⑩+IV層とも、ほぼ同様な過程でイネ属珪酸体が供給された可能性がある。これらのことを総合的に考慮すると、区画による土色の違いは、生産地と非生産地とを意味しているものでなく、As-Bが混入したことに由来しており、As-B降灰後の攪乱の影響の違いを反映している可能性がある。以上のように、今回の調査結果から生産地と非生産地が存在していたことを立証することは困難であった。

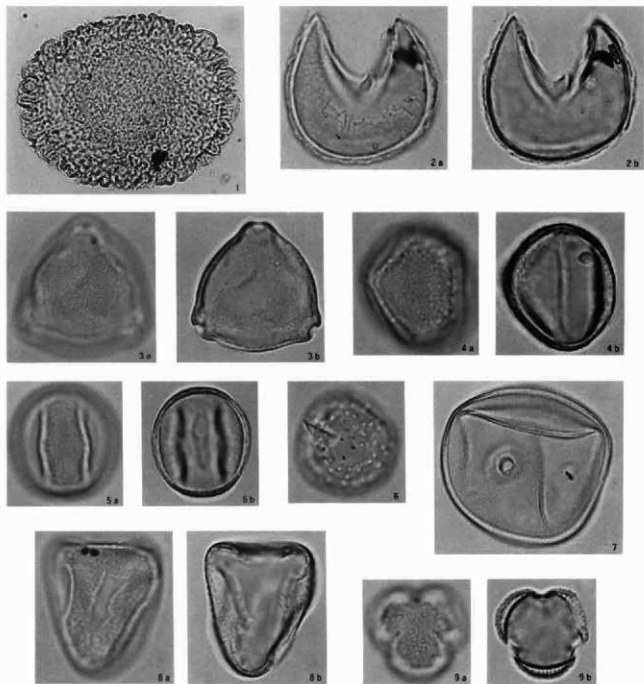
ところで、イネ属に由来する微化石は、V層やV'層からも検出されている。V層あるいはV'層におけるイネ属花粉化石がイネ科花粉の中で占める割合（イネ属比率）は約30%である。現在の水田耕作土における花粉の動態研究を行った結果、イネ科かふんの中でイネ属花粉が30%以上検出されるならば、その近傍で現在に近い集約度で稲作が行われていたとみなしてよいとされている（鈴木・中村, 1977）。植物珪酸体では、地点により出現率に若干の差が認められるが、短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体ともに検出され、IV層よりも多く検出される傾向がある。これより、古墳時代～古代の頃、谷内部で稲作が行われていた可能性がある。また、第1地点・第2地点・第3地点でみられるように、As-Bより上位でもイネ属珪酸体が検出されていることを考慮すると、As-B降灰後も稲作が行われていた可能性がある。

7. 遺跡周辺の古環境の概要

V層～IV層が堆積した頃、谷内部の湿った場所にはガマ属・オモダカ属・ヨシ属・コブナグサ属・ミズアオイ属などの水生植物が生育していたとみられる。また、周辺には、タケ亜科・ウシクサ族・イチゴツナギ亜科などのイネ科やカヤツリグサ科などの草本類が分布していたのであろう。ところで、タケ亜科ネザサ節は、地面に光の射す場所に生育する（室井, 1960）ことから、比較的開けた場所で分布していたと考えられる。一方、V層が堆積したところからAs-Bが降灰する直前の頃まで、周辺は落葉広葉樹のコナラ亜属・クマシデ属-アサダ属の常緑広葉樹のアカガシ亜属から構成されていたと判断できる。この他にも、スギ属・ニレ属-ケヤキ属などの樹種も森林構成種として存在していた可能性がある。ところで、アカガシ亜属は暖温帯常緑広葉樹林（照葉樹林）の主要構成要素である。また、この他にも現在冷温帯に分布の中心があるカバノキ属・ブナ属・トチノキ属も検出されている。これらのことより、当時は種類構成の豊富な植生が存在していた可能性がある。

<引用文献>

- 新井原夫 (1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の指標テフラ層, 考古学ジャーナル, 157, p. 41-52.
茂牧重雄 (1968) 浅間火山の地質, 地学連体研究会専報, 14, 45p.
土壌標準分析・測定法委員会編 (1986) 土壌標準分析・測定法, 354p., 博友社.
近藤謙三 (1988) 十二遺跡の植物珪酸体分析, 御代田町教育委員会編「鉦師屋遺跡群十二遺跡-長野県北佐都御代田町十二遺跡発掘調査報告書」, 423p.; p. 377-383.
近藤謙三・佐藤隆 (1986) 植物珪酸体分析, その特性と応用, 第四紀研究, 25, p. 31-64.
熊田恭一・太田信雄 (1967) 中部地方の土壌腐食の形態, 土壌肥料科学会誌, 38, p. 267-274.
熊田恭一 (1977) 土壌有機物の化学, 220p., 東京大学出版会.
熊田恭一 (1977) 土壌有機物の化学 (第2版), p. 44-45, 学会出版センター.
京都大学農学部農芸化学教室編 (1957) 農芸化学実験書 (第1巻), 411p., 産業図書.
室井紳 (1960) 竹藪の生態を中心とした分布, 富士竹類植物園報告, p. 103-122.
大羽 裕 (1964) 弘法・大羽流, ベドリジスト, 8, p. 106-116.
大羽 裕・永塚銀男 (1968) 土壌生成分類学, p. 152-158, 費賢堂.
大塚敏雄 (1974a) 断面形態と表土および腐食貫注層の腐食の形態-鹿兒島県垂水市大野原の火山性土壌に関する研究 (第1報) 一, 土壌肥料科学誌, 45, p. 197-203.



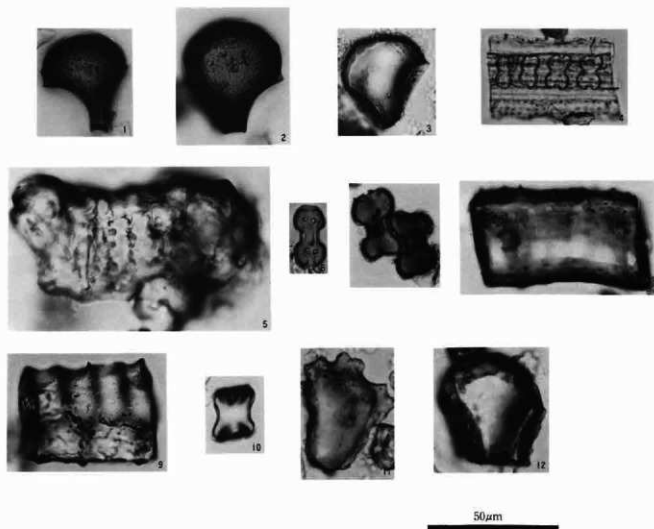
100 μ

50 μ (1)

(2-9)

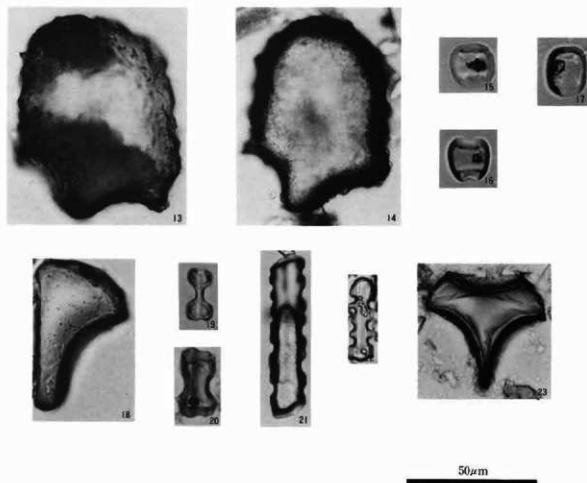
- | | |
|-----------------------|----------------------|
| 1.ツガ属 (第5地点 2) | 2.スギ属 (第5地点 2) |
| 3.クマシダ属-アサダ属 (第5地点 2) | 4.コナラ属コナラ亜属 (第5地点 2) |
| 5.コナラ属アカガシ亜属 (第5地点 2) | 6.オモダカ属 (第5地点 2) |
| 7.イネ科 (第5地点 2) | 8.カヤツリグサ科 (第5地点 2) |
| 9.ヨモギ属 (第5地点 2) | |

図版 2 植物珪酸体



- 1.イネ属：葉身機動細胞由来（第2地点 4）
 3.イネ属：葉身機動細胞由来（第3地点 3）
 5.イネ属：葉身機動細胞由来（第3地点 5）
 7.キビ属：葉部短細胞列（第5地点 1）
 9.ネザヤ属：葉身機動細胞由来；側面（第5地点 2）
 11.タケ亜科：葉身機動細胞由来（第3地点 4）

- 2.イネ属：葉身機動細胞由来（第5地点 2）
 4.イネ属：葉部短細胞列（第15地点 2）
 6.キビ属：葉部短細胞由来（第2地点 4）
 8.キビ属：葉身機動細胞由来；側面（第5地点 2）
 10.ネザヤ属：葉部短細胞由来（第9地点 1）
 12.タケ亜科：葉身機動細胞由来（第18地点 1）



(図版3 植物珪酸体の説明)

13. ヨシ属：葉身機動細胞由来 (第2地点 4)

15. ヨシ属：葉部短細胞由来 (第2地点 4)

17. ヨシ属：葉部短細胞由来 (第18地点 1)

19. ススキ属：葉部短細胞由来 (第7地点 1)

21. イチゴツナギ亜科：葉部短細胞由来 (第3地点 5)

23. シバ属：機動細胞由来 (第3地点 3)

14. ヨシ属：葉身機動細胞由来 (第7地点 1)

16. ヨシ属：葉部短細胞由来 (第7地点 1)

18. ウシクサ属：葉身機動細胞由来 (第7地点 1)

20. コブナグサ属：葉部短細胞由来 (第18地点 1)

22. イチゴツナギ亜科：葉部短細胞由来 (第21地点 1)

報 告 書 抄 録

フリガナ	タクミヒナタシュウチイセキ シモタカセテラヤマイセキ シモタカセマエダイセキ
書名	内匠日向周地遺跡 下高瀬寺山遺跡 下高瀬前田遺跡
副書名	関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	第31集
シリーズ名	群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告
シリーズ番号	第188集
編著者名	新井 仁
編集機関	群馬県埋蔵文化財調査事業団
編集機関所在地	〒377 群馬県勢多郡北橋村下箱田784-2 TEL 0279-52-2511
発行年	西暦1995年3月27日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
内匠日向周地 下高瀬寺山 下高瀬前田	富岡市内匠	102105	00298	36°14'15"	138°53'00"	19890306	11,300	道路建設
	富岡市下高瀬	102105	00300			}	2,150	
	富岡市下高瀬	102105	00400			19910316	5,000	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
内匠日向周地	集落	縄文時代	住居状遺構	2基	縄文時代早期・前期 土器・石器	縄文時代早期の 押型文土器出土	
			土坑	4基			
	生産 遺跡	}	古墳時代	竪穴住居	8軒	古墳時代前期土師器	谷津状遺構から 木簡3点出土
			平安時代	谷津状遺構	2	古墳時代後期～平安時代 土師器・須恵器・木器	
中世以降	溝・暗渠	24条	中近世		陶磁器・土器・石製品		
	水田・畠	2面					
下高瀬寺山	集落	旧石器時代			細石核・細石刃・尖頭器	旧石器出土	
		縄文時代	竪穴住居	7軒	縄文時代前期土器・石器	縄文時代前期諸 磯b式期の集落	
			土坑	21基			
		奈良時代	竪穴住居	3軒	土師器・須恵器		
時期不明	土坑	19基					
下高瀬前田	生産 遺跡 墓地	奈良時代	竪穴住居	1軒	土師器	浅間A礫石下の 畠検出	
			畠	1面	陶磁器・土器		
			墓	2	墓石		

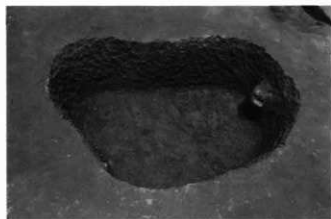
写真図版



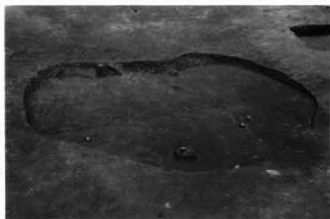
遺跡遠景（東上空から）



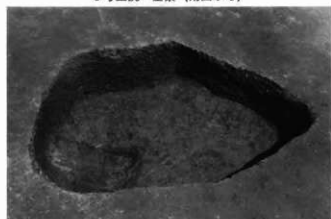
全 景（南上空から）



6号土坑 全景 (南西から)



7号土坑 全景 (南西から)



8号土坑 全景 (南から)



17号土坑 全景 (北から)



11号住居跡 全景 (北から)

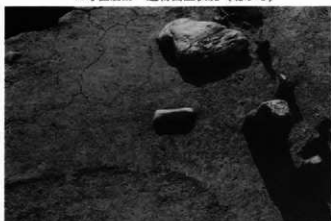
図版3 内匠日向周地遺跡



11号住居跡 遺物出土状況（北から）



11号住居跡 北側遺物出土状況（北から）



11号住居跡 炉（北から）



11号住居跡 掘り方全景（北から）



11号住居跡 全景（南から）



1号住居跡 掘り方全景 (南から)



2号住居跡 カマド全景 (東から)



2号住居跡 カマド遺物出土状況



2号住居跡 掘り方全景 (東から)



3号住居跡 遺物出土状況 (南から)



3号住居跡 全景 (南から)



3号住居跡 貯蔵穴遺物出土状況 (南から)



3号住居跡 カマド全景 (南から)



3号住居跡 カマド袖石出土状況 (西から)



3号住居跡 振り方全景 (南から)



4号住居跡 全景 (南から)



4号住居跡 西側遺物出土状況 (南から)



4号住居跡 貯蔵穴遺物出土状況 (南から)



4号住居跡 カマド全景 (南から)



4号住居跡 掘り方全景 (南から)

図版7 内匠日向周地遺跡



5号住居跡 遺物出土状況 (西から)



5号住居跡 全景 (西から)



5号住居跡 カマド (西から)



5・6号住居跡 掘り方全景 (南から)



6号住居跡 全景 (南から)



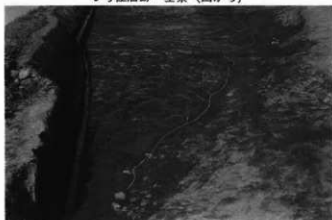
6号住居跡 カマド(南から)



9号住居跡 全景(西から)



9号住居跡 カマド(西から)



浅間B軽石下水田 A区東側(東から)



浅間B軽石下水田 A区西側(東から)



浅間B軽石下水田 A区西端部(東から)



浅間B軽石下水田 B区全景(北東から)



浅間B軽石下水田 B区全景(西から)



浅間B軽石下水田 B区全景(空撮)



浅間B軽石下水田 B区西側(空撮)



浅間B軽石下水田 B区東側(空撮)



浅間B軽石下水田 柵列(北から)



浅間B軽石下水田 C区全景(南から)



1号溜井 全景 (南から)



2号溜井 全景 (南東から)



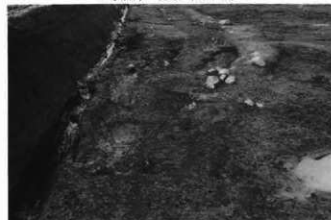
3号溜井 全景 (南から)



4号溜井 全景 (南から)



19・20号溝 全景 (東から)



22号溝 全景 (東から)



24号溝 全景 (東から)



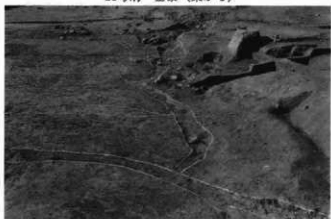
25号溝 全景 (北から)



26号溝 全景 (東から)



27号溝 全景 (東から)



28号溝 全景 (東から)



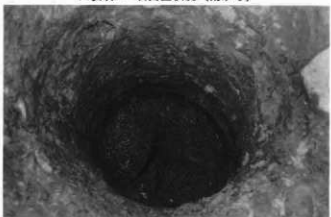
30号溝 全景 (東から)



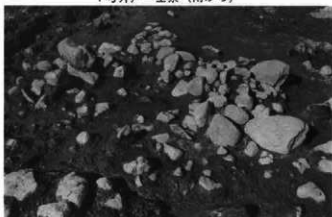
1号井戸 石出土状況 (南から)



1号井戸 全景 (南から)



1号井戸 底部 (南から)



3号集石 全景 (南から)



1号谷津状遺構 遺物出土状況(南から)



1号谷津状遺構 全景(東から)



2号谷津状遺構 A区遠景(西から)



2号谷津状遺構 A区西側(西から)



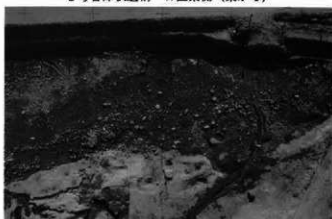
2号谷津状遺構 A区中央(西から)



2号谷津状遺構 A区東側(東から)



2号谷津状遺構 B区遠景(東から)



2号谷津状遺構 B区西側(北から)

図版13 内匠日向周地遺跡



2号谷津状遺構 B区中央部(北から)



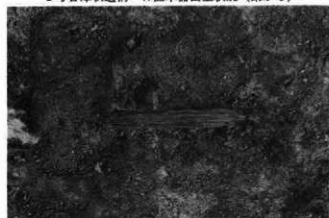
2号谷津状遺構 B区東側(北から)



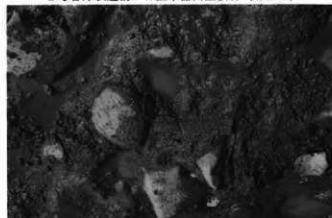
2号谷津状遺構 A区木器出土状況(東から)



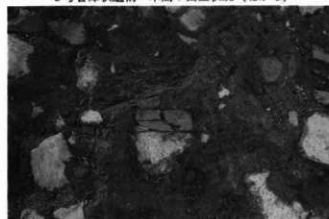
2号谷津状遺構 A区木器出土状況(北から)



2号谷津状遺構 木簡1出土状況(北から)



2号谷津状遺構 木簡2出土状況(南から)



2号谷津状遺構 木簡3出土状況(東から)



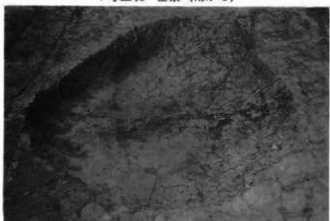
2号谷津状遺構 A区南壁土層断面(IV20~22Gr付近)



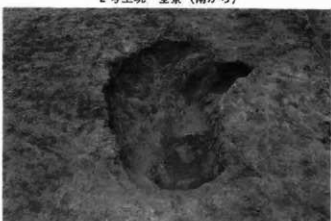
1号土坑 全景 (南から)



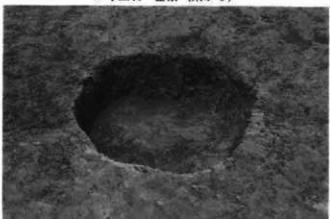
2号土坑 全景 (南から)



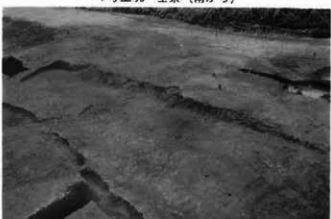
3号土坑 全景 (東から)



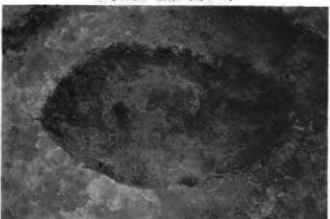
4号土坑 全景 (南から)



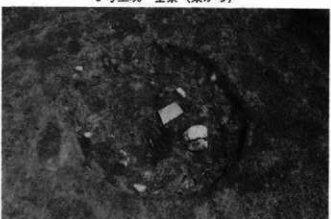
5号土坑 全景 (南から)



9号土坑 全景 (東から)



10号土坑 全景 (南から)



11号土坑 全景 (南から)

図版15 内匠日向周地遺跡



15号土坑 全景 (東から)



1号溝 全景 (南から)



2号溝 全景 (南から)



3号溝 全景 (南から)



4号溝 全景 (南から)



5号溝 全景 (南から)



6・7号溝 全景 (南から)



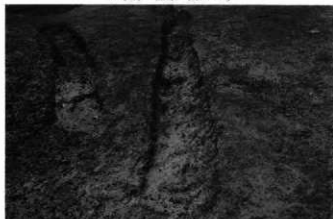
8号溝 全景 (東から)



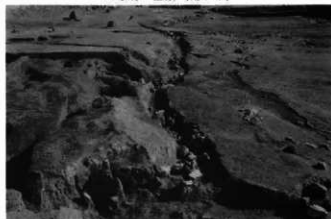
9号溝 全景 (東から)



12号溝 全景 (南から)



13・14号溝 全景 (北から)



15号溝 全景 (西から)



23号溝 全景 (北から)



29号溝 全景 (東から)



1号暗渠 (南東から)



1号暗渠 振り方 (南東から)

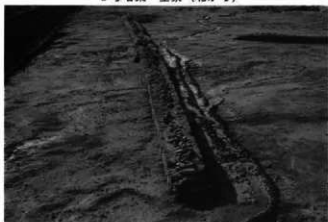
図版17 内匠日向周地遺跡



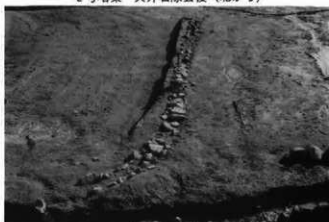
2号暗渠 全景(北から)



2号暗渠 天井石除去後(北から)



3号暗渠 全景(東から)



4号暗渠 全景(北から)



4号暗渠 天井石除去後(北から)



5号暗渠 全景(北から)



5号暗渠 板碑出土状況(北から)



5号暗渠 天井石除去後(北から)



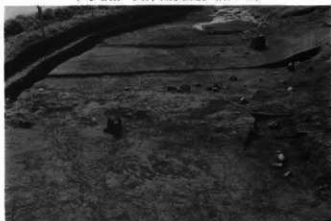
6号暗渠 全景(東から)



6号暗渠 天井石除去後(東から)



中世水田 全景(東から)



中世水田 大畦(東から)



近世水田 中央部(東から)



近世畠 全景(北から)

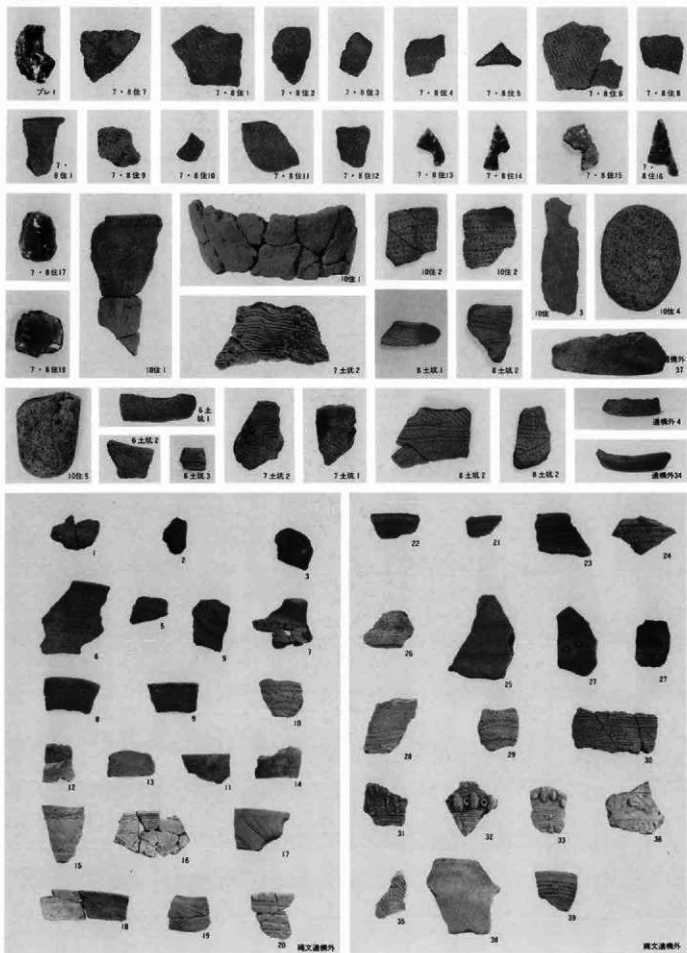


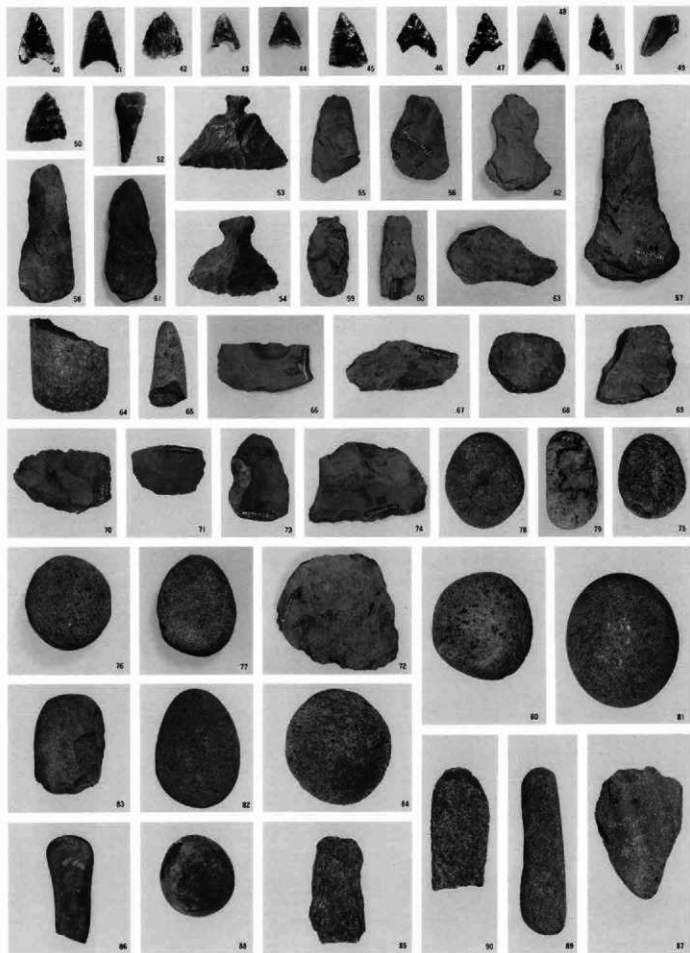
近世石堰(北から)



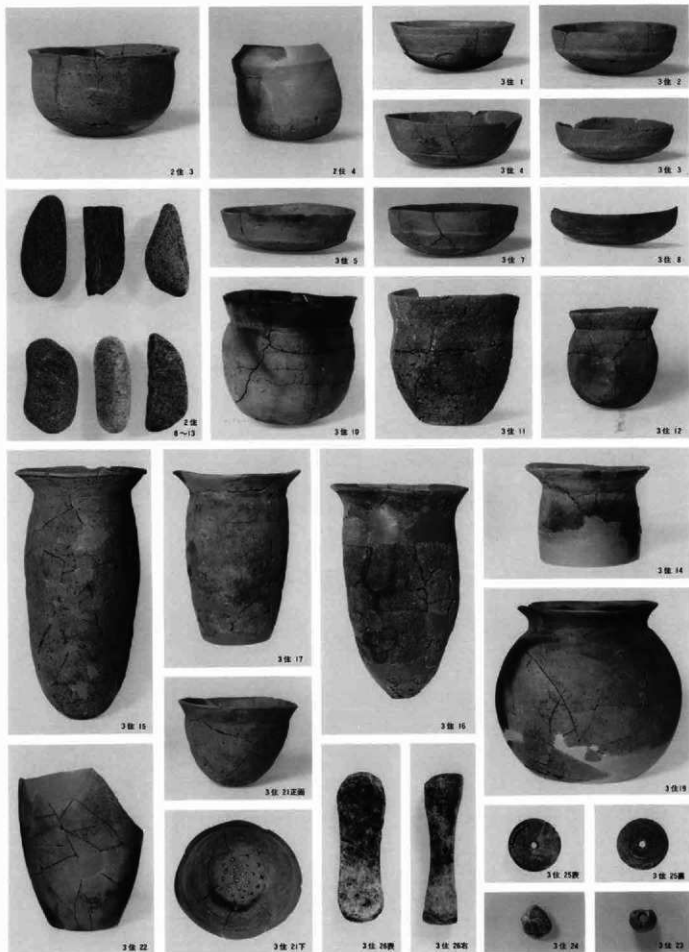
2号谷状遺構 調査風景

図版19 内匠日向周地遺跡

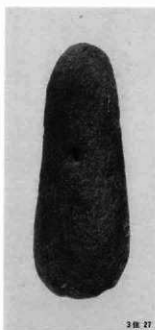


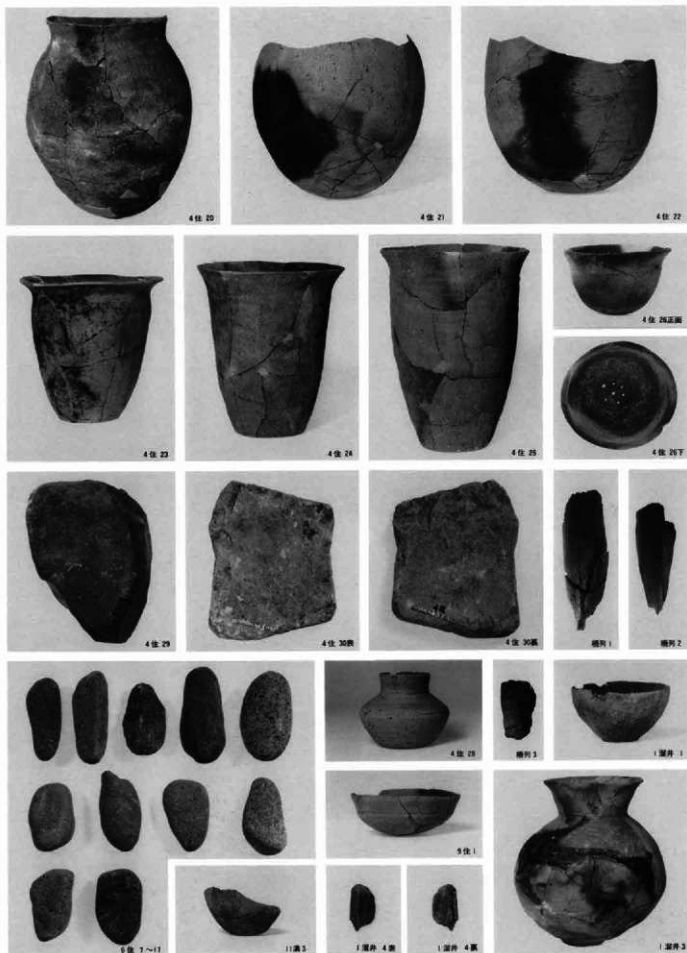






图版23 内匠日向周地遺跡





图版25 内匠日向周地遺跡



2 器片 1



3 器石 5



1 器片 5



2 器片 2



3 器石 1



1 器片 3



1 器片 7



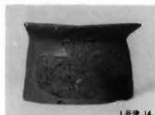
3 器石 3



1 器片 4



1 器片 6



1 器片 14



1 器片 13



1 器片 12



1 器片 19



1 器片 10



1 器片 18



1 器片 20



1 器片 22



(谷津2)



2谷津木簡3裏

2谷津木簡3裏



2谷津木簡3 表外写真



2谷津木簡3 表外写真



2谷津木簡2 表外写真



2谷津木簡1裏



2谷津木簡1裏



2谷津木簡2裏



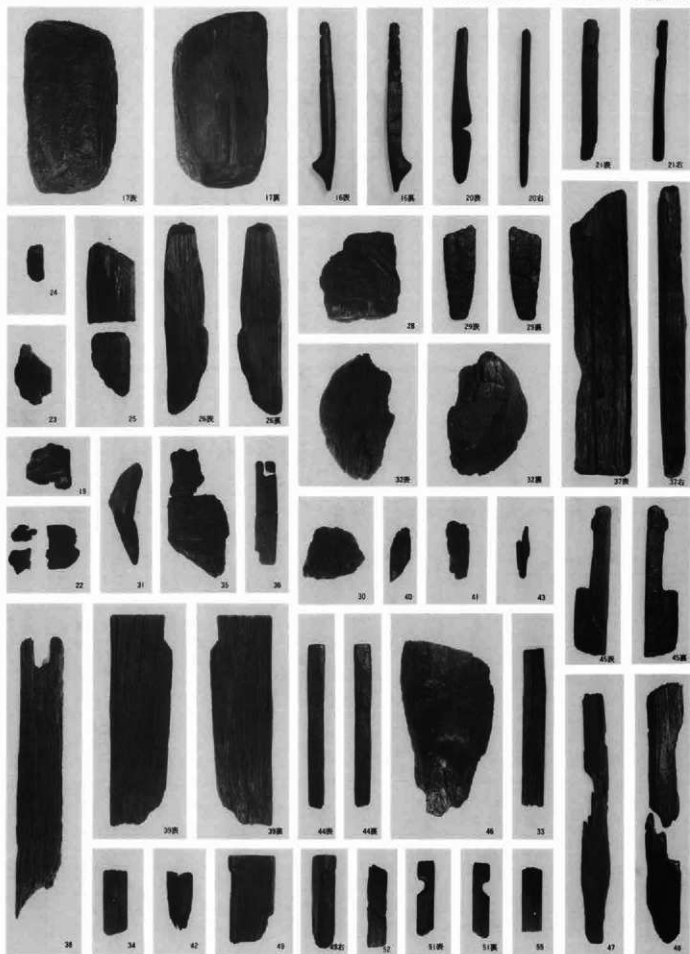
2谷津木簡2裏



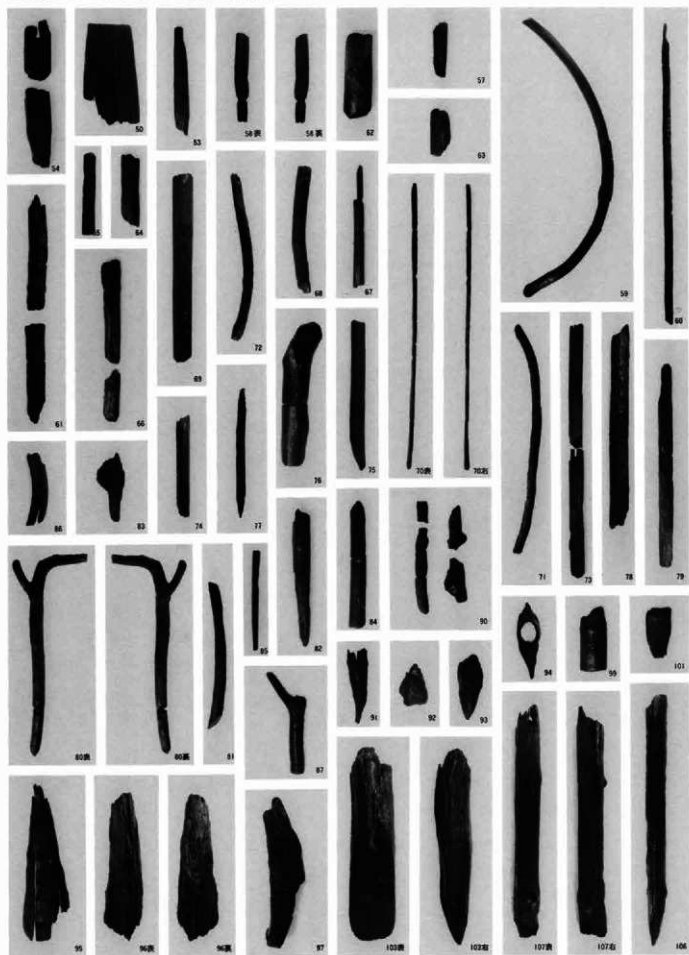
2谷津木簡1 表外写真

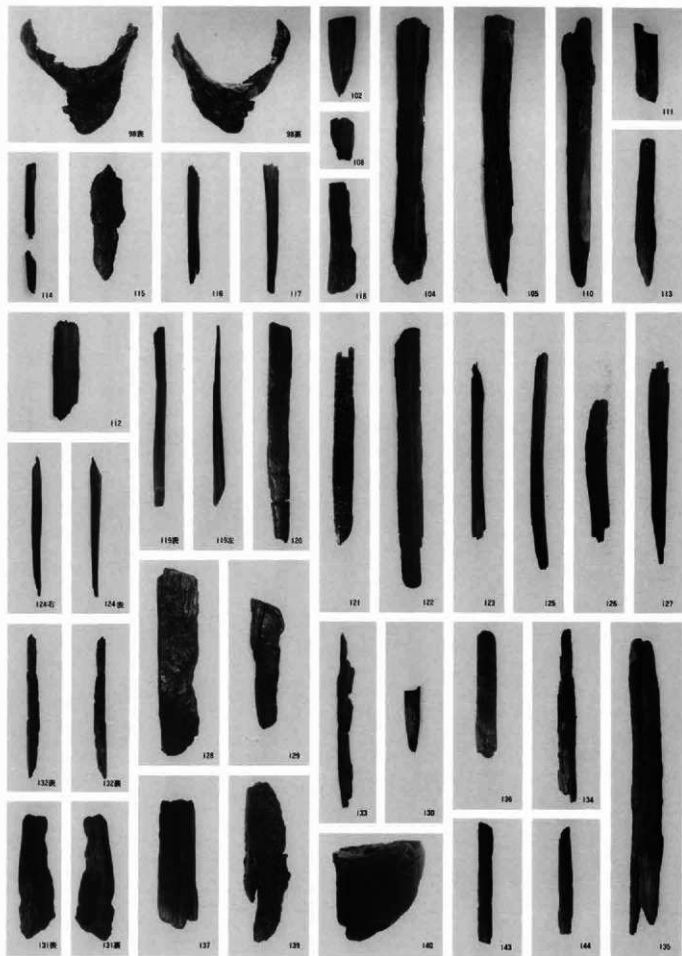
图版27 内匠日向周地遺跡 2号谷津状遺構



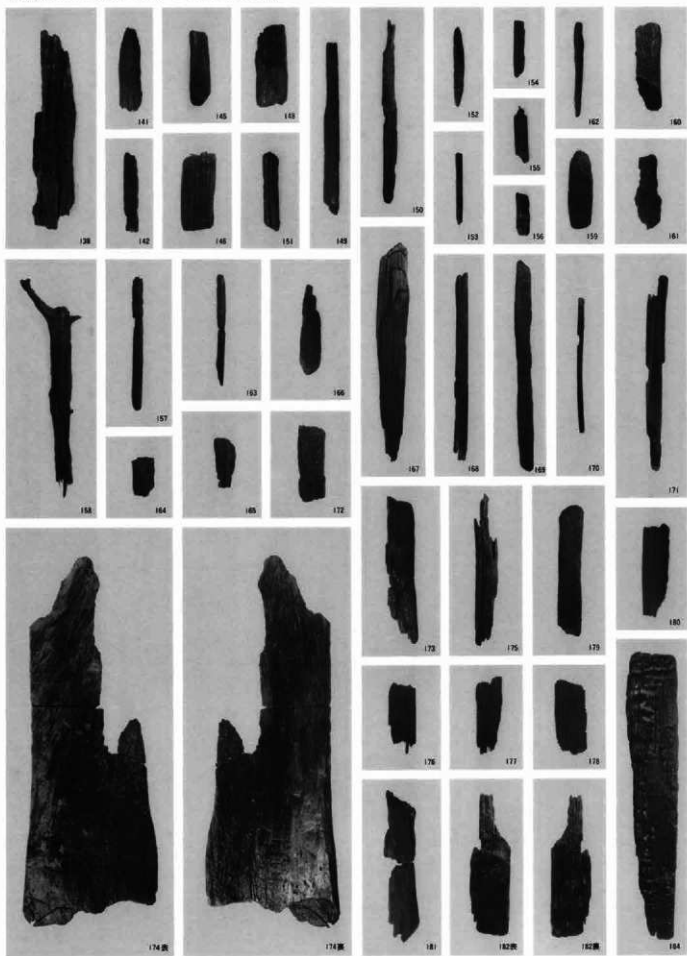


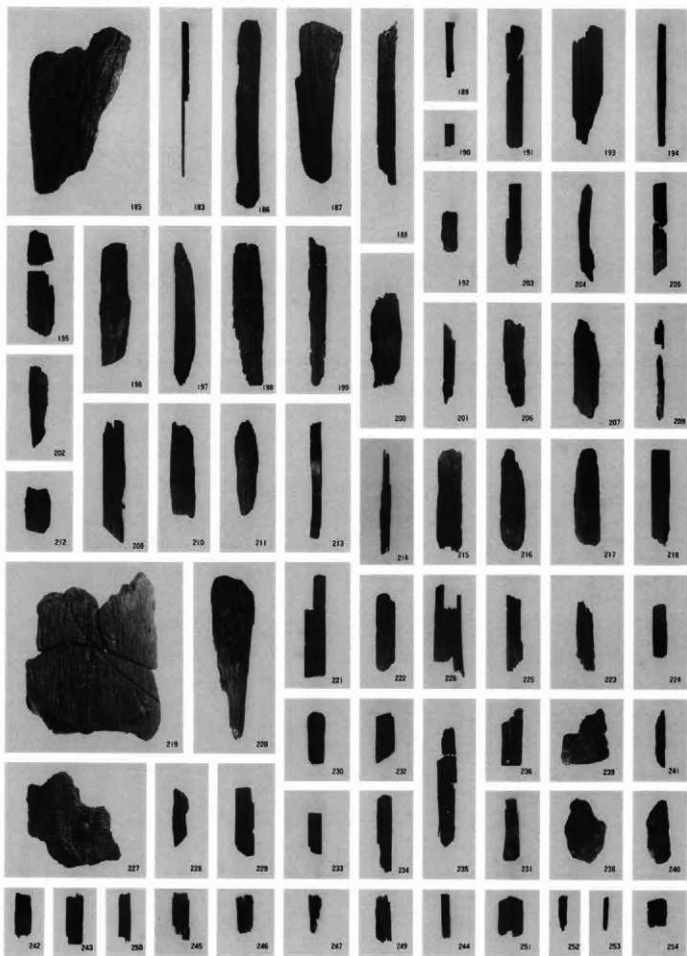
図版29 内匠日向周地遺跡 2号谷津状遺構木器



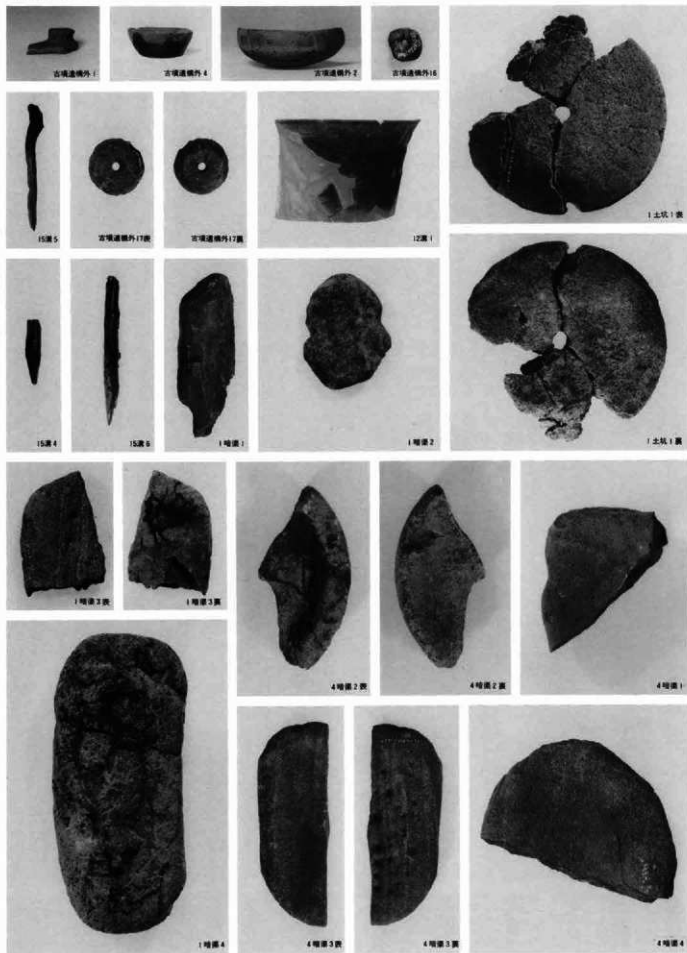


图版31 内匠日向周地遺跡 2号谷津状遺構木器





図版33 内匠日向周地遺跡





5号器：表



5号器：裏



6号器1



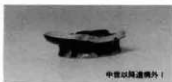
中世水田1



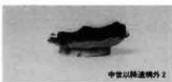
6号器1



中世水田2



中世以降遺物外1



中世以降遺物外2



北側調査区 全景 (南から)



北側調査区 全景 (プレ調査後) (南から)



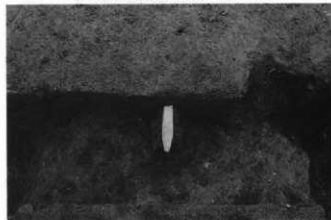
南側調査区 全景（東から）



旧石器調査区拡張区全景（北から）



細石核出土状況（北から）



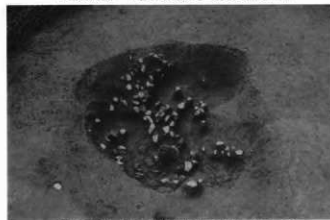
ポイント出土状況（西から）



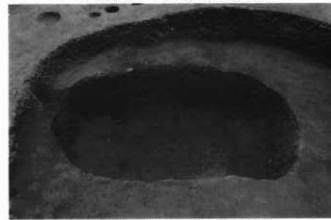
4号住居跡 中央部遺物出土状況（南から）



4号住居跡 掘り方全景（東から）

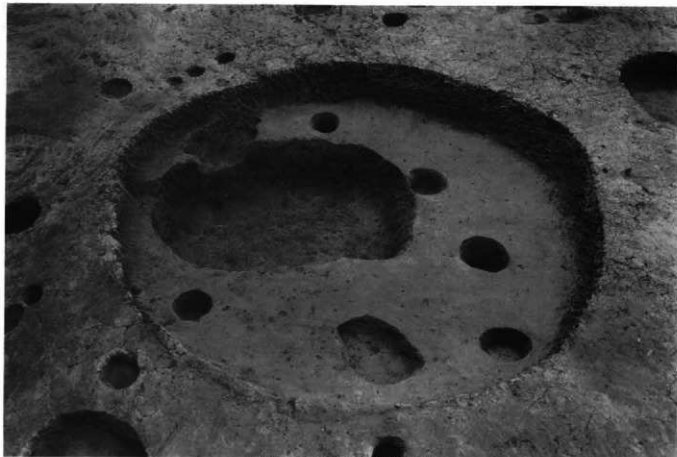


6号住居跡 床下土坑遺物出土状況（東から）



6号住居跡 床下土坑掘り方（北から）

図版37 下高瀬寺山遺跡



6号住居跡 掘り方全景（北から）



7号住居跡 全景（南から）



7号住居跡 中央部遺物出土状況(南から)



7号住居跡 埋設土器(南から)



8号住居跡 遺物出土状況(北から)



8号住居跡 埋設土器(南から)



8号住居跡 全景(北から)

図版39 下高瀬寺山遺跡



10号住居跡 遺物出土状況 (南東から)



10号住居跡 埋設土器 (東から)



10号住居跡 全景 (東から)



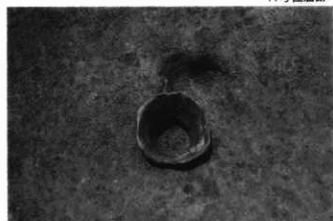
10号住居跡 掘り方全景 (東から)



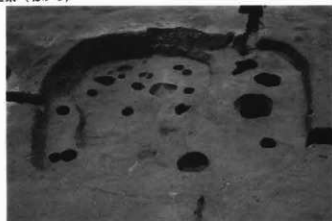
11号住居跡 中央部遺物出土状況 (南から)



11号住居跡 全景（北から）



11号住居跡 埋設土器（北から）



8・11号住居跡 掘り方全景（東から）



12号住居跡 中央部遺物出土状況（北から）



12号住居跡 石皿出土状況（北から）



12号住居跡 全景（東から）



12号住居跡 埋設土器出土状況（南西から）



12号住居跡 掘り方全景（東から）



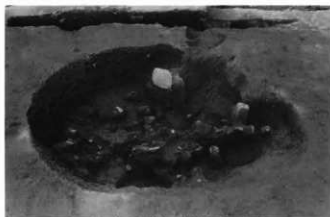
5号住居跡 全景（南から）



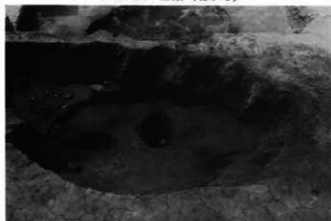
3号土坑 全景（東から）



5号土坑 全景 (北から)



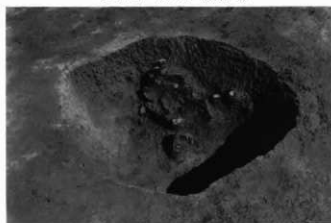
9号土坑 遺物出土状況 (東から)



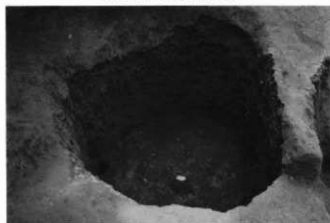
9号土坑 掘り方 (東から)



10号土坑 全景 (北から)



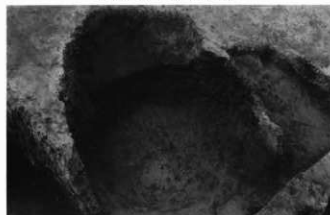
12号土坑 全景 (西から)



13号土坑 全景 (北から)



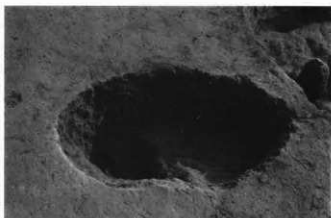
15号土坑 全景 (西から)



16号土坑 全景 (北から)



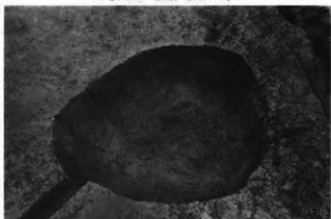
22号土坑 全景 (東から)



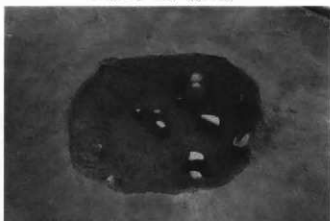
23号土坑 全景 (北から)



24号土坑 全景 (南から)



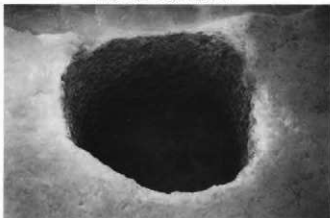
26号土坑 全景 (北から)



28号土坑 全景 (南から)



29号土坑 遺物出土状況



30号土坑 全景 (北から)



32号土坑 遺物出土状況 (東から)



35号土坑 全景 (西から)



41号土坑 全景 (北から)



42号土坑 全景 (北から)



3号住居跡 炉 (北西から)



3号住居跡 全景 (東から)



1号住居跡 全景 (西から)



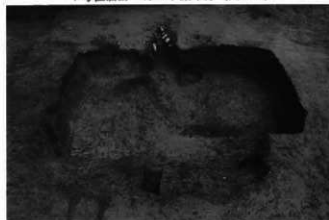
1号住居跡 カマド (西から)



1号住居跡 カマド振り方 (西から)



1号住居跡 貯蔵穴 (西から)



1号住居跡 振り方全景 (西から)



9号住居跡 全景(西から)



9号住居跡 カマド(西から)



1号土坑 全景(北から)



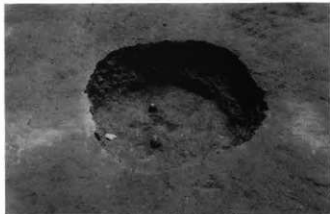
2号土坑 全景(北から)



4号土坑 全景(東から)



6号土坑 全景 (北から)



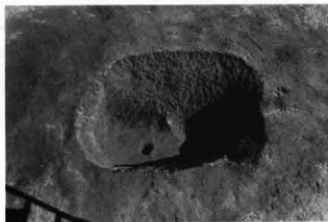
7号土坑 全景 (西から)



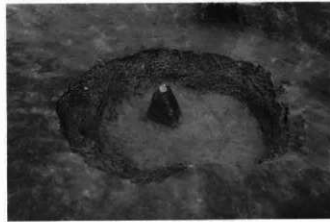
8号土坑 全景 (北から)



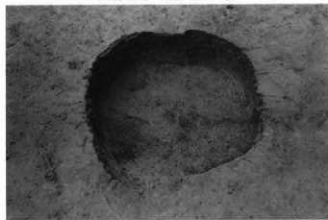
11号土坑 全景 (北から)



14号土坑 全景 (西から)



17号土坑 全景 (南から)



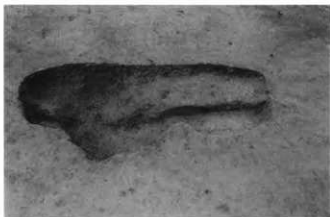
18号土坑 全景 (東から)



19号土坑 全景 (東から)



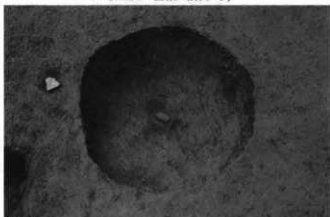
20号土坑 全景 (南から)



21号土坑 全景 (東から)



31号土坑 全景 (南から)



36号土坑 全景 (東から)



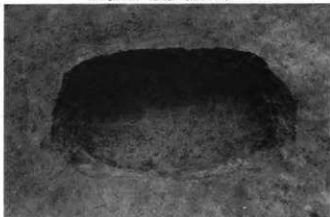
37号土坑 全景 (南から)



38号土坑 全景 (東から)



39号土坑 全景 (東から)



40号土坑 (北東から)



1号集石 全景 (北から)



2号集石 全景 (南から)



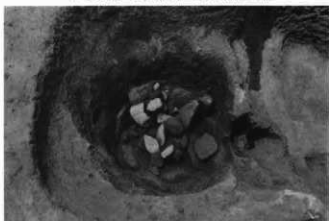
3号集石 全景 (東から)



4号集石 上面石出土状況 (東から)



4号集石 中層石出土状況 (東から)



4号集石 下層石出土状況 (東から)

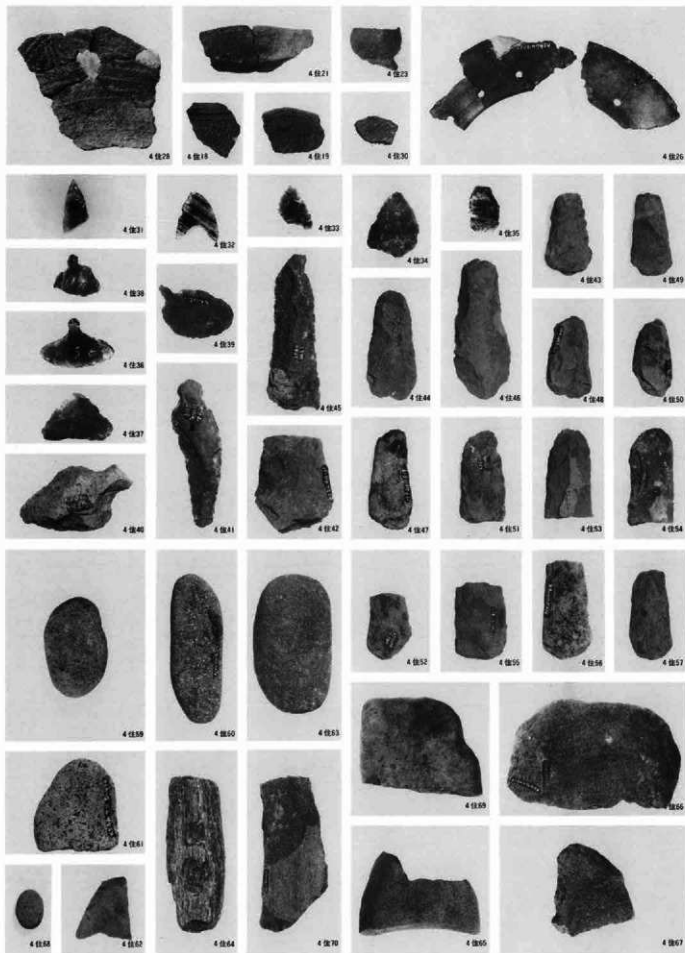


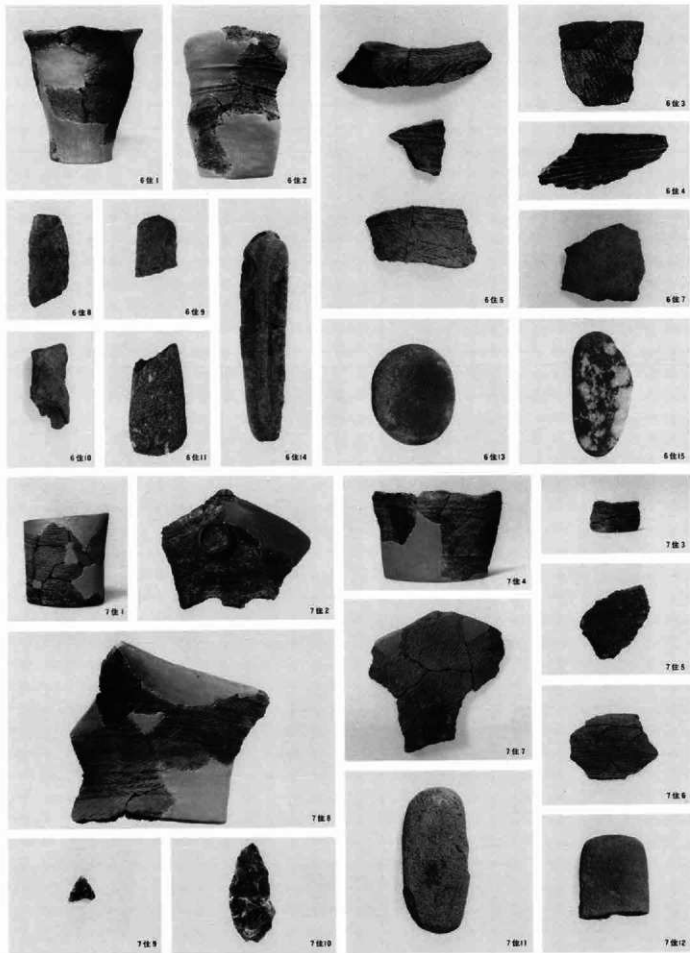
5号集石 全景 (東から)



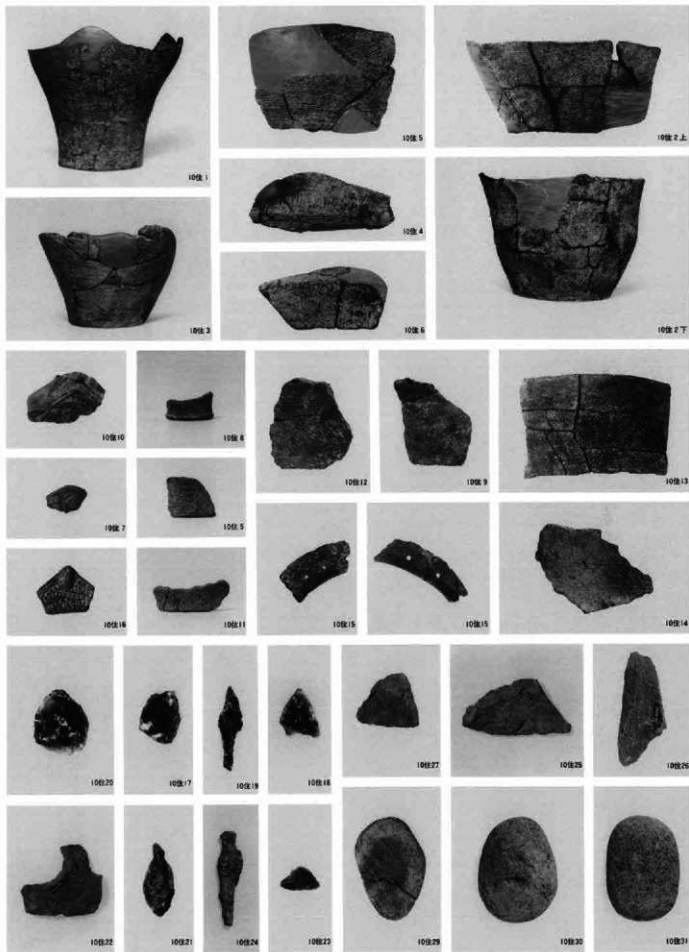
6号集石 石出土状況 (東から)

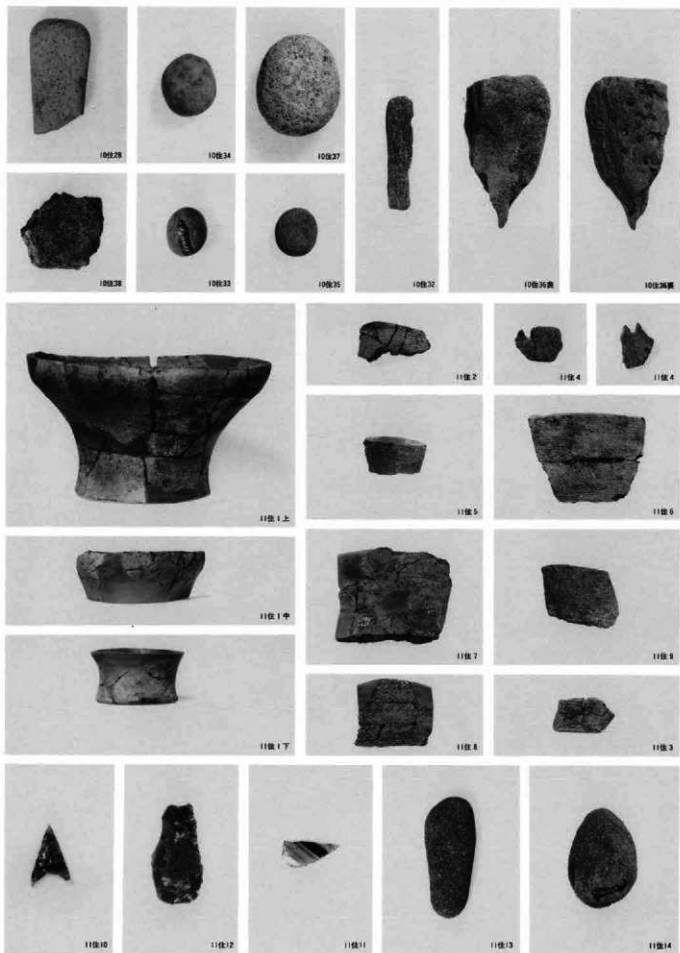


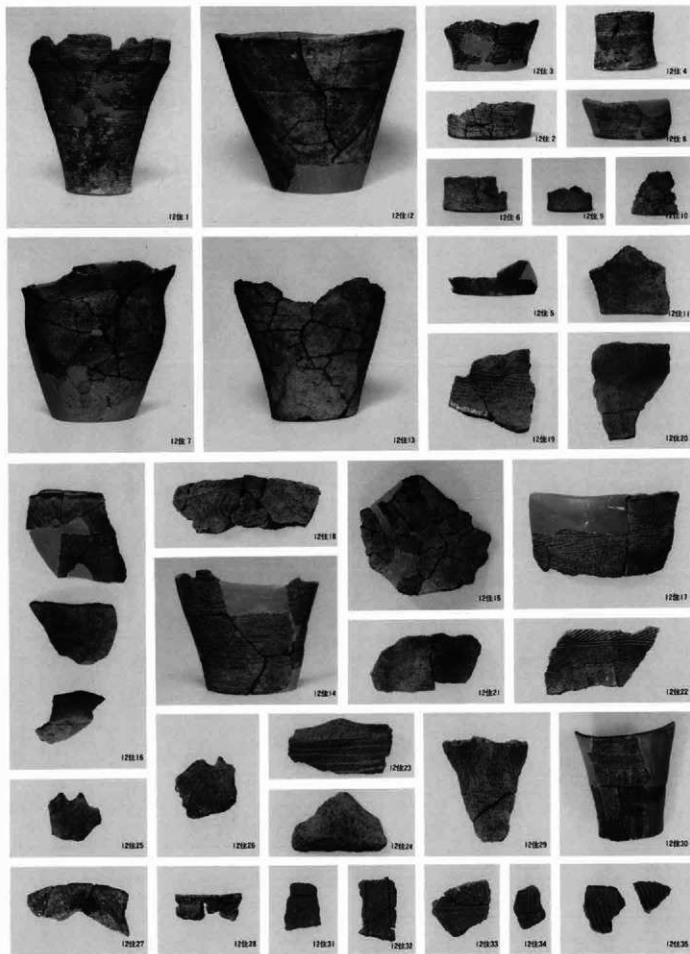




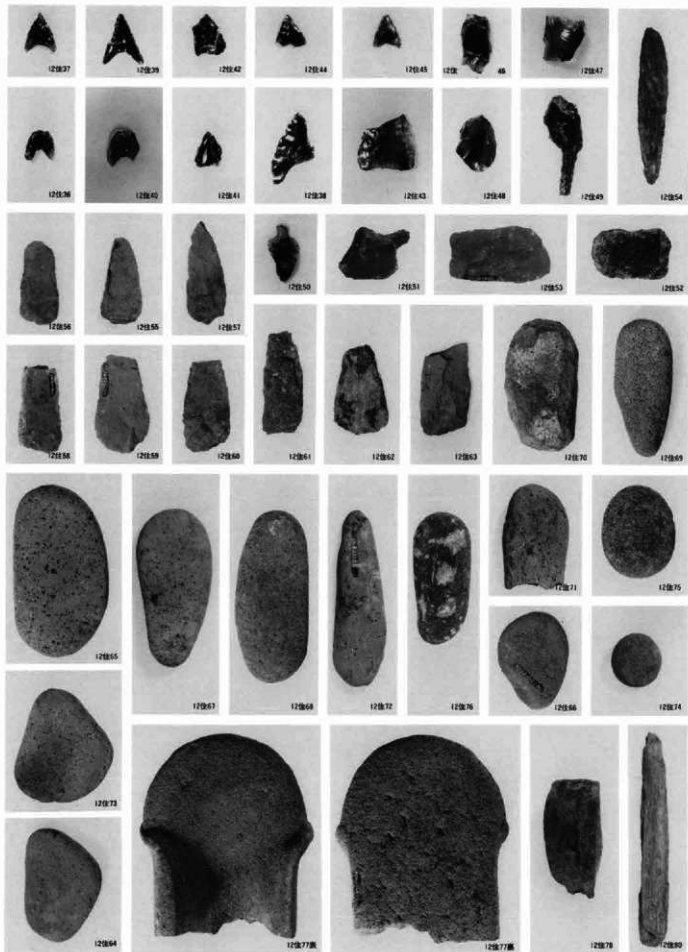


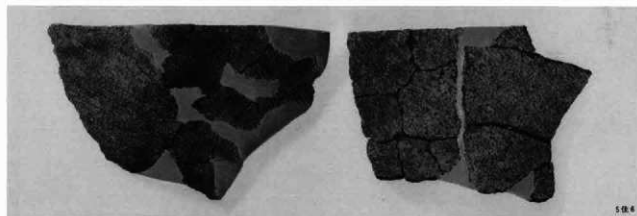
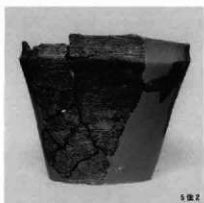


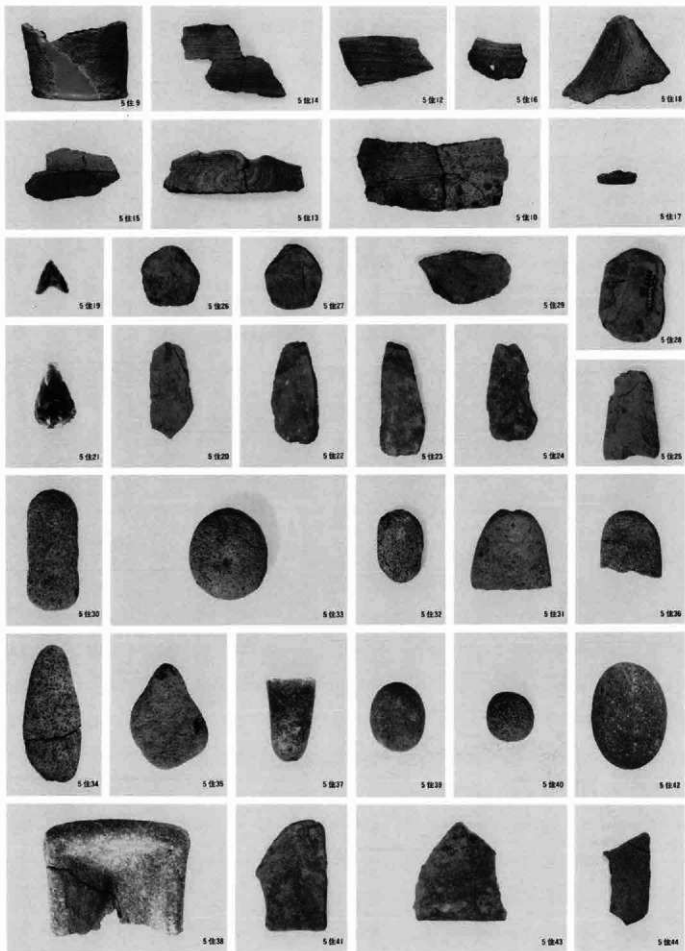


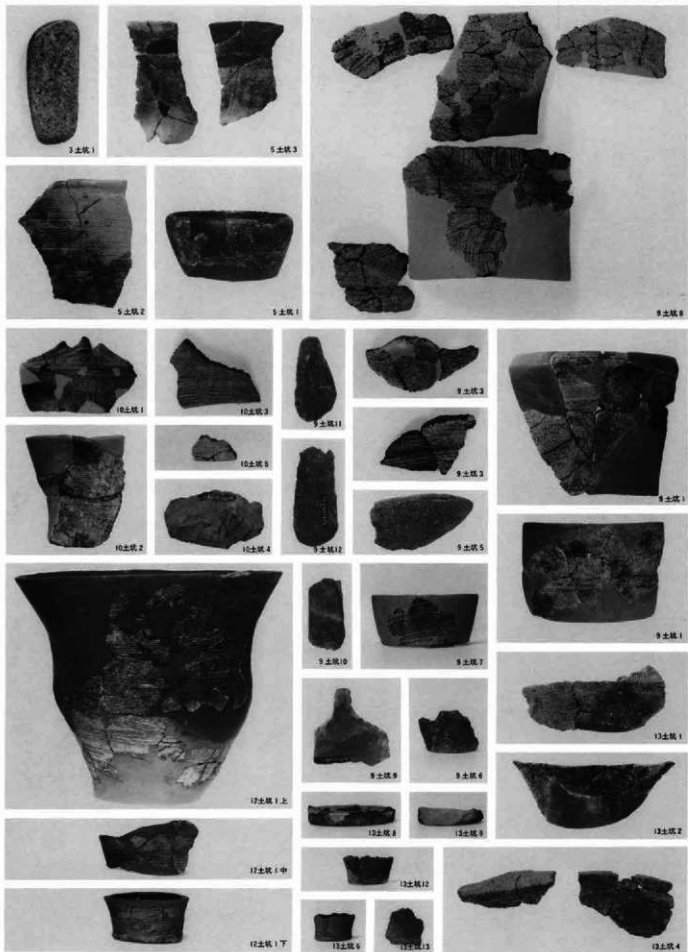


図版57 下高瀬寺山遺跡



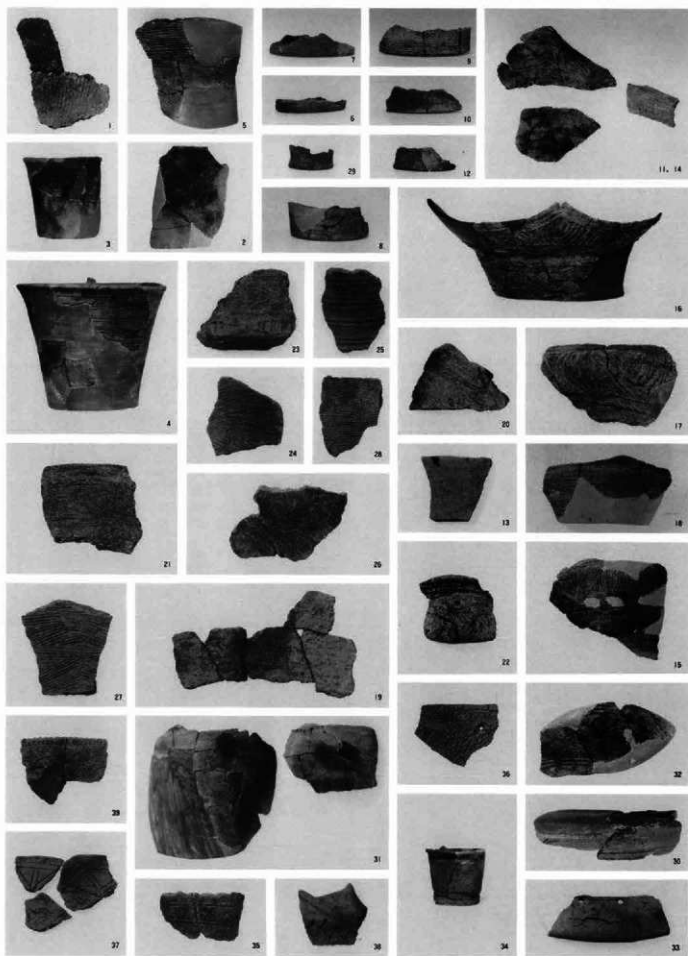




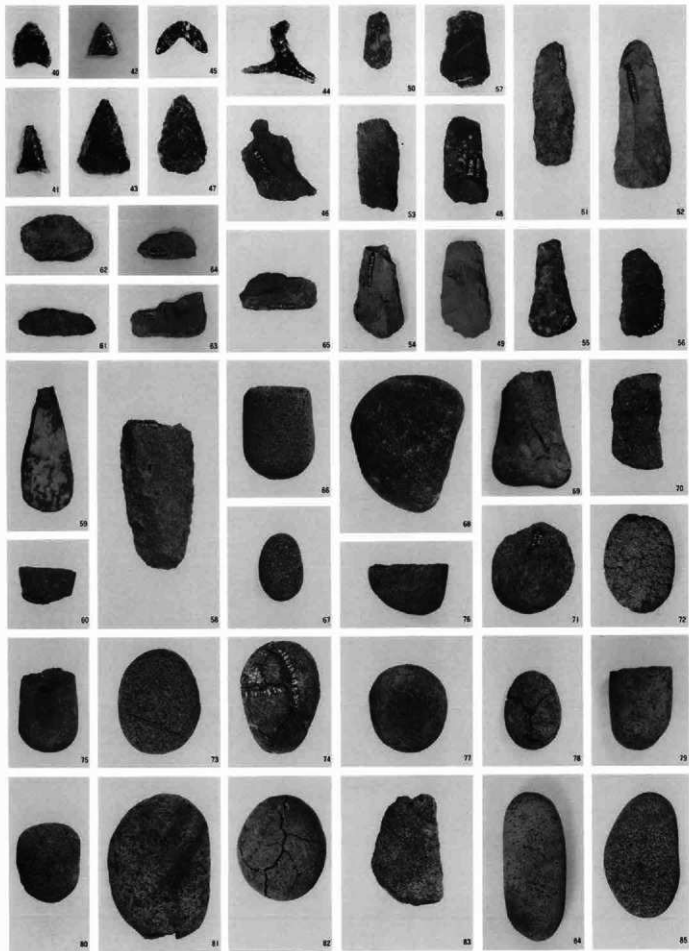


図版61 下高瀬寺山遺跡

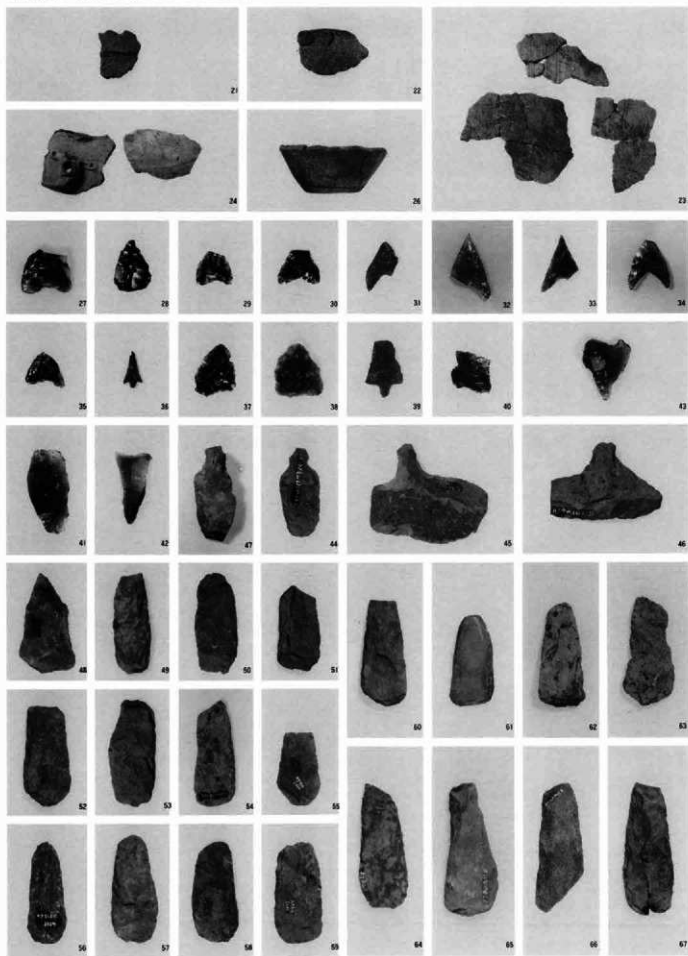


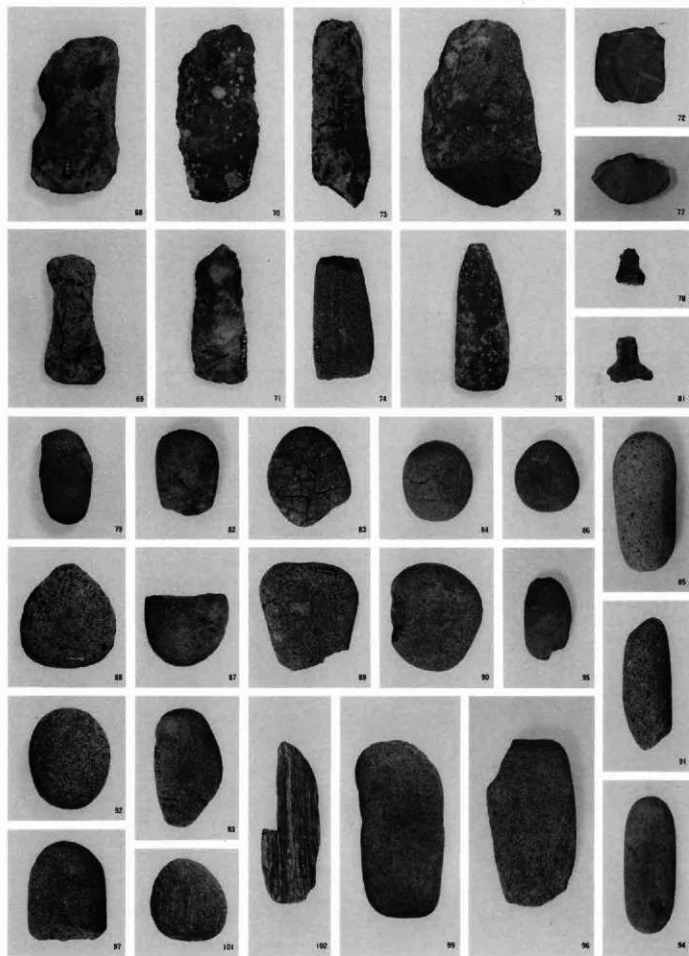


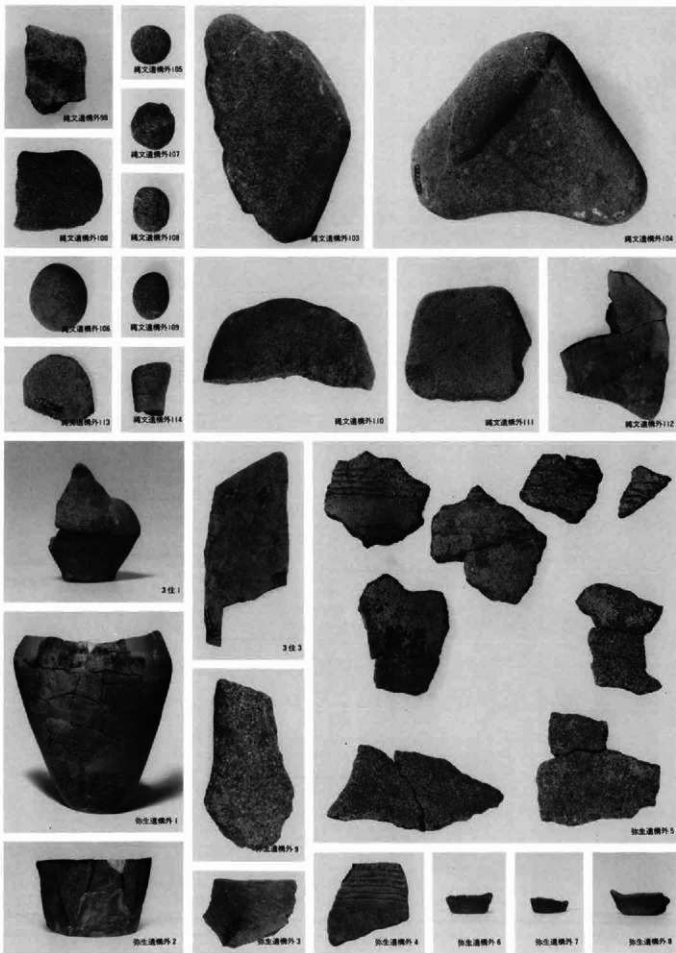
図版63 下高瀬寺山遺跡 1号谷津状遺構

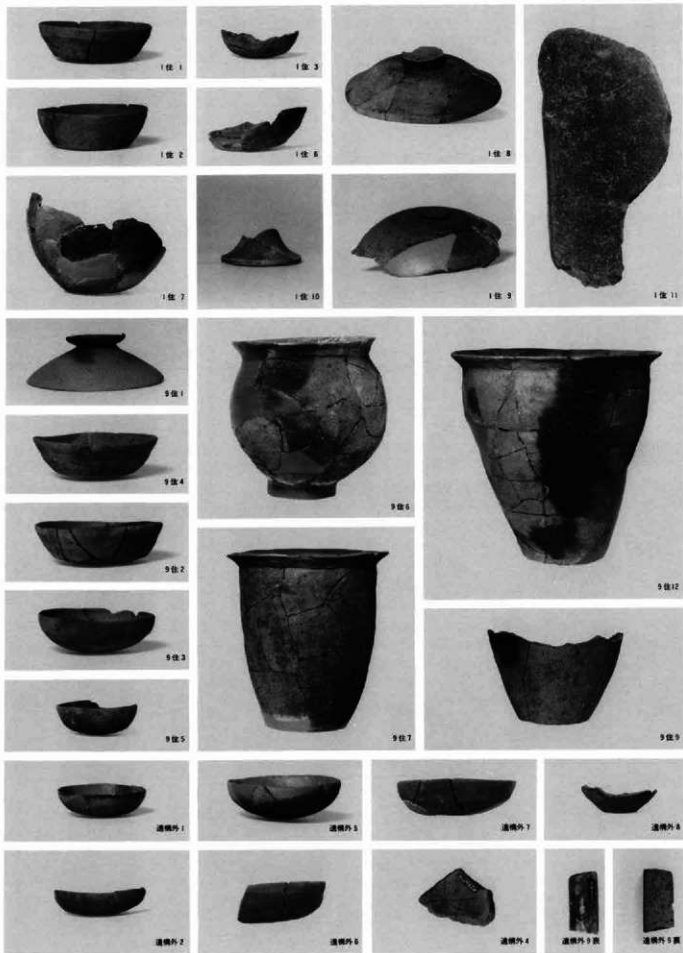


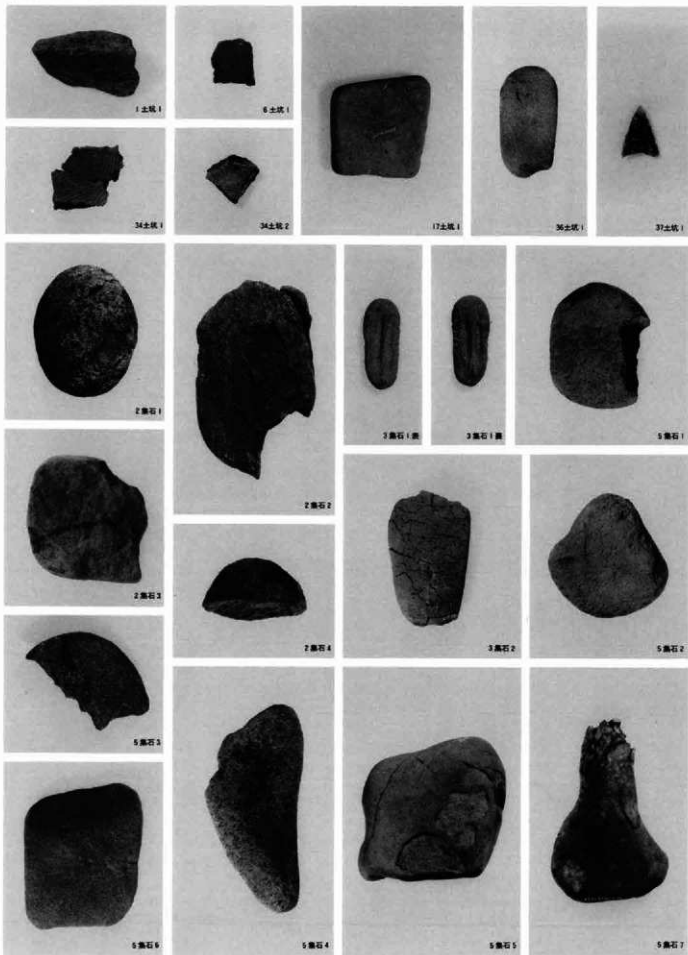










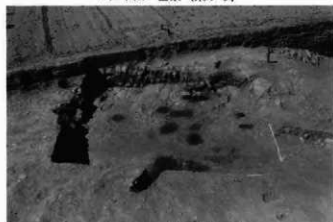




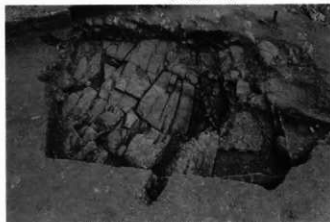
A区下段 全景(東から)



A区上段 全景(東から)



1号住居跡 全景(南から)



1号住居跡 撮影方全景(南から)



1・2号集石 全景(南から)



1号集石 石出土状況(北から)



2号集石 全景(北から)



1号墓 墓石出土状況(北から)



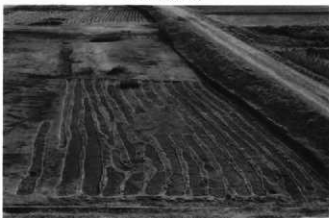
B区全景（東上空から）



全景（南から）



上段全景（北から）



1号畠 全景（北から）



2号畠 全景（南から）



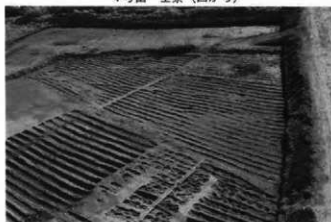
3号畠 全景 (南から)



4号畠 全景 (西から)



5号畠 全景 (北から)



6・7・8号畠 全景 (北西から)



8号畠および石垣 全景 (西から)



石垣横出状況 (西から)



排水路 全景 (北から)



遺跡より妙義山をのぞむ

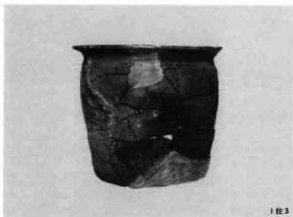
図版73 下高瀬前田遺跡



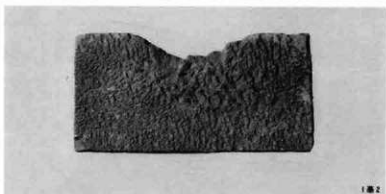
1 図 1



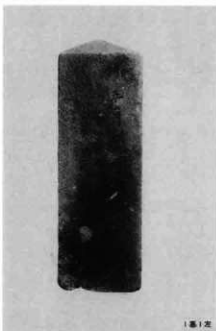
1 圖 2



1 図 3



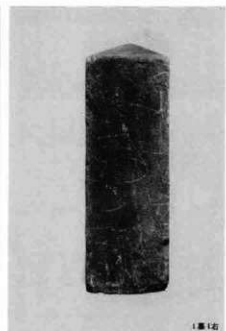
1 圖 2



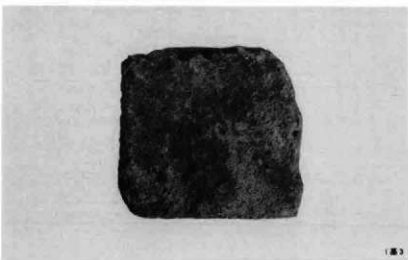
1 圖 1 左



1 圖 1 正面



1 圖 1 右



1 圖 3



遺構片 1



遺構片 2

群馬県埋蔵文化財調査事業団
調査報告第105集

内匠日向周地遺跡
下高瀬寺山遺跡
下高瀬前田遺跡

関越自動車道(上越線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第31集

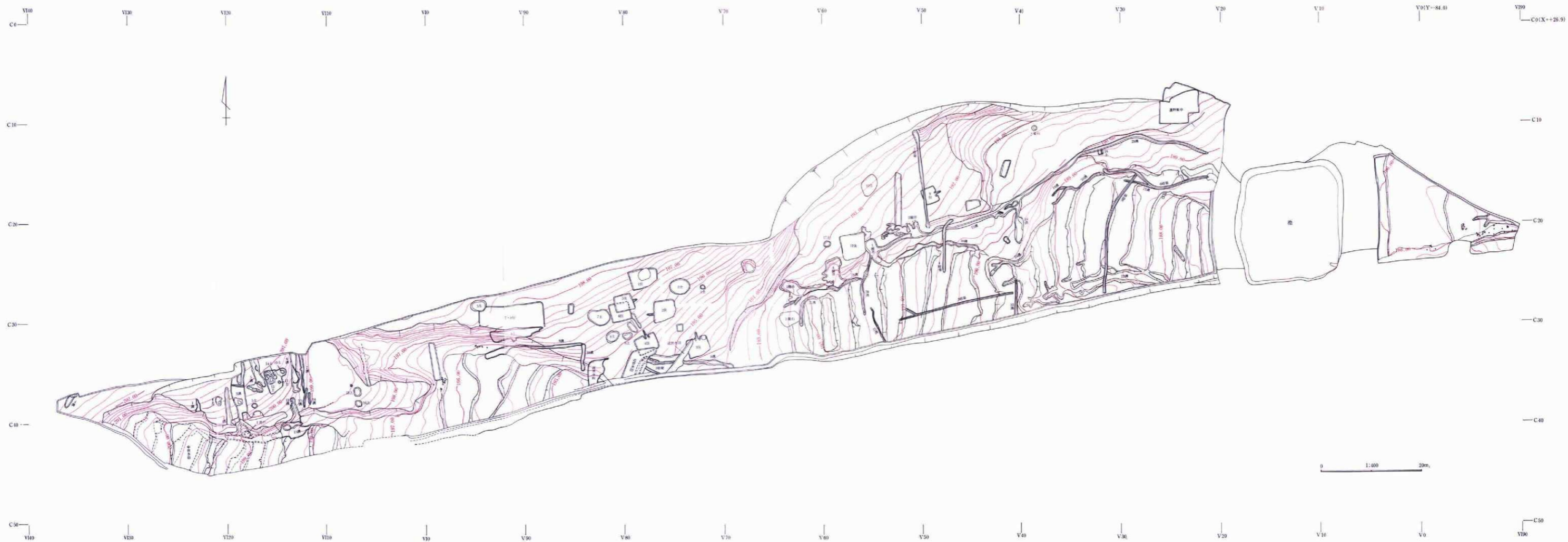
平成7年3月17日 印刷

平成7年3月27日 発行

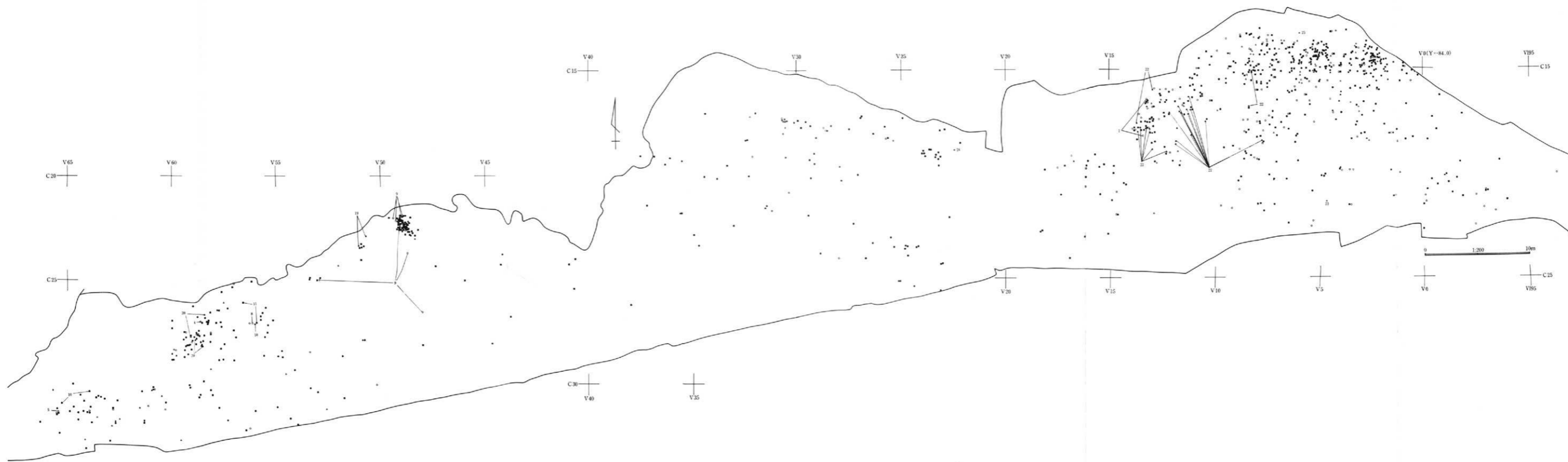
編集／群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橋村下箱田784-2
電話(0279)52-2511(代表)

発行／群馬県考古資料普及会
勢多郡北橋村下箱田784-2
電話(0279)52-2511(代表)

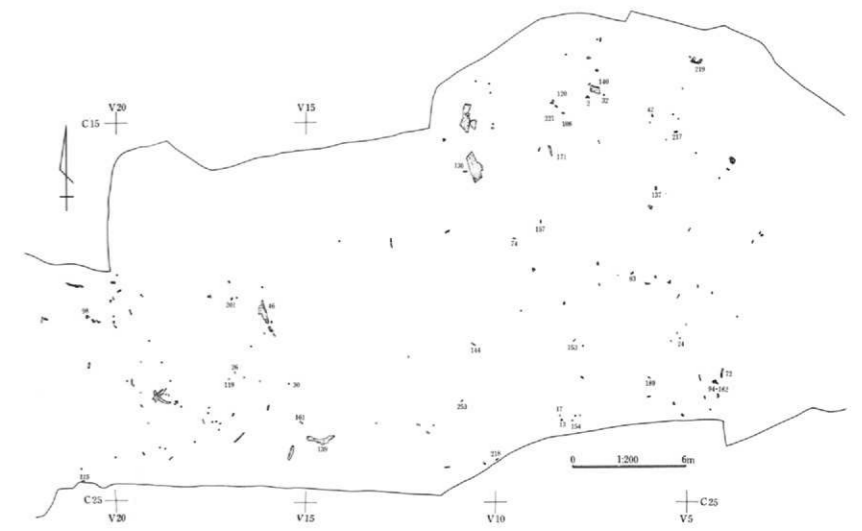
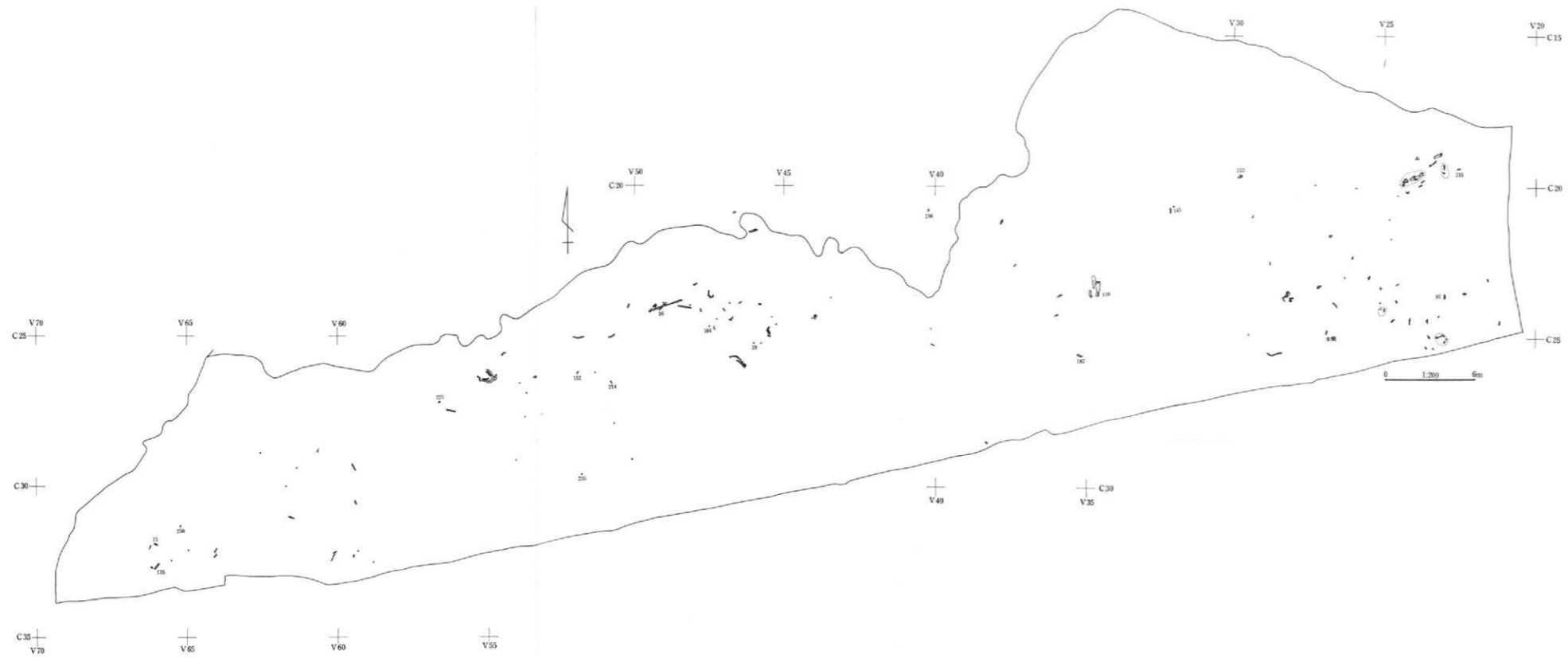
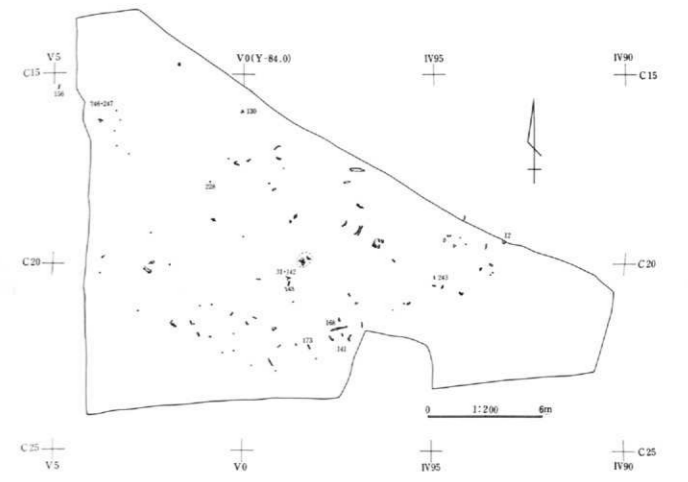
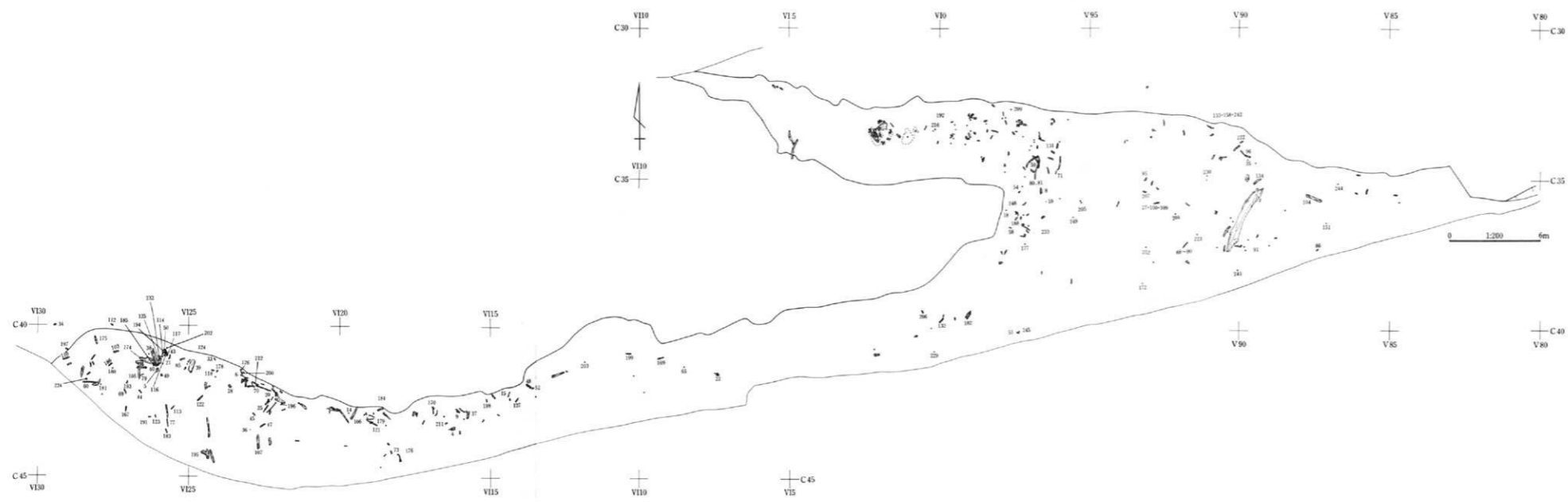
印刷／上毎印刷工業株式会社



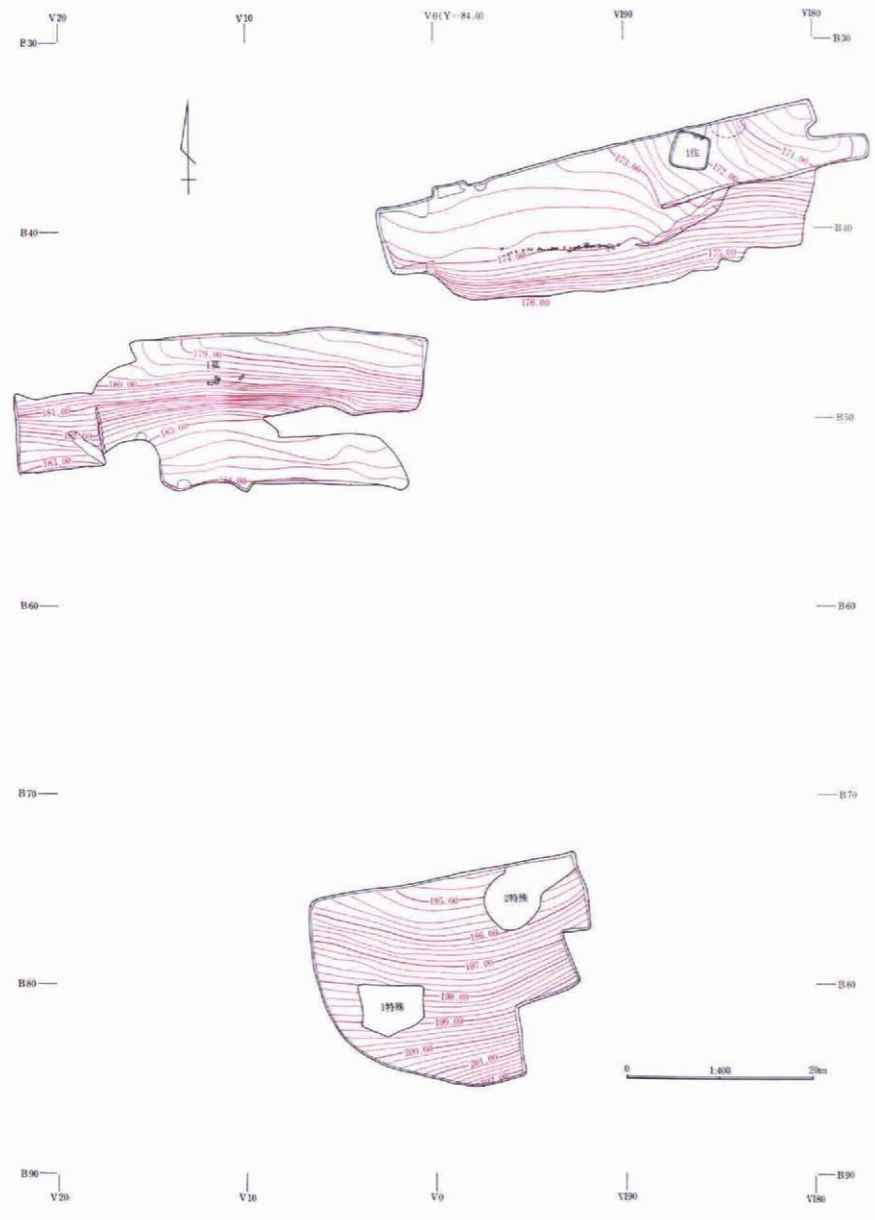
付図1 内区日向周地遺跡全体図



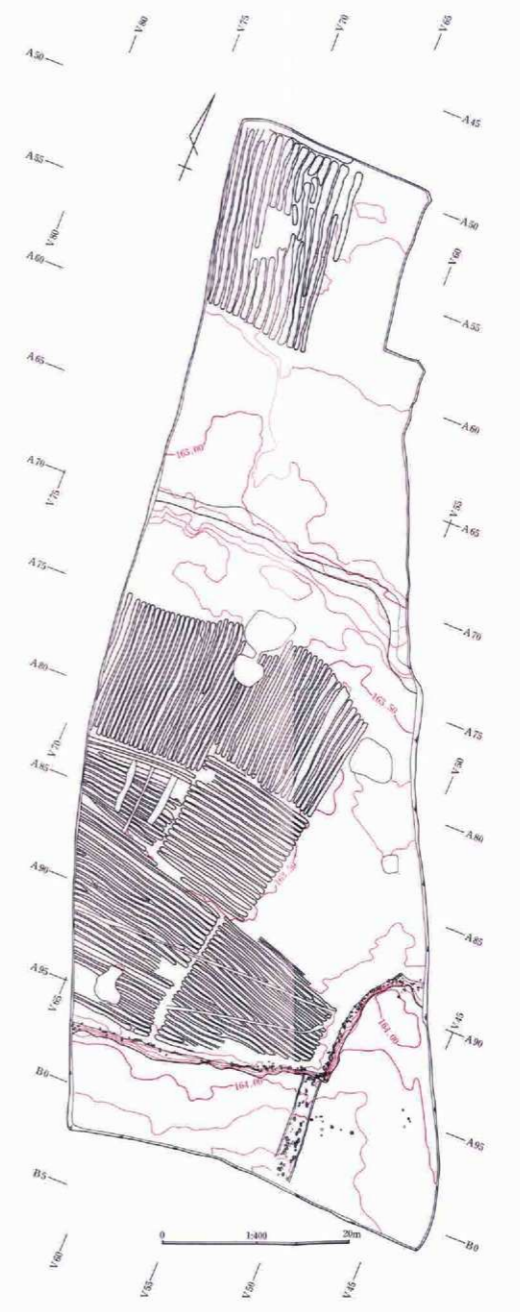
付图 2 内匠日向周地遺跡 2号谷津坑遺構 土器出土状況



付図3 内区日向周地遺跡 2号谷津状遺構 木器出土状況



付図4 下高瀬前田遺跡 南側調査区全体図



付図4 下高瀬前田遺跡 北側調査区全体図